日本戯曲全集
第十七卷

寛政期江戸世話狂言集

東京
春陽堂版

三世坂東三津五郎の八百屋半兵衛（心中嫁菜露）

日本戯曲全集　第十七巻　目次

寛政期江戸世話狂言篇

貢曾我富士着綿（みつぎそがふじのきせわた）

初演繪番附

貢曾我富士着綿

序幕　柳島妙見の場

役名——菊酒屋半左衞門。同娘、お菊。同番頭、八郎兵衞。同下女、おさく。飴賣り、團六。同、源兵衞。茶屋女おさの。羅宇屋實ハ佐藤定七。弟子、春月坊。菊酒屋手代、幸助。浪人、小野賢藏。

本舞臺、三間の間、眞中に妙見、影向の松、後ろへ一面の塀、板松の下に竹の駒寄せをしたる誂への石碑、大提灯などよろしく飾りつけ、すべて柳島妙見の境内。下の方に葭簀張りの茶見世、長床几、幕の内よりおさの、やつし前垂れ、茶屋女の拵へ。上の方に飴賣り團六、源兵衞、やつし前垂れ襷がけにて四斗樽の上へ長板を直し、飴をひいて居る。てんつゝ、通り神樂にて幕明く。

ト花道と下座より、いろ〳〵の仕出し大勢、妙義のお札を頭へ挿し、或ひは蜆の苞を提げて、すべて龜井戸向島邊の模樣よろしく、この中へ定七、やつし股引草鞋がけ、編笠をかむり、垂れ箱を襟にかけ、羅宇のすげ替へにて出て來る。

團六　これより問屋の御し並、お目通りにて飴の引賣り、一尋四文の大安賣りぢや〳〵。

源兵　お土產に持ちよいの根元、名代白玉練り、四文賣りが二文々々。

定七　羅宇のすげ替へ、煙管の安賣り〳〵。

團六　お土產には持ちよいのぢや。

ト捨ぜりふにて呼んで居る。

仕出　見さつしやい。御緣日なり、殊に卯の日、龜井戸からかけて、きつい人ぢやアござらぬか。

同　それ〳〵、日和さへよければ、この邊の事でござる。

同　姐さん、お堂が結構になりましたね。

さの　ハイ、御講中方の御精力と、皆樣の御信心で、有り難い事でござりまする。

仕出　それサ、お宗旨でもこの妙見さまと、中野の祖師さま程、御利生のあるはないて。
同　ほんに堀の内の約束があつたが、また新宿で日を暮らさゞアなるまい。
同　とんだ事を云つたものだ。雑司ケ谷から廻つても、今の日ぢやアゆつくりだよ。
同　ハテ、通らない男だ。新宿さまへ行つて、堀の内へ廻つたのだわな。イヤ、通らないと云へば、この煙管は、きつい不通だ。一本すげ替へて下さい。
定七　ハイ〳〵、下りになされますか。木羅宇に好いのがござりまする。
仕出　なにサ、八文のでよろしサ。アヽ、蜆のせいか、ほか〳〵酔が来たわえ。
同　玉屋もよく呑めるが、矢ツ張り並木から提げさせて来るがよろしサ。
同　そりや云やるな。山屋の事なら、酒ばかりぢやアない、娘のお物。八百八町に、あれほどの娘はあるまいぞえ。
同　と云つても、どうでおいらが歯の立つのぢやアないワ。ナウ姐さん〳〵。

さの　ほんに並木の菊酒屋と、きつい評判でござりまする。
定七　ハイ、筒竹に致しました。
ト すげ替へて出す。
仕出　よし〳〵。サア、三囲で待ち兼ねて居やう。土産でも買つて行かうぢやないか。
同　この頃の飴の引賣り、薬研堀で買つたか、とんだいい飴だ。サア又、包んで下さい。
團源　サア〳〵、お土産に持ちよいの。一尋四文の大安賣り〳〵。
ト 呼び立てる。仕出し皆々飴を買ひ
皆々　ヤレ〳〵、日がたけた。サア、行かう〳〵。
ト 皆々捨ぜりふにて花道と下座へ入る。羅宇屋、菅笠を脱ぎ
定七　姐さん、辨當にしたい。大ぶくに振舞ひなさい。
さの　アイ〳〵、緩りと此方へお掛けなさんせ。
定七　ヤレ〳〵、ついにない本所へ渡つて、今日は餘ッ程な道だ。
ト 辨當を使ひながら
なんと爰らに棒を数へる、賢藏とやら云ふ浪人衆がある

ちやアござらぬか。
さの　アイ、どこか存じませぬが、その賢藏さまは、アレアレ、其處へお見えなさんすわいなア。
關六　ほんに先生のお歸りだ。源兵衞、荷を片付けて、おぬしやア昨夜の話の所へ行つてくりやれ。
源兵　呑み込みました。ドレ、そろ〳〵と刎ねませう。
ト荷を片寄せて入る。通り神樂になり、花道より浪人賢藏、着流し、一本差し、日和下駄にて、頭へ手拭を置き、浴衣を抱へ出る。後より菊酒屋番頭八郎兵衞、やつし羽織の形、石割り雪駄を穿き、出て來る。
八郎　モシ〳〵、賢藏さま〳〵。早い足だ。龜井戸から醒を淵らすに、きつい逆上せやうだ。
賢藏　見やれ、湯上がりだ。昨夜も村の若い衆が見えて、酒で今朝まで逆上せるも道理、今日は少と二日だわえ。
八郎　モシ、朔日でござりまする。物覺えの惡い。そして、この中の事は、どうなりましたね。
賢藏　どうの斯うのと、呑み込んだと云ふに如才はない。マア〳〵、娘が所へ、歩びやれ〳〵。
八郎　湯上がりで無性に渇くやつサ。
ト矢張り通り神樂にて、兩人、舞臺へ來て

賢藏　おさの、ぬるくして一杯くりやれ。
ト床几へ掛ける。
さの　アイ〳〵。並木の八郎兵衞さま、今日も又、衣屋で上がつてお出でたかえ。
八郎　なにサ、猪の堀から直ぐに舟を借りて、賢藏さまにお目にかゝらうと思つて、急がせたと云ふものぢやアねえ。この頃は付け舟は、大概な事ぢやア下り米を取逃がすわた。
關六　山屋のお手代、この間は間違つてお目にかゝりやせぬ。今日はよく御參詣でござりますね。
八郎　これは中の郷の若いの。剛氣に精が出るなア。
關六　イエ、モウ、この商賣ぢやア、大概な事で錢儲けはごんせぬ。イヤ、儲け口で思ひ出した。この中お前の仰しやつた舟積みの手形は、どうなりましたね。
ト賢藏、あたりへ思ひ入れして
賢藏　コレサ、八郎兵衞も買出しから、おらが所へわざわざ來たは、そんな相談でもあらうか。爰で話しもなるめえサ。
八郎　左樣サ。掛けながら話しも出來まいし。と云つてお宿へ參つては、あの柔術だの棒だのと、若い衆が稽古

で、そんな話しどころでもなし。
賢藏　カウおさの坊、おぬしやアちよつとおらが所へ行つて、稽古はしまいか、見て來てくりやれ。
さの　ほんに、わたしもちよつと橋に用もあり、そんならお前さん方に、見世を頼んだぞえ。
賢藏　そりやア合點だ。カウ煙管屋、方丈で所化達が、燵かすげ替へを待つて居たぞよ。
定七　ハイ〳〵、そりやア有り難うござりまする。ドレ、お臺所を開いて見ようか。
ト うぢ〳〵荷を拵らへる。
さの　そんならわたしも、つい其處まで。
賢藏　ちよつと行つてくりやれ。コレ煙管屋、ハテ、うぢうぢとした男だ。
定七　イエサ、才槌を落しました。
ト何か聞きたさうな形にて、うぢ〳〵身拵らへして編笠をかむり
羅宇のすげ替へ、煙管の安賣り〳〵。
ト下座へ入る。
賢藏　コレ、おさの坊、早く行きやれ。
ト矢張り通り神樂にて、おさの、羅宇屋を呼びながら下座へ入る。

うつとしい奴等だ。時に八郎兵衞、三原那須野の狩場の夫食、鎌倉御用の千石積み買ひ請けたと云ふ、舟積みの證文は、おれが胸にあるが、山屋半左衞門の直の印形、お主、つうくつの出來る事かによ。
團六　左樣サ。よしんば番頭が呑み込んでも、歷とした菊酒屋の判がなけりやア、後で物云ひを付けられない。首尾よく行けば番頭、貴樣の願ひの筋も立つ事だ。よもや如才はあるまいの。
八郎　ハテ、仲の町で一兩度お付合ひ申して、お心意氣を風魂知つた賢藏さま。打明けて御相談申すからは、そんな事にぬかりはないもの。御覽じませ。
ト懷中の紙入れより證文を出して
お前の下書きの通り、舟積みの證文印形の事は、親方から平生わしに預けてある。證文一式、人別の判まで、人手にかけぬ八郎兵衞。商ひの事は親方も、滅多に口は出しませぬて。
ト賢藏に渡す。賢藏、開き見て
よし〳〵。印形さへあれば拔差しならぬ事。どうでも仕事は出來る事だ。團六喜べ。物になるわえ。

團六　それでわしも落ちついた。モシ、この中の立替への十兩を遣らにやア、婆アが又來ますぞよ。
賢藏　よしサ。打ッちやつて置け。胸にあるワ。
ト證文も紙入れもしまふ。風の音になり、花道より二枚張りの奴凧、切れて來て、八郎兵衛が頭へ落ちる。
八郎　アイタ、、、、氣の利かない。とんだ處へ落して悔りしたも氣の迷ひ。眞直な相談でもないから、秋葉から使ひでも來たかと思つた。
賢藏　氣の弱い男だ。併し、この頃は何を聞いても、地震かと思つて。
團六　ソレサ、奴が面を失ふと、永久橋ぢやアあるまいし。
三人　ハ、、、、。ハ、、、、。
トまた通り神樂になり、花道より春月坊、表坊主、白無垢の着流し、前帶にて、糸巻を持つて出る。後より里の子供、古ぶんばいを持つて出る。これに同じく里の子二人、目籠に嫁菜の摘んだのを載せて持つて出て
子一　春月さま〳〵、お前、今だまをやればよかつた。
春月　ナニサ、あんまり騷ぐから、あはてゝ絲を引ッ切られた。外へは行かない。寺内の内だ。此方へ來た。來い來い。
ト本舞臺へ來る。
賢藏　お小僧、大きな形をして、手習ひもしないで、また凧か。お上人へ云ひつけて、食止めさせるぞよ。
春月　賢藏さん、お忝け。今日はお師匠様は留守。妙見堂の陀羅尼はしまふ、この凧に凧でも上げないで。コレ、龜井戸にとんだいゝ般若がある。お前、買つてくんないか。
八郎　おきやアがれ。奴凧ゆで蛸さへ、おれが頭へ風穴を明けた。この坊様も凧が好きぢやア、芋堀になる下地だわえ。
子一　おかつしやい。おいらが贔屓の春月さまを笑ふと、橋を通さないぞ。
子二　請地の赤に、噛ませるがいゝ。
三人　オ、、しきし〳〵。
團六　なんだ、小坊主の肩を持ちやアがつて。コレヤイ、うぬらが不器用で、奴凧を切りかけて、八郎兵衛さまの頭へ疵が付いたぞ。餓鬼らどもとは云はせぬぞ。とんだ奴等だ。うしやアがれえ。
トかゝる。下座よりおさの、戻つて來て

さの　コレ〳〵、見世先で何をマア、子供を捉へて云はしやんすのぢや。
團六　あんまり口が過ぎるから、親の所へ引摺つて行くのサ。
さの　ハテ、頑是のないこの子等に、惡い事があらうと、わたしが詫び言、堪忍して下さい。
賢藏　コレ〳〵、團六、大人氣ない、打ッちやつて置け。おさの坊、どうだ。稽古はもう濟んだか。
さの　アイ、もう若い衆は、皆去んでゞござんしたわいなア。
八郎　そんなら、殘つた相談も致したし、賢藏さま、お供いたしませう。
團六　餓鬼ども、頸を引ッ裂くぞ。
賢藏　ハテ、打ッちやつて置け。サア、八郎兵衞、何處ぞで呑まう。一緒に歩きやれ。
八郎　左樣いたしませう。サア、ござりませ。
三人　飴屋の意地惡やアい〳〵。
賢藏　エヽ、よくしやべる餓鬼どもだ。
ト通り神樂にて、賢藏先に、八郎兵衞、團六、これに附いて下座へ入る。此うち春月坊、凧の糸目を直し
春月　サア、絲を卷け。これから又、お勤めをしまつて、みんなに上げさせうワ。
子二　小母さん、古ぶんばいを預かつてくんなさい。
さの　ほんに苦のない風の子ではある。ドレ、わしも茶の下を焚きつけようか。
ト誂らへの出の唄になり、菊酒屋半左衞門、やつし親仁の拵らへ、羽織、おしよぼからげ、中拔にて杖を突き、長房の珠數を爪繰りて出る。後より、菊酒屋娘お菊、振り袖、抱へ帶、練りの帽子、年禮の形にて、扇を持ち出て來る。おさく、無地物のやつし着流し、後ろ帶、下女の形にて、柳の枝に付けたる繭玉と、練馬を持つて付いて出る。この後より幸助、前髮の着流し丁稚の形にて、甲斐絹の風呂敷包みを抱へ、付いて出て來る。
半左　サア……もちつと歩きやれの。如何に女子の年禮ぢやと云うて、ても、春長な事ではあるぞ。
さく　モシ、旦那樣、いつも遠方へお出には、お駕籠の何のと仰しやるに、今日に限つて御近所のお禮から、直ぐに妙見樣參り、わたしさへホッと致しましたもの、お菊さまのおひろひなされましたは、大抵な事ぢやござりま

せぬわいなア。
きく　サイナウ、もう、これからはさくと二人、妙見樣へお百度のうち、父樣、お前はお上人さまの、御用があるぢやないかいなア。
幸助　ほんに、昨日お言傳でござりました。御縁日にはお菊さまも、御參詣でござりませうと、お噂がござりましたぞえ。
半左　ハテ、この頃は何事やら、お菊がきつい信者になつて御縁日參り。幸ひおれもお上人に、お目にかゝらにやならぬ講中の談合。年禮から直ぐにわが身達を連れて、イヤモウ、果てるものぢやアない。サア／＼、早う參詣しませう。おぢや／＼。
ト本舞臺へ來る。里の子三人、立ちかゝつて
三人　嫁菜を買はつしやい／＼。
子一　梅屋敷へ案內しますべい／＼。
ト煩さく付いて廻る。
幸助　コレ／＼、お土產には戻りに買ふ。梅屋敷へはお出でなされぬワ。
半左　幸助、可哀さうに、二三文も買うて遣れ。
幸助　エヽ、また持ち物が殖えて困つたものだ。
ト早道を出し、嫁菜を買ふ。
子二　わしがのを買はつしやい。
子三　おれがのも買つて下さい。
子一　おれが先だ。買つて下さい。
さく　コレ／＼、其やうに喧しう云やるな。皆同じやうに買うて遣れとの、お菊さまが仰しやるわいなう。
幸助　喧ましい子供だ。サア／＼、みんな置いて行け／＼。
子三　アイ／＼、また戻りに土筆を買つて下さいよ。
三人　サア／＼、また去んで摘んで來よう／＼。
ト三人ともに下座へ入る。
さの　どなたも、ようお詣りなされました。サア、お茶上げませう。
ト盆に載せて銘々へ茶を配る。此うち幸助、包みを床几の上に置き、嫁菜の苞を一つにして居る。團六、下の方へ出て來て、この風呂敷包みに目を付けるこなし。春月坊、半左衞門を見て
春月　並木の半左衞門さま、只今御參詣でござりまするか。
半左　ホウ、春月さま、凧が上がりますの。コレ／＼女中、八郎兵衞は、まだお寺へは寄りませぬかの。

さの　アイ、先刻にお見えなされてゞござりました。
さく　モシ、お菊さま、ありや何でござりますなア。
きく　ほんに幸助見や。いかい鳥ではないかいの。
幸助　アイ、鶴がお堂の上に、巣を食うて居りまする。
春月　ワアイ、ありやアこなさんの名の鴻の鳥だものを。
半左衛門さま、お前の所の鶏はモウ、大きくなりましたらうね。
半左　お寺にも、ちやぼが大分殖えましたの。イヤ、ちやぼと云へば、その包みに入れて來た時代物の棗。お上人の懇望あつたに、幸ひ娘のお年玉。幸助、忘れはせまいの。
幸助　ハイ〳〵、嫁菜と一つに風呂敷包みは、大事に致してござりまする。おさくどの、お菊さまがお百度をなさるなら、其うちわしやちよつと、龜井戸まで行つて來ませう。
さく　コレイナウ、我まゝな。今日のお百度は、ソレ、こなさんも大事の願ひ。わしも助ける程に、一緒に參るがよいわいなう。ナア、お菊さま。
きく　サイナウ、なんでわし一人。幸助の一緒に參らうと云やつたに依つて。
さく　それ〳〵、ちつとも大勢で、暮れぬうちに戻らにやならぬ。サア、旦那樣、お前、お出でなされませ。
半左　イヤ〳〵、幸助は、龜井戸橋で舟を頼んで置くがよい。
幸則　ハイ〳〵、左樣でござります。ドレ、行つて參りませう。
ト行かうとする。おさく留めて
さく　ハテ、そりやお歸りの事ぢやわいの。モシ、お菊さま、サア、お堂へ參りませう。
幸助　イヽエサ、出拂はないうち、約束をして參りませう。
きく　そんならわしも、もう、お百度は今度の事にしようわいの。
春月　ハテ勿體ない、わしも助けてやりますワ。
さく　アレ、あれぢやがの。幸助どの、サア、マア、一緒に參らんせいの。
幸助　それでも旦那樣が舟の事を。
さく　エヽ、なんのかのとお菊さま。サア、マア、お出でなされませ。
トせり合ひながら、おさく、幸助を引ッ張り、お菊と

ごつちやに入る。
半左　ハテ、しどのない奴等ではある。女中、茶代は戻りに置きませう。
　ト吸ひつけながら、後追うて入る。
さの　ハイ〳〵、大事ござりませぬ。春月さま、お客で忙しうござりませう。
春月　ほんに衣の綻びを、お前に縫つてもらはうと思つた。斯うして置いて、ちよつと歩びな。
さの　オ、、このお子はお客のあるに。ドレ、お出しなされませ。
春月　サア、ちよつと來てくれなさい。
　ト通り神樂にて、春月坊先に立つて、おさの、頭の針へ糸を通しながら、忙しなく入る。團六、下の方へ出て、幸助が忘れたる風呂敷包みを取上げ
團六　時代物の棗とは、どうか錢になりさうな物だ。うつそりな奴等だ。尋ねてうせないうちに、こいつは巧いワ。
　ト持つて行かうとする。定七出て來て
定七　飴屋どの、大きにお世話だ。その包みを今、菊酒屋の丁稚どのが忘れて來たと云はしやつたゆゑ、探しに來た處だ。此方へ下さい。
團六　この男は氣が狂つたか。これはおれが預かつて、いま臺所へ持つて行くのだ。通りすがりの羅宇のすげ替へおぬしやア味に働らくな。
定七　おけ。止しにしろ。おれが働らきよりやア、お主達の相談、段々仕事に實が入るの。
團六　此奴は、云はせて置けば、一大事を申し上げるな。
定七　ハテ、四の五のと云へば爲にならぬ。晝鳶め。包みを置いて行け。
團六　うぬが怪しい。退きやアがれ。
定七　われ退け。
團六　うぬ、のけ。
定七　面倒な。
　ト腰の捕繩を出す。
團六　箆棒め、そこにうしやアがれ。
　ト駈け出すを引戻し、これより兩人少しばかり鳴り物借りて立廻り。幕明きの飴の荷を枷によろしくあるべし。この中へ春月坊出て來て、以前の包みを取らうとする。三人仕組みよろしく、トゞ、春月坊、引き延した飴を罠にして團六を引ツ轉かし、包みを持つてツイ

と入る。團六、追つて行くを定七、引戻し立廻り。この時、定七、懐中より狀箱を落す。團六、取つて見て

團六　なんだ廻狀。佐藤定七。

ト讀むうち定七、ちやつと取つて懐中する。團六、それをトかゝるを見事に當て、羅宇の荷を掛け

定七　羅宇のすげ替へ。煙管の取替へ〳〵。

ト呼びながら花道へ入る。團六、起き上がつて

團六　待ちやアがれ。定七と聞いちやア……オヽ、ソレ。

トこなしあつて、後を付けて向うへ入る。合ひ方になり、お菊、出て來て

きく　幸助、サア、ちよつと來やらぬかいなう。

ト幸助、後より出て來て

幸助　ハイ、サア、參りましたれども、今にも旦那が用があると仰しやれば、行かねばなりませぬわいな。

きく　なんのマア、父樣はあれ程お座敷で話して居やしやんすものを、滅多に用はないわいの。

幸助　それでも、お臺所に居りませにや惡うござりまする。殊に今日は、番頭の八郎兵衛どのが、今に來やうも知れませぬ。お前樣と一緒に居りましては、猶惡うござりますわいな。

きく　又しても〳〵、其方は八郎兵衛が事を云やる。なんのあんな者に、構ふ事があろぞいの。

幸助　イエ〳〵、さう仰しやりますな。自體八郎兵衛はお前の事を、大抵大事に思うて居るこつちやござりませぬに、さう惡う仰しやつたら、罰が當りませうぞえ。

きく　なんの、あんな者の罰を、誰れが受けるもので。それよりこちらは、この影向の松へ、願解きさせうと思うて、それで其方を呼んだのぢやわいなア。

ト扇をなぶりながら云ふ。

幸助　何處の國にか、お前樣の願掛けに、人を呼ばいでもよさゝうな事ぢやぞえ。

さく　それでもこちや、二人の願を掛けたもの。

幸助　そりやマア、大きにお世話でござりまする。

きく　エヽモウ、そんな事を云はずと、ちやつと拜んだがよいわいなう。

幸助　ハイ、なんぢやか存じませぬが、有り難うござりまする。

ト松を拜む。

きく　アレ、勿體ない事云やるわいの……ハイ、堪忍して

遣つておくれなされませ。
ト松を拜む。春月坊、出て來て
春月 オヽ、お菊さま、爰にか。イヤ、女中から繪馬を受取りましたが、御奇特な願解きでござりますの。
きく アイ、どうぞこの松へ、お上げなされて下さりませいなア。
春月 承知だが、この裏に、願主幸助と書いてあるは。
きく 其處に居やる幸助と、二人で上げた繪馬でござんすわいの。
春月 そんなら、幸助どのも願主ぢやが。
幸助 左樣さうにござりまする。
春月 ハヽヽヽ。お二人だな。
ト松の玉垣へ繪馬を結びつける
きく ほんに、この松のやうな、あらたかな事はないわいなう。幸助。
幸助 そりやモウ、妙見樣の影向なれば、一心さへ誠なれば、なんでも願ひは叶はいでなんと致しませう。
春月 左樣々々。イヤ、ほんに幸助どのは、この正月の事であつたが、在鄕の兄御と見えて、忙がしさうに參詣しられたて。しかも茶見世に休んで、こなさんの話しがあつた。それをとんと忘れて居た。今思や、こなさまに似てあつたわえ。
幸助 ハイ、それは私しが兄貴でござりませう。何も變る話しはござりませなんだか。
春月 イヤ〳〵、阿母も息災な事で、兎角その、何とやら云ふ、こなさんと云ひ號けの女の事を、くれ〴〵も云うて歸らしやつた。
きく エヽ、云ひ號けとはえ。
幸助 ア、イヤ〳〵、そりやお前の聞き違ひぢや。あの云ひ號けと云ふ者があるもので。
春月 それでも慥か云ひ號けの、何とやら云ふ名であつたわえ。
幸助 ハテ、そりや大方なにサ、アノ、オヽ、わしが在所は、菜の澤山な處で、いゝ菜漬があると申したのでござりませう。
春月 イエ〳〵、しかも、オヽ、それ〳〵、お米とやら云うたぞや。
幸助 それもお米ではあるまい、お米と云ふ大根の事でござりませう。
春月 待つたり。その云ひ號けと大根が、いから逢ひたが

つて居ると云うたぞや。
幸助　まだあんな事を仰しやりますわいな。
ト お菊、推量して、幸助をこちらへ連れて來て
きく　コレ、なんぼ其方が云ひ紛らしてもの、わしやその事は疾から聞いて知つて居るぞや。なぜ有やうに云うて聞かしてはたもらぬぞいの。
ト 幸助を揺ぶり試みるこなし。
幸助　これはしたり、なんのわたしが隱しませう、ちつともさうした譯ぢやアござりませぬ。
きく　イヤ／＼、それでも今のは、キッと違ひない事ぢやもの。
幸助　ハテ、あれは春月さまが、聞き違ひでござります る。
きく　そんならわしが、とつくりと聞いて見るぞや。
幸助　なんの、あんな坊主が正直な事、聞くこつちやアござりませぬ。
きく　待ちや／＼。
ト お菊、春月が側へ行て
申し、春月さま。
春月　なんでござる。
きく　今の幸助への話しは、どう云ふ譯ぢやか、とつくりと聞かして下さんせ。
春月　ハテ、おれが聞いたのは、その菜漬の大根が、伸び過ぎるとやら、たけ過ぎるとやら。
ト 幸助、春月坊の手を取つて、こちらへ連れて來て
幸助　コレ春月さま、お前が自體ろく／＼に、聞きもせずに仰しやるのが惡い。
春月　サア、そこが在所者の云ふ事だから、畑ものゝとは思つて居たが、どうでも女の。
ト 又お菊、春月坊を引ッ張つて來て
きく　その云ひ號けと云ふのは、矢張り女子の事でござんせうがの。
春月　さればサ、あれがいゝ菜漬なら、年玉に持つて來さうなものを。手振りで來たからにやア。
きく　ハテ、お前も御出家にも似合はぬ、大根や蕪の事を、知られぬと云ふ事があるものかいなア。
春月　そりやアおれも寺の役だ。精進物の頂邊を知らないで詰まるものか。
きく　それでも、お米と云はしやんしたぢやないかいなア。

春月　サア、米と云ふ字は米の事だから、これも在所には有うちの物。
幸助　ハテ、マア、わしが云ふ事を聞きなさい。
きく　イヤ、わしが云ふ事から聞かしやんせ。
幸助　お前の耳が悪いからの事サ。
春月　おれは福耳だよ。
きく　とつくりと解るやうに、聞かして下さんせ。
幸助　ハテ、あれ程解るがなア。
　ト兩人して春月坊を引ッ張り合ふ。トヾ、春月坊、弱り果てゝ
春月　コレサ〳〵、マア、待たつしやい。それではほんの引ッ張り凧になるわいの。とつけもない。
　トおさく出て來て
さく　これはマアお菊さま、何を冗談してお出でなさるぞいな。早う話す事があるなら話しなされてな、旦那様も追ッつけお歸りに、間もござりますまい。人の思ふやうにもない。自烈たいお子ではあるぞ。
きく　サア、さう思うて爰へ來たけれど、アノ。
　トおさくが耳へ囁く
それで話しが、どうもならぬわいの。

　トおさく、春月坊を見て
さく　春月さま、お前は何も墓所に用はないかえ。
春月　イヤ〳〵、中食が過ぎる。これから七ツの陀羅尼の始まるまでは、暫らくこれで呑氣を致すだて。
さく　ハテ、それはお樂な事ぢやなア。
春月　イヤ、左様でもござらぬ。ヤレ〳〵、引ッ張り凧で草臥れたから、これにて遠見と喰はして
　ト床几の上へ寢腹這ふ。
時に、樣子をつく〴〵とかんがみるに、どうでもあの二人は、ほうやら法華と傾いたわえ。
さく　モシ〳〵、そんな事云はぬものでござります。ほんにお菊さまは、この間にちやつとお百度をな。ソレ、二人して、合點かえ。
きく　そんなら、幸助も一緒に。
幸助　ハイ、廻りますでござりませう。
春月　いよ〳〵、一緒に廻るのか。
　トおさく、茶見世の錢指しを二人へ渡す。お菊先に幸助、下座の本堂の方を拜み、百度參りの合ひ方になり
さく　ドレ、春月さまに聞かにやアならぬ話しがあるわいな。お前はマア、幾つの年から坊さんにはならんしたか

知らぬが、あつたら男を、思へば惜しい事をさしやんしたなう。
春日　ナニ、惜しい事があるものか。坊主だと云つて、人に捨てられもせまいし、其處がすみのおれサ。
さく　氣のはしこいも、油斷がならぬわいなア。
トお菊、歸つて來て松の側に居ると、後より幸助、廻つて來る。
きく　コレイナウ幸助、もそつと早う歩きやらぬと、どうも話しがならぬわいの。
幸助　おやと申して、お前樣と一緒になつて、人が笑ひますわいなア。
きく　笑うても、こちや大事ないわいなう。
トまた下座の方へ入る。
春月　ソリャコソ、二人があのやうに。
さく　コレ、また不行儀な。人の話しを差措いて、そんな淫らな御出家があるものかいなア。
春月　イヤサ、此方よりあの若衆めが。
さく　ハヽア、そんならお前は、若衆に嵌る心ぢやな。
春月　いんにや、愚僧は鋼佛だ。
さく　アノ、お前が。
春月　石地藏の口へ、正月の餅を頰張らせたより堅い。
さく　ハテナア。
トお菊、幸助、廻つて來て
きく　そんなら、なんでもわしが云ふ事、違ひはしやらぬか。
幸助　そりやモウ、お前の心次第。
きく　そんなら、アノ晩にの。
ト云ひながら、また下座へ入る。春月坊これを覗いて見て
春月　まだも堅いワ。あのお娘のはづみ切つたひゞたけへは、斧の刃も立つまいぞ。
さく　それ程又堅い坊樣が、餘所の色香に移り氣な、その顏つきは野暮ぢやぞえ。
春月　なんぼ野暮でも目の前で。
さく　見るは眼の毒。
ト春月が目をおさく押へて
これでは。
春月　知らぬが佛。
さく　見ぬ間が花。
トお菊、幸助、廻つて來て立ちどまり、顏見合せ

きく　必らず違へてたもんなや。
幸助　お前もキッと。
きく　違へぬ
幸助　しるしは。
　ト兩人こなし
きく　オヽ、嬉し。
　ト抱きつく、春月坊、手を振り放して床几より轉がり落ちる。この途端に陀羅尼の聲、鈴の音する。皆々恟りする。春月坊、腰を擦り〳〵痛む思ひ入れ
さく　アヽ、お經が始まつたぞえ。
　ト春月坊、舌鼓を打つて、陀羅尼のお經を讀みながら、皆々を睨み廻し、下座へ腰を擦り〳〵入る。後に三人殘り顏見合せ、兩人恥かしきこなし
ア、、氣骨が折れた。酢でも酒鹽でも行く坊樣ではないぞ。
　ト奥より八郎兵衞、出て來て
八郎　おさく〳〵、これは如何な事。お菊さまも幸助も爰に居るか。道理で奥に見えぬと思つた。おさくも又、臺所に付いて居ると思や、同じやうに何して居るのだ。旦那が呼ばつしやる。早く行け。

さく　ハイ、わたしやたつた今、爰へ來たものを。
八郎　ハテ、呼ばつしやると云ふに。
さく　アイ。
　トおさく、奥へ入る。
八郎　ほんに幸助、お主も先刻から尋ねてござつた。ちよつと行きやれ。
幸助　ハイ。
八郎　ヤレ、行きやれよ。
幸助　ハイ〳〵。
　トこなしあつて入る。
きく　ほんにわたしも、父樣に叱られぬやうに、お側へ行きませう。
　ト行かうとする
八郎　モシ〳〵、お菊さん、お待ちなされ。
きく　なんぢやいの。
八郎　お前、先刻にから、爰に何してお出でなされたえ。
きく　こちや、お百度打つて居たわいの。
八郎　また噓ばつかり。わしが知らんかと思つて、お前、幸助と、何ぞ話してござつてあらうがな。
きく　アイノ、お百度打つて居た證據は、コレ見や、これ

程さしを持つて居るものを。

八郎　ハア、それがそれ程殘つてあるものかえ。

きく　サア、こりやア。

八郎　よく上手に嘘を吐き覺えなさつた。常からわしが目顏で知らす事は得心もせず、なんぞと云やア幸助々々とアタ嫌らしい、ちつとは人の心にもなつて見てくれたがよい。今日はほんにコレ、巧い首尾と云ふのだ。内でのやうに逃げ廻つても、返事聞くまでは放さぬと云ふやつ。サア、ちよつとわしが心の濟むやうに、云つてもらはにやならぬ。どうしておくれるぞいの。

ト抱き寄せるを振り切つて

きく　八郎兵衞、又そんな嫌な事云やるかいの、今度はこちや、ほん〳〵に、父様へ告げるぞや。

八郎　告げるとは曲がないぞえ。此やうに云ふが並大抵な事ぢやと思うてかいな。ほんにモウ〳〵、眞實心底から。

ト幸助、出て來て

幸助　コレ、番頭さん、いま旦那の前へ行たれば、幸助、われには用はないが、番頭の八郎兵衞が居るなら、早く呼べと仰しやつて、却つて大きに叱られた。ちやつとお前、ござりませ。

八郎　なんだ。おれに用があるとか。

幸助　左樣サ。

八郎　ハテ、何も呼ばれる覺えはないが。合點の行かぬ事だわえ。

ト云ひながら入る

幸助　お菊さん、今のを見て居りましたぞえ。

きく　サア、あのやうに人を見る程放さぬものを、ほんに好い所へよう來てたもつた。わしやどうせうかと思うて居たわいなう。

幸助　それと云ふも、常に番頭どのが、お前の事を云はぬ日とてはござりませぬ。それにお前が相手におなりなさるゝからでござります。

きく　なんでわしが構ふものか。皆あつちから無體な事ばつかり云ふわいな。

幸助　この後キツとあんな事なされまするると、今度はあんな事があつたら、それこそモウ〳〵。

ト八郎兵衞、出て來て

八郎　幸助、コリヤ、幸助。

幸助　エヽ。

ト憫りする

八郎　ハテ、てまへは途徹もない嘘を吐くものだ。今おれが旦那の側へ行つたりや、何をしに爰へ來た。其方に用はない。幸助を早く寄越せ、べら坊づらめと、とんだ人を叱らせて、役にも立たぬ事に、歩かすと云ふ事があるものか。キリ〳〵てまへ奧へ行きやれ。いろ〳〵な目に遭はすわえ、この男は。

幸助　そんならほんに、お呼びなされますかえ。

八郎　知れた事を聞く。早く行きやれ〳〵。

幸助　ハテ、面妖な。さらではない筈ぢやが。

ト云ひながら入る。

八郎　コレ、お菊さま、お前を好い首尾なりやこそ、いろいろと心を砕くその眞實な所を、ちつとは汲み分けてくれても大事あるまいが。如何に年が違へばとて、彼の段になつて、ちつとも案じさせる事ぢやアない。マア、ちよつとこの按配を。

ト手を取つて懐中へ入れようとする所へ、幸助、出て來て

幸助　コレ、番頭さん〳〵。

八郎　エヽ、又かいやい。

幸政　お前は怪しからぬ嘘つきぢやぞ。旦那はちつとも呼びもなされぬものを。用があるのはお前の事、早うござりませ。

八郎　コリヤ〳〵、それも古い。措いてくれ〳〵。

幸助　なぜにえ。

八郎　お主が爰でお菊と、しつぽりとやらかさうで。イヤ、さうは虎屋の分銅だ。斯う云ひ出すからはおれも戀の意趣だ。今までの樣子を旦那へ殘らず云ひつけて、事を壞さにやア腹が癒えぬ、サア二人ともキツと覺悟をして居さつしやい。と云ふは嘘よ。有りやうは二人の心を引いて見たおらが思案。最前から忠臣藏の伴内が仕打ちで試して見たが、ハテ、いよいよ添はねばならぬと云ふ仲ならば、おれも番頭の役目、内を立てるのが御主人へ忠義。ハテ、外ならぬ娘御に朋輩のお主、世間にいくらもない慣ひでもなし、折を見合せ旦那の耳へ入れるのも、この番頭が料簡にある事。どうしても丸めやうは呑み込んで居る。お菊さま、幸助もとつくりと、ほんの事を云うたがよいわいの。

ト兩人、思ひがけなきこなし。

きく　八郎兵衛、其方がさう云ふ心とは、夢々わしやア知

らなんだ。ナウ幸助。
幸助　ほんに番頭様、今までさうとは存じませず、何を云うても道ならぬ事と、怖々暮らして居りました。何事も叱つて下さりますなえ。
八郎　ハテ、其處が相縁奇縁。思ひ合うた事なら、何とせう是非がない。併し、何事もおれ次第にして、好い折を見合すまで、沙汰なしにお菊さま、なされませや。
きく　そりやモウ、よう合點して居るが、とてもの事ならあの幸助に、金が要る事があると云やる。どうぞ其方の心で、才覺して遣つてたもらぬか。
幸助　アイヤ、その事ならば、必らず御案じなされて下さりますな。そりやモウ、大事ござりませぬ。
八郎　ハテ、それでもお菊さまが、あのやうに思うてござらば、默つて心を無足にしても惡い。それもおれが呑み込んだが、委細は内でとつくりと聞きませう。今日はまだ外にちつと用もあり、お主は旦那やお菊さまのお供して、先へ歸りや。
幸助　そんなら、この上ともに何事も。
きく　其方、好いやうに頼むぞや。
八郎　皆まで仰しやりますな。これでわたしも胸が晴れましたわえ。
ト半左衞門、おさくを連れて出て來る。この後より春月坊、以前の風呂敷包みを後へ隱し出で來り
春月　左樣なら半左衞門さま、もうお歸りなされまするか。
半左　春月さま、いつもながら御馳走になりました。ヤレヤレ、今日は隙取つた。お菊、さぞ待ち兼ねやつたであらうの。
きく　イエ〳〵、こちや好い慰みを致しましたわいなア。
半左　そんならおれも歸る程に、八郎兵衞、米の方を埒明けて戻つてくりやれ。
八郎　畏まりましてござりまする。
半左　サア娘、行きませう。おさくも幸助も、ちつと急げよ。
幸作　ハイ〳〵。
八郎　左樣ならば旦那様、お菊さま。
きく　八郎兵衞、後から歸りや。
幸助　番頭樣。
さく　左樣ならばお先へ。
八郎　氣を付けやれよ。

春月　ト皆々花道へかゝる。幸助、心附き、立歸つて風呂敷包みを探す。春月、幸助が鼻の先へぶらつかせて
春月　コレ、風呂敷包みが
幸助　ハイ、最前。
春月　噂や話しに身が入つて、お上人の年玉まで、おれに厄介をかける奴よ。
幸助　ほんにお世話でござりました。
ト受取る
半左　ハテ、うか〳〵とした事ぢやの。
幸助　旦那様、サア、お出でなされませ。
ト唄になり、半左衞門、先に立ち、お菊、おさく、幸助、包みを持ち、向うへ入る。八郎兵衞、春月坊殘つて
八郎　春月さま、大きにお世話。
春月　番頭、お茶でも上がれ。
八郎　古いやつよ。
ト下座より賢藏出て
賢藏　八郎兵衞、そんなら親方に、とつくりと譯を呑み込ませたか。
八郎　如才なし。下り米を買ふと云つたらば、慾張りめが喜んで歸りました。
春月　コレ番頭どの、大事の旦那を慾張りとは、どうしたものだ。
八郎　エ、春月さま、まだ其處に居さしつたか。
賢藏　お坊、今のを聞いたらうの。
春月　聞いた〳〵。あの娘と幸助どのがの。
八郎　どうして、なんぞ見付けたか。
春月　見付けたれど、大事の事だ。
賢藏　コレ、屁を遣るワ。云つて聞かせな。
春月　そんなら云ふが、二人ながら、一緒にそこへ耳を出しな。
八郎　オツと合點だ。斯うか〳〵。
ト兩方よりズツと寄る
春月　もつと寄つたり〳〵。一緒に云はう。
兩人　オツとそんなら、斯うか〳〵。
ト八郎兵衞、賢藏、段々摺り寄る。春月坊、兩方一緒に
春月　耳ツとう。
ト大きく云ふ。兩人、悔りして耳を塞ぐ。春月坊こなしにて　よろしく森

二幕目　菊酒屋の場

浄瑠璃「名酒盛色の中酌」富本連中

役名 ― 菊酒屋半左衛門。同娘、お菊。同手代、幸助。同番頭、八郎兵衛。同下女、おさく。同丁稚、勘吉。山師太兵衛。浪人賢藏 實ハ大野成右衛門。佐藤定七。研屋傳三。

本舞臺。三間の間、菊酒屋の飾りつけ、見附け抽出し附きの戸棚。上の方、袋茶紙類水引包み、この前に兩替の天秤、束ね錢、賣り場の手摺り。その外道具よろしく、下の方に木地の樽數多、德利いろ／＼書き落し、この上に神棚好みあり、眞中に暖簾口、西の方に酒樽大分、酒賣り場のかゝり。桝上戸、柄杓など並べ、よき所に門口据ゑ、表に隅田川諸白と記したる建て看板。外に名酒の掛け看板よろしく、この道具にてお菊、振り袖やつし。おさく下女の形。勘吉、前垂れの形。三人、追ひ羽根突く體。酒屋唄にて通り神樂を交へて幕明く。

勘吉　ソレ、〆めたぞ。爰だぞ。ハア、おツことした。
きく　エヽ、モウ折角よう突けた物を、落してからに。
さく　ほんにお前と云ふと、屋根へ上げたり、溝へ落したり、モウ／＼、此方へ寄越さんせ。
勘吉　ハテ、さう云ひなさんな。おれだと云つて滿更でもないが、箱の蓋だけ、ちとむづかしい。今度はソリヤ。なんと太神樂は裸足だらう。
　トまた羽根を突くうち狀を落す。おさく取つて
さく　この狀は、菊酒屋幸助さまへ、よね、普賢寺村より。
きく　ほんになう。こりやアノ、幸助の里から來た文。
勘吉　左樣サ。先刻觀音の裏門で、在鄕者がその文を持つて、此方の內を尋ねたから、なんだと聞きやア幸助どのに、屆けてくれろと云つたから、それで持つて歸つたのサ。
きく　そんならこれが、彼の人から來た文でごらう。
さく　左樣ぢや。明けて御覽じませ。
勘吉　コレ／＼、とつけもない。人の言傳かつた文を、滅多に明けては。
さく　ハテ、外ぢやなし、お前から幸助どのへ渡す狀を、

お菊さまが御覽じるに、なんの構ひがあらう。

勘吉　でも、女の文だから、幸助が又、怨むまいものでもない。

きく　サア、それぢやに依つて見るのぢや。後で幸助が何ぞと云やつたら、わしが好いやう云ふわいの。

さく　なんであらうと、拾うたらば此方の物。構はずと封をお切りなされませ。

ト　お菊、封を切る。

勘吉　どうでも女子は剛勢だぞ。

ト文を開き、兩人にて讀む。

きく　初春の御祝儀、何方も同じく祝ひ納め候ふ。

ト通り神樂になり、向うより幸助、樽を風呂敷に包み、これを脊負ひ出で來る。勘吉、見付けて

勘吉　そりやこそ、歸つて來た〱。人事云はゞ日代置けだわえ。

ト兩人、悃りして狀を隱す。幸助、本舞臺へ來て

幸助　これはお菊さま、只今歸りましてござりまする。

きく　幸助かいなう。もちつと遲くてもよかつたもの。

さく　なんに、肝心の處へ、よう歸つて來たの。

幸助　ハア、面白い事でもござりますかえ。

勘吉　サア、その面白い事と云ふは、ナニサ、オヽ、それそれ、凧の事よ。

幸助　エヽ、好い凧でも上がりましたかえ。

勘吉　オヽサ、その上がつた凧が、しかも在郷の女凧で、どうかしておッことした處を、餘所の奴が、ひよつと上げて見たやつよ。

幸助　それはほんに面白い事でござりませう。

ト　お菊、羽根を突きながら

きく　其方は面白からうけれど、こちらは腹が立つわいの。

ト羽根を突く。

勘吉　どうでも凧と云ふやつは、もつれ勝手な奴だて。

幸助　さうしてその凧は、何處から上げたのか。爰からは見えませぬぞえ。

きく　知れた事。在郷に居るものを、なんの爰から見えやうぞいの。

さく　それ程見たくば、在所へ歸つて御覽じませ。

ト羽根を突く。

幸助　エヽ、そんならわしを、お騙しなされたのぢやな。

きく　騙したのはわしぢやない、其方ぢや。ようも〱今

まで嘘をつきやつた。

勘吉　オツと、此方は羽根突きやるぞ。

さく　また邪魔かいな。

　トおさく、勘吉、二人にて羽根を突く。

幸助　お菊さまも久しいもので、又そんな事を仰しやります。わたしがなんで嘘をつきましたえ。

きく　嘘をつかぬ者が、この文は何ぢやや。

幸助　幸助さま參る。オヽ、それは。

きく　なんと變つた凧を、拾うたぢやあらうがの。

さく　その尻ツ尾を捉まへられては、堪らぬぞえ。

勘吉　併し、切れたと云ふ處が、凧の性根だわえ。

幸助　ほんにそれは、思ひがけない物が、お前のお手に入りましたなア。そりや私しが在所の。

きく　おかみさんの狀ぢやあらうがの。

幸助　何仰しやるやら、ありや私しが妹でござりまする。

きく　それでもこの文に、お前の年の明くのを、待ち暮らし居り候ふと書いてあるぞや。

幸助　それには、いろ〳〵譯のある事。今の母は繼しいゆゑ、萬參もちよつとお話し申す通り、母の方から據ろない無心も申して參りましたれど、奉公の身の思ふに任せず、それにつけても兄貴が、それは〳〵何か苦勞をするげにござりまする。私しは又、例へどのやうな事があつても、貢ぎさへ遂れば、なんの在所へ歸れませうぞ。ハテ、そりやモウ一旦この守の起……サア、鬼子母神さまへ願籠めをして置きましたれば、いつまでも爰は離れは致しませぬ。

　トよろしくこなし。

きく　そんならアノ、それに違ひはないの。

幸助　なんの嘘を申しませう。

きく　そんなら疑ひ晴らしに、この狀を返すぞや。

　ト狀を渡す。

幸助　なんの、要らざるこの狀ゆゑ、ついお腹を立たせました。こんな物はカウ〳〵、斯うして打ツちやつてしまふがようござります。

　ト狀を破る。

勘吉　アレ〳〵、喧嘩凧を引さばいた。

さく　それでも見やしやんせ、挨拶なしに喧嘩が納まつた。

勘吉　道理で酒が廉く賣られないわえ。

　ト半左衛門、奥より出て

半左　ヤイ〳〵、わいらは何しに爰へ出て居るのだ。お菊、お主も今朝から氣合ひが惡いと云うて、表に其やうにして居るはどうぢや。猶惡からうぞよ。

さく　イエ〳〵、それはわたしがお尋ね申しましたれば、ちつと表を見晴らして、羽根を突いたら氣が晴れて、よからうと仰しやつたゆゑ、お連れ申してござりまする。

半左　そんな事ならよけれども、風でも引き添へては大事ぢや。さうして勘吉、われも、同じやうに羽根を突くのか。

勘吉　ハイサ、この羽根と云ふやつは、きつい藥でござります。先づ第一に食がこなれるに依つて、公家衆は鞠を蹴る。武家は凧を上げる。町人はこの羽根を突くと、長閑に空を見晴らして、氣持ちが格別よし。さて又地震の用心によいだて。

さく　何を云はしやんすやら。

幸助　イヤア旦那様、お邸のお使ひに行て參りましてござりまする。

半左　オヽ、幸助、歸つたか。して、お返事はどうであつた。

幸助　ハイ、随分と、どなたも御機嫌よう、念の入つた使ひぢやとあつて、御馳走の上に、この樽は、お稲荷さまへ初午のお神酒に、お供へなされまするゆゑ、持つて歸つて清淨な酒を、詰めて置けと遣はされました。一兩日のうち、取りにお人が見える筈でござりまする。

ト風呂敷包みより、御用の樽を出す。

半左　オヽ、それは猶粗末にならぬ。直ぐに其方の手で、あの神棚へ上げて置きやれ。

幸助　畏まりました

ト幸助、正面の神の棚へ樽を上げて置く。

半左　それで、お邸方は大概片付いたが、八郎兵衞は兎角埒の明かぬ。この間置かせた米、なぜ積み込まぬやら。今日も又隙が取れるが、また外に用もあり、こんな時に男どもの下がつたも、不自由なものだぞ。勘吉、お主も好い加減に羽根を突いたら、風呂の下へ氣を付けて下されや。

勘吉　ハイ、畏まりました。ほんに、あの番頭は、毎日米の事にかゝつて、内の事も構はず、どう云ふ理窟だ。馬鹿〳〵しい。

ト小言を云ひながら奥へ入る。

半左　おさくも奥の取散らした、縫ひ仕事片付けやれ。ら

つちもない。
さく　アイ〳〵。ほんにお風呂も、もう沸く時分ぢやが。
ト云ひ〳〵入る。
幸助　イヤ、ほんにお屋敷からの歸りがけ、越後屋の門を通りましたれば、私しを呼んで、これを旦那へ上げてくれいと、言傳りましたを、とんと忘れて居りました。
ト封じた書付けを出す。
半左　オヽ、成る程そりや、覺えのある上方の證文書。これにつけてもお菊、其方にもう一度訊かにやァならぬ。マア、爰へおぢや。
ト合ひ方になりお菊、半左衛門が側へ寄る。
あの幸助は子飼ひの事なり、遠慮はない。今朝も其方に話した緣組みの事。お主は何と思やるぞ。
きく　父樣、又そんな事云はしやんす。わしやモウ〳〵、それ聞いてから氣合ひが惡うて、やう〳〵今ちつと忘れたやうに思うたものを、又かいなア。
半左　其やうに思やるならば、どうなりともしやうが、一通り聞いてたも。もと其方は、先の旦那の娘御、不思議な緣で、この後式を讓り受けて、今では親子の仲なれど、根をたんだゆれば主も同然。まだどんな事でも談合せにやならぬゆゑ、今度の緣組みの事、傳三どのゝ指圖で、其方を先へ嫁入りさせ、この家も矢張りお主のお見世にして居れば、樂々と隱居さまの約束、結構な事なれど、おれが身慾にならうかと、其處を思うて今までは、其方にも話さなんだが、この四五日前、向うの聟どのから、賴みの印に金百兩、持たせては寄越されたれど、傳三どのが何事も、惡いやうにはせまい程に、預けて置けと又直ぐに、持せて寄越された。そこでとつくりと樣子を聞けば、佐藤定七と云ふ、目代を勤めてござる、歷としたお侍ひぢやげな。さすれば其方の身の大慶。家の爲なり、世間の聞えも、こんな結構な事はないと思うて、今朝其方に話したれば、二十歲になるまでは、男は持たぬと願掛けたと云やる。それ程の事は斷わり云うても待つてももらはうが、何を云うても百兩と云ふ、賴みを預かつた義理が濟まぬ。傳三どのゝ手前と云ひ、先祖へ對しては孝行と云ふものぢや。爰をよう得心しや。なんと幸助、この緣組みは、よいではないかいやい。
幸助　ハイ。
ト樣子を聞いて、ムッとしたこなしにて
それはマア、おめでたうございまする。私しは始めて承

はりましたわい。
半左　さうであろ〳〵。
ト　お菊、濟まぬと云ふ思ひ入れ。
幸助　左樣ならば、その越後屋からの書付けは、嫁入りの御入用でござりますかえ。
半左　オヽサ、嫁入り小袖の模樣書ぢやて。
ト　眼鏡を出して見る。
幸助　大方そんな事であらうと、思うて居りましたわえ。
半左　ハテ、てまへは發明ぢやなア。
ト　注文の封を切る。
幸助　發明ならよけれども、馬鹿ぢやに依つて、うか〳〵と、深い所へ嵌められやうと致しました。
半左　そりやお主、居眠つて歩いたか。危ない事の。
ト　注文を讀んで居る。
きく　コレイナウ、そんな事云やつても、わしやちつとも覺えのない事ぢやわいなう。
半左　ムウ、その筈ぢや。こりや、おれが好んで遣つたのぢや。マア、聞きやれ。上方は光琳梅に鶴ばり。紫鹿子。裾は菊にませがき彩色、友禪染めぢやて。
きく　なんぢややら、人の心も知りもせいで、そんな愛想のない事があるものかいなう。
半左　イヤ、藍が無くても、紫でグツと引立つ。
幸助　左樣々々、先づ梅と云ふ色男に、裾に菊が亂れて居たら、さぞようござりませう。その代りにやア、春と秋とて氣違ひ染めぢや。ハヽヽヽ。
ト　通り神樂にて、八郎兵衞、向うより手代の形にて、門口へ來て見て居る。
半左　イヤ〳〵、染め上がつたら、まんざら惡うはあるまい。ナウお菊。
きく　ドレ、父樣、その書付けを寄越さしやんせ。
ト　取つて幸助が側へ寄る。
半左　とつくりと讀んで見や。好い模樣ぢやぞや。
きく　幸助、この模樣の氣違ひ染めより、わしが心になつて見や。なんのそんな穢らはしいものは、斯うしてしまふわいの。
ト　注文書を隱して破る。
幸助　ハテ、お前の心は知れた事。その友禪のやうに氣の多い色ざし菊。そこでわたしも、コレこの注文書、いつそ斯うしてしまはう。
ト　幸助、守の起請を引出して破ると云ふ思ひ入れ。お

菊、その手を留めて

きく　コレ、なんぼうでも、それ破らす事は、ならぬならぬ。

半左　ヤイ〳〵、その注文書、破つて堪るものか。

幸助　破りや致しませぬ。お放しなされませ。

きく　イヽヤ、放さぬ〳〵。

ト せり合ふ中へ八郎兵衞、ズツと入つてこれを捉へる。顔を見て恟り。

幸助　番頭さんか。

きく　八郎兵衞、それ取つてたもいなう。

八郎　ようござります。

半左　八郎兵衞、歸りやつたか。

八郎　ハイ〳〵、やう〳〵と

ト 起請をもぎ取り

只今歸りましてござります。

半左　待ち兼ねて居たわいなう。

幸助　番頭様、その注文書を、此方へ下さりませ。

きく　イヤ〳〵、わしに渡しやいなう。

半左　コリヤ、注文書なら此方へ寄越せ。

八郎　成る程、こりや珍らしい註文書。

ト 鼻紙にてキツと上を包み

ハイ、お受取りなされませ。

ト 半左衞門へ渡す。

兩人　アヽ、それは。

八郎　ハテサ、今の注文は慥か破れた。

半左　ヤ。

八郎　サ、破つたら、わしに任せて封の儘、巾着へでもしまつてお置きなされませ。

半左　いろ〳〵の事を云ふ程にの。

ト 紙入れにしまふ。

八郎　時に、米の事がまだ埒が明かぬ。困つたものサ。

半左　ハテサテ、それはどう云ふ譯だの。

八郎　どうと申したら、あつちに何か揉める事があると見えて、晩まで待つてくれろと申して、何の話も致しませぬ。こりやちつと、面倒でござりまするわえ。

半左　と云つた所が此方は買ひ手。滅多な損もあるまいがの。

八郎　そりやお氣遣ひなされますな。私しが呑み込んで居りまする。マア、晩の返事をお待ちなされませ。

半左　そんならマア晩の事よ。もう大方風呂もよからう。

幸助、奥へ來て灸の支度して置いてくれよ。

幸助　ハイ、畏まりました。

半左　ドリヤ、炬燵へお見舞ひ申さうか。

ト唄になり、半左衞門、奥へ入る。幸助もお菊の方を見て、いろ〳〵こなしある。八郎兵衞にちよつと見付けられ、ツイと奥へ入る。後合ひ方。

八郎　お菊さま、お前もマア、如何に年端が行かぬと云うて、今戻り歸つて見て居りや、親御の前で幸助とせり合うて、もしも旦那に樣子を覺られては、この番頭まで、示しが惡いやうに思はるゝぞえ。ちつとお嗜なみなされませ。

きく　今日は父樣が、嫁入りの事を云はしやんしたに依つて、それで幸助が、いろ〳〵な事を云やつてから。

八郎　サア、其處が若氣の後先なし。それもこれも、おれが呑み込んで居りやア、どうか仕樣の有りさうな事。兎角仕憎いは幸助が頼みの金。四五日のうちには出て來る工面もあれど、コレ、急に才覺して遣りたいものだがなア。

きく　サア、わしもフツと氣の付いたは、死なしやんした母樣が、わしに下さんした日蓮樣のお曼陀羅。いつぞや其方が、慥か賣つて金が出來ると云やつたゆゑ、大事の母樣の筐ぢやけれど、あれをソツと。

八郎　成る程、それはいゝ思ひ付き。幸ひ今、旦那が風呂へ入つたうちに、ソツと。

ト囁く。

きく　アノ、巾着の鍵を取つて。

八郎　コレサ。

ト　また囁く。

合點かえ〳〵。

きく　そんなら後は。

八郎　番頭が胸にある。ちつとも早う。

きく　合點ぢや。

八郎　お菊さま。

きく　ヤア。

八郎　色は可愛いものぢやなア。

きく　知らんわいなア。

ト唄になり、お菊、奥へ入る。八郎兵衞、殘り、あたりを見廻し

八郎　さて、巧くなつて來るワ。時に、おれが御本尊、久しくお顏を拜まない。滿足で御座なるか。ちよつとこの

間に改めて置かう。

ト門口の用水桶より、財布に入つた金を出し

よし〳〵。柳島で相談した下り米の船積み、三百兩は懐中へ入れて、爰に疾から匿まつて置いた御本尊。人が見付けたなら、蛙になれ〳〵。

ト元の通り天水桶へ入れて内へ入る。

何もかも今日の都合にはして來たが、こちらが先へ來ると、先づ幸助めをやらかして、その後が内の混亂。所を我れらが鎮め、親仁を在所へ押籠め隱居。お娘は本妻、おさくは妾。そこで旦那となれば、美味い物は食ひ次第、着たい物は着次第、したい事はし次第。こんな有り難い事はないぞ。これと云ふも、日頃信心なすところの、七福鐐神の守らせ給ふお庇。有り難し、忝なし。この上ともに私しの身の上になりますからは、只今の商ひより、百層倍に繁昌いたし、金銀米錢山の如く、第一は此方の娘に、あの下女のおさくが、あつちから惚れますやうになさしめ給へ。歸命頂來。さんげ〳〵。六根清淨、慾つて申す。

トいろ〳〵喜び拜み居る所へ、おさく出て來て

さく　番頭さん、今時分に、なんの眞似ぢやなア。

八郎　おさくか。もう願ひが利いた。嚴しいものだなア。

トまた拜む

さく　コレイナア、お菊さまの仰しやるには、父様のお側を離れては悪いに依つて、これをお前にソツと渡して、後の事を頼むと云ふと、合點ぢやと仰しやつて、これを遣はされましたぞえ。

トおさく、曼陀羅の一軸を渡す。八郎兵衛、取つて

八郎　そんなら首尾よくいたか。ドレ〳〵。オヽ、こりやア彼の曼陀羅。よし〳〵。

さく　そんなら渡したぞえ。

ト立たうとする

八郎　アヽ、コレ〳〵。

さく　なんぞ用かえ。

八郎　用が無くつて。爰へ來て下に居やれ。

さく　ハイ、なんでござりますえ。

ト八郎兵衛が側へ寄る。

八郎　何と云つたら、どうしてくれるぞえ〳〵。

ト手を取つて引寄せる。

さく　番頭さん、又かいなア。エヽ、久しいものぢやぞえ。

八郎　久しいものとは、久しいものだぞえ。おれがこれ程に思うて居るのに、なぜさうつれなうしてくれる。コレサ、お主さへ合點なりや、長うとも云はぬ、爰四五日のうちには、天下晴れてのお主をおれが女房にして、花見遊山は云ふに及ばず、開帳參り芝居見物、湯治日光伊勢參宮、西國巡禮でもする心ぢや。どうぞ得心して、思ひを晴らさせてくれ。コリヤ、拜む〱。
　ト抱きつくを突き退けて
さく　お前もマア、如何に嬲りよい者ぢやと云うて、好い加減に嬲つたがよいわいなア。
八郎　嬲るのぢやない、なめりたいわい。
さく　ア、コレ、大きな聲するぞえ。
八郎　そんなら此やうに云うても聞かぬな。
さく　知れた事、お前のやうに仇惚れをする人に、誰れが構ふものぞいなア。
八郎　そりや、なんで〱。
さく　あのお菊さまにも、いろ〱な事云はしやんしたぢやないかえ。
八郎　サア、其處が一を打つて萬を知れ。打てば響けの謎の處ぢや。
さく　そんな事は、わしや知らんわいなア。
　ト逃げようとするを捉へて
八郎　コレ〱、この用だ〱。
　ト一軸を見せる。
さく　なんぢやいな、ちやつと云はしやんせ。
八郎　イヤ、ほんにこの曼陀羅の事だ。急に今遣繰りがならぬから、これをお主、後までちよつと預かつて置いてくりやれな。
さく　その曼陀羅をかえ。
八郎　ちつとの間、どうぞお主の心覺えの所へ、入れて置いてもらひたい。
さく　いろ〱の邪魔な事を、云はしやんすわいな。
　ト側へ寄り、曼陀羅を受取り、あたりを見て
わしが心覺えと云うて何處もないが、ちつとのうちなら天秤の抽出しへ入れて置くぞえ。
　ト天秤の抽出しへ入れる。後より
八郎　わしも後から入れるぞえ。
　トまた抱きつくを振り切らうとするを、抱き締めて
どつこい〱、逃がさぬ〱。斯う云ふ首尾でなけりやア、思ひを晴らす事が出來ぬ。嫌でも應でも、ちよつと

口々。

ト無理に口を吸ひにかゝる。振り放し逃げ廻るを追ひ駈ける所へ、勘吉、奥より出かけるを取違へて抱きつき口を吸ふ。勘吉、突き倒して

勘吉　ゲエ〳〵。

ト胸の悪きこなし。おさく逃げて入る。

八郎　今のは勘吉か。ゲエ〳〵。

ト胸を悪くする。

勘吉　勘吉どころか、口熱のありツたけ吹き込まれた。ゲエ〳〵。

八郎　悪煙草をかぐやうな匂ひで、ゲエ〳〵。

勘吉　おきやアがれ。舌がちぎれると思つた。冗談もよい加減があるものだ。馬鹿々々しい。サア、風呂が明いた。來て入らつしやい。

八郎　爰へ來たのはその用か。

勘吉　知れた事。先刻から旦那が呼べと云はつしやる。早く來て、入らつしやい〳〵。

八郎　なんのそれを、爰へ來ずともよい事を。つい呼べばよいに仰山な。おらアまだ爰に用がある。旦那を先へ入れてやれ〳〵。

勘吉　ハテ、それおやア片付かぬ。ちよつくら入つて來たがよい。旦那が喧ましいわな。

八郎　サア、そんなら行く。先へ行きやれ。

勘吉　早くございよ。

八郎　いま行くよ。

勘吉　ヤレ〳〵、舌がピリ〳〵するぞ。

ト合ひ方になり、勘吉、奥へ入る。八郎兵衛、ソツと天秤の抽出しを明けて、おさくの入れた曼陀羅を取出し

八郎　彼奴に、何でなと難儀さして思ひ知らしてくれべい。時に此奴を。

ト隠し所を見廻すうち、勘吉ソツと暖簾口より顔を出し

勘吉　番頭、早く來さつしやい。

ト八郎兵衛、悧りして

八郎　オ、サ、今行くと云ふに。

ト勘吉、入る。八郎兵衛、一軸を持ちながら急にあはてゝ、フツと神棚の樽を見付けて

あるぞ〳〵。此奴は御用の樽が下がつたな。滅多に人の手を付けぬ物。

ト口を取つて、この中へ一軸を隠し丁度入つた。これで滅多に氣の付く氣遣ひはない。よいワ。
ト勘吉、暖簾口より顔を出し
勘吉　どうだ番頭。
ト八郎兵衛、ギョッとして、神棚へ上がつて拜み
八郎　ハテ、忙しない。拜みも上げさせないワ。
ト合ひ方になり、奥へ入る。勘吉、ソッと暖簾口より出て
勘吉　なんだか彼奴、合點の行かぬ事をして居たが。
ト樽を見廻し、樽を取つて振つて見て一軸を出し、思案して元の神棚へ樽を上げて、一軸を開き見て
こりや日蓮の曼陀羅。そんなら彼奴が……旦那へ云ひ付けようか。マア、後の事よ。
ト唄になり、勘吉、懐中へ入れてツイと奥へ入る。この唄を借りて向うより山師太兵衛、衣裳羽織大小佐藤定七の體にて、ツカ〳〵と門口へ來て
太兵　誰ぞ頼まう。取次ぎはないか。
ト奥より幸助出て
幸助　ハイ〳〵、どなたでござりまするな。

太兵　身は苦しうない者だ。この家の亭主に逢へば相解る事。その通り云ひつけやれ。
幸助　左様ならば、暫らくあれにて、お控へ下されませう。
太兵　如何にもこれにて相待たう。早う呼び出し召され。
幸助　畏まりましてござりまする。
ト幸助、奥へ入る。太兵衛、上へ通り座につくと、奥より半左衛門、出て
半左　私しに逢はうと仰しやるお侍ひ様は、どなたでござりまするか。
太兵　おてまへが山屋半左衛門か。
半左　左様でござりまする。して、あなた様には。
太兵　身は佐藤定七と云ふ者。よく見知つて置きやれ。
半左　これは〳〵、あなたが佐藤定七さまでござりましたか。ヤレ〳〵、ようこそお出でなされました、コリヤコリヤ、お茶煙草盆、早う持て。
ト幸助、出る。
太兵　アイヤ〳〵、お世話措かれい。煙草ものまぬ。茶も嫌ひだ。斯やうなやまこかしな人非人の内へ、足を留めるもむやくしいわえ。イカサマ、菊酒屋と云つて、娘を

餌に商賣をする程あつて、見掛けから底企みのある半左衛門。思へばうぬア、見下げ果てた素町人めだな。
半左　イヤハヤ、これは怪しからぬ惡口雜言。生れてから左樣な事を承はつた事のないこの半左衛門。近頃そりや、粗忽でござりませうぞえ。
太兵　佐藤定七が、粗忽云ふ武士でないぞ。
半左　粗忽でなくば、今の惡口の筋、聞きませうわい。
太兵　云はいでならうか。男のある娘を擔がせ、末では聟に難題を云掛け、娘を取返さんと云ふ工面で、百兩の賴みの金、ソックリとせしめうとは、よくも〳〵企んだな。この分では武士が立たぬ。サア、娘の首を渡すか。但し賴みの百兩を返すか。返答に依つてこの場は立たせぬ。半左衛門、覺悟いたせ。
半左　云はせて置けば、ずばら〳〵と、初對面から筋無き過言。商賣こそ酒屋なれ、先祖はちと譯ある家筋。僅か百兩そこらの、塵を結んだ賴みの印、返す事は易いが、半左衛門が慾心を仕損なひ、百兩の賴みを戻したと云はるゝが口惜しい。殊に大事の秘藏娘に、無いもせぬ名を立て、なんで疵付けたのぢや、ア、聞えた。何處ぞ脇外で藁を焚かれ、百兩が惜しうなつて、それで強請りに來たか。さう巧うはなりますまいわえ。
太兵　ヤア、默れ半左衛門。強請りなどとは何のたわ言。潔白な者ならば、娘をこれへ出すべき筈。隱すは矢ツ張り企みの證據ッ。
半左　まだ〳〵左樣な出放題。コリヤ幸助、お菊を爰へ呼んで來い。
幸助　ハイ。
　トうぢ〳〵する。
半左　早く呼べと云ふに。
幸助　ハイ〳〵。
　ト駈けて入る。
太兵　滅多に娘は出られまいわえ。
　ト合ひ方になり、お菊、幸助、おさく出る。
きく　父さん、御用はえ。
半左　お菊、先刻からの樣子、定めて聞いたであらう。サア、娘は隱して置きはせぬ。何が企みぢや。何が證據ぢや。
太兵　オヽ、こりや、まだしもだわえ。ドレ、お菊と云ふ淫奔娘の面を見てくれう。成る程、人を誑らかす程あつて、美しいもんだぞ。

きく　父さん、頼みの來たと云ふは、あのお人かえ。
太兵　百兩の聟樣はおらだワ。
きく　エヽ、嫌な男ぢやなア。あんなお人を男に持つ事は嫌でござんす。早う頼みとやらを、戻して下さんせいなア。
半左　サア、尤もぢやが、それでは其方に瑕が付く。この譯を立てた上で。
きく　イエ〳〵、それでもあんな、汚ならしい男は、こちや金輪際嫌でござんす。ナウ幸助。
幸助　サア、なんとござりませうか。
ト氣の毒なこなし。
太兵　例へ其方から望んでも、此方からもう嫌だ。命の替りに頼みの百兩、今戻せ。受取らうワ。
半左　イヤ、滅多には戻されぬ。
太兵　そりや又、なぜ〳〵。
半左　娘に不義の證據を見ようワ。
太兵　アノ、どうでもひづらが掻かせたいか。
半左　明りを立てにやア、蟲が堪えぬ。
太兵　その娘の蟲と云ふは、この家の內の召使ひだワ。
半左　ヤア、なんと。

太兵　ハテ、詳しい事は親の役だ。娘にソッと聞いて見やれ。何處ぞ其處らに、まじ〳〵として坐つて居やうぞえ。
ト幸助、お菊、ギックリする。
半左　それ聞いちやア、捨てゝ置かれぬ。サア、その名を聞かう。有やうに、云はつしやい〳〵。
太兵　われ、云つた後で、あやまりましたと詫び言するなえ。
半左　サア、男の名は。
太兵　今云ふぞよ。
半左　聞かいで置かうか。
ト八郎兵衞出て、この中へ入り
八郎　申し〳〵、マア、お待ちなされませ。私しが參りました。番頭が參りますからは、お前樣のお腹立ちも何もかも、さつぱりと譯の立つやうに致しまする。マア、氣を鎭めて、樣子を見てお出でなされませ。
ト宥め、太兵衞が方へ來て
先刻にからの樣子は、あらましあれにて聞きましたが、娘御の事について、召使ひと仰しやれば、先づ私しもこの家の召使ひ。其處に幸助も居りまする。その外は二三

人、様子あつて下がりましたが、差當つて二人の身の上。よもやお侍ひ樣が、他愛もない事は仰しやるまい。それぞと云ふ證據があらば、サア、私しに仰しやりまして下さりませ。

太兵　ハヽヽヽヽ、この家の親仁でさへ、拔差しならぬ證據のある事。うぬら風情が小差出た。すッ込んで居らうて。

八郎　イヤ、すッ込んでは居ますまい。召使ひと名指されちやア、旦那よりこちとらが聞いちやア居られぬ。ナウ幸助、さうぢやないか。めい〳〵の身晴れと云ふもの。何處が何處までも、證據を見にやア措きませぬぞ。

太兵　さうわれがぎしや張つても、目指す相手は半左衛門。眼玉をおッ開いて、娘が不義の證據を見ろ。

ト懷中より状を取出し

お菊へ遣つたこの艶書。廻り廻つて手に入つた。なんとこれでもあらがふか。

ト幸助、お菊、ハッと思ふこなし。

八郎　して、その宛名は。

太兵　お菊さま。八郎兵衛より。

半左　なんと。

きく　そんなら、その文の名は。

太兵　不義の男であらうがな。

きく　なんのマア。

八郎　コレ〳〵、何にも云ふまい。ハテ、斯うなつてはもう、とても叶はぬ。あの證據。ナ、コレ、不義の相手はこの番頭の八郎兵衛に極まるからは、お菊さまにも覺悟をして、有やうに云うてしまふが何かの爲。お侍ひ樣、さぞあなたには腹が立たう。よもやその状がお手に入らうとは、神佛も知らぬ事。あらがひましたは重々の不調法。この上は私しを、ぶつなりと踏むなりと、御存分になされて、お菊さまをば、どうぞ御料簡なされて下さりませ。

ト幸助、お菊、心で禮を云ふこなし。太兵衛、八郎兵衛が側へ寄り、引きつけて

太兵　ヤイ〳〵、うぬア〳〵、あの娘を玩物にした、八郎兵衛と云ふ色男かい。やつしめかやい。うぬア佐藤定七と云ふ、歴とした武士を、よく捨てさせたな。それがよいか、これがよいか〳〵。

ト扇にて叩き

この上は、あの娘と、重ねて置いて四つにする。覺悟ひ

ろげ。
　ト娘の方へ寄らうとする。おさく、いろ／＼留めて
さく　マア、お待ちなされませ。
太兵　放せ／＼。
　ト刀を抜かうとする。
さく　サア、尤もぢや、お道理ぢやが、とても斯うなりますからは、お手にかけられてからが、矢ッ張り世上の笑ひ草。そこをあなたが御料簡あらば、浪風なしに却つて人の噂にもなりますまい。そこの處をどうぞ御思案なされて、穏便になさるゝが、誠の御分別かとも存じまする。
太兵　云はゞこれが正眞の、女犬男犬のちよちつぷり。刀を穢すも本意でない。この上には半左衛門、キリ／＼と方を付けやれサ。
半左　おのれらはなア。この年までつい一度、人にあやまつた事のないこの半左衛門。娘にかゝつて面目を失なつたわやい。八郎兵衛め、よもやとは思へども、この道ばかりは此方が油斷。其やうな根性とは知らず、今まで何かを任して置いた、番頭面が氣に食はぬぞえ。内には叶はぬ、出てうせい。また娘も、おれが安穏では置かぬ。覺悟して待つて居らうぞ。畜生どもめが。
　ト幸助、思ひ入れあるべし。
八郎　旦那様のお腹立ちは、重々御尤もでござりまする。これまで御恩を受けたお家、その大恩を振り捨てゝ、勿體ない、あのお菊さまとの不義淫奔。これが浮世の有様か。悔んで歸らぬ犬かぶり、あやまりました。この上は、何卒お侍ひの望みの通り、百兩の賴みさへお返しあらば、お菊さまの身も安穏。私しが身はどうなつても、戀ゆゑぢやと思や、さら／＼命は惜しうはない。兎角事の納まるやう、御思案なされて下さりませう。
　ト歎くこなし。半左衛門、思案して
半左　指が汚ないとて、切つても捨てられぬ。例へ所詮又結んだからが、じゆんぢくしさうもないこの縁組み。仲人した傳三などのを、呼びにやつてと思へども、百兩が惜しさに隙取ると思はるゝも口惜しい。よいワ。賴みの印。今返さうわい。
八郎　左様でござりまする。ちつとも早いがお家の爲。
　ト半左衛門、鍵を出して
半左　コリヤおさくよ、奥の二番目の簞笥の小抽出しに、封の付いた百兩の金がある。取つて來い。

さく　ハイ〱、
　ト奥へ入る。
太兵　さうなくては叶はぬところ。便々と隙入れりやア、二人の奴等が身の上だぞ。
八郎　其處を御料簡なさるゝが、ほんのお慈悲でござりまする。
　トおさく出て
さく　ハイ、これでござりますかえ。
半左　オヽ、コレ〱。サア、其方から來た封の儘。改めて取らつしやい。
太兵　なんでも金でさへあれば、云ひ分はないわえ。
　ト取つて財布へ納める。
思へばく〱、命冥加な奴等だ。金取つたれば是非がない。ア、コレ、すつぱりと四つにして見せうものを。
半左　こゝ言云はずと、歸らつしやいな。
太兵　取る物を取つたら、歸らないで、どうするものだえ。
　ト向うより傳三、出て來て、ツカ〱と門口へ來て
傳三　親仁様、お宿かな。
　ト内へ入る。

幸助　オヽ、傳三さま。
さく　ようお出でなされました。
半左　傳三どの、好い所へござつたわえ。
傳三　ホウ、こりや、お客様があるさうでござりまする。
半左　サア、あの定七どのが、今日初めてござつて、さまざまの惡口雜言。その上で是非なく、頼みの百兩は、すつぱりと返した程に、さう思つて居さつしやい。斷わつたぞよ。
傳三　エヽ、そりやマア、思ひがけない事だ。さうして直ぐに歸られましたかな。
半左　ソレ、それ程其處に居らるゝが、目にかゝらぬかえ。
傳三　其處とは、何處に居らるゝな。
太兵　佐藤定七とは、身共だワ。
傳三　エヽ、あなたも定七さまと申しまするかな。
　ト八郎兵衛、早く歸れと仕方する。呑み込み
太兵　ドレ、さらばお暇仕らうかえ。
　ト表の方へ行く。
傳三　アイヤ〱、お侍ひ様。挨拶も無しに、もう歸らつしやりますか。不調法千萬な。

太兵　用事しまへば心が急くゆゑ、重ねて逢ふべい。
傳三　待つた。歸らつしやるなら、賴みの印は置いて行かつしやい。
太兵　なんと。
傳三　その百兩は、此方の定七より、賴みの印に預かつた金。こなさんも定七なれど、こりやア間違ひだが、その金ばかりは間違はされぬ。さう思つて百兩はマア、置いて歸らつしやい。
太兵　イヽヤ、ならない。この家の亭主と相對して、持つて歸る賴みの金子。百兩置けとはなんのたわ言。身は佐藤定七と云ふ、侍ひに違ひはないわえ。
傳三　その佐藤定七なら、仲人をしたこの傳三が、顏を知つてござる筈。ハヽア聞えた。ついに逢はぬを幸ひに、賴みの印の百兩を、いがめう爲の拵らへ事だの。
太兵　ヤア。
傳三　これではてつきり相槌の、打ち手も內にありさうなもの。ナウ番頭、甘い企みの佐藤定七、知らぬ間は是非がないが、みす／＼百兩騙られるを、知つて見ても居られまいわえ。
ト太兵衞、慄へる。

半左　そんなら其奴は似せ者ぢやな。
皆々　ヤア。
ト八郎兵衞、太兵衞を引据ゑて
八郎　うなア定七の騙りめだな。詮議がある。動きやアがるな。
太兵　アヽ、コレ／＼／＼、手荒くせまい、逃げはせぬぞ。推量の通り何を隱さう、拙者騙りに違ひなし。その正體をお目にかけやう。どうで食過ぎた形は性に合はぬ。それ／＼、この通りだ。交りなし、一粒選りの騙りだ。
ト裝束を脫ぐ。
八郎　エヽ、汚ない態をひろいで、太い奴だなア。
太兵　サア、其處が何をするも食はれぬが悲しさ。人に賴まれてした事だから、太くも細くもない、好い加減だア。
八郎　默りやアがれ。
太兵　ハイ／＼。
ト此うち傳三、上へ通り、八郎兵衞、薪雜把を取つて
八郎　なんだ、人に賴まれた。さうであらう、誰れに賴まれた。それ吐かせ。サア、吐かさないと、この薪雜把で、斯うするワ／＼。

太兵　ハイ〳〵、吐かす〳〵。所詮しくじり次手に、さつぱりと云うて聞かさう。この頼み手は爰に居る、幸助どのでごんす。

皆々　ヤア。

　ト幸助、恟りして寄らうとする。

八郎　コレ、幸助、慾きやんな。おれが居るわい。ヤイ騙りめ、うなア、とんだ事を吐かしやアがる。あの幸助が、そんな事をするもんぢやアないぞよ。

太兵　これはしたり、アヽ、お前さんは結構な人ぢやの。それを馬鹿の功名だと云ふぞや。あの幸助こそ正直な顔して、それは〳〵恐ろしい盗人根性のある人よ。うろたへたら、頼んだおれぐるみ遣りかねはせぬ。アヽ、懲りた〳〵。

　ト幸助、堪え兼ねて、八郎兵衛を退けて太兵衛が側へ寄り

幸助　ヤイ、騙りめ。おのりやマア〳〵、この幸助が何を頼んだ。盗人とはそりやなんのたわ言。なんで〳〵おれが。

太兵　コレ、云はつしやるな、もう、叶はぬ〳〵。有やうに百兩騙るつもりだと云つてしまつたがよい。ハテ、首尾よく行きやア、おれも分け口を温まると思つて、しつけもせぬ侍ひ詞で、コレ、此やうに扇に書いて云つただよ。これ程までに凝つた事が、無駄働らきになる事ぢやもの。ぶちまけないで、どうするものだ。

幸助　まだ〳〵そんな覚えもない事を吐かすか。誰れぞこの幸助に、意趣のある者が頼んだのか。さうであらう。有やうに云へ。云はぬとわれ、その分では置かぬぞよ。

太兵　こりや面白い。さう、おれ一人に塗りくらうとすりやおれも自棄だ。われが企みをみんな云つてしまふぞよ。この騙りを幸助が企んだと云ふには、慥かな證據があるワ。

八郎　して、幸助が企みと云ふ證據は。

太兵　このお菊と、幸助が、腐り合つて居るわいの。

さく　コレ〳〵、そりや何云ふのぢや。外の事は是非がないが、そんな無いもせぬ事、皆さんのござる中で、遠慮もなう、滅多にヅカ〳〵と物云やんな。

太兵　ハテサテ、わりやア其やうに奉公振りをしたとて、半襟か袖口か、銀の簪位のかすりにほかなりやアせまい。それよりわりやア、めい〳〵の身の片付きに用心しろエ、。

さく　エヽ、其方はなう。
太兵　高でおれは雇はれ人だ。義理も糸瓜もないわえ。
八郎　無駄口きかずと、キリ〱様子を吐かさないか。
　ト振り上げる。
太兵　サヽそこで二人の邪魔になる蟲を突き出し、物にせうと云ふ心で、頼みの百両を騙つて、駈落ちをする工面。そのお先に使はれた番頭は、餘ッぽどな鼻ッ垂らしだわえ。
　ト幸助、いろ〱氣を揉み、かゝらうとする。八郎兵衛、幸助を引寄せて
八郎　コリヤ幸助、おぬしやアむごい心の者だぞよ。朋輩は相身互ひ、われが科を身に引受けたこのおれを、ようやり事にかけたなア。
幸助　サア、その腹立ちは尤もなれど、なんのこの幸助が、そんな企みをしてよいものか。それと云ふのもあの騙りめ。サア、眞直に云はぬか。云はにやアこれで。
　ト薪雑杷にて叩きにかゝるを引ッ捉へ
太兵　今の程白状したのを何と聞いた。われがあのお菊と。
幸助　ヤイ、その事ぢやアない。頼まれた事を云へ。

太兵　おりやア、われに頼まれたわえ。
幸助　まだそんな事を。
八郎　コリヤ〱、その相對喧嘩を喰ふのぢやアない。サア騙りめ、その百両の金を、キリ〱と出せ〱。
太兵　サア、出すわいの。忌々しい。折角いがめたこの金を。
　ト出す。八郎兵衛、引ッ奪つて
八郎　うぬア、マア、先刻に、よくおれをぶつたな。その時斯う打つたか〱。カウ〱〱。
　ト眞似のやうにして、早く歸れと教へる。太兵衛、心得て衣類大小を抱へて
太兵　こりや堪らぬワ。
　ト逃げて入る。
八郎　うぬ、滅多に逃がさうか。
　ト表へ出て
　オヽ、南無三、取逃がしたか。併し、金さへ取返しやア、相摺りは内に居るワ。サア幸助、親方の目を晦まし、朋輩までも騙かつたその見せしめ。ぶつて〱ぶちのめす。覺悟しろ。
　ト薪雑杷にて打ちにかゝる。お菊あせるゆゑ、おさく

立ちかゝり留めるを、振り放し、幸助を打たうとする。

傳三　番頭、待ちやれ。

八郎　でも、此奴、一度が定。

傳三　ハテ、おれがマア、待ちやれと云ふに。

八郎　なぜ、お留めなされまする。

傳三　先刻にから聞いて居たが、渡世にする惡者は、身を遁がれんといろ／＼の拵らへ事。そいつを捉へて糺しもせず、內の幸助を打擲して、もし過ちでもある時は、親方の難儀となるを、好んでおぬしやア拵らへる氣か。

八郎　サア、そりやア。

傳三　ハテ、百兩の金さへ返りやア、後の詮議は何時でもなる。ナウ親仁樣、さうぢやアござりますまいか。

半左　さうとも／＼。マア、何よりは賴みの金、八郎兵衞、爰へ持つて來やれ。

八郎　ほんにさうぢや。忘れて居ました。サア、この百兩を……ヤア、こりやどうか手觸りが。

ト小判の包みを解き

オヽ、こりや小米餠だ。ソレ、御覽じませ。

皆々　ヤアヽヽ。

八郎　サア／＼、大事だわえ／＼。ヤイ幸助、こりやア何か、今どさくさ紛れにこの品玉も、われが仕業ぢやな。成る程、恐ろしい若衆だわえ。斯うなつちやァ相摺りは逃げ出し、發當人のわれを存分打ち据ゑて、詮議せにやア措かぬ。但し、痛い目せぬうち白狀するか。玆なイケ盜人めが。

ト蹴倒す。幸助、起き上がり

幸助　コレ、番頭どの。

八郎　なんだ。

トお菊、いろ／＼あせる。おさくこれを押へ、幸助、口惜しき思ひ入れ

幸助　あんまりぢや、情ない。どうしてマアこの幸助が、そんな事。覺えはさら／＼ない。

八郎　默れ。覺えのない者が、今の奴をなんで賴んだ。

幸助　サア、それがみんな覺えのない事。とつくりと譯を聞いて。

八郎　喧ましいわえ。覺えのあるか無いかは、この薪雜把がさゝらになつて、折れてしまつたら知れる事だ。覺悟して爰へうせう。

ト幸助を引き倒す。お菊、おさく兩方へ取りつく。

きく　コレ、可哀さうに幸助が、なんのそんな事があらうぞ。

さく　マア、とつくりと聞き定めて、その上ではどのやうな事があらうとも、詮議の仕樣はありさうなもの。

八郎　ハテサテ、其やうに盗人を庇ひ立てして、また飛ツ沫がかゝらうぞや。默つて仕置を見てござれ。

ト兩方を突き退けて、幸助を一つ二つ打つ所へ、勘吉、奥より出て、八郎兵衞が足を取つて、上の方へ投げのける。

皆々　ヤア。

さく　勘吉さん。

きく　好い所へおぢやつたなう。

勘吉　最前からどなた樣にも、さぞお賑やかでござりませう。

傳三　勘吉どの、久しいの。

勘吉　傳三さま、春めいて參じました。

傳三　併し、まだ寒いでなう。

ト八郎兵衞、起き上がつて

八郎　飛んだ事をしやがる。どいつだと思つたりやア勘吉か。人のうつかりして居るところを、なんで投げたのだエ、。

勘吉　おれが請けに立つて寄越した幸助、惡い事があるなら、なぜ一番におれが所へ知らせちやアくれないぞ。番頭顔に薪雜把とは、あのひがいすな蕾の幸助。それをお主が胴慾な。花に嵐は大人氣ないぞえ。

八郎　それで、おれをばドッサリと。

勘吉　ハテ、嵐も凪げたりや、なんと好い天氣でごんせうがの。

八郎　イヽヤ、滅多に天氣になるめいわえ。如何にも幸助はわれが請け人。その請け人ぐるみに疑はしいから、内證で詮議するのだ。

勘吉　こりやア一番聞かにやアならぬわえ。番頭さん、請け人ぐるみとは、また何が疑はしい。

八郎　あの幸助は、大騙りの似せ金遣ひだ。

勘吉　エ、、あの幸助がな。

八郎　似せ聟を拵へて、百兩の賴みを騙らせ、直ぐにその場で似せ金に摺替へた大泥坊。なんとこれでも疑ひがかかるまいか。

勘吉　して、その似せ聟は何處に居まする。

八郎　その相摺りは、最前直ぐに逃げてしまつた。

勘吉　そんならその相摺りを引ッ提へ、並べて置いて詮議すりや、金の在所も知れさうなものだぞえ。

八郎　サア、それだに依つて、幸助を打ち据ゑて、相摺りの詮議しぬかにやア置かぬワ。

勘吉　その詮議は、わしがしませう。

八郎　アノ、お主がするか。

勘吉　ハテ、そこが請け人の役。何處に居やうが探し出して、百兩の金も耳を揃へて、この勘吉が返しませう。

八郎　そりやア知れた事だ。サア、金受取らう。

勘吉　飛んでもない。どうして百兩の金、今爰にあるものかえ。

八郎　金が無けりやア騙りの幸助、番頭の役だ、代官所へそびいて行つて、有無の分ちをつけるのだ。サア幸助、うしやアがれ。

勘吉　待たつしやい番頭。そんなら日延べも聞き入れずに。

八郎　一日も待つ事はならぬ。今金を渡すか。代官所へ行かうか。

勘吉　サア、そりやア。

八郎　サア。

勘吉　サア。

八郎　サア〳〵〳〵。キリ〳〵返事を聞かうわい。

勘吉　ホイ。なんとせう、せう事がない。幸助、こりやモウ、お主とおれが災難と云ふもの。ちつとはおれも働らきに、行く先々もあれど、百疋二百疋の付け紙では間尺に合はず、所詮代官所へ行けば、これがこの世の暇乞ひ。かゝる時には神佛より外に、頼む便りはないぞや。せめて未來を助かるやうに、みんなと杯をして行くがよい。番頭どの、不肖ながら、暫らく待つて下さりませ。

ト勘吉、神棚の以前の樽を取りに行く。八郎兵衞、惘りしてこれを留めて

八郎　その樽をどうするのだ。

勘吉　サア、とても金は三文も才覺はならず、代官所へ行けば命のない幸助。せめての樽のお神酒で、ちよつと杯を。

八郎　アヽ、コレ〳〵〳〵、とつけもない。ありやお屋敷の大切な樽だ。あれに酒はない。外にいくらも酒はあるものを。

勘吉　サア、そこは聞えてあれど、正眞は神酒にあやかり、身の云ひ譯の立つやうに、頂戴させるのだ。

八郎　ハテサテ悪い合點だ。ありやア大切な御用の樽だわな。
勘吉　それだから、御武運にあやからせまするよ。
八郎　サア、それなれば先づ、代官所へ行く事は止めにしませう。
勘吉　ヤア。
八郎　ハテ、それ程正直に神を頼む心があらば、違ひもあるまい。一兩日は待つてやらう。
勘吉　そんなら、日延べを聞いて下さるか。
八郎　オヽサ、聞いてやるよ。
勘吉　その志しは千倍たが、何として一兩日や四五日で、才覺が出來やうぞ。矢ツ張り代官所へやらざアなるまいわい。
八郎　コレサ、情ない。そんなら十日でも二十日でも、いつそ晦日まで待つてやるぞ。
勘吉　さればサ。その、その晦日まで出來ぬ時には申し譯がない。矢ツ張りいつそ神酒を頂戴して。
八郎　さて〳〵片意地だ。そんならいつそ、出來次第に返したがよい。
勘吉　そんなら待つて下さるか。

八郎　神酒にさへ觸らにやア、待つてやるよ。
勘吉　番頭どの。
八郎　勘吉。
勘吉　樽は道連れ、世は情。
八郎　何たる因果な事ぢやぞえ。
勘吉　とつくりと得心か。
八郎　知れた事サ。
勘吉　ヤレ、嬉しや
八郎　オヽ、落ちついた。
ト八郎兵衛、勘吉よろしくあつて納まる。入相の鐘鳴る。向うより浪人賢藏、羽織、袴、大小にてツカ〳〵と出て、直ぐに門口へ來て
賢藏　菊酒屋半左衞門はこれか。
ト内へ入る。
さく　左樣でござりまする。
賢藏　して、亭主はどれに居る。
半左　即ち、私しが半左衞門でござります。
賢藏　御上意だ。腕廻せ。
ト繩捌きして二重舞臺へ上がる。
傳三　待つたお侍ひ樣。半左衞門に何のお咎めがあつて、

御上意でござりまする。

賢藏　さう云ふ其方は何者だ。

傳三　私しはこの家の親類、研屋傳三と申す者。

賢藏　然らば其方もよく承はれ。この度鎌倉には、三原那須野の御狩に依つて、御用米を積み出し、上總の沖に着船せしに、盜賊の爲に奪ひ取られ、密かに詮議なすところ、この家の亭主が買ひ取りしと、言上の者あつて召捕りに向つたワ。尋常に白狀して繩かゝれ。なんとだ。

傳三　それはマア、思ひがけない御上意の趣き。親仁樣には、よもや覺えはござりますまい。

半左　且以て覺えのない事。八郎兵衞、併しこの間の噂の米は。

八郎　さればサ。賣り手の方でいろ／＼日を延ばすには、そんな譯でもある事か。

賢藏　例へ如何やうに陳じても、確かな證據の印形あれば、とても叶はぬ。陳狀せ。

八郎　アイヤ、全く主人に覺えのない事。私しは番頭の八郎兵衞と申す者。拙者めを如何やうにも。

賢藏　ヤア、印形を揃へし上からは、外の者には構ひはないワ。半左衞門が囚人だ。疑はしくば、これを見ろ。

ト一札を出す。傳三取つて開き、口の内にて讀む事あつて、向うより佐藤定七、羽織大小にて、駕籠を吊らせ、門口へ控へて居る。

傳三　すりや、この名判があるゆゑに。

賢藏　申し譯が立たぬわえ。

傳三　ホイ。

八郎　其處をどうぞ、あなた樣のお情お慈悲を持ちまして、穩便になされますやうのお執成しの儀を、一入お願ひ申し上げまする。

賢藏　そりや、ハヤ、事と品とに依つたなら、輕く計らふ筋もあらうワ。

傳三　すりや、あなた樣の御賢慮にて。

賢藏　魚心あれば水心あり。

傳三　時の恩義もお心次第。

賢藏　この捕り繩も預けてくれまいものでもない。

定七　その捕り繩、暫らく拙者預かりませう。

ト合ひ方になつて內へ入る。

賢藏　何がなんと。

傳三　ヤア、あなたは佐藤定七さま。

定七　傳三もこれに居めさつたか。

ト眞中へ直る。

半左　さてはあなたが、聟定七さまか。サア〳〵これへ。

定七　初對面の禮儀は御免。先づ早速承知仕らう。先達てこの家へ持ち越しましたる願ひの印、如何なりましたな。

半左　サア、その金子の儀は。

八郎　イヤ、そりや私しが申し上げませう。その願ひの百兩は、爰に居る丁稚めが、騙りましてござりまする。

勘吉　コレ番頭、その出入りは神樂の酒樽と、相對したぢやないか。

定七　フム。騙られたとある頼みの金子。その百兩は、この包みか。

八郎　エヽ。

ト恟りする。

幸助　そりや、先刻の騙られた金。

傳三　そんなら先刻の騙りめは。

定七　家來、その繩付きをこれへ。

家來　ハツ。

ト駕籠より太兵衛、以前の形にて縛られ、猿轡にて入る。

八郎　ヤア、わりやア太兵衛。こりや堪らぬわえ。

定七　傳三、ソレ。

ト傳三、八郎兵衛を引き戻し

傳三　コレ番頭、大事の場所だ。立ち騒がずと、チツとして下に居やれサ。

ト引据ゑる。

八郎　イヤサ、わたしやちよつと手水に。

勘吉　コレ番頭、爰が性根の所だ。幕まで堪えて居なさいな。

定七　番頭、そちや、この者に近付きか。

八郎　どう致しまして、私しが存じませうぞい。

定七　でも、今、太兵衛かと云うたではないか。

八郎　イヤサ、太兵衛によう似たと申したのでござりまする。

定七　ハテナア。

トこなしあつて

半左　して、その騙りめは。

定七　今日は仔細あつてこの邊を廻るところに、衣類大小を抱へ駈け來る曲者、合點行かずと捕へて見れば、思ひも寄らぬこの金子。さてはこの家に變ありと、召連れ參る

つたこの場の仕儀。何にもせよ傳三、その科人の口を詳し、一通り訊して見やれ。

ト傳三、太兵衛が口の手拭を取り

傳三　サア、うぬ、何者に頼まれた。真直に白状しないか。どうだ〳〵。

太兵　ハテ、仔細に最初から云ふ通り、頼んだ者はあの幸助サ。

八郎　ソレ、幸助だと。

傳三　晦ましいわえ。

定七　イヤ、そりや僞はりだ。

傳三　有やうに吐かさないか。

トぶつ。

太兵　それだと云つて、外に云ふ事はないもせぬものを。

八郎　そりや、さうありさうなもんだ。

傳三　また出やアがるか。

勘吉　大人しくしなさいよ。

定七　所詮一通りでは云ふまい。

ト思案して、あたりを見廻し

その酒を少々これへ。

勘吉　ハイ、これでござりまするかな。

ト酒樽を前へ出す。

定七　其奴、酒責めにするがよい。

勘吉　アノ、此奴にこの諸白をな。

定七　存分に呑ませるがよい。

傳三　成る程、畏まりました。サア、おれが摑まへて居るから、酒を呑ましやれ。

勘吉　合點でござりまする。

ト樽より柄杓に注ぎ、太兵衛にさしつける。

サア、有やうに吐かさないと、この酒を喰はせるぞよ。

太兵　おらア呑みたくつてならない。早く呑ませろ。

勘吉　さう吐かしやア、ソリヤ。

ト呑ませる

太兵　オヽ、結構な御酒の。

傳三　默つて喰へ。

勘吉　吐かさにやア、ソリヤ。

ト呑ませる

太兵　呑まいでわえ。

傳三　まだ〳〵喰へ。

勘吉　ソリヤ〳〵。

太兵　もう、嫌々。

初演の番附

傳三　ソリヤ、そこだぞ。

　ト動かせぬ

勸吉　ソリヤ〳〵。

　ト呑ませる事、いろ〳〵あり

定七　もうよい〳〵。よい程呑んだであらうな。

傳三　ハイ、二升ばかりも喰ひました。

勸吉　これでようござりますかな。

定七　それでよからう〳〵。

賢藏　ハテ珍らしい。何れの政道に立つ事やら、聞きも及ばぬ酒責めとは、片腹の痛い詮索。ハヽヽヽヽ。

定七　酒は心を亂せども、本性は違はぬ一德。傳三。

傳三　ハイ。

　ト側へ寄る。定七、傳三へ囁く。

　心得申した。

　ト太兵衛を八郎兵衛が側へ寄せる。

太兵　もう、御免々々〳〵。

　ト勸吉に提へさせ置き、傳三、八郎兵衛の後より

傳三　コリヤ〳〵太兵衛、今日の仕事はどうなつたぞ。

太兵　ヤア今日の事か。ほんの益體。ゆかず〳〵。

傳三　それぢやア濟まぬ。分け口の金は、どうだ〳〵。

太兵　二本棒に出ツくわして、捲き上げられてしまつたわえ。

　ト八郎兵衛、物云ひたさうにする。傳三、拳を振り上げる。

傳三　その時、幸助がした事だと、なぜ云はなんだ。

太兵　さう云つたぞえ〳〵。お主が頼んだ通り、ちいとも違ひはせんぞえ。

傳三　おらア違つたと思ふぞよ。

太兵　なぜ〳〵、幸助になすくつて、金を掏替へたりやア、えゝぢやアないかえ。

　ト八郎兵衛あせつて睨む。

　睨めるない〳〵、われが顏が幾つにも見えるわえ。とんだもんだぜ〳〵。

　ト始終醉ひたる思ひ入れにて倒れる。

定七　大方、これで樣子は解つた。

勸吉　此奴は一向、死人も同然だ。

傳三　サア番頭、今のを聞いては、こなたも詮議がかゝつて來たぞよ。

八郎　イヽヤ、おれが事より、モシ定七さま、あなたが聟ならば、何より先へ詮議なさらにやア、聟どのゝ一分の

立たぬ事がござります。外でもない、お菊さまと幸助は、不義してござります。イヤサ、乳繰つて居りますぞえ。

さく　コレ／＼番頭さん、そりや何云はしやんすのぢや。その似せ侍ひの云うた詞は、我が身を遁がれやうと思つて、いろ／＼の拵らへ事ぢやと、傳三さまも仰しやつたぢやないか。それを取上げて云ふと云ふ事が、マア、そんな番頭があるものかいなア。

八郎　ハテ、ザワ／＼と雀の子が、大勢の心を知らん。不義と云ふに、身動きのならぬ證據があるワ。

さく　その證據見やんせう。

八郎　旦那様、最前の注文書、ちよつとお出しなされませ。

　ト半左衛門懐中より出す。八郎兵衛取つて

サア、筆どの始めいづれも、謹んでお聞きなされい。天罰起請文の事、一つ、其許様と夫婦の契約いたし候ふところ實正なり。後は知れし御事、宛名は幸助さまへ。ついと筆は破れてあれども、お菊より、なんとこれでも、不義の證據でないかな。

　ト起請を投げつける。おさく取つて見るうち、半左衛門、お菊を引寄せて

半左　ヤイ／＼、おのれは／＼、いつの間にそんな大膽者になり居つたぞいやい。今さら皆様の手前、筆どのや傳三どのへ、何と云ひ譯があらうと思ふぞ。エ、、おのれはな／＼。

　ト幸助、ハッと思ふこなし。

さく　イヤ、この不義は、お菊さまぢやござりませぬ。

八郎　ヤア。

さく　このおさくでござります。今まではチッと隠して居りましたれど、斯うなつては是非がござりませぬ。お恥かしながら幸助どのとは、わたしが不義を致しましたわいの。

半左　なんと。

さく　その證據はこの起請。お菊さまと御一緒に、お師匠さまで見習うた、私しもこの身の上田流、面目次第もござりませぬわいなア。

八郎　コレおさく、人はそれで濟まさうが、この番頭は騙されぬ。われが手で書く起請に、なぜ幸七さま、おきくよりとは書いてある

さく　こりや、おきくではない、おさくでござんす。

八郎　ヤ。
さく　とつくりと見て下さんせ。さくと書いたわたしが名。
八郎　サア、この頭の字が、ちよつと破れてあるのが。
さく　破れうが千斷れうが、おさくと書いたその起請を、無理にお菊にしたがるとは、番頭さん、お前はきつい惡玉ぢやぞえ。
　　ト八郎兵衞、思案して
八郎　よいワ。さう忠義立てをする心に免じて、政道の仕樣がある。サア來い。
半左　コレ八郎兵衞、われはおさくを何とする。
八郎　なんとするとは不義者の成敗。宿へ預けて思ふ存分、サ、此まゝでは置かれますまいがな。
半左　イヤサ、おさくはどうでも。
八郎　不奉公した不義密通、親方、その分にして置かつしやりますかな。
半左　エ、コレ、何かは云ふに云はれぬ不義の相手。もう、斯うなつては是非がない。おさく、爰へ來い。
さく　ハイ。
　　トもじ〳〵、半左衞門が前へ出る
半左　コリヤ、八郎兵衞や皆の手前、どのやうに思うても、一旦暇を遣はさにやア濟まぬ。ハテ、常々から頼もしい其方の氣性……サア、その起請におさくとあるのが適れぬ科。云ふに云はれぬ心遣ひも、わしに聞かせず、蔭になり日向になり、氣を付けてくれた程の其方が、サア、變な事を仕出したなア。尤も總は心の外なれど表が濟まぬ。宿へ下がつてな、また料簡もあらう……コリヤ、何にも云はぬ。こりやマア、八郎兵衞が云ふ通り、宿へ下がつてくれずばなるまい。
さく　ハイ、私しとても心から、人に恨みはない越度。廻り廻つてお菊さまの……サア、お馴染み深いお菊さまに、お別れ申すが悲しけれど。
半左　コリヤ、何もかも後での料簡。
さく　ハイ、左樣なら此まゝで。
半左　勘吉、大儀ながら、宿まで送つて下され。
勘吉　畏まりました。エ、コレ、見す〳〵人の科を。
さく　ア、コレ、何も人樣に、お詫びを頼むも頼まれぬも。
　　トこなしあつて
御機嫌ようお暮らしなされませ。

ト唄になり、皆々思ひ入れ。おさく心を殘し、勘吉と向うへ入る。半左衞門、後見送つて

半左　エヽ、一人の心から、思ひも寄らぬ人の難儀。コリヤ幸助、おのれも見下げ果てた不所存な者ぢや。在所からせた岩松の昔は、三日に上げず病身者、孫にもせぬ世話をして、それ程までにした恩を忘れて、娘にまで……サア、無い名をつけておさくとおのりや、よく不義をひろいだな。捨ては置かれぬ。明日は早々在所へ送らせるが、今夜は奧の離れ座敷へ押籠め座敷牢。見るもなかなか穢らはしい。キリキリうせ居らぬか。

ト幸助、しほしほと立ち上がる。お菊とちよいと顏見合せ、こなしあつて奧へ入る。

八郎　イカサマ、太い二人の奴等。正直の頭に神宿ると、直で通るはおればかり。ほんにこの番頭の八郎兵衞が無けりやア、菊酒屋の內は暗闇ぢやて。

定七　番頭、最前からアノ、餘所の事のやうに思うて居たが、アノ、其方が名は八郎兵衞と云ふか。

八郎　ハイ、番頭の八郎兵衞でござりまする。

定七　その八郎兵衞が、何故主のお菊に不義を云ひかけた。

八郎　イヽエ、左樣な覺えは且以て。

定七　ないとは云はさぬこの艷書。お菊さま、八郎兵衞より。

ト文を見せる。

八郎　ヤア、この文が、どうして爰へ。

定七　朋輩の密通よりは大それた、これや不義の科人。

八郎　サア、それはな。

半左　それとはおのれ、よう安穩で濟まさうか。古布子を着せてぼい捲る。

ト八郎兵衞に古布子を着せ替へる。

賢藏　ナニ、定七どのとやら、最前より家內の騷ぎに取紛れ、押默つて罷りあつた。拙者も大切な御用向き、留さつしやれた、その仔細はな。

定七　この家に緣ある拙者ゆゑ、樣子をとくと承はり、御挨拶申さうと存じて。

賢藏　樣子と云ふは、この度大切なる鎌倉どのゝ御用米、船中にて紛失せしを、密かに吟味いたせしところ、半左衞門が買ひ取りし事、一札にて明白ゆゑ、糺しに參つたが、なんと、これにも云ひ譯の筋があるか。

定七　成る程、疎かならぬお咎め。左程の事をなぜ又、當

所の代官へお届けはござらぬか。
賢藏　其許を密かに吟味いたすが、此方の役目でござる。
定七　して、お役目の御自分様には。
賢藏　三原那須野の御用を承はる、千葉家の家來、大野織右衞門と云ふ者サ。
定七　すりや、其許樣が。
賢藏　して又、貴殿は何人でござる。
定七　武州足立郡の目代を勤める、秩父の家來佐藤定七と申す者。その作左衞門が一札を、ちよつと拜見いたしたい。
賢藏　ソレ。
　ト渡す。定七取つて、とつくりと見て
定七　八郎左衞門、これへ出やれ。
八郎　ハイ。
　ト出る。
定七　この一札、覺えがあるか。
八郎　如何にも。印形は、しかも私しが致しました。
定七　手跡も其方であらうがな。
八郎　エヽ。
定七　最前の艶書と比べて見ればコレ同筆。如何に番頭の身なればとて、我が書き物に主の印形、我まゝに捺すといふは、末頼もしい番頭職、斯やうな物は何枚あつても、役には立たぬわえ。
　ト引裂き捨てる
賢藏　イヤ、定七とやら、大切なる證據の一札、なぜ引裂いた。
定七　引裂き捨てるは、其方が爲ぢや。
賢藏　何がなんと。
定七　斯やうな謀書謀判は、有無を云はさず死罪の掟。其處を思うて穩便に、取計らふがこの場の寸志。
賢藏　すりや、われ達が身晴れして、千葉のお家の政道を、蔑ろにして事が濟むか。
定七　去年極月千葉家より、大野織右衞門と云ふ者、出奔いたし行くへ知れず。後日の爲と御内意にて、御沙汰のありし織右衞門が、千葉家を名乘つて事が濟むか。
賢藏　ヤア。
定七　この間、稻島邊に胡亂の指南を云ひ立て、種々の企みを爲す者と、知らせに依つて吟味を遂げ、今日この所へ付け込みしに、さては汝が千葉家の浪人、大野織右衞門であつたよな。遁がれぬ場所だ。大小差して猶かゝ

れ。
賢藏　さう吐かしやア破れかぶれだ。
ト賢藏、定七立廻り。此うち八郎兵衞、ソツと逃げようとする。傳三、引据ゑる。
定七　捕つた。
ト賢藏を押へて繩をかける。
半左　ハテサテ、小氣味のよい事なア。
定七　事を訴せば謀書の科人、八郎兵衞も同類なれど、この家にかゝる難儀を思ひ、其まゝ見逃がす不義者の番頭。半左どのゝ御政道は心任せ。
半左　成る程、いろ〳〵な企みを致す不所存者。片時でもこの家に置かば掛り合ひ。サヽ、その形で出てうせう。
ト門口へ突き出す。
八郎　久しいものよ。古布子に着せ替へて、追ひ出されるからは、矢ツ張り古布子に、こいつは一首つらねる所だ。斯うもあらうか。丸のみに、せうと思うた菊酒屋、さうは虎やの哀れ龍藏。
傳三　馬鹿な野郎だ。早く行きやアがれ。
ト門口を締める。合ひ方になり、八郎兵衞、捨ぜりふにて花道へ入る。定七、居直つて
定七　さて今日は役目ゆゑ、何事も早々の段、御容赦にあづかりませう。
半左　これは〳〵、此方とても何かと失禮。
定七　そこも推量してござる。御存じの譯なれば、最早捕者はお暇申す。傳三には後に殘り、萬事拔目なきやうに、ソレ、合點か。
傳三　及ばずながら、計らひまするでござります。
定七　家來、繩付きを駕籠へ。
家來　ハツ。
ト表へ引立て駕籠へ乘せる。
賢藏　うぬらア好い駕籠があつて、仕合せだなア。
ト定七、表へ出て
定七　然らば傳三。
傳三　もう、お出でなされますか。
定七　コレ、頼みの印は、ちと此方に入用の事あれば、借用いたして歸りたい。
半左　そりや、隨分お持ちなされませい。ぢやが、どうか頼みをお返し申すやうで氣にかゝる。左樣ならば外の金子を。
ト行かうとする。

定七　アヽ、イヤ／＼。左様ならこの頼みは傳三。お身に預けて歸りたい。

傳三　アノ、この金を私しに。

定七　ハテ、何時どのやうな事があつてもな。ソレ、預ける物は……半左衛門どの。其うちお目にかゝりませう。

ト唄になり、花道へかゝる。

駕籠やれ。

ト定七先に駕籠の人數、揚げ幕へ入る。合ひ方になり

傳三　ヤレ、おつかない騙りめら。定七さまのお陰で、納まる事は納まつても、心遣ひな今宵の仕儀。イヤもう、五ツ半でもあらう。お前はお休みなされませ。

半左　さうしませうか。こなたはさぞ氣草臥れ。酒でも燗して呑んで寢るのが藥でござる。

傳三　ハイ、さう致しませう。コレお菊、何を其やうに案じ顔する事がある。自體氣の弱い生れ性、人の事でも我が身のやうに、苦勞になるのも尤もぢやが、もし勞症にでもなりや、親仁様の大抵の歎きぢやアない。そんなに苦にせずとも、サア、親仁様、連れて行つて御寢なりませ。

半左　サア、今夜はおれが側に寢て、とつくりと世間話しを聞かせませう。

傳三　それがようござりませう、イヤ、次手にこの金も、しまつて置かつしやりませ。

半左　ほんに用心が肝心ぢや。書付け一つ取られてもならぬ。

ト金を巾着へ入れ、天秤の抽出しにも錠を下ろし、太兵衛を見付け

傳三どの、この喰ひどれめは。

傳三　此奴は爰へ。

ト太兵衛を引起し、椽へ括りつける。矢張り他愛のなき思ひ入れにて寢て居る。

太兵　爰な娘を、一丁通したいわえ。

傳三　御覽じませ。往態だ。

半傳　ハヽヽヽヽ。ハヽヽヽヽヽ。

傳三　ござりませ。

半左　娘、おぢや。

ト合ひ方、時の鐘になり、半左衛門先にお菊が手を引き、傳三付いて奥へ入る。この道具ぶん廻す

見付け目隱しの塀、これより見越しの奥座敷のかゝ

り。上の方、土藏、この前に九尺の離れ座敷、爰に幸助、柱に倚りかゝり思案の體、すべて奥座敷の景色、植込み一面、よき所に小さき枝折り門。この道具納まると、富本連中正面の座敷の内にて、合ひ方納まると、ちやんと唄のかゝりとなる。

〽二上り 咲く花の、散るとはかねて知りながら、最中の中で心なく、落すは風か春雨の、晴れぬ思ひをしよんぼりと、袖打交す籠の鳥、雲を戀路の身一つに、定め兼ねたる胸の闇。

幸助 思ひ廻せば我れながら、惡いと知つてうか〳〵と、大恩のお主樣、その娘御をそゝのかし、今さら何と云ひ譯も、内證知つたおさくどの、今日の手詰めを身に受けて、救つて下さる志し。なんと仇には思ひませぬ。とてもお暇受けし身で、在所へとても歸られず、旦那樣へ申し譯、お菊さまへのお詫びながらに、この身の科を書き殘し、今宵中に爰を立退き、人知れず淵へ身を沈めるが、切めてもの申し譯。

ト あたりを透かし見て

幸ひ床に見えるは硯箱。 さうぢや〳〵。

〽墨と硯の戀中も、水の出花の墨濁り。

ト幸助、硯を取出し、巻紙にて筆を取りながら墨を磨る。

〽その水莖の數々は、筆の命も惜しからぬ、心のたけを書き盡り、後や先なる文のあや、この世の夢の返す書。

ト お菊出て

〽同じ思ひに目も合はで、お菊は閨を忍び路の、勝手覺えし裏傳ひ、にはたずみにも薄氷、戀の素足に棲からげ、振りの袂に手とぼしの、影さへ震ふ夜半の風、木々にも宵の一時雨、染め手拭に露いとふ、娘心のしどけなき、我が影にさへ驚ろかれ、火影を袖にやう〳〵と、藏を目當に立寄れば。

トこの文句のうちにお菊、向うよりよろしく振りあつて本舞臺へ來る。幸助、驚ろき

〽はつとばかりに上書きも、其まゝ彼處へ隱すうち、お菊は枝折り戸押開き。

きく 幸助、其處にか。

幸助 さう仰しやるはお菊さまか。

ト お菊、幸助が側へ寄り

きく 逢ひたかつたわいなう〳〵。

幸助 モシ、お聲が高い。お前はまだ、お寢りませなんだ

かえ。

きく　わしや其方の事が案じられ、ちよつとなりと逢ひたいと思ふ程、意地の悪い父様まで、今宵に限りわしが側にお寝ると云ひ、奥座敷には仲人の、傳三さまが寝て居やしやんすばつかりに。

幸助　それでお前は勝手から、庭を廻つて

きく　怖々忍んで來たのぢやわいなア。

　ト兩人こなし。

幸助　それ程まで私しが事を、お案じなされて下さりまするお志し、何の忘れに致しませぬが、今日の體裁も御主人へ不忠。最前とつくりと、思案も極めて置きましたれば、もうこの上はフツツリと、私しが事は川へ流し、無い者ぢやと思し召し、云ひ號けの聟様と、お添ひなるが、お身のお爲。思ひ廻せば。

〽世上の義理に引替へて、道に背きし恩知らず、朋輩衆の情さへ、云ふに云はれぬ身の越度。

その申し譯は細々と、認め置きしを御覽なされ、何事も今までは、夢の浮世と諦らめて、お免しなされて下さりませ。

〽拜みまするど手を合せ、顔をも上げぬいぢらしさ。

〽お菊は始終伏し沈み、心をあせり身を悶え、こけし岩間の羽抜け鳥、體を袂に隱し泣き、云ひたい事の數々の、あれども胸につかへの體。

　ト幸助、この淨瑠璃にて愁ひのこなし。お菊、泣き沈み

〽始終お菊は泣いじやくり。

　ト合ひ方のうちお菊、間へ起りし思ひ入れにてウンと反る。幸助、慌てゝいろ／＼介抱し、抱き締めて

コレ、お菊さま、氣が付きましたか。

　トお菊ヂツと心付き、幸助が手に取りついて、怨めし氣にキツと顔を見る。このキツカケに

〽怨み顔さへ恥かしい、色と云ふ字はいろはより、外に習はぬ筆始め、元はと云へば父様が、わしに隱して餘の人の、結納とやらの約束は、ほんに誓文白木綿の、神と親とが結ばぬ縁を、云ひ譯ながらせめてもの、白山様へ願かけて、茶斷ちするのも、わたしやお前に添ひたいばかり、白山様へ願かけて、煙草斷つのも、わたしやお前に添ひたいばかり。誠を云はゞこの道は、親の儘にもならぬが慣ひ、女子の好いた女夫事、それさへ今日の今までも、人目垣に隔てられ、心ばかりを亂菊の、露のたま

さか逢ふ良に、わしが黄菊を打明かし、岩にせかるゝ菊水の、われても末は相生の、契りは盡きぬ翁草。とも白菊の千代までも、變らぬ仲を何ぢやゝら、如何に殿御の癖ぢやとて、二言目には御主人の、お主さまのと憎て口、いたづら菊を振り捨てゝ、故郷の花の嫁が萩、いとしらしさに見替へられ、歸る音羽のかね事も、いつか丸寢の菊重ね、一重は愚か百夜菊、輪廻は盡き忘れ霜、消えなば共に消えもせで、つれない事をと寄り添ひて、胸の炎は紅菊の、雨にしほるゝ風情なり。

トこの淨瑠璃にて兩人抱き合ひ納まり、直ぐに合ひ方。傳三、手燭を袖に覆ひて、屋體の奥より出て様子を立ち聞く思ひ入れ。兩人はこれを知らず

幸助　段々のお怨みは御尤も。さら〳〵左樣な事ではなけれど、何を云うても重なる難儀。見す〳〵八郎兵衛が企みと思へど、知れぬうちはこの身の越度、それさへあるにおさくどのまで、身に引受けた不義の悪名。とてもお前樣と御一緒に、この家には居られぬ幸助。旦那樣への云ひ譯に、死ぬる覺悟の申し譯を、たつた今認め、あの硯箱に置きました。お前樣のお情は、死んでも忘れぬ證據は、在所へとては歸りやせぬ。隨分と御無事で、おめでたうお暮らしなされませ。

ト泣く。此うち傳三、以前の書いた物、ソツと硯箱より取つて懷中へ入れる。

きく　サイナウ、さうした心を推量したゆゑ、ソツと其方と内を脱け、心當りの方もあれば、一緒に其處へ立退いて、それでも添はれぬ事ならば、覺悟極めたこの剃刀。

幸助　エヽ、すりや、どうあつてもわたしが事は。

きく　わしや、よう思ひ切らぬわいなう。

ト幸助こなしあつて剃刀を取り

幸助　よく云うて下さりました。有やうは私しも、お前樣の事が心にかゝつて、死遅れましたわいなう。

ト泣く。

きく　その心ならちつとも早う、今宵のうちに。

幸助　と云うて、僅かに旅の用意もなく。

きく　父樣の巾着に入れてあつた、この金で。

ト包み金を渡す。幸助これを見て

幸助　ほんにこれが、毒喰はゞ皿。お菊さま。

ト懷中して、手燭を持つて幸助先に、お菊が手を引いて出かける。傳三、ズツと寄り、手燭を出し

傳三　幸助、まだ寢やらぬか。

幸助　エヽ。

ト兩人、悔りして手燭を消し、お菊を後へ隱して

傳三さまかえ。

傳三　ハテ、きつい膽の潰しやう。イカサマ、腰に疵持つ身では、笹原は歩かれまい。

幸助　エヽ。

傳三　イヤサ、あんまり宵から寢た加減か、目が冴えてとんと寢られぬ。定めて其方も今日の事で、寢もしやるまいと思つたから、朧夜の庭先で、夜とともに話さうと思つて。

幸助　それで爰へ、お出でなされましたかえ。

傳三　今年は取分け暖かなれど、まさか爰でも話されまい。マア、縁先へ來やれ。

トずつと寄つて、後に居るお菊が手を取る。兩人ハツと思ふこなし。

コレ幸助、成る程其方は、尋常な手ぢやなう。

幸助　エヽ。

傳三　さうして、いかう慄へて居るが、おぬしや冷えて風邪を引きやせぬかえ。

幸助　私しは、慄へは致しませぬ。

傳三　ハテ、嘘を吐く男だわえ。これ程慄へて居ながら、寒けりや用心をしやれ。風邪と云ふ奴は、病氣の元だぞや。ほんにおれも、恥を云はにやア理が聞えぬと、何を隱さうこの二三日は、暮れ六ツ過ぎから物の黑白が分り兼て、今時分になるとそこら中が、何にも見えぬ明盲目。これが彼の鳥目とやら云ふものださうサ。

幸助　そんならお前は、アノ、ほんに何にも見えませぬか。

傳三　斯うして居てもお主が爰に、一人居るやら二人居るやら、とんと知れぬ、一向なものサ。

幸助　それはマア、御不自由でござりませうなア。

トお菊を落ちつかせる思ひ入れ。

傳三　サア、其處が主と病に勝れぬところ。隨分藥さへ服んで養生すりや、病でもお主でも、機嫌の直らぬと云ふ事はない。マア、爰へ來て腰をかけやれ。

トお菊を無理に縁先へ引きつける。幸助これに付いて行く。お菊をソッと二重舞臺へ上げる。幸助、腰を掛ける。始終傳三、お菊が手を取つて居る仕組み。

幸助　左樣ならばマア、この私しが手をお放しなされて、ゆるりとお物語りなされませぬかえ。

初演の繪番附

傳三　ほんにさうだ。盲目のおれが、お主が手を引く事もない。いかいたわけの。

ト手を放す。お菊、息を詰めて居ることなし。幸助、心遣ひの思ひ入れあつて

幸助　時に傳三さま、お話し致しませうが、そのお目の悪いのに、爰へござつては冷えても悪し。いつそこりや、奥座敷へお出でなされませぬか。

傳三　ハテサテ、お主も氣の付かぬ。奥ではこれが夜ざといから、滅多に話しもして居憎い。

幸助　サア、それでもお目が見えねば、何の樂しみにもならぬ庭先。

傳三　サ、所を見るが春の夜の、闇はあやなし梅の花、色こそ見えね香やは隱るゝ。歌にも盲目の垣覗き。匂ひを聞くが樂しみであらうぞや。

幸助　ハテ、風流なお物好きぢやなア。

傳三　さて先づおれから話さうは、通りやる通りこの傳三も、小道具商賣はつけたりで、方々といろ／＼の仲人して歩く先々に、變つた話しがあると云ふは、マア聞きやれ。さる所の娘だが、いゝ聟を世話をして、入れる筈になつた所が、この娘に申し分があるだて。なんだと云やアその内の、若い者といつからやら、譯があつて、サア、それからが濟まぬだらけ。とんと芝居でするお染久松。とゞのつまりは義理詰めで、その分別も起らうが、其處をチツと辛抱して、朋輩にも指さゝれ、厚かましい女だと、例へ誹られ笑はれても、ハテ、可愛いがられて死なうよりは、生きて夫婦になられまいものでもないワ。サ、なんと幸助、おぬしやア、この話しをマア、何と思やるぞ。

幸助　サア、そりやモウ、どちらがどうとも云はれませぬは、定めてそれにはいろ／＼の、義理もあらうと存じます。

傳三　オヽ、まだある。肝心のこれを、其方に讀んで聞かせたい。

ト以前の書置を出す。幸助ギヨツとして

幸助　その狀は。

傳三　サヽ、こいつも慥か色事だて。拾つた時にちよつと見たが、肝心の宛名はないが、これを讀んでと云うたところがおれは盲目。なんと幸助、てまへ、ちよつと讀んで聞かせないか。

幸助　お前も滅相な。何が書いてあるやら、知れもせぬ人

の手紙を、聞かずと止しになされませ。

ト取らうとするを留めて

傳三 ハテ、人の手紙でも拾つたから、讀んで見るに何の構ひがあるもんだ。見るとこいつは面白いよ。

幸助 イエ／＼、私しは物がろくに出來ませぬゆゑ、讀めませぬ。

傳三 コレ、云やるな。小さい時から爰の內で、手習をさせたお主。これが讀めないでつまるものか。

幸助 サア、そりやあんまり汚ない、釘の折れのやうな手と見えまする。

傳三 それでもおれが拾つて見た時には、美しい、しかも男の手。何も遠慮せずと、讀むがよいわえ。

幸助 すりや、どうでもこの文を私しに。

傳三 但し、讀まれぬ覺えでは。

幸助 イエ／＼、全くさうでも。

傳三 なければ高で人の文、かけず構はず讀むが潔白。

幸助 左樣ならば、ドレ。

傳三 さらば聽聞いたさうか。

ト誂らへの合ひ方にて、幸助、是非なく我が文を讀むとお菊へ知らせる。お菊も合點のこなしよろしく

幸助 憚りもかへりみず、一筆殘し參らせ候ふ、誠に不思議の御緣にて、幼少より淺からぬ御養育、海山にも替へ難きその大恩を蒙りながら、如何なる天魔の魅入りしにや、不圖した緣に繫がれて、道ならぬお情の數々も、人目を忍び御眞實の程、嬉しいとも勿體ないとも、今更申し上げるも詞なく、お禮は筆にも盡し難く心に殘り候ふ。

傳三 こつてり物だな。さうしてその後は、どうだ／＼。

幸助 然ればかね／＼聞き及びし、惡事は千里を走るとやら承り候へども、餘り／＼思ひかけなき身の災難、元の起りはお前樣に、心をかけし番頭。

傳三 ナニ、番頭とは。

幸助 サア、番頭の。

傳三 心をかけた番頭とは。

幸助 サア、心をかけた番頭。

傳三 番頭。

幸助 ばんどうの巡禮。

傳三 ハテ、飛んだ事が書いてあるの。して、それからは。

幸助 それとは明けて申さず候へども、人の惡事は見えな

から、我が身の科は夢うつゝ、うか〳〵暮らすその報いは、天道樣のお憎しみにて、遂にはこの身の越度となる事、まことに〳〵道ならぬ天罰と、空恐ろしく存じ候ふ。

傳三　こいつは後生願ひだわえ。

幸助　さりながら、今まで長々の御主人樣に、御恩も送らず剩つさへ、お氣に違ひお暇を受け、おめ〳〵在所へとては歸られず、只住み所もなき身の上、思へばこの所にあつて、人樣や親一門に歎きをかけ、不忠不孝を重ねんより、未來から申し譯を致し候ふ心にて、死ぬる覺悟に極め候ふ。

ト　お菊、堪へ兼ねて泣くを、幸助チッと押へて咳拂ひして紛らす。傳三わざと見ぬこなしにて

傳三　それからが肝心だ。その後を讀んで見やれ。

ト　幸助、愁ひを隱し、涙聲にて

幸助　さすればお前樣にも御機嫌よく、お云ひ號けのお方樣と、めでたうお添ひなさるれば、親御樣のお氣休め、生中私しゆゑに世上の人に、道知らず不義者と、よしなき噂御座候ひては、これまで包み下されし志しも水になり、お前樣の爲ならず、第一は旦那樣や、義理ある伜人の傳

傳三　仲人の傳とは。

幸助　イヤサ、傳。

傳三　傳。

幸助　傳。

傳三　傳……壬生狂言ぢやアあるめいし。

幸助　彼れこれ思ひ廻らす程、顏出しならぬ大罪人、くどうは御座候へども、今までの事はお免し下され、最早この文がこの世のお別れに候ふ間、願はくば一遍の御回向の程願ひ上げ候ふ。せめてはそれを未來の樂しみに、嬉しう成佛致し候ふ、南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト　幸助、泣き沈む。お菊打臥してしめ泣きのこなし。傳三、顏を上げ、涙を隱し泣き入る。

傳三　ヤレ〳〵、長々とした文を聞いて、ホッと睡氣が來た。幸助も大儀々々。なんと今の文言は、おぬしやアどう思ふか知らぬが、おらア一つも尤もにやア思はれない。それ程人の義理を知るならば、なぜ親に先立ち、一家一門もあらう。その衆にまで難儀を引ッかけて、我れは高見で見物すると思つても、その又云ひ交した女が、さては死なしやんしたか、アゝまゝよと、なんと存らへて居

やうぞ。是非これまでに思ひ詰めた二人なりや、直ぐにその場で死ぬる心でありさうなもの。さすればその身一人ならず、人も殺してその後でも、その女の親も親類も、どのやうな悲しい歎きを、かけまいものでもないぞや。それが親への孝行か。主人へ對して忠義になるか。その死ぬる命を存らへて、恥も恥辱も雪ぎ上げなば、雨降つて地固まると、どんな喜びに逢はうも知れまい。そこが人の浮き沈み、人の命が澤山さうに、つい金銀では買はれまいと、サ、この文の主に逢つたらば、おれは意見をしてやりたいわえ。思へばきつい苦勞性だ。

ト幸助、涙を押へて

幸助　段々の厚い御意見。さぞこの主が聞かれたら、仇疎そかには存じますまい。

トお菊へ云ふこなし。お菊、傳三を拜むこなし。

傳三　さう聞いてもらへば、おれも忝ない。人の噂も七十五日、延びれば文も反古になる。遂にはちぎれて枕當て、紙屑籠の鳥の身も、廣い世界に延び／＼と、どんな餌食みも心のまゝ。必らずきな／＼思やるな。よしない文の長話しで、宵の寢酒を醒ましてのけた。これからはおれが寢所で、酒溫めて呑んで寢よう。サア、來やれ。

ト幸助が手を取る。お菊、行くなと云ふこなし

幸助　イヤ、私しは先刻のやうに、旦那樣の云ひ付けなれば、爰に斯うして。

傳三　ハテサテ、おれが連れて行くに、お主の惡いやうにはせぬ程に、マア、來やれな。

幸助　ぢやと申しまして奧座敷へは、どうも私しは。

傳三　其方が奧を遠慮しても、爰に置くのが氣にかゝる。若い蕾の花と花。仇な嵐に吹かれずとも、今宵は奧の室の内で、しつぽりと合點の行くやうに、おれが意見をコレお菊……の名酒を、ドレ、溫めて食べようかえ。

ト唄になり、傳三、幸助が手を取つて行かうとする。お菊は幸助に行くなと取りつくを、是非なく振り放し傳三、幸助を上へ廻し、お菊が手を手燭に持ち添へ、これにて兩人悧りして、さては鳥目でない、と云ふ心を、目顏で押へて、三人よろしく、この道具をぶん廻す

元の酒屋の道具になる。

ト忍び三重になり、以前の如く太兵衛、酒樽に括られながら寢て居る先へ、八ツの鐘鳴ると、目を覺まし、

暗闇ゆゑ、度を失なふ事いろ〳〵あるべし。此うち下の大盡の後より八郎兵衛、屋根傳ひの心にて、口に金財布を啣へて、立看板に取りつかうとする所へ、向うバタ〳〵にて下女おさく歸り來るゆゑ、八郎兵衛ちよつと屋根に小隱れする。太兵衛は後ろ手にて樽を厄介にして居る。おさく表をソツと叩く。奥より幸助出て、探りながら表の戸へ耳を寄せ

幸助　誰れだ〳〵。

さく　さう云ふ聲は幸助どのかえ。

幸助　おさくどのか。

さく　まあつと、爰明けて下さんせ。

ト幸助、戸を明けて

幸助　段々のお志し。死んでも忘れはしませぬぞや。

さく　その禮よりはお菊さまが、榮橡の事を苦にして、ものの事もあらうかと。

幸助　サア、そこを思うて傳三さまが、夜の明け次第にお菊さまを、連れて立退けとある情のお詞。勿體ない、なんとそれがなるものぞいの。又お菊さまが旅の用意に、下されたあの金は、矢ツ張り義理ある顆みの印。其まゝ奥に置きました程に、何事も好いやうに、おさくどの、顆みましたぞや。

ト行かうとする。おさく留めて

さく　ハテ、さう云ふ事なら親御樣へも、傳三さまが好いやうに仰しやつてござんせう。幸ひな、あの日蓮の曼陀羅、最前お菊さまから預かつた。あの見世の天秤の抽出しへ入れて置きました。あれを用意の路銀にして、お前の在所へお供さしやんせ。マア、その曼陀羅の事を、お菊さんへ知らせて置いて。

ト内へ探り入る。屋根には八郎兵衛、舌を出す思ひ入れ。太兵衛は足にて探り尋ねる思ひ入れ。此うち幸助は表へ出て、花道へ行かうとする。向うより勘吉戻つて來る。八郎兵衛、下へ下りたきこなし。勘吉はそれを見付けて屋根へ提灯を差出す。この間に幸助ソツと向うへ駈けて入る。内にはおさく、樽に行き當り撫でて見る。太兵衛が動くに付けて、酒樽の動くと思ひ、吃りする暗闇の仕組み。勘吉とつくと八郎兵衛を見て

勘吉　ヤア、猫かと思やア内の古鼠めだな。口に啣へたのは慥かに財布。大泥坊め。サア、爰へ下りやアがれ。叩きのめしてくれべい。

ト手拭を鉢卷にして提灯を捨て、天秤棒を構へ、力む。

ト八郎兵衛は屋根にて財布より金を出し、懐中して屋根の瓦を取つて財布へ入れる。勘吉は下から棒にて突き廻すうち、途端の仕組み。暖簾口よりお菊出る。後より半左衛門も探り出て、おさくチッと窺ふ思ひ入れにて、お菊が表へ出る袖に取りつき、表へ付いて出る。

さく　お菊さま。

きく　其方はおさく。

さく　モシ、様子は殘らず聞きました。大切なる曼陀羅はな。

勘吉　コレ、そりやア、おれが先に取つて爰にある。ソレ。

ト懐中より出しておさくへ渡す。おさく提灯の明りにて見て

さく　ほんにさうぢや。これを持つてお出でなされませ。

トお菊へ渡す。押戴き、花道へ駈けながら

きく　幸助いなう。

さく　これはしたり、あのお子様わいなう。

ト追ひ駈けようとして又提灯を取つて戻る。其うち八郎兵衛、財布を啣へて看板を傳ひ下りる。勘吉、見付けて

勘吉　うぬア太い奴だの。

ト叩きにかゝる。天秤棒を捉へ捻ち合ふうち、半左衛門、表へ出て行つて、八郎兵衛が財布を取つて

半左　コレおさく、これを持つて、お菊を早う。

ト財布を投げる。

さく　心得ました。

ト花道にて金を受取り向うへ走り入る。八郎兵衛は勘吉を突き倒し内へ逃げ込む。勘吉も半左衛門も後追うて内へ入る。暗がりのこなし。八郎兵衛神棚の樽を探り、振つて見て打ち碎き、一軸を探る思ひ入れ。兩人この音に吃りする。此うち太兵衛は最前より、天秤を首に掛け、酒樽を引摺り、そろ／＼表へ出かける。奥より傳三、手燭を持つて出る。

勘吉　其處に居るか。

ト八郎兵衛にかゝる。傳三、八郎兵衛が帶を取つて引解く拍子に、帶解けて以前の小判バラ／＼と落ちる。

傳三　さてこそ。

ト立廻りのうち

半左　コレ、泥坊めが樽ごと逃げるぞ。

勘吉　南無三。

ト表へ出て行く太兵衞を追ひ駈けて、勘吉は暗き心にて、これに付いて向うへ入る。傳三、八郎兵衞を引きつけるとすつぽりと裸になり、越中一つにて逃げようとする。半左衞門、表を締める。傳三、八郎兵衞を引き倒す。直ぐに猿返りする所を、傳三は、しやんと押へる。この仕組み何れもよろしく

ひやうし幕

大切

千葉村稻荷宮の場
樋の口の場

役名――菊酒屋娘、お菊。同手代、幸助。同云ひ號け、お米。同兄、權藏。千葉村の稻荷婆ア。山師太兵衞。研屋傳三。

本舞臺。三間の間、世話屋體。正面には稻荷の宮、扉開閉好みあり。稻荷大明神の額を掛け、鈴掛けてあり。下座の方筋違ひに障子屋體。後は赤壁。東の舞臺先に草井戸、いつもの處に門口、東西の棧敷に初午の地口の掛け行燈よろしく、幕の内より稻荷婆ア、木綿やつし、袖なし羽織にて稻荷の供物を拵へて居る。お米、田舍娘にて木綿振り袖にて、同じく供物を手傳うて居る。この見得。在郷唄、初午の太鼓賑やかに幕明く。

よね　申し母さん、初午とて稻荷さまへお供へ物。裏の地には村の子供が集まり、騷がしい太鼓の音。さぞ喧ましうござんせうなア。

婆ア　なんのいなう、常は淋しい田舍住居、たま〳〵聞いた太鼓の音、騷がしいとも思はぬが、この千葉村に勸請の稻荷さま。爰へ移してお祀り申し、わしが信心の德が顯はれて、所々方々から加持祈禱。よう利く事かして世間では、わしが事を稻荷婆アと云ふといの。

よね　ほんに、それ〳〵、遠方からも聞き傳へ、毎日參詣。わたしが父さん母さんは、普賢寺村に知られた百姓。三年後に二人ながら、云ひ合せたやうに死なしやんしてから、便りないわたしが身の上。親々の約束で、幸助どのと云ひ號け。その縁で爰へ貰はれ、今ではお前がわたしの母さん。縁と云ふものは、おかしいものでござんすなア。

婆ア　それいなう。わしも連合ひに別れてから、二人の兄

弟を育てるうち、兄の鞭藏は在所に居て、馬を追うたり畑の仕事。また弟の幸助は、江戸の淺草並木とやら云ふ所へ行て、菊酒屋へ丁稚奉公。其方と云ひ號け。年の明け次第呼び歸して、其方と夫婦にする心。追ッつけめでたう新枕。樂しんで居やいなう。

よれ　其やうに云うて下さんすれど、田舍育ちの不束者。幸助さまは小さい時から江戸の奉公、殊にその菊酒屋には、お菊さまと云ふ器量の好い娘御があるとの事。定めしお氣に入るまいと思へば、わたしや恥かしうござんすわいなア。

婆ア　なんのそれが恥かしい事。其やうに思やるなら、急に暇を取り、一時も早う呼び戻して杯させう。

よれ　そりやアノ、ほんの事でござんすかえ。

婆ア　ほんの事なら、どうしやる。

よれ　サア、それはな。

トにこ／＼と手そ、振りする

婆ア　あのマア、嬉しさうな顔わいなう。ホヽヽヽヽ。

ト笑ふ。お米も袖にて顔を隱して恥かしきこなし。在鄕唄になり花道より鞭藏、馬子の拵らへにて啣へ煙管、手綱を持ち、馬を曳いて出て來る。この馬にお菊、振り袖にて横乘りにして出て來て、花道にとまり

きく　ついぞ乘つた事がないゆゑに、怖うてならぬわいなう。

鞭藏　ナニサ、この馬が怖い事。それより大膽な娘だてらにたつた一人、内を出ると云ふ事があるものでござんすか。わしが弟の幸助を、尋ねてござつたとあるからは、云はずと知れた事なれど、幸助はまだ此方へ來ませぬ程に、わしが内にて今宵を明かし、明日は早々親元へ、送つて進ぜます。必らず／＼母者人へは、知らぬ顔でござんすぞえ。

きく　そりや道々も云ふ通り、合點して居るけれど、幸助に逢はぬうちは、わしや内へは歸らぬ心。それぢやに依つて大事の守。肌身離さず持つて居る。財布の内には。

鞭藏　ア、コレ、その後は云はぬ事。とめてとまらぬ色の道。

きく　幸助に逢うて心のたけを。

鞭藏　ハテ。

ト消して

竹に雀はなア、ヨエ。

ト馬子唄になり紛らかし、在鄕唄にて舞臺へ來て、お

菊を馬より抱き下ろし
サア、爰がわしが內。遠慮はないから、入らつしやれ入
らつしやれ。
鞭藏　お米、戾つたぞよ〳〵。
きく　そんなら許して下さんせ。
　ト云ひながら、お菊を連れて內へ入る。
よね　オヽ兄さん、今お歸りなされましたかえ。
鞭藏　母者人、今日は初午の賑はひ、稻荷さまへお供へ物
で、お心忙しうござりませう。
婆ア　鞭藏、今戾りやつたか。見れば見知らぬ娘風、田舍
に見馴れぬ好い器量、何處から連れておぢやつたぞ。
鞭藏　サア、お聞きなされませ。今日は江戶の糀町へ、蠶
擺の荷を着けて問屋へ渡して歸りがけ、道に迷うたこの
女中。淺草邊と承はり、日も暮れかゝれば今夜は私し
が方へ泊めてやり、夜が明けたら早々に、親元を尋ねて
送り屆けてやらうと存じまして、歸り馬に乘せて來たの
でござります。ナウ女中。
きく　左樣でござります。好い所で逢うたお方。今宵のお
世話、よいやうにお賴み申しますぞえ。
婆ア　どうやら合點の行かぬ娘御。淺草とあるからは、も
しやアノ菊酒屋の。
きく　エ。
　トこなし。鞭藏取つて
鞭藏　ハテサテ、聞く事も云ふ事も、奧でゆつくり飯拵ら
へ。茶漬でも振舞つた上の事。
婆ア　それ〳〵、わしもどうやらひだるくなつた。次手に
母も食ひませう。
鞭藏　ソレ、ひだるいと仰しやる程に、いつもの通り膳拵
らへ。早く〳〵。
よね　そんなら一緒に、サア、奧へ。
きく　左樣ならば婆樣。
婆ア　ゆつくりと、休まつしやりませ。
よね　サア、ござんせいなア。
　ト唄になり、お米、お菊を連れて奧へ入る。後に鞭藏、
　婆ア殘り、こなし。
婆ア　コレ鞭藏、今わが身の連れて來たあの娘、淺草と聞
けば、この頃の取沙汰に、並木に名高い菊酒屋に、何や
ら內にもや〳〵があつて、幸助も暇が出たとの事。道理
でこの母が無心云うてやつたれど、つぶ三文も寄越さぬ
は、大方それでの事であらう。其方は每日江戶へ出やれ

ば、知らぬと云ふ事はあるまい。隠さずとも云うて聞かしや。

簾藏　これは又、改まつた今のお詞。何事に依らずお耳へ入れて問ひ談合、お隠し申す事はなけれども、幸助が事はとんと無い事。今日も通りがけ、ちよつと逢うて參じましたが、變る事もござりませぬ。評判の娘とあれば、ほんに世間の雜談口。いろ／＼な事を申すものでござりまするぞ。

婆ア　そんなら、とんとない事ぢやの。

簾藏　左樣でござりまする。

ト婆アこなしあり

婆ア　ハテナウ。

ト思ひ入れ。此うち奥よりお米、飯櫃と膳を持出で、婆アが前へ來て

よね　何にもない、ほんの茶々漬、よろしうお上がりなされませ。

ト婆ア、膳に向ひ

婆ア　ドレ／＼、馳走になりませう。

ト碗を取上げ、二口三口食うて

今日の飯は誰れが炊いた。

よね　ハイ／＼、わたしが炊きましてござります。

婆ア　なんぢや、わたしが炊きました。手柄さうに、こりや何ぢや。強い飯も程がある。心があつて一杯も、この婆には食はれぬわやい。

ト碗をお米へ打ちつける。お米ハツと思ふこなし

簾藏　コレお米、どうしたものぢや。常々からお嫌ひぢやと云ひつけて置くのに、どうしたものだ。イヤ／＼、私しが柔かい所を盛り替へて上げませう。

ト飯櫃を引寄せ、盛り替へて出す

婆ア　イヤ、構やんな／＼。大方強い飯を食はせて、わしが腹を損ねさせうと云ふ、云ひ合せであらう。イヤ／＼、わしは食ひますまい。干乾しになつて死んだら、わが身達の勝手であらうぞ。

簾藏　又そんな事を仰しやりまするか。勿體ない、親を死ねがしに思ふ者が、日本國にござりませうか。ソレお米、いつものやうに煮花を早う。

よね　アイ／＼、畏まりましてござんす

ト手早に茶を酌んで持つて來て

今が丁度好い出花。これでお上がりなされて下さりませ。

婆ア　なんぢや煮花ぢや。こりや好からう。
　ト取る拍子にわざと落し
アツ、、、
　ト火傷したるこなし。お米、鞭蔵、恟りして
鞭蔵　これは粗相な。
　ト云ひながら手拭にて拭きにかゝる、鞭蔵を突き退けて、お米を引据ゑ
コリヤ、なんぢや。今叱られた意趣返しに、よう火傷をさし居つたなア。わが身抓つて人の痛さを知れぢや。よう骨に覺え居れ。
　ト側にある棕梠箒にてお米を打つ。鞭蔵、留めて
鞭蔵　マア〳〵、お待ち下さりませ。お腹立ちは御尤もなから、ほんの時の粗相と申すもの。御料簡なされて下さりませう。
婆ア　なんぞと云ふとお米が贔屓。粗相〳〵と云やるが、親の首切つても粗相で済むか。
鞭蔵　イヤサ、左様でもござらねども。
婆ア　左様でなくば黙つて居や。お釋迦様ではあるまいし、母に沸え茶を浴びせて置いて、イケまち〳〵としたその顔つき。それぢやに依つて。

　トまた振り上げて打つ。鞭蔵、留めながら
ソレ、お米、ちやつとお詫び申さぬか。黙つて居ては済まぬわやい〳〵。
　トいろ〳〵あせる。お米、涙ながら手を突き
よね　申し母様、飯の炊きやうが悪いゆゑ、御機嫌を直さうと、持つて來た出花の茶。落さぬとは思へども、粗相なれば是非もなし。ほんの父様母様に、別れて便りないこの身。悪い事は堪忍して、機嫌直して下さりませ。拝みまするわいなア。
　ト泣く。
鞭蔵　アレ〳〵、あのやうにお詫び申して居りまする。幾重にも御料簡。お怪我があつては却つて迷惑。先づ〳〵お下にござつて下さりませ。
　ト婆アをいたはり、やう〳〵下に置く。
婆ア　役にも立たぬ事に氣を揉ませる。どうやら肩が張つて來た。
鞭蔵　お肩が閊へまするならば、私しが揉んで上げませう。ドレ〳〵。
　ト婆アの後へ廻り、肩を揉みながら
ほんにこれは、きつう肩癖が張つて居りまする。なんと

どうでござりまする。應へまするか〳〵。
婆ア　イヤ〳〵、ねツからはツから應へぬわいの。
鞭藏　應へませぬ、左様ならば。
　ト少しきつく揉むこなし。
婆ア　アイタヽヽヽ。こりや、どうするのぢや。死ぬわいやい〳〵。
　ト仰山に云ふ。
鞭藏　其やうにはない筈ぢやが、左様ならば、斯やうでよろしうござりまするか。
婆ア　イヤ、それでは應へぬ。
鞭藏　そんなら斯うかな。
婆ア　アイタヽヽヽ。
鞭藏　そんなら、どう致したらよろしうござりまする。
婆ア　イヤモウ、其方が孝行に揉み殺されぬうち廢めませう。コリヤ〳〵お米、手足を擦れ。
　ト鞭藏が膝を枕に寢轉んで、お米が前へ足を突き出す
鞭藏　ソレ、お御足を早う〳〵。
　ト目で知らす。お米、怖々婆アが足を揉む。
婆ア　エヽ、愚圖々々と何しやる。まだ日も暮れぬに眠り居るか、キリ〳〵揉めやい。
　トお米を足にて蹴飛す。
よね　これ程揉んで居るものを、そりや又あんまり。
婆ア　何があんまり。親に向つて口答へ。その腕骨を。
　トまた立ちかゝるを、鞭藏、留めて
鞭藏　これは又、どうでござります。其やうにお肩やお腰の痛むのは、矢張りお氣の結ぼふれ。お藥でも上げませうか。
婆ア　イヤ、藥は嫌ひだ。この年までくつさめ一つした事のないこの體。氣の結ぼれと思ふなら、ちつと氣の晴れるやうに、畑見にでも行かうわいの。
鞭藏　成る程、これはようござりませう。左様ならば、お手を取つて。
婆ア　イヤ、腰が痛んで歩かれぬ。負はれて行かう。
鞭藏　左様ならば兎も角も。コリヤお米、お連れ申して來る間、よう留守を、合點か。
よね　アイ〳〵、心得てござんす。
婆藏　左様ならば、サア〳〵。
　ト鞭藏、婆アを負ひ、門口へ出て
　どちらの方へ行きませう。
鞭ア　南の畑へ連れて行け。

鞭藏　ハイ／＼。
　ト花道の中程まで行く。
婆ア　イヤ／＼、南は止しにせう。北の畑へ連れて行け。
鞭藏　ハイ／＼。
　トまた舞臺の方へ來る。
婆ア　イヤ／＼、南ぢや。
鞭藏　ハイ／＼。
婆ア　北ぢや。
鞭藏　ハイ／＼。
婆ア　西ぢや。
鞭藏　ハイ／＼。
婆ア　東ぢや。
鞭藏　ハイ。
　ト幾度も行つたり戻つたり、いろ／＼あつて
婆ア　ア、、目が舞ふわいやい／＼。地震に搖りて居るも
　のを、エ、、おのれはなア。
　ト負はれて居ながら、鞭藏が小鬢先を兩手にて摑み振
　り廻す。鞭藏、涙ぐみ、ウロ／＼として内へ入り、婆
　アを下ろして
鞭藏　どうすれば又、御機嫌に入りませうぞいなう。

婆ア　ハテ、其方は辛抱強い者ぢやなア。
よね　村中の評判にも、鞭藏は孝行者ぢやと、噂のあるは
　爰の事。
鞭藏　何事に依らず、親の詞を背かぬが孝行と、思ひ詰め
　たも九牛が一毛。
婆ア　雪の中の竹の子、氷の魚も取り兼ねまじき今の振舞
　ひ。それに引替へ、あの弟の幸助は。
　ト宮の方を見る。鞭藏、こなしあつて
鞭藏　何と仰しやる。
婆ア　ハテ、孝行な人ぢやなう。
　ト唄になり、婆ア、思ひ入れあつて奥へ入る。鞭藏こ
　なしあつて、お米を側へ寄せ
鞭藏　オ、、よう堪忍してくれた。さぞ腹が立つであらう
　けれど、日頃から我儘氣儘の母者人。何事もこの鞭藏に
　免じて、料簡しや／＼。
よね　アイ／＼、わたしはどのやうになつても、幸助さま
　へする事ぢやと、諦らめて居りますれども、母樣の口振
　りでは、あの宮の内を。
鞭藏　ア、コレ、壁に耳あるも、この鞭藏が胸にある程に、
　今暫らくの辛抱が大事ぢやぞよ。

よね　アイ。
ト泣聲にて云ふ。このとまりへ花道より歩き一人出て
來て
歩き　コレ〳〵、鞭藏どの〳〵、庄屋樣が何やら用がある
程に、呼んで來いとの事。サア〳〵、早うごんせ〳〵。
鞭藏　庄屋どのへ用とあるは、行かずばなるまい。コレお
米、今のやうに、彼の處に氣を付けいよ。夜に入らば不
用心。いつもの脇差を。
よね　アイ〳〵。
ト取つて來て渡す。鞭藏差して
鞭藏　ドリヤ、行て來うか。
歩き　サア〳〵ござりませ。
ト唄になり、鞭藏、足早に向うへ入る。お米、後見送
り、思ひ入れあつて
よね　あのやうに獨りして苦勞さしやんすも、皆母樣の邪
慳ゆゑ。幸助さまのお身の納まり、どうしたらよからう
なア。
トてんつゝになり、花道より太兵衞、百姓の形、目の
見えぬこなしにて、杖を突き出て來る。後より百姓大
勢、てんでに繪馬や提灯を持ち、籠に蛤など入れて持
つて、ワヤ〳〵と出て來り
皆々　ハイ〳〵、お頼み申します〳〵。
よね　アイ〳〵、どなたでござんすえ。
太兵　イヤ、私しはこの間から、ちよこ〳〵參りまする者。
今日は初午の日、お加持でござりますゆゑ、先日お約束
の通り、村中の人を同道いたしましてござります。どう
ぞ阿母樣にお加持の儀を、お願ひなされて下さりませ。
皆々　ハイ〳〵、お願ひ申します〳〵。
よね　ほんにお前は、この間からのお方。その通り母樣に
お知らせ申しまする程に、暫らく待つてござんせえ。
皆々　ハイ〳〵、よろしうお頼み申しまする。
よね　その通り申しませう。
トお米は奥へ入る。
太兵　なんとマア、きつい評判ぢやないかの。
百姓　評判とも、わしらが方ではこの頃は、稲荷さまと地
藏の噂ばかり。
太兵　イヤ、又、違ひのない事は、わしは内障で皆目に見
えなんだが、この御加持を二三度戴いたら、薄紙をへぐ
やうに、ちら〳〵と見えて來た。もう一度戴けば、元の
通り明らかに、杖の要らぬやうにしてやらうと、先度も

婆様の云はしやる詞を力。なんとマア、不思議もあれば
あるものぢやないかいなう。

百姓　ハテ、それは奇妙々々な事ぢやの。

ト話しの中へ婆ア、奥より出て

婆ア　オヽ、皆よう參詣をさつしやつたの。

太兵　これは〳〵阿母様、この間お約束申した通り、皆連れ立つて參りました。

百姓　ハイ〳〵、これを稲荷さまへ、お上げなされて下ざりませ。

百二　取分けてこの稲荷さまは、蛤がお好みとござります。わざ〳〵持つて參りました。お供へなされて下さりませ。

トめい〳〵持つて來て、婆アの前へ並べる。

婆ア　オヽ、奇特によく納めさつしやる。そして太兵衛どの、目は、もう餘ッぽど見えやうがな。

太兵　見えますとも〳〵。今少しでござりますれば、今日のお加持、皆々の見る所で、不思議をお見せ下さりませ。

婆ア　成る程〳〵。お加持戴かせませう。

太兵　それは有り難うござりまする。

ト婆ア、羽織を脱ぎ、袈裟を掛け、神前に向ひ珠數を摺つて祈念のこなし。此うち皆々捨ぜりふにて何なりと話して居る。婆ア、よき程に正面を向き、懷中より袱紗に包みし一軸を出し、三方に載せて

婆ア　サア〳〵、太兵衛どの、近う〳〵。

太兵　ハイ〳〵。

ト側へ探り寄る。

婆ア　この稲荷さまは、法華勸請の稲荷さま。信心が第一ぢや。南無妙法蓮華經を忘れまいぞ。

皆々　畏まりましてござりまする。

婆ア　先づお江戸では王子の社、關八州の稲荷の司、都に伏見の稲荷山。

皆々　南無妙法蓮華經々々々〳〵々々々〳〵々々。

トこれより婆ア、經文のやうに云ふ

婆ア　さて河内には塚本稲荷、和泉に信田山城に、お辰狐や六條左近。

皆々　南無妙法蓮華經々々々〳〵々々々〳〵々々。

婆ア　丹波にのせ山白子狐、伊勢の久居に小坂部狐、富田林の與九郎狐、大和に源九郎、姫路に大垣の在所でござる。

皆々　南無妙法蓮華經々々々々々々々〳〵。

婆ア　サア〳〵、信心を取つて戴かつしやい。

　ト一軸をめい〳〵に戴かす。この時、太兵衛悔りしたろこなし。目の見えろこなし、いろ〳〵あつて

太兵　ヤア〳〵、見えるワ〳〵〳〵。サア〳〵〳〵、見えるワ。

　ト無性に喜ぶ事、いろ〳〵あつて

皆々　そんならおいらが、分るか〳〵。

太兵　分るとも〳〵。こなたは權兵衛、こちらは太郎助、新兵衛、嘉兵衛、栃兵衛は愚か、向うの山に蟻の這ふまで、アレ〳〵〳〵、見えるワ〳〵。エヽ、有り難い事でござります。

　ト兩手を突いて平伏する。

婆ア　なんと爭はれぬ加持の德。南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經。

　ト殊勝に右の一卷を戴いて、見物へも見せて懷中へ納める

百一　イヤモウ、噂には承はりましたが、見るが始めて。不思議奇妙も目の前の證據。めい〳〵お初穗を、上げさつしやい〳〵。

百二　上げいで居らうか。ハイ〳〵、これはお初穗でござりまする。

　トめい〳〵包み金やこま金を婆アが前へ並べる。

婆ア　これは〳〵奇特な事。病ばかりぢやござらぬ。皆めい〳〵の家繁昌、福德の利生は段々に知れませう。隨分信心さつしやい。

百一　致しまするとも〳〵。そんならこれから內へ行て、この事皆々にも話して聞かさう。

皆々　さうしませう〳〵。

百一　して、太兵衛どのは、どうさつしやる。

太兵　イヤ、わしはあんまり有り難いに依つて、お禮のお百度を上げて歸りませう。

百二　成る程、それがようござらう。左樣ならば、お暇いたしませう。

婆ア　これは〳〵ようござつた。また午の日に參詣さつしやれ。

百一　ハイ〳〵、畏まりましてござります。サア〳〵、ござれござれ。

皆々　ヤレ〳〵、奇妙な事ではあるぞ。

　トてんつゝになり、捨ぜりふにて皆々向うへ入る。後

に太兵衞、婆ア殘り、顏見合せ

太兵　うまい奴の。似せ盲目の内障病み、加持で癒つたと見せたれば、誠に請けて、慾を離れた百姓ども、いかいたわけであるわいの。

婆ア　この頭の思ひついた錢儲け。評判を取るも、こなたとの云ひ合せ、もしぼくの來た時は、逃げ道も拵らへて置いた。コレ。

ト囁く。

太兵　そんならあの井戸。

婆ア　ア、コレサ、高い聲ではあるわいの。

太兵　オッと合點。ない事もあるやうに評判させるが山師の太兵衞。併し、菊酒屋の似せ侍ひは失策つてのけた。それについての大仕事。聞けばその酒屋の娘お菊が、日蓮の曼陀羅と、金三百兩持つて駈落ちしたとの噂。こなたの息子幸助と、ちよく〱繰り合つて居るからは、爰へ來るには違ひはない。

婆ア　サア、そのお菊は、もう來て居る。

太兵　なんぢや。來て居る。

婆ア　先刻に兄の重藏が、道に迷つた女ぢやと、連れて戻つた振り袖。そのお菊に相違はない。騙し透して金と曼陀羅。

太兵　うまう行たなら分け口を。

婆ア　それに如才があるものか。

太兵　して、又相手の幸助は。

婆ア　婆アが子ぢやもの。隱れ所も知つて知らぬ顏も、矢ッ張り狂言。

太兵　委細は奧でとつくりと。

婆ア　太兵衞どの。

太兵　婆さん

婆ア　サア、ござれ。

ト唄になり、婆ア先に太兵衞こなしあつて奧へ入る。彈き流し合ひ方にて奧よりお菊、三方に神酒德利を載せ、持つて出て來て下に置き、向うを見て

きく　申し父樣、お免しなされて下さりませい。云ひ號けの殿御を嫌ひ、お目を掠めた不義の科。内の騷ぎを幸ひに、駈けて出たのも幸助と、夫婦になりたいわたしが願ひ。千葉村と聞いたを便り、知らぬ道筋やう〱と、尋ね迷うた土手の續き。梅若と云ふ所で、情に逢うた馬方は、幸助が兄と聞き、飛び立つ嬉しさ、來て見れば、幸助は居やらぬ樣子。合點の行かぬ先刻の女中。もし、ひ

よつと噂に聞いた、云ひ號けのお方ではあるまいか。とッとそウ、なんぢやゝら、氣の濟まぬ事ばつかり。今日は初午。幸ひ勸請してある稻荷さま、早う幸助に逢ひますやうと、持つて來たこのお神酒。ドリヤ、お頼み申さうか。

ト合ひ方になり、お菊、右の三方を神前に直し、正面の鈴を鳴らし手を合せ、一心に拜むこなし。この時、内より扉を開き、幸助、狐の面をかむりて、白張の上ばかり着て、手に幣束を持ち、そろ〳〵出てあたりを見廻し、人は來ぬかと窺ふ思ひ入れ。お菊、思はず顏を上げ、これを見て悔りして飛び退き

きく　ヤア〳〵、稻荷さまが出やしやんしたわいなア。

ト振り袖にて顏隱し慄うて居る。幸助、さうではないと云ふこなしをして、側へ寄り手を取るを、お菊振り切つて逃げる。幸助、追ひ廻すうちに、がむつた面落ちて、互ひに顏見合せ、また悔りして

ヤア、其方は幸助。

幸助　お菊さま、狐に化けたわたしが、正體顯はしたも、お前に逢ひたさ。ようマア來て下さりましたなア。

きく　そんなら其方は幸助かや。

ト側へ寄り手を取つて、お菊、あたりを見廻し、幸助が顏を見て

ほんに矢ツ張り幸助ぢやわいの。

幸助　幸助でなうて何としませう。委細の樣子はあの内で、みんな聞いて居りました。親旦那の眼を盜み、忍び逢うた二人が仲。番頭の八郎兵衛が惡企みで、菊酒屋の騷動。定七さまのお捌きで、事は濟んでも濟まぬ身の上。定七さまとは云ひ號け。お前の仲人の傳三さまが、烏目の意見は身に泌み〳〵。請け判の勘責どのへ引渡され、この在所へ歸つたれど、常々からかたましい母者人、この事を聞かれなば、どのやうな事にならうも知れぬ。おれが料簡の付くまでは、隱れて居るがよからうと、兄の指圖で稻荷の眞似。人間が狐に化けるとは、なんと新らしい思ひつきでござりませうがな。

きく　なんのマア、あられもない。さう云ふ譯とは露知らず、どうぞ其方に逢ひませうと、一心に拜む稻荷さま、見るより悔りしながらも、願ふ心の通つたしるし。お姿の出た事かと、怖いやら嬉しいやら、矢ツ張り胸がときときと、體が慄うてゐるわいなう。

幸助　イヤモウ、思ひがけない事ゆゑ、悔りはお道理ぢや

が、私しゆゑに家出なされたお前。親旦那のお歎きは如何ばかり。どう思ひ廻しても、云ひ號けの定七さまと夫婦になり、菊酒屋の家をお納めなさるが、わしやよからうと思ひまするぞえ。

ト　お菊これを聞き、幸助が胸づくしを取り、涙を浮めて

きく　コレ幸助、其方はマア、其やうに胴慾な事が、ようも云はるゝ事ぢやの。大事の〳〵父様を振り捨て、徒歩や裸足で知らぬ道、尋ねて來たも其方に逢ひたさ。例へ野の末山の奧、手鍋提げても女夫にならうと、樂しんで居る者を、其やうに云やるのは、先刻に逢うた振り袖の、可愛らしい女中さん、幼な馴染の云ひ號け、在所に咲かす増す花に、もう移り氣な愛想盡かし。なんのマア、母様に隱れる事があるものぞ。大方わしが此やうに、尋ねて來るであらうと思ひ、隱れた處が稻荷さま、嚇して歸す狐の眞似。矢ツ張りわしを化かす氣か。そりや怨めしい、胴慾ぢや。聞えぬわいなう。

ト　幸助に取りついて泣く。此うち、後へ婆ア出かゝり、これを見て居る。幸助これを知らずに、お菊が脊を擦りながら

なんぞと云ふと其やうに、泣いて落すがお前の癖。今のやうに云うたは、久しいものぢやが、引いて見た心の誠が屆いたやら、濡れぬ先こそ露をもいとへ。女夫になるまいものでもなけれど、わしが年の明け次第、娶はすと婆様が、貰うて置いたあのお米。所詮爰には居られぬ身の上。と云うて當途もなし。

きく　イヤ、そりや氣遣ひな事はない。內を出る時持つて出た心の用意。これを見てたもいなう。

ト　首に掛けたる財布と一軸を見せる。幸助見る。婆ア、目を付ける

幸助　こりやコレ金と日蓮の曼陀羅。

きく　常々から大切な、不思議の多いその曼陀羅。度々の御難にさへ、恙ない日蓮さま。二人が難儀も御利生で、救うておもらひ申したさ。勿體ない事ながら、肌身離さず身に付けて來たわいなア。

幸助　すりや、この金で身の片付き。

きく　心當ては乳母が在所。千住へ連れ立つて、早う女夫になりたいわいなう。

幸助　それ程までに、私しが事を。

きく　思はいでならうか、幸助。

幸助　お菊さま。
きく　オヽ、嬉し。
　ト抱きつく。この時
婆ア　不義者め、其處動くな。
幸菊　エヽ。
　ト悄りして、お菊、財布と一軸を、ちやつと懐中へ入れ、幸助と顔見合せ、悸うて居る。婆ア、詞を和らげ
婆ア　と云ふは、みんな嘘ぢや、この母に隠れて居た幸助が身の上。お菊どのと深い仲、何もかもよう知つて居る婆ぢや程に、怖い事は何にもない。娘心の一筋に思ひ詰めた、我が子の幸助を、可愛がつて下さる眞實心。申し、戀は切ないものぢやなア。
　ト煙草盆を持つて下に座ろ。お菊、幸助、怖々下に居て
幸助　そんなら母様は、委細の譯を。
婆ア　殘らず後で聞いたわいなう。
　トお菊、幸助と顔見合せ
幸助　面目次第もござりませぬ。
　ト俯向く。
婆ア　ホヽヽヽヽ。あの子とした事が、氣の弱い。あるは嫌なり思ふはならずと、誰れしも若い時は、覺えのある事。なんぼ田舎に育つても、稲荷婆アと異名を取つた婆アぢやもの。まんざら野暮でもないわいの。
きく　ほんにマア、見ると聞くとはきつい違ひ。人と馬には乗つて見よ、添うて見よと父様も仰しやつた通り、今日初めて乗つたは妹背の導き。血筋の縁。幸助に似て優しい兄御。その兄弟の母御ぢやもの、こりや斯うありさうなものぢやわいなう。
　ト婆アこなしあつて、お菊を上座へ直し、婆ア引下がつて手を突き
婆ア　幼ないより幸助を、御奉公に上げますからは、わたしが爲にもお主様。戀に上下の隔てもなく、色は思案の外とやら、結ぶ妹背は深い御縁。其處を手びどく意見して、二人が仲を裂く時は、水の出花の身投げ心中。又は美しいその肌へ、刃の苦しみ。なう恐ろしや。浮名は殘る芝居の狂言。草双紙や繪双紙に、恥を書かれて笑ひ草。其處を思へば願ひの通り、夫婦にするが親の慈悲。
幸助　そんならアノ、お菊さまと。
婆ア　好き好かれた仲ならば、夫婦になつたがよいわいの。

きく　それでもあの幸助には、お米さんとやら云ふ、云ひ譯けがあるぢやないかや。

婆ア　そりや口先の約束ばかり。兩親の死去の後、孤兒となつたお米、引取つて育てるからは、この婆アが心次第。神の結ばぬ縁ならば、外に好い聟取つてやりまする。

きく　エヽ、嬉しい。忝ない。そんなら今日から、ほんまの女夫。

婆ア　この母や兄の贔屓が、親御樣へお願ひ申し、利害を說き、菊酒屋の聟は幸助。仕合せ者。

幸助　思へば、どうやら勿體ない。

きく　アレ、まだそんな事ばつかり。

婆ア　お心の落ちつく爲、內祝言のお杯。幸ひ稻荷の神酒土器。ドリヤ、取敢へずお祝ひ申さう。

　ト合ひ方になり、婆ア、三方の土器神酒德利を鎌臺へ直し、供へてある蛤を持つて來て

婆が勸請の稻荷さまへ、初午の供へ物。この蛤の貝合せ。しつくり合つた妹脊のお肴。祝言の杯は、女の方から獻すとやら。サア〱、早うお菊さま。

きく　そんならアノ、わたしから獻すのかや。

　ト嬉しさうに土器を取上げ、幸助を見て

コレ幸助……さん、慮外ながら、オヽ恥かし。

　トにつこり笑ふ。

婆ア　エヽ、おぼこなお子ではあるわいなう。

　ト德利の酒を注ぐ。お菊ちよつと呑んで三方に載せる。また婆ア、幸助が前へ直し

サア〱幸助、一世一度の固めの杯。めでたう一つ謠ひませう。相に相生の松こそめでたかりける。

　ト謠ひながら酌をする。幸助、土器を取上げる。婆ア注ぐ。幸助、呑んで下に置く。婆アもちよつと呑んで

オヽ、めでたい〱。斯う杯をするからは、主從は內證、我が子に連れ添ふ嫁は娘。これからわしが云ふ事は、何でも聞く氣でござらうの。

きく　そりや知れた事、姑は親、わしが爲にも母樣なれば、座も改めて、サア〱爰へ。

　ト婆アを上座へ直し

これから二人が云ひ合せ、御孝行に致しますわいなア。

婆ア　オヽ、賴もしい〱。そんなら此方も詞を改め、アノ、嫁女や〱。

きく　アイ〱、御用でござりますかえ。

初演の繪番附

婆ア　サア、その用はの。
きく　御用はえ。
婆ア　サア、なんぢやわいの、幸助と夫婦になれば、わしとは親子、その親の所なれば、なんと土産がありさうなものぢや。
　ト お菊、心で頷き、合點したるこなし。
きく　ほんに、それ〳〵。わしとした事が氣の付かぬ。お土産は爰に財布の儘、これで何なと好いやうに。
　ト 以前の財布を出す。
幸助　ア、申しお菊さま、それではあんまり。
きく　ハテ、大事ないわいの。
　ト 婆ア、にこ〳〵笑ひながら手に取つて
婆ア　こりや、見れば金さうな。殊に餘程の重目と云ひ。なんのマア他人がましい、心遣ひに及ばぬ事。ホヽヽホ。ドレ、志しの山吹色、久し振りでお目にかゝらうか。
　ト 財布の紐を解き打開ける。内より瓦出る。婆ア、恟りして
ヤア〳〵、こりや金ぢやない、石瓦ぢやわいの。
　ト 見せる。兩人、恟りして

きく　エヽ、ほんにこれは瓦。内を出るその時から、肌身に付けた財布の金。
幸助　これへ來る道すがら、摺替へられた覺えはないか。思ひ出して御覽じませ。
きく　サイナウ、内を出るその時は、怖い〳〵で後先知らず、道で逢うた在所馬士、其方の兄の鞭藏に、連れて來てもらつたばかり。
幸助　でも、その金が此やうに、石となつたは樣子があらう。お菊さま。
きく　ぢやと云うて幸助、こりやマア、どうしたものぢやぞいなう。
　ト 兩人こなし。婆ア思ひ入れあつて、お菊が襟を取つてグッと引きつける。幸助、恟りして
幸助　ア、コレ申し。
　ト 立ちかゝるを睨みつけ
婆ア　默りやアがれ。コリヤ、二人云ひ合せ、誠の金を何處へかこかし、この婆アをうま〳〵と、ようも一杯やつたな〳〵。
　ト 振り廻す。
きく　ア、これいなう。腹立ちは尤もなれど、マア、そ

んな事、夢にもわしは知らぬわいなう。

幸助　手荒うなされて、もしひよつと、お菊さまに疵でも付いては、この幸助が親旦那へ、申し譯がござりませぬ。マア〳〵、この手をお放しなされ。

ト無理に婆アが手を放し、お菊を圍ふ。

婆ア　エヽ、ほてくろしい庇ひ立て。コリヤヤイ、今も今云ふ通り、夫婦の杯さしたから、姑は親、嫁は娘だ。何も構ふ事はない。その金が欲しさに、ついぞない、これまで云ひつけぬ情詞に付け上がり、親を騙す罰當りめ。うぬら、どうしたら腹が癒やうぞ。オヽ、好い事がある。先刻に女郎めが吐かしたに、手鍋提げても夫婦になりたいと、舌たるい世迷ひ言。杯を無駄にもなるまい。ドレ〳〵。

ト立ち上がり、薪割り臺と薪割りを持つて來て、幸助が前へ置く。また米かし桶と釣瓶を持つて來て、お菊を井戸の側へ連れて行き、眞中に思ひ入れあつて

願ひの通り夫婦になれば、田舍住居の世帶事。男の業は薪割り臺、薪木を割りこなし、その荒繩で搦げて見せい。

幸助　エヽ。

トこなし。

婆ア　女の業は釜元の、飯炊く米の水加減、その繩釣瓶に汲み上げて、猿の牙を見るやうに、眞白に磨ぎ上げい。

きく　エヽ。

ト思ひ入れ。

婆ア　昔話に聞いたであらうが、爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に、しつけぬ業をさせるが腹癒せ。幸助、薪を早く割れ。

幸助　サア、それは。

婆ア　女も早く米を磨げ。

きく　サア、それは。

婆ア　うぢ〳〵すれば鋤の背打ち。早く磨がぬか。

幸助　サア、それは。

婆ア　きり〳〵割らぬか。

きく　サア。

三人　サア〳〵。

婆ア　いつその事に。

ト鋤を振り上げる。お菊、幸助、べつたりと下に居て

幸菊　アイ〳〵〳〵。

ト慄へる。婆ア、鋤を杖に突き

婆ア　どうぢやぞいやい。
　ト頬杖にて云ふ。
きく　サア、水も汲まう。
幸助　薪も割つて見ませう。
婆ア　そんなら爰で、見物しようか。
　ト合ひ方になり、婆ア、眞中に煙草盆を控へ、煙草をのみながらこなし。幸助は下手に薪を列へ、お菊と顏見合せ、薪割りを重たさうに、兩手に持ち添へ振り上げる。お菊も幸助が方を見ながら、繩釣瓶を井戸へ下ろし、重たさうに汲み上げても水の無きこなし。兩人よろしくあつて
きく　なんぼ汲み上げても此やうに、釣瓶も濡れず、水のないは、わしが力に汲まれぬのか。但しは井戸に無い水か。
幸助　心堅木の荒仕事、力一杯振り上げても、しつけぬ業は只の一つ、薪割りの刃も立たず。
きく　幸助。
幸助　お菊さま。
幸菊　こりや、どうしたらよからうぞいなア。
　ト兩人こなし。

婆ア　ぞべら／＼と埒の明かぬ。薪を割るのにそんな形。鉢巻締めて肌でも脱ぎ、身輕になつてなぜ割らぬ。ドレ、わしが。
　ト立ちかゝり、幸助が肌を脱がせ、手拭にて鉢巻締めさせ
これでよい／＼。これからこちらのこの振り袖、尻もからげて襷もかけ、この袖も帶へ挾んで、手拭を斯うかむつて。
　ト云ひながら、お菊に襷を掛けさせ、頭に手拭を巻き、身拵らへをさす。お菊、恥かしく悲しきこなし。
サア／＼、それで似合うた業。幸助、割らぬか。何をきよろ／＼。お菊も早く水を汲め。
きく　アイ／＼、汲みまする／＼。女夫と云ふが嬉しさに、今まで手馴れぬ水仕業。
幸助　この幸助は在所生れ、小いさい時から江戸へ出て、親旦那のお情で、手荒い業は夢にもせず、樂に勤めたわしが身の上。まして一人のお娘御、御秘藏の御寵愛。ちよつと出るにも下女手代、物見遊山は外れぬお供。
きく　それが斯うして恥かしい、戀と云ふ字の書き始め、度重なれば伊勢の浦、その時は覺悟の前と此やうに、内

を出たのも心から。

幸助　幸助が身はいとはねども、私しゆゑに背かれぬ、母の詞の下司仕事、割つて云はれぬ薪割りに。

きく　互ひの心を汲み取る釣瓶、井戸より深い妹と背の、水も漏らさぬ二人が仲、斯う云ふ事は繪草紙に、聞き覺えたる由良の湊、其方は對王。

幸助　お前は安壽。

きく　釣瓶の水は汐汲む業。

幸助　薪は卽ち柴刈りの。

きく　それは兄弟、これは又。

幸助　主從妹背の憂き難儀。

きく　思へば辛い

兩人　身の上ぢやなア。

ト泣き落す。

婆ア　ハヽヽヽ。こりやおかしい。二人ながら吠えるか泣くか。そしてなんぢや。安壽の對王のと、自惚れは聲へ事。そんなら差詰めこの婆アを、三莊太夫と云ふぢやな。見立てやうが面白い。男と女は變れども、心は違はぬ邪慳の手の內、似せ金食はせた腹癒せに、斯うして斯て。

ト鋤にて兩人を散々に打つ。幸助、お菊を隔て、婆アに詰め寄り

幸助　母者人、こりや又あんまり。

婆ア　何があんまり。兒雷藏と云ひ合せ、母に隱るゝ不孝者。うぬから先へ、斯うして〳〵。

ト又鋤にて幸助を叩く。この時、奥よりお米出て、婆アに縋りとめて

よね　マア〳〵、待つて下さりませいなア。

ト幸助、お米を見て

幸助　ヤア、其方はお米。

トお菊と顏見合せ

ホイ。

ト兩人差俯向き、氣の毒なるこなし。お米、婆アを宥め、思ひ入れあつて

よね　もう、斯うなる上は、お隱しなさるゝ事はない。小さい時からお世話になり、眞實生みの母さんより、大事に思ふ今の母さん。云ひ號けは名ばかりで、引別れて居た今日の今。初めて知つたお菊さん、さう云ふ仲とは夢にも知らず、兄さんの云ひつけゆゑ、母さんにも沙汰なしに、隱して置いた幸助さま。むごいお心驕程も恨みぬ

わたしが殿御ぢやと、結句お詞を大切に、思ふこの身の誠より、縁のあるのが誠ぞや。両親に離れてより、寝亂れ髪も朝夕の、枕に残る苞のゆるさ、積り〱しわたしが思ひ、いとしい戀しい床しいと、戀に浮世の儘ならぬ、心の内をお菊さん、推量して下さりませ。

ト涙を流し、お菊も顔を上げ

きく　女子は相身互ひとやら、お前と云ふ云ひ號けの、あるとは知らず云交し、後を慕うて來たわたしを、憎いとも云はしやんせず、嫉み悋氣は何處へやら、恥かしい今のお詞。なんとお禮の申しませう。コレ申し、堪忍して下さんせ〱いなア。

婆ア　エヽ、聞けば聞く程、何奴も此奴も、忌々しい濡れ詮索。騙された金より、まだ大金になる代物。女郎めのぼつぼに隠してある日蓮の曼陀羅、捨賣りにしても四五百兩、早くそこへ出してたも。

きく　イエ〱、なんぼどのやうに云やつても、外の物は兎も角も、これぱかりは、ならぬ〱。

婆ア　ならぬと云へば、この婆アが、手籠めにして受取るぞよ。

きく　アレ、滅多に側へ寄るまいぞ。

婆ア　サア、出しや。出さぬか。出さねば斯うして。

ト お菊が懐中へ手を入れるを振り切る。お米、支へるを婆ア、引退ける。幸助入れ替つて留める。

幸助　エヽ、情ない強慾心。妹背の縁があればこそ、親と云ふ字に支へられ、ヂッと堪える御辛抱。わしが爲にお主なりや、お前の爲にも御恩のある、大事の〱お主筋。それをマア勿體ない、手籠めの打擲は何事ぞ。罰が當ると知らしやらぬか。エヽ、お情ない心でござるなア。

婆ア　親に向つて意見だて、金儲けの邪魔になる、おのれは元の隠れ所。手足の動くが面倒な。いつそ斯うして。

ト 幸助を荒縄にて縛る。お米、お菊支へるを突き退けて〱て無理に引立て、幸助を稲荷の宮へ打込み、扉を締めて手早に錠を下ろす。

きく　可哀さうに幸助を。

ト立ちかゝるを引き戻し、小刀を出して

婆ア　サア、邪魔は拂うた。その曼陀羅、キリ〱と渡してしまや。否と吐かすとこの小刀、何處へお見舞ひ申さうも知れぬ。お米も又、支へ立てすりや相伴さすか、手ぬるいうちに其處へ出せ。

きく　サア、それは。
婆ア　邪魔するな。
よれ　サア、それは。
婆ア　出さぬか。
きく　サア。
婆ア　退かぬか。
よれ　サア。
三人　サア〳〵〳〵。
婆ア　面倒な。いつそ。
　ト小刀を逆手に持つて突きかける。お菊、逃げろを引き戻す。お米支へる。入れ替る途端にお菊と思ひ、嚇しの手先、お米が肩先へグッと、突ッ込む。これにて、お米、ウンと反る。お菊、惘り抱きかゝへ、介抱する。婆アも思はず驚ろき、小刀の手を放し、ホッと吐息を吐きためらふ。この立廻りよろしくあつて、
きく　ヤア、むごたらしいお米さまを。コレイナア〳〵。氣を慥かに持つて下さんせ。お米さまいなア〳〵。
　ト呼び生ける。お米、苦しみ
よれ　ア、、術ない。苦しいわいなう。
きく　オ、、道理でござんす〳〵。
よれ　お菊さま、よう介抱して下さります。お前を庇うてこの災難、時の拍子の怪我過ち、必らずともに母様を、怨んでばし下されまするな。もう、この深手では助からぬ。一旦殿御と思ひ詰めた幸助さま、この世の緣は薄くとも、來年の緣はお菊さま、どうぞわたしに下さんせ。コレ申し母様、生さぬ仲でも親の手に、かゝつて死ぬるわしが身を、ちつとは可愛と思うたなら、邪慳な心をやめにして、幸助さまとお菊さま、女夫にして下さんせ。それをわたしが今際の願ひ。コレ申し、拜みます〳〵わいなア。
　ト苦しむ。お菊取りつき、こなしあつて
きく　オ、、よう云うて下さんした。現在の子を殺し、この悲しみを餘所に見る、こなさんは、鬼か蛇かいなう。エ、、恐ろしい心ぢやなう。
　ト婆アを見てこなし。
婆ア　コリヤヤイ、恐ろしいとはおのれが事。幸助の云ひ號け、邪魔になるお米ゆゑ、わざと突きつけ殺さしたは、この婆が手を借る悋氣の炎。それを知らずに貞女立て、男を寝取らん未來の緣、死んだ先が知れるものか。苦痛をさせぬは親の慈悲。どうでこれでは助かるまい。

いつそ早く、くたばつてしまひをれ。

トお米が肩先の小刀を抜く。これにていろ／＼苦しみ、ばつたりと轉け死ぬる。お菊、死骸に取りつき

きく　エヽ、こりや、モウ、息がないわいなう。

婆ア　サア、これからが娘の敵、むごい手料理せぬ先に、大切なるその曼陀羅、此方へ渡せ。

トお菊が懐中へ手を突ッ込み、一軸を引出す。

きく　ア、コレ、それを。

ト取りにかゝるをグッと引据ゑ

婆ア　これ程爰にあるものを、先づぽつぽへ斯う納めて、

ト懐中へ入れる。

これからが敵討ち。この小刀でたつた一突き、覺悟ひろげ。

ト突きかける。逃げ退く。立廻りの中へ太兵衛、駈けて出て留めて

太兵　待たつしやい／＼。コレ婆様、殺さうとは悪い料簡曼陀羅さへ手に入れば　福徳の三年目。こいつも賣れば百兩餘りになる代物、これから直ぐに吉原へ。

婆ア　イカサマ、其處へ氣が付かなんだ。澁皮の剝けた奴。一時も早く、合點か。

太兵　サ、女、おれと一緒に早く來い。

トお菊が手を取る

きく　イヤ／＼、なんぼでも否ぢや／＼。何よりは、その曼陀羅。

トかゝる

太兵　エヽ、面倒な。

と引立てる。この立廻りのうち向うより、鞭藏走り出て來て、太兵衛を取つて投げのけ、お菊を庇ひて、キッと見得。

婆ア　ヤア、おのれは鞭藏。

鞭藏　母者人、庄屋どのへ呼び使ひも、家出されたお菊さまの詮議。そのお菊さまを手籠めにして、なんとなされまする。

婆ア　サア、これはの。

鞭藏　知らぬ奴まで同じやうに、なんでじたばた跳ね廻る。悪く騒ぐと取ッ捉まへて、生け首を引ッこ抜くぞよ。

ト太兵衛、首をすッ込むこなし。

婆ア　コリヤ鞭藏、何も其やうに力む事はない。そのお菊は、娘お米が敵ぢやわいなう。

鞭藏　ナニ、お米が敵とは。

婆ア　幸助と夫婦になる、悋氣を互ひに云ひ募り、むごたらしいお米をば、此やうに殺し居つたわいなう。

ト　お米が死骸を見せる。鞭藏、恟りして

鞭藏　ヤア〱、こりやお米が死骸。

太兵　オヽ、證人はこの太兵衞、お米が敵のお菊ゆゑ、助太刀に頼まれた。

鞭藏　ハテ、仰山な敵討ち。これには樣子のありさうな事。お菊さま、こりやマア、どう云ふ譯でござりまするぞ。

きく　サア、譯と云ふは母御の惡心。夫婦にすると騙されて、取られた金は皆似せ金。それから募つて幸助は、稲荷の宮へ打込んで、わしを手籠めの刃をば、庇ふ拍子にむごたらしい、不慮の死はお米さま。その上大切な曼陀羅まで。

鞭藏　すりや、あの曼陀羅を。

ト　婆ア、物をも云はず行かうとする。鞭藏、留めて

待つた母上。例へどのやうな、あまさかさまな事を云はつしやつても、今日が日まで芥子程も、詞を背かぬこの鞭藏。村中の評判になつた親孝行も、幸助が大切なお主の御秘藏、その曼陀羅ばつかりは、此方へ貰はにやなりませぬ。どうぞわしに。

婆ア　イヤ知らぬ、覺えはないワ。

きく　でも、いま其方の懷へ。

婆ア　喧ましい。覺えもない。曼陀羅〱々々と、百萬曼羅を云つても知らないわえ。

鞭藏　知らぬとあらば是非がない。この鞭藏が。

ト　婆アの懷中へ手を突ッ込んで一軸を引出す。婆ア、それをとかゝる立廻り。お菊、取つて行かうとする。太兵衞、引留める。その太兵衞を鞭藏引きつける。鞭藏を婆ア、グッと引きつける。

婆ア　太兵衞、この間に一軸を。

太兵　オヽ、合點だ。

ト　お菊が持つてゐる一軸を引ッ奪り立廻り。よき所にて婆ア、一軸を取つて舞臺先の車井戸へ飛び込む

鞭藏　あれをやつては。

ト　井戸へかゝる。太兵衞、支へる立廻りして、お菊、舞臺先に落ちたる一軸を見て

きく　こりやコレ、覺えのある日蓮の曼陀羅。

太兵　それを。

ト　取りにかゝる。鞭藏、引退けお菊逃げようとする。

三人立廻り。ト、鞭藏、太兵衛を一太刀切る。お菊、悧りして、慄ふと太兵衛起上がつて、一軸へ手をかける。お菊、振り放し、二重舞臺へ逃げ上がる。太兵衛、續いて駈け上がるを、鞭藏、追ひ駈けて立廻りに、グツと突ツ込み抉る。太兵衛、苦しむ。お菊、一軸を持ち、振り袖を額に當て慄ふ。このキツカケ、初午の囃子になり、この見得にて道具廻る。

三間の間、なだれの土手、眞中に鳥居、左右に赤白の幟數多く立て並べ、吊り提灯よろしく、西の大臣柱の外に誂らへの樋の口、西棧敷の行燈に火をともし、初午の景色、賑やかに道具とまる。

ト直ぐに花道より、傳三、股引、半合羽にて、提灯を提げて出て來り

傳三　この傳三が、情の意見を無足にして、お菊どのゝ駈落ち、心當りは幸助が在所、この千葉村と聞いたゆゑ、尋ねて來た稻荷の社。大方爰で稻荷婆アと聞いたら、知れさうなもの。一時も早く、それ〳〵。

ト行きかゝろ。ばつたりと音するゆゑ、悧りして提灯を隱し窺ふと、合ひ方捨て鐘になり、樋の口より稻荷婆ア、一軸を啣へ、ズツと出る。着物の襟を絞り、一軸を手に取り、あたりを見廻し

婆ア　かねて用意の拔け道より、爰までは逃げ延びたが、太兵衛はどうしたか知らん。何は兎もあれ、お菊めが所持せし日蓮の曼陀羅、どうやら斯うやら手に入れた。忝ない〳〵。

ト戴く。この時傳三、後よりこの一軸へ手をかける。婆ア、悧りして、これにて兩人、ツと見得。

物をも云はず一軸へ、手をさツかけて何とするのだ。

傳三　イヤ、何ともせぬ。有り難い曼陀羅、手に入れた一部始終、後でとつくり菊酒屋の、娘の持つた七字の名號、利生は塚本小松原。

婆ア　かねて欲しいと星下り、梅干婆アが皺腕に、摑んだ物を物せうとは、なみ題目の妙法蓮華。

傳三　今日の出合ひは初午の、稻荷婆アと聞いたより、奇妙な禁厭加持祈禱、龍の口から極めの口の、御難に逢はぬその先に、この曼陀羅に此方へ渡せサ。

婆ア　小癪な毛二才め。爰放せ。

傳三　渡せ。

婆ア　其處退け。

傳三　渡せ。
兩人　面倒な。
ト振り切る。立廻り。曼陀羅を枷に、どつこいととまる。初午の太鼓、好みの合ひ方、そこにある道具を枷に、兩人タテよろしくあつて、トヾ、婆ア、一軸を取つて
婆ア　惡く寄るとこの一軸、べり／＼と引裂くぞ。
傳三　イヤサ、それは
兩人　サア／＼。
婆ア　いつその事。
ト右の一軸を寸々に引裂く、鞭藏、出かゝつて居る。傳三、恟りして
傳三　ヤア／＼／＼。大切な曼陀羅を引裂いた上からは、生けて置かれぬ老ぼれめ。覺悟。
ト一腰拔いて振り上げる。鞭藏出て、傳三を留め
鞭藏　待つた／＼。お尋ねなさる日蓮の曼陀羅。
ト渡す。傳三取つて
傳三　誠にこれこそ、正眞の七字の名號。すりや、お菊どのは。
鞭藏　弟幸助諸ともに、無事に納めて拙者が方に。

ト婆ア、驚ろき
婆ア　ヤア、そんなら引裂いて捨てた一軸は。
トよく／＼見て
南無三、こりやコレ、祈禱に戴かす加持のお守。おれが所で取違へ、手盛りを食つたか。エヽ、忌々しいわえ。
ト打ちつける。
傳三　正にこれも利生の一つ、誠の一軸手に入る上は、日蓮の正筆、相違あらざる極めの一札。
ト鞭藏、取つて披き見て
鞭藏　ヤア、こりや、お菊さまの云ひ號け、定七さまより離緣狀。
傳三　それさへあれば幸助お菊、夫婦にして菊酒屋の、家を立てるに構ひはない。
鞭藏　重々厚き御情。エヽ、忝ない。
婆ア　その曼陀羅を。
ト傳三へかゝる。立廻りあつて、婆アを取つて投げる。また起き上がつてかゝるを、傳三、一腰振り上げる。鞭藏引分け、留めて
鞭藏　待つた／＼。
トよろしく見得

傺三　先づ今日はこれきり。

ト打出し

貢曾我富士着綿（終り）

心中嫁菜露
(しんぢうよめなのつゆ)

「卯花戀中垣」番附（解說參照）

心中嫁菜露

序　幕　　島田平左衛門内の場

役名――島田平左衛門。姉おかよ。半兵衛女房、お千代。八百屋半兵衛。

本舞臺。三間の間、正面藁葺き、一間の反古貼り障子屋體、暖簾口、下の方植込みの萩垣、門口据ゑ物、爰にお千代姉おかよ、糸を取つて居る。下の方に莚四五枚敷いて、杵蔵、若い者の形、外に百姓三人、くるり棒を持ち、麥を打つて居る。この見得、在郷唄にて幕明く。

百一　なんと、毎年々々の事とは云ひながら、出來秋の忙しさと云ふものは、麥をやう／＼刈つてしまうたかと思へば、此やうに打つたり持つたり、ア、、忙がしい事ではござらぬか。

百二　それ／＼、今度の世には良い種を蒔いて、大名に賣られて來るがよからう。

百三　イヤ／＼、大名に生れても、家老の用人のと云ふ奴等があつて、心一杯にもさせぬげな。

百一　そんなむづかしい者に生れやうより、爰の旦那のやうに、氣儘云うて物識りで、村中で立てられる方がようござる。

杵蔵　イカサマ、その方がようござる。シタガ、おらが旦那ほど、妙に譯の好い人はござるまい。惜しい旦那が年病で患らうてござる。どうぞ慾には、もう、六年も達者で置きたうござるて。

三人　それ／＼。

杵蔵　それ／＼、早く麥を打つてしまつて、ゆつくりと煙草にせうわいの。

三人　それがようござる／＼。

ト皆々また麥を打ちにかゝる。てんつゝになり、花道より、駕籠舁き、四つ手駕籠を舁き出で來り、直ぐに本舞臺へ來て

駕舁　モシエ、ちつとの間、物が承はりたうござります。

百一　なんでごんす／＼。

駕舁　島田平左衞門さまと云ふは、これでござりまするか。

百二　成る程、平左衞門さまは此方でござるが、どつからござりました。

駕舁　大阪新靱、八百屋半兵衞さまから參りました。

杵藏　お內儀さん、大阪の八百屋から、お客がござりまする。

かよ　なんぢや、大阪からお客がある。

ト糸車を片付け

其方衆も、そこらを取片付け、休みや〳〵。

皆々　ハイ〳〵。

ト百姓皆々、其處らを取片付けて、捨ぜりふにて下座へ入る。駕籠の內より半兵衞女房お千代、袖頭巾、抱へ帶、丸ぐけの腰帶の形にて出る。

駕舁　左樣ならば、私しどもは、もう歸りまする。

千代　そんなら、早う歸つて下さんせ。

駕舁　ハイ〳〵、御機嫌ようお出でなされませ。

ト駕籠舁き二人、下座へ入ると、お千代、門口を明けて入る。

かよ　ヤア、其方はお千代かいの、ようおぢやつた。サアサア、こちへおぢや。

千代　アイ。

かよ　この子とした事が、遠慮深い。餘所外の內へ來たやうに、マア〳〵、此方へ入りやいの。

千代　ハイ。

トお千代、うぢ〳〵して居る。おかよ、お千代が手を取つて內へ入れ

ヤレ〳〵、ようおぢやつたの……駕籠の衆や、此方へ入つて茶でも參れ。誰れぞ茶を酌んでおぢや……これはしたり、駕籠の衆を歸しやつたの。酒でも振舞うて歸したがよいのに。マア、ようおぢやつたの。大方其方は、父さんの病氣見舞ひにおぢやつたのであらうの。早う父さんにお目にかゝつて、お喜びなさるお顏を見やいの。

千代　そんなら父さんは、お煩らひなさんすかえ。

かよ　其方は、父さんの御病氣を知らずにおぢやつたか。して、其方は何しにおぢやつた。

千代　エ。

かよ　父さんの御病氣見舞ひでもなうて、今時分マア、何しにおぢやつたぞいの。

千代　ハイ……わたしや去られて、戻りましたわいなア。

かよ　なんと云やる。其方は又去られて戻つたと。こなたはの〳〵。丁度今度で三度ぢやぞや。何の科、どのやうな仕落ちがあつて去られやつた。エヽ、聞えた。其方はいたづらしやつたの。不義しやつたの。コレイナウ、近所でも其方の噂、あのお千代がやうに去られて戻る女子はない。此方の娘の風上にも置かれぬと、蔭では其方の噂ばつかり。やう〳〵この頃悪い便りもない、お千代めは落ちつき居つたさうなと、父さんの喜こんでござんしたに、よう去られて戻りやつたの。父さんがお聞きなされたら、大抵の事ではあるまい。わしが父さんの御機嫌を見合せて、お話し申す程に、マア〳〵、其處に居や。あんまり大きな聲をしやんな。

　トおかよ、腹立ちたる思ひ入れにて、七輪を團扇にて無性に煽いで居る。お千代は悄れて居る。

して其方は、半兵衛からの去り狀を、取つておぢやつたか。

千代　イエ〳〵、半兵衛どのは、遠州へ行かれました後で。

かよ　何と云やる。半兵衛が遠州へ行つた後で、其方を。

千代　アイ。なんの譯やら、姑が、わたしが手を取り、無理矢理に駕籠へ乘せ、半兵衛が歸り次第、去り狀は後で遣ると胴慾な。半兵衛どのへ知らさずに、姑去りに逢ひましたわいなア。

かよ　そんなら半兵衛にも知らさず、姑去りぢやと云やるか。

　トおかよ、帶を締め直し、思ひ入れあつて

よい〳〵。さう云ふ事なら氣遣ひしやんな。連合ひの戻り次第、わしが相談して、安穩でよう其方を、此まゝ受取らうぞ。もうよい。泣きやんな。ヨヽ。わしが好いやうにするわいの。コレイナウ、もう泣きやんなや。ほんに又、この退き去りと云ふ事は、何時の世に始まつた事ぢややら。ひよんな事ではあるぞ。

　トおかよ、泣いて居るお千代へ力を付け、涙を流し思ひ入れ。障子の内にて

平左　お千代……おかよ。

かよ　アイ〳〵。

　トお千代へ思ひ入れして障子を明ける。平左衛門、病ひ鉢巻、親仁の拵らへにて布團の上に、夜着に凭れて居る。

平左　お千代、そちや又去られて戻つたな。何もかも障子

の內にて皆聞いた。アヽ、年は寄るまいもの。おのれやれ、今度去られて戻り居つたら、どうしてくれうと、思ふ心も年に從ひ、其方が不便さ可愛さに、例へもう、百度千度去られて戻つても大事ない。人が笑はうが誹らうが、子の可愛さにや替へられぬ。聞けば半兵衞めは、遠州へ失せて留守とな……それも古手な事。おのれは留守を使うて、後で姑に去らせ居る半兵衞めが惡企み。よいよい。これからは、半兵衞が身替りに、百層倍の大町人へ嫁入らす程に、必らずキナ／＼思うて煩らはぬやうにせい。もし又半兵衞めが、ひよつと失せ居つても、決して物も云ふな。挨拶もするな。おかよも、さう思うて居やれ。

かよ　ハイ／＼。コレお千代、父さんの今のお詞を聞きやつたか。もう案じる事はない程に、サア／＼、爰へ來て、お脊中でも擦つて上げやいの。

千代　アイ。

　ト　お千代、平左衞門が脊中を擦る。てんつゝになり、花道より八百屋半兵衞、半合羽、脚絆の形にて、風呂敷包みを雨掛けにして、菅笠を持つて出て來て、直ぐに本舞臺へ來り

半兵　お賴み申しまする。

かよ　ハイ、どなたでござりまする。

半兵　八百屋半兵衞でござりまする。

　トこれにて皆々驚ろき、急に平左衞門が前へ屛風を立てる。お千代、矢張り平左衞門が脊中を擦りつゝ居る。おかよ、知らぬ顏にて七輪を煽いで居る。半兵衞、何の氣も付かず內へ入り、一々無沙汰の云ひ譯をしながら、脚絆草鞋を脱ぎ、上へ上がる。おかよは腹立ち紛れ、思はず

かよ　これは去り狀さま、お出でなされました。

半兵　ハイ、おかよさま、どなたもお變りもござりませぬか。私しも遠州濱松の親どもが病氣ゆゑ、見舞ひながら參りましてござりまする。出立の時分、ちよとお寄り申さうと存じましたが、急ぎまして失禮ながら、お寄り申しも致しませなんだ。只今戻りがけでござりまする。餘り久しうお便りも承はりませぬゆゑ、ちよつとお寄り申しました。

　ト包みの中より、紙に包みし木綿一反取出し

これは國許の木綿一反でござりまするが、お染めなされて、手拭にでもなされて下さりませ。

ト　おかよが前へ出す。おかよ、これに構はず

かよ　誰れも居ぬか。ア丶モウこの忙がしいに、人に構うて居る暇がない。男どもが、何をして居る事ぢやゝら。

半兵　イカサマ、何方も忙がしい時分でござりまする。おかよさま、煙草の火を一つお貸しなされませ。

かよ　煙草の火は、其處にござりまする。

ト　つかうどに挨拶するゆゑ、半兵衞、合點の行かぬ思ひ入れ。

半兵　これは何か、いかうお腹の立つた樣子。エ丶聞えた。内方で何か詞爭ひ。口論でもなされましたか。ハテサテ、それは氣の毒な處へ參り合せました。おかよさま、どうぞお茶を一つ、お振舞ひなされませ。

かよ　茶をくれい。お安い事ぢやが、此方の内には茶はござりませぬ。

半兵　これは怪しからぬ御挨拶。

ト　半兵衞、手を組んで思案する。屛風の内よりお千代、出て來て

千代　姉さん、もう、お藥は澀まつたかえ。

ト　藥を茶碗へ明けて持つて行かうとする。半兵衞驚ろき

半兵　そちやお千代ではないか。どうして爰へ出て來やつた。

千代　どうして來たか。わたしや知らぬわいなア。

ト　ついと屛風の内へ入る。半兵衞、いよ／＼合點のゆかぬ思ひ入れ。

半兵　ムウ。おかよどの、平左衞門さまは御病氣でござりまするか。

かよ　アイ、病氣さうでござりまする。

半兵　存じませいで、お尋ねも申しませなんだ。左樣ならちよつと、私しがお見舞ひ申しませう。

ト　立つて行かうとする。

かよ　ア丶、モシ／＼、お前はお醫者樣かえ。

半兵　エ。

かよ　お醫者さんでなくば、なんの彼處へござんしても、役にも立たぬ事でござんすわいなア。

半兵　ムウ。女房お千代が、この半兵衞に逢うて、挨拶のないのといひ、おかよさまの今の御挨拶。どうも合點が行かぬ。

かよ　なんの合點の行かぬ事がある物かいの。お千代がこなさんに挨拶せぬは、どうした事やら、こなさんの心に

聞いたがよいわいの。アタ阿房らしい。

半兵　ムウ。お千代が挨拶せぬのを、この半兵衛が心に聞けとは、こりや仔細なくては叶はぬ事ぢやわい。

　ト半兵衛、手を組んで思案して居る。

平左　ア、、達者な時は夜の長いより、日の長いがよけれど、煩らうて居ると怠屈でならぬ。お千代、其處らに本があらう。讀んで聞かせい。

千代　アイ／＼。

　トお千代、本を取りに立つ。

平左　姉や、お主も爰へ來て本を聞かぬか。

かよ　ハイ／＼、わたしも爰から承はりませう。

　トお千代、本を持つて來て

千代　サア、本を持つて參りました。

平左　早う讀んで聞かしやれ／＼。

千代　アイ／＼。女今川。天の網島、徒然、平家物語。どれを讀みませう。

平左　その平家物語がよからう。昨夜讀みかけた處に栞が入れてあらう。その祇王の段を讀んで聞かしやれ。

千代　アイ／＼……ほんに紙が入れてござりますわいな……母の刀自申しけるは、天が下に住めるもの、一人も入道の仰せに背くものなく、例へ千年萬年と契るとも、遂に別るゝ事こそあれ、

　トお千代、半兵衛が方へ思ひ入れ。

例へ千年萬年と契るとも、遂に別るゝ事こそあれ。

　トしやくり上げて泣く。

平左　物に譬へて見やうなら、千代は祇王、八百屋半兵衛は清盛入道。その清盛が心が變つて、追ひ出したは憎い清盛。養子合せに遣つた時、祝言濟むとこの父が、不調法な娘を進上いたし、定めて氣には入るまいけれど、この父を不便と思うて、面倒見てやつて下されいと云うた時、オ、去るまい、お氣遣ひなされまするな、御臨終の時は、先輿は御惣領半六どの、後輿はこの半兵衛、眞實の子を持つたと思し召し下されい、イヤ今でこそは八百屋半兵衛、以前は山脇十藏が弟、同苗半兵衛、見捨てる事ぢやござらぬと云うた時は、嬉しうて／＼、物頭代官の外、一生下げぬこの頭を、下げたが口惜しいわえ。おのれが企みを隱さんと遠州へ行て、後で姑に去らせる、その位の事は、何もかも勝手ぢやわい。

半兵　左樣ならお千代は、母人の氣に入らぬで、去られて參りましたか。コレお千代、其方も聞えぬわいの。なぜ

さう云ふ事なら、最前わしに斯う〳〵云ふ譯ぢやと、云うては聞かせぬぞえ。いま平左衞門さまのお詞。お千代を申し受けまする時仰しやつた事、忘れたかとの仰せ。なんの忘れませう、この度のお千代の不縁、私しは遠州へ參り留守の事。さら〳〵存ぜぬ儀でござりまする。と申してからが、申し譯にもなりませぬ。私しも以前は武士の果。平左衞門さまへの申し譯には、それよ。

ト切腹しようとする。お千代、おかよ驚ろき留める。

兩人　マア〳〵、待たしやんせ〳〵。

半兵　イヤ〳〵、平左衞門さまへの申し譯。留めまい〳〵。

千代　モシ〳〵父さん、どうぞ半兵衞さまの切腹を、

兩人　お留めなされて下さんせいなア。

平左　イヤ〳〵、半兵衞の切腹、おりや留めまい。この處で半兵衞が切腹して、お千代を去つた姑への面當てに、死んだと世間へ噂させたら、半兵衞は孝行者ぢやと、さぞ人が褒めるであらう。おりや爰から半兵衞が切腹、見物しようわい。

ト平左衞門、居直る。半兵衞、この臺詞を聞き、思ひ直して

半兵　過まりました。後先の辨まへもなく、平左衞門さまへの申し譯ばかりに、切腹いたさうと申したは、私しが不調法。モシ、おかよさま、なんとお千代を、もう一度、半兵衞へお返しなされて下さるやうに、平左衞門さまへ、お願ひなされて下さりますまいか。

かよ　そりや、わたしがどのやうにも、父さんへは行つて云はうけれど、もう、この上、どのやうな事があらうとも、お千代を去る事はなりませぬぞえ。

半兵　イヤモウ、例へ如何やうな事がござりましても、去る事ぢやアござりませぬ。死にましても、屍も戻す事ぢやアござりませぬ。

千代　アレ、半兵衞どのが、あのやうに云うてぢやわいなア。どうぞ父さんへ、好いやうに願うて下さんせいなア。

かよ　イヤモウ、圓うなる事ぢやもの、どのやうにもわしが、父さんへは願うて見ようわいの。

半兵　左樣ならおかよさま、どうぞよろしうお頼み申しまする。

トおかよ、平左衞門が前へ來り

かよ　只今、お聞きなされました通りでござりまする程に、どうぞお千代を、半兵衞どの〻方へ、今一度。

三人　お返しなされて下さりませ。

平左　半兵衛のその心なら、なんの否やを云ひませう。思ひ思うた聟の半兵衛、必らず娘を見捨てゝ下さるなよ。

半兵　お氣遣ひなされまするな。塵末來在、去る事ぢやアございませぬ。

平左　オヽ、嬉しうござる。それでわしも落ちつきました。

かよ　思ひの外の父さんのお詞。わたしも安堵したわいの。これにつけても最前云うた事が、半兵衛どのゝ手前、恥かしいわいの。

半兵　なんの〳〵、お千代が不緣、お腹立ちの處へ、何も存せず參り合せたこの半兵衛、さう仰しやつては、却つて迷惑いたしまする。

千代　そんなら半兵衛どの、わたしやお前と一緒に、行かうかいなア。

半兵　それ〳〵、もう歸りませう。サア〳〵、支度しや支度しや。

千代　戻るは何より嬉しいが、また母さんが。

　ト屈托の思ひ入れ

半兵　ハテサテ、これから其方を仲人の、伊兵衛どのゝ處へ預けて置いて、大家の太郎兵衛さまを頼んで、阿母の手前は、好いやうに云はうわいの。

千代　そんなら父さん、わたしやモウ、半兵衛どのと一緒に參りますぞえ。

平左　そんなら行きやるか。

千代　もう、お暇申しまする。

平左　コレ〳〵半兵衛、其方に離れぬを嬉しがつて、現在親の病氣も構はず、いそ〳〵して居るあのお千代、足らはぬ奴ゆゑ、わしが苦勞になりまする。必らず見捨てゝやつて下さるな。

半兵　お氣遣ひなされますな。最前も申す通り、見捨てる事ぢやござりませぬ。

平左　おかよ、ちよつと二人へ杯事がしたい。杯持つておぢや。

かよ　ハイ、シタガ、それには及びますまい。

平左　ハテ、銚子杯持つておぢやいの。

かよ　ハイ。

　トうぢ〳〵して居る。

平左　なんぢや。酒がないのか。

かよ　酒の取つたが、ござんせぬわいな。

平左　酒がなくば、ないと云うたがよいわい。ナニ半兵衛に遠慮する事があるものか。なくばその銚子へ、水なと入れて持つておぢやいの。

かよ　お前も忌はしい事仰しやりまする。水杯が、どうしてマア。

平左　ハテ、水でもよいわいの。

かよ　あれ聞かしやんせ、お年寄りの片意地。ドレ／＼、お氣任せに致しませう。

平左　早う持つておぢや。

かよ　アイ／＼。

　トおかよ、銚子へ水を入れて持つて來る。平左衛門、一つ受けて半兵衛へ献す。

半兵　平左衛門さまには、お年の上の御病氣。

平左　死なばこれが末期の水。

半兵　未來ははつく、どくしゆの水。

平左　めでたい／＼……汲みても盡きず、呑めども變らぬ。

四人　水杯。

平左　ハヽヽヽ、ハヽヽヽ。サア、もうよい／＼。行きや行きや。

半兵　左樣なら、隨分お大事になされませ。

　トお千代、半兵衛、立ち上がる。

平左　アヽ、コレ／＼、おかよ、もうお千代が再び歸らぬやうに、門火焚いてやりやいの。

かよ　お前も、いろ／＼氣にかゝる事を、仰しやりますわいなア。

平左　ハテ、門火を焚くは、婚姻の故實ぢやわいの。

かよ　ハイ／＼、左樣なら、焚きますでござりませう。

　ト火鉢を取つて來り、火を打ちつけ、門火を焚く。

　煙も細き人の身の上。

千代　嫁入る時の白無垢も、死出の門出も白小袖。

半兵　嫁入る時も輿に乘り、死ぬる時にも輿に乘る。

千代　嫁入りも。

半兵　死ぬも。

三人　この門火。

　ト銚子の水を、火立ちへかける。

平左　灰になつても、戻るなよ。

　ト平左衛門、運び出て、バツタリと下に居る。お千代ハツとして

千代　父さん。

ト寄らうとする。半兵衛、引留める。

かよ　コレ。

トおかよ、門口を閉める。何れも途端よろしく

しやうし幕

中幕　新靱八百屋の場

役名―八百屋半兵衛。八百屋仁右衛門。同女房、おつや。山脇十蔵。甥の嘉十郎。家主、太郎兵衛。講中、安治川の権三。同、信濃町の長兵衛。同、夕坂の利八。同、合羽屋六右衛門。下女、お竹。半兵衛女房、お千代。

本舞臺、三間の間、八百屋見世の體。上の方寄せ佛壇押入れ、眞中に暖簾口を取り、下の方に乾物をいろ／＼並べたる棚を取りつけ、小壁に提灯を掛け、門口に大根人参、蓮根竹の子、長芋牛蒡、その外いろ／＼の青物を飾り、幕の内より半兵衛母おつや、隨分憎體なる裝の拵らへ、絹やつし羽織を着て、巾着に鍵を入れ、腰に付けたる形にて、算盤を振り上げ、八百屋嘉十郎を叩かうとしてゐる。これを半兵衛、やつし着流しの形にて、門札を腰に提げ、おつやを留めて居る。下の方に嘉十郎、やつし着流し、前垂勇みの形にて立ちかゝつて居る。これをお竹、前垂れ下女の形にて嘉十郎を宥め居る。眞中に八百屋仁右衛門、やつし着流し、親仁の拵らへにて兩方を宥めて居る見得。在郷唄にて幕明く。

つや　留めまい／＼。

半兵　マア／＼、お待ちなされて下さりませ。

仁右　コリヤ／＼、双方ともに、マア／＼、待つた／＼。

嘉十　爰放せ／＼。

たけ　それ／＼、マア／＼、静かになさんせいなア。

つや　イヤ／＼、旦那どのも半兵衛も、留めまい／＼。

仁右　コレサおつや、云ふ事があれば、この仁右衛門が云ふわいの。それにこなたは何ぞと云ふと打ち打擲。コレコレ嘉十郎、お主もマア、どうしたものぢや。なんであらうと、この伯父が留める。マア／＼、鎮まつたがよいわいの。

つや　イ、ヤ、こなさんの構うた事ぢやアない。あの悪根性、叩き直してこます。其處、退かつしやれ／＼。

半兵　モシ〳〵、私しがあやまりました。マア〳〵、御料簡なされて下さりませ。

嘉十　イヤ、其方が料簡しても、おれが合點しないぞ。

たけ　コレイナア、旦那さん方も、あのやうに仰しやつておぢや程に、マア〳〵、靜かに云うたがようござんすわいなア……あなたも、靜かに仰しやりませいなア。

嘉十　如何にこの嘉十郎が、爰の屋體骨の居候ふだと云つて、あんまり安くしやアがる、はッつけ婆アめ。この握り拳で、叩きのめしてくれべい。

つや　ソレ、その口を、この算盤で叩き直してやらう。

半兵　モシ〳〵、世間へ聞えましても、外聞が惡うござりまする。お靜かに仰しやりませ。

仁右　さうサ〳〵。靜かに云うても解る事ぢや。マアマア、その算盤を此方へ寄越さつしやい。

　トおつやの持つて居る算盤を、無理に引ッ奪り其處に置く

たけ　お前もマア〳〵、下にござんせいなア。

　ト嘉十郎をやう〳〵引据ゑる。

つや　靜かに云へなら、なんぼなりと靜かに云うて聞かせてくれう。半兵衛お竹も聞いてたも。あらう事かあるまい事か、明日は前の旦那、あの嘉十郎が親仁、仁右衛門どのゝ命日。今宵は大事の逮夜なり、宵庚申なり、精進せいと云うて置いたに、あの嘉十郎め、他人でもある事か、現在親子の身を以て、肴を食ふやうな事があるものか。その上に酒が好きで、骨牌とやら、めくりとやら、せにやならぬと云うて、あの寶溜めを持つて行かうと云ひ居るゆゑ、あんまりぢやと思うて叩き直すのぢや。半兵衛の前も氣の毒ぢやわいの。サア、旦那も、退いた退いた。

　トまた算盤を取つて立ちかゝる、半兵衛、留めて

半兵　御尤もでござりまする。マア〳〵、お待ちなされまし。

嘉十　伯母を殺せば親殺しも同然。梅田で磔刑にかゝる分の事。思ひつきでもない今夜の精進。死んだ伯父御が鱠や鱧になりやアしまいし、肴を食つても大事ないわい。酒ならたつた五升か七升、寶溜めなら二把か三把。博奕が好きで打ちに行くのだ。どうで爰の内の屋財家財、この嘉十郎さまが貰ふぢやなし、何もそんなに苛められる事アない。熊鷹婆アめ、それへ出やアがれ。伯母と甥との死別れ、その算盤で叩き殺してくれうフ。

つや　アレ、あの口が憎いわいの。

仁右　コレサ〳〵、構はつしやるな。あの嘉十郎が酒は、悪い酒ぢやと云ふ事は、こなたも兼ねて知つて居るではないか。あのやうに悪體云ふも、酒が云はせる事ぢやと思うて、腹は立たうが、先仁右衛門どのゝ逮夜でもあれば、マア〳〵、料簡さつしやれ〳〵。

たけ　旦那様の仰しやりまする通り、大旦那様のお逮夜でござりまする程に、嘉十郎さまも、滅多な事仰しやらぬがようござりまする。

嘉十　親仁の逮夜を思ふ位なら、可哀さうにお千代どのを、半兵衛どのゝ留守に、姑去りにする事はない。悪根性の突ッ張ッて居るしやッ面を、叩き直してやるのだ。爰放せ〳〵。

たけ　モシ〳〵、滅多な事をなされますな。

つや　嫁のお千代を去なしたは、身上を大事に思うてからの事。それをおのれに云はるゝ事があるものか。聞けば聞く程腹の立つ事を吐かしやアがる。この算盤で叩きのめしてくれる程に、サア、退いた〳〵。

ト おつや又、叩きにかゝる。半兵衛、留める。嘉十郎、立ちかゝるを、仁右衛門留める。これより両方立ちかゝり、嘉十郎、店の青物を無性に投げ散らす。これに構はず、てんつゝになり、花道より山脇十蔵、ぶッ裂き羽織、野袴、柄袋、引肌を掛けたる大小を差し、三度笠を持ちて出で来る。後より夜働らき狸の足音、雲助の形にて繪符の付きたる両掛けの荷を、竹にて擔ぎ出て来て

足音　モシ〳〵、新靱、油掛町は爰でござりまするぞえ。何處をお尋ねなされまする。

十蔵　身共が尋ねる處は、爰ぢや〳〵。

足音　そんなら、爰の八百屋でござりまするか。

十蔵　爰ぢや〳〵。

ト 十蔵、足音、本舞臺へ来るまでに、嘉十郎を無理矢理に、仁右衛門、お竹、引き摺つて暖簾口へ入る。嘉十郎、生酔のこなしにて、悪體を云ひ〳〵引摺られて入る。半兵衛、おつやを宥める。

半兵　マア〳〵、御料簡なされませ。

つや　あんまりぢやわいの〳〵。

半兵　先づ〳〵、お下にござりませ。

十蔵　卒爾ながら、ちよつと承はりたい。八百屋仁右衛門どのは、これでござるかな。

半兵　八百屋仁右衛門は手前でござりまするが、左様仰せられるあなた樣は、どなたでござりまする。

十藏　手前事は今川の家中、山脇十藏でござる。半兵衛御在宿でござるかな。

半兵　さう仰しやるは、兄者人ではござりませぬか。

十藏　これは〳〵半兵衛、よう在宿おしやつたな。

半兵　イザ〳〵、これへお通りなされませ。

十藏　コリヤ〳〵、其方にもおッつけ賃錢遣はす間、暫らくこれにて休息いたして居つたがよい。

足音　ハイ〳〵、左樣ならば、一服下さりませう……モシ、このお荷物は、其方へお渡し申しまする。

ト荷物を出す。半兵衛、捨ぜりふにて、この荷物を片付ける。足音、摺火打ちにて、下の方に煙草をのんで居る。

半兵　モシ〳〵、母者人、遠州濱松から、兄貴が見えられました。

つや　ヤレ〳〵、それはようお出でなされましたな。コレコレお竹、早くお茶でも上げぬかいの。

たけ　ハイ〳〵、只今上げまする。

トお竹、暖簾口より、茶臺に茶を持つて來る。十藏取つて

十藏　これは〳〵、構ひ召さるな……先づ以て御家内御別條なうて、重疊に存じまする。

半兵　兄者人にも、道中御健勝でお着きなされ、めでたう存じまする。早速ながら承はりませうは、思ひも依らぬ今日のお出で、如何やうなる御用にて、この大阪へはお上りなされました。もしや親仁樣の御病氣、萬一の事もござりましたか。心元なう存じまする。

十藏　イヤ〳〵、氣遣ひおしやるな。親人にも段々と御全快。身共がこの處へ參つたは、外の事でもない。半兵衛、其方が事について、わざ〳〵參つた。

半兵　合點參りませぬ。私しが儀に就いて、兄者人のお上りとは。

十藏　その仔細と云ふは、先日其方、遠州濱松へ、親人の病氣見舞ひの爲に來りしが、歸阪の後、親人仰せらるゝには、我れ老眼にて覺束なけれども、彼れが面體に劍難の相見ゆるに依つて、何とやら心がゝり。今その行く末を案じられ、この十藏へ餘儀ないお頼み。半兵衛これへ養子の折節、町人なれども男子の嗜なむべきは一腰と、主君義明公より下し置かれし、遠江の國の住人、信平が

打つたるところの差添へ、仁右衞門手づから、其方へ譲り遣はせしとの事、刃物は人の性に依るものなれば、彼れこれ御身が身の上を思し召され、藏屋敷の御用を幸ひ、この所へ立寄り、その一腰を預かり參れとの、親仁樣のお頼み。親子の情と云ふものは、なんと味なものではないか。

半兵　それは有り難い親仁樣のお志し。先達て讓り受けたる拜領の一腰、町人の半兵衞には、不相應なる身の寶と、かね／＼存じて居りました。殊に劍難の相を御覽なされまして、お預かり下ざれうとの儀でござれば、何がさて差上げまして、お心を安めまするでござりませう。

十藏　早速の承知、過分々々。

半兵　先づ／＼、緩りと御逗留なされませ。

十藏　最前より、ろく／＼御挨拶も申さぬが、おつやどのには、久々にてお目にかゝりました。

つや　左樣でござりまする。十藏さま、ようこそお出でなされました。

十藏　時に半兵衞、先程から見て居るに、お千代が見えぬが、如何いたした。

　ト聞かぬ振りして居る。

半兵　お千代儀は、何でござりまする。

十藏　如何いたした。

半兵　お千代は、ナニサ、それ／＼、今日は御存じの通り、先の仁右衞門の逮夜でござれば、寺詣りに參じました。もう、おしつけ歸りませう。

十藏　オヽ、寺詣りとは奇特々々。

足音　モシ、旦那え。わしやアもう、歸りたうございまする。

十藏　成る程／＼。然らば賃錢を拂ひ遣はさうが、樣子に依つてこの處より、藏屋敷まで頼む事もあらう程に、ちつとの間待つて居るまいか。

足音　そんなら何處ぞで、グッとやらかしたいものだが。

たけ　あの納屋の物置がよいわいな。アレ／＼、彼處へ行かしやんせいなア。

足音　ドレ／＼、あれで一寐入りやらかしますべいか。

　ト狸の足音は下座へ入る

つや　十藏さまにも、御時分がようござりませう。半兵衞や、出來合ひを、上げたがよいわいの。

十藏　イカサマ、仁右衞門どのにも面會いたし、お話し置きたい事もあれば、然らば奥にて、御雜作にあづからう

か。

半兵　イザ兄者人、斯うお出でなされませ。

つや　緩りとお話しなされませ。

十藏　後刻お目にかゝるでござらう。

半兵　サア、お出でなされませ。

ト唄になり、十藏、半兵衞、奥へ入る。

たけ　先刻から申しませうと存じましたが、阿母様、今朝も今朝とて、大家を始め講中のお方がお出でなされまして、何やらお話し申したい事があると云うてゞござりましたが、お前様がお留守ゆゑ、お歸りなされましてござりましたわいなア。

つや　大家どのを始め、講中の衆が話したい事があるとは、てつきりと嫁のお千代めが事でがなあらう。どのやうな事があつても、此方の半兵衞にちつと、譯があるゆゑ、内へ歸す事はならぬわいの。

たけ　おやと申しましても、折角お出でなされましたものを。

つや　役にも立たぬ事を云ふわいの……役に立たぬと云へば、それ／＼、此方の内に於ても役に立たぬは、あのお千代めが雛の道具。押入れから出して置く程にの、返して遣るも腹が立つ。いつその事に賣つてしまうてやらうわいな。

たけ　モシ／＼、お雛様は、祝ひの物でござりますわいなア。

つや　喧ましいわいの。其方は其處らを、片付けたがよいわいな。

たけ　ハイ／＼。

つや　ドレ、雛の道具を賣つてやらうか。

ト押入れより、雛の入れたる葛籠を引き出す。此うちお竹、其處らを片付ける。てんつゝになり、花道より太郎兵衞、古い火事羽織を着たる家主の形にて、念佛講の帳面を持つて出て來る。その後よりお千代、着流し、前帶の形にて、丸括け、腰帶を締め、重箱を風呂敷に包みて持つて出て來る。これに續いて、安治川の權三、信濃町の長兵衞、夕坂の利八、合羽屋六右衞門、いづれも、やつし着流し、木綿羽織の形にて出て來り、花道にて

六右　モシ／＼、大家さま／＼。其やうに急いでござりましても、八百屋の夫婦は寺詣りから、まだ歸りますまい。

皆々　さうでごんせう〳〵。
太郎　イヤ、もう歸られたでござらう。今日はとも〳〵に同行衆、あの阿母を云ひすくめて、このお千代どのの事を、どうぞ料簡して、内へ歸すやうにしたいものではござらぬか。往生ずくめにするも、念佛講中のよしみ。この家主の太郎兵衞も、どうなりと云うて、歸す心でござるわいの。
權三　サア、わしらも及ばずながら、詫び事して見ませうわいの。
長兵　それ〳〵。シタガ、あの八百屋の阿母も、あんまり邪慳な人でござる。
利八　御亭主の半兵衞どのは旅留守、仁右衞門どのをば袖にして、お千代どのを出すと云ふやうな事が、あるものでござるかいの。
六右　それ〳〵、世間に嫁を虐める姑も澤山あれども、あのやうなむづかしい姑は、又とござらぬわいの。
千代　どなたも〳〵其やうに、わたしが事を厚うお世話なされて下さんす。此やうな有り難い事はござりませぬ。あの姑御のお氣に入らぬも、みんなわたしが惡るさから。主の惡い事は少しもござりませぬわいな。半兵衞どのさへ、内へ置いてやらうと申す事なら、どのやうにも辛抱いたしまするでござりませう程に、幾重にもお詫びなされて下さりませいなア。
太郎　エヽ、イカサマ、器量がよけりや、挨拶も發明な事でござるわいの。あのむづかしい阿母を、むづかしいとも云はず、みんなわたしが惡いとは、なんと同行衆、氣恥かしい人ぢやござらぬか。
六右　それ〳〵、此やうな嫁を出すと云ふやうな、酷い事はござらぬわいの。時にお千代どの、その持つてござつた風呂敷包みは、何でござるぞ。
千代　ハイ、この持つて參りましたものは、あの姑御へ何かと存じまして、お土產に持つて參りまするわいな。
利八　成る程〳〵、見掛けからあの阿母には、摑み面が張つて居ますから、鼻藥にはようござるわいの。
皆々　さうとも〳〵。
太郎　コレ〳〵同行衆、なんのかのと云ふうちに、夜に入れば惡うござる程に、サア、行きませう〳〵。
皆々　それ〳〵、行きませう〳〵。
太郎　サア〳〵、太郎兵衞に附いて、ござれ〳〵。
　ト矢張りてんつゝにて、本舞臺へ來る。太郎兵衞、咳

拂ひして
大家の太郎兵衞でござる。御亭主にはお宿でござるかの。

たけ　ハイ〳〵、太郎兵衞さまでござりまするか。モシモシ旦那さんえ。大家樣がお出でなされました。

半兵　オイ〳〵、太郎兵衞さまがお出でなされたか。ドレドレ。

ト暖簾口より半兵衞出て來て

これは太郎兵衞さま、ヤレ〳〵、ようお出でなされました。サア〳〵、お入りなされませ。お前お一人でござりまするか。

太郎　イヤ〳〵、今日は月並の念佛講で、講頭の六右衞門とのが、夕坂の利八どの、安治川の權三どの、信濃町の長兵衞どの、同行衆を連れ立つて來ました。よう內にござりましたの。

半兵　これは〳〵、六右衞門さま始め、どなたもようお出でなされました。マア〳〵お入りなされませ。

六右　半兵衞どの、御免なされい〳〵。サア〳〵、同行衆、入らしやれ〳〵。

皆々　そんなら、許さつしやりまし。

半兵　サア〳〵、これへ〳〵。

皆々　ドレ〳〵。

ト太郎兵衞六右衞門を始め、皆々內へ入る。お千代、怖々內へ入り、皆々の後に小さくなつて居る。

半兵　モシ〳〵、親仁樣、大家樣がお出でなされました。

ト暖簾口へ來て呼ぶと、奧にて

仁右　オイ〳〵

ト云ひながら出て來て

これは〳〵太郎兵衞さま、ようお出でなされました。

太郎　さて〳〵、この間から何時參つても、お留守で逢ひませぬ。いかうお詣りが精が出ますの。

仁右　されば、此やうに物云うて居ても、今にも知れぬは年寄りの身の上。今日あつて明日ない命。寐ても起きても、この事のみでござりまする。

ト珠數を出して見せる。

太郎　その事〳〵。同行衆は一蓮託生、それゆゑに連れ立つて來ましたわいの。

仁右　イヤ、どれも〳〵、ようござりました。

ト此うちおつや、腹立ちし思ひ入れにて、じろ〳〵見ぬ振して居て、この時不精〳〵

つや　どなたもようお出でなされました。
六右　これは阿母、いつも〳〵達者でよい事でござる。風邪が流行りまするが、どうでござるの。
つや　仕合せと流行り風も、佛さまのお庇で引かぬさうにござりまするわいな。
權三　それは好い事でござる。仁右衛門どのも半兵衛どのもお達者で、阿母にも、さぞ〳〵嬉しうござらうの。
つや　左樣でござりますとも、小さい時から育てました半兵衛、杖にも柱にも、あの子ばかりが便りでござりますわいの。
皆々　さうであろ〳〵。
つや　今日は又、思ひも寄らぬ皆樣のお出で。連合ひや半兵衛に、なんぞ御用でもござりまして、お出でなされましたかえ。
太郎　イヤ〳〵、御亭主でも、半兵衛どのでもござらぬ。こなさんに逢うて、同行衆のお頼みがござるわいの。
つや　講中のお頼みとは、勸化の事でござりまするか。
太郎　イヤ〳〵、其やうな事ではござらぬ。話しと云ふのはなんでござる。外の事でもござらぬが、内方の嫁御、お千代どの丶事でござるわいの。

つや　アノ、お千代が事でお出でなされましたか。
　トむつとする思ひ入れ。
太郎　左樣々々、段々の話しも聞きましてござる。定めし阿母の氣に入らぬ事ばかりでござらうが、半兵衛どのと仲さへ好ければ、何とか料簡して、内方へ呼び戻しちやア下さるまいか。
つや　これは〳〵、半兵衛を半兵衛と思し召して、よう御挨拶なされて下さりまする。大概の事なら、随分不承も致しませうが、あのお千代が事は、どうも内へ入れ憎うござります依つて、必らず〳〵、お世話なされて下さりまするな。
太郎　サア、さうではござらうが、其處をどうぞ
皆々　料簡しては下さるまいか。
つや　イエ〳〵、もう仰しやつて下さりますな。今宵は先の旦那の逮夜でもござりまするゆゑ、料簡のなる事なら、太郎兵衛さまを始め、同行衆の仰しやる事でござりまするに依つて、どうなりと致しませうが、お千代が事は、どうもなりませぬわいな。
太郎　サ、其處でござるわいの。この太郎兵衛も仁右衛門どのとは懇意の仲。湯灌までした佛の事。今日は逮夜ち

やと思うて詫び事に來たのぢや。どうあらうとも料簡してもらはねばならぬ。マア／＼、なんであらうと、お千代どのに、逢うてやつて下さい／＼。

ト云ふうち半兵衛は手を組んで俯向いて居る。お千代は涙を隱して、もぢ／＼して居る。

六右　それ／＼、どうぞ料簡してもらひませう。マアマア、大家様、なんであらうとお千代どのを、其處へ出すがようござる、

太郎　それ／＼。マア／＼、お千代どの、太郎兵衛が居ます。怖い事はない。爰へござれ／＼。

ト太郎兵衛立つて、お千代をおつやが前へ引き出す。お千代、重箱を怖々おつやが前に置き

千代　小さい時から御恩になりましたる私し、心の付きませぬ生れ付きと、どのやうにお叱りなさらうとも、また御折檻なされませうとも、ちつとも大事はござりませぬ。せめて朝夕お側に居りまして、起臥しなりとも致したうござりまする程に、奉公人ぢやと思し召しまして、内へお入れなされて下さりませうならば、有り難う存じます……嫁ぢやの娘ぢやのと思し召しましたならば、お腹もお立ちなされませう程に、年季者ぢやと思し召しまして、御料簡なされて下さりませい。これは又、明日は仁右衛門さまの御命日ぢやと存じまして、わざと、いし／＼を拵らへましてござりまする程に、お上がりなされて下さりませうならば、有り難うござりまする。

トおつやムツとして

つや　ヤイお千代、其方は誰れが許して爰の内へは來たのぢややい。ソレ、其やうに太い根性ぢやに依つて、イケ圖々と此方の内へ來て、つべこべとしやべつた程にの。其方に内へ歸れとは、半兵衛が云うたのか。わしを親ぢやと思ふ位なら、今まで内は揉めぬわいの。憎いと思ふおのれにする挨拶はないぞ。コレ、この重の内は、こりや何ぢや。此やうな物が食べたけりや、わしがこの手で拵らへて食べるわいの。これには大方、毒でも入れて置いたであらう。怖やの／＼。

千代　なんの勿體ない、其やうな事を致しませう。

つや　こんな物は、犬にでも食はせてしまひ居らう。

ト重箱を取つてお千代に打ちつける。中より團子、方方へこぼれ落ちる。お千代、後へ寄り涙を流し、こぼれてある團子を拾ひ集め、重箱へ入れる。おつやが前にある團子をば取り兼ねるこなし度々ある。

サア、たつた今出て行かぬか。長居をしたら叩き出してくれうぞ。キリ〳〵と出てうせう。

トお千代、おろ〳〵して居る。皆々氣の毒なる思ひ入れ。

仁右　コレサおつや、わが身はマア、どうしたものぢや。あのお千代を爰へ呼び戻したは、わしぢやわいの。オヽ、この仁右衛門が同行衆を頼んで連れて來てもらうたのぢやぞ。主のわしが、こなたにあやまつて居る理窟はないぞ。こなたがあんまり無得心なが氣の毒ぢやと、大家樣や同行衆が深切づくで、世話燒かるゝものぢやわいの。

太郎　それ〳〵、お千代どのを爰へ連れて來たは、わしでごんす。この太郎兵衛が同道して來ましたわいの。可哀さうに、其やうに云ふ事はござらぬわいの。仁右衛門どのゝ顏も立つ事ぢや。わしらも幾重にも詫びる氣ぢや程に、双方に免じて、どうぞ料簡して下さいれいの。

つや　いんや、なりませぬわいの。こなた衆の身上は、高の知れた二貫目か三貫目の暮らし方。此方の内は家屋敷が三ケ所、店の商ひは町内第一番。内證も堅い八百屋仁右衛門が身上の、勝手に合はいで叩き出した嫁のお千代。呼び戻してよい事なら、なんの外聞惡う去りませうぞいの。サア、キリ〳〵連れて去んで下されいの。埒が明かぬと、こなた衆も叩き出さにや置かぬぞ。

太郎　コレ阿母、その挨拶は、どうも太郎兵衛、その意を得ませぬわえ。わしもこの町内では、間口十二間の家主役もして居る、この太郎兵衛を、十把一からげに、云うてのけられる男でもごんせぬぞや。連れ立つて來た講中の手前もあるもの。喧嘩を買はうわいの。イヤ、買はうわい。

ト膝を立て直す。

皆々　成る程、これは大家樣のが至極尤も。爰の阿母、今の挨拶は、あんまりでござるわいの。

太郎　家主の太郎兵衛を馬鹿にしやると、料簡せぬぞや。あんまりぢやわいの〳〵。

ト云ふうち、お竹、茶を酌んで持つて行き

たけ　マア〳〵、お茶を一つお上がりなされませ。御存じの通りの主の氣質でござりますれば、御堪忍なされて下さりませいなア。どうぞあなた方の御挨拶で、お千代さまを、お歸し申したうござりまするわいなア。つんと困つたものでござりまするわいな。

ト此うちおつや、棕梠箒を持つて立ち上がり

つや　コレ〳〵お竹、其やうに愛想する事はないわいの。わしが内で、わしが嫁を、幾度去らうと要らぬお世話ぢや。長う居やつたら、この棕梠箒で、こなた衆ともに、叩き出すぞや。

仁右　さうはなるまいわいの。わしが内でわしが嫁を去るのぢやとは、あんまり顕がえら過ぎるぞや。この家はわしが内ぢやぞ。オヽ、この仁右衛門が内ぢや程に、こなたの自由には、なるまいわいの〳〵。

太郎　こりやモウ、料簡がならぬわいの。大家の太郎兵衛を、叩かれるなら叩いて見い。

つや　叩けと云うたら叩いて見せう、キリ〳〵其處を立たいでの。

ト棕梠箒を持つて立ちかゝる。半兵衛これを留めて

半兵　モシ〳〵、滅多な事をなされまするな。大家様でござりまする。

つや　いんや、其處退いた〳〵。大家さまでも名主様でも、怖い事はない。お千代めを一緒に、叩き出してくれるのぢや。

皆々　コレ〳〵お千代どの、早く外へ、出さつしやい出さつしやい。

仁右　最前は嘉十郎を留めたが、今度はモウわしが料簡がならぬわいの。わしが相手ぢや。イヤ、わしが叩かうわいの。

ト鉢卷を締めて立ちかゝる。

たけ　モシ〳〵旦那様、マア〳〵、御料簡なされませなされませ。

トお竹、仁右衛門を留めて居る。

太郎　イヤ、わしも叩かれうわいの。オヽ、太郎兵衛が叩かれうわいの。

ト同じく立ちかゝる。

皆々　モシ〳〵大家様、料簡さつしやれ〳〵。

ト六右衛門始め皆々太郎兵衛を取さへる。おつや、半兵衛を拂ひ退けて太郎兵衛を叩きにかゝるゆゑ、六右衛門留める。仁右衛門、肌を脱ぎ立ちかゝるゆゑ、皆皆仁右衛門を取さへる。これより替る〳〵皆ごつちやになり立ち騒ぐ。

太郎　叩かれうわいの〳〵。

仁右　同行衆、退かつしやい〳〵。

皆々　マア〳〵、料簡さつしやれ〳〵。

つや　半兵衞も、留めまいぞ。

半兵　マア〳〵、お待ちなされませ。皆の衆、大家樣を連れ申して、お歸りなされて下さりませ。お竹も親仁樣を、奧へなと連れ申せ。

皆々　マア〳〵大家樣、此方へござりませ〳〵。

たけ　旦那樣も、マア〳〵、奧へ、お出でなされませい。

太郎　同行衆、退かつしやい〳〵。

仁右　お竹も、留めるな〳〵。

ト太郎兵衞、仁右衞門、皆々を突き退け、兩方よりおつやにかゝる。仁右衞門をお竹留める。太郎兵衞を六右衞門留める。皆々立ちかゝり、無理矢理に門口へ連れて出る。おつや、箒を持つて門口へ出ようとするを半兵衞留めて居る。

つや　留めまいぞ〳〵。

半兵　マア〳〵、御料簡なされませ〳〵。

太郎　サア、この太郎兵衞を、叩かれるなら叩いて見ぬかい。よう安穩でお身達に叩かれうぞ。十年後に阿波座堀で出入りした藤で、料簡せぬのぢや。ちつと膽がえらいのぢやぞ。アタ怪體な。どうするのぢや。

皆々　マア〳〵、料簡さつしやりませ。

仁右　この仁右衞門も、女房に袖にされては、同行衆の前も外聞が惡いわいの、おのれに叩かれるうちに、この手や足は何して居やうぞ。その嫌らしい憎體などたまを、打ちひしやいでこますぞよ。

たけ　マア〳〵、御堪忍なされませ〳〵。

ト太郎兵衞、仁右衞門、大阪詞にて、無性に惡體を云ふ。皆々太郎兵衞を無理矢理に花道へ連れて行く。仁右衞門をばお竹、やう〳〵宥めて奧へ連れて行く。兩人ともに惡態をつき〳〵兩方へ入る。お千代悄れて門口に立つて居る。半兵衞、お千代が持つて來たる重箱を取上げ、置き所がなさに門口を覗く。お千代と顏見合せ、重箱を門の外へ置き、門口をしやんと閉める。兩人、思ひ入れあるべし。お千代この重箱を持つて、悄々と花道へ入る。此うち始終謠らへの合ひ方。半兵衞、暫らく默つてあたりを見て、おつやが側へ行き、手を突き

半兵　申し母者人、古めかしい事ながら、武士の家にて育ちましたるこの半兵衞。二十の歳より御面倒にあづかり一人の舅御の嘉十郎どのを差措かれて、この家屋敷八百

屋の店ともに、私しにお讓りなされて下されうとは、有り難いと申しませうか、冥加ないと申しませうか。五臟六腑に泌み込みまして、少しも仇には存じませぬ。その大恩を受けましたる母者人の、お氣に入りませぬ女房お千代、この半兵衞が暇を遣はしましてこそ、私しが孝行にもなりませうが、思ひも依らずこの度、本國遠州へ參りましたるその留守にて、八百屋の半兵衞が嫁を、あなたがお憎みなされて、連れ添ふ夫にも構はず、姑去りにしたなぞと、世間で申されましては、十分お千代が致し方が惡いにも致せ、判官贔屓の世の中なれば、母者人のお名が出ますその時は、私しが身にもなつて御覽じませ。現在の母の惡名を立て、この半兵衞は生きても死んでも、この廣い大阪中へ、面出しはなりませぬやうにござりまする。爰があなたへのお願ひ。少しの間と思し召し、なんと美しう、お千代めを、お戻しなされて下さりませぬか。

ト云ふうちおつや、煙草のみながら、一向取合はぬゆゑ、半兵衞、側へ摺り寄り

イヤサ、母者人、美しうお千代めを、お歸しなされて下さりましたる上は、この半兵衞が物の見事に去り狀書いて、さつぱりと離別いたしまする。其處が男の高下、貴人高位の娘でも、夫が去るに誰れが何と申しませう。その時には彼れめも、あなたを恨むる事もなく、無い緣ぢやと存じまして、諦らめまするでござりませう。斯やう申すも母者人を、惡しざまに申させまするが口惜しさに、十六年この方、初めてのお願ひ、お叶へなされて下さらば、生々世々の御高恩と、有り難う存じまする。

ト平伏して泣く。おつや笑ひ出し

つや　ホヽヽヽ、思ひ思うた夫婦仲、嘘やてんがうはあるまいが、それ程までに云やるお主が願ひ、眞實去るのが正ならば、なんとせうぞ。せう事はない。お千代を呼び返してやらうわいの。

半兵　左樣ならば、お千代を呼び返して下さりますか。

つや　わしが心に濟まねども、去り狀書いてさつぱりと、出してしまふと云やるものを、それではならぬとは云はぬ程に、それに違ひはないかいの。

半兵　半兵衞が產土、濱松明神を誓ひ奉り、離別いたすに相違はござりませぬ。

つや　それ程までに云やる事ならば、わしも鬼にはなりともない。必らず／＼去つてたも。間に合ひ云うて騙しや

ると、コレ〳〵、この婆が咽喉笛を、庖丁でちよいぢやぞや。母を殺すか女房去るか。それは其方の心任せにしたがよい。わしは何にも構はぬぞや。ア丶、南無阿彌陀佛々々々々々々。

半兵　エ丶、有り難うござりまする。この半兵衛が去りますからは、あなたへ御苦勞はかけさすまい程に、ちつともお氣遣ひなされまするな。

つや　その心なら、早うお千代めを、呼びにやつたがよいわいの。

半兵　左樣なら此方から、呼びに遣はしまするでござりますせう。

つや　コレ、お竹や〳〵。ちやつとおぢや〳〵。

ト　お竹、ハイ〳〵と返事をしながら、奥より出て來て

たけ　なんの御用でござりまする。

つや　コレ〳〵、其方も喜ぶ事があるわいの。料簡せさいと思うたが、孝行してたもる半兵衛が詫び事ゆゑ、嫁のお千代を内へ呼び返す程に、其方早う太郎兵衛どのゝ所へ行て、お世話ながらお千代を連れて來て下されいと、早う云うておぢや。

たけ　左樣なら御料簡なされまして、アノお千代さまを、お歸しなされて下さりまするか。

半兵　早う大家樣へ行て、お千代が事を、お頼み申しておぢやいの。

たけ　ハイ〳〵、左樣ならちよつと、大家樣へ、行て參りませう。

ト小提灯をともしてお竹向うへ入る。

つや　先刻の事は間違ひぢやと、よう云うてくれいよ。

半兵　それ〳〵、よう云うたがよいぞや〳〵。

つや　あのマア竹めが、嬉しさうに行く事わいの。ドレドレ、お佛壇へお燈明を上げうか。サア、半兵衛、おぢやいの。

ト唄になり、おつや、嫌らしきこなしにて、半兵衛が手を引いて暖簾口へ入る。下座より狸の足音、以前の形にて、袋に入れし一腰を持つて出て來る。後より十藏、雪洞の灯を袖にて隱し、つけて出て來る。足音、方々見廻し

足音　犬も歩るきやア棒に當ると、寐るにやア寐られず、せう事なしに、物置の用箪笥、掻き探して見たところが、手に觸つたるこの脇差。先刻の侍ひが詞の端。近江

の國だと隣村のやうな事吐かしたが、なんでも金になりさうなものだ。こいつを持つてちつとも早く。ドリヤ、ふけるべいか。

ト脇差を持つて行かうとする。十藏、足音を引留め、立廻りにて取つて押へ、下げ緒にて括し上げ

十藏　動くな下郎め。今宵斯やうに纏月に遭ふも、庚申も罰。この一腰の手に入りしは信心の加護。盜人め、立たう。

ト唄になり、足音を引ッ立て、十藏、奥へ入る。てんつゝになり、花道より、大家太郎兵衛、小提灯を提げ、いそ〳〵。お千代、ウツトリとして出て來る。後よりお竹、風呂敷包みを抱へて出て來る。直ぐに舞臺へ來て

たけ　お千代さまには、さぞお嬉しうござりませう。太郎兵衛さまも、いかいお世話でござりまする。サアサア、お入りなされませい。

太郎　この太郎兵衛、どのやうに使はれても、お千代どのが、內方へ歸られさへすればようござる。ドレドレ、阿母に逢ひませう。コレお千代どの、なぜ其やうにしてござるぞいの。サア〳〵、浮き〳〵として、內へ入つたがよい〳〵。

千代　ハイ〳〵。

太郎　サア〳〵入らつしやい〳〵。

たけ　モシ〳〵阿母樣、太郎兵衛さまがお出でなされましたぞえ。

ト奥よりおつや、半兵衛出て來て

つや　これは〳〵太郎兵衛さま、先刻には、さぞお腹が立つたでござりませう。御堪忍なされて下さりませ。

太郎　イエサ〳〵。

半兵　これは〳〵太郎兵衛さま、夜中と申し、段々のお世話。有り難うござりまする。サア〳〵、これへお出でなされませ。

太郎　ナニサ〳〵、この太郎兵衛も、畢竟爰の仁右衛門どのとは、懇ろと云ひ同行仲間。嫁御の事を聞くにつけ、蔭ながら氣の毒に思ひましたに依つて、挨拶を致したところに、マア〳〵、阿母の機嫌も直つて、お千代どのを內へ入れようとの事。何よりの事と存じて、これへ同道いたしましてござる。そんなら阿母、お千代どのに逢つてやつて下さるか。

トこの臺詞を云ふうち、おつや、笑ひ出し

つや　ホヽヽヽヽ、逢ひませいでわいの。姑は親なり嫁は娘、ついしたもの、間違ひで、去なしたるあのお千代。殊にお前のお世話になり、連れ添ふ半兵衛とは、仲の好い夫婦でござりますに依つて、先刻のやうに申しましたも、心の中には、歸したうて〳〵、ほんに、ぞく〳〵致しましたわいの。サア〳〵、早う爰へ、お千代を呼んで下さりませ。

太郎　その挨拶を聞いて、太郎兵衛も安堵しました。然らばお千代を、これへ呼びませうわいの。

半兵　これはお世話でござりまする。

太郎　イエ〳〵。コレ〳〵、お千代どの。サア〳〵、これへ〳〵。

千代　ハイ。

　トうぢ〳〵して居る。

太郎　ハテサテ、今の阿母の挨拶を聞かつしやらぬかい。サア〳〵、爰へござれ〳〵。

千代　ハイ〳〵。

　トやう〳〵おつやが側へ是非なく坐り

姑御樣のお氣に入らぬわたしが事。お呼び歸しなされて下さりませうとの事。これまで參りましてござりまする。

つや　ホヽヽヽヽ、いとしやの〳〵。わしがちつとの間違ひで、其方にまで、たんと苦勞をさせましたの。今から出すのたの字も云はず、去なさうのいの字も云ふまいと、心で誓言立てゝ居る程に、モウ〳〵、心遣ひして下さるなや。天にも地にも、たつた一人の花嫁、末期の水を取らるゝも、火屋で骨を拾はるゝも、こなたより外に嫁と云うてはないわいの。今から隨分孝行にして、面倒見て下されや。其方も可愛がりませうわいの。南無阿彌陀佛々々々々々々。

千代　其やうに仰しやつて下さります姑御樣。此やうな有り難い事はござりませう。先刻のお顏つきとは違ひ、お心措きない今のお詞。其やうにお慈悲深う仰しやつて下さりますると、嬉しうて〳〵、嬉しうて涙がこぼれまするわいな。

つや　必らずわしが云うた事、氣にかけて下さるな。

千代　なんの勿體ない。どうして氣にかけませうぞいな。

つや　そしてモウ、明日から其方に內を任せて、朝飯食ふと、仁右衞門どのと連れ立つて、佛樣參りせうと思へば、此やうな有り難い事はないわいの。ほんに世の中の

譬への通り、持つべきものは嫁娘。これと云ふも太郎兵衞さまのお世話ゆゑ。コレ、手を合せて拜みますわいの。南無阿彌陀佛々々々々々々々。

太郎 したり、善にも强ければ惡にも强いと。今の阿母の挨拶。半兵衞どのにもお千代どのにも、さぞ喜びでござらうの。この太郎兵衞も、これで落ちつきましたわいの。

半兵 段々の太郎兵衞さまのお世話。必らず仇に思はぬがよいぞや。

ト云ひながら、物案じの思ひ入れ。

千代 ハイ〳〵、太郎兵衞さまへは、なんとお禮を申してようござりませうか。私しが爲には氏神樣、命の親とも存じまして、有り難うござりまする。この上ともに、お目に餘りました事がござりましたなら、必らず御遠慮なうお叱りなされて下さりませいなア。

太郎 成る程、發明な挨拶でござるわいの。お千代どのから見れば、イヤハヤ、わしが內の嬶を聞いて下さい。如何に姑がなければとて、寢て引摺り起しやア、先づ卿へ煙管をして、めくりを打ちに出やす。その癖、茶碗酒を喰ふやら、買食ひをするやらで、錢をば湯か水のやうに遣ひやすし、日に四五度は嫉妬喧嘩もします。ひよつとあんな山の神を、爰の內の嫁にしたら、定めて去り狀を判こうに刷つて置かずばなりますまいの。シタガ又、爰の婆樣のやうな、むづかしい、意地の惡い、婆アもござるまい。

ト云ひながら、おつやと顏見合せ

ハ、、、、、ハテ、物は正直に云うたが、ようござるなう。阿母。

つや この太郎兵衞さまとした事が、ひようひやくな事ばかり云はつしやりますわいの。明日から此方の內へ來て御覽じまし。大抵や大方睦ましい事ぢやアござりませぬわいなア。

太郎 その事〳〵。

つや 時に太郎兵衞さまには、最早御時分でござりませう。幸ひ出來合ひましたる庚申待ちの夜食、茶飯をお上がりなされませぬか。

太郎 イカサマ、阿母の機嫌が直つたら、わしもどうか腹が北山になりました。イヤコレ、阿母、仁右衞門どのは、どうさつしやりました。

つや 主も最前お千代が事、太郎兵衞さまのお世話ゆゑ、

呼び返してやりまするト云うたれば、大きに喜んでござりました。いま奥に十歳さまと、お話してゞござりますわいの。

太郎　イヤ、喜ばつしやるも、尤もでござるわいの。さぞ待ち兼ねてゞあろ。お千代どの、奥へ行て、仁右衛門どのに、逢うてござるがよいわいの。

千代　ほんに先刻から、心附きませいで。まだお目にもかゝりませぬ、左様なら奥へ行て、お目にかゝつて參りませうか。

トお千代、立つて行かうとする。

つや　コレ／＼お千代、久しう逢はぬかなんぞぢやない、其やうに急がずともよいわいの。それよりはあの半兵衛に、たんと話したい事があらうに依つて、大家様を連れ申して、わしや奥へ行かう程にの、後でゆつくり話しやいの。

千代　でも、それでは

つや　ハテ、もう去なしはせぬ程に、舅どのには緩りと逢うたがよいわいの。

太郎　それがよい／＼。ハテ、お婆も、まんざら野暮ではないわえ。

つや　また大家様、ひようひやくを。

太郎　ハ、、、、。さらば御馳走にあづかり申さうか。

つや　サア／＼、わしが連れ立つて參りませうわいの。

太郎　これは御馳走。

半千　ゆるりとお話しなされませ。

たけ　サア、お出でなされませいなア。

つや　南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト唄になり、太郎兵衛、お竹、おつや、奥へ入る。半兵衛手を組んで思案して居る。お千代、後見送り、いそ／＼して

千代　これはマア夢ではないか。最前の様子では、もう爰の内へは歸られまいと思うたに、打つて變つてあのやうに、姑御様の御機嫌が直ると云ふは、みんな太郎兵衛さまのお庇。忘れは置かぬ、有り難うござります。あのやうに仰しやるからは、半兵衛さん、今からほんまの女夫ぢやぞえ……これはしたり、御佛壇の御燈明が消えたさうなわいのな。見れば暖簾もふくろびてある。ほんに女房の無い内と云ふものは、何處やらおかしいものぢやわいなア。

ト半兵衛、矢張り思案して居る。

コレイナア、半兵衛さん、なぜ其やうに浮かぬ顔して居やしやんす。母さんの御機嫌はあのやうに直るし、其やうに思ひ顔せずと、ちと浮き〳〵したがよいわいなア。

半兵　コレお千代、この半兵衛は、其方を内へ入れたので、大分胸を痛めるわいの。

千代　そんならわたしが内へ戻つたゆゑ、お前が心遣ひなさんすとは、そりやマア、どうした譯でござんすぞいなア。

半兵　イカサマ、流石は女子。母の詞を眞實に云はれた事ぢやと思うて、何にも知らぬ女房ども。

千代　エ。

半兵　イヤサ、マア〳〵、阿母の機嫌が直つて、めでたいめでたい。

ト半兵衛、紛らしてわざと笑うて居る。

千代　ちつと居ぬうち、どうやら勝手が違うたやうぢやわいな。ほんに爰が、わたしが居馴れた處ぢや。ドレ〳〵居馴れた處に、ちつと坐つて見ようかいの。

ト お千代、下の方よき程に座る。奥にて

十藏　半兵衛々々、半兵衛はそれにお居やるか。

ト云ひながら十藏、出て來る。

半兵　兄者人、まだお休みなされませぬか。

十藏　イヤモウ、大分食べ過ぎたて。

ト少し醉ひたるこなし。

最前から待つて居れども、お千代は未だ佛參から歸り召されぬか。

半兵　イヤ〳〵、お千代はもう戻りました。サア〳〵お千代、兄者人に御挨拶を申しやいの。

千代　アイ〳〵。十藏さま、久しうてお目にかゝりますでござりまする。

十藏　これは〳〵お千代どの、成る程、久しうて逢ひましたの。

千代　マア〳〵、お前樣にも御機嫌ようて、お嬉しう存じまする。

十藏　其方も堅固で重疊々々。半兵衛、今こそ申すお千代の身の上。承はれば養母の心に叶はずして、度々の不縁。この間この家に居らぬぞとの風聞ゆゑ、もしも左樣の事もやと、身共も殊なう案じたが、これに逢うて十藏も、安堵しました。

半兵　兄弟のよしみとて、左樣思し召して下さりまする兄者人。お千代が事は、世間で申す噂とは違ひ、母者人の

お氣にも、隨分入つて居りまする。殊に半兵衛とは斯う睦ましい夫婦仲。十藏さまにも、お喜びなされて下さりませ。

十藏　それは一入喜ばしい。例へ世間の噂にせい、半兵衛、このお千代ばかりは、滅多に離別はなるまいぞ。三つ去らざる敎への一つ。養父仁右衛門どの、國許の親仁樣にも、殊ない御秘藏。もしもの事があつて、緣を切らば、養父へも不孝。實父へも不孝になるぞや。

　トきつと云ふ。

斯やうな事は申さいでも、其方も合點であらう。ハ、、ハ、、必らず〳〵この後も左樣の事のないやうに、隨分々々、末々めでたう添ひ遂げ召されい。

半兵　その儀はお氣遣ひなされまするな。どのやうな儀がござりませうとも、緣を切りまする事ではござりませぬ。

十藏　半兵衛がその心なら、お千代も緣は切りやるまいの。

千代　どうしてマア、主に別れてよいものぞ。半兵衛どのと女夫になりましたも、仁右衛門さまのお仲人でござりまするわいなア。

十藏　お千代にもその心なら、思ひ合うたる女夫仲。とは云ふものゝ、そんなら何と、誓言が立てられうか。

半千　エ。

　ト驚ろく。

十藏　サア、二世も三世も緣切るまいと云ふ、誓言が立てられうか。

半兵　成る程、その誓言も立てませいで何と致しませう。ナ、お千代。

千代　それ〳〵、なんの〳〵、日本の神かけて。

半千　なんの僞はり申しませう。

十藏　めでたい〳〵。

　ト云ふうち奥にて

つや　お千代……お千代や。このマアお千代は、何處に居やるぞいの。

　ト云ひながらおつや、盆に供物を載せて持つて出て來て

お千代は其處に居やつたか。

千代　ハイ、十藏さまと、お話し申して居りましたわいなア。

つや　わしは又、風邪が流行るに、風呂へでも行きやつた

たかと、案じて其方を尋ねたわいの。ホヽヽヽヽ。コレお千代や。わが身におませうと思うて、爰へ持つて來た庚申さまのお供物。サア／＼、戴きや／＼。

千代　ハイ／＼、有り難うござりまする。お前マア、お戴きなされまして、半兵衞どのにも進ぜまして、私しは明日でも戴きませうわいなア。

つや　それはどうなと、勝手にしたがよいわいの。ほんにお千代や、あの十藏さまは道中のお疲れで、お草臥れなされてゞあらうわいの。奥の二階へ床を敷いて、寢させまするがよいわいの。

十藏　イヤ／＼、今晩は一年に六度の庚申の夜。今宵は寅の刻まで起きて居るものぢやと申しますれば、拙者は先づ起きて居りたうござる。必らず／＼、お構ひなされて下されまするな。

つや　左樣ならば七ツまで、十藏さまには起きてゞござりまするか。

十藏　左樣いたしたうござる。

つや　半兵衞や。其方も今宵は起きて、庚申さまを拜んだがよいぞや。庚申さまは荒神ぢやぞや。ひよつと人を瞞しやると、直に罰が當るぞや。半兵衞、お主はなんぞ、母親を騙した事はないかや。コレイナウ、わしやようコレ。

ト庖丁を十藏、お千代に見えぬやうに、ソツと出して見せ

よう研がせて置いたぞや。わしなぞ騙しやると、この婆がちよいぢやぞや。半兵衞、忘れはしやるまいの……早う去りや。早う去つてしまや。

トころ／＼半兵衞が側へ寄つて、小聲にて、去つてしまへ／＼と袖を引く。半兵衞、十藏が方、おつやが方へ心遣ひの思ひ入れ。

早う去らぬか。わしを騙しやると、コレ、ちよいぢやぞや。

ト庖丁を出して見せる。

ホヽヽヽ、わしとした事が、コレ／＼お千代や、爰へおぢや／＼。

千代　ハイ／＼。

つや　半兵衞、わしを騙しはしやるまいの。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。お千代、爰へおぢや／＼。

千代　ハイ／＼。

ト　お千代、おつやが側へ行かうとする。半兵衞、引き

戻し
半兵　女房、去つた。
千代　エ。
　ト悔り。
半兵　半兵衛が改めて去つた。お千代、出て失せう。
千代　エ、。お前もなんの事ぢやぞいなア。母さんの御機嫌が直つて、ヤレ嬉しやと思うて居るに、また半兵衛が去つた出て行けとは、人に悔りさせうと思うて、あの眞顔で云はしやんす事わいの。
　ト笑ふ。
半兵　いんや、おどけでない、座興でない。眞實去つた。
千代　そりやマアお前、本氣で云はしやんす事かえ。
半兵　知れた事だ。亭主が女房を去るに、試の嘘のと云ふ事があるものか。去り狀書いてやらう程に、とつとゝ出て失せ居らう。
千代　そんならお前、眞實去らしやんすか。
半兵　知らぬわえ。
千代　そりやお前、聞えぬ〳〵。今までは母さんのお氣に入らいで、去られたかと思うて居たが、そんなら半兵衛どの、お前が去らしやんすのぢやな。
半兵　知れた事だワ。母人がいろ〳〵と、お世話なされて下されども、愛想が盡きた。わがみのその頭は何だ。油壺から引き出したやうだわえ。それに、ぴたり〳〵と着る物をば引摺り廻つて、もう愛想が盡きて、出してやらうか、もう呼び歸すまいと思うて居たを、母者人が、いろ〳〵仰しやるゆゑ呼び歸したが、われが面を見ると、モウ〳〵、嫌で〳〵なるものではない。サア、出て失せう。
つや　コレ〳〵半兵衛、滅多な事をせまいぞや。可哀さうに大事の嫁御を半兵衛、去ると云やるかいの。日頃から結構な半兵衛が、あのやうに云やる事、滅多に腹から口も出されず。コレイナウお千代や、必らず〳〵わしが業ぢやないぞや。モウ、わしを恨んでたもるなや。
千代　勿體ない、どうしてあなたを露程も、わたしが惡う存じませう。お情深い姑御樣、どうぞ半兵衛どのゝ機嫌の直るやうに、詫び事なされて下さりませいなア。
十藏　ハレ、氣の毒な事を見ますなア。
千代　モシ、半兵衛どの、お前、わたしを去る事はなるまいぞえ。

半兵　なんの亭主が女房を去るに、誰れが點の打ち手があるものだ。

千代　イエ〳〵、お前、この中父さんに、なんと云はしやんした。もう灰になつても戻すまいと、云はしやんしたぢやござんせぬか。それに又、父さんが頼らうて居ながら、その詞を聞かしやんして、嬉しがらしやんしたに、どうマア、去られましたと云うて、戻られませうぞいの。半兵衛どの、悪い事があるならば、なんぼでもあやまる程に、どうぞ堪忍して下さんせ。モシ、どうぞ堪忍して下さんせいなア。

半兵　くど〳〵と何を吐かす。キリ〳〵と失せう。

　ト半兵衛、お千代を引ッ立てる。十蔵、見兼ね、半兵衛を引据ゑ、扇にて打擲して

十蔵　ヤイ、茲な不孝者めが。おのれ最前、何と吐かした。例へ如何やうな事がござりませうとも、お千代を離別いたしますまいと、吐かしたぢやァないか。殊に今聞けば、お千代が實父、平左衛門どへも誓言立てして、お千代を貰うてうせ居つたぢやないか。例へどのやうな事があらうとも、半兵衛、お千代を離別いたす事はなるまいぞ。

　ト半兵衛、平伏して居る。おつや、そろ〳〵半兵衛が側へにじり寄つて、袖を引き、小聲にて

つや　なぜ默つて居る。去れやい〳〵。去らぬか〳〵……なぜ默つて居る。早う去らぬか……エヽ、埒の明かぬ。今のやうに云はれたに依つて去らぬか。

　ト半兵衛が襟を捉へ

ヤイ、半兵衛の不孝者。おれを騙して、ようも〳〵、あのお千代めを引摺り込んだな。おのれにまで其やうに馬鹿にされると思ふゆゑ、腹が立つて〳〵、胸が燃えるやうなわやい。もうこれからは其方には構はぬ、姑去りと云はれうが、世間の奴等に頓着はない。見るも中々忌々しいあのお千代め、この棕梠箒で親子の別れに、どうしてくれう。

　ト此うち十蔵、お千代と顔見合せ、これゆゑ半兵衛が、去らうと云ふのだと推量したる思ひ入れ。

いつその事に一思ひに、叩き殺してくれうわいの。

　ト箒を振り上げる。十蔵ちよつと攴へる。

こなたはなんぢや。他人ぢやアござらぬか。他人なら何も構はつしやる事はござらぬ。爰の内はわしが物でござるわいの。お前は何も構はつしやる事はござらぬ。其方

へすッ込んでござりませ。

ト突き退け、箒を振り上げ、お千代半兵衛を思ひの儘にくらはせる。奥より嘉十郎走り出て、その箒を引ッ奪り、おつやを散々に打擲して、しやんと見得になる。

おつや、痛むこなしにて

ヤイ／＼、おのれは甥の嘉十郎めぢやないか。どう云ふ事で此やうに、この年寄りを叩き居つたのだ。罰が當るぞ。恥を知れやい／＼。

嘉十　なんだ恥を知れ。イケ根性のつん曲つた、こなたのやうな死さがりを、よしんば叩き殺しても、罰が當つて詰まるものか。しかも今夜は親仁の逮夜、半兵衛どのとお千代どのに、この身代を讓らずば、云ひ譯が佛様へあるまいがの。サア、今から心を改めて、あのお千代どのをこの内に、置かうと云へばその通り。ならぬと吐かしやアこの嘉十郎が、こなたを叩き殺して、磔刑にかゝる分の事。伯母御、返事はどうでごんす。

つや　ヤイ／＼、おのれは／＼、其やうに大それた事吐かし居る。半兵衛やお千代めを叩き出したら、おのれに遣らうと思うた身代。溫なしうして貰ひ居らうとは思はいで、大酒喰つて博奕を打ち、惡鬼惡魔のげんかい付き合ひ。暴れ者を見るやうな身持ちをし居るから、代官所へ願うてお帳へ付けて、九離切つてくれうわい。

嘉十　それ／＼、それが忌々しい。一言云やア二言目にやア勘當する。コレ、エヽ、勘當半分九離切つて、叩き出される合點で、鐵火が好きの嘉十郎。コレエヽ、恩にかけられて、この屋體骨を有り難さうに、わしが貰つてお堪りがあるものか。嫌味な事は嫌ひだわな。伯母さん、お湯でもくんねえな。

つや　聞けば聞く程腹の立つ。おのれまでが其やうに、この身代を貰ふまいと吐かしやア、せう事がない。何奴も此奴も、キリ／＼立つて失しやアがらいでの。

ト棕梠箒を振り上げる。嘉十郎、早う引ッ奪り

嘉十　さう吐かしやア、云はにやアならぬわえ。コレ、心を改めて半兵衛どのやお千代どのに、身代を渡しやアその通り。否と吐かしやア、云ふぞよ／＼。

つや　何をいの。

嘉十　うぬが身の上を。

つや　わしが身の上とは。

嘉十　エ、コレ、云ふまい／＼と思つたが、そんな根性ぢやア云はにやならない。マア、下に居やアがれ。

トおつやを取つて引据ゑ

コレ、エヽ、うなアなんだ。乞食婆アめ。よく半兵衛どのやお千代どのを酷くしやアがつた。コレ、云ふまいと思うたが、どうも堪えられぬ。うなア梅田で袖乞ひして居やがつて、兄の盲目にかゝつて失しやがつたを、親御の仁右衛門さまが慈悲深い人で、可哀さうにあのやうな者に、目をかけてやるが後生だと、乞食を見るやうな者を取上げて、お世話なされた、うなア妾の内の下女だぞよ。うぬがあんまり助兵衛だに依つて、今の仁右衛門とのへ押しつけたり、ひッつけたりしやアがつたから、つい手が付いた。それにいゝかと思やアがつて、伯母御伯母御と云やア、付け上がりのした婆アぢやねえか。はッつけ婆アの乞食婆アめ。飛んだ誤託を吐かしやアがる。

ト嘉十郎、煙草盆を引寄せ、煙草のんで居る。おつや、帯を解き、襦袢一つになり、花道へツカ／＼行く。半兵衛驚ろき

半兵　母者人、こりやお前、何處へござりまする。

つや　どれへとて、わしやこの形で、大坂中方々歩いて、わたしは新靭の八百屋半兵衛が母でござりまするが、嫁のお千代にいびり出されまして、どうも食べまする手段がござりませぬ。身を投げまするにも勝手は存じませず、致し方がござりませぬゆゑ、どうぞお剰りがござりまするならば、下されませ／＼。

ト大きな聲で喚く。

半兵　モシ／＼、あやまりました／＼。仰しやる通りに致しませう。マア／＼、あれへござりませ／＼。

ト本舞臺へ無理におつやを連れて來る。

つや　イヤ／＼、わたしは八百屋半兵衛が母でござりまする。お剰りがあらば下さりませ／＼。

ト大きな聲で云ふ。半兵衛、おつやが口へ手を當てゝ

半兵　仰しやる通り致しませう程に、マア／＼、お待ちなされませ。コレ嘉十郎どの、如何に若いとて、云うても云はいでもの事を。エヽ、情ない事云うて下されたなう。モシ母者人、お千代めにはさつぱりと、去り狀書いて遣はしまする。マア／＼、お鎭まりなされませう。

トおつやを下に置き、半兵衛、掛け硯を引寄せ、一通を認め

コレお千代、暇の狀、キリ／＼持つてうせう。

ト始めは立派に云ひ、臺詞の止めは愁ひを含みし思ひ入れあるべし。お千代、去り狀を取上げ思ひ入れ。

十藏　お千代を離別いたしても、平左衞門どの、方へは歸されまい。これより十藏が遠州へ同道いたす。さりながら半兵衞、親仁樣にはこの樣子をお覺りなされてやら、半兵衞に劍難の相ありと、御苦勞になされ、この脇差を預かり參れとのお頼みゆゑ、其方より預かりしが、今お千代を離別いたしては、養父仁右衞門どのへ不孝といひ、平左衞門どの、濱松の親人へも申し譯があるまい。とは云へこの場の仕儀、是非に及ばぬ。半兵衞、其方も以前は武士の息ではないか。何れも方への云ひ譯を、とつくりと思案の致せ。この一腰も改めて、十藏が遣はす間、あの後家親にならぬやう、その身の納まり、思案の致せ。

ト十藏、半兵衞が前に脇差を置く。半兵衞、思ひ入れ。

合點が行たか。

十藏、最早お暇申す、

ト お千代を引き立て、十藏、門口へ出る。

嘉十　たうとうお千代どのを、追ひ出してしまやアがつた。こんな處に居りやア胸が惡くなる。ドレ、ないぐわいでも參りやせう。

ト嘉十郎あたりを蹴立て下座へ入る。此うち十藏、お千代が持つて居る去り狀を引ッ奪り、寸々に引裂き、思ひ入れあつて、三重になり、お千代を連れて向うへ入る。

半兵　母者人には、いろ／＼氣を揉ませましてござりまする。

つや　半兵衞、出かしやつた／＼。これでわしも、淸々としたわいの。

半兵　左樣でござりまする。母者人のお心に叶ひませぬあのお千代め、疾にも去りたうござりましたが、この半兵衞めも去りまして、心がさつぱりと致しまして、此やうな嬉しい事はござりませぬ。

ト笑ふ。

つや　わしも嬉しうて／＼、心がいそ／＼するわいの。

半兵　左樣でござりませう。母者人、最早七ッに間もござりますまい。爰へお床を敷いて上げませう。ちつとお休みなされませ。

ト云ひながら半兵衞、上の方へ床を敷く。花道よりお千代、そろ／＼と立ち戻り、門口にて内の樣子を窺つて居る

つや　イヤ／＼、お千代を出しやつた、思ふ女房でも去つ

てしまへば、おあし三筋落したやうぢやと云ふではない
かいの。それぢやに依つて、わしは消しからうと思うて、
爰に話して居るわいの。
半兵　そんなら、母者人には、今宵は爰で、お話しなされ
まするか。
つや　さいの、其方にはこの母が、寢てから話したい事が
あるわいの。
ト煙草を吸ひつけて半兵衛に遣る。半兵衛、その煙管
を取り、呆れて居る。おつや嫌らしきこなし。
茶を一つたも。
半兵　ハイ／＼。
ト茶を持つて來る。おつや、半兵衛が手を取る。半兵
衛、嫌がる思ひ入れ、いろ／＼ある。奥よりお竹、走
り出て來て
たけ　モシ／＼、お内儀さん、大家樣が、急にお呼び申し
て來いと仰しやりまする。サア、お出でなされませお出
でなされませ。
ト手を取つて無理に引き立てる。おつや、半兵衛へ寄
るを、お竹、無理に連れて入る。おつや、ぶつくさぶ
つくさ云ひながら引き摺られて暖簾口へ入る。半兵衛、
思ひ入れあつて
半兵　思ひがけない母人の仕打ち。お千代を離縁しては、
どうもこの半兵衛は、生きては居られぬわえ。
ト お千代、門口へ寄つて、内の樣子を聞いて居る。半
兵衛、脇差を取上げ
兄者人の殘し置かれしこの一腰、この半兵衛に詫の詞と
いひ、ムウ、さうぢや……斯う云ふ心とは知らず、お千
代はさぞ、この半兵衛を恨んで居るであらう。押しつけ
未來で云ひ譯せう程に、堪忍してくれいよ。南無阿彌陀
佛々々々々々。
ト心靜かに自害せうとする。お千代、驚ろき、門口を
明け、内へ走り入つて、半兵衛を留め
千代　マア／＼、待たしやんせ／＼。
半兵　ヤア、其方はお千代か。
千代　半兵衛さん、お前も死んで下さんすか。
半兵　其方を離縁して、どうマアこの半兵衛が、生きて居
られうぞいやい。
千代　エヽ、嬉しうござんす。
半兵　そんなら其方も。
千代　お前に別れて、どう存らへて居られうぞいなア。

半兵　その心なら一刻も早う、この所を立ち退いて、とてもの事に、一緒に死なうわいの。

千代　そんならこちの人、サア、ござんせ。

ト両人、行かうとする。奥にて

嘉十　半兵衛どの／＼。

ト嘉十郎、奥より出て來る。これにて急に蔦の葛籠の上にある毛氈を、お千代に掛けて隱す。嘉十郎出て

嘉十　半兵衛どの、お前、まだ休まつしやりませぬか。

半兵　嘉十郎どのにも、まだ寢ずにござつたか。

嘉十　イヤモウ、なんだか一向寢つかれぬから、明日の買出しの青物を、書きつけて來ましたが、なんと半兵衛どの、聞いちやア下さるまいか。

半兵　青物の買出しを、書きつけて來たとは、それは商賣に精が出ますの。ドレ／＼、そんなら爰で聞きませう。

嘉十　そんなら聞いて下さるか。

ト書付けを出す

半兵　聞きませう／＼。

嘉十　先づ青物は、大根牛蒡長芋の、浮世に短かい人參は、八百屋の升で一升を、量り込んだる唐辛子、假名で書いたる女夫菜が、未だ膚ちさの時分から、育てられたるもやし豆、姑ふきはせり／＼と、心細かな芥子辛子、茗荷も知らぬ胡瓜ぞと、世間で白瓜、噂を紫蘇で、犬蓼のやうに夕顔でも、そこを孝行つく／＼し、チッと新菊新ぼうふ、何に茄子と存らへて、又かれぎにも八百屋かぶ、由ない事を根芋に持ち、二人死なうとしめじあひ、未來は一つ蓮の根と、云ひかはたけもみんな水菜。縁あさつきと心中立て、後は南無妙ほうれん草、暗闇の事をあかさゝげ、わけぎを知らぬひともぢは、アレ、あの嫁菜を三ツ葉芹、親を送るは子の專菜。先立つ不孝は蒲公英の、葉はさかさまな事になり、蕨、松露と氣がつく芋、箸にもかゝらぬこのわしが、心の竹の子打明けて、意見を加へきくらげで、とくと乾瓢椎茸なら、末はつる菜に松茸の、よろ昆布ことに青海苔と、書き並べたる數々は、マア、こんなものでごんす。

半兵　この半兵衛が身に應へたる青物の數々、嘉十郎が志し、忘れは措かぬ、忝ない。

嘉十　必らずどのやうな事があらうとも、お千代どのを。

半兵　ヤ。

ト思ひ入れ。

嘉十　イヤサ、お千代どのゝ雛毛氈、あの毛氈の上へ二人

並んで、睦ましう内裏樣のやうに、仲よう添はれぬ事もあるまい程に、必らず〳〵、短氣な心を出さつしやりまするな。命長き龜、蓬萊に逢ふと、いつか一度は、願ひの通りになりますわいの。

ト奧にて

つや　嘉十郎々々々。

ト云ひながら、おつや出て來て

まだお千代が、雛の葛籠を持つて行き居らぬか。ヤイ、早く仲人の伊兵衞どのゝ處へ、持つて行き居れ。

嘉十　忌々しいわいの。どうこれが急に持つて行かれるものか。

つや　キリ〳〵持つて、失しやアがらぬか。

嘉十　いま持つて行くよ。

ト嘉十郎、口小言を云ひながら葛籠を背負ひ、お千代が影になつて、おつやに見えぬやうに、毛氈の儘門口へ押し出し、思ひ入れして花道へ連れ行き、嘉十郎は向うへ捨ぜりふあつて入る。お千代は花道の中程に忍んで居る。暖簾口より家主太郎兵衞、そろ〳〵出て來る。おつや、半兵衞に思ひ入れあつて、行燈の灯を吹き消し、おつや、半兵衞が側へ探り寄る。半兵衞、ソツと門の外へ出て、花道へかゝる。太郎兵衞も門口へ探り〳〵出る。おつや、太郎兵衞に探り當り、半兵衞と思ひ、床の中へ引き込む。花道にて半兵衞、お千代に行き當り

半兵　お千代か。

千代　半兵衞さんか。

ト抱きつく。

つや　ヤア、あの聲は。

ト行かうとする。太郎兵衞、おつやを引き戻すを突き倒す。太郎兵衞こける。奧より仁右衞門走り出て、追ひ駈け行かうとする。おつや、引き戻す。お竹、同じく走り出て來て、門口をしやんと閉める。太郎兵衞、起き返つて

太郎　出かした。

半兵　おぢや。

トお千代を連れ、向うへ入る。よろしく　ひやうし幕

大切　道行の場

淨瑠璃「道行嫁菜露」富本連中

役名――八百屋半兵衛。同女房、お千代。八百屋嘉十郎。

本舞臺。三間の間、正面草土手、左右の柱、柳の立ち木、日覆よりも柳の吊り枝、見事に仕立て、舞臺先、處々に稻村を取りつけ、右草土手の上へ毛氈を敷き、富本連中、三味線上調子居並び、時の鐘にて幕明く。

ト花道より嘉十郎、草羽織、俠の拵らへにて、提灯を提げ、棒を持つて出て來て

嘉十　お千代どの、半兵衛どの〳〵。

ト呼び〳〵舞臺へ來り

高うはござりますれども、ちよつと申し上げまする。さて、この所が淨瑠璃の場でござりまする。即ち淨瑠璃名題は、お千代半兵衛「道行嫁菜の露」淨瑠璃太夫は富本豐前太夫、ワキ富本志貴太夫、同じく妻太夫、三味線鳥羽屋里夕、上調子波崎喜調。相勤めまする役人、お千代に中山富三郎、半兵衛は坂東三津五郎、どうぞこれが、ほんの事になりませぬやうに致したうござりまする。お千代どの、半兵衛どの〳〵。

ト呼びながら、嘉十郎、下座へ入る。直ぐに前彈きになり

〽如月の、雪は垣根に消えもせで、五日の宵の月影は、更けて跡なき夢心、うつゝの闇に住み馴れし、塒を出でて啼く雉子。

ト方々にて雉の聲する。花道より半兵衛、頰冠り、着流し一本差し、肩に毛氈を掛けて出て來る。後よりお千代、對の形、兩人後へ梅の枝差して、相合ひ傘にて出て來る。

〽やみのやうさに數添ふる、夜も早七ツ半兵衛が、肩に掛けたる毛氈は、命の露の置き所、妻のお千代も面瘠せて、目もてしぼよる縮緬の、二重廻りの抱へ帶、ついに形見となりふりも、まだうら若き柳の枝に、空吹く風も追手かと、行き惱みては立ちとまり、あれ〳〵あれは飛脚の提灯か、又は見馴れぬ狐火か、迷ふが上に迷はする、今死ぬる身も夜露をいとひ、相合傘に影法師、つむらの

土手をあだし野の、煙はいづれ鳥邊山、はな野あきのふなどうは、消ゆる朝の浮名草、嫁菜の露も珠數の玉、煩惱菩提と聞く時は、佛の誓ひぞ頼もしき。

〽西へ行くへも行き明り、されども明日の日の端に、かかるも辛き身の上と、見交す顔の目も濕む、お千代はいとゞ打萎れ、今更云ふも岩田帶、堅い思ひのかたまりは、養子合せの縁の端、わたしやお前をお前とも、ほんに知らねば戀もせで、親々達の指圖にて、祝言の夜の新枕、三千世界を集めても、餘る思ひの恥かしさ、コレその顔によう似た子を、生んでわたしが添乳して、二人眺めて居やうぞと、樂しむ甲斐も情なや、身の因果にて月と日を、仇に暮らして死出の旅、この世の縁は薄くとも、未來は堅き夫婦ぞと、手に手を取つて引寄せて、抱き締めつゝ行く道の、姿を隱す雨もよひ。

千代　思へば／＼わたし程、世に情ない者はござんせんわいなア。親の許した夫婦仲。一日も心よう、暮らした事もござんせんわいなア。

半兵　其方も愚痴な事云やるわいの。其方を去つては實父への不孝と云ひ、養父への義理足らず。あの世で仲よく添ひとげる、それを頼みに死んでたも。

千代　よう云うて下さんした。さりながら、今死ぬる事を聞かしやんしたなら、嘉十郎どのが、さぞ恨んでござんせう。

半兵　例へ恨まれても詮ない事。

〽思へば／＼我れ／＼は、養ひ親に育てられ、子で子にならず振り捨られて、死にに行く身は是非もなや、死出の田長や鶯の、古巣も最早遠江、親兄弟にも嘆きをかけ、一方ならぬ不孝の罪、空恐ろしき身の上と、悔めばお千代もしやくり上げ、お前ばかりかこの身まで、お年寄られし母様の、手しほに掛けて育てられ、丁度今年は二十四の、年重なれど今日が日まで、これぞと思ふ事もなし、ついには刃に身を果し、嘆きをかけて亡き後まで、身に逆さまな御回向受け、不孝の罪の數々を、免してたべや母様と、手を合してぞ泣く涙、門田に水や増るらむ。

半兵　もう、爰が大佛の勸進所。其方は覺悟はよいかや。

千代　かねて覺悟は極めて居る程に、早う殺して下さんせいな。

半兵　出かしやつた。利劍即是彌陀業罪。正念さいかいせう、南無阿彌陀佛々々々々々々々。

ト　兩人覺悟の體。毛氈を敷き樒を持つて合掌する。此

うち一つ鉦

〽歸命頂來地藏尊、付囑を念じなまいだ〳〵、なまいだ、惡趣に出現し給ひて、衆生の苦患を導きけり、なまいだ〳〵なまいだ、捨てるに極めし身の上も、そゞろに長き春の夜や、爰ぞ一念しうくわん寺、利劍即是の數へにて、心安々極樂に、至り至らんこなたへと、互ひに勇め進む身の、勸進所へぞ着きにけれ。

ト段切れになり、お千代、合掌する、半兵衛、一腰を拔きかける。

ト下座にて人音するゆゑ、兩人囁き合ひ、稻村へ小隱れする。また向うにて人音するゆゑ、兩人稻村を出で、逃げようとする處へ、バタ〳〵にて嘉十郎、奥より出で、兩人に突き當り

嘉十　ヤア、お前は。

ト提灯を差出すを、半兵衛、叩き落す見得よろしく

半兵　先づ今日はこれぎり。

トめでたく打出し　　ひやうし幕

心中嫁菜露（終り）

關(せき)取(とり)菖(しやう)蒲(ぶ)帷(かたびら)

この脚本の中で活躍してゐる中の富三郎

關取菖蒲絎

序幕　千葉館の場

役名――千葉奧方、香取御前。一子、小次丸。平岡多左衞門。三原有右衞門。葉山大藏。橋本治郎左衞門。橋本與五郎。早野彥助。山崎屋與次兵衞。掛屋利八。藝者、吾妻。

本舞臺、三間の間、襖に千葉の紋散らし、軒に菖蒲を挿し、二重舞臺に兜を飾り、玆に小次丸、振り袖羽織。香取御前、白長掛け、下げ帶、小姓二人、袴ばかり。平舞臺の方に、多左衞門、次に有右衞門麻上下、次に與五郎、袴ばかり、麻上下の侍ひ兩人扣へ、何れも舞衣裳。眞中に大藏、麻上下を脫ぎかけ、菖蒲挿しある兜を持ち、惟茂の紅葉狩の小舞ひにて、幕明く。

皆々　大藏どの、出來ました。ヤンヤ〱。

大藏　若殿様を、お勇めの拙者の小舞ひ。お譽めにあづかり、恐れ入りましてござる。

香取　我が夫、千葉之介どの、御出國の留守を預かる當番で、幼少なる小次丸を名代として、形ばかりの祝儀、相濟んだであらうの。

多左　奧方様の御諚の通り、一家中は申すに及ばず、お出入りの町人どもまでお目見得。御禮相濟み、大殿様名差しにて、御氣散じとお慰みの爲に大藏が今の一さし。

有右　斯く申す有右衞門は、遊藝には不知案内。イヤハヤ感心いたしてござる。

小次　この次ぎは與五郎が番ぢや。其方もなんぞ舞つて見せい〱。

與五　若殿様の御諚ではござれど、幼少より殿様のお側に育ち、武道の事のみ心得ましてござれど、小舞ひの儀は一向に不案内。この儀ばかりは、御容赦願ひ奉ります。

小次　そんなら大藏、もう一遍舞うて見せいやい。

大藏　イヤ、只今の紅葉狩は、お流れ頂戴の菖蒲酒の利き過ぎ。本性になりましては、奧方様や御家老様の見らるる前では、小謠の一口も、なか〱出る事ではござりま

せぬ。

皆々 お舞ひなされい／＼。

ト迷惑がる大藏に、皆々寄つて扇を持たせ、眞中へ突き出す。弓矢八幡の曲舞になると、花道より治郎左衛門、麻上下、老けたる拵らへ。後に與次兵衛、羽織袴町人の形。彦助、菖蒲革、足輕の形。狀箱を持つて來り直ぐに舞臺へ來る。

治郎 平岡どの、そこに御座なりまするか。

多左 治郎左衛門どの、なんぞ御用向きでござるかな。

治郎 先刻御禮相濟み、祝儀仕りますところ、お國元より飛脚到着仕りましてござりまする……彦助、狀箱これへ。

ト彦助、ハッと狀箱を出す。治郎左衛門、取つて狀を出し、多左衛門が前へ差出す。

多左 有右衛門どの、其許樣の名宛でござれば、それにて御披見下されい。

有右 ハッ。

ト有右衛門、狀を開き

一つ、ナニ／＼、一筆しめし申し遣はし候ふ、御地數寄屋藏に御座候ふ羽衣の茶入れ、早々お國元へ申し遣はし候ふところ、如何の儀に御座候ふや、急御用に御座候ふ間この書狀着き次第、羽衣の茶入れ、早々着するやう、仰せ付け斯くの如くに御座候ふ、恐惶謹言。香取どの。

お聞きなされましたか。

多左 お數寄屋常日三二は、與五郎、其許のお預かり日。先月の御狀のうち、羽衣の御茶入れ、差下され候ふ樣申し付け置きしが、その節如何召された。

與五 成る程、先月の御飛脚に召し下し置くやう、仰せ付けられましたところ、折節風邪にて引籠り、それゆゑ遲くなりましてござりまする。

治郎 それは何とも、不埒千萬た儀でござつたの。

香取 治郎左衛門の詞なれど、與五郎とても初めより、御奉公大切に勤むるなれば、父上の御詞、疎略にしやうはなけれども、病氣なれば是非に及ばず。この申し譯は白らより、よきやうに申し上げて遣はさう程に、與五郎どう思やる。あの書面の通りなれば、今日中に用事を致し、明朝未明に羽衣の茶入れ、お國元へ遣はさずばなるまい。

與五 畏まりました。

有右 時に治郎左衛門どの、山崎屋與次兵衛を同道召されしが、お爲替金の儀でござるかな。

治郎　如何にも。昨日仰せつけられましたる通り、與次兵衛へ申し聞けましたところ、今日御禮の席より受取り歸りたいとの事ゆゑ、召連れましてござりまする。

有右　然らば、これにて渡さう。

ト手を叩き

坊主衆、箇箱を持ち參られい。

茶道　ハッ。

ト茶道、箱を持つて來る。有右衛門が前に置く。有右衛門、この中より金を出し

有右　與次郎兵衛、そこへ出やれ。

與次　ハッ。

ト與次兵衛、有右衛門の前へ出る。

有右　治郎左衛門申し置きたる、お[illegible]金三百兩のうち、先づ今日百五十兩相渡す。後金は來月御用金儀濟次第、早速渡すでござらう。受取を直ぐにこの帳面に据ゑられい。

與次　ハッ、有り難うござりまする。

ト帳面に印形を捺す。金を懷中して下がる。

香取　與次兵衛、久しうして逢ひましたなう。

與次　これは／＼、奥様、若殿様、存じ依らず御目見得仕り、恐悦至極に存じ奉りまする。

香取　其方に逢うたら、いつぞや聞かうと思うて居た。好き折から。幼なき時、自らが仲人して、それなる與五郎と約束させし、其方の娘お靜。まだ祝言の沙汰も聞かぬが、無事で居やるか。どうぢやぞいなう。

與次　ハッ。有り難いお詞にあづかりましてござりまする。娘事は、その砌りより、久しく北條さまの奥に差出しましてござりまする。最早當年十八歳に相成りまするゆゑ、當春より宿へ下げましてござりまする。

香取　もうさうかいなう。早う初孫の顔でも見て、樂しむやうにしたがよいぞや。

大藏　承はればお靜どのには、北條家の奥に勤め、女の藝は一つも知らぬ事なく、その腕前も強いとの評判でござりますて。

與次　イヤモウ、年長けた娘を持つて居れば、何やかと人の口にかゝりますれば、吉日を撰み、早う祝言の取運びが致したうござります。

多左　その取結びと申せば、この度の相撲も、熱心いたすさうにござるの。

與次　取結んでござりまする。只今までは濡髪、放駒の東

西の關が、結びようござりますゆゑ、それ〴〵賑やかでござりまする。

有右　その放駒と申すは、橋本治郎左衞門どのゝ印籠を、取つた者と承はりましたが、左樣かな。

治郎　サア、人の出世と申すものは、知れぬものでござる。拙者が贔屓する時分より、殊の外角力が熱心でござりますゆゑ、橋本與之助が養子に遣はせしところ、只今にては放駒の四郎兵衞と申し、片の大關と相成りましてござります。

大藏　若殿さまにも、近日御見物に入らつしやる筈でござりまする。

香取　最前より餘程の間、小次丸にもさぞ退屈。

小次　母上樣にも奧殿へ。

香取　何れも休息。

皆々　先づ、入らせられませう。

ト唄になり、香取御前先に、小次丸、皆々付き添ひ、辭儀あつて、下座へ入る。與五郎、彥助、殘る。彥助ツカ〳〵と下座へ行かうとする。

與五　彥助々々。

彥助　御用でござりまするか。

與五　ちよつと頼みたい事がある。

ト硯を引寄せ、さら〳〵と手紙を書き、また彥助に渡し、

彥助　小袋坂の大阪屋利八方へ。

與五　急用ぢや。早う頼みますぞや。

彥助　ドレ、行つて參りませうか。

ト駈けて向うへ入る。與五郎、いろ〳〵思ひ入れあるべし。

與五　あの吾妻が揚げ代、何やかや部屋住のしやうはなし、困つた事に思ひながら、來年の御參勤までは要るまいと思ひ、百五十兩の質に入れた茶入れ。今のうちに有右衞門まで渡さねば相成らず、畏まりましたと請合ふ事は請合うたれど、假初めにも百五十兩。ハテ、どうしたものであらう……ア、それに吾妻が顏も久しう見ず、ハテ、どうしたものであらうぞ。思案がつかぬわい。

ト唄になる、與五郎、奧へ入る。この唄のうち、花道より吾妻、衣裳、抱へ帶、紫帽子をかけ、屋敷者の拵らへ。奴を連れて出て來る。

奴　モシ、吾妻さん、どうして見ても、藝者とは見えない。正眞正銘のお屋敷者でござりまする。

吾妻　ほんに、あの與五郎さんに久しう逢はぬゆゑ、もし主の心が變りはせまいかと、案じ通し、あられもないお屋敷者の風をして、ツイ來た事もない所まで來たのも、主に逢ひたい心ばつかり。どうぞ仕樣はあるまいかいなう。

奴　待ちなさい〳〵。いまお長屋へ行つて聞いたら、この御殿だと云ふが、なんでもわたしが手を鳴らして見ようから、必らず爰に待つて居なさいよ。

ト奴は下座へ入る。吾妻、あちこちとこなしある處へ多左衛門出て來る。吾妻を見て、恟りした顏で見廻し

多左　そこに居るは、吾妻ぢやないか。

吾妻　エヽ、お前は多左衛門さん。

ト惡い人に逢うたと云ふこなし。

多左　シツ〳〵。

ト思ひ入れあつて、側へ寄り

見ればお屋敷風の拵らへ。其やうに姿を替へて、この處へ來るには、樣子があらう。どうぢや〳〵。

吾妻　サア、わたしやナ。

多左　何ゆゑお館へ入込んだのぢや。

ト獅子とらでんの囃子になる。

吾妻　オヽ、怖。ありやなんぢやぞいな。

多左　なんの怖い事があるものか。ありや若殿をお慰みの、奥御殿の狂言ぢやわやい。

吾妻　さうとは知らず、恟りしたわいなア。

多左　して、わが身は、誰れに逢ひに來たのぢや。

吾妻　多左衛門さん、お前に。

多左　ヤ、ナニ、おれに……嘘々。大の嘘。その手は喰はぬて。

吾妻　エヽ、ほんとぢやぞいなア。お前より外に、誰れにも近づきは無いもせぬもの。

多左　ムウ、有り難い〳〵。治郎でなし、與五郎は部屋住みの事なり、大藏ではあるまい。さうして見れば、成る程、おれより外に近づきはあるまい……そんなら、おれに逢ひに來たのか。

吾妻　藝者の形で來たならば、お前の爲になるまいと思うて心を盡して來たものを、嘘々大嘘、その手は喰べぬなんのと、胴慾な事ばつかり。そんなら日頃から何のかのと云はしやんしたは、みんな嘘ぢやな。わたしのやうにもない。あんまんむごい仕打ちでござんすわいなア。

ト多左衛門の胸倉を取つて振り廻す。多左衛門、思ひ入れあつて

多左　シツ〳〵。得て斯う云ふ處へ、誰れぞ來て見られう。家老の多左衛門、手に汗を握る事だ。ナウ吾妻、愛に一つ聞く事があるわい。

吾妻　なんぢやぞいなア。

多左　イヤ、外の事でもない。これ程に身をやつして、おれに逢ひに來る心なら、なぜこれまで度々口說くのに、帶解いて抱かれて來ぬ。

吾妻　エヽ。

ト思ひ入れ。

多左　サ、どうぢや。

吾妻　エヽモウ、お前の心中が知れぬもの。

多左　すりや、心中さへ見せたなら。

吾妻　いつでも抱かれて來るわいなア。

多左　身の上の大事とこそはなりにけりぢや。

ト下座より與五郎、出て來る。

與五　ヤア、そこに居るのは。

ト吾妻、嬉しきこなし。

吾妻　アノ、わたしやァ。

ト多左衛門、思ひ入れあつて

多左　コリヤ、お屋敷で。

ト與五郎、腹の立つたる思ひ入れ。

與五　多左衛門どの、その女は、何者でござるな。

多左　ものでござる。牡丹餅でござる。

與五　なんでござる。

多左　オヽ、それ〳〵、今日お目見得に參つた女中でござる。

與五　アノ、その女中が。

多左　如何にも左やう。

與五　ハテナア。

ト與五郎、思ひ付かんとして居る。多左衛門、思ひ入れある。やう〳〵吾妻、思ひつきたる思ひ入れ。

吾妻　エヽ、モウつんと。

ト多左衛門に云ふなりで。

多左　コレサ女中、お目見得のないうち、見咎められてはおらが爲にならぬ程に、お目見得の女中になつて、奥樣のお逢ひなさるゝまで、靜かな〳〵お次の間に、控へて居たがよいぞや。

トきまりわる〳〵ながら、吾妻を柴垣の蔭へ隱して

多左　ハヽヽヽ。イヤハヤ、女の取扱ひと申すものは、氣の揉めたものでござる。

ト莨入れを提げて下に居ると、春駒の唄にて、花道より彦助、町人の利八を連れて出て來る。多左衞門の居る處へ下の方から

彦助　與五郎さま〳〵。

ト小聲に囁く。與五郎、思案して思ひ入れ。

モシ、與五郎さま。

與五　オヽ、彦助か。

彦助　利八を連れて參りました。

ト與五郎、立つて下の方へ來り

與五　利八どの。申しつけた品、持參してござりますか。

利八　お手紙の通り、羽衣の茶入れ

與五　コレ。

利八　ヘイ。

ト利八、懷中より茶入れの箱を出して見せる。與五郎、手をかける。

利八　イヽヤ、これは大金の品でござりますれば、引替へにお渡し申したうござります。

與五　そんなら、暫らくのうち、お次に待つて居て下されい。

利八　畏まりました。

與五　彦助、案内。

彦助　サア、斯うござりませ。

ト兩人、臆病口へ入る。與五郎、思ひ入れ。

與五　ハテ、どうしたらよからうかな。

多左　與五郎どの、ちよつとこれまで。

與五　ヘイ、御用でござりまするか。

多左　餘の儀でもござらぬが、見受けますれば、何か當惑の樣子。

トじろ〳〵見て

なんぞ又、貴殿一料簡に參らぬ儀でもござりますれば、お心措きなう、仰せ聞けられい。

與五　これは〳〵、御深切なお詞ではござれども、御家老役の其許樣は。

多左　ハテ、大事ござらぬ。此方より斯樣に申しますからは、御遠慮には及び申さぬ。若殿の御前では、心にもなき云ひ廻し、不埒な事を致すは、誰れしもござる儀。貴殿から頼み入れたら、また其許へ折り入つて、お頼み申したき仔細もござれば、金錢はさて措き、御親身の事で

も、多左衞門、身に叶ひさへ致した事なら、お取持ち致す、拙者の心底でござるわい。

與五　それは近頃、得難き思し召し。然らばお詞に甘へましたやうなるも、先づ多左衞門どのゝお頼み、何なりと知らず、仰せ聞けられ下さりませう。

多左　イヤ〳〵、先づ其許のお頼みから。

與五　イヤ、おてまへ樣のお頼みから。

多左　然らば年數に、申し出して見ませうか。

與五　如何やうな儀なりとも。

多左　先づ以て忝ない。左樣なら、他言いたすまいと云ふ、金打が見たうござるて。

與五　如何にも。

ト合ひ方になり、與五郎、金打して

サア、この上は。

多左　忝ない。何を隱し申さう、最前これに居つた女の儀でござるて。

與五　エヽ。その女が、何とぞ致しましたか。

多左　最前、其許へお目見得の女と申したは僞はり。誠は八幡町、藤屋の吾妻と申す藝者でござる。家老役を勤むる多左衞門に、體を任せましての頼み。この處拙者、あの吾妻に大執心。微行の度々、芝居へ連れ立ち身共へ得心したらと、いろ〳〵手を替へ品を替へ、口說きましたが、一向承知仕らぬゆゑ、所詮これは駄目の事と存じましたところ、お聞き下され、餘り久しう便りも致さぬゆゑ、今日は屋敷風に姿を替へまして、拙者に逢ひまして恨みを申さう爲ばかりに、この處へ參つたと申しまする。左樣いたして見ますれば、あながち拙者に隨はぬとも思はれませぬゆゑ、これと申し居つた處へ、貴殿に見咎められ、只今知つたら多左衞門が、左樣仕損じた者は其許ばかり。それゆゑ打明けてのこのお頼み。何卒貴殿の辯を以て、吾妻と我れらが仲、偏へにお取持ち下されい。平岡多左衞門、兩手を突いてお頼み申します。なんと、戀は切ないものでござらぬか。

與五　これは、思ひも依らぬ儀を承はりました。

ト思ひ入れ、こなしにて

エヽ、おのれが……大方そんな事であらうと思つた。

多左　イヤ、面目次第もござらぬ。

ト思はぬ人にゆかりの顏なと下座にて唄ふ。

與五　今の今まで、さう云ふ心とは、知らなんだ〳〵。

多左　これを知られて御覽じろ。御家老役が相勤まらぬ。

ハ、、、、、。サ、、貴殿のお話し。承はらう〳〵。

與五　サア、私しがお話しと申しまするど、畜生のやうな奴とは露知らず、殿樣よりお預かりの、大切なる羽衣の茶入れ、百五十兩の質物に置き、當惑いたす、只今の仕儀、御推量下されませう。

多左　なんの、それしきの事。さのみ苦勞に致さるゝ儀にござらぬ。拙者が賴みさへ承知いたして下されうならば只今の茶入れは、請け戻して進上いたさう。

與五　すりやアノ、御深切でござりまするか。

多左　侍ひ冥利。刀に掛けても。

與五　エ、、有り難うござりまする。

ト下座より大藏、彥助、出て來る

大藏　多左衞門どの、奧方樣のお召し。

彥助　一遍とお尋ね申しました。

ト多左衞門、うろたへ、こなしあつて

多左　只今それへと申しておくりやれ。

兩人　ハテ、いつにない多左衞門どのには、ソワ〳〵して。

ト吾妻を見て、頷づき

ハ、ア、件の。

多左　これサ。聲高に仰せらるゝな。斯く顯はるゝ上は是非に及ばぬ。かねて話し置きたる婦人でござる。

大藏　アノ、藝者の吾妻が、どうして爰へ。

多左　サア、久しく便りも致さぬとて、わざ〳〵逢ひに見えました。

彥助　そんなら疾から、極まつて居りまするな。

多左　サア、そこを少と手ぬかりにしてござれども、先づ身請け致して、妾宅など構ふ積り。

大藏　慈な御家老どのゝ色男ぶ。

多左　知つた者ども、他言は申すまいぞ。その代り、各々方の立身の義は、身共、承知仕つてござる。

大藏　兎角浮世は斯うしたものおやえ。

彥助　ツ、テン〳〵。

多左　其やうに燥てさつしやるな。そんなら與五郎、キツと賴んだぞや。

與五　お氣遣ひなされますな。命にかけて請合ひました。

多左　忝ない。南無、大明神さま〳〵。

ト踊り地になり、多左衞門、ト子にて與五郎を煽ぎ立て、大藏、彥助附いて、踊り浮かれて入る。と、柴垣の蔭より吾妻、出て來り、與五郎に取りつく。

吾妻　與五郎さま、逢ひたかつた〳〵たわいなア。
ト與五郎、吾妻を突き退け
與五　畜生め。なんのおれに逢ひたからう。其方の逢ひたがるは、多左衞門であらうがな。
吾妻　エヽ、そりや何を云はしやんすぞいなア。久しくお前に逢はぬゆゑ、云ひ譯けのお簾さんぢやと嘘ついて、御門を通り、やう〳〵の思ひで、爰まで來た出合ひ頭に多左衞門に逢うて、そう事なしの間に合せ。出放題を云うたれば、ほんまの事にして居たわいなア。
與五　イヤ〳〵、多左衞門に云ふがほんまやら、おれに云ふがほんまやら、ごつたになつて分らぬわいの。
吾妻　エヽ、モウ、わたしが心を知らぬかなんぞのやうに、いつお前に嘘云うた。起請誓紙も取交した二人が仲、疑ふも程があるわいなア。
與五　イヽヤ、惚れると愚痴になるものよ。
吾妻　さう云ふお前が、いま多左衞門に、なんと云はしやんした。命に替へて吾妻を取持たうと云はしやんしたぢやござんせぬか。そりやお前聞えぬぞえ。
與五　サア、おれも腹立ち紛れの中へ、茶入れの質請け、切端詰まつて取持たうと云ひは云うたが、云ひ交した其方を、外の男に帶解かす事、ナニ嬉しからうぞいなう。
吾妻　そんなら、今のは嘘かえ。
與五　眞赤な嘘ぢやが、多左衞門が眞實にして居る、この仕返しはマア、どう附けたらよからうぞいの。
吾妻　わたしもそれが、案じられるわいなア。
ト多左衞門、火藏、これを見て怒つて入る。
與五　いつものやうに抱かれて寢や。
吾妻　エヽ、憎らしい。
ト抓る。
與五　アイタヽヽヽ。
吾妻　エヽ、モウ、實のないのも事に依るわいな。
ト後から肩へ取りつく。奧にて、與五郎どの〳〵と呼び立てる。與五郎、驚ろき
與五　ハツ、只今それへ……サア、それにつけても多左衞門どの。
ト立ち上がる。下座より多左衞門、利八出て來る。皆皆顏見合せ
與五　多左衞門どのか。
多左　與五郎どの、委細は利八に承はつた。併し、百五十兩と申す金子、この處に持ち合さぬ。後程下宿いたすま

で、この品、質入れの替へに、只今の急難を遁がれ召され い。

　ト印子の鯉の箱を出す。

與五　こりや、お家の重寶、印子の鯉。この品を渡しては。

多左　ハテ、後程拙者方より金子を御用立てるまでの儀。前の物の取替へ品ではござらぬ。貴殿の御所持の品。その上多左衛門、呑み込んで居つたれば、ハテ、すべてはどうでもなる事でござる。

與五　段々の御深切。然らば、お指圖に任せまして。

多左　アヽ、コレ〳〵。拙者指圖ではござらぬぞや。

與五　承知仕つた……サア利八、この印子の鯉は、唐土蕭綵に文武帝の描きし毘明。この鯉の形をいんも十斤にて成亮に食して描かせし印子の鯉。定基入唐の折から、行く末長く代々千葉家の重寶。千金にも替へぬ寶なれども、差當りこの場の手詰め。茶入れの替りに、是非ともこれを預かりくれい。

利八　承りますれば、御大切の品。よもや間違ひもござりますまい。左樣なれば、茶入れと引替へに仕りませう。

　ト鯉と茶入れの箱を取替へ、懐中より證文出して

入れ替へなれば、證文は矢ッ張り、茶入れの證文に致して置きませう。

與五　兎も角も。

利八　左樣なら、お預かり申しませう。あなた、慥かにお預かり下されませう。

　ト鯉の箱を抱へて利八、向うへ入る。合ひ方になり、奥より有右衛門、出て來る。

有右　與五郎、どう致したものでごんす。最前より相待ち居るに、羽衣の茶入れを、如何取り置いた。

　ト與五郎、茶入れの箱を、有右衛門が前へ出す。

與五　成る程、御尤も。只今持參仕らうと存ぜし處。イザ、お受取り下さりませう。

有右　相違なき羽衣の茶入れ。よく〳〵見極めて、我れら受取り申した。多左衛門どのには、御狀箱封印の儀を頼み奉りまする。

多左　然らば、御同道仕らう。與五郎、これにお居やれ。

與五　ハッ。

　ト唄になり、多左衛門先に、有右衛門、茶入れの箱を持ち、下座へ入る。與五郎吾妻、顏見合せ思ひ入れ。

合ひ方になり、下座より治郎左衛門、出て來る。

治郎　與五郎、これに居つたか。

與五　ハッ、親人樣、早速申し上げまする。この度大殿樣より、御飛脚にて申し參りました羽衣の茶入れ、明日未明に御返事を延べられ、御藏より出されんと、奥方香取御前さまよりの仰せつけ。只今有右衛門どののお立合ひの上にて、直にお渡し申しましてござりまする。

治郎　それは重疊。併しながら、先方へお手渡しの筈。大殿樣には茶道を好み給ひ、あらゆる品を御持參なされても、風雅の道、殿のお眼鏡を以て、其方茶箱預かりの役目の仰せつけられたは、有り難い事と、仕損じのないやうに、且はお帳面にも書き損じなきやう、有右衛門どのとも申し合せ、早速日記に記し置きて、萬事氣を附けい。

與五　畏まりましてござりまする。

ト治郎左衛門、吾妻を見て

治郎　最前より見れば、この處に見馴れぬ女子。與五郎、ありや何者ぢや。

ト吾妻、思ひ入れ。與五郎、思ひ入れあつて

與五　成る程、御存じござりませねば、御不審は御尤も。この女子は、なんでござりまする……親人も御存じの、山崎與次兵衛が娘、お靜でござります。

治郎　ヤ、なんと申す。與次兵衛の娘のお靜ぢやと申すか。ヤレ／＼、さうとは知らず、餘所のやうに思うて居つた。誠に互ひに初めの目見には、懇ろに致し居つたが、久しうて逢ふなア。聞けば何れかの屋敷に勤め居つて、劍術柔術を躾けると、與次兵衛が話し。侍ひの女房には打つてつけぢや。サ、何れの屋敷に勤めて、何御奉公を致し居つた。遠慮なしに、ズッと側へ來やれ／＼。

ト喜ぶ思ひ入れ。吾妻、もぢ／＼して

吾妻　ハイ、お構ひなさつて下さりますな。爰が勝手でござりまする。

治郎　コレサ、何にも遠慮する事はない。サア、爰へおぢやれ／＼。

吾妻　ハイ／＼。その話しは、不調法で、どのお座敷へ出ても。

與五　エヘン／＼。

ト氣の毒なる思ひ入れ。

吾妻　イエ、お座敷へお召し下されましても、アノ客人が……イエ、お客樣が、どうも爰では酒が呑めぬ。山へ行

からの爽の宮のと。
治郎　待ちやれ。山へ行からの爽の宮とは、ハ、ア、何か、お庭の内に、蛭子の宮が勸請いたして居ると云ふやうな事か。
吾妻　サア、それはな。
ト支へる。與五郎、氣遣ひの思ひ入れ。この途端、奥にて「若殿樣お入り」と呼ぶ。治郎左衞門下がる。吾妻、悧りする。與五郎の袖へ縋る。唄になり、小次丸先に、香取御前、大藏出て來り、皆々居並ぶ。
有右　これは〳〵、治郎左衞門どの、最前より奥方を始め、若殿樣にも、取分け今日は端午の儀でござれば、若殿の兎角御機嫌損ねぬやう、皆々へも申しつけましてござりまする。
大藏　左やうでござる。明日は早朝に大藏をお藏拂ひに見られんとの御評議。書翰にて、取敢へず御狀を下されては、どうでござらう。
治郎　その儀も疾と奥方へ伺ひましたる上の事と、承知いたして罷り在りまする。
小次　コレ治郎左衞門、父上へこの小次丸が願ひには、少しも早うお目にかゝりたう存じますると、お話し詳しう申し上げてくれよ。
治郎　ハア、若殿樣にも大人しう、お留守いたし居りますると、申し上げまするでござりませう。
香取　よう父上へ御傳言申し上げやつたか。それにつけても治郎左衞門、御狀の次手、先達て御殿に仰せ居られた奉公人、今以て心當りはないかいなう。賤しからざる女子もあるぞ、どうぞ早う、差上げたいものぢやが。
ト最前より吾妻を見て、合點の行かぬこなし。
治郎左衞門、それなる女子は何者ぢや。
治郎　ハツ。お目に觸れましたる上は、無禮申し上げねば相成りませぬが、彼れめは幼少の砌り、悴與五郎と夫婦約束いたし置きましたる、山崎與次兵衞が娘の、靜めでござりますて。
香取　ほんに、さうであつたかいなう。幼ない時ゆゑ、とんと見違へました。でもマア、好い器量になりやつたなう。折り〳〵は、ちと屋敷へも上がりやつたがよいぞや。
吾妻　有り難う存じまする。
治郎　この上とも、悴同樣に、お目をかけられ下さりませう。

多左　ト下座より多左衛門、出て來て
治郎左衛門どの、其許までも同様に、奧方を蕩らす
のか。その女は眞赤な似せ者でござるぞ。
ト皆々惘りする。與五郎、思ひ入れあつて
與五　こりや、多左衛門どのゝお詞とも存じませぬ。如何
いたしてこの女が、似せ者でござるな。
多左　成る程、盜人猛々しいとは汝が事。まんまと御主人
まで一ばい欺める氣か。この女は、誠は八幡町の藤屋次
左衛門が抱への、吾妻と云ふ藝者に違ひあるまいがな。
ト與五郎、當惑したる思ひ入れ。
吾妻　モシ／＼、滅多な事を仰しやりますな。其やうな者
ぢやござんせぬぞえ。
多左　まだ／＼吐かすな。證據は山崎與次兵衛、參れ。
ト下座にて
與次　畏まりましてござります。
ト與次兵衛、以前の形にて出て來る。
あはたゞしいお召し。見ますれば御前様も、これにお入
り遊ばされまするか。して、御用の趣きは、如何やうな
儀でござりまするな。
多左　何はさて措き、それなる女は、其方の娘、靜と申す
女子か。
ト吾妻、顏を背ける。與次兵衛、いろ／＼と顏を見て
與次　どう云ふ譯かは存じませぬが、この女を私しの娘靜
とは、思ひも依らぬ事でござりまする。まだ／＼私しの
娘は、脊もずつくりと高うござりまして、早く申せば、
ぐにや宮に、よう似て居りまする……エヽ、聞えた。こ
の女が、私しの娘靜と申して。
多左　當屋敷へ誘き込んだは、橋本與五郎。
ト治郎左衛門、ギヨッとする。
有右　して、この女は。
多左　云はずと知れた藤屋の吾妻サ。サア與五郎、これ程
慥かな證據が出ても、與次兵衛の娘だと云ふのか。
ト與五郎、赤面して居る。
多左　イヤサ、これでもお靜だと云ふのかよ……ハヽヽ
ハ。お納戸役も勤められる、橋本治郎左衛門の御子息が、
斯やうな身持ちで相濟まうか。世上へこの儀漏れあつて
は、第一お家の名も出る事だ。……アヽ、氣の毒な。こ
れからは治郎左衛門どのゝ御審判を、これにて見物いた
さうかい。
ト多左衛門、莨のんで居る。バタ／＼になり、花道よ

り利八、以前の形にて、鯉の箱を抱へ、走り來りて、
直ぐに

利八　コレ〳〵與五郎さま。こなたはな〳〵。とんだ人だ。
先刻にこなたの手から受取つた印子の鯉。
ト與五郎、利八が袖を引いて、云つてくれるなと云ふ
思ひ入れ。
指かつしやい〳〵。斯うなつて袖を引いたり、目顔で知
らせて、云ふなと云うたとて、これを云はずに置きやア、
わしが百五十兩と云ふものを、棒に振つてしまはにやな
らぬ。コレサ、こなたもなんの某と云ふ武士の子ぢや
ないか。その武士が、羽衣の茶入れを百五十兩の質に入
れて置いて、その茶入れが急に要るから、請け戻すのな
んのと、大きな事を云つても、錢三文の才覺も出來ない
で、剩さへ印子の鯉と入れ替へにすると、この箱を渡し
て、持つて歸る。明けて見りやア見さつしやい。清水燒
の花瓶だ。
ト出して見せる。與五郎、ギヨツとする。皆々思ひ入
れ。
マア、膽も潰れまい事か。今に動悸が止みやしない。サ
ア茶入れを戻すとも、百五十兩渡すとも、方を附けて下
さい。どうするのだ〳〵。

有右　何は差措き、茶箱預かりの役は與五郎。仔細ぞあら
ん。差當つて坊主衆を。ソレ大藏。

大藏　心得てござる。
ト大藏、下座へ入る。香取御前、合點のゆかぬ思ひ入
れ。

多左　イヤ、部屋住みの身を以て、油斷のならぬ今の仕儀。
茶器預かりの與五郎、どのやうな事仕出さうも知れぬ。
それを思へば羽衣の茶入れ延引いたしたも、これで知れ
た。氣遣ひなは治郎左衛門どの。近頃慮外千萬と存ず
る。
ト下座より大藏、茶道付いて出て來る。

大藏　御器物藏殘らず吟味いたせしところ、大切なる印子
の鯉は、紛失に相違ござりませぬ。

香取　ヤ、すりや大切な、家に傳はる印子の鯉は、紛失
とや。ホイ。
ト當惑の思ひ入れ。治郎左衛門、與五郎が襟髮取つて
引据ゑ、扇子にて打ち据ゑ

治郎　ヤイ、茲な大盗人の不所存者めが。代々殿の御厚恩
にあづかり、大切なる役目いたさすに、まだ部屋住みの身

を以て、酒色に耽り、悪者共妻を屋敷へ引入れ、剰さへ殿の重寶、印子の鑵を紛失させ、おのればかりか親にまで、恥辱を與へ、どの面下げておめ／＼と、皆へ顔の合されう。この上は其方を手討ちにいたし、返す刀に腹切つて申し譯いたす。覺悟いたせ。

ト刀を振り上げる。

香取　治郎左衞門、待ちゃ。

治郎　何ゆゑお止めなされまする。

香取　成る程、さう思やるは無理ならねど、今與五郎を手にかけて、其方までが一命を捨てたるとて、失せた寶の行くへが知れるか。サア、急く所でない程に、マア、とつくりと思案をしたら、よささうなものぢやぞや。

治郎　ハッ。御尤も。思はざる只今の無禮は、眞平御容赦下さりませう……イヤ、與五郎、今日より親でない、子でないぞ。七生までの勘當ぢや。

與五　ナニ、御勘當とや……ハア。

多左　成る程、こりや斯うありさうなもの。併し、片手打ちにもなりますまい。科は深し治郎左衞門。御身には如何思し召しまするな。

治郎　成る程、與五郎が仕落ちは不屆き。依つて何事も殿の御下問。と云つて今日は端午の式なれば、命を取るも詮なき事。與五郎勘當いたせし上は、治郎左衞門事は。

多左　御前の目通り叶ひ申さぬ。出仕を引いて蟄居召されい。また與五郎は寶の在所知れるまでは、大小取上げ阿房拂ひ。彦助、參れ。

ト下座より彦助、出て來り

彦助　ハッ、御用でござりまするか。

多左　橋本與五郎、衣服大小取上げて、門前よりほッ拂へ。

彦助　畏まりました。サア、與五郎、大小を渡さつしやい。

ト與五郎を引き廻し、大小袴を引剝ぐ。

吾妻　こりや又あんまり。

ト寄るを、突き退け

多左　ハ、、、、好い態／＼。それが橋本與五郎が形かえ。見下げ果てたる業曝しめ。この女は詮議の上、直さま藤屋次左衞門へ引渡し、此奴も窮命させにやアなりませぬ……ソレ、仲間どもへ云ひつけて、與五郎をほッ拂へ。

彦助　畏まつてござりまする……與五郎。立てい。

ト與五郎を引き立てる。與次兵衞これを止めて

與次　先づ〳〵お控へ下さりませう。
彥助　なぜ止めるのだ。
與次　成る程、お家の掟でござりますれば、卑しい町人の私し風情が、お止め申しまするのではござりませぬが、私しもこの與五郞どのとは、ちと遁がれぬ仲でござりまするが、玆に一つのお願ひがござります。今日治郞左衞門どのが、與五郞どのを勘當なされては、もう私しの娘を差上げまするにも及びませぬ。丁度幸ひな事でござりますれば、一旦お捨てなされた與五郞どのを、この與次兵衞が拾ひ上げ、私しが聟に致したうござりますが、なんと治郞左衞門どの、與五郞どのを私しに下されますまいかな。
ト治郞左衞門、思ひ入れあつて
治郞　勘當いたせば赤の他人。他人とならば。
與次　聟に致しても、大事はござりませぬか。
治郞　他人の事に、何構ひ申さう。
與次　エ、、有り難うござりまする。
多左　何事も奥方の御恩。仇に思ふと罰が當るぞ。奥方へ申し上げまする。申さば不忠の彼れ等兩人。當日の祝賀の若殿の節句、最前よりお窮屈にもござりませう。奥方

始め腰元衆、先づ〳〵奥へ。
香取　成る程、それもよからう。とは云ひながら、世はさま〴〵の有爲轉變。子を持つて知る親の恩。昨日に變る今日の仕儀。與五郞、前へ出や。
與五　ハツ。
香取　今さら云ふに及ばねども、隨分ともに身を愼み、やがて寶を取戻さば、今日に變らぬ元の主從。願ひある身は誰れとても、堪忍が第一ぢやぞ。その心を忘れぬやうに何にをがな。
ト思ひ入れ。香取御前、小次丸が提げたる印籠を取つて
この印籠は、殿樣御秘藏なされ、小次丸へお讓りなされし、難波潟と名つけし印籠、いま勘當なしたれども、寶の行くへをくれ〴〵も、心にかくるその敎訓。自らが志し、大事にかけや。
ト與五郞に渡す。與五郞、押し戴き
與五　重ね〴〵の厚き御恩の程、いつの世にか忘れませうか。忝なく頂戴仕つりまする。
香取　その印籠に一首の歌。
ト與五郞、見て

與五　難波潟汐干に遠き月影の、また元の江に澄みまさらめやの歌。

香取　ソレ、この歌も矢張り辻占。其方の心も歌の氣も、しつくり合つた印籠の、やがて鷹を取り戻す、その時こそは元の江に、住みまさらめや。只神佛の力を頼み、折角心に鏡みがあれば、しつくり嵌めた印籠の、放れ〳〵にならぬやうに、心をつけて……治郎左衞門も目通り叶はぬ。兩人とも、そこ立つて行け。

治與　御前樣。

香取　皆も一緒に。

皆々　先づ、お入りあられませう。

ト唄になる。香取御前、治郎左衞門與五郎思ひ入れあつて、小次丸が手を引き、奧へ入る。皆々續いて下座へ入る。治郎左衞門、行かうとする。與五郎、袖を扣へる。思ひ入れあつて振り切り、下座へ入る。與五郎吾妻、泣き落す。合ひ方。多左衞門、與次兵衞、利八殘る。

吾妻　與五郎さん、お前をこの身にしたも、みんなわたし。堪忍して下さんせいなア。

利八　ヤレ〳〵、意屈だ〳〵。サア、これからは百五十兩の金を取つて行かねばならぬ。サア、與五郎どの、百五十兩お目にかゝりたいな。

與五　サア、その金ゆゑに勘當されたこの與五郎。どうして今と云つて。

利八　金はないか。なけりやよいワ。取る所で取つて見せる。うしやアがれ。

ト引摺りて行かうとする。與次兵衞、利八を突き退け、件の金を利八に投げて渡す。多左衞門、思ひ入れ。利八、吃りして

利八　ヤア、こりや金。

ト取上げる。

與次　所詮斯うなつては、與五郎が代りは與次兵衞。物數云はずと百五十兩、受取つたら證文を出せ。

利八　オッと合點。ソレ證文。

ト懷中より證文を出し、與次兵衞へ渡す。

與次　その金さへ濟めば、與五郎に云ひ分は。

利八　なにサお前。

與次　サア〳〵、爰に居て、又どんな風が吹かうも知れぬ。ちやつと奧で支度して。

ト與次兵衞、與五郎吾妻に囁く。

來やれ。

ト合ひ方になり、多左衞門に心を殘し、與五郎吾妻が手を取り、下座へ入る。多左衞門、利八。あたりを見て

利八　さて、巧くいつた。

多左　時に今、改めてその百五十兩、なんとおれに貸してはくれまいか。

利八　アノ、折角取つた百五十兩を。

多左　コリヤ、只は借りぬ。それまでの質物。コリヤ、この印子の鯉。

ト懷中より袱紗に包みし鯉を出す。

利八　こりや又、似せ物ではござりませぬか。

多左　正眞正銘、委細は證文になりとも改めての事。先づこの鯉をしつかりと。

利八　呑み込みました。今の百五十兩がお釜返し。

ト金を受取り

多左　金子は慥かに受取つた。

利八　喜びに一杯、お振舞ひ下されませぬか。

多左　成る程、また生酔か。あやまるぞ。

利八　ハ、、、、、。

多左　來やれ。

ト合ひ方になり、多左衞門先に、利八附いて下座へ入る。時の鐘にて、下座より、與五郎、吾妻。探りながら出て來る。

吾妻　與五郎さん、どうぞ人目にかゝらぬやうに。

與五　聲が高い。この上人目にかゝつては、奥方の心を背く。町人となれば又、詮議の仕樣もあらう。何かは兎もあれ、少くも早う。

ト手を引き、行かうとする。奥にて物音するゆゑ、驚き下の方の柴垣へ小隱れする。奥より治郎右衞門、以前の形にて出て來る。

治郎　慥かに今、これに居つたは、不所存者の與五郎ぢやと思つたが、誰れも居らぬさうな。

ト思ひ入れ。合ひ方になり、下の方へ向ひ

今さら云ふには及ばねど、身から出したその身の科。思ひ當り居つたであらう。それにつけても云ひ聞かせたいは、かねてそれと目を掛け置きたる、放駒の四郎兵衞。今は淺草あたりに住居いたすと聞きしが、ア、コレ、どうぞそれへ便りて、身の上の事を頼み居ればよいに……ア、儘よ。勘當すれば赤の他人。菰冠らうと構ふ事は

ない。いかいたわけ。ハヽヽヽ。某とてもお咎めの身の上。餘所ながら今一度、奥方さまへ。

ト奥にて。

香取　腰元どもは、居やらぬか。腰元ども。

ト聲に驚ろき、思ひ入れあつて、上の方へ小隱れなする。合ひ方のうち香取御前、手燭へ三方をかぶせ、これを持つて出て來る。思ひ入れあつて。

これはマアどうした事ぢや。誰れやらの人聲がすると思うたが、ハテ合點の行かぬ。これにつけても日頃より心善からざる多左衛門。力に思ふ治郎左衛門は、與五郎ゆゑに蟄居の身の上。若氣の過りとは云ひながら、その身ばかりか親までも、かゝる難儀に、お家の寶、どうぞ首尾よう取戻し、やがてめでたう歸參するやう、渡し置きたる難波潟の印籠。親子は一世、主從三世。嬉野の雛子夜の鶴、子ゆゑに迷ふ親心。さぞ治郎左衛門も逢ひたからうが、浮世の義理。またその上にも、さぞ心細く思やらう、どうぞ逢うて渡して聞きたいと、心に掛けしこの路用を。

ト懷中より袱紗に包みし金を出して

どうぞ屆けたいものぢやが、ツイ顏を合しては、手渡しもならぬこの場の仕儀。定めて吾妻……サア、吾妻と云へば聞い事、何れへなりと身を潜め、必らず短氣を出さぬやう……ホヽヽヽほんに、誰れも聞かぬ問はず語り。こりや他人に聞えねばよいが、ナ、それ、儘ならぬこそ浮世なれ。この金も爰へ置いたら、誰れぞ拾ふであらう。どうぞ人の目にかゝらぬ所へ、捨て置きたいものぢやがなう。

ト思ひ入れあつて飛石の上の置き

ホイ、飛石の上で取落したさうな。又折惡しう眞の闇。胸も曇りて月も出ず。

ト此うち治郎左衛門與五郎吾妻、飛石を探し、與五郎、金を取上げ押戴く。

心の闇を晴らす爲、別れに一目。

ト手燭の蓋を取る。皆々顏見合はせ

三人　ヤア、あなたは。

香取　コリヤ。

ト手燭の火を吹き消し

アレ、風の

ト思ひ入れ。治郎左衛門、與五郎、吾妻、手を合せて伏拜む。この途端拍子　　幕

直ぐに花道より角力の太鼓を打つて出る。勝負附け賣り、皆々舞臺より兩方へ入ると　シヤギリ

二幕目　藏前八幡角力の場

役名　關取り、濡髪長五郎。山崎屋與五郎。同番頭、權九郎。藝者、藤屋吾妻。藤屋次左衛門。平岡多左衛門。早野彦助。行司、甚三郎。角力取り、幻竹右衛門。同、立臼杵右衛門。同、床の浦小野右衛門。同、犬ケ鼻久米助。女達、濡髪の小靜。丸屋長吉。關取り、放駒の四郎兵衛。

本舞臺、三間の間、御藏前鳩八幡の額を打ちたる鳥居先。向う一面に角力場にて見切り、御免の高札、額偏れ。棧敷持ち主の名札まで誂らへの通りに飾りつけ、上の方、名物茶屋、長床几を直し、下の方、名古屋の店を半分見せたる道具。爰に若い衆大勢、札賣りの形にて、角力の札を持ち立ちかゝつて居る。表の仕出し大勢、札を買つて居る。角力太鼓にて幕明く。

ト東西より口々の仕出し大勢、いろ／＼の形にて出て來り、皆々札を賣り、捨ぜりふあつて木戸口へ入る。この仕出しに打交り、向うより杵右衛門小野右衛門、久米助、角力取りの形にて肩へ羽織をかけ、一本差しにて出て來る。直ぐに本舞臺へ來る。

若一　こりやアどなたも、お早うござります。

若二　昨夜は吉原でござりませうね。

杵右　昨日の勝負に勝ちを取つたので、いから大勇みに勇んで、昨夜は二丁目へ一座よ。

小野　大酒の上に夜を更かしたから、今日は餘ツぽど揉んで出ざアなるまい。

久米　ソレサ、醉つた紛れに越後節で、大きに草臥れた。

杵右　その上お前は、あの名代の新造を口說くので、やかましくて寝られなんだよ。

久米　相方の女郎めが、客取りと吐かしたから、せめて名代の新造でも立合はうと、四十八手を盡したところが。

小野　一番撲つたか。

久米　なにサ、撲るどころか、遣り手に知れて。

杵右　どうした。

久米　油を取られた。
杵右　おきやアがれ。時に濡髮どのや放駒どのは、まだ見えぬか。
若一　左樣でござります。
小野　濡髮どのは格別、放駒どのは內證で、今度の角力は七分持つて居るから、勘定でどうでも運ぶのサ。
杵右　時に、今日の見物はどうだ。
若一　今日は放駒と濡髮で、待ちに待つた顏觸れゆゑ、爪が立ちませぬ。
若二　棧敷が二兩、札殘り、一枚五百いたします。
杵右　そりやアとんだ事だ。爰がよけりやア、また社の爲だ。そんなら一服のんで
三人　踊取り場へ行かうか。
と三人、床几に腰かけ、煙草を吸ひつけると、出の唄になり、花道より與五郎、やつし町人の形。菅笠をかむり、權九郎、手代の形、同じく菅笠を持ち、扇子を使ひながら出て來り、向うのあゆみより南の花道へかかる。後より多左衞門、羽織大小の形、頭へ手拭をかけ、扇子をかざし出て來る。後より吾妻、藝者の拵らへ、日傘をさし、仲居二人、日傘を相合ひにさして、彥助、紺の看板、一本差しにて、多左衞門が菅笠と風呂敷包みを持ち、次左衞門、町人の形にて附いて出て來る。この人數は花道を本舞臺へ來て、吾妻、仲居二人、與五郎を見つけ囁き合ひ、思ひ入れ。與五郎も思ひ入れ。多左衞門を見て與五郎、笠にて顏を隱し、皆皆舞臺へ來り、與五郎、權九郎は、ちやつと上の方の床几に腰をかける。その外は正面よろしき所へ腰をかける。
杵右　こりやア多左衞門さま。
三人　今日も御見物でござりますか。
多左　こりやア關取り達、十日が十日見る身共を、今日も御見物とはどうだ。
小野　イエサ、向島の武藏屋の女中や、美しい者を御同道ゆゑ、てつきり船だと思つてサ。
仲一　成る程、こりや好い感のつけ所でごんすわいなア。今日はわしらが賴んで、綾瀨の方へグツと上る筈を、ヤレ下げろ〳〵と云はしやんして、あの隅川岸へつけなんしたも、自體お好きの角力を見なさんす心でござんせう。ナア吾妻さん。
吾妻　サイナア、梅若さんの方へ行くと、船頭衆へも云ひ

つけて置いて、乘り出すと直ぐに此方の方へござんしたゆゑ、手筈が違ふかと、彼の人へ知らせてやるのに、大抵や大方。

仲一　エヘン／＼。

多左　これは／＼、その彼の人とは誰れが事か。

吾妻　サア、それはな。

仲二　アヽ、モシ／＼、今彼の人と云はしやんしたは、お前さんの事ぢやわいなア。

彦助　なんだ、おらが旦那が彼の人だ。天狗ぢやアあるまいし。

多左　天狗と云へば今の人が、天狗のやうに思つて居る、おらが贔屓のあの濡髪の所へ、彦助、昨日手紙を屆けたか。

彦助　しつかりと手渡し致しましたりやア、關取りが承知だと申しました。

多左　よし／＼、そんならおれが角力見るうち、皆はあの花鳥屋の奥に待たせて置いて、酒肴を取揃へるやう云ひつける事はよいか。

彦助　それも承知でござりまする。

多左　そんなら關取どもへ遣る祝儀も包んで置かう。

彦助　エイ、それも承知でござりまする。

多左　よく承知をする奴だ。この承知を、ちつと吾妻に遣りたい。いつでも不承知な奴サ。

彦助　吾妻がなんの不承知な事がござりませう。百五十兩と云ふ金を、手附けにお渡しなされたからは、もう證金の百五十兩が濟めば、あなたの奥樣。

與五　エヽヽ、そんならアノ吾妻が手附けを。

ト恟りして顏隱した菅笠を取り落す。多左衞門見つけて

多左　ヤア、わりや與五郎ぢやアないか。

ト與五郎、面目なき思ひ入れにて、立つて行かうとする。

アヽ、コレ／＼、何にも逃げる事はない。多左衞門が用がある。爰へ來い。

與五　エイヤ、それでは。

ト行かうとする。

多左　コレサ、面目ないと云ふ事か。ナニ、それを構ふ事か。屋敷に居るうちは、殿のお目を掠め、親の意見も用ひず、この多左衞門まで一杯嵌めた報いだ。忽ち勘當されても、まだ思ひ切らず、さかりのついた犬のやうに、

吾妻が後を追うて歩く大たわけめ。

ト與五郎、これにてムッとしたる思ひ入れにて、立ち戻り

與五　イヤ、多左衞門どの、仕官のうちこそ高下もあるし、そのたわけゆゑ勘當請け、町人となつたれば、義理も禮義もいらぬ。こなたの庇で斯う云ふ身になつた與五郎。恨みのたけが云ひたけれど、身を顧みて云はずに行くを、用があると留めて、用は云はずにこの身の讒奏。あんまりであらうぞや。

權九　それ〳〵、親旦那與次兵衞が、捨てた子なら拾はうと引き取るお前樣。なんの掛り合ひもなし、この侍ひに惡口される謂はない。多左衞門さまとやら、用があるなら云はつしやりまし

多左　その用と云ふは外でもない。思ひ切つておれにくりやれ。

與五　そりや何を。

多左　この吾妻を。

吾妻　エヽ。

ト思ひ入れ。

多左　斯う云やア、どうか弱い音を出すやうだが、身請けして手活けの花にしたところが、われと云ふ者がありましちやア、打解けた戀がない。われが口から切れてしまつたと、一言云やア吾妻だとて、相手のない喧嘩はならない。さすれば、ズル〳〵とおれが奥樣。サア、さつぱりと思ひ切つて、吾妻はおれにくれろ。

與五　そんなら、この與五郎が邪魔になつて、吾妻が自由にならぬゆゑ、思ひ切つて此方から、切れてくれ、相手なければズル〳〵と。

ト思ひ入れあつて

ハヽア、こりや聞えた。そんなら斯う云ふ身になつた與五郎ゆゑに、それとなしに突き出して、多左衞門が、おのれは襟に付くな〳〵。

ト吾妻、思ひ入れあつて

吾妻　ナンノイナア。張りと云ふ字は吉原ばかりにも、ござんせぬ。宮の下の八幡前にも、意氣地もあれば張りもござんす。襟元についてよいものかいなア。

多左　張りがあつても意氣地があつても、金と云ふ奴には、お堪りはないしサ。

彥助　それ〳〵、お旦那樣から百五十兩と云ふ手附けが入つて居れば、もう六阿彌陀も五番目だ。

次左　左様でござります。どちらなりとも早う金が濟めば、その方へ遣るのが親方の金廻し。まだ濟す玉を買はにやアなりませぬ。

小野　モシ〳〵、與五郎どの、お前も山崎屋の内へ聟養子にござつたからは、一つは私しどもも外聞だ。手附けの金をこちらからも、お渡しなされな。

與五　でも、この間引取られて行くと、直ぐに娘御がおれを嫌うて、あられぬ身持ちに居る間なれば、内で都合はどうも出來ぬ。

權九　サア、他所の店なら、この番頭の權九郎が懷合ひでも百や二百の遣繰りは出來れども、何を云ふにも大且那が、手を突ッ込んでの算用ゆゑ、猫一つでも出來ず、名代のしわん坊ゆゑ、内へ行つては猫の事。ハテ、困つたものだわえ。

多左　爪へ火を灯して、仕出したる與次兵衞が身代。どうしてどうして、藝者を請け出す金が出來るものか。埒の明ない事に氣を揉まずと、切れてしまへ。

與五　イヤ〳〵、金は一時にも出來るもの。今切れたと云うては顏が立たぬ。例へどのやうな事があらうとも。

多左　思ひ切られぬか。

與五　くどいわいの。

吾妻　與五郎さん、嬉しうござんす。同じ藝者も多い中、東屋の太夫さんの弟子に、吾妻と云うては人に名も知られた藝者でござんす。例へ金せきにされても、身請けの名は穢しても心までは穢さぬ程に、必らず愛想を盡かして下さんすなえ。

多左　エヽ、忌々しい事を吐かしやアがる。その惡意地の根は、この與五郎だから、邪でも非でも思ひ切らさにやアならない。コレ女ども、吾妻を爰へ置いちや、詰め開きがむづかしい。次左衞門も一緒に、地内の内へ連れて行きやれ。

吾妻　イエ〳〵、わたしや脇へ行く事は否でござんす。後で主がどうなるか。

次左　ハテ、惡い料簡だ。今にでも與五郎どのから金が來れば、どちらをどつちと云やアしない。金の濟み切る方へ、お主は遣る身の上だ。

仲二　それ〳〵、權九郎さんが付いて居やしやんすから、滅多な事はなさんせぬ程に、マア〳〵、お前は八幡さんへ。

仲一　それがよいわいなア。

吾妻　おやと云うても。
皆々　ハテマア、ござんせ。
　ト合ひ方になり、嫌がる吾妻を捨ぜりふにて、仲居二人、次左衛門、無理に連れて入る。
與五　權九郎おやや。
　ト續いて行かうとする。角力三人、立ち塞がり
杵右　若いの、待ちやいの。先刻から段々と聞いて居りやア、みんな仲間の世話になる、多左衛門さまが仰しやる事を、埒をつけて行かんせ。
小野　それ〳〵、男がよくつて大通で、金が澤山。これ鬼に鐵棒と云ふ、多左衛門どのに張り合はずと
久米　吾妻を上げませうと、あやまつて出たがよい。
杵右　否か應かを
三人　聞からかえ。
　ト三人、前に立ち塞がる。與五郎、氣味の惡き思ひ入れ。
彦助　關取達の腰押しは忝ないが、今日の場所が大事だ。高が生白けた弱さうな野郎一疋、弱い奴に逢つちやア、ちつと煙たいこの男。いつも遊所の通ひには、遲れぬお供の因縁で、早野彦助と云ふ足の輕い足輕が相手になつて、一番聞くべいか。
多左　成る程、こりやア相當な相手だ。兎や斯う云ふまでもない。聞けば正に二世までかけ、變るまいと云ひ交した、起請を取交して居るげな、その起請を此方へ引ッ奪れ。
彦助　畏まりました。サア、野郎め、吾妻が所から行つた起請があらう。サア、それをおれに渡せ。
與五　ナニ、起請とはえ。
彦助　ナニ起請とはえ……此奴は起請馬鹿にした奴だよ。
與五　エヽ、吾妻が所から寄越した起請を、今爰で、アノこなさんに渡さねば。
杵右　爰一寸も
三人　やらないワ。
與五　エヽ。
　ト慄へながら思ひ入れあつて
よい〳〵。わしも町人の子になつたからは、侍ひの時のやうに、卑怯未練な心は出さぬ。渡すも渡さぬとも、相手になつた上の事。
彦助　こりやア面白い。そんならこの彦助と、一番出入りをして見る氣か。

與五　なんでもない事ぢや。

ト力む。權九郎、與五郎の袖を引き

權九　モシ〳〵、そんな強い事を云つてもようござりますかえ。

與五　ハテ、よいわいの〳〵。こなたのやうな意氣地のない者は、怪我をせぬやうに後へ行つて見て居るものぢや。サア、彥助、大儀ながら、ちよいと、そこへ出てもらひませう。

彥助　おきやァがれ。芝居でする通りに、勝負に做らへたな。

ト前へ出て

出たら、なんだ。

與五　外の事でもない。こなさん、わしが身にも命にも替へぬ若妻が起請を、寄越せと云はんすか。

彥助　知れた事だ。出しやァがれ。

トかゝる。

與五　コレサ、マア、急かんすな〳〵。斯う度胸が座つたからは、腕ッ切り出入り致する程に、チッと落ちついてにさんせ

權九　モシ〳〵、ようござりますかえ。

與五　ハテ、よいわいな〳〵。覺えがなくて、相手にならうと云ふものか。大力と呼ばれたる唐土の樊噲が末葉、坂田の金時が由緣の者。酒呑童子を退治したる、小林の朝比奈より、形見に貰うた力量、油斷を見すまし、ヨウ。

トうつかりして居る彥助が足をすくつて、引ッくり返し、與五郎、一散に向うへ逃げて入る。彥助、後を追ひかけて入る。舞臺は皆々呆れて居る。揚げ幕にて

彥助　オヽ、痛い〳〵。こりやァどうぢやぞい〳〵。

小靜　どうもするこつちやない。わしと一しよに、來やしやんせやなア。

ト摺り鉦入りの男達の出の唄になり、花道より小靜、着流し、髻子結び、下駄がけ拵らへ、尺八を差し、女達の拵らへにて、彥助が腕を捻ぢ上げて出て來る。彥助腕の痛む思ひ入れにて、後じざりに歩んで出る。與五郎ついて出て來る。

彥助　オヽ、痛い〳〵。腕は引き拔けるやうだ。とんだ力のある女めだ。なんと云ふ女ッちよだ。

小靜　わしかえ。わしやなんぢやわいなア。遊びに行く若い衆が、昨日も吉原で女郎が投げ居つた、イヤ深川で投

げられたと、話しを聞いてな、女子にも其やうな、男を自由に投げられるものかと、わしも投げて見たいと、先度藥師の御縁日に、五丁目の勇みの男の來るさかい、行き逢ひにやつたれば、手もなう側からコロ〳〵。それより喧嘩が面白うなつて、彼處でも投げ、爰でも投げ、女郎の話しは振られる事と、後で聞いても今では大事、人を投げるは癖になり、どんな勇みな人さんでも、濡れ手拭を裂くより手輕いゆゑ、誰れ云ふとなくこの頃は、濡髮の小靜と異名を取つた、女達のアイ、見習ひぢやわいなア。

彦助　なんだ、女達の見習ひだ。見習ひにしちやア、いゝ手際だ。コレエ、、その女達なら、なぜおれの、アイタタ、、、手を捻ぢ上げたか。

小靜　その譯は、彼處へ行つて云うて聞かさう。ちつとのうち借り切りぢや。辛抱して、行かんせいなア。

ト唄の切れにて本舞臺へ來り、皆々と入れ替りて、彦助を見事に投げ、小靜、眞中にしやんと見得。

權九　ヤア、お前はお靜さん、噂に聞いたより、怪しからん者になつたぞ。

多左　そんならこの頃評判の、濡髮小靜とはわれが事か。

聞きやア與五郎と云ひ交したさうだが、それで肩を持つて、身が家來の邪魔をするのか。

小靜　なんの約束ばつかりで、馬の合はぬ云ひ號け、好かぬ男と思うたりや、紙子着て川へ嵌まらんしよと、その身の三昧、わしが思ふ事ぢやない、アイ、與五郎さんとは、他人向きぢやわいなア。

彦助　そんなら又、なぜおれを、ひどい目に遭はせたのだ。

小靜　わしが足を踏んで、挨拶なしに行くは、侍ひは慮外咎め、町人だけに仕返したのぢや。

權九　そんなら今のは與五郎さんの、肩を持つて出た事ぢやアございませぬな。こりやアさうありさうなものだ。心底嫌ひな聟を、なんぼ大且那とて、無理にもと云はしやるまい。實體な中位な聟が、そこらあたりに居るのに、牛を馬に乗り替へればよいになア。

ト嫌らしきこなし。

小靜　サア、わしは一體男嫌ひぢや。それゆゑ身を我まゝに持ちなし、もし手に立つ男もあるなれば、夫に持たうと無理云ふも、氣儘を通して見たさ。シタガ、世間廣しと云ひながら、強い男もないものぢやわいな。

杵右　こりや面白い。手に立つ程の男なら、夫婦になると聞いちやア、角力仲間でも小口もきく、この立臼杵右衛門も、近付きになつて、見る氣だわえ。

小野　それ〳〵、この床の浦小野右衛門も、付合つて見ようか。

久米　どんぢりは犬ケ鼻、尻尾を巻いて待つて居るぞえ。

杵右　マア、おれから先へ近付きにならうか。

トちよつとかゝるを小靜、杵右衛門が胸取つて

小靜　ホヽヽ、聞き及んだ立臼さん、お角力さんならお角力だけ、辛抱次第で男にせうが、この辛抱がなるかえ。

ト捻ぢる。

杵右　オヽ、痛い〳〵。こいつは茶臼でしめかけるな。手を入れられるは色の初めと知るが、あんまりしめ立てて、息の根がとまるやうだ。

小靜　女子にちよと握られて、その辛抱がならねば、お前の相談もマア、小田原ぢやわいなア。

ト突き放す。

杵右　所を斯うして。

トかゝるを見事に投げる。

小野　口説くと云つちやア七つ屋ても、ころりとさせる床の浦。斯うして當りかけたなら。

ト後より抱きつく。

小靜　措かしやんせ。口で云ふより抱きついて、得心する色事なら、妾から近い釆女ケ原へござんせいなア。

ト突き放す。小野右衛門、中返りをする。

久米　妾はさしづめこの久米助、盛りのついた犬ケ鼻、頭からでも胴からでも、斯う乘りかゝつて行つた時は。

ト胸倉を取る。

小靜　さうすりや此方も、斯うするわいなア。

ト引据ゑる。

犬ケ鼻には相應な、形であらうがな。

ト久米助、四ツ這ひになつてわん〳〵。

杵右　おきやアがれ。この上は地の手を出して。

三人　斯うしてくれべい。

ト一緒にかゝるを、立廻りに左右へ投げ退け、尺八にて打ち据ゑ

小靜　お前方の顏で、わしにかゝるは似合はぬ。似合うたやうに越後節でも、踊つてござんせ。

杵右　オヽ、痛い〳〵。此方は角力の氣で居るに、柔術を出すからは叶はぬ。忌々しい女めだ。

小野　それ〳〵、三つぼの賽を、ひように投げやァがつた。

皆々　合點しねえぞ。

杵右　ぶッ締めろ。

久米　斯う投げられては、濟まないぞ〳〵。

小野　さうだ〳〵。なんでも相手は

皆々　濡髮だぞ〳〵。

　トロ々に喚く。向う揚げ幕にて

長五　オイ〳〵、おれが名を呼ぶは、誰れだ〳〵。

　ト角力の太鼓になり、花道より長五郎、角力取りの拵らへ、羽織を肩にかけ、一本差しにて出て來る。後より一人、取的の形にて、廻し箱を擔いで出て來り、直ぐに本舞臺へ來る。

杵右　相手を逃がすな、相手は

三人　濡髮だぞ〳〵。

長五　コレエ、無性に濡髮々々と、おれが名を呼ぶから、急いで來て見りや、相手を逃がすな濡髮とは、なんの事だ。わいら、氣でも狂つたか。

杵右　オヽ、こりやア元方の關取り。

三人　長五郎さんでごんすかえ。

長五　この濡髮に、何の出入りがあつて、相手だと喚くのだ。

杵右　關取り、こりやア間違ひサ。わしどもも今までは、濡髮と云ふ名は、こなさんばかりと思うて居たら、外に濡髮と云ふがあるから、怒つての事でごんすよ。

　ト長五郎、小靜を見て

長五　ハヽア、そんならこの女中が、この頃方々で噂をする、女達の

小靜　アイ、濡髮と云ふ名を、わしが好いてつけもせぬに、誰れと云ふでなく異名を呼ばれる、濡髮の小靜でござんす。同じ名は時の賣り物にせうとやら。濡髮さん、見知つて下さんせいなア。

長五　そりやァもう互ひの事サ。ハテ、江戸町と二丁目に、扇屋玉屋の二軒づゝ。品川にも大松坂に新松坂、同じ名の殖えるはサア、繁昌の元。喜びこそすれ、なんの氣にかけるものでごんせう。美しい姿に似合はぬ、力業が好きとは、板額巴の昔話しを、今見るやうで潔よい。これから互ひに心安く、出合ふでごんせう。

杵右　コレナ關取り、わしらをひどい目に遭はせた女め、共に仕返しをしてくれうとはしないで、賴もしい今の挨

拶。こりやア女だけ、向うへ馴染んで
三人　わしらを潰さつしやるのえ。
長五　やかましいわえ。これが向うが、腕に般若でも彫つて、鬼のやうな奴なら仲間づく、肩を持つて仕返ししまいものぢやアないが、あれ見ろ、中山富三郎に似た美しい娘。あの娘に投げられたと、云やア云ふ程外聞が悪いが、それでも仕返しがしたいか。
三人　サアそりやア。
長五　それ見たか。所詮立派な口はきけない。黙つて居やれ。
三人　合點でごんす。ホイ、きくぢやアなかつた。
長五　おきやアがれ。濡髪さん、聞かつしつたか。あの恰腹ぢやア、一日一升飯も喰ふであらうに、なんの能とてはごんせぬ。こなさんも腹は立たうが、わしが詫び言云ふ程に、不承してやつちやア下さるまいか。
小静　ナンノイナア。人に知られた關取りさんの挨拶と云ひ、兎や斯うもつれた云ひ分も。
長五　そんならわしに下さるか。
小静　アイ、さらりとこの場は隅田川。
長五　水に流して
小静　出入りは五分々々。
長五　合せて十分に十日目の
小静　角力の場所も藏前の
長五　奴等が不作法。
小静　わたしが慮外。
長五　遺恨殘さず
小静　付き合うて下さんせえ。
長五　さう云はつしやれば、わいらまで立つと云ふもの。成る程、解つたものだぞ。
小静　ほんに解つたと云へば、仕掛けた出入り。今日は八幡の地内で待つて居る約束。これから行つて居ずばなるまい。コレ權九郎、わしが知つた事ではなけれど、此やうな所に、何處やらの人も、わが身も居るはいらぬものぢやぞや。そんなら重ねて、濡髪さん。
長五　濡髪どの。
三人　とは云ふものゝ。
　トかゝるを、手早に投げ退け
小静　云ひ分あれば何時でも、出入りにござんせ。待つて居るぞえ。
　ト唄になり、小静、突き袖いたし、振つて奥へ入る。

多左　なんの事だ。飛んだ所へ女めがうしやアがつて、廂を貸して母屋と、たうとう此方の事が脇になつた。

彥助　ソレサ、サア、與五郎、先刻の起請を寄越しやアがれ。

與五　イヤ、どのやうな事があつても、遣る事はならぬわいなう。

彥助　ならぬと云やア。

ト與五郎が懷へ手を入れて、守り袋を引き出す。與五郎、遣るまいと立廻り。此うち權九郎、守り袋を取つて、中より起請を出し、懷へ入れる。彥助、與五郎に摑みかゝるを、長五郎、彥助を取つて見事に投げ出す。

彥助　オヽ、痛い／＼。

多左　ヤア、こりやア長五郎、身が下郎をなんで投げた。ハヽア聞えた。こりやア誰れにかしやくられて、この多左衞門を袖にして、向うの方へ廻つたな。

長五　オヽ、好い推量でごんす。こなさんをほんの侍ひかと思つて、今日まで付き合つて居つたが、先刻からの樣子を見るも氣の毒だ。モシ、與五郎さんとやら、慮外ながら、これからこの長五郎が、こなさんの腰を押す程に、さう思うて、落ちついて居るがようごんす。

與五　エヽ、そんならアノ濡髮どのが。

ト嬉しき思ひ入れ。

長五　腰を押しかゝつちやア、繩張りの內へ指でも附けさせる事ぢやアござりませぬ。

權九　こいつは堪らないわえ。自體放駒の四郎兵衞が此方の幕の上に、濡髮關取りが一枚飛び入りに入つちやア大事だ。今も今とて大事の物を……よくしまつて置きなさいまし。

ト起請のない守り袋を與五郎に渡す。與五郎、取つて懷中する。

長五　サア、彥助とやら、一突きとやら。この長五郎の腰を押す、與五郎さんに手出しをして見なさるか。どうだどうだ。

ト彥助、氣味惡きこなし。

多左　ヤレ彥助、日頃の廣言は爰の事だ。サア、死にツくらをしろ／＼。

彥助　モシ／＼お旦那、拙者も大分向うて參りました。これにやア第一喧嘩に一割損のござります。オ、イタ、、、モシ、お前も爰にお出でなされましては、飛ばッちりが

かぶりますから、早くどこぞへ、お出でになりませ〱。
多左　イヤ〱、今まで目をかけてやつた、恩を忘れた長五郎め。刀の手前、存分に云はにやアならぬ。
彦助　ハテ、恩知らずの畜生力士に、構ふ事はござりませぬ。
杵右　それ〱、なんぼお前が腹を抱へても、いま日の出の關取り、手出しはいらぬものでごんす。
久米　それよりは、わしらと一緒に、地取りでも見に參りますサ。
多左　エヽ、人が挨拶せずば、切りたいわえ〱。
　トきつぱ廻す。
長五　切る〱と云つた奴に、切つた例しはないものサ。
彦助　それ〱、歸る〱と云ふ客に、歸つた例しはないものよ。
取的　おきやアがれ。
多左　イヤ〱、切るぞ〱。留めるな〱。放せ〱。
皆々　ハテマア、お出でなさりませ〱。
　ト無性に力む多左衞門を、角力取三人、彦助、思ひ入れにて留めながら、皆々木戸の内へ入る。
與五　長五郎どの、忝ない〱。
長五　なにサ、若い時には幾らもある事。マア、その起請とやら、大事にして持つてござりませ。
與五　八百石と釣替への起請なれば、お墨附も同然ぢや。
權九　こりやア、さうありさうなものぢや。
長五　時に聞けば、こなさんは寄り方の關取り、放駒の四郎兵衞が爲には主筋の樣子。それで強く世話にすると聞きましたが、さうでごんすかえ。
權九　左樣サ。
長五　人の世話をかき取つてするぢやアごんせんが、わしも今の侍ひへの達引づくで、こなさんの腰を押すと云ひかゝつて、金づくでも命づくでも、金輪際引く氣がごんせぬが、放駒も、さう云つて居りますかな。
與五　サア、この與五郎が事ならばと。
長五　心で世話はする氣であらうが、不躾ながらこの長五郎程、かいが廻らぬ。同じ世話をされるなら、金の段でぎし付けるよりは、どんと仕込みの來るまで、形のつくがいゝぢやアごんせぬか。
權九　そんならアノ、放駒をよして關取りに。
長五　サア、わしが方から指圖はせぬが、どうも放駒ぢやア、埒の明きさうもない話しでごんすゆゑ。

與五　こなさん一人で、世話いたして下さる氣か。
長五　サア、一人の方が、世話の仕甲斐があるといふもの
サ。
與五　それ程に思うて下さるは、マア／＼、忝ない／＼。
ア、コレ、なんぞ遣りたいわえ／＼。と云うたところが
目錄は遣れず。オヽある。コレ／＼、手元にあるはこの
印籠　こりやちつと譯のある品なれど、吾妻が事を身請
けにしてくれると聞いては、何でも遣る氣ぢや。鬮取り、
志しぢやぞ。取つて置いて下されい。
ト提げて居る三建目の印籠をやる。長五郎、取つて見
て
長五　なんだ。難波潟汐干に遠き月影の。
權九　また元の江にすみまさらめや。と歌の事でござりま
す。
與五　サ、難波潟と云ふその印籠。鬮取りに似合はぬ品ぢ
やが。
長五　志しは松の葉とやら、そんなら貰つて置きませう。
與五　それは忝ない。それはさうと、先刻に吾妻に逢うた
れど、あの多左衞門が掛けて來たゆゑに、ろく／＼話し
もせなんだが、鬮取りの志しも話して喜ばせたい。外に
も話しがあるが、コレどうぞ。
ト奥を見て思ひ入れ。
長五　成る程、こりやア用もごんせうから、斯うしませう。
わしも勸進元に話しもあるから、これから行つて、もし
逢うたら、爰へ來るやうに云つて進ぜませう。
與五　そんならさうと、云うたところが、鬮取りの言傳は
片便り。權九郎、大儀ながら其方も行つて、來るか來ら
れんかを聞いてたも。
權九　畏まりました。
長五　そんなら與五郎さん、放駒の事を極めて、返事をし
て下さい。
權九　サア、ござりませサ。
ト角力太鼓になり、長五郎權九郎、奥へ入る。
與五　成る程、世の中に人鬼はないものぢや。ア、マア、
思ひかけもない濡髮が、わしの腰を押してやらうと、頼
もしい詞。それにしても、早う吾妻に逢ひたいものぢや
が。
ト此うち合ひ方になり、下座より吾妻、仲居二人出て
來る。
吾妻　與五郎さん、それに居やしやんすかいなア。

與五　吾妻か。おのれはよう、あのマア多左衛門にばかり、引きついて居るな〳〵。

仲一　モシ〳〵、聊爾云はんすまい。吾妻さんの手附けの事、いよ〳〵なる事になつて來るぞえ。

仲二　それ〳〵、お前の方からも相談せずば、お二人の顔が立つまいぞえ。

與五　サア、その手附けの事も何もかも、あの濡髮の長五郎が、身請けしてやらうといなう。

吾妻　そりやアマア、耳寄りな事なれども、最初から二人が事を世話して下さんした、あの四郎兵衛さんにも、一通り話した上の事。

仲一　さうでござんす。もう見えさうなものぢやわいなア。

　ト向うを見て

アレ〳〵、御所おこしの前へ、放駒の四郎兵衛さんが。

皆々　オヽイ〳〵。

　ト招く。角力の太鼓になり、花道より四郎兵衛、角力取りの拵らへ。羽織を肩へかけ、一本差しにて來る。後より一人、取的の形にて、廻しの箱を擔いで來り、直ぐに本舞臺へ來る。

女三　四郎兵衛さん、待つて居たわいなア。

四郎　こりやア吾妻さん始め、武藏屋の衆達。角力場へ女を連れるは與五郎さん、不作法でござりますぞえ。

與五　イヤ〳〵、吾妻を始め、あの手合ひを連れたは、わしではない。あの平岡多左衛門ぢや。それにつけて、大事があるわいの〳〵。

吾妻　それ〳〵、どうぞ好い思案をして、下さんせいなア下さんせいなア。

仲一　お二人さんの濟むやうに

仲二　思案して置いて下さんせいなア。

四郎　お前方は、そりやア何の事でござります。譯も云はずに思案〳〵と、何の思案でござりますな。

與五　ほんにさうぢや。あんまり急き込むゆゑ、ちやつとは云はれぬが、譯は斯うぢや。屋敷に居るうちから、互ひに張り合つたあの多左衛門が、百五十兩と云ふ金を吾妻が手附けに渡したと云うて、先刻も先刻、いけもせぬ女房顏。どうも腹が立つてならぬわいの。

吾妻　サア、後金次第で、多左衛門が方へ行かねばならぬ。さうなれば與五郎さんも、わたしも生きては居ぬ。どうぞ與五郎さんの方から、手附けでも渡すやうな思案はご

ざんせぬかいなア。
四郎　そんなら何と仰しやります。あの多左衛門の方より手附けを渡したゆゑ、此方からも、それだけ渡したいと仰しやるのかえ。
與五　サア、その金の思案と云ふのぢやわいの。
四郎　サア、その事もどうぞと思ふゆゑ、今度の角力も內證で、七分持つて居ますも、どうぞ日和がよかつたら、吾妻さんの身の片付きと、胸算用はして居れど、めでたく日限りをしまはぬうちは、ちつと工面が。
ト思ひ入れ。
與五　サア、そこぢやて。わが身の方で出來ねば、好い事があるわいの。
四郎　金の蔓がござりますか。
與五　オイノ、あの元方の關取り、濡髮の長五郎が、わしの世話をしたなら、金づくでも命づくでも、腰押してやらうと云うて居たわいなう。
四郎　待たつしやりまし。そんならアノ角力の濡髮が。
與五　オイノ。
四郎　ムウ。こりやア思案ものだわえ……ようござります。わしが遁がれられないお前樣の事を、向う方の濡髮に身請けをされては、この四郎兵衛の面が立ちませぬ。その上これには、何ぞ承知があつてゞござりませう。ようござります。百五十兩の手附けを、此方からも渡しませう。
與五　そんなら、金があるかいなう。
四郎　手附け金と指してはござりませぬが、七分の持ちの日割り金、仲間へ渡すのを、丁度百五十兩持つて居ます。この事からひよつと、突き詰めた事でも出來ちやア、御恩になつた治郎左衛門さま、與次兵衛さまへも濟まぬこの放駒。マア、これを渡して、仲間へは又、後の才覺に致しませう。
吾妻　なる事なら、どうぞさうなとして下さんせい。幸ひ彼處へ親方さん。
ト下座にて次左衛門
次左　オイ、なんだ〱。
ト出て來る。
ヤア、關取り、今日は濡髮との顏觸れ、見物が待つて居るから、おッ返されない。どうぞ立合ひに江戸贔屓を、嬉しがらせて下さいまし。
四郎　江戸中で贔屓にして下さる放駒、なんでもと思つて

も、角力ばかりは放れもの。サ、そりやアさうと、お前も知つての通り、この與五郎さまの事なら、爪先からキリ〳〵まで、世話せにやならないこの四郎兵衞。聞きやア相手の侍ひの方から、百五十兩の手附けが渡されたとの事。それゆゑ與五郎さんの方からも、同じ百五十兩渡す程に、サア、受取つて下さりまし。

ト懐中より財布に入れた金を出す。

次左　何がさて、此方も商賣づく。どつちからでも先へ證金の濟んだ方へ、吾妻を遣らうと口を固めて置いたから、手附けは遲い早いもないのサ。そんならちよつと改めて。

ト金を改める。

長五　よくば、ちよつと一筆書いて下さいまし。

次左　合點でごんす。

ト矢立を出し、鼻紙へ受取を書いて判を捺し、四郎兵衞へ渡す。

四郎　これでようござります。與五郎さん、まさかの時物を云ふはこの受取。しつかりと持つてござりまし。

與五　忝ない〳〵。これで心が、さつぱりとしたわいの。

吾妻　ソレイナア。もうわたしも身儘になつて、與五郎さんの内の方へ、行たやうな心になつたわいなア。放駒大明神さま〳〵。嬉しうござんす。

四郎　嬉しがるやつサ。そりやアさうと、今日は又あの侍ひが仕舞つて來たとなら、又やかましからう。仲居の衆達も、爰は氣を利かせて、花鳥屋へでも早く行つたがよい。

仲一　それ〳〵、吾妻さんも心が落ちついたら、ソワ〳〵せずと、花鳥屋の奥で、酒にでもしやんせう。

次左　おれも行つて附け込みとせう。

與五　そんならわしも、あの濡髮に逢うて、腰押しの斷わり云うてしまはう。ナウ四郎兵衞。

四郎　それがようござります。

吾妻　そんなら與五郎さん、必らず明日え。

與五　合點だよ。

四郎　サア〳〵、早うござりませ。

與五　わが身、また嘘つくまいぞや。

吾妻　承知ぢやわいなア。

四郎　サア、ござりませう。

吾妻　必らずよ。

仲居　サア、ござんせいなア。

ト角力の太鼓、騷ぎ唄になり、吾妻仲居二人、次左衛門、向うへ入る。與五郎は木戸口へ入る。取的は廻しの箱を置いて入る。

四郎　あの潑髮が腰押しと聞いて退引きならず、今日中に渡す約束の百五十兩、一時遁がれと手附けに遣つたが、今にても元方の奴等に逢つたら、やかましく云ふであらう。關取り顏で今日の所は、どうも云はれないが……アア儘よ。

ト思ひ入れ。角力の太鼓になり、花道より竹右衛門、角力取りの形、肩へ羽織をかけ、一本差し、取的二人、出て來り

竹右　なんと、あの放駒めは、太い奴おやないか。

取的　ソレサ、わしどもまでの日割りの金を、引摺り込むとは、たけの知れない男でごんすよ。

竹右　今日は是非とも取らにやアなりましない。

取的　ソレ〳〵、手のよい

二人　盜人でごんす。

竹右　なんでも早く、あの放駒の盜人に

三人　逢ひたいものでごんす〳〵。

ト舞臺へ來り、四郎兵衛を見て

竹右　オヽ、こりやア四郎兵衛關取り。

三人　早くござりましたの。

四郎　おれが早いのおやアない。お主達が遲いのだ。今日は顏觸れが顏觸れだから、見物はわい〳〵する。ちつと早く顏を揃へたがよい。それはさうと、今お主達は話しをして來たが、ありやア誰れの噂だ。

三人　サア、ありやア。

ト詰まる。

四郎　人の事云はゞ目代置けと、後先を見てから物を云やれ。

竹右　それ見た事か。それが否だに依つて、よせ〳〵と云ふのに。

二人　アレ、こなさんが先へ云ひ出したちやアごんせぬか。

竹右　ナニ、お主達だ〳〵。

三人　ナニ、こなさんだ〳〵。

竹右　ハヽヽ、よいわえ。誰れが云つた者がある。ヤイコリヤ、これでさて措いて、時に關取り、今度の勸進元は江戸兵衛ゆゑ、わしを始めこの手合ひが、十五日の日割りを、勸進元へ取りに行つたところが、この角力は內證

で、放駒關取りが七分持つて居るから、勸進元は彼方へやつたとの事。畢竟向う方の關取りに、おいらの給金の世話をさせる筈はないが、七分持ちの内幕の綾ゆゑ、さう云ふ事もあらうと、この間から掛け合つたところが、金主の方に譯があるから、もう一日待ての、二日待てのと、この手合ひも二三日の不漁を喰つて、酒屋拂ひで小遣ひもない仕儀だ。なんでも今日、給金を貸してやつて下さいましな。

取一　いま幻どのゝ云ふ通り、とんだ工面が惡うごんすから、どうぞ今日無理の金を

三人　みんな渡して下さいまし。

四郎　成る程、お主達の給金の事は、それと名乘り出さずに、おれが七分持ちのうちで、勘定はおれが方へ取込んで置いたが、まだ金主の方の埒が附かぬから、不承ぢやアあらうが、明日まで。

竹右　待つてくれいと云はつしやるのか。

四郎　明日は間違はぬ〱。

竹右　エヽ、おかつしやいな。いま花鳥屋で藤屋の次左衞門に逢つて聞きやア、吾妻が手附け金を百五十兩、こなたが渡したぢやアないか。

四郎　サア、そりやア。

竹右　與五郎とやらが馴染みの吾妻が手附けを、渡す金があるなら、なぜおいらが給金を寄越さねえのだ。

取二　それ〱、百五十兩と云ふ金の外に、出所はごんせん。大方おいらが給金でごんせう。

竹右　コレ、放駒どん、イヤ四郎兵衞。エヽ、どうだ。おいらが金は

三人　横に寐るのか。

四郎　成る程、お主達が皆さう聞いた上は、隱す事はない。おれが爲にはお主筋の與五郎さまの切端。今日渡さうと持つて來た百五十兩を、是非なく手附けに遣つてしまつたが、おれも放駒の四郎兵衞だ。筋道の惡い事はしない程に、明日まで待たれずば、晩まで待つてくりや。何を云ふも男づくだ。

竹右　エヽ、おきやアがれ。放駒だの關取りだのと、大きな面をしながら、下の者の給金を引摺り込んでもいゝのか。コレサ、さう云ふ後暗い事をしながら、先刻の詞咎めはなんだ。慥かに斯う云ふ事であらうと、放駒の盜人と云つたが惡いか。

四郎　サア、その金を遣つたは、十分おれが惡いゆゑに、

手を下げて。
三人　イヽヤ否だ。濟まない〳〵。
四郎　そんなら、どう云うても。
竹右　存分に云はにやアならない。放駒の横やい。
取的　四郎兵衛の盗人えヽ。
三人　いつその事に。
ト立ちかヽる。
四郎　さう吐かしやア、云ふに及ばぬわえ。
ト四郎兵衛、立ちかヽる。木戸口より甚三郎、行司の形にて出て來て中へ入る。
甚三　コレサ關取り、待たつしやい。みんなも、こりやアどうしたものだ。
四人　退かつしやい〳〵。
竹右　どうも斯うもいらない。おい等の日割りの金を。
甚三　コレサ、何もかも聞いて來た。日頃の氣質と云ひ、四郎兵衛どのも、切端詰まつた事であらう程に、みんなも料簡して待つてやらつしやい。よく〳〵の事なればこそ、今の云ひ譯。座頭をあの位下ろせば、敵役の一分は立つて居るぢやアねえかえ。
竹右　成る程、噂の高い甚三郎どのヽ挨拶と云ひ、あんまり圖に乘つて云つたら、御見物方に、ひどい目に遭ふであらう。
取一　待つてやらつしやるか。
竹右　併し、只は待たれない。先達て、さるお大名から、濡髮放駒の二人ばかり拜領した、撚り綱のこの廻し。これを預かつて待つてやらうワ。
ト廻しの箱を取上げる。
四郎　今日の立合ひに、掛けにやアならぬ撚り綱のその廻し、預かられては場所へ出られぬ。どうぞそりやア許してくりやれ。
竹右　否だア。その場所へ出られぬのが此方の山だ。給金を引摺り込んだ見せしめだ。
四郎　そんなら、どうでもその廻しを。
竹右　金の代りに質に取るのだ。
四郎　そりや、あんまりであらうぞよ。
竹右　あんまりとは、なんの事だ。給金を引摺り込んで、場所へ出ようとは、あんまり其方が慾がいヽワ。
甚三　コレサ、質を取つたからは、もう云ひ分を云はずとも、マア場所へ行つてな。關取りもその通り、腹に据ゑ兼ねる事があらうとも、與五郎どのヽ先途を見ないうち

は、滿多に腹は立てられまい。

四郎　成る程。

ト思ひ入れ。

竹右　そんなら四郎兵衞、この廻しは質に取つたよ。必らず流すまいよ。流しやア春に小網町の、古着屋の店へ吊して、赤恥をかゝせるぞよ。

四郎　エヽうぬ。

ト立ちかゝるを竹右衞門、脇差の鍔にて四郎兵衞が眉間を喰はせる。

甚三　コレ。

ト隔てる。竹右衞門、廻し箱を擔いて

竹右　金が出來たら引替へに、何時でも取りに來やれよ。

ト唄になり竹右衞門、取的二人附いて木戸の内へ入る。甚三郎も思ひ入れあつて入る。四郎兵衞、脇差を拔きかけ、額の疵を見て思ひ入れ。

四郎　今日の立合ひに掛けにやならぬ、撚り綱のあの廻し。あれがなけりやァ所詮、場所へも出られぬ始末。まだその上に額の疵……と云つたところが、元を糺せば此方が誤まり。これと云ふも母の代から、御恩になつた與次兵衞さまに、繋がる縁の與五郎さま。若いとは云ひながら、あの身持ち。兎にも角にも世の中の、義理ほど辛いものはないわえ。

トほろりとする。奥にて人音するゆゑ、額の疵を見せまいと、すつぽりと頰かぶりをして、下の方へ小隱れをする。角力の太鼓になり、下座より小靜、地廻りの若い衆の襟髮を取つて引摺り出て來る。後より同じく地廻り一人、附いて出て來る。

地一　こりやア、どうするのだ〱。

小靜　どうと云ふたら、あの人ごみの中でぞんざいな。なぜわしが手を握つて、好い腰つきぢやと戲を云うたのぢや。

地一　美しいから美しいと云つたのだが、飛んだ女ぢやねえかえ。

小靜　ホヽヽ、ゑらい頭ぢや。その頭を宿替へさすぞよ。

兩人　そりやア、どうしてするのだ。

小靜　斯うぢやわやい。

ト尺八を拔いて立廻りに打ち据ゑる。皆々逃げて向うへ入る。

小靜　ホヽヽ、誰れぢやと思ふ、濡髮の小靜ぢやぞ。よう顏見覺えて居たがよい。

ト後を見て思ひ入れ。此うち四郎兵衞、小靜が後より
抱きつく。
こりやア誰れぢやい。ヤイ〳〵、物も云はず後から、ア
タ不作法な。[illegible]かんかいな〳〵。
ト振り放して、持つて居る尺八にて打つてかゝる。立
廻りに四郎兵衞、この尺八を引ッたくり、小靜を引き
据ゑ、尺八を振り上げ
四郎　なんと、この手並ぢやア、こなさんの亭主になれま
いかな。
小靜　ヤア、さう云やるは慥かに。
四郎　放駒の四郎兵衞でござりまする。小靜どの、ハテ、
好いお身持ちでござりますな。
ト頰冠りを取る。合ひ方。小靜、思ひ入れ。
小靜　其方はマア、いつの間に後へ來て
四郎　お前の濫用を、殘らず見ましたが、モシ、町人でこ
そあれ、鎌倉のお帳面にも乘つて居る、山崎與次兵衞ど
のゝ娘御の、それが身持ちでござりますか。此やうな事
申したら、なんのいらざる意見とも思し召しませうが、
私しの母がお家の乳母、母の乳でお育て申したからは、
私しが爲にも乳兄弟同然。マア、あらう事かあるまい
事か、あの好い男の與五郎どのを嫌つて、そのお身持
ち。親御樣は勿論、私し達までこの苦勞。それと云ふも
のは、例へて云はゞこの間、河原崎の芝居でした助六の
狂言。お前も御覽じたぢやアござりませぬか。ソレ、助
六は丁度お前のやうな喧嘩が好きゆゑ、母の滿江の苦勞
休めようと、白酒賣りの新兵衞が、丁度今の私しがやう
に意見を申したぢやござりませぬか。狂言ぢやと申せど
も、皆それ〴〵の敎へ。武家方へ奉公とあつて、小さい
時から劍術、柔術、習はせたが今の後悔と、昨日も親仁
樣が、つく〴〵との悔み事。モシ、お前ばかり武藝がよ
いと、高振りてござつても、まだ上には幾らもござりま
す。ハテ、先達ても曾我兄弟が、我が力を賴んで、賴朝
どのゝ陣屋まで切り入つたれども、遂に五郎丸と仁田ど
のに、〆められたぢやアござりませぬか。あれが好い手
本でござりますわいの。
小靜　サア、其方が段々の意見なれども、どうもわしがこ
の身持ちは。
四郎　やめられないと仰しやるは、あの與五郎どのを怨ん
でかえ。
小靜　ナンノイナウ、元より好かぬと思ふ男、浮氣をせう

と儘の皮。悋氣ぢやと思はれては詰まらぬわいの。
四郎　そんならお前のその身持ちは。
小靜　氣隨氣儘のしたいが病。
ト奥にて
權九　關取り〳〵。
ト權九郎、出て來り
權九　四郎兵衛關取り、若旦那が急に逢ひたいと云はつし
やるから、場所へちよつと行つて下されまし。
四郎　ナニ、與五郎さまが用があるとえ。
權九　急な事と云はしやつたよ。
四郎　ならう事なら、場所へ顏は出したくないが、若旦那
の用なら行かざアなるまい。そんなら私しが心腹は、明
日ゆつくり……早うお歸り下されませう。
ト角力の太鼓になり、四郎兵衛思ひ入れあつて木戸口
へ入る。
權九　關取りに若旦那の用と云つたのは、みんな嘘。あん
まり好い間だから、お前に心のたけを云はう爲だ。あの
邪魔樣を嫌つたからは、手明きぢやアないかい。そんなら
ムウと云つてくんなさりやア、兩爲のこの相談。返事を
して下さいましな。

小靜　久しいもんぢや。其やうな事を云やると、また痛め
るぞや。
權九　今日も不承知かえ。
小靜　知れた事ぢや。
ト權九郎、奥へ向ひ。
權九　オイ、彥助先生〳〵〳〵。
彥助　オイ〳〵。
ト出て來り
不承知なれば先刻の仕返し。
權九　この先生を、手間に雇つて、力づくで
兩人　口說かうか。
ト兩方よりかゝろ。
小靜　ホヽヽ、返事は此方も柔術の受け身。手管矢筈の表
裏。惡さどもが厚かましう、口說かれるなら口說いて見
や。
兩人　所を斯うして。
三人　どつこい。
トこれより大どろつき合ひ方にて、おかしみの立廻り
あつて、ト、權九郎彥助、叩き据ゑられ、逃げて向う
へ入る。

小靜　顯ほどもない弱い奴等ぢや。コレ、男に持たうか。

どうぢや〳〵。

ト向う見送りながらこなし。今の立廻りに權九郎が落したる鼻紙袋を見附け、思ひ入れにて取上げ、この紙の間より最前の起請を出し、不思議さうに開けて讀みながら、小靜唄。

花は折りたし梢は高い。心苦しの

トこの時、與五郎へ吾妻と云ふ所を見た思ひ入れ。ほろりと泣き聲にて唄ひ、思ひ直して起請を懷へ入れる。

とつけもない奴等ぢや……ドリヤ、並木の方を、ひやかさうか。

ト男達の唄になり、小靜、突き袖をして、いかつに振つて向うへ入る。角力の太鼓にて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間一ぱいの四本柱くろり土俵、手桶柄杓弓御幣、その外誂らへの通り飾りつけ、この角力場を土俵の儘、舞臺先まで押し出す。下の方、繩張りの外に與五郎、口々の仕出しに打交り、下の方張出しへ丸太を梯子にして掛け、この張出しに多左衞門、同じく仕出しに交り、皆々見物して居る。呼び出しの奴、そこらへ鹽を撒いて居る。この道具に納まる。

ト花道の方へ向ひ、呼び出し、拍子木を打つと、白囃子になり、花道より甚三郎、上下行司の形にて軍配を持つて出て來る。後より力士、七人、何れも廻しを締め、角力取りの拵らへにて來る。直ぐに本舞臺へ來り、古實の通り土俵入りあると、呼び出し奴、南の花道の方へ向ひ、拍子木を打つ。白囃子になり、南の方花道より長三郎、上下、行司の形にて軍配を持つて出て來る。後より七人、何れも突ッ張り廻しを締め、角力取りの拵らへにて出て來る。本舞臺へ來り、古實の通り土俵入りあると、呼び出し奴、また拍子木を打つと、白囃子になり、花道より四郎兵衞以前の形にて出て來る。南の方花道より長五郎、誂らへ撚り綱の廻しにて、取的に脇差を持たせて來る。兩人直ぐに本舞臺へ來る。

呼出　ハイ、どなたもお揃ひでござります。土俵入りを下さりませ。

四郎　成る程、今日は濡髮とおれが取り組みの積りだが、ちつと痛み所が出來たから、今日の立合ひは延す積りで、勸進元へもてまへ衆へも行つて來たから、その通り向う方へも挨拶してくりやれ。

呼出　エイ。

ト思ひ入れにて、長五郎の側へ來り。

モシ、お聞き下されましたか。

長五　なんだと。ちつと痛み所が出來たから、今日の立合ひは延すと。ハレナア。去年の秋から知れた今日の勝負を、延すとは味な痛み所だな。さう云ふ事なら、おれも土俵入りをするに及ぶまい。シタガ、どうで來たものだ。みんなの勝負を見物しよう。

四郎　おれも勝負を見て行かうか。

ト四郎兵衛は上の方、長五郎は下の方へ胡座をかいて居る。甚三郎、此うち東西の角力取りへあつちこつち何か囁く事など、角力場の通りよろしくあつて、其うちに呼び出し、扇を持ち、東西の名乘りを呼び上げ、長三郎、行司にて角力始まる。これより何れも段々取り上げる。左右方よろしく勝負あるべし。上の方、張出しの多左衛門、人溜りの與五郎も、贔屓の角力勝負の時、羽織その外思ひ／＼の花など遣る事、只々の仕出しよろしくあつて納まると、甚三郎、土俵へ上がり

甚三　東西／＼。今日濡髮放駒の取組みのところ、方やに少々痛みどころござりまするにつき、追つての勝負を御覽に入れまする。さるに依りまして、この角力が今日の結びになりまする。御斟酌に御覽下されませう。

呼出　東、立臼々々、西、幻々々。

ト竹右衛門、杵右衛門。土俵へ上がり、左右とも四股を踏み、見合ひ仕切りをして眞中へ出る。甚三郎、軍配を引く。ヤツと立合ひ、これより面白き角力の手よろしくあつて、竹右衛門、尻餅をつく、杵右衛門は土俵をはみ出す程の事あるべし。

甚三　勝ち角力。立臼々々。

ト呼び上げる。長五郎立ちかゝる。

長五　コレ／＼行司、今日の角力は幻が、立臼を土俵踏んで出して來た途端に、立臼が體落ちてから、幻が轉げたから、立臼が負けに違ひない／＼。

四郎　イヽヤ、そりやア見やうが違つた。立臼が張りした時、圖體の大きい幻が轉げたから、そのはずみに浮いた足だ。すれば立臼が勝ちに違ひない。

長五　イヽヤ、幻が勝ちだよ。

ト土俵の上へ出る。

四郎　イヽヤ、立臼が勝ちだ。

ト同じく土俵の上へ出る。

多左　イヽヤ、幻が負けぢやアないぞ〳〵。

ト上の方へ下りて來る。

與五　イヽヤ〳〵、立臼の勝ちに違ひない〳〵。

ト與五郎もそこへ下りて來る。上の方角力取り、皆々立ちかゝる。

皆々　幻が負けぢやアない〳〵。

トロ々に云ふ、下の方も立ちかゝる。

皆々　イヽヤ、立臼が勝ちだ〳〵。

長五　コレ四郎兵衛、おぬしやア何もこの角力に、物云ひをつける筋はありさうもないものだ。

四郎　ハテ、味な事を云ふな。兩方の角力へ、おれが云ひ分があつたからだ。なぜ筋はないと云ふのだ。

長五　知れた事だ。今日の濡髪放駒と云ふ勝負は、江戸中へ知れた顔觸れだ。それにお主は、なんで立合ひを延したのだ。

四郎　サアそりやア。

長五　立合はれないと云ふ、その痛み所も知つて居るワ。

多左　それ〳〵、鎌倉から拜領した、撚り綱の廻しを引ッたくられたぢやアないか。

長五　その引ッたくられたも金づく。日割りの給金を引摺り込んだは、盜人騙り。それで幻に云ひつけて、しやッ額を割らしたは。

四郎　そんなら濡髪、これもわれが差し金だな。

長五　おれが差し金ならどうする。仲間の金を横取りすりやア盜人同然。それでも關取りと云はれるか、角力仲間の面汚し。その後暗い身を以て、云ひ分もすさまじいワ。サア、一言もあるまいが。一言もなければ、幻が勝ちも、勝負づけへ載せるぞよ。

四郎　サアそれは。

長五　云ひ分を云つて見るか。

四郎　サア。

長五　サア〳〵〳〵。生きて居るなら返事をしやれな。

ト此うち落間より長吉、松坂縞の單物拵らへ、羽織を挾み、向う鉢卷、町人の形にて雪駄を持つて來り、直ぐに舞臺へ來りて、土俵の上へ駈け上がる。長五郎せりふのきつばなしに長五郎を引据ゑ、持つたる雪駄に

て、長五郎が眉間を喰はせる。ト皆々呆れてオ、、、とばかり云つて居る。長五郎、悄りして長吉が手を捉へ

長五　待ちやアがれ、野郎め。この濡髪をどうしやる。

長吉　どうもしないが、先刻から聞いて居りやア、口は立派に叩いても、心は腐つた犬畜生。關取りでも力士でもないかい、雪駄で打つたがどうしたえ。

長五　此奴は樣々の事を吐かしやアがるな。おれが犬畜生とは、なんで犬畜生だ。

長吉　この手紙で。

ト紙入れより手紙を出す。

長五　それを。

ト取りにかゝるを突き退け

長吉　先刻木戸を入つた時、落ちてあつたこの紙入れ。中を見りやアこの手紙……ナニ〳〵、兼ねて頼み置いたる吾妻が儀につき、與五郎の方に放駒の四郎兵衞が附き居りては、此方爲に惡しく候ふ間、遠ざけ候へば、其うち金の調達いたし、此方へ身請け致し候ふ間、人知れず向うへ話し、四郎兵衞を省き下され候へば、貴殿には後にて禮金差上げ候ふ、濡髪どの、多左衞門。

ト長五郎、思ひ入れ。

多左　ヤア、その手紙はおれが。

ト取りにかゝるを突き退け

長吉　寄りやアがるな、なんと、妙な物を拾つたであらうが。サア濡髪、よく今放駒どのを、諸見物のこの場所で、赤恥かゝせたな。まだその上に、先刻も聞きやア、此奴等角力に云ひつけて、額に疵をつけさせたな。立派に口をきく濡髪と云ふ關取りが、こんなイカサマをしてもいゝか。

長五　サア、そりやア。

長吉　日割りの金の横取りより、横しま根性のおのれへは、心の腐つた犬畜生、雪駄で打つが誤まりか。

長五　サア。

長吉　一句も出にやア、四郎兵衞どのゝ仕返し。いつその事に。

トまた打ちにかゝる。立廻りにてその手を留め。

長五　マア、合點のゆかない。放駒が仕返しを、どう云ふ譯で見物に來た、われがするのだ。そして、うぬはマア、どこの奴だ。

長吉　なんだ。おれが出所が聞きたいか。勇み仲間で小口

を開く、形は小粒な野郎だが、心はずんと大川筋。ハテ、石垣の米問屋、丸屋の長吉と云ふ若旦那だ。小さい時から、角力が好きで、四郎兵衛どのゝ弟子になり、下手も習へば師匠も親、その親の面皮のかける事、あなた方の前だとて、どうして見て居られるものか。關取りと關取りとの達引を、斯う買つて出たからは、與五郎どのゝ事までも、この長吉が引請けたよ。邪魔をするならして見やれ。切るとも突くとも註文次第だ。命に未練はない男だ。

長五　味な事から引ッかけて、吾妻が事まで、世話をすると云ふからは、おれもまた金輪際、敵役の地金を出して、多左衛門に並んで、茶々を入れて見せべいワ。

長吉　見事われが。

長五　なんでもない事。

兩人　なにを。

ト兩人立ち上がる。

竹右　關取りが手を下ろすまでもねえ、この出入りは

皆々　おいらがしべい。

ト上の方から皆々立ちかゝる。

杵右　待ちやれ。其方が出るなら

皆々　おいらも相手だ。

ト下の方も立ち上がる。四郎兵衛中へ入る。

四郎　マア／＼、待ちやれ／＼。僅かな事から怪我でもあつちやア、御見物方へ濟まない。爰は大事な場所ぢや。引ッ込んで居やれ、……。忝なうごんす。土俵の上の勝負さへ、一夜のうちに搗き替へる。惡い噂は猶知れ易い。この四郎兵衛が今日の體裁。根を尋ぬれば金づくで、恥辱を取りやアもう段切れ。引ッ込み思案のおれが名も、今の禮と云つちやア烏滸がましい。向後放駒と云ふ二字は、長吉どの、こなさんに讓ります。その代りに與五郎どのゝ身の上を、成り代つて頼んだぞよ。

長吉　そんなら關取り、こなさんは。

四郎　これが土俵の踏み納めだ。

ト思ひ入れ。

長吉　關取り、そりやア氣が小さい。と云つたところが變ぜぬ氣質。ようごんす。わしにちつと勿體ないが、今日からして、放駒の長吉と名乘つて、與五郎どのゝ腰を押して、濡髮と達引をせうかえ。

長五　面白い。おれはまた多左衛門どのゝ肩を持つて、その達引の相手になるべいか。

竹右　して、おいらが金の濟し方は。
長吉　それもおれが請け込むよ。
長五　今日の出入りの一埓は。
四郎　場所に免じて延ばしてくりやれ。
長吉　そんなら追つての出入り場は。
長五　大川橋か。
長吉　梅堀か。
長五　心の劍に
長吉　向島。
長五　そこらあたりに
長吉　極めようかい。
長五　そんなら長吉。
長吉　長五郎。
長五　必らずその日を。
長吉　待つて居るぞよ。
長五　とは云ふものゝ。
ト長吉に立ちかゝるを、四郎兵衞支へる。立廻りよろしくあつて、トゞ四郎兵衞、長五郎が上帶を取つて、二三遍廻して
四郎　よいやサ。

ト長五郎を見事に投げ出す。長吉與五郎、扇を開き
與五　勝ち角力。
長吉　放駒々々。
ト扇にて煽ぎ立てる。長五郎、口惜しき思ひ入れにて、側の手桶を摑み砕く。この見得よろしく、角力の太鼓にて　　ひやうし幕

三幕目

向島武藏屋の場
千葉家裏門の場

役名――關取り、濡髮長五郎。角力取り、伯父ヶ嶽雲七。同、立臼杵右衞門。山崎屋與次兵衞。山崎屋與五郎。同番頭、權九郎。若い者、定七。武藏屋おりき、橋本治郎左衞門。平岡多左衞門。早野彥助。質屋利八。三原有右衞門。藤屋次左衞門。藝者、吾妻。取的、高松。女達、濡髮の小靜。放駒長吉。駕籠屋甚兵衞。

本舞臺、三間の間、中座を見せし茶屋場。下の方、茅葺きの門を取りつけ、四ツ目垣を結び廻らし、掛

け行燈に武藏屋と書き、正面に床の間を見せ、洗ひ鯉硯蓋、銚子、杯取散らし、上の方に、濡髪長五郎、大胡座をかき、酒を飲んで居る。仲居三人、酌をして居る。若い衆定七、角力取り伯父ケ嶽雲七、同じく立臼杵右衞門、片肌を脱ぎ、踊つて居る。越後節にて、皆々手拍子にて、この見得賑かに、幕明く。

長五　コレ、もうわいらは好い加減に措けい。騷がしいわい。

仲一　ハテ、よう騷いでおやもの。心任せにして置きなさんせいな。

仲二　ソレイナア。何時も〳〵面白い事でござんす。殊に伯父ケ嶽さんと立臼さんの踊りの振りは、きついものでござんすなア。

仲三　あの大きい形をして、よう踊らしやんすなア。

仲一　お二人さんは、志賀山さんの弟子ぢやもの。踊は家の物ぢやわいなア。

杵右　コレ、そんな事を云やんな。

雲七　それサ、おいらが師匠の踊を見たなら、態なしにてあらう。

兩人　やとせい〳〵

　トまた踊にかゝる。

長五　ヤイ〳〵、わいらが圖體で踊つて見ろ。今に根太を踏み拔くべいぞ。

定七　イヤモウ、臺所の膳椀みんなが踊ります。サア、お誂らへの天麩羅が出來ました。これで一つお上がり下されまし。

雲七　洗ひ鯉より天麩羅の方が、きゝがたぢや。關取り、喰はつしやりませぬか。

長五　おれに構はずと、存分に喰ふがよい。コレ、一鉢ばかりで足りるものか。もつと出しやれな。

定七　これがもう、五鉢目でござります。

雲七　何時もながら、料理番は目を廻します。

長五　廻すと云へば杯が廻るまい。立臼、茶碗でやりやれ。

杵右　わしやア先刻から、この丼で一人樂しみサ。

長五　なぜ〳〵

仲一　立臼さんは、何時も冷ぢやに依つて、別にわたしが持つて來て上げたわいなア。

杵右　樽から直に、この丼で三杯目サ。

長五　如才はないなア。

杵右　なんでも元方ぢやア左利きだ。

雲七　それだに依つて、立臼には無双でやられます。

長五　無双か無理か知らないが、腰擂より腹擂が上手であらう。

皆々　ハヽヽヽヽ。

定七　ほんに、この頃承はれば、竹町の米屋の息子が、四郎兵衛どのゝ名乗りの放駒を貰つたと云ふ事でござりますが、ほんの事でござりますか。

長五　寄り方ぢやア、マア頭分の四郎兵衛だが、もう所詮おれが向うへ廻つちやア、廻しへも取りつかしやアしない。それで向うでも思ひ切つて、名を譲つたものであらうが、素人に名を遣ると云ふは、どういふ事か譯が知れぬ。

雲七　それサ、いかい事弟子もごんせうに、なぜ素人の長吉にやりましたか。合點が行きませぬて。

杵右　ハテナ、いくら弟子があつても、根が拵らへ物だから、三段目へ出る顔がないから、それで素人に譲つたのであらうて。

長五　その上、貧乏人の痩せ自慢で、山崎屋の與五郎が腰押しをして、部屋の日割りの金まで、氣を揉んだ四郎兵衛。どう場所へ顔が出されるものだ。今度の立合ひには、大地へ埋めてやらうと、樂しんで居たが、風を喰つた放駒。あゝ云ふ事ぢやア、もう角力は取られないワ。

杵右　例へ顔を合せたところが、四つに渡るまでもなく、ヤッと云へば一跳ねで、ひよろ／＼もの。どうして張りが立つものでごんせう。

仲一　イエ／＼、主はまださうでもござんすまい。五日目の結びに四郎兵衛さんが、見事に勝たしやんしたと云ふ、きつい評判でござんすわいなア。

長五　どうで引ッ込む四郎兵衛だから、一番顔を立てゝ振つてやつたのだ。

杵右　みんな聞いたかえ。十日のうちに一日でも、砂を踏んだ事のない關取りが、振つてやられたばつかりで、勸進元の大仕合せ。

雲七　關取り、見上げました。

兩人　よく振つてやらつしやりましたなア。

仲一　イエ／＼、その日の立合ひは、不意な事であつたと云ふ噂。三ケ津へ知れる事ぢやもの。どうしてわざと負けさんせう。

仲二 こりや、どうでも
三人 嘘らしいわいなア。
雲七 嘘かほんか、わいらが知つた事ぢやない。
杵右 そんな事を吐かすと
三人 おいらが免さぬぞ。
女三 免さぬと云ふて、どうさんすえ。
杵右 關取りに見物してもらつて、四つに渡るワ。
雲七 成る程、雛取りと出かけうか。
杵右 それがよからう。
ト兩人、女形にかゝる。
長五 ヤレ、冗談して怪我をさせるなよ。
兩人 御前取りをお目にかけやう。
ト兩人にて追はへる。佃節になり、花道より、放駒長吉、廣袖浴衣、紺の腹掛け、肥後木綿の米屋、腰へ竹を差して、細帯かけ、手拭を米屋かぶりにして、呂笠をかむり、米俵を擔ぎ出て來り、直ぐに舞臺へ來て、この中へ入り、俵をヒラリと下ろす。これにて兩人、ばつたりと下に居る。
長吉 アイ、竹町の丸屋から、飯米を持つて參りました。
杵右 おきやアがれ。元方の關取り、濡髪どのゝ酒盛りの座敷中へ、なぜ米俵を投げ出したのだ。
長吉 こりや無相な。お酒盛りの中とも存じましないで不調法。勝手を知らぬ田舎者でござります。
ト笠を取る。女方皆々恟りして
仲一 誰れぢやと思うたら、長吉さんかいなア。
仲三 其やうな形でお出でなさんしたゆゑ、若い衆かと思うたわいなア。
仲二 なぜに其やうな形でお出でなさんしたえ。
仲一 ほんに
三人 おかしいわいな。
長吉 この形にも譯があるのサ。お切米ばなの拂ひ米で、番頭は留守なり、男どもは搗き入れに追はれて、忙しい最中。なんぼ我まゝなおれでも、内が出憎い所へ、此方から飯米を寄越してくれろと云つて來たゆゑ、みんな忙しいから、おれが持つて行つてやらうと、内へは恩に着せて、一杯飲みに來たのだ。先刻船から二俵寄越したであらう。
仲二 アイ、そりや爰にござんすわいなア。
長吉 これで都合二俵。
ト俵を積み上げ、腰の判取を出して

アイ、竹町の丸屋から送り狀。船賃は直ぐにお貰ひ申しませう。

仲三　長吉さん、なんの事でござんすぞいなア。

長吉　送り狀を渡せば、これからお客様だ。預けて置いた帶や浴衣を出してくれ。

仲一　アイ〳〵。

ト仲居、奥へ入る。

仲二　さぞ暑うござんしたであらうなア。

長吉　暑い段か、めつきり夏めいた。ドレ、マア一服やらかさうか。

杵右　誰れだと思つたら、この頃場所へ踏み込んだ

兩人　長吉だな。

長吉　ハテ、大きな聲だ。

長五　ナニ、長吉が來た。

ト立ち上がり

先刻から寢て居た。よく約束違へず來てくれたな。

長吉　オヽ、こりや關取り、この中は大きに場所を騷がせました。

長五　その時、見せ付けるわれなれど、四郎兵衛が挨拶を云ひ、場所が場所ゆゑ、その分にして置いたが、満座の中で、よくおれを汚したな。

長吉　そりやア知れた事。多左衛門とやら云ふ二本坊に、金で賴まれ、與五郎とのと吾妻どのも仲を裂かうと、内心は盜人根性。上邊に身になる顔で、なぜ多左衛門が爲になつた。それゆゑぶッ叩いたがどうした。

長五　なんだと。

長吉　なんだとは、覺悟でなければ、なぜ與五郎どのから、人も知つたる大切な、難波潟の印籠を貰つたのだ。兩方遁がさぬ股膏藥、男でも喰ひ手もないワ。

杵右　コレ、長吉とやら、滅多な口を叩いたら

兩人　爲になるまいぞよ。

長吉　べら坊な面め。口を出す事ぢやアない。四郎兵衛が放鉤を受け繼いだ長吉ならば、素人でも關取り同然。關と關との取合ひに、側から口を出すまいぞ。

兩人　ハテ、云はして置くも事に依りますワ。

長五　ハテ、濡髪が出入りに、加勢があつちやア面が恥かしい。殊に喧嘩は仲間の法度。出入りの始末は、どう方がつくか、見物して居やれサ。

ト此うち仲居、長吉が浴衣、帶、脇差を抱へて、持つて來る。

長吉、サア、爰へ出やれ。

ト長吉、浴衣に着替へながら

長吉　商人ながら四郎兵衛が、放駒を貰つた長吉。米屋の形でも置かれない。ちつと揉んでもらはう。

ト着替へて、一本差し

濡髪どの、逢つた場所での仕返しと、思ひ切つたる町人風。形はちつと小粒でも、放駒の四郎兵衛が、名乗りを貰つたこの長吉。云ひ分があるなら聞かう。サア云やれ。

長五　外の事でもないが、與五郎どのから印籠を貰つたのが、それ程ぬしやア口惜しいか。角力好きのやうでもない。時の褒美には刀でも脇差でも、花に貰ふは場所の慣ひだ。氣の狭い男ぢやないか。

長吉　勝つた褒美の花ならば、當座の手柄、ナニ構ふものだ。四郎兵衛が付いて居ちやア、邪魔になるゆゑ、吾妻が身請けは長五郎にお任せなされましと、世間知らずの若旦那を引手にせうとは、そりやア關取り、あんまり心が吝ちやアないか。

長五　女郎は賣り物買ひ物だ。與五郎どのには、お靜と云ふ云ひ號けがありながら、吾妻の手練にくるめられ、山崎の家を棒に振らさうより、この長五郎が思ひ切らせて、多左衛門どのへお世話を申せば、兩爲と云ふものだ。こりや他人のおれが云ふ事ぢやアない。四郎兵衛かお主が云ひすくめて、思ひ切らせにやアならない筋だ。男は當つて砕けろとやら、場所の事は水にして、吾妻と與五郎が仲を手を切らせて、なんと多左衛門どのへ、取持つてはくれまいか。

長吉　關取りのそれ程までに、事を分けて頼まつしやる事なれば、成る程、與五郎どのにも思ひ切らせまいものでもないが、悲しい事には男が立たない。四郎兵衛と齒と齒を合せた男が立たない。多左衛門どのからも百五十兩、山崎からも百五十兩、請け金の濟んだ方へ渡さうと、證文にまで捺して、名宛を與五郎どのと書かせるか、多左衛門どのと書かせるか、意氣と張りとの身請けの相談。わしが口出しをしちやア、理を非に曲げても一旦は、與五郎どのに請け出させにやア、どうも立たない程に、マア、さう思つて下さい。

長五　そんなら、これ程までに事を分けても。

長吉　お氣の毒ながら。

長五　ならずば場所の意趣晴らし。

ト立ちかゝる。仲居留めて

仲一　モシ、お二人さん、短氣な事をなさんせぬがよいわいなア。

長吉　インニヤ、こなた衆の構つた事ぢやアない。其所を退きやれ。

長五　ヤレ、怪我をしちやア悪い。邪魔になるわえ。

雲七　これサ、女の際に、男の出入りに構はつしやるな。

定七　インニヤ、此方の客人同士の取合ひ、構はないでなるものでござんすか。

杵右　うぬまで口出しをすると毆り殺すぞ。

定七　アイ。

ト定七、後へ下がる。

仲三　エヽ、男のやうにもない。腑甲斐ない人ではあるぞ。

長五　コレエヽ、わいらは女どもを片附けろ。

三人　合點だ。

ト兩人、女形を引寄せる。

長五　爰へうしやアがれ。

ト長吉を引きつける。長吉、その手を振り切る。てんつゝになり、花道より駕籠舁き二人、一人は甚兵衞、四つ手駕籠を擔ぎ出て來る。この中へ入る。この時、長五郎に突き當る。

長五　おきやアがれ。出入りの最中へ、なぜ突き當りやアがつた。

ト棒鼻を取る。

甚兵　御免なされまし。

ト女三人ほぐれる。

長吉　邪魔になるぞ。其所退きやアがれ。

ト長五郎、長吉、後先の棒鼻を取つて、引ッくり返す。内より藝者吾妻、餘所行きの形にて轉び出る。

女三　吾妻さんか。

ト引起す。この時吾妻、簪を落す。甚兵衞、取り上げる。

長五　吾妻か。好い所へ來たなア。

ト甚兵衞、簪を吾妻へやらうと云ふこなし。

エヽ、退きやアがれ。

ト長五郎、甚兵衞を突き飛ばす。兩人、慟りして、駕籠を擔ぎ、下座へ逃げて入る。

吾妻　成る程、數ならぬ身を思うて下さんす、お志しにほだされて、返事したけれど、どうも爰では。

長五　インニヤ、斯うおれが云ひ出しちやア、是が非でも、多左衛門どのへ身請けさせにやア男が立たない。
長吉　この放駒もその通り、お請合ひ申した上からは、與五郎どのに身請けさせにやア面が恥かしい。
長五　長吉、恥かしいと云ふ事を、まだ知つて居れば取柄がある。女より男づくの、まだ恥かしい事があらうが。
長吉　男づくの恥かしい事とは。
小靜　その譯は、わしが云つて聞かせませう。ちつと待つておくれいなア。
ト佃節になり、小靜、女達の形にて、ツカ〳〵と出て來る。
吾妻　ヤ、お前は。
ト恥かしき思ひ入れ。
女三　小靜さん、ござんしたかいなア。
小靜　お前も藝者のやうにもない、氣の弱い。商賣とは云ひながら、好かぬ男に馴染が嫌さ、體は女子、心は男。出入り喧嘩は、茶漬同然。外を内にするお轉婆者。勘當合點、去り狀承知。悋氣は知らず、妬餅は一度。男の肌は尺八で叩くか打つより、白歯の生眞面目。氣遣ひをしなさんすないなア。
長吉　聞き及んだ、山崎與次兵衛の娘御お靜どの。今では濡髮の小靜と名うての達衆。
長五　異名は同じ濡髮が、代つて譯を云はうとは。
小靜　お前は關取りの事なれば、男づくなり顏づくなり、元はと云へば金の事。意氣と張りとになつたなら、下品な事も云はれますまい。そこを思つて同じ名の、この濡髮が成り代り、主の腹を云ひやんすわいなア。
長五　面白い。
長吉　小靜どのとやら、與五郎どのと吾妻どのを、お身に引きかけて世話するゆゑ、向う面へ廻られた、ハヽア、お燒きの筋だな。
小靜　こりや、お前でもないわいな。わしを女子ぢやと思うてかえ。云ひ分があれば、この尺八で云ひやんす。お前の心が何時の間にか、女子になつて居るぞえ。
長吉　長吉が心を女子とは。
小靜　放駒と云ふ名が癡ぢや。
長吉　なんと。
小靜　寄方の關取り、放駒の四郎兵衛どのは、仲間の日割りを遣ひ込み、云ひ譯なきに、鎌倉の將軍、賴家公より下された撚り綱の廻しを、百五十兩の代りに、竹右衛門へ預

け、五日目の顏觸れにも、痛み所があると云うて、土俵入りさへさんせぬぢやないかえ。十日目の結びの儀式には、なければならぬ撚り綱は、名乘りを貰うたお前が、片を付けさんせねば男が立たぬ。なんと恥ぢやアないかえ。

長吉　サア、それは。

小靜　百五十兩で取返し、存分云ふ事を云うたがよいわいなア。

兩人　解つたものだぞ。

長吉　撚り綱の譯もちらりと聞いたれど、さほどの事ではあるまいと思ひの外、四郎兵衞どのゝ難儀は、矢ッ張り長吉が身の上。成る程、百五十兩渡さうが、その廻しは。

長五　竹右衞門からおれが預かつて、爰にあるワ。成る程、こりや名乘りの付いた長吉が、辨まへざアなるまい。サア、百五十兩と引替へにせうか。

長吉　成る程、渡さうが今はない。

長五　なんの事だ。

長吉　正金は、拂ひ米を八ケ所組の問屋へ送り、今日取立てに六兵衞が廻る筈だ。明日とも云はず後方まで。

小靜　そりや小靜が仲へ入れば、嫌でも待つてもらはねばならぬわいなア。

長五　もし後方までに出來ない時は。

小靜　小靜が身を賣ります。

長五　そんなら、この場は。

小靜　わしを立てゝ。

長五　待つてやらうワ。

小靜　嬉しうござんす。そんなら必らず後方に。

吾妻　思ふお人を。

長吉　放駒。

長五　口說き落して

長吉　濡髮小靜。

小靜　身請けも二つ

長五　長と

長吉　長。

小靜　離れ座敷で

皆々　飲み直さうか。

ト　さわりになり、舞臺殘らず奥へ入る。引續いて花道より、質屋利八、單物、單羽織にて萌黃の風呂敷包みを提げ、菅笠を持つて出て來る。三原有右衞門、深編

笠、大小、袴、紋付きにて出て來る。

利八　多左衛門どのは、藝者の吾妻を連れて、向島と聞いたばかり。太市で聞いても知れず、大方武藏屋であらう。この印子の鯉には困つたものだ。

ト有右衛門、思ひ入れ。

利八　ちと頼まう。

ト奥にて。

定七　さて、今日は忙しい日だ。二階へ上がる事もならない。

ト出て來る。

ハイ、御膳でござりますか。御酒でござりますか。鯉を洗ひに致しませうか。

利八　その鯉ゆゑに苦しみますわえ。聞いてもゾツとするワ。外の事でもない。藝者の吾妻は來て居りますか。

定七　アイ、奥にでござります。ちよつとお呼び申して。

利八　ア、コレ／＼、その藝者に用はない。その者をお連れなされた、平岡多左衛門どのと云ふ、お侍ひはござらなんだか。

定七　後からお出でなされます。

利八　そんなら、まだござらぬか。ござるまで一服いたさう。モシ／＼。

定七　御用でござりますか。

利八　火を一つ貸して下されまし。

定七　オイ。

ト煙草盆を突き出し、口小言を云ひながら奥へ入る。

利八　なんでも今日は、この鯉を請け戻してもらはねばなのぬ。もう多左衛門どのは見えさうなものだが。

ト有右衛門、利八を見て

有右　コリヤ、其方は質屋ではないか。

利八　これは、多左衛門どのでござりますか。最前からお待ち申して。

トよく／＼見て

ヤ、あなた樣は。

有右　身共は名もなき浪人者。其方は小袋坂の大坂屋利八か。

利八　左樣でござります。大坂屋利八でござります。

有右　詮議がある。動くな。

ト利八、恟りして

利八　ア、モシ／＼。私しはこの年まで、賭博は打ちませんで、人樣の物を取りました事もござりませぬ。それ

は定めし人違ひでござりませう。

有右　コリヤ〳〵、何も其やうに驚ろく事ではないわえ。其方が所持なしたは、印子の鯉であらうがな。

利八　イエ〳〵、其やうな物ではござりませぬ。

有右　イヽヤ隠すな。最前から汝が口振り、印子の鯉の置き物であらうがや。

利八　それはあなたのお聞き違ひ。印子の鯉の置き物ではござりませぬ。生贄の鯉のこくせうでござりまする。

有右　何をたわけた。靈龜年中、大江定基入唐の折柄、傳來せし印子の鯉魚。代々千葉家の重寶。荒立つて詮議なせば、多くの人の命にかゝはる。汝が命も。

利八　エヽ。

　トぎよつとする。

有右　サア、助けたさに内々の詮議。有やう申さば、身共が金を、調達なし請け戻す。達て隠せば、町人、爲にならぬぞ。

利八　イエモウ、仰しやりませいでも、命に替へる寶はござりませぬ。成る程、お尋ねなされる生贄の鯉、イヤ印子の鯉でござります。元は羽衣の茶入れの代り、置き主は橋本與五郎どの、百五十兩の上借りは、多左衛門どの、承はりますれば、置き主の與五郎どのは御勘當、流れましたところが致し方がござりませぬ。どうぞあなた様がお請け下されましたなら、有り難うござりまする。

有右　オヽ、某もこの所に用事あれば、歸宅の節、同道いたさう程に、それまで待つて居やれ。

利八　私しも義理でござりますから、屆けましてお供いたしませう。

有右　コリヤ、誰ぞ居らぬか。

　ト手を叩く。

仲居　ハイ〳〵。

　ト出て來る。

仲居　御用でござりますか。

有右　一つたべる。座敷があらうか。

仲居　ハイ、奥は皆塞がつて居りまする。あの二階の下がよろしうござります。あの二階には木挽町の芝居の松永と、三味線の六三が來て、いま「關守り」を唄ふと申しますから、お慰みにお聽きなされまし。

有右　それは幸ひ。サア、お身も一緒に來やれ。

利八　それでは御馳走にあづかりませうか。

有右　サア、案内しやれ。

ト騷ぎになり、有右衞門、利八、仲居、奥へ入る。と直ぐにカケリになり、花道より、與五郎、糸のたれ、片肌脫ぎかけ、笹の枝に吾妻の小袖をかけ、これを擔ぎ、扇を持ち出て來る。時鳥啼く。

與五　アレ〳〵、それ〳〵、其方は藤屋の吾妻ぢやないか。なんぢや時鳥。ホウ、アレ、時鳥々々。われも鳥なら、啼く音の元を知らせて欲しい。

ト　これより二階にて、誂らへの唄、與五郎、所作よろしくあつて、花道より、與次兵衞、羽織を提げ、尻を端折り、走り出て來る。權九郎、桟留草履、向う鉢卷、尻を端折り、息を切つて走り出て來る。

與次　ヤレ悴や、與五郎。ヤイ、待つてくれ〳〵。

權九　若旦那、與五郎どの〳〵。

ト　兩人、本舞臺へ來る。

與次　コリヤ、與五郎よ。われが身形は、なんと云ふ形ぢや。髮も結ひかけて、大川へ一目散に駈けて行くから、こりや身でも投げるか、義理のあるわれぢやに依つて、殺してはならぬと追ひかけても、その足の早さ。鼻緒が切れやうと思つて、跣足で駈けて來て見れば、爰は確かに秋葉ヶ原。爰に此やうな料理茶屋があると云ふ事は、今見るが始めて。これはマア、何所へ行くのぢや。

權九　モシ若旦那、お前は何所へ行く氣で、駈け出さつしやりました。

與五　おれか。おれはアノ吾妻に逢ひに。

ト與次兵衞、思ひ入れ。權九郎、これを消して

權九　アノ、コレ〳〵、吾妻ならソレ吾妻の森サ。

與五　オヽ、その吾妻の森に身請けの。

與次　なんぢやと。

權九　イヽエサ、毛うけ〳〵。

與次　毛うけとは。

權九　くり〳〵坊主になるから、毛うけを寄越せと仰しやりまする。

與次　なぜに坊主にならうと云ふぞ。

與五　惚れました。

與次　エ。

權九　サア、佛の道に惚れ込んで坊主になるとは、こりやア本氣ぢやアござりませぬ。目の内と云ひ、形かたち。こりやア若旦那は、おきち〳〵。

與次　ナニ、氣が狂うた。ヤレ情ない。娘のお靜に娶合さうと思うて、治郎左衞門どのに貰うたれど、どう云ふ事

やら時に合はぬ男嫌ひ。其やうな心遣ひで、取逆上せて
であらう。コリヤ、どうぞ仕様はあるまいかい。
權九　氣の狂つた者が、どうなるものでござります。旦那、
お前があんまり日頃吝いから、起つた事でござります。
若い者だもの、若旦那も女郎の一つも買ひもしないで、
命が續くものでござりますか。間には金の幾分づゝも遣
はさせて、これで番頭の權九郎も、一緒に行けと仰しや
ると、こんな悲しい思ひはしませぬ。思へば／＼、御不
便で、冷たい涙が溢れますわいなう。
ト思ひ入れ。奧より仲居三人出て來る。
仲居　コリヤ、山崎の權九郎さん。
三人　何事でござんすぞいなア。
權九　何事どころか、若旦那がお氣が狂ひました。
三人　エヽ、こりや與五郎さんかいなア。
與五　アレ／＼、なんぢや坊主になれ。オヽならう。サア
サア、坊主にしてくれ。坊主にして下んせい。やい／＼、
ハヽヽヽ。
ト奧より杵右衛門出て來て
杵右　今聞けば、與五郎どのが氣が狂つたと云はるゝでは
ないか。

權九　立臼どの、與五郎どのが、あのやうに氣が狂つた。
こりやアこの權九郎は、生きても死んでも、死んでも生
きても立ちません。長らへ居られぬ譯。どうぞ死なねえ
やうに、死にたいわいなう／＼。
杵右　尤もだ／＼。
與次　コリヤ、權九郎の大たわけめ。一人娘に喧嘩好き。
與五郎は亂心に、われまでが死にたいとは、なんの事ぢ
や。こりや與五郎がお近付きのお角力であらうな。晝日
中に此やうな姿で居りましては、外聞が惡うござります。
どうぞ仕様はござりますまいかな。
杵右　わしも近付きの與五郎どのゝ事だから、どうぞコレ、
正氣にならつしやれば、みんなの喜び。
權九　どんな事をしたと云つて、ナニ正氣になるものか。
今日初ッ節句で、鐘馗は大抵忙しい事ぢやアない。
杵右　正氣にならざア、せめて鬼のやうにして進ぜたいも
のだ。ヤア、ある／＼。この牛島に歸命頂禮院と云ふ山
伏がある筈だ。この頭氣狂ひを十人癒しました。
與次　どうぞそれを頼んで、御祈禱をしたいものでござり
ます。
杵右　内に居ればいゝが、おれが一走り行つて見て來てや

りませう。

與次　それは御深切な。そんなら、どうぞお頼み申します。

ト一幹になり、花道より角力の取的高松、古い蚊帳を、衣のやうに着て、足駄を穿き、金棒を突いて出て來る。

高松　行くへ定めぬ旅の空〳〵、越し方は何所ならまし。

ト唄ひながら出て

これは大峯の先達、歸命頂禮院と申す修驗者にて候ふ。我れ何所ぞに氣狂ひあらば、癒さばやと思ひ候ふ。ヤアハア。

杵右　これは幸ひな所へ歸命頂禮院どの、今こなたさんの所へ行かうと思ふ矢先へござつた。幸先がようござるわえ。

高松　ハア、何かな。亂心者でもござるかな。

杵右　氣狂ひでござる。

高松　それは不便な事。いで〳〵祈つて進ぜませう。

ト側へ寄り

これは生容易しい、氣狂ひやうではござらぬ。大違ひの鬼子母神でござる。ちよつと見ましたところが、年は二十歳で、名は與五郎と云ふでござらう。

權九　奇妙々々。

ト與次兵衛を見て

高松　このお人は養父と見えます。

權九　奇妙々々。

高松　いま卦を立つて見たれば、天地乾坤てんつてんとんと卦が立ちました。ちつとむづかしいが、その代りに立ち所に効を見せます。それゆゑ名も歸命頂禮院、御祈禱料は御承知かな。

與次　お初穗は幾ら程上げますな。

高松　百五十兩。

與次　エヽ、百五十兩の祈禱料が、どうして出されぬか。

高松　エヽ、坊主になりたい〳〵。ソリヤ、祭ぢや〳〵。

ト存分な事を云つて倒れる。高松、花道の方へ行きにかゝる。

權九　モシ〳〵、何所へお出でなされまする。

高松　縁なき衆生は度し難し。癒る病を癒さぬとは、凡夫程淺ましい者はないわい。

權九　モシ大旦那、百五十兩の祈禱料は、高いやうなれど、

一生あの氣狂ひ喰はせて置いて御覽じまし。百五十兩や二百兩ぢやア上がりませぬぞえ。お前はあの與五郞どのは、御不便でござりませぬか。

與五　不便夏の蟲、飛んで火に入るこの與五郞。サア〳〵、行列で地獄へ行くぞ。臺傘立て傘、お先を揃へて振り込めさ。浮きは時雨か紅葉傘。オイ、こりや又さすのか。尤もぢや。コレ〳〵おみや、なんと尤もであらうが。

仲居　御尤もでござんすわいなア。

トまた仲居二を連れて來て

與五　なんと道理であらうがな。

仲二　お道理でなうてわいなア。

トまた仲居三を連れて來て。

與五　どうぢや、おれが無理か。

ト與次兵衞を引寄せて

コレ〳〵、親仁どの、アレ、みんな尤もぢやと云ふのに、現在子の事を笑うてござるは、あんまりぢや〳〵。

與次　先刻から泣いて居るのを、笑うて居ると見えるか。ヤレ情ない。なんの因果で氣が狂うたぞや。

高松　これは先祖の祟りでござる。先祖は道樂寺の和尙で、坊主の身持ちで年增に嵌つて、神木を伐つて焚木に賣つたる、その祟りで、氣が狂うたのでござる。

與次　祈禱料出しませう。

高松　アノ百五十兩。

與次　今まで爪へ火を灯して、簡略したも子の可愛さ。殊に與五郞は義理のある忰。癒りさへするならば、百五十兩を出しませう。

ト財布より出す。

與五　ナニ、百五十兩。

與次　祈禱に及ばず、この金見たなら、正氣になつたであらうがな。

皆々　エヽ。

與次　身の脂から揉み出した金なれば、無駄には遣はぬ。與五郞が正氣になるやう、似せ山伏どの、祈禱を賴みましたぞや。

ト唄になり、與次兵衞、思ひ入れあつて、奧へ入る。皆々思ひ入れ。

與五　權九郞、其方の勸めで、ひよんな事して、今さら面目ない〳〵。

權九　ナニそれが面目ない事があるものでござりませう。狂言を書いたればこそ、あの名代のしわん坊が、百五十

兩。
仲居 そんなら、與五郎さんの
三人 氣狂ひは。
與五 狂言々々。
三人 して、あの山伏さんわえ。
杵右 新入の取敵、顏を知らぬを幸ひ、無理こじつけの山伏姿。
高松 前髪だけに見立てられ、頼まれては來ましたが、今までの術なさ。地取り場で揉まれるより、苦しい思ひを致しました。
與五 サア、斯うなつては、いつ〳〵まで氣狂ひでも居られまい。髪も結んでもらはうし、マア、それよりは多左衛門に先越されぬうち、吾妻が身請けを。
權九 オツと皆まで仰しやりますな。兩方の手付けが百五十兩、請け金さへやれば、證文は只名前を書くばかり。この權九郎が預かりませう。
與五 今に始めぬ忠臣者。マア、奥へ行つて、吾妻に喜ばさうではあるまいか。
仲一 吾妻さんは先刻にから、離れ座敷で待つてござんす。

與五 身請けの濟んだ上からは、二人の關取り、廻しはわしが拵らへてやるぞ。
兩人 それは有り難うござります。
與五 とは云へ親仁の心遣ひ。
權九 ハテ、何所の親も、みんなあの位のものサ。
高松 親より大事の吾妻さんに。
與五 早う知らさう。一緒におぢや。
權九 さぞ喜ぶ事であらう。

ト騒ぎになり、與五郎先に、權九郎、杵右衛門、高松、奥へ入る。仲居三人、其所らを片付けて居る。この騒ぎをかりて、花道より、多左衛門、大小、羽織、汗手拭をかぶり出て來る。後より治郎左衛門、大小、羽織にて出る。彦助、足輕の形、綺麗なる供笠を持ち出て來る。

多左 なんと治郎左衛門どの、山谷の猪牙から屋根にまで茶屋の二階もなまめいて、飲めや唄への喜見城。斯うまた和らかな所は、三ケの津にもござるまい。
治郎 左様でござります。拙者なぞは非番の時は、軍學に暇なく、斯様な所へついに參りました事はござりませぬが、誠に隅田、牛島、隅屋など、この邊でござりますな。

向島や隅田川、關屋の里に宿やからましなど、申し殘せし古說を見ますれば、花橘の袖の香、昔の人こそ懷かしう存じまするて。

彥助　治郎左衞門どのは、お名も心もほき／＼と、折れるやうなるお堅いお生れ。それにまた今日の向島、なぜに一緒にお出でなされたやら。お屋敷勤めの憂さ晴らしでなくて、却つて氣詰まり。爰は野邊でござりますれば、ちつとお和らぎになつたがよろしうござりませう。

治郎　イヤ／＼、左樣でない。內外ともに、禮儀は同じ侍ひの魂ひ。殊に御家老のお供いたすは、有り難いと思ふより他念はござらぬ。

多左　今こそ眞面目で居られても、今に茶屋へ參つて、女子どもが仇ついたなら、一向他愛はござるまい。

彥助　どうぞあなたを、ちつと和らかに、致しやうはござりますまいか。

多左　餘り堅過ぎるから、ちつと和らか味を持參いたさうと存じての今日の催ふし。マア、武藏屋へ行つて一杯たべての上の事。

彥助　それがよろしうござりませう。

多左　サア、治郎左衞門どの。

治郎　先づ／＼お先へ。

ト矢張り騷ぎにて、本舞臺へ來る。皆々出迎ひ

仲一　ようお出でなされました。

仲二　先刻にからお待ち申して居りました。

多左　何時もながら、賑やかな事だな。

仲一　おりきさん、平さまがお出でになりました。

りき　アイ／＼。

ト出て來る。

平さん、ようなられました。先刻から、いつぞお待ち申して居りました。わたしよりあの人が、大抵案じておやござりませぬぞえ。

多左　おれも早く來ようと思つたが、御進物の事で種々用があつたゆゑ、大きに遲くなつた。

彥助　ヤ、おりきさん、どうでござりやす。何時も／＼美しいものだぞ。

りき　平さんは何時の儘でやらござりましたなア。

多左　先月二十日の日。

仲一　それ／＼、與は店の出番で、忙しうござりまして、お構ひ申しませなんだ。

多左　あの時は、大とろんこであつた。

ト此うち治郎左衞門、手持ちなき思ひ入れ。
多左　此方の云ふ事ばかりで、コレ〳〵、この仁は、同屋敷のお納戸方。これから連れ立つて來やう程に、みんなも見知つておくりやれ。
りき　これはあなた、ようお出でなされました。
治郎　これは〳〵、不思議な御緣で、初めて御意を得ましてござる。手前事は、千葉家の納戸を勤むる、橋本治郎左衞門と申す者。これを御緣に致して、折々は遊山に參るでござらう。その節はよろしくお引き廻し下されい。
りき　どうぞこれからお心措きなう、なられて下さりまし。
三人　ほんに、ようお出でなされました。
治郎　何れも方、以後は別懇にお付合ひ下されい。
ト紙入れより包み金を出し
これは近頃些少ながら、お近付きの印ばかり。おてまへより何れもへ、好きやうに遣はされ下されい。
りき　これは有り難う存じます。皆さん、お禮を云はしやんせ。
三人　有り難う存じます。
りき　サア、お銚子。

定七　ハイ〳〵。
ト定七、銚子を持つて出て來る。
定七　銚子杯、即ち持參仕つてござりまする。
彥助　イヨ高麗屋。
定七　ようお出でなされました。また先頃のやうに、大酒屋と出かけませう。
多左　定七、燗はよいか。
定七　何時もの通り、納まりの加減でござります。
多左　熱山と云ふ事か。
ト杯を取上げる。定七、さす。
治郎　女中、恥かしい事ながら、身共只今の流言を、とんと存ぜぬ。今あの者が納まりの加減と申すと、多左衞門どのは、熱山と云ふ事かと云はれたが、身共のやうな者に、あのやうな事を申すと、挨拶に當惑いたす。あれは、なんと申す事でござる。
りき　あなたも、なんのそれが、御存じのない事がござりませう。
治郎　イヤ、神以て、とんと會得いたさぬ。
彥助　イヤ、あの仁は、其やうな事は御存じない。イエ、治郎左衞門さまには、今のは納まります神山と申す、地

口でございます。
治郎　ハヽア、隱し詞にや。鍋をお黑ものなぞと云ふやうなものか。
りき　こりや一向なものでございます。
ト　これから酒盛り、よい程あつて
彥助　モシ旦那、洗ひに致しませうか。
多左　イヤ、洗ひより鐵砲がよからう。
治郎　イヤ、多左衞門どの、ちとこの庭で、鐵砲は間數が近過ぎませう。
彥助　イヤ申し、鐵砲と申しますは、鯉のぬたの事でござります。
治郎　ハヽヽヽ、とんと一人、通詞がなければ解らぬ。
りき　あなた、一つ召上がりませぬか。
治郎　イヤ〳〵、御酒は同じ事ぢや。
多左　この上に下戶。とんと云ひ分はなしサ。
りき　御酒は上がらず、左樣なら、御膳を上げませうか。
治郎　イカサマ、御酒食べず、結句これに居ればお心遣ひ。次へ參つて、ゆるりと御馳走になりませうか。
りき　そんなら、おとり、御案內申しや。
治郎　然らば多左衞門どの、御ゆるりと召上がられませう。
多左　後程〳〵。
仲居　サア、斯うお出でなされませ。
ト　騷ぎになり、仲居一先に立ち、治郎左衞門、奧へ入る。
定七　サア、これからが、ばくちとなつたワ。
仲二　あのやうに堅いお方が、今の世にもあるものかいなア。
多左　その癖、どうぞ一緖に行きたいと、無理に後から追ひかけられた。とんと話しの出來ない男だ。時に吾妻は。
雲七　何も恥かしい事はないワ。
ト　吾妻を引摺つて出て來り
旦那、大分遲うございましたな。
多左　オヽ、伯父ケ嶽、さぞ關取りも待つて居たであらうな。
雲七　待つた段ぢやアございませぬ。みんなを呼んで大酒でございました。サア、旦那の側へ行きなされ。
多左　吾妻か。先刻から待つて居たに、何所へ行つて居た。

吾妻　何所へも行ては居ぬけれど、ちつと出られぬ譯があつて。

多左　譯と云ふは、云はずと知れた、與五郎が來て居るか。

吾妻　なんのこつちやいなア。お前も知つて居やしやんす通り、治郎左衞門さんが來てぢやゆゑ。

多左　何時ぞや來そくなつて、尻尾を見られた治郎左衞門が來たからか。

吾妻　なぜに主は連れて來やしやんした。わたしを困らすのぢやな。

多左　おれがナニ一緒に來たいものだ。後から追ひかけられて、せう事なし。大抵うだつた事ぢやアない。

彥助　その上、緣と云ふもので、逢つた者はこの彥助。日向向きの辻番のやうに、堅くなつて居ました。

雲七　あの治郎左衞門どのは、どう云ふ氣で今日來たものだな。てつきりこりや、與五郎が腰押しだらう。油斷なりませぬぞえ。

多左　腰を押さうが尻を押さうが、揚詰めにして置くこの吾妻だ。關取りに頼んで置いた通り、早く手を切つてくれないか。

雲七　そこに如才はござりませぬ。濡髮どのもその子の事を、奧でよく聞かれたところが、これからは身請けの一段だ。その子の顏を見なさつたら、ちつと話しがある……ナ、御合點でござりませう。

多左　吾妻、今夜中に身請けをすりやア、多左衞門が奧様。その時は否應云はさないぞよ。

吾妻　揚詰めにしてあれど、今まで心が知れぬゆゑ、身は任せねど胸には、しやんと錠を御してある程に、身請けの事は其やうに、せがましやんせいでも、大事ないわいなア。おりきどの、さうぢやないかえ。

りき　此やうにして居て、偶に逢ふのが何よりの樂しみ。あの子さへ定まつてさへ居るならば、今宵に限つた事でもござんすまい。身請けは來月再來月。カウト、暮に詰つたがよいものでござります。

多左　いつそ來年に延ばさうか。

吾妻　さうして下さんすりや、大抵嬉し事ぢやないわいなア。

多左　みんなの聞く前で、こんなことを云つちやア、あんまり惚いが、なんでもお前の云ふ通りサ。その代り今日は是非、承知してもらはにやアならぬが、どうだ。

吾妻　身請けさへ延ばして下さんすりや。
多左　ウンと云ふか。
吾妻　マアおやわいな。
多左　マアぢやア氣味が惡い。
彦助　モシ旦那、マアと云ふ返事は、重い事でござりま
す。又もや御諚の替らぬうちに。
雲七　おりきどん、吾妻を先へ連れて行くがよい。
りき　そんなら、離れ座敷へお連れ申しませう。
多左　おれは後から行かう。
吾妻　多左衞門さん、後に。皆さん、これにお出でなさん
せえ。
りき　待つて居りますぞえ。
女皆　早うお出でなされまし。
ト騷ぎになり、吾妻、おりき、仲居付いて奧へ入る。
多左　今直に行くから、待つて居やれよ。
トあたりを見て
あゝ云つて落ちつかせて置いて、なんでも今にも身請け
せずばなるまい。
雲七　身請けの事は、關取が請合ひサ。なんでも、山崎の
番頭權九郎を、此方の方へ引摺り込んで置いたから、往
生サ。
彦助　邪魔になる四郎兵衞を省いたら、また長吉がくッつ
いて身請けの妨げ。彼奴もどうぞおッ片付けたいもの
だ。
雲七　ハテ、そんなぬかりのある、濡髮ぢやアござりませ
ぬ。放駒の撚り綱の廻しを引上げて置いたから、長吉に
は口はきかせませぬ。それよりは差當る身請けが肝心…
…オイ、權九郎どのえ。
ト奧へ向つて呼ぶ。奧にて
權九　オイ／＼。
ト出て來り
こりやア、伯父ケ嶽や旦那、ようお出でなされました。
多左　コレ／＼權九郎、身請けの事はどうなつた。
權九　彼方の味方と見せかけて、身請けは今まで延ばしま
したが、あなたは、どうなさるお心でござりますな。
多左　國元から爲替の金が間違ひ、今に來ないは、心元な
い。お主、どうぞ算段はあるまいか。
權九　此方は今宵に定まつた身請け。わしが持つて居る百
五十兩で、多左衞門どのの名宛にすりやア、與五郎に返
す金はござりませぬ。

多左　明日はどうでも算段して、その證文を引替へにして、金を渡すワ。
權九　彦助どの、お前なんぞ好い智惠はないかえ。
彦助　智惠と云つちやアないが、金は爰に百五十兩持つて居るよ。
權九　そんなら何も云ふ事はない。それをお貸し申したがよいぢやアないか。
彦助　貸してやられない金だ。
權九　そりやアなぜ。
彦助　碁會所の見世小判、銅脈だわな。
權九　銅脈でも、種さへありやア仕樣がありませう。マア、爰へ寄越さつしまりませ。
　ト彦助、懷中して居る、財布の金を渡す。
ハテ、銅脈でも、斯う手に取つた手持ちは、惡くねえわえ。
多左　なんでも證文の名前は、多左衞門にして置いてくりやれ。
權九　合點でござります。なんでも、わしに任せて置かつしやりませ。
多左　そんなら萬事賴んだぞよ。サア、二人とも奥へ來やれ。
兩人　畏まりました。
多左　權九郎、吉左右奥で、待つて居るぞよ。
　ト唄になり、多左衞門、彦助、雲七、奥へ入る。權九郎殘る。
權九　藤屋の亭主は、もう來る時分だが、銅脈ともに三百兩、懷にあると思へば、どうやら氣が紛れさうになつて來た。こりやア此方から、藤屋へ行くがよい。それそれ。
　ト騷ぎになり、花道へ行く。と次左衞門、序幕の形にて出て來る。
權九　コレ次左衞門さん、いま行く所であつた。
　ト次左衞門、生醉のこなし。
次左　オヽ、こりやア權九郎さんかえ。
權九　吾妻の事で用があるワ。此方へ來なさい。
　ト舞臺へ取つて返し
早速云はうは吾妻の身請け、多左衞門どのゝ方が先になつて百五十兩。サア、證文の名宛は平岡多左衞門どのと書いて、金受取らつしやれ。
次左　ようござります。承知サ。

權九　大分お前、醉つて居るが、いゝかえ。

次左　例へ醉つて居ても本性違はず。

　ト矢立を出し、證文の名を書き

平岡多左衞門どの。サア金は。

　ト權九郎、よく／＼案じて、銅脈を入れて

權九　ソレ、金。よく檢めたり。

次左　ナニ、お前に間違ひがあるものだ。

　ト財布へ入れ、首へ掛ける。

權九　渡したよ、よしか。

次左　よし／＼。段々お世話でござります。吾妻に逢うて、身請けの定まつた事を云つて喜ばせう。段々お世話でござります。

權九　危ないよ／＼。

次左　段々お世話でござります。

　トよろけながら奥へ入る。權九郎、金を出して

權九　こりやア夢ぢやアないか。なんの苦もなく銅脈を摑ませて、假に置いた百五十兩、天なるかな命なるかな止んぬるかな。この又證文を、多左衞門どのと引替へれば百五十兩。むけんもつかず三百兩。だが、おれが持つて居ては詰まらない。何處ぞへ忍ばせて置きたいものだ。

　ト奥にて

吾妻　マア／＼、待つて下さんせ。

與五　放した／＼。

　トこれにてうろたへ、有り合したる俵の中へ隱し、心を殘して入る。引違へて奥より與五郎、吾妻、出て來り

吾妻　マア／＼、待つて下さんせいなア。

與五　イヤ／＼、愛想づかしの出來ぬうちに切れてしまふ。斯う云ふ事とは露知らず、親仁へ苦勞をかけて、お前ゆゑに氣狂ひの眞似までしたを、今さら思ふと馬鹿らしうて、人に顏も合はされぬ。誠に七人の子は生しても、女に肌をゆるすなと云ふ譬へを、今思ひ當つたわいなう／＼。

吾妻　與五郎さん。

與五　なんだ。

吾妻　最前から云はせて置けば、あんまりな。女子に肌をゆるすなの、切れてしまふのと、云ひたい儘の愛想づかし。お前ゆゑにこの年月、旦那さんへの氣兼ね、朋輩さんへの心遣ひ。勤めの外の艱難も、末は夫婦と樂しんで居るものを、なぜ其やうな事云うて下さんすぞいなア。

與五　譯もない事を何云ふぞ。最前多左衞門に、なんと云うた。胸に錠を鋂ろして居ると云うたぢやないか。
吾妻　云はいでは。
與五　なぜ〳〵。
吾妻　騙して置いて、身請けの相談云ひ延し、此方を先にしたいが山。揚詰めの其うちも、肌を汚さぬと云ふ事はお前も知つて居やしやんせうがな。
與五　肌は穢さいでも、どんな所が汚れて居やうも知れるものか。
吾妻　サア、汚れて居ると云ふ證據があるかえ。
與五　どうも封印の付けられぬ所だから、何が證據があるものだ。
吾妻　それ見やしやんせ。證據もないのに、いろ〳〵の事云うて。わたしが心を知らぬかなんぞのやうに、お前が惡くば、あやまつたと云やしやんせな。
與五　サア、それは。
吾妻　嫌かえ〳〵。
與五　大あやまり〳〵。
吾妻　あやまつたが、定ならば、もつと此方へ寄らしやんせ。

ト與五郎を側へ寄せ
與五　サア、寄つたがどうする。
ト抱き寄せる。多左衞門、出て來て、二人を捕へ
多左　不義者、見付けたぞ。
ト奧より、彥助、杵右衞門、出て
杵右　晝日中、とんだ事を。
兩人　大膽な奴でござります。
與五　多左衞門どの、こりや、なんとなされますする。
兩人　なんとするものか。斯うする。
多左　なんとするものだ。おれが揚詰めにして置いた吾妻を、我が物顏に引ッついたり、くッついたり。見るもなか〳〵見苦しい。吾妻を奧へ連れて行け。
杵右　心得ました。
與五　イヤ、吾妻を遣る事、ならぬぞ〳〵。
多左　遣る事はならないも氣が強い。其奴が居ちやア泣いて脅して面倒だ。早く連れて行け。
吾妻　わしや與五郎さんの側を離れる事は、否ぢや〳〵。
杵右　否でも應でも、もう叶はないワ。
ト無理に引立てる。與二兵衞、出て來り
與次　こりや、吾妻を何所へ連れて行くのぢや。

ト云ふを振り切り、下座へ入る。

彦助　知れた事だ。もう疾に、多左衞門どのゝお内儀様だ。

杵右　細言を云つて首になるな。

與次　多左衞門どの、脾弱な者を手籠めにして、どうさつしやる。滅多な事をして、後で後悔なされますな。

多左　顏は脾弱でも、根性が太いワ。手を出して盜みをするばかりが、盜人ぢやアないわえ。

與五　なぜに與五郎が盜人ぢや。

多左　論は無用だ。親仁ぐるめ、引摺り出せ。

與次　我れ〳〵親子に何誤まり。

多左　その誤まりは與五郎に聞けえ。云ひ譯あらば、屋敷で云へ。

彦助　與次兵衞親子。

兩人　立たつしやい。

ト彦助、杵右衞門、引立てにかゝる。下座より、長吉出て來り

長吉　先づ〳〵、お待ち下されませい。

多左　こりやァ誰れかと思つたら放駒。こりや又、身があつて面白い。何を云はうと思つて留めたのだ。

長吉　委細は奧にて承はりましたが、あなたが揚詰めの吾妻どのなれば、手附けは同じ百五十兩。殘金を渡せば根曳きは御承知の筈。與五郎も最前、請け金殘らず出しましたからは、最早此方の妻同然、人の女房を手籠めになされますからは、なんぼお出入りの屋敷の御家老樣でも、自由がましい事はなりますまい。定めた通りの身請け金、殘らず參つたとの事も、まだ御存じあるまいと、お留め申してござります。

多左　そんなら、其方の身請け金は、殘らず濟んだと云ふ事か。

長吉　疾の昔。

多左　成る程、それぢやア多左衞門が、重々不調法だ。定めし受取り證文があるであらう。あるなら見ようワ。

ト奧にて

權九　その證文、お目にかけませう。

ト出て來る。

與次　權九郎か。よくした〳〵。

與五　先刻から、待つて居た〳〵。

長吉　身請け證文持つて來たなら、早く讀んで、お聞かせ申すがよい。

權九　成る程、身請け證文は、藤屋次左衛門から、受取つて參りました。

ト懷中より出して皆々に見せ

身請け證文の事。一つ、吾妻と申す女、身請け金三百兩に相極め、手附けとも都合いたし、只今受取り申し候ふ。後は讀むに及びませぬ。年號月日、平岡多左衛門どの、藤屋次左衛門。

ト皆々恟りする。

與五　コレ〳〵權九郎、そりやア讀み損なひではないか。なぜ與五郎どのとは書かぬぞ。

權九　與五郎とも與次兵衛とも無いは道理。多左衛門に先を越されました。

三人　ホイ。

ト思ひ入れ。與五郎、急き込み

與五　權九郎、先刻に遣つた百五十兩は。

權九　先刻の百五十兩とはえ。

與次　しかもこの與次兵衛が、手づから遣つた金を、どうしたのぢや。

權九　エヽ、祈禱料の金かえ。

與五　その金は〳〵。

權九　あれは祈禱料に遣れと仰しやつたゆゑ、山伏に遣りました。

三人　エヽ。

與五　コレ、その山伏と云ふは、新入りの角力高松。

權九　あの山伏がかえ。ハテ、人と云ふものは、見かけに依らない、おつかないものだぞ。

與五　わしが氣の狂うたも何もかも、みんな其方の勸めではないか。

權九　根ッから覺えない云ひがけ。なんぼお主でも、あんまりでござりますぞえ。

與次　權九郎、エヽ、おのれは〳〵。云ふに云はれぬ子ゆゑの闇の百五十兩、見す〳〵泥坊がありながら、口惜しいわえ〳〵。

長吉　エヽ、コレ、なんぞ少しでも手がゝりがあれば、主殺しだが、これぞと云ふ證據がなけりやア云ひ白け。殘金の百五十兩も、わしに渡さつしやりやア、こんな事は出來ないに、云つて返らぬ後での後悔。ひよんな事をさつしやりましたなア。

多左　コレ長吉、悧巧さうに留め立てして、身請けが濟んだの金渡したのと、よく恥を喰はせたな。金を渡した證

文があるか。よもや證文が二通はあるまい。よく云ひかけをしやアがつた。

杵右　放駒で候ふの、長吉で候ふのと、名や面は立派でも、そんな不きッてうで、人の世話がなるものか。

彦助　それサ、今までのやうに、米屋の長吉なら人も許すが、なまなか放駒だけに、容赦はならないぞ。

權九　力があらうが智惠があらうが、理と云ふものには手出しはなるまい。こなたより、おれが主人の事だから、どうぞ若旦那のお顏の立つやうにと、手を替へ品を替へたれど、一言もないこの證文。なんと口出しはなるまいがの。

ト多左衞門、與五郎を引寄せる。長吉、立ちかかる。

多左　寄るな長吉、身請けをすりやアおれが女房。その吾妻と乳繰り合つて居た、與五郎は間男だ、盜人だ。與次兵衞もその通り、もう屋敷の出入りは叶はないぞ。ヤイ與五郎、よく吾妻をなめやアがつたな。間男をしたがよいか。これがよいか。

ト與五郎を打つ。長吉、その手を取つて、與五郎が上へ掩ひかゝる。

長吉　お待ちなされ、多左衞門どの。

多左　間男の成敗、なぜ留める。

長吉　企み事とは知れながら、手出しのならぬ理の當然。とは云へ側にありながら、與五郎どのを手籠めにされちやア、四郎兵衞へどうも立ちませぬ程に、せめての腹癒せに、この長吉を踏むなりと叩くなりと存分にして、與五郎どのを、見遁がしちやア下さるまいか。

與五　コレ／＼、長吉どの、打たれても叩かれても、身から出た錆なれば、誰れに恨みもない。こなたを代りに叩かせて、どう見て居らるゝものぢやぞいなう。

與次　オヽ、さうぢや／＼。いろ／＼お世話になるのみならず、難儀をさせては恩を仇……コレヤイ權九郎、主人の代りに、われがぶたれにやアならぬ所を、餘所事のやうな顏をして居ると云ふ事があるものかい。あんまりぢやわい／＼。

權九　モシ旦那、商賣づくの難儀なら、何見て居ませう。長吉どのはぶたれても立つ男達。此方は素人、商賣違ひサ。

與次　エヽ、うぬ、その口を抓め上げてやりたいわえ。

杵右　多左衞門さま、それ程までにぶたれたがる長吉を、ぶたないも餘り違引がないやうでござります。

彥助　それサ、こんな時ぶたにやア、ぶつ時がござりませぬ。冥加の爲に、わしらにもぶたせて下さりませ。

多左　間男の名代と名乘つて出た上からは、存分にせにやアならない。

與五　イヤ、長吉どのを打たせる事は、ならぬぞ〳〵。

長吉　打つてくれろと名乘りかけたる醉狂者。外から口出しをせまいぞ。

與五　ちやと云うて。

多左　ぶんのめせ。

兩人　合點だ。

ト與次兵衞、與五郎を引退げ、長吉を打ちにかゝる。權九郎は俵の上へ頰杖突いて見物して居る。與五郎、與次兵衞支へるを、多左衞門引据ゑる。杵右衞門、彥助兩方から、長吉が襟髮を取つて、打ちにかゝる。奥より小靜走り出て來り、杵右衞門、彥助を投げ退け、尺八にて打ち据ゑる。續いてかゝる多左衞門が裾を捕へ存分打ち据ゑ、キツと見得。

與五　ヤ、其方は。

ト顏を見合せ、兩人思ひ入れ。

與次　娘か。日頃は憎いが、今日は好い所へ來てくれたなア。

長吉　退引きならぬ譯あつて、合點づくのこの場の難儀。女の腰押し、頼まぬぞ。

多左　誰れかと思つたら、濡髮小靜か。

彥助　うぬが亭主の間男の詮議だぞ。

杵右　燒餠の燒き所が違つた。

多左　なぜおいらを

三人　敲いたのだ。

小靜　男嫌ひのこの小靜、悋氣とやら燒餠とやら、そんな色氣は知らぬぞえ。他人身内の嫌ひなく、強い人には強う出る。弱いなら風の柳に日蔭の若葉、雪重たげな今年竹、それは晝顏の女達ひ。油氣のない濡髮が、買つたるこの出入り、賣つて下んせ、賣らしやんせいなア。

多左　似合ひの喧嘩なら、賣つてやるまいものでもないが、こりやア首づくの出入りだぞ。

小靜　首づくの出入りなら、此方も買ひやんせう。

多左　首で買ふなら、賣つてやらうワ。

長吉　小靜どの、外の喧嘩や出入りとは、違つたこの場の入り譯、親に難儀をかけますまいぞ。

小靜　お前を措いて、差出がましう、憎まるゝかは知らね

ども、ちつと首の當があつて、買つたるこの出入り。なんぢやあらうと、わしに任せて下さんせ……權九郎、爰へおぢや。

權九　用があるなら、其所から云ひなさい。

小靜　來やと云うたら來やらぬか。

權九　アイ。

ト權九郎、おづ〳〵して

なんの御用でござります。

小靜　吾妻どの丶身請け證文を見せや。

權九　ソレ、御覽じませ。

ト出す。小靜取つて見て

小靜　平岡多左衛門どの、藤屋次左衛門。この金は何所から出た。

多左　知れた事だ。この多左衛門が金だワ。

小靜　それさへ聞けばようござんす……治郎左衛門どの、次左衛門をお連れなされて下さりませ。

治郎　金子の出所知れたなら、それへ參つて詮議いたさう。

ト治郎左衛門、次左衛門を連れて出て來る。

多左　誰れかと思つたら治郎左衛門どの、何しに爰へお來やつた。

治郎　似せ金使ひの詮議に參つてござる。

多左　似せ金遣ひの詮議とは。

治郎　藤屋次左衛門、怖い事はない。それへ出て申せ。

次郎　畏まりましてござります。

ト權九郎を引立て、舞臺先へ出て

コレ權九郎、吾妻が身請けは、多左衛門どのが、なさると云つて、渡した金は似せ小判。こんな銅脈を摑ませたな。

權九　コレ〳〵、この男は、とんだ事を云ふわえ。ナニそれをおれが知るものか。成る程、金はおれが渡したが、檢めないは其方の麁相だ。ア丶、こりやアなんだの、こなたの懷中で替へて、おれに被せるのか。その手は喰はない。

治郎　默らう。最前彥助が碁會所の見せ小判、汝に渡せしその場の樣子、立聞き致せし某。仔細あらんと藤屋を呼び寄せ、檢め見れば銅脈。似せ金使ひは皆同類と思ふ。併しながら、勘當なしても倅が事、贔屓の沙汰と思はれんもむやくしい。この場の出入りを首で買つたる、濡髮小靜が出入りの始末、見たい〳〵。

ト皆々氣味惡き思ひ入れ。

小靜　多左衛門さま、あなたの身請けなされた吾妻との
と、不義いたしました與五郎が首は、この證文を反古に
致しましたなら、赦しなされませうな。

多左　その證文を反古にするとは。

小靜　似せ金にて身請けなせし、名宛は平岡多左衛門どの
とあるからは、退引きならぬ似せ金使ひの同類。但し、
云ひ譯がござんすか。

多左　サア、それは。

兩人　サア〳〵〳〵。

小靜　なんと云ひ譯はあるまい。

多左　その證文を。

ト取りにかゝる。長吉、後より投げ退け、引据ゑる。

長吉　サア、似せ金使ひの張本どの、よく與五郎どのを、
盗人だと云はしやつたの。盗人と云つたがよいか。こな
がよいか。サア、與五郎どの、今の意趣返し、爰へ來て
御存分になされませな。

ト與五郎、思ひ入れあつて

與五　イヤモウ、おれはよいワ。

長吉　エヽ、氣の弱い。わしが押へて居りますワ。

與五　そんなら、側へ行つてもよいかえ。

ト與五郎、そろ〳〵側へ來て

コレ多左衛門……さま。最前はようわしを苛めたな。そ
の意趣返し。

ト斯う〳〵と平手で頭を叩き、手の痛き思ひ入れ。

與次　ドレ〳〵、おれもせめて、足の毛でも拔いてやら
う。

ト足の毛を拔く。

多左　オヽ、痛い〳〵〳〵。

長吉　痛いも凄まじい。コレ、どうぞしたいものだ。

トこの時下座より、有右衛門、出て來る。多左衛門が
大小を引ッたくる。

多左　こりやア有右衛門。何時の間に爰へ來て、なぜおれ
が大小を取り居つた。

有右　某、これへ參りしは、香取御前のお使ひでござる。

多左　奥方のお使ひとは。

有右　其許、家老職の身を以て、奢りに長じ身持ち放埒。
お國元へ聞え、追放なせとの殿の御内達。

治郎　某兩人御内達を受け、それとはなしに同伴いたせ
しを存じなく、我れ〳〵を目下に見て、法外の身持ち。

殊に帯刀を手挾みながら、町人に打擲され、最早お役目は勤まりますまい。彥助、其方も屋敷に叶はぬ。大小置いて多左衛門どの丶供をなし、何方へなりとも參り居らう。

彥助　又これが居ろと云つたとて、どうしてこんな目鼻の危ない所に居られるものだ……ソレ大……ソレ小。

ト大小を投げ出し

多左衛門どの、こんな所に長居いたさうより、寺島の方へ、野駈けにでも出かけませう。

多左　これもこの身の誤まり。ドリヤ、お暇申さうか。

ト立ち上がり

併し、おれが屋敷へ歸らずば、紛失なした印子の鯉の、在所が知れまい。その時うぬら、手に手を下げて、多左衛門どの、今に印子の鯉が知れませぬ、どうぞ屋敷へお歸りなされて下さりませ……などと云つて、うぬら、あやまるなよ。

有右　お氣遣ひなされるな。その儀も小袋坂の質屋、大坂屋利八を手馴付け、印子の鯉魚は請け戻して、即ち爰に。

ト出して見せる。多左衛門、思ひ入れ。

多左　そんなら、それまで捲き上げられたか。重ね〴〵遺恨重なる有右衛門。立日、合點か。

杵右　心得ました。

ト有右衛門にかゝるを、治郎左衛門、拔打ちにポンと首を切る。

治郎　長居いたさば、どなたなりとこの通り。多左衛門どの、御相伴なさらぬか。

多左　イヤモウ、それには及びませぬ。其うちお禮はキツと致さう。彥助、供せい。

彥助　ハア。

ト三重になり、多左衛門先に、彥助、思ひ入れあつて、花道へ入る。權九郎、そろ〳〵逃げにかゝる。有右衛門、引ツ捕へ、繩をかける。

權九　ア、申し、私しは何科あつて。

有右　科と云ふは、似せ金使ひの同類。殊に與次兵衛より百五十兩、渡せし金子の行くへが知れぬワ。

權九　サア、その金は。

有右　汝が業なら即ち盜賊。屋敷へ連れ行き詮議なすワ。

權九　これは又、情ない事ではあるぞ。

治郎　サア、これからは吾妻が身の上。次左衛門、それへ

出い。
ト次左衛門、前へ出る。
治郎　兩方より手付け金、百五十兩宛入つて居らうが。
次左　左樣でござります。兩方より百五十兩宛、お預かり申して居ります。
治郎　多左衛門より受取つたる、百五十兩の金子こそ、殿の重寶印子の鯉を盜み、質物に置いたる金。
次左　エ、。
治郎　與五郎より受取りし、あの金も、矢張り養父與次兵衞より、騙り取つたる道なき金。印子の鯉魚の出る上は、双方手附けの三百兩は、この治郎左衛門が辨まへん。さすれば吾妻は改めて、某が請け出したぞよ。
次左　サア、仰しやれば、あなたのが、御尤ものやうなれど、金子の出所と、サア、吾妻が行く所が、弓と絃のやうでござりますれば。
治郎　身共に身請けはならぬと申すか。
次左　サア、其所がどうも。
治郎　ならずば金子の出所を、代官所へ訴へ窮命させうか。
次左　サア、それは。
治郎　どうぢやい。
次左　モシ〳〵、左樣ならば私しが、後で越度になりませぬやうに。
治郎　たわけ者め。道は道で立てるに、ナニ越度にならうぞ。ハ、、、、。吾妻は某が請け出したぞよ。
次左　それは有り難うござります。左樣なら證文を、後で差上げませう。
治郎　金子が參つて居る上は、次手でよい……與五郎、吾妻を請け出し、某が宿の妻になす上は、小靜と夫婦にならずばなるまい。
與五　サア、その儀は。
與次　アイヤ、治郎左衛門さま、私しが娘を思し召して下さりまするは、有り難うござりまするが、與五郎が女房に致す心でも、私しがなりませぬ。
治郎　とは又なぜに。
與次　ハテマア、女にあるまい身持ち放埒。その上、男嫌ひ、針持つ業はゑいせいで、尺八持つて喧嘩好き。親の云ふ事、鵜の毛で突いた程も用ひた事はござりませぬ。それゆゑ今では勘當同然。あれが事なら、お構ひなされて下さりますな。

ト小靜、思ひ入れ。治郎左衛門ズッと立つて、與五郎を打ち据ゑる。與次兵衛、支へて

與次　モシ、治郎左衛門さま、昔はあなたの子にもせよ、勘當の上、與次兵衛が拾つたからは、實子も同然。身持ち放埒は、若い者のある慣ひ。例へどのやうな事があつても、あなた樣の御厄介はかけませぬ。人の大事のかゝり息子を、なんで折檻なされまする。

治郎　勘當いたせし上からは、孤かぶらうが構はねど、餘りと云へば人情を忘れた人非人。コリヤヤイ、このお靜はな、生れつき柔和にして、幼なきよりこの家に育ち、和歌の道にも心を盡し、優しき者を此やうに、身持ち惰弱にしたるは、コリヤ、おのれが業と知らざるか。お靜が男嫌ひと云ふ、證據は爰に。

ト小靜が懷中より四立目の起請を引き出す。

小靜　ア、申し、それは。

ト支へるを振り切り

治郎　斯うなるからは、必らずともに庇やるな……與五郎、これを見い。

ト披き

天罰起請文の事。中の文句は讀むに及ばぬ。與五郎どの、藤屋吾妻。斯う云ふ物を手に入れても、悋氣嫉妬の心もなく、男嫌ひの喧嘩好きと云ひ觸らし、去り狀取つて、わざと吾妻を添はせんとの、この年月の心遣ひ。貞女とも操とも、武士も及ばぬ烈女の鏡。不便な者の心ぢやなア。

長吉　長吉もかねてより、そのお心とは存じて居れど、一寸遁がれ。吾妻どのゝ身請けも濟みました上は、てかけ妾はある慣ひ。お心強う、時節をお待ちなされませ。

小靜　何にも云うて下さんすな。わたしや恥かしいわいなア。

長吉　斯う顯はれました上からは、何恥かしい事がござりませう。與五郎どのと吾妻どのを夫婦にして、側で見て居るが嬉しいと口には云へど、お心根は推量いたして居りまする。與五郎どのもその通り、これ程に思し召してござるお靜どの、ちつとは不便と酌み分けて進ぜにやア、お前、餘り無茶でござりますぞえ。

與次　娘がさう云ふ心とは知らないで、今まで人でなしのやうに云つたは、おれが惡かつた。堪忍してくれい〱。

與五　この與五郎もその通り、面目ないやら術ないやら、どうも詫びの仕樣がない。あやまつた〱。

治郎　さう心の解け合ふも、互ひに縁の盡きせぬ所。この上吾妻は長吉どの、暫らく貴殿、預かつて下さるまいか。

長吉　何がさて、吾妻どのは、この長吉がしつかりと、お預かり申しました。

有右　互ひに悋氣の角もなく、納まる上は有右衛門、及ばずながら仲人いたさん。

治郎　先づそれよりは、差當る印子の鯉魚、手に入りし事を御前に披露。某は與次兵衛が宅にて、とくと熟談いたして、後より歸宅仕らう。次左衛門は身と一緒に參り、身請け證文認めい。

與次　長吉どの、くれぐ\も與五郎が事、頼みましたぞ。

小靜　そんなら皆さん。

　ト治郎左衛門、小靜、與次兵衛、次左衛門、花道の方へ行く。

長吉　この上ともに治郎左衛門さま、只何事も、よろしきやうに御賢慮を。

與次　吾妻が義理も立つやうに。

治郎　その氣遣ひは必らず無用。小靜どのは改めて、山崎屋への挨御察。

小靜　それではどうも。

治郎　ハテ、斟酌するも事に依るわえ。

　ト四人、顔見合せ

ハヽヽヽヽ。

　ト唄になり、治郎左衛門、小靜、與次兵衛、次左衛門付いて花道へ入る。有右衛門、權九郎を引立て下座へ入る。奥より吾妻、出て來り、長吉の脇差を取つて

吾妻　南無阿彌陀佛。

　ト自害せうとする。長吉とめて

長吉　ヤレ危ない。早まるまいぞ。

與五　コレ吾妻、この與五郎を、腑甲斐ないと恨んで死ぬのか。但し身請けされしが口惜しいか。

吾妻　なんで死ぬとは、これが死なずに居られませうか。小靜さんのお志し、有り難いやら嬉しいやら、障子の内で聞いて居て、その悲しさ。いつそお目にかゝつて禮云はうかと、思へど今さら恥かしく、拜んでばつかり居りましたわいなア。あれ程に貞女なお方のあるお前に、どう添はれう。生別れより一思ひと、覺悟の上のこの自害。放して殺して下さんせいなア。

長吉　成る程、譯を聞けば尤もだが、さうしては小靜どの

が、心盡しも水の泡、消えるその身は是非もないが、後に殘つた與五郎どの、七日々々の佛事をも、人目を包む袖の内。濡れぬ先こそ露をもいとへ、親々達も御得心の上からは、花咲く春に遭ふのが樂しみ。死んで花實が咲かぬ諺。殊に治郎左衛門さまより預かつた上からは、モウ〳〵、主の體で、主の自由に死なれない。なんであらうと改心して、マア、死ぬ事は、止めてくんなさい。

ト奥にて

長五　長吉や〳〵。

與五　あの聲は。

長吉　慥かに濡髮。目にかゝちやア面倒だ。あの二階へ。

與五　合點ぢや。

ト與五郎、吾妻を連れて二階へ上がる。

長吉　必らず短氣を出すまいぞ。

長五　放駒、其所に居るか。

ト濡髮長五郎、廻しの網を持つて出て來る。

長吉　オヽ、濡髮、なんの用だ。

長五　なんの用なものかえ。如何に日が長いと云つて、先刻の事、もう忘れたか。

長吉　アノ、撚り綱の廻しの事か。

長五　奥で樣子を聞きやア、おれが旦那の多左衛門どのは梵天國。すりや吾妻が事は消えてしまやア、お主になんの義理もない。この撚り綱の廻しの一段、日割りの金の百五十兩と引替へ約束。サア、受取らうか。

長吉　先刻も云ふ通り、拂ひ米の金が集まりやア、直ぐに請け戻さにやアならないが、まだ内から便りがない。氣の毒ながら、もうちつと。

長五　インニヤ、待たれない。嫌だ。

長吉　おれも男だ。百五十兩ばかりの金は、家藏を賣つても遣るワ。名が恥かしいから、逃げも隱れもしやアしない。二日や三日は待つてもよささうなものだ。吝な男ぢやアないか。

長五　なんだ。おれも立方の關取りだ。心が合へば百や二百の金は、只でも貸してやるわえ。

長吉　そんなら當分、その廻しを貸さないか。

長五　儘にもしよう。

長吉　さう云ふ根性だ。貸さうと云つたとて、只借りるものか。

長五　只貸す位なら、ふんざばいてやるワ。

長吉　勿體ない。撚り綱の廻しを、ふんざばかれるものな

ら、ふんざばいて見やれ。
長五　いま目の前で、ふんざばく。
長吉　そりや、どうして。
長五　斯うして。
ト袖を踏み碎く。内より撚り綱の廻し出る。
長吉　それを。
ト　かゝる長吉を、突き退け
長五　人を騙て、只取る算段。巧くは行かないワ。
長吉　所を斯うして。
ト立廻りのうち、下座より高松、出て、この廻しを取
つて
高松　四郎兵衞どのにや、わしが屆けます。
長五　それをやつちやア。
長吉　ドツコイ。
ト引きとめるうち、高松は廻しを持つて、花道へ駈け
て入る。
長五　こりやア、うぬらは云ひ合せて、あの廻しを盗みに
うせたな。
長吉　明日の結びになけりやナならぬ撚り綱の廻し。おれ
が借りた。おれに貸しやれ。

長五　素人角力に廻しは要るまい。達て欲しくば一番揉ん
で、おれが砂を摑んだら、物云ひなしに貸してやらう。
われが負けりやア踏み殺すぞ。
長吉　面白い。おれも名乘りを貰つたからは、まんざら素
人のやうでもあるまい。
長五　そんなら、おれと揉んで見るか。
長吉　栃の木の蟬も勝負は運。
長五　片やは濡髮。
長吉　放駒。
長五　關と
長吉　關との
兩人　晴れ勝負。
ト立廻り。
兩人　よんやサ。
ト兩方に別れて、キツと見得。誂らへのタテになり、
角力よろしくあつて、トヾ有り合ふ俵を枷に面白き立
合ひあつて、吹替への俵、引合ふと、俵ちぎれて内よ
り、みたけ小判百五十兩出る。
兩人　思ひがけないこの金。
ト恟りしてほぐれる。奥より、おりき、走り出て來て

りき　モシ〳〵、與五郎どのと吾妻さんが、書置を置いて何所へやら。

ト書置を見せる。

長吉　南無三、捨てちやア置かれまい。濡髪、日割りの金、渡したぞ。

長五　この場の勝負は。

りき　わたしが預かり。早うござんせ。

長吉　合點だ。

ト尻をからげる。舞臺よろしく、ドン〳〵にて幕。幕の內、ごん〳〵打ち續けにて、引返す。

本舞臺、三間の間、千葉家裏門のかゝり。爰に三原有右衞門、以前の形にて、大童にて、受け身になつて居る。多左衞門、彥助、拔身にて、左右より切りかけて居る。この見得にて、幕明く。

有右　何者と思へば多左衞門、彥助よな。聲もかけず騙し討とは、卑怯な奴の。

多左　うぬと治郎左衞門が口先で、たうとう屋敷へは歸られず、便る方なき天竺浪人。

彥助　梵天國の意趣晴らしだワ。

有右　浪人せしは心柄、名乘りかけて勝負はせず、この場の狼藉。剩さへ搦め捕つたる權九郎をも、取逃がしたる上からは、二人ともに、手にかける。覺悟なせ。

多左　印子の鯉の置き物を持つて居るが、うぬが因果だ。命惜しくば鯉を渡せ。

有右　覺悟なせ。

兩人　渡せ。

有右　覺悟。

兩人　渡せ。

三人　ドツコイ。

トこれより、タテの鳴り物になり、闇の立廻り、いろいろ面白くあつて、トヾ同士討ちになり、彥助を切り倒す。多左衞門、有右衞門が後より、引ッ抱へ、ダヂ〳〵と、垣の際へ寄ると、白刃出て、兩人を刺し通す。兩人苦しみ、アッと前へ倒れる。夜神樂のやうになり、凄き鳴り物になり、切り藪より、長五郎、頰冠りにて、白刃を振つて出て來り、有右衞門が懷中より、印子の鯉を出して押頂き、懷中する。花道より、長吉、ツカ〳〵と出て來り、これを見て、窺つて居る。長五郎、思ひ入れあつて、腰に提げたる與五郎が印籠を、有右

衞門が死骸の側へ落し、これまでよしと云ふ思ひ入れあつて、花道へかゝらうとする。長吉、立ち塞がる。長五郎、顏を隱す。立廻り。この中へ、下座より、駕籠舁き、甚兵衞、四ツ手駕籠の垂れを絞り、一人にて擔ぎ出る。兩人この駕籠へ突き當る。これより面白き立廻りちよつとあつて、長吉、長五郎を引きとめる。長五郎、振り切つて、四ツ手駕籠へすつぽりと入る。上より垂れを下ろす。長吉、印籠を取上げ口に啣へる。甚兵衞、四ツ手駕籠へ頰杖をする。この仕組みよろしく、シヤギリ。

ひやうし幕

四幕目

高輪駕籠屋の場

役名——駕籠屋甚兵衞。同女房、お袖。同母、お早。駕籠屋、岩五郎。三原傳藏。番頭、權九郎。山崎屋與五郎。藤屋吾妻。放駒長吉。關取り、濡髮長五郎。

本舞臺、貧家の飾りつけ。下の方に古行燈灯してあり。幕の内より駕籠舁き岩五郎、外三四人、小田原提灯を疊んで側へ置く。お早、婆の拵らへ、木綿やつしにて、大火鉢を引寄せ、澁團扇を持ちて、蚊を燻して居る。寺の鐘にて幕明く。

岩五　どうぞ阿母、料簡はござるまいか〳〵。

四人　頼むのに〳〵。

はや　もう其やうに、皆の衆が云うて下さりますが、こればつかりは、どうも挨拶が出來ませぬわいなう。

岩五　サア、定めて度々の事でござるに依つて、早速料簡もなるまいが、氣の毒な事は、わしらは駕籠舁き仲間の事だに依つて、此方の聟の甚兵衞が惡酒で、内の揉める事はよく知つて居ますが、酒ゆゑに阿母や女房に愛想を盡かされ、内を出されたと云はれても濟まず、なんと出しても外聞の惡いぢやアごんせぬか。もうこれぎりで甚兵衞が詫び言しませんほどに、どうぞ阿母、こなさんが料簡して、嬶アどんにもよいやうに云うて、なんと甚兵衞を、内へ歸しちやア下さるまいか。

駕三　それ〳〵、わしらも餘り氣の毒さに、仕事に行くのを止めにして、わざ〳〵甚兵衞の詫びしに來ました。

駕二　わしらも矢ッ張り持出しに行くのを、外らして挨拶

に來ました。
岩五　どうで阿母、みんなに免じて
皆々　料簡して下さい〱。
はや　イエ〱モウ、馴染みもない仲間の衆、其やうに云うて下さりまする甚兵衞の事、連れ添ふ娘のお袖が緣も切れませねば、どうも內へ歸しませうと云ふ事が、云はれませぬわいの。
岩五　サア、さうではごんせうが、其處をどうぞ料簡して、あの甚兵衞を歸して下さりましな。
はや　イエ〱、どうも料簡はなりませぬわいなア。
皆々　サア、そこを一つ料簡して下さい〱。
はや　こればつかりは、捨て置いて下さりませいな。
皆々　こりやア、どうしたものだらうな。
はや　これは又、きつい蚊ではあるぞ。
ト駕籠舁き皆々、困つた思ひ入れ。お早、蚊を燻して居る。てんつゝになり、花道より女房お袖、やつし尻からげ頰へ手拭を冠りたる形。山下駄を履き、手桶を提げて出て來り、直ぐに內に入る。
そで　母さん、水を汲んで來ましたわいなア。
はや　勝手の知れぬ井戶端で、怪我でもせぬがよいぞや。なんの、よる夜中まで汲まいでもよい事を。水ならわしが汲むわいなう。
そで　イエ〱、なんの勿體ない。お前に水が汲ませられませう……これは皆さん、ようお出でなさんしたなア。
ト手桶を引きつける。
はや　コレ〱お袖、早うお茶でも進ぜてたもいなう。
そで　見て下さんせ。四五日後に越した儘で、お佛壇さへござりませぬわいな。ホヽヽヽ。
岩五　その筈サ。內の事はだん〱にするがようごんす。時にお內儀や。今夜も亭主の甚兵衞が、詫びに來ましたが、どうぞ阿母へ好いやうに云つて、內へ歸してやつて下さるまいか。挨拶するも仲間づく。この下はらへ引越して來た晩に、甚兵衞が棒だらになつて、夫婦喧嘩をして內を出されたさうだが、あの仲町のきんこ部屋でも古兵衞部屋でも、誰れ一人挨拶もせぬさうだと云はれちやア、わしらまでが仲間內を、惡く云はれる事でごんす。重ねては格別、今度ばかりは、どうぞ料簡して下さいまし。頼みます〱。
皆々　お內儀、爰はどうぞ、料簡して下さい〱。
そで　これはどなたもお揃ひで、御深切にようお世話をな

さつて下さりまする。あの甚兵衞が事は、御存じもござりませう。わたしが勝手に持ちました男でござりまするに依つて、モウ、どのやうな事でも料簡して歸したうござりまするが、歸されませぬその譯と申しますは、マア、聞いて下さりまし。世間にいくらも酒飲みの癖はあるものでござりまするが、あの甚兵衞どのゝ酒は恐ろしい酒でナ、五合飲めば五合だけ、一升飲めば一升だけ、それはそれは氣が荒うなりまして、サア、酒に醉ひますと、ほんに人の見境がござりませんで。あの深川でも喧嘩は度々。剩さへあの網打ち場の大屋どのゝ顏を、德利で疵をつけまして。サア、それが内分で濟まうか。母やわたしがいろ〳〵に詫び言を致し申したれば、そんなら料簡はしてやるが、此方の店には片時も置く事はならぬ程に、今日中に餘所へ引ッ越して行けとの事ゆゑ、斯く店請けへも沙汰なしに、其うちにどこがどう、この下ぼらへ引越して參りまして、まだお長家も廻らぬうちに、荒神樣のお神酒を取りに行くと申して、アノ酒屋へ參りましたが、その酒屋で飲みましたやら、又とつかり醉うて來て、店を忘れたと云はれましては、顏が立たぬゆゑ、今日からアノ深川の大家めを、その分では置かぬと駈け出しまするを、留めましたれば、また暴れては愛想づかし。情ないと申しませうか、なんたる因果で此やうな、男を持つたと存じますれば、モウ〳〵、連れ添うて居りまする事は、ほんに嫌でござります。あの甚兵衞が内を出ましたこそ幸ひ、厄介と申しましては、この母たつた一人。モウわたしが人仕事いたしてなりと、どうやら斯うやら過しませう程に、あの甚兵衞の事なら世話して下さりますな。あのやうな惡い酒飲みを、二度三度男に持つて、母へ苦勞をかけましては、わたしが不孝。これから母へ氣を休めたうござりまする程に、もう甚兵衞の事は、ナア、母さん、愛想もこそも盡きてなア。

はや　サア、あの惡酒の甚兵衞、情ない事ぢやと思へども、また添うて見れば、血を分けた其方の兄の、濡髮長五郎、どのやうな苦勞な事を聞きませうも知れぬもの。また甚兵衞の事は、酒さへ飲まねば、ほんに云ひ分のない男。其方は不便ではあらうが、まだ馴染みもない仲間の衆が、あのやうに折角深切に世話やいて下さるゝ事。甚兵衞が今日向酒さへ飲まぬと云ふ事なら、なんと内へ歸してはどうであらうぞいの。

そで　イエ〳〵母さん、あの甚兵衞の惡酒が、どうして止

むものでござんす。必らず〳〵、挨拶せぬがよいわいなア。

岩五　コレ〳〵お内儀、あの甚兵衞が酒の事なら、モウちつとも氣遣ひさつしやるな。わしが内で、この中の晩から、意見を云つたらば、甚兵衞も今度は、よく〳〵思ひ當つたと見えて、これから酒と云つちやア、嗅いでも見まいと云ひましたわいの。

駕一　わしらも、甚兵衞が酒の事なら、請合ひました。飲ませぬ程に、料簡して下さい〳〵。

駕二　よく〳〵なればこそ、わしらまで禁酒せうと云ひましたわいの。この後酒で愛想づかしが出來たなら、モウその時はわしらは、口を出しませぬ程に、料簡して下さい〳〵。

岩五　なんと云つても、あの男も、酒さへ飲まにやア、駕籠舁きにしちやア惜しい男だ。どうぞ仕様はごんすまいか。

駕二　なんとお袖どん、阿母もあの通りなれば、酒さへ飲まずば料簡して、内へ入れて下さいな。

皆々　どうぞ内へ入れて下さいな。頼みます。

そで　イヤモウ、わたしもさうは思へども、母さんの心も知れませぬゆゑ、ならぬとは申しましたものゝ、あの酒さへ止む事なら、内へ歸りますやうに、云はします程に、そんならお世話ながら、どうなりと好いやうに、お頼み申しますわいな。

はや　それ〳〵、あのやうに世話して下さる甚兵衞が事、其方さへ料簡する心なら、わしや今にでも内へ入れたいわいなう。

そで　わしや又、お前さへよければ、どうして外聞惡く出して置かれませうぞいなア。

　トお袖、氣をかねて居た思ひ入れ。

はや　それ〳〵、そんならお世話ながら、歸りますやうに、お頼み申します。それも酒をキッと飲まぬやうに云うて下さりませい。

そで　それ〳〵、又あのやうに酒に醉ひますと、愛想づかしが出來ます。くれ〴〵も酒の事を、よう仰しやつて下さりませ。

岩五　サア、その酒の事は、皆がキッと請合ひます……なんと阿母や、お袖どのがあの心なら、夜も短かい事だ。ちよつと今のうちに、甚兵衞を連れて來やうではござらぬか。

皆々　それがようごんせう〳〵。

岩五　そんなら甚兵衞を、いま連れて來ますぞえ。

はや　左様なら、お世話ながら、お賴み申しまする。

岩五　合點でごんす。

皆々　サア〳〵、早いがよい〳〵。

ト皆々外へ出る。

はや　こりやモウ、度々御苦勞でござりますな。

皆々　なんの〳〵。サア、行きませう〳〵。

トてんつゝになり、岩五郎、提灯をつけて先に立ち、皆々捨ぜりふにて花道へ入る。お袖、お早と後を見送り

そで　よろしうお賴み申しまするぞえ。くれ〴〵も酒の事を仰しやつて下さりませ……なんと母さん、深切な事ぢやござんせぬかいな。

はや　ソレイナウ、酒さへ止めれば、好い甚兵衞。仲間の衆もせめて。

そで　それがようござんせう。それ〳〵、わたしが焚きつけませうか。

はや　イヤ〳〵、茶はわしが掛けます。明日は其方や長五郎が父御の命日。旁々逮夜の事なれば、せめてお茶湯しませうわいの。

そで　ソレイナア、そんならわたしは、父さんのお位牌を出しませうわいな。

はや　オヽ、それ〳〵。ドリヤ、煮花拵らへませうか。

ト唄になり、お早、奥へ入る。お袖、針箱を出して、此うちより位牌を取出し、この上へ直して居る。この唄のうち花道より長五郎、三度笠をかむり尻を端折り、一腰差して、あたりを見ながら出て來る。直ぐに本舞臺へ來り、門口を叩く。

そで　誰れぢやえ〳〵。

長五　爰らあたりに、深川の網打ち場から越して來ました、駕籠舁きの甚兵衞と云ふ者はござりませぬか。

そで　合點の行かぬ。どうやら、さう云はしやんすは、兄さんの聲のやうぢやが。

長五　さう云ふ聲は、妹のお袖ぢやアないか。

そで　アノ長五郎さんかいなア。

ト門口を明けて、長五郎を見て

ほんに兄さんかいなア。

長五　ヤレ妹か。逢ひたかつた〳〵。

そで　マア〳〵、内へ入らしやんせいなア。

ト長五郎、あたりを窺ひ

長五　甚兵衞は内にか。

そで　イエ〳〵、内にぢやござんせぬ。

長五　幸ひ〳〵。

ト合ひ方になり、笠を持つて内へ入り、思ひ入れあつて、草履を以つて腰に挾み、門をしつかと締める。

そで　兄さん、どうして爰へは尋ねてお出でなさんしたえ。

長五　この長五郎が、今宵來たには、話しのある事。

そで　定めて譯がござんせう。わたしも合點が行かぬわいな。

長五　その筈〳〵。早速ながら、母者へも甚兵衞へも沙汰なしに、匿まつてくれまいか。

そで　エヽヽヽ。矢ッ張り合點が行かぬわいなア。

長五　とばかり云つちやア、その筈。何を隱さう、三原有右衞門と云ふ侍ひを手に掛け……イヤ、ちよつとした意氣づくで喧嘩をした。何も案じる事ぢやアないが、商賣柄ゆゑ、おれが名が、パッとして居る。少しのうちこの噂の止むまで、どうぞ隱してもらひたい。

そで　そりやモウ、たつた一人の兄さんの事、どうなりして匿まひませう、と云うてからが、引越して間もない上、猶近所の手前と云ひ、見やしやんす通りの茅ら家の見通し。何處へどうして。

長五　匿まはれぬか。

そで　ナニノイナア。母さんも朝夕、お前の事を苦にしてござんす事ぢやに依つて、どうなりとして匿まひませう。

長五　そりやマア、忝ない。

そで　さりながら、間取りもないこの内。どこも隱れてござんす所が。

長五　待ちやれ。何處ぞ見立てよう。

トあたりを見て

そで　モシ、押入れはどうぢやえ。

長五　あんまり口元ぢや。それに図體が大きいから、どうも……ある〳〵、手もなし、床の下がよい。

そで　アノ、床の下でも大事ないかえ。

長五　大事ないとも。そりやア元より覺悟の前よ。コレ、母者人へも甚兵衞へも。

そで　そりや、合點ぢやわいなア。

長五　それでよし〳〵。

甚兵　ト向う揚げ幕にて
　　こりやア仲間の衆、お世話でごんした。
皆々　なにサ〳〵。
　　ト長五郎、思ひ入れ。
長五　斯うして居るも心元ない。ドレマア、疊を。
　　ト兩人にて疊を上げる。
そで　これは又、きつい蚊でござんすわいな。
長五　その火鉢を寄越しやれ。あたりの塵を集めて燻して居やう。
そで　ほんに、蓙がのみたうござんせうわいなア。
　　ト火鉢を持つて來る。
長五　なんぞ敷く物はないか。
そで　サア、なんにも。
　　ト氣の毒な思ひ入れ。
長五　よい〳〵。この菅笠を敷いて居やう。
　　ト下へ入る。
　　見やれ。おれが入ると腰ツきりだ。直ぐに横にならずばなるまい。疊は一人でも敷かれるか。
　　ト火鉢と菅笠を持つて入る。
そで　どうやら斯うやら。

　　ト重たき疊のこなしにて、やう〳〵疊を敷く。てんつつになり、花道より岩五郎、提灯を下げ、駕籠舁き皆皆。甚兵衛、木綿袷の廣袖の形にて、帯を締めながら出て來る。皆々、舞臺へ來り
岩五　サア、お內儀さん、甚兵衛を連れて來ました。
そで　ハイ……ヤレ〳〵、お世話さまでござりましたなア。
　　ト奥にてお早
　　モシ〳〵母さん、皆さんがござんしたぞえ。
はや　オイ〳〵。
　　ト合ひ方になり、奥よりお早、土瓶と茶碗を三ツ四ツ盆に載せ、持つて來る。
そで　ヤレ〳〵、この夜の短かいに、どなたもお世話でござりましたなア。サア〳〵皆さん、內へ入らつしやんせいなア。
皆々　オイ〳〵。サア〳〵、甚兵衛、內へ入るがよい〳〵。
　　ト岩五郎先に皆々、內へ入る。甚兵衛、氣の毒なる思ひ入れにて、駕籠舁きの中へ入つて俯向いて居る。
岩五　モウ、阿母もお袖どのも、わしらに免じて、何も云つて下さるな。コレ甚兵衛や、お主もこれより、二才子供ぢやアない。今までのやうに惡酒ぢやア、仲間の顔も

潰すと云ふもの。江の島の開帳や、海安寺常光寺の開帳で、往來の陽氣はよし、錢になる最中。ちよつと宿へ持ち込みに行つても、方圖なく取られるこの駕籠賃。ちつと辛抱して稼いで見やれ。米を百買ひをせずと、一臼づつも搗かれる所よ。マア／＼、内が丸くなつて、わしらまで嬉しうごんす。

皆々　それ／＼、わしらも仲間の外聞がようござる。

はや　ほんに、どなたも、ようお世話なされて下さりました。何のかんのと申すものゝ、娘もわたしも、便りにする者は、あの人より外にはござりませぬ。モウ、死水取つてもらはねばならぬ、あの人が今までのやうに、酒を飲んで愛想づかしな事があつては、この末、親子はどうなる事ぢやと、ほんに夜の眼も寢られぬやうぢやわいの。

そで　それ／＼モウ、わたしやどうなりましてもいとはぬけれど、年の寄られた母さんへ、苦勞を掛けまするが、ほんに身を切られるより辛い。酒ゆゑに、たつた一人の妹御の、その身の上さへ知らしやんせんではないかえ。もうこれから、その惡酒を、きつぱりと止めて、妹御の身の上や、母さんの事を思うて、藥研の地藏さまに願掛けでもして下さんせ……ほんに皆さん、いかいお世話でござりましたなア。

岩五　なにサ／＼。なんと皆の衆、酒と云ふものは、をかしいものぢやごんせぬか。わしらは一口も呑まないが、甚兵衞が後引き上戸で騷ぐを見れば、酒を氣狂ひ水とは、よく云つたものだな。もうこれから、今までのやうに、二百取つても三百取つても、酒は呑まぬがようごんす。

駕二　それ／＼、これから酒を止めて、篠原團子や草餅を喰うて居るがよい。

駕三　仕事に出ても、酒手を貰はずに、餅代を貰ふがようごんす。

駕四　どうぞ酒の呑めぬやうに、爰の高山稻荷さまを頼むがようごんす。

皆々　きつと酒を止めさつしやいよ。

はや　よう云うて下さりました。酒さへ斷てば、ナニ云ひ分はござりまぬわいな。

岩五　さうでごんせう。甚兵衞、今夜は早く寐たがよいぞえ。明日は大方、中屋から大手へ駕籠が出るであらう。阿母も早く寐さつしやい。

はや　それ〳〵。お袖、あの人を早う寐かすがよいわいの。
そで　アイ〳〵。
皆々　そんならモウ、わしらは歸りませう。
はや　ア、、モシ〳〵、折角皆様へ上げようと、茶を入れましたわいの。
岩五　そりやア忝ならごんすが、筑後屋から升本へ、四ツ時と云ふ遊びの駕籠が、三挺出ますから、斯うしちやア居られませぬよ。
そで　そんなら、どなたもお歸りかいなア。
岩五　折角煮花が出來たもの。そんなら、わしが呑んで行きませう。
皆々　それがよい〳〵。甚兵衞、おいらはモウ歸るによ。
ト甚兵衞、立つて
甚兵　こりやア、いかい世話でごんした。
皆々　なんの〳〵。また明日來ませう。
岩五　コレ〳〵、お主達は、おらが内へ、今歸ると云つてくりやれ。
皆々　合點だ〳〵。サア、行きませう。
そで　どなたもお世話でござりました。

はや　ドレ、蚊帳釣つてやりませう。
ト合ひ方になり、花道へ入る。お早、奥へ入る。此うちお袖、土瓶の茶をついで岩五郎が前へ出す。
そで　サア、一つ呑ましやんせいなア。
岩五　マア、甚兵衞に呑まさつしやい。
そで　なんの、主の初穗は酌んで置きましたわいなア。
岩五　エ、、畜生め。内へ入れぬの愛想が盡きたのと云つても、煮花の初穗を酌んで置いたとは、それ程にはマア可愛いものかえ。甚兵衞、お主もちつと、女房の心意氣も買つて見てやれ。
甚兵　成る程、何かにつけて女房ほど、好いものはごんしないワ。わしゆゑ苦勞ばつかりで、夏は夜着も炬燵櫓も呑んでしまつて、多は蚊帳も腹がけも、德利の中へぶち込んでしまふ。惡酒でも宿六と思へばこそ、又も内へ入れて、入り聟のやうにしてもくれない嬶ア左衞門。阿母と云へば、あの通りの、氣質がよい事と云つちやア、これ程もございませぬワ。モウ〳〵、酒は呑みますまい飮みますまい。
そで　なんぼ其やうに云はしやんしても、また酒の顏を見ると、飲みたうなるでござんせう。そりや又その時の事

かいなア。

ト云ひながら甚兵衛が腰提げの莨をつがうとして、莨入れの中より簪を出して

そで　モシ、この簪は、なんでござんすえ。

甚兵　それか。そりやア何よ。この中、向島の武藏屋へ、吾妻と云ふ藝者衆を乘せて行つた時、拾つたのよ。お主に遣らうと思つて居るうち……やらかして忘れたやつサ。

そで　ほんに、こりや好い簪でござんすな。見れば熨斗と揚羽の蝶の紋所。裏書に付いてゐるわいなア。

岩五　まんざらでもないな……イヤ、待たつしやい。慥かこの間の事であつたが、與五郎とやら云ふ息子が、どこでか侍ひを切り殺して、吾妻とやら云ふ藝者を、連れて逃げは逃げたが、聞かつしやい、その時の死骸の側に、定紋の印籠が落ちてあつたばつかりに、その息子が方々尋ねられると云ふ事だ。その簪が爰の内にあつたなら、その吾妻とやらが、死靈が來やらも知れない。そりやア早く、どうぞするがよかろぞえ。

そで　そんならアノ、この簪の紋所が、與五郎どのとやらと、吾妻さんとやらの、紋所でござんすかいなア。

甚兵　棒組の話しを聞いちやア、お主に差させちやア置かれないわえ。

そで　噂を聞いても怖いわいな。

ト　簪を抛り出す。甚兵衛、取つて莨入れの中へ入れる。

甚兵　お主も兎角、銀の簪には緣がない。

岩五　嘘はないぞ。さうだぞ。

そで　そりやあんまり古いわいな。

甚兵　古いと云へば、それ〳〵、今夜は慥か長五郎どのや、お主が大事の親御の逮夜ぢやアないか。ちつと遲くとも、いつもの色茶飯でも炊いて、佛檀へも上げたり、親人にも食はせるがいゝ。

そで　アイ〳〵。お前もよう、今宵の逮夜を覺えてござんすなア。

甚兵　アノ阿母の話しで聞いたが、兄貴の長五郎どのを可愛がられた、佛さまであつたさうになア。

そで　アイ、それは〳〵あの兄さんを病氣のうちも苦勞にして死なしやんした。その父さんのお逮夜に

ト　床の下を思ひ入れして

今から茶飯を炊かうわいな。

甚兵　コレ、平らならしの豆腐のぐづ焚き。
岩五　ドレ〳〵、おれも手傳うてやらう。
そで　そんなら手傳うて下さんせ。
甚兵　出來たら、おれを起してくりやれ。
そで　うたゝ寢して、風引かしやんすなえ。
甚兵　豆腐屋が寢にやアよいが。
そで　爰らから聞いて見ようわいな。

ト唄になり、お袖、岩五郎、奧へ入る。甚兵衛、直ぐに莨盆を枕にして寢轉ろび、莨のんで居る。この唄のうち花道より、傳藏、ばち鬢頭の拵らへ、馬乘り袴をはき、朱鞘の大小、後へ鞭を差して、饅頭笠を下げて出て來る。後から權九郎、手代の形、三尺手拭を締め、尻を端折り、革羽織を帶へ挾み、一本差して、三升樽と麥藁細工を手拭にて兩方へ結へ、肩へ掛け、菅笠を持ち出て來る。花道にて

傳藏　なんと權九郎、思ひ出して見れば見る程、あの海晏寺の麥藁の大佛は、凄ましいものではないかい。
權九　左樣でござります。出來ぬうちから御評判でござりましたが、イヤ、夥しい人でござりました。
傳藏　夥しい人と云へば、今日は今朝からお身とたつた二人して、往には植木屋で飲み、川端の和田屋でも飲んだが、たつた今もアノ桃林で夥しく飲んだではないか。
權九　左樣でござります。いま桃林で喰べましたよりは、鈴が森で喰べた酒が、たんとでござります。あの佃の魚の鯒や鰶で、ピチ〳〵刎ねて居るので、また酒も一入でござりました。御覽じまし、宿の道明で三升擔いで參りました菊の露を、まだ口切りも致しませぬ。成る程〳〵ほか〳〵して、酒は餘ッぽど下さりましたてな。
傳藏　サア、兎角遠足の節は、酒を持たねば慰みもならぬに依つて、その三升の酒へ手を付けぬも樂しみかえ。
權九　イカサマ、野駈けはそんなものでござります。時に傳藏さま、今宵は大杵坂なぞの芝居はござりませぬか。
傳藏　さればサ、熨斗村田屋に心ざしも有り難けれど、ソレ昨日ナ、權九郎へも話した爰の甚兵衛。この高輪へ引越して來たとの事ゆゑ、內々の事を頼まうと思つて。
權九　ほんに、左樣でござりました。私しもこの中の事で、あの甚兵衛には話しもござりますが、慥か甚兵衛が話しました處は、この高輪の仲町で、本醉寺横町とやら承りました。

傳藏　それ〳〵。ちよつと爰らで聞いて見やれ。

權九　畏まりました。

ト合ひ方になり、兩人、本舞臺へ來り、內を窺ひ

權九　モシ〳〵、卒爾ながら、爰らに深川の網打から引越して來ました、駕籠の甚兵衞と云ふ人はござりませぬか。

甚兵　アノ、その甚兵衞は、わしでごんす。店請けからでもござつたのかえ。

權九　イエ〳〵、わしやア山崎屋の權九郞と云ふ者だ。

甚兵　アヽ。これからトロ〳〵やりかけた所であつた。

ト起き上がりて、目を擦りながら門口を明けると、傳藏と顏見合せ

あなたは、どなたでござります。

傳藏　身共は千葉の家中、三原傳藏と申す者。ちと其許へ賴みたい用事あつて、わざ〳〵夜分この處へ尋ねて參つた。よくこそ在宅であつた。

甚兵　如何やうなお賴みか知りませぬが、マア〳〵お入りなされまし。

傳藏　然らば免し召され。

ト傳藏、上の方へ通る。

甚兵　斯やうな見苦しい所へ、ようお出で下さりました。サア〳〵お莨を

ト莨を出し、權九郞は下の方に控へて居る。

傳藏　構ひ召さるな〳〵。

甚兵　ハア、お前も、あなたのお連れ樣でござりまするか。

權九　左樣々々、わしやアあなたのお屋敷へお出入りの山崎屋の手代。權九郞と云ふ者サ。甚兵衞どのには、初めて逢ひましたなア。

甚兵　これは〳〵、ようお出でになられました。さうしてお前も、なんぞ私しに、御用でもござつてお出でなされましたか。

權九　成る程、この權九郞も、こなさんに賴みたい用と云ふは、外でもないのサ。兄弟衆の事について來ましたが、甚兵衞、こなさん、妹御一人あつたかえ。

甚兵　左やうサ。妹が一人ござりましたが、どこにどうして居りまするやら。

權九　そりやア知れまい。その妹御の方でも、甚兵衞を兄貴だと云ふ事は知らぬとの事。それを詳しく知つて居る者は、鶴が岡の八幡町、藤屋次左衞門だ。この仁よりの

話しで聞けば、藝者の吾妻は、甚兵衞どのゝ眞實の妹なれども、娘分やら抱へやらに、引取つて置いたとの事。あの藤屋の吾妻が、こなさんの兄妹だと云ふ事は、いま聞くのが初じめてゞごんせうな。
甚兵 左樣でござります。心に掛けて居りましたが、アノ藝者の吾妻と云ふが、私しの妹でござりましたか。知らぬ事とてなア。
權九 その兄弟と云ふ事は……コレ〳〵、この證文を見さつしやい。
ト懷中の紙入れより證文を出して見せる。甚兵衞、これを讀んで
甚兵 オヤ〳〵、この證文の中には、兄甚兵衞とも末々兄妹名乘り會ひ致すやうに賴むと書いた、こりやアノ阿母の……いよ〳〵違ひはござりませぬ。
權九 ソレ、その西の内の一枚が賴み證文。小判で五十兩、現金で親方へ渡して、この權九郎がその書附けを取つて置いたが、此方の仕事サ。兄妹の名乘りをさつしやつたならば、外の男の手を切つて、權九郎に下さるまいか。わしや妹御を貰ひに來ましたのサ。

甚兵 何がさて、五十兩と云ふ大枚の金を出して、阿母の賴み證文まで、貰つて下さりました權九郎どのゝ事。そりやモウ、何時でも私しが、吾妻と兄弟の名乘りさへ致したならば、妹はお前へお上げ申しませう。
權九 いよ〳〵それに違ひはないかよ。
甚兵 なにサお前。
權九 そりやア忝ない。兄のこなたがその心なら、この證文は、結納代りに、甚兵衞、こなたに賴んで置きませう。
甚兵 なにサ〳〵、それには及びませぬ。
權九 イエ〳〵、賴み證文と云ふところが、結納ぢやアあるまいか。
甚兵 イカサマ、そこもござりますわい。
權九 底もあれば蓋あると、身になり見れば甚兵衞どの、こなたは仕合せ者だわえ。もし、妹の吾妻を、權九郎にくれまいと云へば、こなさんも人殺しの日蔭者になるところだ。
甚兵 エヽ、そりや又なぜ、日蔭者になりまする。
權九 コレ、こなたの妹の吾妻を、連れて逃げた與五郎どのは、人殺しでござるわいの。

ト甚兵衞、驚ろき

甚兵　モシ、そんなら世間で話しのある。

權九　山崎屋の與五郎と云ふは、わしの家のどら息子サ。

甚兵　そして又、切られたその人はえ。

傳藏　町人の手にかゝり、面目なけれど身が同苗、三原有右衞門と申す者サ。

甚兵　エヽ、あなたの御兄弟でござりまするか。

傳藏　サア、頼みたいとは玆の事。兄の敵は正しく與五郎。もしも吾妻が縁に引かれ、この所へ來まいものでもない。その與五郎を、なんと留めて置いてはくれまいか。

甚兵　畏まりましてござりまする。

傳藏　イヤ〳〵、早速の承知心元なし。よもや僞はりではあるまいな。

甚兵　そりや、負うて子よりは抱いた子。見ず知らずの與五郎どのを突き出して、吾妻を權九郎どのへ上げるも、妹が可愛さ。さうすりやア私しの同類の肩は、拔けるちやアござりませぬか。

ト傳藏、頷き

傳藏　成る程〳〵。くれ〴〵も與五郎を、取逃がさぬやうに、合點か。

甚兵　ようござります……時に今日は、どちらへお出でなされました。

傳藏　當年、身共は後厄で、大師河原へ參詣いたした。

甚兵　それは、ようお參りなされました

ト傳藏、饅頭の籠を出して

傳藏　コレ〳〵甚兵衞、この饅頭なぞも、鶴見中の名物かと思へば、六郷にもこのあたりもあれば、定めし甚兵衞は、餅組ではあるまいな。

甚兵　イエ〳〵、その餅の方が利き方でござりますわい。

權九　イヤ〳〵、聞いた事がごんす。こなさんは左は上がるげな。幸ひ〳〵、わしが持つて來た三升樽。なんと爰で酒にしちやアどうでござりませう。

ト三升樽を甚兵衞が前へ置く。甚兵衞につこりして、蟲唾の走る思ひ入れ。奥よりお袖出て、心配であることなし。

傳藏　イカサマ、迎ひ酒によからう。なんと甚兵衞、始めまいか。

權九　アヽコレ、なんでも燗がしたいものだ。

ト樽を持つてあたりを見廻す。お袖、思ひがけなく權九郎が持つて居る樽をもぎ取るやうに引ツたくり、ツ

イと奥へ入る。權九郎、呆れて

權九　とんだ内もあるものだ。

傳藏　權九郎、樽はどうした。

權九　浚はれてしまひました。

ト傳藏、膽を潰して

傳藏　呆れたものだ。

權九　化物屋敷ださうだ。

ト權九郎、云ひ〳〵慄へる。

モシ旦那、御用心なさいまし。

傳藏　成る程、甚兵衛、奥で話さうかい。

ト唄になり、傳藏、權五郎、奥へ入る。甚兵衛、後見送り

甚兵　ハテナア。今日が日まで妹の事を、どうして居るかと案じたが、あの藤屋の吾妻と云ふは、血を分けた妹であつたか。その妹を連れて逃げたは、山崎屋の與五郎とやら。どうぞ早く廻り逢うて、妹の難儀を救ひやうがありさうなものだが、今まで逢はぬ妹が事を思ふにつけ、義理のある兄弟の、濡髪長五郎が事も、さぞやあの阿母が、苦勞に思はれるであらうと思へば、これも氣の毒。貰つた跡のおれを、ほんの子のやうにして下さると思へば、どうぞコレちつとなりとも、阿母へ孝行らしい事をして進ぜたいものだが……そりやアさうと、今のばち鬢や、あの手代めは、滅多に油斷はならぬわい。

ト唄になり、奥を見て思ひ入れあつて門口を締めて居る。花道より、長吉、着流し、一腰差し、頰冠りして、片端折りにして、小提灯を下げて出て來り、花道中程にて舞臺を窺ひ、思ひ入れあつて、提灯の灯を吹き消し、門口へ來る。

長吉　モシ、御無心ながら提灯を消して難儀しますが、火を一つ貸しちやア下さりますまいか。

甚兵　さま〳〵の事を云つて來るワ。サア、蠟燭を出さつしやい。つけて進ぜませう。

ト門口を明けて、提灯を受け取る。其うちに長吉、ツと内へ入り、奥へ行かうとする。甚兵衛、恟りして、長吉を引き廻し

甚兵　待たつしやい。こなたは飛んだ人だ。こりやマア、どこへ行くのだ。

長吉　退きやアがれ。家探しをしに來たのだ。

甚兵　エ。

ト不思議な思ひ入れ。

長吉　お主が駕籠の甚兵衞か。よる夜中に踏ん込んで來るからにやア、所詮その分ぢや納まらぬ程に、この長吉を突出すとも、この家の内に隱れて居る、長五郎を渡すとも、サア、挨拶をしやれいな。

ト甚兵衞が奥へ詰め寄る。

甚兵　モシ、わしが内は大家ぢやアないよ。そして、長吉と云はつしやるからは、噂に聞いた片町の米屋、丸屋の長吉どのかえ。

長吉　四郎兵衞關取りの子分になつて、放駒の長吉と名乘つて、ちつとばかりひねくつて見る、取的の長吉だ。

甚兵　それで樣子がガラリと知れた。濡髪關取りを訪ねてでござつたは、八幡角力の云ひ分を云ひにござつたのかえ。

長吉　イヽヤ、長五郎は關取り。おらア素人。場所の出入りに來るものか。

甚兵　して又、なんで關取りを。

長吉　ふん縛りに來たのだ。

ト甚兵衞も合點のゆかぬ思ひ入れ。

甚兵　どうしたとえ。

長吉　何も其やうに白を切る事はない。男でもない長五郎が仕方。三原有右衞門どのを手にかけて、その人殺しを、いとしほなげに與五郎どのにすべいと思つて、死骸の側へ落して置いた、この難波潟の印籠。

ト懷中より以前手に入りし印籠を出して

さうは取らないこの長吉だ。どこがどこまでも長五郎を引摺り出して、與五郎どのゝ身の上を、明りを立てゝ進ぜねば、この長吉が四郎兵衞へ男が立たぬ。サア、濡髪を匿まつたら、匿まつたやうに、たつた今、爰へ出しやれ。また長五郎も男らしく、有右衞門どのを手に掛けたと、尋常に名乘つて出やれ。隱れ忍ぶは卑怯であらう。

甚兵　シタリ。

ト手を打つて長吉が顏を見て

成る程、噂に聞いた放駒の長吉どの。男同士の達引は、其やうなものでごんせう。わしや斯うした駕籠舁きの身の上。例へ緣があればとて、人殺しと聞いて、その長五郎を匿まひませうか。また濡髪も關取り。二階さへないこんな内に、匿まはれさうなものかえ。それとも怪しくば、踏み込んで家探しをさつしやい。だが、家探しして、もし長五郎が居らずば、長吉どの、こなさん、歸り憎さうなものだがよ、

長吉　その蹟り憎い家が面白い。
甚兵　そんなら、どうでも家探しをする氣か。
長吉　知れた事だ。退きやれ。
ト引き退ける。甚兵衛、支へる。立廻り。此うちへ奥よりお袖、走り出て、甚兵衛を引き退け、長吉を留める。ちよいと立廻り。
兩人　退いた〳〵。
そで　待たしやんせ〳〵。
甚兵　ヤイ〳〵お袖、なんでわりやア爰へ出たのだ。
そで　サア、わたしが爰へ來たわな。
長吉　長五郎を匿まつたか。
そで　サアそれは。
長吉　なんで爰へ來たのだ。
そで　サア、わたしが爰へ來たのは……それ〳〵、初めて此方へござんした長吉どの。ア、なんでやらあつたわいなア。
ト あたりを見廻し、以前の茶を茶碗へ注ぎ
サア、お茶一つ上がれいなア。
ト長吉が前へ突き出す。
長吉　エ、こんな溫い茶が呑まれるものか。
ト茶碗を叩き落す。この途端に床の下より煙り、上がる。兩人、思ひ入れ。
甚兵　床の下よりこの煙は。
長吉　合點が行かぬ。この疊を。
ト兩人、疊を上げようとする。立廻りにてこの疊の上にお袖、しつかりと乘る。
そで　こりや、この疊をどうさんすえ。
甚兵　この甚兵衛が長五郎、匿まはぬと云ふ面晴れに、疊を上げて見せるワ。
長吉　察するところ濡髮が、その隱れ家は床の下。
ト思ひ入れ。
そで　サア、見せぬは寐間に敷いた人の、蒲團にあらぬ破れ床、身貧のしがの侘び見えて、夫婦が恥を杜若、疊へ水の濡髮とは、心がなさに袖絞る。露のこの身の置き處と、云はぬ心をモシ、推量して下さんせいなア。
長吉　座つて三尺寐て五尺、僅かな床に忍ぶとも、名は漏れ易き讃の子の床。云ひくろめたる薄煙り。
甚兵　喰はせる物もあら世帶、引越して間もこけのばし、とんだ氣に入る茅家の、よもやにかゝつて甚兵衛も、縛られもせぬ縺簾。

そこで　血筋の縁も短夜と、鳴いて云はれぬこの場の仕儀。
甚兵　また啼く程も啼き別れ。
そこで　いつか遁がれぬ
長吉　籠の鳥。
甚兵　つい引放して、今宵一夜を
三人　明かさうか。
ト唄になり、三人ちよつと立廻つて、思ひ入れあつて奥へ入る。この唄のうち時の鐘になり、バタ〳〵にて花道より吾妻、着流し抱へ帶の形。袖頭巾を持ち走り出て來る。奥より與五郎、着流し、おしよぼからげの形、頰冠りして、傘さし走り出て來て、花道の中程にて、あたりを見廻し
與五　どうぢや、其方は痞へが差込みはせぬかや。
吾妻　イエ〳〵、わたしが事は苦勞して下さんすな。そして、これからどこへ行くのぢやなア。
與五　サア、どこと云ふその行く先はなけれども、一日なりとも其方と二人、斯うして歩くが嬉しいぢやないか。斯うたつて見ると、其方の知るべを尋ねるより外に、心當りはないわいの。
吾妻　サア、わたしぢやと云うて、便りない身の上。眞實の兄さんがあると云ふ事でござんすが、どうして居なんすやら、顏さへ知らねば名も知らず。何時別れたやら知らぬわいなア。
與五　それでは尋ぬる事もならず、今宵はどこに宿らうぞ。
吾妻　コレ、泊めてくれ手はない事かいなア。
與五　なんのない事があらうぞ。どこへなりと泊めてもらうて、あの長吉の話しを聞かうわいなう。
吾妻　それ〳〵、頼もしい長吉さん。わたしも逢ひたうござんすわいなア。
與五　どうして長吉の話しを聞かうぞ……これは又情ない。どうやら降りさうな空になつて來たわいの。
吾妻　早うどこぞへ宿りたいわいな……コレ〳〵、向うに灯火が見ゆるわいなア。マア、あそこへ行つて見ようではないかいなア。
與五　成る程、頼んで泊めてもらはう。サアおぢや。
ト合ひ方、時の鐘になり、與五郎、吾妻が手を引き舞臺へ來て、門口に寄り
與五　モシ〳〵、ちつと戸を明けてもらひたい〳〵。
ト奥より

甚兵　オイ〳〵、誰れだ〳〵。よう寐たものを。
　　ト出て來る。
　　また今夜のやうな、人の來る事もないやうだ。誰れだえ誰れだえ。
與五　イヤ、わしや泊めてもらひたい者でござるわいの。
甚兵　ナニ、泊めてもらひたい。知つた人か知らない人か。
　　ト門口を明けて
　　宿りたいとはこなさんかえ。
與五　左樣。連れと云ふのは女子一人。なんと泊めて下されぬか。
甚兵　成る程、見りや女中連れ。さうして、こなさん方は、どこへござつたのだえ。
與五　サアそれは……オヽ、それ〳〵、儘か江の島の開帳へ、參つた者でござりますわいの。
甚兵　江の島の開帳參りなら、川崎か品川へ泊らつしやればよいに、爰らで旅人を泊める所はごんせぬ程に、早く宿へ行つて泊るがようごんす。
與五　サア、その宿へ泊られる、身の上ならよけれど、人に逢はれぬ二人連れ。爰で泊めて下さらねば、今宵は何處で明かさうやら知れぬ程に、どうぞ泊めて下されぬか。
吾妻　ほんに、それ〳〵、どうやら雨も降りさうなわいな。濡れるこの身はいとはねど、人目にかゝるが辛いわいな。どうぞ泊めて下さんせいなア。
甚兵　イエ〳〵、越して來て間もないのに、こなさん方を泊めて、とんだ事でも出來て見たがよい。大家どのへ濟みませぬわい。早うどつちへなりと行かつしやれ。心中なら大崎の方がよいによ。
　　ト沒義道に門口を締める。與五郎吾妻、當惑の思ひ入れにて
吾妻　こりやマア、どうしたものでござんせうわいなア。
與五　どうと云うて、マア〳〵、目黒の方へ行つて見ようわいの。
　　ト兩人、苦勞して花道の奥へ行く。甚兵衛奥へ行かうとして
甚兵　大方今のは彼のおやないか……呼び返して泊めてやらう。
　　ト門口を明け、花道の方を見て
　　オイ〳〵、待たつしやい。泊めてやらう〳〵。

與五　そんなら、泊めて下さりますか。
甚兵　泊めてやりませう／＼。
吾妻　そりや嬉しうござんすわいなア。
甚兵　早く來なさい／＼。
　ト兩人、嬉しさうに立歸る。
甚兵　モシ、大方お前は山崎屋の與五郎どのと、藤屋の吾妻どのでごんせうがな。
　ト兩人、顏見せ、悧りして
與五　イエ。其やうな者ではござりませぬ。
吾妻　サア／＼、早う泊らいで行かうわいなア。
　ト手を引き驅け出す。
甚兵　アヽ、これサ／＼、逃げる事はない。マア、內へ入りなさい入りなさい。
　ト無理に二人を連れ、門口をシャンと締める。
與五　モシ／＼、わしら二人は、その與五郎でも吾妻とやらでもござりませぬ。どうぞ泊めて下さりますな／＼。
吾妻　それ／＼、與五郎どのでも、吾妻とやらでもない程に、早う去なせて下さんせ。そこ明けて下さんせいな下さんせいな。
甚兵　コレ／＼、何も其やうに怖がる事はない。ア、聞えた。駈落ち同然の二人連れ、もし捕まつて身の上に、どうした難儀がかゝららうと、思つての事でごんせうが、何も其やうに氣遣ひさつしやるな。わしや駕籠屋の甚兵衞と云ふ者サ。
與五　駕籠の甚兵衞どのとは、どうやら聞いたやうな名であつた。
吾妻　成る程、さう云はしやんすりや、見たやうな。オヽ、それ／＼、この中向嶋の武藏屋へ行つた時の駕籠は、慥かこなさんであつたわいの。
甚兵　それサ、しかもその時拾つた簪。
　ト莨入れより出して見せる。
吾妻　ほんに、さうであつたかいな。
與五　ヤレ／＼、さう聞いて落ちついたわいの。
甚兵　モシ、與五郎どの、この間世間で、大分お二人の噂がござりますぞえ。マア、わしの所は御覽じる通り、馬部屋を見るやうな家でござりますが、おかしい話しの止むまでは、マア、此方にお出でなされませ。憚りながら御身分の立ちますやうに、甚兵衞が致してお上げ申しませう……如何にマアお若い方とて、わたしがひよつと居ずば、どうなりませう。

與五　どうと云うて仕樣はなし、實の親には勘當請け、養子親へは義理を缺き、不孝のありたけ仕盡して、世に便りない與五郎が身の上。わしは死ぬとも、あの吾妻を、助け置きたいばつかりに、命長らへ此やうに、淋しい身になりましたわいの。

吾妻　今さらなんで其やうな、わたしが命が欲しいぞいな。添はれぬ時は覺悟して、見事に死んでと思うたに、わたしを殘して與五郎さん、一人死ぬのが、心中かえ。そりや、むごいわいな〳〵。

ト取りついて泣く。甚兵衛、中へ入り、吾妻を引き退け

甚兵　マア〳〵、此方へ退きなさい。エヽ、情ない與五郎どの。水の出花で血道を上げてござる處へ、心中して死ならとは、途方もない。これな、世の中に心中して死ぬ程、割の惡い堅氣なものはないよ。ソレ、死損なへば恥の上塗り、また見事に死んだと譽められたところが、よく云ふやつに、手に手を取つて、未來で半座を分けて蓮の臺。マア阿彌陀樣だの、惡い蓮ツ葉の店をかりて、掛け向ひの危ない夫婦にならうより、生きて居るうち辛抱して、二人仲よく添うた日にやア、辛いしがない世帶でも、それ相當な樂しみはあるもの。ソレ、八文出せば朝湯の極樂。三十文で米大根の一蓮托生。唐黍こしを喰ひながら、二十六夜を拜んで、施餓鬼の屋形で强飯を食へば、こつみ上げるぢやアないかえ……與五郎どのも、親御があれば、吾妻と云ふ藝者と心中して、死んだとお聞きになつたら、勘當しても親子は親子。そのお歎きはどのやうにあらう。また吾妻どのもその通り、兄貴があるでごんせうがの。

吾妻　サア、その兄さんはどこにやら。

甚兵　コレ、其方の眞實血を分けた、兄と云ふは、おれだわえ。

吾妻　エヽ……そりや又、どうして兄さんぢやとえ。

ト甚兵衛、以前の證文を出して

甚兵　何にも云ふ事はない。八幡町の親方へ、其方の事を頼み證文。これが阿母の手蹟だ。讀んで見やれ〳〵。

吾妻　アヽ、この證文が母さんのお手かいな。

ト讀んで見る思ひ入れあつて

モシ〳〵、與五郎さん、聞いて下さんせ。末々は兄の甚兵衛とも、兄妹の名乘り合ひ致すやうに、お頼み申し上げると、爰に書いてござんすわいな。

與五　成る程、そんなら紛れもない、其方の兄の甚兵衞どのでござつたか。

甚兵　今まで知れぬ妹の身の上。今日と云ふ今日知つた甚兵衞。

吾妻　わたしも知らぬ兄さんに、逢つたも盡きぬ緣かいなア。

與五　さぞ嬉しからう〳〵。

甚兵　サア〳〵、爰に來やれ。

ト吾妻、甚兵衞が膝へ取りつき

吾妻　これ程逢はるゝものならば、あの母さんも聞えませぬ。わたしをなぜに兄さんと、一緒に置いて下さんせぬ。知らぬ事とてこの中も、あの武藏屋へ行つた時に、現在の兄さんに、駕籠舁かせて參つたわたし。神さんや佛さんが罰當てゝ、なぜ殺しては下さんせぬ。今思うても勿體ない。兄さん、堪忍して下さんせいなア。

ト取りついて泣く。

甚兵　馬鹿を云へ。知らぬ先なら、どうするもんだ。

與五　もうこれからは、頼むは二人が身の上。

甚兵　そりやア氣遣ひなされますな。

吾妻　わたしや嬉しうござんすわいな。

ト奥にて

權九　甚兵衞どの〳〵。

ト與五郎、吾妻、恟りして

與五　アレ、あの聲は權九郎が聲。

吾妻　見つけられたら、どうせうぞいの。

甚兵　コレ……ちつとで間、あの押入れへ。

ト二人を押入れへ入れて、戸を締めて居る。合ひ方になり、傳藏、權九郎、出て來り

傳藏　甚兵衞、これに居つたか。

甚兵　エ、……ハイ、傳藏さまでござりますか。

傳藏　さて甚兵衞、改めて一禮は申さうなれども、初めて參つてお世話次手、くれ〳〵も先刻頼んだ兄の敵、與五郎が事、今にでも參つたならば、逃がさぬやうに泊めて置いて、早速身共の知らせてくりやれ。

ト甚兵衞、押入れへ心を附けて

甚兵　畏まりました。

權九　傳藏さまにも、殊の外のお喜び。この權九郎も、お頼み申した儀を御承知、忝ない。よもや間違ひもござるまい。この間に改めてお禮に參らう。さて〳〵お世話になりましたなア。

傳藏　定めて如才はあるまいが、あの與五郎には關取りの四郎兵衞や、放駒の長吉めが付いて居れば、その心にて、萬事手ぬかりのないやうに。

甚兵　畏まりました。

權九　吾妻が事も甚兵衞どの、何かとよろしく頼みますぞえ。なんと傳藏さま、夜の更けぬうちに、もうお歸りになりませぬか。

傳藏　イカサマ、歸宅いたさうか。甚兵衞、重ねて逢ひ申さう。

甚兵　これは〳〵、ようござりました。

權九　甚兵衞どの、又この間に、お出でなされませ。

ト門口へ出ようとして、簪を踏み、足の痛む思ひ入れ。

アイタ、、、、、。

傳藏　どうしたのだ〳〵。

權九　踏みぬきを致しましたさうな。

ト以前の簪を取り上げる。

甚兵　危ない事なア。

權九　オヤ〳〵、この簪は吾妻が簪だが。

甚兵　その簪は。

ト甚兵衞、取りにかゝると權九郎、その手を拂ひ

權九　旦那、もう一服お上がりになりませ。

ト思ひ入れ。

傳藏　成る程、合點の行かぬその簪。どうして爰にあつたか。權九郎、甚兵衞に聞いて見やれ。

ト上の方へ座り、莨をのんで居る。

權九　コレ、甚兵衞どの、こりやア吾妻が簪だが、どうして爰にあつたのだ。

甚兵　サア、その簪はアノ……オ、、なにサ。わしらが内の女房が貰ひました。

傳藏　ハア〳〵。吾妻がくれた簪かえ。

甚兵　妹は持たうものサ。

權九　コレ甚兵衞、わしやアこなたを、そんな白を切る人ぢやアないと思ひましたが、こりやアわしを馬鹿にするのだの。コレ、この簪をあの吾妻に、お内儀が貰つたとは、どうでごんす。あの吾妻と甚兵衞どのと、兄妹だと云ふ事は、わしが五十兩出して、親方の次左衞門から、阿母の書かされた頼み證文を持つて來たばつかりで知れたぢやアごんせぬか。この簪は、熨斗と揚羽の蝶の紋所を、裏表に附けてある、吾妻が疾から差して居

たのだ。その簪を今夜知れた妹から、いつの間に貰
つたのだ。わしも權九郎でごんす。何も其やうに野暮ご
けに、取扱つて下さるな。
傳藏　コレ〳〵權九郎、惡氣もないこの甚兵衞。定めしこ
れには譯のある事であらう。
權九　わたしも左樣存じまする。
ト甚兵衞、當惑して心配して居る。
傳藏　コリヤ〳〵甚兵衞、あの權九郎が、あのやうに踏み
ぬきしても大事ないか。この傳藏が推量にも、今晩この
處へ與五郎を同道して、吾妻が參つた。兄妹の名乘りも
致したと見れば、この傳藏や權九郎に、云ふに云はれぬ
義理合ひが出來て、隱さねばならぬと云ふやうな譯が、
あるまいものでもない。左樣な事ならば、ちつとも苦し
うない程に、與五郎吾妻が參つた事を、有體に申すがよ
い。左樣なれば身共、何事もなう權九郎を同道して歸る
ばかりぢや。甚兵衞、サア、包まず身共に申しておくり
やれ。
甚兵　モウ、左やう仰しやつて下される、傳藏さまの深切
は、心から有り難うござりますが、全く以て今晩、吾妻
も與五郎も、決して參りは致しませぬ。何しに二人が參
りました事ならば、あなたへお隱し申しませう。必らず
必らず、左樣思つて下されますな。
傳藏　イヤサ、さう云ふ事もあるものぢやて。必らずとも
に、有やうに申すがよい。
甚兵　イエ〳〵、モウ、なか〳〵持ちまして、左樣な事は
ござりませぬ。
傳藏　すりや、どう致しても與五郎吾妻は、參らぬに相違
ないな。
甚兵　怪我な事、僞はりにも致しませぬ。
傳藏　甚兵衞、後で後悔するなよ。
甚兵　サア、その儀は。
傳藏　甚兵衞の玆な僞はり者めが。
ト腰の鞭にて甚兵衞を打ち据ゑる。
甚兵　ア、御免なされませ〳〵。
傳藏　エ、おのれをどうしてくれう知らん。
ト打ち放しにする。奧よりお袖出て來る。甚兵衞を引
起し、涙ぐんだる思ひ入れあつて
そで　甚兵衞どの、こりやマア、どうした事でごんすぞい
なア。例へお侍ひさんであらうが、どこのお手代衆であ
らうが、お前の身に覺えのない事なら、覺えのないやう

に、なぜさつぱりとは云はしやんせぬ。素面の時は氣が弱うて、面妖、人にあやまつてばかり居やしやんすわいの。女の身でさへ、見て居ると、齒痒うて〳〵、ほんに腹が立つてならぬわいな。酒呑まぬ時も、ちよつとは男らしく、どなたなりと誰れなりと、云ふ事を云うて、相手にならしやんせいな。コレナア、何が怖くて其やうに、慄へてばかり居やしやんすぞいなア。エヽ、お前は物云ふ事もならぬかいな。

　ト腹の立つたる思ひ入れ。

權九　さらばこれから權九郎が、甚兵衛どのに御意得やうか。

　ト甚兵衛が側へ行き、お袖を突き退け、甚兵衛を引寄せる。

甚兵　御免なされませ〳〵。

　トお袖、詰め寄つて

そで　コレイナウ、權九郎どのとやら、なんでこちの人を手籠めにするのぢや。なんぼ卑しい駕籠舁きぢやと云うて、どうするのぢや〳〵。

甚兵　コレ〳〵、何も云ふ事はないぞ〳〵。

そで　イエ〳〵、云はにやアならぬわいな〳〵。

權九　この權九郎も云はにやアならぬ。エヽ、甚兵衛、先刻渡した頼み證文、たつた今爰へ出せ。サア、出さないか。物を吐かせ。コレ、この野郎は太い野郎ぢやアないかい。五十兩と云ふ金を出して、貰うた吾妻が頼み證文を、この權九郎に渡さぬか。アヽ、聞えた。吾妻を外へ賣りつけたな。此奴は見かけに寄らない、恐ろしい奴だ。サア、證文を返すか。吾妻を渡すか。挨拶をしろ。物吐かせ〳〵。

　ト甚兵衛が胸倉を取つて、こづき廻す。お袖、見かねて

そで　コレナウ、甚兵衛どの、こなさん、あたり近所へ外聞が悪うはないかいな。なぜに默つて居やしやんすぞ。エヽ、モウ、ほんに埒の明かぬ。コレ權九郎どのとやら、どうするか、見たがよいぞや。

權九　權九郎を、どうせうと思ふのだ。

そで　女子のわしが、どうせうぞ。

　ト奥へ駈けて入る。

權九　エヽ、甚兵衛、なぜ物云はぬ。吐かさないか。物を云へ〳〵。

　トこづき廻す。奥よりお袖、銚子と茶碗を持つて出

て、權九郎を突き放し、銚子と茶碗を甚兵衞が前へ出す。

そで　サア、甚兵衞どの、一つ吞ましやんせ。今夜ばかりはわしが賴み。一つ過して云ひ分云うて下さんせ。サア、吞ましやんせ〱。

ト茶碗へ一杯注ぎ、甚兵衞へ渡す。甚兵衞、この酒をグッと飲み、思ひ入れ。お袖、直ぐに又一杯注ぐ。甚兵衞、につこりと笑ひ、グッと吞む。

サア〱〱、獻を合せて、もう一つ吞ましやんせ。

トまた一杯注ぐ。甚兵衞グッと吞み干し、頭を抑へて

甚兵　ア丶、好い心持ちになつた。

そで　そんなら、もつと吞ましやんせ。銚子を替へて來ようわいな。

トちろりを持つて暖簾口へ入る。甚兵衞、胡座を搔いて、莨盆を引寄せる。權九郎、甚兵衞が側へ寄つて

權九　サア甚兵衞、證文ばどうするのだ。仕事にするのか。物取りか。その分ぢやア濟まないぞ。

ト奧よりお袖、ちろりを持つて出て來る。

甚兵　なんだ、こするない。此奴は太い奴ぢやァないかい。あの證文がどうしたのだ。エ丶、權九郎、われにやアおれが云ひ分があるぞ。

そで　オ丶、それでこそ男らしうてよいわいなア。サア、もう一つ吞ましやんせ。

ト茶碗へ酒を注ぐ。甚兵衞グッと吞み干し

甚兵　エ丶、權九郎。こなたはなんと吐かした。八幡町の親方、藤屋次左衞門が處から、吾妻が賴み證文を貰つて來たと吐かすが、こなた、あの五十兩と云ふ金をどうして持つて居つた。大方旦那の金を盜みやがつたらう。それでなくて五十兩と云ふ金があるものかえ。又その上に、罪のないうぬが主人の若旦那が、惚れてござる吾妻を、女房にくれろとは、吐かしやアがつたな。コレ、證文は爰にあるワ。

ト出して

この證文は金輪際、この甚兵衞が返さない程に、明るい所で受取つて、でんどへ出れば、うぬァ首が飛ぶ程のものはあるワ。サア、ぐつとでも吐かして見ろ。

權九　サア、そりやア。

甚兵　この權九郎のイケ泥坊めが。

そで　好い氣味ぢやわいなア〱。サア〱、一つ飲まし

やんせ。

トまた注ぐ。又グッと飲み干し、これよりだん〳〵生醉ひのこなし。

權九　傳藏さま、大分風が變つて參りました。

傳藏　氣遣ひ致すな……ヤイ甚兵衞、すりや今夜この處へ。

甚兵　與五郎と吾妻が、來ればどうするのだ。

傳藏　兄の敵、この傳藏がぶッ放すワ。

ト刀を引寄せ立ち上がる。甚兵衞、寢轉んで傳藏の方へ足をグッと投げ出す。お袖、恟りする。

甚兵　おきやアがれ。うぬが兄の有右衞門とやらが、町人の與五郎に切られても家が立つか。コレエ、、何もかも知つて居るわい。うぬが兄を、そんぢよそれが手にかけたも、印籠を證據に與五郎どのを、人殺しにすべいとの目算も、みんな、うぬらがぐるぢやアないか。誰れだと思ふ、駕籠舁きの甚兵衞だワ。與五郎や吾妻を、內に置けばどうする。

傳藏　サアそりやア。

甚兵　町人の與五郎に、侍ひが殺されても家が立つか。

傳藏　サアそりやア。

ト手酌にて又一杯引ッかけ

甚兵　ばちびん頭で、敵討ちも凄まじいワ。

傳藏　權九郎、成る程、こりや風が變つて來たわい。

權九　ひよんな所へ參りました。

甚兵　コレ、もう一杯吞むべいか。

そで　もう大槪がよいわいな。

甚兵　べら坊め、斯う吞みかゝつて、酒が吞まずに居られるものか。注ぎやアがれ。

ト茶碗を突き出す。お袖、氣の毒な思ひ入れ。

そで　こりや又、ひよんな事になつたわいなア。もうこれ限りにしたがよいぞえ。

甚兵　エヽ、注ぎやアがれ。

ト茶碗へつぐ。甚兵衞グッと飲んで

もうこれからは、大家でも大神宮でも怖くないぞ。ヤイ權九郎、うなアよくこの甚兵衞を、こづき廻したな。エエ、侍ひ、うぬもよく先刻ぶち据ゑたな。今どうするか見やアがれ。

ト莨盆の火入れを取つて、權九郎が頭をぶち割る。權九郎、ウンと倒れる。お袖、驚ろき權九郎を介抱して、莨を疵口へ付け、手拭にて結はへる。傳藏、膽を潰

す。

甚兵　これからが酒だぞ。

そで　こりや又、苦々しい事ではあるぞ。

　ト權九郎、痛む思ひ入れ

權九　オ、、痛い〳〵。頭が割れたぞ〳〵。なんでも相手は甚兵衞だぞ。甚兵衞が下手人だぞ〳〵。

　ト立ち上がる。傳藏、權九郎が側へ來り

傳藏　コリヤ〳〵權九郎、始終の樣子は身共が見て居る。何を云うても相手は生醉ひの事ぢや。萬事は傳藏に任せて置きやれ。

權九　イエ〳〵、この分ぢやア、歸られませぬ〳〵。

傳藏　ハテ、萬事は傳藏に任せて置きやれサ。

甚兵　エ、、侍ひ、うぬも逃がしやアしないぞ。

　ト傳藏、切刃を廻して

傳藏　ヤイ〳〵甚兵衞、おのれ、よう侍ひに向つて。推參な奴だ。眞二つにするぞ。爰へ出ろ〳〵。

甚兵　此奴は、もう一杯飲まにやアならない。

そで　イエ〳〵、もう酒はならぬわいな。この上は、またどのやうの事せうぞ。こなさんの惡酒には懲り果てた。モウ〳〵、酒はならぬわいな。

甚兵　喧ましいわい。酒を持つてうしやアがれ。酒の肴に此奴等を喰つてしまはア。

　ト傳藏權九郎、思ひ入れ。

そで　こりや又、どのやうな事にならうも知れぬわいなう。

　ト傳藏お袖が云ふを聞いて、驚ろく思ひ入れあつて頷き

傳藏　ヤイ甚兵衞、エ、コレ、おのれを大袈裟に、ぶッ放さうと思うたが、何を云つても所が惡い。三原傳藏が駕籠舁き風情を、手に掛けては刀が穢れる。

　ト云ひながら、權九郎が側へ來て袖を引き

コリヤ、膏藥代は身共が承知。それから駕籠にも乘せてやるワ。コレ〳〵……ナ。

　ト袖を引ッ張り思ひ入れ。權九郎、頷いて

權九　成る程〳〵。ヤイ甚兵衞、この權九郎を、どんだ目に遭はせたな。

傳藏　ハテサテ、萬事は傳藏に任せて置きやれよ。エ、、おのれ、大師河原の下向ゆゑ、その分に差措くが、有り難いと思ひ居らうぞ。

甚兵　コレヤイ、早く酒を持つてうしやアがれ。

そで　エヽ、忙しない。たつた今持つてうしやアがるわいな。いつその事、樽の儘持つて來ようわいの。

ト暖簾口へ入る。傳藏思ひ入れ。

傳藏　こりやア堪らない。早く切り上げよう。

權九　又どんな目に遭はうも知りませぬ。

ト傳藏、權九郎、門口へうろたへて出る。奥よりお袖、三升樽を持つて來て

そで　サア、勝手に吞ましやんせ。

ト樽のまゝ突さつける。

甚兵　サア、これからさる捧して吞まうか。すつ體で吞まうか。

權九　モシ〱、あの樽は、わしが持つて來た道明の三升樽。あの酒を吞まれちやア、お庇がないぢやアございませぬか。

傳藏　ハテサ、酒を買つて、びりを切られると云ふ事があるでないか。そんなら酒を持つて來て、頭を刎ねられるは當り前ぢやワ。

權九　これから、この栓を拔いて、竹川町の燒つぎ屋へやらずばなるまい。

傳藏　おきやアがれ。

權九　とは云ふものゝ。

傳藏　ハテ、萬事は身共に任せて置きやれ。

ト合ひ方になり、傳藏權九郎、足早に花道へ入る。

そで　あの侍ひや權九郎が、なんぞ云うて來ねばよいが。

ト門口を締めて居る。奥より長吉、出て來る。お袖、長吉を見て、心遣ひあるこなし。長吉、甚兵衛が側へ寄つて

長吉　委細は長吉も奥で聞いたが、よく與五郎どのや吾妻どのを……忝ない。千葉家の御重寶、印子の鯉の置き物や、羽衣の茶入れの出たる上は、お二人ともに匿まつてもらはずばなるまい。改めて長吉が頼みますぞい。

甚兵　氣遣ひさつしやんすな。

ト生醉ひの思ひ入れ。

長吉　忝ない。頼もしい駕籠の甚兵衛。その上甘へた事ながら、なんと渡しちやくれまいか。

甚兵　何を渡すのだい。

長吉　濡髮の長五郎を。

そで　エ、……………又かいなア。

長吉　最前も云ふ通り、難波潟の印籠が證據となつて、與五郎どのは人殺しのお難儀。側へ紛失の二品が出ても、

人殺しの惡名が拔けにやア、與五郎さまは日蔭者。實の親御の治郎左衛門どのの、御身の上まで、どうならうやら知れぬと云ふもの。して見た日にやア、こなたの妹の吾妻どのゝ縁もあれば、與五郎どのゝ爲だと思つて、どうぞ長五郎どのを渡して下さい。

甚兵　渡してやりませう。

そて　エヽ、そんならどうでも。

甚兵　やりませう。サア、たつた今渡してやらう。門口で待つて居さつしやい。

長吉　忝ない。

そで　モシイナア。あのやうに仰山の。

甚兵　默りやアがれ。

そで　エヽ、こなさんはなア。

長吉　ドレ、長五郎を受取らうか。

ト門口へ出て身拵らへする。甚兵衛、立ち上がる。お袖、甚兵衛を留める。甚兵衛、お袖を突き退け、押入れより與五郎吾妻を連れて出る。お袖、恟りして、合點のゆかぬ思ひ入れ。甚兵衛、ソレと兩人を突き出す。

長吉　合點だ。

ト折りかゝつて與五郎と顔見合せ

與五　ヤア。其方は長吉か。

長吉　與五郎さま。

吾妻　こりやマア、どうぢやぞいの。

甚兵　その日暮らしの駕籠舁きの内に、二人が三人居候ふを置かれるものか。どつちへなりとうしやアがれ。

ト門口をしやんと締め、直ぐに倒れる。

そで　こりや又きつい醉ひやうではあるぞ……心の知れぬ甚兵衛どの。

ト思ひ入れあつて、門口へ來り、立聞きをして居る。

長吉　合點の行かぬ甚兵衛。與五郎どのは格別

與五　現在妹の吾妻までも。

吾妻　長吉どのへ連れて去ねとは。

ト長吉、思ひ入れ。

長吉　今宵のうちに、長五郎を逃がす心か。

與五　それではわしが。

長吉　モシ。

ト與五郎に囁く。與五郎、吾妻に囁き、長吉、手にて行けと云ふ思ひ入れ。唄になり、三人バタ〳〵と花道へ入る。お袖ソツと門口を明けて、後見送り、思ひ入

れあつて、門口なしつかりと締め、甚兵衛が側へ寄つ
て
そで　夫婦の仲でも甚兵衛どの、これぱつかりは禮を云はねばならぬ事。あの血を分けた妹の、吾妻さんや與五郎どのまで、此方の内へ置かしやんせぬは、わたしが兄さん長五郎さんを、匿まつて下さんす心でがなござんせう。惡い人でも兄は兄、あのやうに母さんも、はら／＼思うて居やしやんす兄さんの事、あの妹の吾妻さんに替へても、匿まはしやんす心ぢやと聞いてならば、母さんが喜ばさんせう……モシ／＼、母さんえ／＼。
はや　オイ／＼、合點ぢや／＼。
ト合ひ方になり、お早、日光膳へ椀に茶飯を盛り、香の物と箸を付けて持つて來る。
サア／＼、茶飯が出來たわいの。佛檀へも上げた程に、早う甚兵衛へ進めたがよいわいの。
そで　アイ／＼、モシ母さん、あの甚兵衛へ、よう禮云うて下さんせ。たつた今、一人の妹御の吾妻さんにも替へて、あの兄さんの長五郎さんを、匿まはしやんす心ぢやわいなア。
はや　ヤヽ、何と云やる。アノ甚兵衛どのゝ、妹にも替へて、惡者の長五郎を匿まふ心かえ。
ト嬉しき思ひ入れ。
そで　アイ、みんなお前の心を休めうとて、甚兵衛どのが。
トお早、思ひ入れあつて
はや　イヤ、わしが心を休めうとて、甚兵衛にしてもらはいでも大事ない。わしや其やうな義理に違うた事は嫌ひぢやわいの。モウ／＼、何にも云はぬがよいぞえ。
そで　これはしたり、母さん、そりや何を云はしやんすぞいな。
はや　其方までが甚兵衛の心贔屓して、この母に腹立たすのか。
そで　なんの、勿體ない事云はしやんす。今宵は父さんの御逮夜ぢやござんせぬか。どうしてわたしがアノ、お前に腹の立つやうな事云はうぞいな。甚兵衛どのぢやというて、長五郎どのゝ事を。
はや　コレ／＼、もうなんにも云ふ事はないわいの。わしや、あの惡者の長五郎が事、ほんに子ぢやとは思はぬわいの。不孝な奴に義理を立て、あの甚兵衛の妹の吾妻女郎を、なんとマア其まゝにして置かうぞ。其方の爲に

も妹も同然ぢや。たつた今、吾妻女郎を呼び返して、わしが側へ置いてたも。あの長五郎が事は、甚兵衛に匿まうてもらはいでも、わしや不足にも思はぬ程に、何處に隠れて居やうとも、サア、早う叩き出したがよいわいな。

そで　そんなら、お前さんは、兄さんに替へても、吾妻さんを。

はや　内に置かいで、なんとせう。

そで　おやと云うても、兄さんの事は。

はや　イヤ、どう云うても吾妻女郎の事は。

そで　サア、さうではござんせうが。

はや　又かいの。あの長五郎を。

そで　わたしが爲にも血を分けた

ト互ひに泪ぐみ争つて居る。甚兵衛、起き上がりて、お早を引寄せ

甚兵　この婆アめ。何を吐かしやアがる。

そで　コレ〱、甚兵衛どの、母さんを、どうさんすのぢやぞいの。

甚兵　どうするものだ。うぬら親子は、もう片時も内には置かぬワ。サア、たつた今出てうしやアがれ。

ト お早を足蹴にする。

はや　ほんに、呆れて物が云はれぬわいの。

そで　コレ、甚兵衛どの、如何にこなさんの酒が悪酒ぢやと云うても、勿體ない、母さんを手籠めにして、ひよつと怪我でもさせましたら、どうせうと思はしやんす。

甚兵　オヽ、おらア離別が久しい望みよ。サア、たつた今、うぬも一緒に出てうしやアがれ。

ト お早を突き放す。お袖を下へ突きやる。

そで　こりや甚兵衛どの、氣が狂うたかいの。なんの母さんが出て行かしやんせうぞ。入り聟の事ぢや。出てよくば、こなさん出て行つたがよいわいな。

甚兵　コレ、今までは入り聟よ。越して來ちやア、おれが内だ。行かざアうぬらが物、サア、みんな持つてうしやアがれ。

はや　コレ甚兵衛、其方が出て行けと云はいでも、わしや娘がなんの居やう。サア〱、わしと一緒に、爰を出や出や。あんな奴を男と思はぬがよい。

ト 帯を締め直す。

そで　アイ、そりやモウ、わたしも一緒に、どこへなりと行きますわいな。

ト身拵らへする。
甚兵　ソレ、がらくた道具を、持つてうしやアがれ。
　ト押入れを明けて、鏡立櫛箱針箱、古葛籠、破れ傘寝莫蓙のやうなる物を、手當り次第抛り出す。奥より岩五郎、立ち出て來て
岩五　コレ〳〵甚兵衛、どうしたものだ〳〵。やう〳〵今夜、駕籠舁き仲間が詫びをして、お主を内へ歸したぢやアないか。惡い酒も大概があるものだ。どこの國に入り聟の身で、親や女房を追ひ出すと云ふ事があるものか。氣が狂つたさうだ。
　ト云ふうち甚兵衛、岩五郎が襟を取つて門口へ抛り出す。直ぐにお早を突きやり、お袖を門口へ突き出して、破れ傘を振り上げる。
甚兵　サア、何奴等もうしやアがれ。だら〳〵してけつかると、傘の背打ちだぞ。
岩五　コレ〳〵、阿母も嬶アどんも、所詮今から店請けへも行かれまい。マア、今夜はおらが内へ歩ばつしやれ。
そで　サア、母さんと一緒に出る事は出ても、心にかゝる兄さんの事。
はや　憎い奴とは思へども、皆縁づくであらうわいの。
甚兵　まだうしやアがらないか。
　ト方々突き立てる。
岩五　ア、危ない〳〵。早くござい〳〵。
そで　母さん、怪我して下さんすな。
はや　こなたも早う來やいの。
　トどか〳〵と花道へ逃げて入る。甚兵衛、叩き立て、花道まで來る。
甚兵　狸婆ア。はツつけ嬶アやアい。
　ト惡體を云ひながら、よろ〳〵して舞臺へ戻り、内へ入ると時の鐘になる。甚兵衛、指にて數へ思ひ入れ。時の鐘打ち切る。
最早九ツ。
　ト合ひ方になり、あたりを見廻し、門口をしつかり締めて、以前の疊を揚げる。下より長五郎、笠を持ち出て、甚兵衛と顏見合せ、互ひに思ひ入れにて、長五郎、直ぐに門口へ出ようとする。
關取り、どこへ行かつしやる。
長五　とても遁がれぬ人殺しのわしが身の上。我れと我が身をなくして、與五郎が身の上を、明るくしてやらうと思つて。

甚兵　イヤ揩かつしやい。そりや嘘だ。
長五　なぜサ。
甚兵　ハテ、與五郎どのの身を思つて、難波潟の印籠を、人を殺した死骸の側に、殘して來られさうなものかえ。
　ト長五郎、思ひ入れ。
長五　サア、その印籠は。
甚兵　なぜ甚兵衞を、他人にして下さるのだ。そりや聞えない。わしやア卑しい駕籠舁き商賣。好い男にやアなられぬが、意氣地と張りは知つて居ますぞえ。恩に掛けるぢやごんせぬが、たつた一人の妹の、吾妻には與五郎にくツついて居ると、こなさんには替へられない。妹や與五郎どのを、愛想づかしをしても、及ばずながらこなさんを匿まつて、一と出たら阿母の仕合せ。八と出たら、親子兄妹、どんぐるめに不肖さす氣。これ程思うて居るこの甚兵衞に、なぜに明かして、立退いちやア下さらぬ。わしが日增しの惡酒が、禍ひも三年め、づぶ六に醉つた顔で、可哀さうに女房や、勿體ないが阿母を、傘の古骨で叩き出したは、長五郎どの、こなさんを、せめて今夜ばかりは、内に置きたさ。こなさんの爲には親御の逮夜。なぜせめて御位牌へ、回向をしちやア下されぬのだ。
長五　忝ない……嬉しうごんす。こなたの實な心からは、この長五郎は、親に不孝なばつかりでも、定めし人間ぢやアないやうに思うてござらうが、わしやアちつと願ひがごんす。もし有りついたら立歸つて、その時阿母や妹にも云ひ譯をしませう。マア、それまでは、この長五郎は、死んだ者だと思つて下さい。其方も隨分、まめで居さつしやい。さらばでごんす。
　ト出ようとする。
甚兵　コレ〳〵、長五郎どの、夜明けに間もない夏の短夜。物は喜び。醴はめで度い鹿島立ち。祝つて一杯、喰つちやア下さらぬか。
長五　イカサマ、口を祝うて行きませうか。
　ト合ひ方になり、長五郎、甚兵衞と入れ替へになつて、上の方へ直る。
甚兵　幸ひ爰に膳もあり……サア、わざと箸を取らつしやい
　ト有り合はせたる以前の膳を据ゑる。長五郎、椀の蓋を取つて
長五　甚兵衞、この飯はえ。

甚兵　御親父の逮夜ゆゑ、久しいものだが茶飯にぐつた煮。

長五　親の忌日は幾日やら、忘れてしまつた長五郎に、逮夜の茶飯を喰はれても、親仁どのがあんまり嬉しうも思つてくれまい。こりやアなんだ。缺け椀の一杯盛り。香の物ならたつた三切れ。こんな物が喰はれるものかえ。

ト是にて膳を蹴返す。甚兵衞、思ひ入れあつて

甚兵　なぜさう云ふ心なら、六十に餘る親を持つて、人を殺すと云ふやうな、不孝な事があるものでごんす。なんぼこなさんは苦勞をさせぬ氣でも、今にも知れぬ身の上ぢやアごんせぬか。

長五　マア、そんなものサ。

甚兵　エ、、情ない。

長五　甚兵衞どの、なんと、この長五郎を、元服させちやちやアくれまいか。

甚兵　そんなら、姿を替へる氣かえ。

長五　人も知つたる長五郎が前髮。これぢやアどうも、立廻るにも目立つて悪い。

甚兵　そりや、こなさんでもあるまいぞえ。もしもの事のあつた日にやア、あれ見ろ、濡髮長五郎は、命惜しさに元服したと云はれては、こなさん、男が立つまいがな。緣に繋がりや、わしらまで、聞くも殘念だ。こりやア、よさつしやい／＼。

ト長五郎、どつさりと座つて

長五　サア、この長五郎に繩をかけて、突き出してくりやれ。

甚兵　なぜそんな愛想づかしを云はつしやる。こなたを突き出す心なら、これ程苦勞はしませぬわいの。

長五　そんなら前髮を落してくりやれな。

甚兵　又そんな事を。

長五　そんなら縛つて突き出すか。

甚兵　サアそれは。

長甚　サア／＼／＼。

長五　エ、、どうしてくれるのだえ。

甚兵　それ程までに云はれる事なら、成る程、元服させませう。

長五　得心か。得心なら忝ない。甚兵衞、必らず笑うて下さるな。命替りのわしの元服。

甚兵　暦も見ずに過去帳を、繰れば親御の明日は命日。

長五　罰の當つた長五郎。身の曇りから前髮を。

甚兵　剃つて挟んでも皐月闇。
長五　いつ晴れる間も夏の夜は
甚兵　短かい縁で
長五　ごんしたの。
トこれより獨吟のめりやすになり、月明りにて時鳥啼く。
〽よしや世の、憂きには袖の皐月空、鳴かで螢の影くらき、草の二十日の月ならで。
トこの文句のうち甚兵衛、下の方より手水盥を持つて來て、盥へ水を汲み、長五郎、兩手を揉みかゝる。甚兵衛、有り合せたる櫛箱鏡臺を直し、行燈を引き、剃刀を研ぐ。文句一くさり切れると、、花道より長吉、以前の形にて一腰ぶッ込み、尻をからげて出て來り、花道にて
長吉　あの長五郎を逃がしちやア、與五郎どのゝお爲にならぬ。ぶッ放しても長吉が、氣性を見せにやア四郎兵衛へ、男が立たぬ。どうでも今夜は、遁がされぬ〳〵。
トめりやすになる。
〽胸に鏡があるなら嬉し、いつか晴れなん晴れなんものと、男心のいとゞ短か夜。

トこの文句のうち甚兵衛、長五郎に元服させる。長吉は舞臺へ來り、直ぐに襷をかける。この一杯に左右の納まり。時の鐘、長五郎身拵らへする。お袖、小提灯を提げて出て來る。
長五　よもやこれぢやア、目にも立つまい。
甚兵　夜の明けぬうち。
長五　さらば。
ト門口を明ける。長吉、直ぐにぶッかける。長五郎、菅笠を投げつける。甚兵衛思ひ入れ。長吉、飛び込んで行燈を切り倒す。お袖、提灯を上げて長五郎と顏見合せる。甚兵衛、提灯をたゝき落す。甚兵衛、門口をしやんと締める。この途端よろしく。

ひやうし幕

大切　深川新地の場

役名 ━ 關取り、濡髪長五郎。山崎與五郎。藤屋吾妻。番頭、權九郎。角力取り、高見岩之助、駕籠舁き、五郎又。同、次郎藏。濡髪の小靜。放駒長吉。

本舞臺、三間の間、一面霞壁、この後ろ奥深に深川新地の體を見せ、下座の口へ屋根船を取りつけ、前へに流れの浪板、下の方に石揚場と書いたる傍示杭、舞臺前に誂らへの大水船。爰に五郎又、次郎藏、駕籠舁きの形、四ツ手駕籠を擔ぎ、この側に岩之助、角力取りの拵らへにて付いて居る。テンツヽ、時の鐘をかぶせて幕明く。

五郎　棒組み、この荷は餘ツぽど張るぢやないか。

次郎　お前、强つて、增しを貰やれ。

五郎　滅多に二十四五貫目は擔かだ。芝口から拳固ぢやア合はない仕事だ。

岩之　駕籠の衆、もう何時だらうの。

次郎　今が靈巖の四つでござります。夜は短いぢやアござりませぬか。

岩之　夜が短いから、もうちつと急きやれな。

五郎　わしらも早く明けて歸りたうござりますが、荷が張つて居るから、どうぞ一杯飲ましておくれなさいまし。

次郎　棒組み、野暮な事を云やる。且那は御如才はない。

岩之　お主達ア、あんまりだぞえ。芝口から深川まで五百の上へ、蠟燭の錢が附き物。出しなに五百五十と初めに極めて置いたのだ。そんな事云はずとも、急きやれな。

五郎　一通りの荷なら、そんな事は云ひましないが、横ツ倒しだとへたばつて、一足も歩かれる荷ぢやアござりませぬ。棒組み、立てやれな。

次郎　さうするがよい。もう追ツつけ九ツだ。この頃はなんでも物騒といつちやアない。あの向島の秋葉の裏門で、立派な侍ひが、二人殺されて居たげな。怖い事だ。極めの駄賃で、爰からどうぞお駕しなされて下されまし。

岩之　樣々の事を云ふわえ。おいらを見違うたか。追ひ落し怖くないぞ。五人や十人、廻しへでも取りつかせはしない。怖い事はないから、早くやりやれ／＼。

次郎　所詮夜駕籠に出りやア命がけ。それも錢づく。南鐐の一枚も、おはづみなされまし。

岩之　極めの通りより外、遣る事はならない。それとも否なら、おれ一人で擔いで行かうか。なんの御大層らしい。

ト棒端を取る。

五郎　モシ／＼、わしらは駕籠商賣、お前は角力が商賣ぢやアござりませぬか。わしらが場所へ入つて、角力を取

らうと云つて取らさつしやるまい。一人で擔いで行けるなら行つて見さつしやい。お角力とは云はせない。云ひ分があるぞえ。

次郎　コレサ、棒組み、氣早い。なんの事だ。旦那は、ありやア冗談だ。

五郎　擔がうと云ふから、一人で擔がせてやるがいゝ。

次郎　ハテ、默れと云ふなら默らねえかえ。……モシ旦那、あなた方を見違ひまして、强請りがましいやうに思し召しますのは、御尤もでございますが、全くさうではございませぬ。餘ッぽど荷が張って居りますから、酒手の勢ひでなければ急がれませぬ。こりやア御料簡ものでございます。旦那、端下なしに二朱下さりませ。モシ、お願ひでございます。エモシ、默つてお出でになるのは、なりませぬかえ。

五郎　コレ次郎、何にもそんなにあやまる事はない。極めの通りの錢を貰つて、爰から歸りやれな。

ト駕籠の際へ來て

モシ旦那、下りて貰ひませう。

兩人　下りさつしやい〳〵。

五郎　これ程起すに高鼾だ。

次郎　いつそのくされに、爰で一服やらかすべいか。

岩之　コレ、どうでもやる事はならないか。

次郎　所詮お前ちやア話しが出來ないから、旦那の起きさつしやるまで、一服のんで待つべい。

岩之　急げと云ふに聞分けのない。和倉まで行つたら、どうともせう。早くやつてくりやれな。

次郎　さう物が解りやア、何にも云ふ事はない。

五郎　サア、そんならその勢ひでやツつけべい。

ト立ち上がる。時の鐘にて、花道より捕り手、黑羽織の四人引連れ、てん手に十手を持ち出て來る。

捕手　その駕籠待て。

三人　へイ。

ト三人、下に居る。

捕手　乘つて居るは何者だ。

岩之　何も怪しい者ではござりませぬ。私しは角力取りの、高見岩之助でござります。駕籠に居りまするは、親の師匠でござります。

捕手　何者であらうとも、人殺しの詮議。駕籠より出で面を見せい。

四人　出居らう〳〵。

ト これにて駕籠の垂れを上げ、長五郎、出て來り

長五 これは何者の御詮議か存じませぬが、私しはまだ、名もない端下角力。江戸へは初めて出まして、まだ勝手も存じませぬ者でございます。なんの御用でございます る。

捕手 外の事でもない。いつぞや向島の秋葉に於て、千葉家の家中、三原有右衞門を討つて立退いたる、人殺しこそ、千葉の重寶、印籠難波の置き物の奪ひし、盗賊山崎與五郎とも、また濡髮長五郎とも分明ならず。兩人ともに搦め捕つて参れとの嚴命。其方こそ長五郎で

四人 あらうがな。

長五 イヤ、その濡髮は隱れもない大前髮。私しは綾川と申して、田舍角力。その長五郎には、まだ一度も出合ひませぬ。

捕手 イカサマ、聞きしに違ふ汝が面體。仲間のうちの事なれば、人知れず吟味なし、搦め捕つて出すに於ては、褒美は望み次第。駕籠の者も辻々へ出る稼なれば、詮議なして代官所へ訴人なせ。キッと申し渡したぞ。これより州崎の邊を詮議せん。皆々參れ。

ト捕り手先に、皆々付いて下座へ入る。

五郎 それなら秋葉の人殺しと云ふは。

兩人 濡髮どの。

ト長五郎、懷中より小判を二枚出して投げて遣る。

兩人 これは。

長五 長五郎が面體知つたる駕籠の者。近付きにならう。

五郎 芝口から拳固の酒手に、二兩とは夢に牡丹餅。

次郎 寢耳に水より、膽の潰れたこの酒手。お頼みの樣子に、何でも持ち込み。

兩人 承知でございます。

長五 外の事でもない。不慮な事で有右衞門を手にかけたは、濡髮と疑ひかゝり、嚴しいお尋ね。誠の人殺しと云ふは、山崎與五郎、此奴と知つたはおればかり。この科人の出るまでは、顔出しをしまいと思つて、人目を忍ぶ長五郎。和倉に居る事を、必らず人に知らすまいぞ。

五郎 それは氣遣ひさつしやりますな。この二兩のお金を何と忘れませう。今にも與五郎と見るならば、訴人をして人殺しさへ出りやア、お前の體も難なくなると云ふものでございませう。

次郎 大層な申し分でございますが、芝口の辻駕籠がやア、五分玉の次郎藏と云ゃア、初者の駕籠を乘り越しても、

ぐつとでも云ふ事のならない惡組。誠に棒の甚兵衛にやア、世話になつたわしらでごんすから、何とやらも吊り方。必らず氣遣ひなされますな。

岩之　成る程、二人ともに頼もしい片腕。今の侍ひが濡髮どのを知らないが、まだしも運の強いところ。又あんな奴等の來ないうち、和倉までやつてくりやれ。

兩人　心得ました。

長五　力業には、誰れにも負けまいと思へども、身にも覺えぬ無實の難。そんなら大儀ながら、和倉までやつてくりやれ。

五郎　わしらがうんと呑み込んぢやア、親船よりも大丈夫。

次郎　サア、お乘りなされまし。

長五　そんなら、ちつとも急いでくりやれ。

ト駕籠へ乘る。

兩人　畏まりました。

岩之　ドレ、おれが提灯を持つて先へ立たう。

ト提灯を提げ、先に立ち、禪のツトメになる。花道より與五郎、吾妻を圍ひ、以前の形にて來る。後から權九郎、以前の形にて、二人を追つて出て來り

權九　人殺しの與五郎どの、もう逃げても逃がさない。吾妻を渡して、繩にかゝらつしやい。

與五　主人に向ひ、身にも覺えぬ人殺しとは何事。恩知らずめが。

權九　こなたにかゝつて梵天國。主でも家來でもない。代官所へ連れ行く。來さつしやい。

ト無理に引ツ張りて行く。出合ひ頭に岩之助に突き當り提灯を消す。

岩之　こりやアどうするのだ。

兩人　目を明いて通りやアがれ。

權九　心の急くまゝ、堪忍して下さい／＼。

トこの聲を聞きつけ

長五　さう云ふ聲は、權九郎ぢやアないか。

權九　さう云はつしやるは、濡髮どのぢやアごんせぬか。

與五　ナニ濡髮とや。其方ゆゑに與五郎がこの難儀。好い所で逢うたなア。

吾妻　コレイナア、與五郎さん、多勢に無勢、必らず短氣を出さしやんすなえ。

ト與五郎に取りつき心配のこなし。

長五　うぬは與五郎だな。おれもわれを方々捜して居た。

マア、駕籠を待つてくりやれ。

岩之　與五郎なりやア、お尋ね者の人殺し。印子の鯉の盜賊なりやア、突き出すと直ぐに御褒美。

兩人　こりやア運が直つて來たわえ。

權九　この人殺しの詮議をすべいと、傳藏さまと、甚兵衞が所へ仕掛けたところが、風を喰つてその場を驅落ち。爰で巡り逢つたこそ幸ひ、こなさんに逢へば、マア、わしも落ちつきました。

與五　又しても人殺しの盜賊のと、權九郎そりやア何の事ぢや。この身に取つて其やうな覺えはないぞ。

長五　覺えがあらうがあるまいが、證據の殘つた難波潟の印籠。所詮論は無益だ。代官所へ。

四人　合點だ。

ト岩之助、權九郎、次郎藏、五郎又、與五郎にかゝる。

吾妻　そりや又あんまり。

ト支へる。吾妻を長五郎引きとめる。

長五　人殺し。

皆々　うしやアがれ。

ト與五郎にかゝる。立廻りにて與五郎吾妻、屋根船へ逃げて入る。續いて行きにかゝる。岩之助を屋根船の中より見事に投げ出す。

長五　繋ぎ捨てたる屋根船から、妨げする奴は

皆々　誰れだ〳〵。

ト船の內にて

小靜　わしぢや。

皆々　わしとは。

小靜　わたしでござんすわいの。

ト船の內より恥かしさうに出て來る。

長五　誰れかと思へば濡髮小靜。

岩之　いつもの俠を取措いて

權九　譯もしら齒の生娘と

長五　なぜ又化けて

皆々　つん出たのだ。

小靜　今までしつけぬ女達は、いとしい殿御が大切さ。今は橋本治郎左衞門どのゝ養ひ娘、その名も靜と元の名に、返り申しの八幡詣で。この屋根船は城廓同然。狼藉さんしたお前方を、恥かしながら支へしは、武士の役、お笑ひになつて下さんなえ。窮鳥懷へ入る時は、獵師もこれを取らずとか云ふ。それでは角があるわいな。怨みは怨

み、我が船と、知つて參らしやんしたお二人さん。隱まひ申すが武士の意地。どのやうに云はしやんしても、出し申す事おやござんせぬ。たつて妨げさんしたら、是非に及ばぬ、この場の出入り。折角止めた女達も、また珠數切つてこの場の出入り。わしが貰うた。小靜に下さんせ。と云うてはものがないわいな。どうぞ堪忍して下さんせ。

長五　いんにや、堪忍する事は否だ。娘姿を取措いて、女達ならこの場の出入り。どう片づけうと思ふのだ。

小靜　どうと云うたらこの場の出入り、小靜と云ふ名を取措いて、元の靜なら權九郎、其方こそ盗人おや。

權九　飛んだ所へとばしりが來た。なぜ權九郎が、盗人おや。

小馬　オヽ、盗人の證據は、俵の内の百五十兩。其方の金おやと云ふおやないか。あの金は吾妻どのゝ身請けの後金。父さんの手から渡したその金。それを銅脈と入れ替へて、似せ金使ひの暗い身の上。人中へ顏が出されまいがな。

權九　サアそれは。

小靜　しやつとでも云うて見や。

ト權九郎、思ひ入れ。

長五　エヽ面倒な。與五郎を引摺り出せ。

四人　合點だ。

ト四人、屋根船へかゝる。小靜、支へて危ふくならうとする。後より長吉、出て來り、長五郎が手を取つてキツと見得。

長五　こりや、味な所へ放駒。うぬも盗人の腰を押すか。

長吉　いんにや、腰押しはしない。盗人の詮議をするのだ。

長五　アノ、お主が盗人の

皆々　詮議をするとは。

長吉　與五郎どのより長五郎、お主、爰へ出してくりやれ。

長五　何を出せと云ふのだ。

長吉　有右衛門どの横死の折柄、紛失なした印子の鯉。このたのぽつぽにあると云ふ事は、睨んだ眼に違ひはあるまい、おッ隱したる印子の鯉、この長吉に渡しやれな。

長五　鯉とやら、置き物とやら、そんな物はおらア知らないワ。

長吉　知らない者が懷に。

ト立廻りにて長五郎が懐中より、鯉を引き出し

これこそ尋ぬる印子の鯉。

ト長五郎、ちやつと取つて

長五　ぶッちめろ。

皆々　合點だ。

ト四人、長吉にかゝる。小靜、引きとめる。長五郎、振り切つて花道へ入る。

長吉　足手纏ひは長吉が受取つた。

小靜　印子の鯉魚を、ちつとも早う。

長吉　後を慕うて、合點か。

小靜　心得ました。

ト三重になり、小靜、長五郎が後を追つて花道へ入る。

長吉　サア、引き廻しにする長五郎、直に渡せばそれからそれまで。妨げなせば盗人の同類。所は名に負ふ深川新地。藻屑にする。覺悟ひろげ。

岩之　なんの石場か知らねども、この身は色に濡髪の、しつぽり騒ぐ佃島。

權九　雲に潮來も心意氣、見るかと見せて裏表。

五郎　櫓にかけりやアつき大橋、三十三間堂ほど投げ出すぞ。

次郎　よい仲町にも花に風、八幡鐘の生き別れ。

岩之　裾をからげて海までも、一座で連れ行く

四人　うしやアがれ。

長吉　幸ひ新津の店開き、浮かれ拍子の。

權九　騒ぎを借りて。

四人　ぶッちめべいか。

ト四人立廻り。ちよつとあつて

皆々　ドツコイ。

トこれより誂らへの鳴り物になり、四つ手駕籠、傘、息杖、制札など皆々心任せの道具取り、花々しく四人、立廻りあつて、トゞ長吉、皆々を前の水船へ切り込み、ホツと一息する。下座より捕り手五人出る。

捕手　山崎屋與五郎藤屋吾妻、この屋根船に忍ぶ由。ソレ、引立てい。

四人　ハア。

ト四人、屋根船へかゝり與五郎を引立て、下座へ入る。長吉、思ひ入れ。

長吉　南無三、ソレ。

ト行かうとする、後より一人組みつくを見事に水船へ投げ込み、一散に追つて入る。バタ／＼になり花道よ

り長五郎を小靜、追つて出て來り、直ぐに本舞臺へ來る。

長五　又しても女の際に、いらざる腕立て。妨げなしやア容赦はないぞ。

小靜　此方も容赦はなんのその、印子の鯉ゆゑ治郎左衞門どのゝ、お身の御難儀。與九郎さんの無實の科。女の念力、取戻さいで置かうか。鯉の置き物、此方へ渡しや。

長五　妨げなしやア、爲にならぬぞ。

小靜　尋常に渡しや。

長五　そこ退け。

兩人　ドツコイ。

ト立廻りにて、長五郎が持つたる鯉を奪ひ合ひ、水船へ取落す。

長五　南無三、印子の鯉を水中へ。

小靜　取落せしか。ホ、ホイ。

ト兩人、思ひ入れ。大ドロ〳〵になり、水中より誂らへの大鯉顯はれる。

長五　龍は一寸にして昇天の氣を含み、鯉は尺にして龍に化すの勢ひあり。

小靜　印子に鑄させし鯉の置き物、代々千葉家に傳はる重寶。今誤まつて水中へ入ると等しく

長五　龍に等しき鯉の有樣。

兩人　不思議な事を、見るものぢやなア。

ト大ドロ〳〵、早笛にて、日覆より大雨降つて來る。鯉は存分に水船を狂ひ、トゞ水底へ入る。

長五　かゝる大切なる印子の鯉、川の藻屑となしたる女。憎さも憎し。龍宮城へ使ひにやる。觀念なせ。

ト小靜を捉へ、見事に差上げ、水船へ打込む。また大ドロ〳〵になり、鯉顯はれる。小靜、これを取らんと泳ぐ事よろしくあり。

長五　くたばつたかと思ひの外、鯉に逆らふ女が有樣。

ト長五郎、飛び込まうとする。下座より長吉出て來り、長五郎を押へて、ちよつと立廻りにて、長五郎を當てる。長五郎、ウンと悶絶する。此うち長吉、水船へ飛び込み、小靜を助け、この鯉と立廻り。長五郎心附く。鯉は陸へ跳ね上がる。長五郎この鯉を取らう事よろしく、トゞ鯉と共に水船へ跳ね込まるゝ事あり、これより水船の中にて長五郎長吉小靜、鯉を枷に見事なる立廻りにて、長吉、鯉を抱いて陸へ上る。續いて長五郎、上がらうとする。小靜、取りつき、立廻り、トゞ小靜

長五郎を刺し殺す。長吉、鯉を抱へて眼を存分突き通す。長五郎、それをト上がらうとする。

小静　人殺しの盗賊、思ひ知つたか。

長吉　喜べ。印子の鯉は手に入つたぞ。

小静　忝ない。

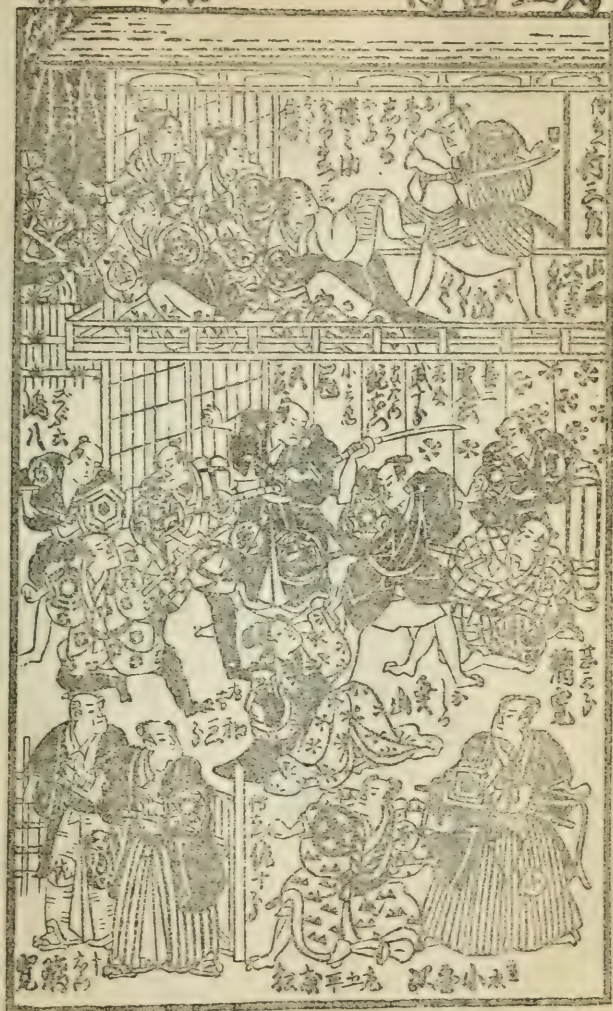
長吉　先づ今日はこれぎり。

ト打出し

ひやうし幕

鬮取菖蒲締（終り）

江戸八景戀譯里

この狂言の再演「初霞女猿廻」番附

江戸八景戀譯里

序幕

深川二軒茶屋の場
八幡裏手の場

役名――井筒屋傳右衞門。井筒屋傳兵衞。同番頭、忠七。丁稚、治藏。家來、葛藤太。娘分、おたみ。仲居、おきよ。同、おきみ。船頭、長吉。瀧口主計。藝子、お俊。若黨、左五平。正木甚三郎。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、見付け唐紙、欄間、葭簀かけ、上の方障子、大黒柱、櫻の幹にて、枝垂れ櫻の吊り枝見事にして、深川八幡二軒茶屋の飾りつけ。これにおきよ、おきみ、仲居にて客を留めてゐる。宮神樂にて賑やかに幕明く。

ト仕出し、參詣の體にて、段々に出る

きよ　お入りなされませいなア〳〵。

仕出　イヤ〳〵、山を廻つて歸りに寄らう。

兩人　必らず待つて居りますぞえ。

仕出　ハテ、いつでも賑やかな事ぢやなア。

兩人　お入りなされませいなア〳〵。

ト よろしくあり、神樂にて、向うより井筒屋傳右衞門着付け羽織、杖を突き、忠七、番頭の形にて付き添ひ、下男、挾み箱を擔げ、左吉、丁稚にて、風呂敷包みを持ち出る。

傳右　ヤレ〳〵、室町から爰へ來るは、大儀なものぢや。

きよ　これは井筒屋の旦那、よう御參詣なされましたなア。

傳右　イヤ〳〵、參詣ではない。大切な御用ぢやて。

きみ　忠七どのも、ようお出でなされましたなア。

忠七　この間の參會には、剛儀に呑ましたな。

女兩　何を仰しやるやら。

忠七　時に親旦那、あなたはお駕籠に召してござればよいに、氣丈立て、お歩きなされたから、其やうにお草臥れなされました。始末は常の時でござります。

傳右　イヤ〳〵忠七、おれが駕籠に乘らぬは始末ぢやない。今日はお出入りの、房州里見のお屋敷、そのお役人様を、

この二軒茶屋へお招き申して亭主方。それが駕籠に乘つては、マア、無禮になるわい。

忠七　イカサマ、それもござりまする。室町の井筒屋傳右衞門と云はれては、里見のお取立ての家柄。粗末になされぬは、こりや御尤もでござりまする。

傳右　旦那方は、伜がお迎へに行たれば、もう追ッつけお出であらう。ナニ、左吉よ。わりや道までお迎ひに行て來い。

左吉　ハイ〳〵、畏まりました。番頭さん、お袴は爰に置きますぞえ。

ト風呂敷包みを其處へ置く。

ドレ、お迎ひに行て來ませう。

ト向ふへ走り入る。

女房　マア、お座敷へお出でなされませいなア

傳右　オヽ、さうしませう。コリヤ喜助、大切な守り刀の入れたその挾み箱、奥へ持つて來い。サア、忠七もおれと一緒に。

忠七　エヽ、二人ともに、いつ見ても婀娜ぢやな。

ト尻を叩き、皆々奥へ入る。神樂にて、向うより藝者お俊、治藏、後より箱廻し附いて出て來る。

治藏　お俊さん、今日はえらう急ぐなア。

お俊　サイナア。今日は傳兵衞さんも、この二軒茶屋へ見える筈ぢやゆゑ、それでわたしも

治藏　せつかちに急いで來たのか。毎晩〳〵顏を見て居る若旦那に、其やうに引ッつきたがるは、これも因果な。この治藏も呆れるわい。

お俊　なんぼ毎晩逢うても飽足らぬ。見たいが色、逢ひたいは病ぢやわいな。

治藏　そりや、何やら上方の道行ぢやが、江戸の流行り唄は、わたしや本郷ではない、二軒茶屋へ行つたり〳〵。

ト矢張り右の唄にて本舞臺へ來る。奥よりおきよおきみ出て來て

女房　オヽ、お俊さん、今お出でかえ。

お俊　アイ、やう〳〵今ぢやわいなア。さうして、もう來てかえ。

女房　親旦那様や、番頭さんが奥へ來てぢやわいなア。

治藏　そりやア、きざぢやアないか。

お俊　方々の約束。どうして傳兵衞さんは、遲い事ぢやぞいなア。

きみ　最前迎ひに行たれば、もう追ッつけ見えるでござん

せうわいなア。
きよ　それまでは座敷を替へて、待ち合せてござんせ。治藏さんも御一緒にお出で。
治藏　そんなら、美味い物を食はしてくれるか。
きみ　ハテ、無駄を云はずと、サアお俊さん。
　ト お俊此うち向うを見てこなし。
お俊　エヽ、自烈たい事ではあるぞ。
　ト騒ぎ唄になり、お俊、治藏、廻し男付き添ひ奥へ入る。女二人殘り居る所へ、奥より傳右衛門、袴にて、忠七付き添ひ出で
忠七　若旦那を始め、もう、皆入らつしやりさうなものでござりまする。
傳右　サア、どうして手間が取れるか知らん。
　ト此うち女兩人、向うを見て
きよ　アレ／＼、御覽じませ。慥かに傳兵衛さまや、お侍ひ樣方が、お出でござりますわいなア。
　ト忠七も向うを見て
忠七　親旦那、ほんに皆お出でござりまする。
　ト靜かなる神樂になり、傳右衛門、忠七出迎ふ。向うより正木甚三郎、田舍侍ひの拵らへ、袴羽織。瀧口主計、同じ侍ひにて、左五平、中間の形にて付き添ひ、傳兵衛、袴羽織、町人の形、左吉、丁稚にて出る。
傳右　これ／＼、正木甚三郎さま、瀧口主計さまにも、御苦勞のお入りでござりまする。
甚三　傳右衛門、やうやく只今になりました。
傳右　サア／＼、お通り下されませう。
甚三　今日は何かと、心遣ひであらう。
　ト云ひ／＼ズツと上へ通る。主計、次へ座る。傳右衛門、傳兵衛、左五平、忠七、並よく座る。
主計　傳右衛門どの、この度國元の姫君御產につき、祈りの爲、當社八幡宮へ、御代參にお立ちなされたるは、即ちこれにござる正木甚三郎どの、右お役目をお請けなされて、當分中屋敷へ御逗留。それゆゑ御案内の爲、拙者同道申してござる。
甚三　當地不案内の身共なれば、各々を御案内に頼み、次手なれば、洲崎とやらの辨天へ參詣したが、海を一面に見晴らし、なか／＼の絶景。誠に驚ろき入りました。
左五　左樣でござりまする。國元と違ひ、イヤ又、繁華なお江戸なれば、何處へ參つても賑しい人々ぢや。賑はしい地でござりまする。

忠七　あなた方、洲崎へお出でなされても、外屋がなくなつたので、殘念にござりまする。
左五　ハテ、外屋とは、なんだな。
忠七　料理茶屋でござりまする。座敷と云ひ庭と云ひ、料理の加減もよく、そして皆、お大名樣方が、お出でなされます所でござりまする。
左五　ハテナア。
傳兵　憚りながら、甚三郎さまにも主計さまにも、お袴をお取りなされて、御安座なされませ。
女房　ほんに、お袴を取りませう。
　ト側へ寄り、袴の紐を解きにかゝる。
甚三　なにを。
　ト手を拂ひ、睨みつける。兩人、ウヂ／＼して後へ座る。
傳右衛門、江戸と云ふ所は、女の馴れ／＼しう致す所ぢやの。この間より、國元の町人どもが、もてなしとあつて、彼の品川の茶屋、また吉原などへも參つたが、女どもの不行儀さと云ふものは、かゝつた態ではない。斯う云へばお身達が、田舍武士と云ふものは、武骨なものだと笑ふであらうが、身共らは、びらしやらした事が生得蟲が好かぬ。今日のもてなしも、女郎氣のないのが、身共への馳走でおぢやるぞ。
傳右　畏まりましてござりまする。
左五　旦那は彼の女の舌たるいのが、きついお嫌ひサ。
忠七　ハテ、此方の若旦那とは、きつい違ひでござりまする。
傳兵　コリヤ、忠七。
　ト紛らすこなし。
なんと、好い天氣でござりまするなア。
甚三　イヤ、何かは差措き、當月限りと國元へ歸る件の御用、先達て申し入れたる如く、姫君御安産のお守とあつて、其方所持いたす安國の短刀は、國安らかと云ふ字に當れば、お産には何よりのお守、お出入りの規模、御用に立つは、有り難い儀ではないか。
傳右　左樣でござりまする。それゆゑ右の短刀、持參いたしましてござりまする。
主計　差上ぐる短刀の價とあつて、當所お屋敷より、百兩下し置かるゝ間、有り難う受納召されい。
　ト百兩包みを扇子に載せ、傳右衛門に渡す
傳右　有り難う存じまする。短刀の儀は、奧で差上げませ

う。コリヤ忰、この金子は、奥の挾み箱へ入れて置きやれ。

傳兵　畏まりました。イザ、御両所様には、お座敷へお越しなされて、一献差上げたう存じまする。

甚三　それは過分。主計どの、お越しなされぬか。

主計　先づ〳〵。

甚三　然らば參らう。皆來やれ。

ト唄になり、皆々奥へ入る。傳兵衛も付いて行かうとする。左五平ちよつと留めて

左五　イヤ〳〵、傳兵衛どの、ちよつとお待ち下されい。

傳兵　御用でござりまするかな。

左五　サア、今さら改めて申すには及ばねど、去年お國元出來の儀につき、お旦那甚三郎さまのお供を致して、上州へ參つたところ、折惡しく旦那の大病。段々重くなつて、ソリヤ人參よともて返すうち、路銀は遣ひ切り、國元は遠し、下郎一人があはてゝ居つた所へ、其許が御用についてお越しなされ、大枚の金子を用立て下されたゆゑにこそ、どうやら病氣本腹。やれ嬉しやと國元へ歸ると、其まゝ、右の金子を返金と存じて居ると、サア、小身者の旦那と云ひ、思うたばかり、今日と暮れ、明日と暮れ、面目もないこの度の對面。併し、とてもの不肖に、今少しの所を。

傳兵　イヤ〳〵、その時の金子なら、御返濟には及びませぬ。殿様へお出入り致せば、あゝ云ふ時お役に立つが、御恩報じでござりまする。

左五　サ、さう仰しやる程、猶術なうてなりませぬ。

傳兵　ハテ、正直なお方ではある。左様ならいつなりと、お返しなされませ。

左五　今暫らくお待ち下さるか。

傳兵　ハテ、待つの待たぬのと申す事ではござりませぬ。マア〳〵奥へござつて、御酒一つ上がりませ。

左五　倒し次手に、呑み倒さうか。

兩人　ハヽヽヽヽ。

傳兵　サア、ござりませ。

左五　ドリヤ、罷るべいか。

ト唄になり、左五平、傳兵衛、奥へ入る。靜かなる三味線入りの神樂になり、障子屋體よりお俊出て

お俊　憎か傳兵衛さんは、今ござんした様子。どうぞ都合して逢ひたいものぢやが。おきよどのを頼んで、ちよつと呼び出して。

ト いろ〳〵こなしあつて、奥へ行かうとする所へ、忠七出掛け居て、つか〳〵と來て、後から抱きつく。

お俊　アレ、誰れぢやぞいなア〳〵。

忠七　大事ない。驚ろく事はない。忠ぢや〳〵。

ト いろ〳〵取りつくを、突き退け

お俊　ほんにお前は忠七さん。

忠七　お俊、てまへはむごい氣な者ぢやな。

お俊　エヽ、又かいなア。

ト 逃げようとするを引ッ捉へ

忠七　又かとは、どうしたものぢや。これまで尾花屋から、ちよこ〳〵呼び出して、いろ〳〵云うて口説くのに、おれには轉ばずに、聞きやア此方の息子に惚れて居るな。

お俊　わしや、そんな事は知らぬわいな。

ト また逃げようとするを引留める。此うち始終神樂

忠七　コリヤ、知らぬとは白々しい。お俊傳兵衛と追ッつけ心中の名題になりさうぢやと、深川中の評判。それに知らぬとは畜生め。なんぼ、てまへが息子に惚れて居ても、末だ部屋住みの甲斐性なく、この忠七は奉公人でも番頭役。金の繰り廻しは自由自在。おれと乘り替へると、てまへも仕合せ。氏なうて玉のこしから下へちよつと。

ト さま〳〵しなだれる。お俊こなしあつて

お俊　ナンノイナ、わしや藝者の事、傳兵衛さんとは付合ひの座敷ばかりで。

忠七　イヤ、三味線枕でしげり松山。椀久ではなけれども、丸い頭を入れねばならぬ。

ト また引寄せる。

お俊　サア、それ程に思うて下さんす志しは。

ト 恥かしき思ひ入れ

忠七　オッと承知。顏と顏とを見合せて、恥かしくば斯う。

ト お俊の前へ背中を外け、後向きにて

これ程思ふおれを嫌うて、金のない息子に惚れると云ふは、河豚の腸を煮て食うて、肝心の身を犬に食はせるやうなものぢや。それとも是非息子と切れる事がならずば、彼奴を客にして、この忠七を間夫にして、てまへの心底次第で身請けして、夫婦になりと又、手かけにして置うて置くか、又は仲町で茶屋をさせて、毎晩々々おれが客になつて、遊びに來るワ。

ト 此うちお俊、逃げたきこなし。奥より治藏、何心なく出て來る。お俊これを見てソッと囁き、治藏と入れ

替る。お俊、抜き足にて奥へ入る。忠七これを知らず、
矢張り後向きに治藏が手を取り
コレ、お俊坊や。
ト云ひ／＼手を見て
てもマア、この手の荒れやうわいの。
ト治藏、憫りして、手を引かうとするを押へ
ハテ、二世と誓ひしおれに、何も恥かしい事はないワ。
サア、一つ呑みや。
ト銚子杯を引寄せ、一つ注ぎ、一口呑むと、治藏、後
より取つてツッと呑む。
アノ、おれがつけざしを、エ、有り難い。
ト嬉しがる。治藏また杯を出す
もつと呑むか。
トまた注ぎ
アヽ、何も肴がない。
ト治藏、忠七が耳へ口寄せ囁く。
なんだ。天麩羅が食ひたい。そりやア安い事だ。
トまた囁く。
鰌汁が食ひたい。ハテ、飛んだ物ばかり好きだの。そり
やモウ、おれが女房になるからは、何なりとお主が望み
次第だ。今日は淺草へ行きたい、オッと合點、サア行き
やれ。もう段々暖かにもなり、大川筋へ、ちらほら船も
見える。オッと合點。妙見から龜井戸へ屋根船で、ちや
んとお主が云ふ通りにな。ちよつと爰で。
ト治藏を轉かし、上へ乘りかゝり、治藏が顏を見て憫
り飛び退き、呆れて居る。治藏、顏をしかめ、唾をし
て

治藏　番頭さん、お前もマアちつと、口の掃除をするがよい。でも臭い口だ。

忠七　おきやアがれ。うぬ、マア、いつの間に、爰へうしやアがつた。

治藏　サイナ、わたしや淺草へ行きたいわいなア。
ト嫌らしきこなし

忠七　エ、忌々しい。キリ／＼うしやアがれ。

治藏　アイ、屋根船で妙見樣へ行きたいわいなア。

忠七　エ、忌々しい。いつその事、うぬを。
トかゝるを治藏突き廻し、べつかつこをして奥へ逃げ
て入る。
エ、ほんにあのお俊め、飛んだ目に遭はしやアがつ
た。

ト恨めしさうに奧を見る。此うち向うより佐八、狀を持つて出て來り
佐八　モシ〳〵、室町の井筒屋の番頭忠七さんが、爰の內へ來てぢやげな。ちよつとお目にかゝりたい、呼び出してもらひたい。
忠七　イヤ、その忠七はわしぢや。どこからござつた。
佐八　中通りの道具屋萬八から、手紙を持つて參りました。
忠七　成る程、道具屋萬八の使ひ、待ち兼ねて居た。ドレ。
ト手紙を取る。
佐八　大事の手紙、慥かに渡しましたぞえ。
忠七　念には及ばぬ。受取りました。
佐八　そんなら歸りましよ。
忠七　アイ〳〵、これは御大儀。委細はお目にかゝつてと、よう云うて下され。
佐八　ハイ。ヤレ〳〵、早速知れて落ちついた。
ト云ひ〳〵向うへ引返し入る。
忠七　彼の短刀の捌け口、賴んで置いた萬八。樣子はこの手紙。ナニ〳〵、手紙を以て申し上げ候ふ、先日お賴みなされ候ふ安國の短刀、この節さる田舍の侍ひに、代金二百兩に賣り渡し候ふつもりに御座候ふ、尤も代金受取り次第、かね〳〵お約束の通り、僞らき代ずつしりと積み入り候ふ以上、忠七どの、萬八。そんなら先日擦替へ置いた誠の短刀は、萬八を賴んで預けて置いたが、二百兩にとは、巧い〳〵。それを知らずに似せ物を屋敷へ差上げる。その科に傳兵衞、彼奴を片付けると、お俊はおれが。よし〳〵、とても の事に、最前の百兩、これも着服。ムウ。
トちよつと思案して
ハテ、戀ゆる心を碎く事ぢやなア。
ト矢張り三味線入りの唄にて、こなしあつて忠七、奧へ入る。兼ねてお俊、傳兵衞が胸倉を取つて
お俊　どうも濟まぬ。ござんせ〳〵。
ト云ひ〳〵兩人出て來る。
傳兵　何も云ふ事も聞く事もない。爰放せ〳〵。
ト振り切るを、また下へ引据ゑ
お俊　傳兵衞さん、聞えませぬ。ようマア、今までわしに隱さんしたな〳〵。
傳兵　隱したとは、何を隱した。

お俊　嫁御の事を。
傳兵　ヤア、。
お俊　もう、疾に極めてあるぢやないかいなア。
傳兵　その事なら氣遣ひしやんな。尤もお出入りの里見の御家中で、近藤平次兵衞さまと云ふ、劍術のお師匠をなさるゝお侍ひの娘、お八重とやら云ふを、親仁様が、おれが女房に貰はうと仰しやつたけれど、おりやてまへに心中立てゝ不承知。彼方が急けどお八重が嫁入りは、一日々々と延してゐるわいの。
お俊　イエ／＼、さう云うて、わしを騙しやんすのでござんすわいなア。
傳兵　ハテ、氣の悪い。騙さねばこそ、ソレ、約束の物は。
お俊　互ひに今日取交さうと云うた、二世の起請かえ。
傳兵　知れた事。おりや疾に書いて持つて居る。
　ト守り袋を出して見せる。
お俊　わたしも、コレ。
　ト指を見せる。
傳兵　こりや指を切つて、血を絞つて。
お俊　起請は爰に持つてゐるわいな。
　ト守り袋を出して見せる。
傳兵　そんなら爰で、取交さうか。
お俊　イヽエ、まだお前の心が知れぬわいな。
　トこれにて傳兵衞ムッとして
傳兵　ムウ。今の程お八重が事を云うたのに、心が知れぬとは、エヽ、こりや、神々を誓ひにかけた起請は書かずに、その指も大方、怪我をしたのぢやな。なんでもない事を云ひかけて、こりや切れる氣か。面白い。われがその氣なら、おれも思案があるぞ。
お俊　その思案と云ふは、わたしと切れて、大方そのお八重さんとやらを、呼び迎へるのであらうわいなア。
傳兵　此奴が／＼。あれ程譯を云ふのに、まだ合點が行かぬか。
お俊　アイ、合點が行かぬわいな。
傳兵　合點が行かずば、合點行くやうに斯うして。
　トお俊を踏む所へ、奥より治藏出て、傳兵衞を留め
治藏　こりや、なんぢや／＼若旦那。マア／＼、この出入りは治藏が一番、貰ひますぞ／＼。
　ト仰山に云ふ。
傳兵　治藏、好い所へ來てくれた。マア、一通り聞いてく

れ。てまへも知つての通り、不承知で呼び迎へぬお八重が事を、あのお俊が何のかのと云ひ居るが、腹が立つか。おれが無理か、尤もか。

治藏　そりやお前のが理窟ぢや。

お俊　コレ治藏さん、ちよつと來て下さんせ。

　トこちらへ連れて來て

聞けば、早うから極まつてあるお屋敷の嫁御の事。それを今までわたしに隱して居やしやんしたが、腹が立つわいなア。

治藏　よいて〳〵。そりやアお前のが理窟ぢや。

傳兵　コレ治藏。

　ト又こちらへ連れて來て

お出入りの屋敷の、御家中の娘でも、嫌ぢやと云うて嫌ふのは、なんの爲ぢや。みな彼奴へ心中立てるのぢやないか。

治藏　成る程、理窟ぢや。

お俊　わたしも又、思ひ詰めた傳兵衞さんが、嫁をお呼びなさんす事を聞いて、腹が立つまいものかいなア。

治藏　よいワ。理窟ぢや。

傳兵　おれが隱したと云ふが、隱したは、あれを思ふゆゑぢやわサ。

治藏　よいワ。理窟ぢや。

お俊　思ふ者が、物を隱すものかいなア。

治藏　よいワ。理窟ぢや。

傳兵　ありや皆おれと、切れう爲の物云ひぢや。

治藏　よいワ。理窟ぢや。

お俊　皆お前の惡性から。

傳兵　どうしておれが惡性ぢや。

お俊　惡性ではあるまいか。

傳兵　どうして。

　トまた傳兵衞に摑みかゝるを、治藏、留めて

治藏　ハテ、理窟ぢや〳〵。マア〳〵、待つたがよい。なんの事やら譯が知れぬ。

お俊　わたしも譯が知れぬわいなア。

傳兵　イヤ、これでは濟まぬ。思案して返事をせい。エヽ。馬鹿らしい。

　トむつとして、ツイと奧へ入る。

お俊　思案も何もござんせぬ。馬鹿らしい。

　ト治藏を突き倒し、これも奧へ入る。治藏その形に片脇へ寢轉んで居る。合ひ方になり、奧より忠七、挾み

箱を抱へ出て來り、あたりを窺ひ、錠前を腰提げの煙
管を出し、錠を叩き開ける。この音にて治藏起き上が
り、見て居て、この時

治藏　番頭さん、何をさんす。
忠七　ヤア、。
　ト悧りして
うぬは此方へ出入りの治藏だな。悧りさせ居つた。
治藏　おれも悧りしたわいなア。
忠七　コレ、爰へ來い。
　ト治藏、うぢ／＼、氣味の惡きこなし。
ハテ、爰へうせいと云ふに。
治藏　ア、イ。
　ト怖々側へ寄る。
忠七　ヤイ、べら坊め、わりや、なんぞ見たか。
治藏　アイ、お前が挾み箱を、うぢ／＼。
忠七　ヤア、。
治藏　イヤ、何も見はせなんだ。
　ト目を瞑る。
忠七　コリヤ治藏、われに用がある。爰へうせろ。
治藏　イヤ、わしはちよつと奧へ。

　ト逃げようとするを引戻し
忠七　ハテ、用があると云ふに。
治藏　サア、用とは、なんぢやえ。
忠七　外の事でもない。あの挾み箱の中に金がある。それ
を盜め。
治藏　エ、滅相な。おりやそんな事は否でごんす。
忠七　おのれ、盜まぬと、これぢやが。
　ト有り合せたる出刃を振り上げる。
治藏　ア、盜むわいなア。
忠七　早く盜んでおこせ。
治藏　エ、。
　ト不承々々に挾み箱の側へ寄り、錠をひねくり
これはねッから明かぬわいなア。
忠七　明けてある筈ぢやが。
　ト側へ行て、右の煙管を治藏が手に持ち添へ、錠を叩
き明け
ソレ、明いたワ。
　ト蓋を明ける。この時、右の煙管、挾み箱の中へ落ち
る。治藏、百兩を出し
治藏　これか。

ト取つて渡す。忠七、取つて、懷中より、錢百出して

忠七　ソレ、分け前。

治藏　イヤモウ、これには及ばぬ事を。

ト云ひながら取る。

忠七　それを取るからは、おのれも同類おやぞよ。

治藏　おりや、錢があつても、首が無うては勝手が惡い。この錢は戻しまする。

忠七　コリヤ〳〵、その錢を取らぬと、今この出刃が、どてッ腹へ、ぐつすり〳〵と。

ト出刃を突きつける。

治藏　エヽ、そんなら貰ひやせう。

忠七　出かす〳〵。それを取れば同類だぞ。

治藏　エヽ。

忠七　何も云ふ事はない。この金は、われが盜んだのだよ。

治藏　これは又迷惑な。

忠七　その挾み箱を持つて、ソッと奧へ行け。

治藏　イヤ、それは。

忠七　うせぬか。

ト出刃を振り上げる。唄になり治藏、挾み箱を持つて奧へ逃げて入る。忠七こなし

忠七　先づ百兩は暖まつたか。

ト此うちノッと落ちてある守り袋を取上げ

こりやアなんだ。

ト中の起請を取出し

天罰起請文の事。

ト名宛を見て

お俊どのへ、傳兵衞。ムウ。さては息子がお俊へ遣る起請。ムウ、こいつは面白い物が手に入つたわえ。二世も三世も變らぬ夫婦とは、エヽ、忌々しい。よし〳〵。こいつを斯うして斯うすれば、また一儲け。ムウ。

ト懷中へ入れ、こなし。

ドリヤ、祝ひ酒を一杯呑まうか。

ト唄になり、忠七、奧へ入る。暖簾口より

甚三　イヤ〳〵、構ひ召さるな。少し身共は寛ろぎ申す。

ト云ひ〳〵、煙草盆を提げて來て

兎角大杯には困る。これにて一服仕らう。

ト下に居て煙草をのむ。向うより喜藤太、足輕飛脚にて、狀箱を持つて出て來る。甚三郎を見て

喜藤　これは〳〵正木甚三郎どの、これにお渡りなされま

するか。
甚三　其許は國元の師匠、近藤平次兵衛どのの御家來喜藤
太。當所へは又どうして。
喜藤　イヤ、ちとあなたへ御內意のお使ひに、わざ／＼參
りましてござりまする。
甚三　身共へ平次兵衛どのの御內意とは、御用の儀かな。
喜藤　イヤソノ、內證の儀と相見えまする。卽ちその樣子
はこの狀。
　ト狀箱を差出す。
南北のお屋敷へ參りましたら、今日はこれへと承はり、
直さま持參仕りましてござりまする。
甚三　それは大儀々々。
　ト狀箱を取り、狀を出して
どうだ支度は。
喜藤　有り難う存じまする。
　ト此うち狀を開き、口の內にて、さら／＼と讀み
こりやコレ、平次兵衛どのより、御息女お八重どのの緣
邊の儀。非筒屋方へ取急ぎくれるやうと、身共へ折入つ
てのお頼み。
喜藤　手前主人とは師弟の御仲とて、日頃御懇意。この度
あなた樣の御用を幸ひ、奧樣にもくれ／＼との、御傳言
のお頼み。
甚三　如何にも。御夫婦ともに餘儀ないお頼みの文體。大
恩ある平次兵衛どのゝ儀なれば、粗略には致さぬ。正木
甚三郞、とくと承知いたしたと、詳しく申してくりやれ。
他所なれば、返答は後より遣はすであらう。
喜藤　然らば拙者は直さま立歸り、御承知の旨を申し聞か
さば、御主人にも、さぞお喜びでござりませう。
甚三　お八重どのも御病氣重いとあり、御夫婦にも、さぞ
御苦勞。萬事ともに御大切になされよと、よく／＼申し
てくりやれ。
喜藤　畏まりましてござりまする。
　ト立ち上がる。
甚三　もう、歸りやるか。せめてちよつと杯なりと。
喜藤　千萬有り難うござりまする。主人もその事ばかり苦
勞に致されますれば、一刻も早う承知の旨を。
甚三　成る程、平次兵衛どのの御夫婦に、甚三郞、力に掛け
て首尾仕ると、申してくりやれ。
喜藤　然らば甚三郞さま。
甚三　喜藤太。

喜藤　おさらばでござりまする。
ト合ひ方になり、喜藤太、目禮して向うへ入る。後見
送り、また狀を再見する
甚三　役目の外の一苦勞。この程の樣子、打明けて云はず
に、傳兵衞に承知させやうが、ありさうなものだが。
ト右の狀を紙入れへとくと入れ、思案する。此うち向
うより萬八、着付け羽織、道具屋にて出て來て
萬八　顏は見知つてゐるが、とんと名を覺えぬか、どうだ
この間のお侍ひ樣に逢ひたいものだが。
ト奥ばかり見い／＼、甚三郎に行き當り
これは眞平御免なされませ／＼。
甚三　ハテ、粗相な奴の。
ト甚三が顏を見て
萬八　ヤア、あなたはこの間、泉岳寺でお目にかゝつたお
侍ひ樣。
甚三　イカサマ、その時、安國の短刀を拂ふと云うた道具
屋。
萬八　先づは幸ひ。その時、肝心のお名を承はります事を
忘れたゆゑ、雲を當にこの場へ參りましたも、あなたへ
お目にかゝりたいばつかりでござりまする。

甚三　それは重疊。して、拂ふと云ふ短刀は。
萬八　則ちこれへ、持參いたしましてござりまする。
ト風呂敷より後家鞘の短刀を出す。
甚三　とくと改め、いよ／＼千代鶴ならば、望みの金で求
めてくれう。
萬八　イヤ、正銘に違ひござりませぬ。
ト右の短刀を渡す。甚三郎、取つて見て
甚三　この拵らへは。
萬八　身ばかり持つて居りましたが、鞘は有り合せを嵌め
て持つて參りました。
甚三　さう云ふ儀もあらう。
ト云ひながら拔いて改め見て
誠に、こりや、安國千代鶴に違ひはない。
萬八　いよ／＼お求め下されませうや。
甚三　身が望むところの安國の短刀。相違なく求めてくれ
う。
ト鞘へ納め、懷中へ入れる。
萬八　然らばお約束の通りに、代金二百兩。
甚三　如何にも遣はさう。これへ。
萬八　ハイ。

ト寄るを扇子にて目潰しを打ち、これにて驚ろく所を直ぐに投げ、早速に腕を捩ぢ上げ、下げ緒を取つて括し上げる。

ヤア、これは。

甚三　此方に思ふ仔細あれば、暫くの窮命。無難に濟まば代金くれう。マア、それまでは密かに。

ト萬八に羽織を着せ

參れ。

ト唄になり、萬八を引立て、奧へ入ると、暖簾口より傳兵衞忠七、せり合ひながら出て來る

傳兵　コレ／＼忠七、拜む程に、どうぞそれを返してたもいの。

忠七　アノ、この起請をかえ。

ト出して見せる

傳兵　サア、それを。

ト取りにかゝるを

忠七　イヽヤ、ならぬぢや。折角おれが拾うた天罰起請文。これを親旦那に見せるまでは、どうして返されるものぢやござりませぬ。

傳兵　滅相な。その起請を親仁樣に見せては、わしやモウ、生きても死んでもぢや程に、どうぞ忠七、返してたもいの／＼。

忠七　ハテ、お前とお俊は、可愛らしい仲ぢやなア。

ト起請を持つて振り廻す。傳兵衞、うろ／＼こなし。

これを親旦那樣ばかりではない、奧にござる甚三郎さま、主計さまにも御覽に入れ奉らうか。

ト奧へ行かうとする

傳兵　ア、コレ／＼、待つてたも／＼。

ト取りついて留める。いろ／＼こなし。

忠七　イヤ、見せる／＼。

ト矢張り起請を振り廻し、いろ／＼こなし。

傳兵　サア、さう知られては。

忠七　と云ふは皆嘘ぢや。

傳兵　ヤ。

忠七　申し若旦那、思ひがけなう、おれが手に入つたこの起請。お前の方になければならぬ大事の品。ハテ、主と家來との事なれば、すつぱりと返して上げませう。

傳兵　そんならそれを。

ト取りにかゝる。

忠七　イヤ、只はならぬ。賣つて上げませう。

傳兵　アノ、それを。
忠七　僅か百兩。
傳兵　ヤ。
　ト悔りする。
忠七　サア、わしが方でも、ちつと内證に差閊へた金の要る事があるから、百兩なら賣りませう。なんと、安い物であらうがな。
傳兵　サア、その百兩の金が。
忠七　ないかえ。なければこれを奥へ持つて行て、大旦那へ。
傳兵　ア、コレ、百兩に買はうわいの。
忠七　そんなら金を。
傳兵　サ、その金は。
忠七　現金掛け値なし。サア、起請が百兩に、値がなつた値がなつた〳〵。
傳兵　コレ〳〵、其やうに大きな聲をして堪るものか。
忠七　お前、百百の金は、何處ぞつい奥のなんぞの中に、ありさうなものぢやが。
傳兵　ほんにさうぢや。ちつとの間待つて居や。
　ト傳兵衛、奥へツイと走り入る。

忠七　コレ、遲いと、こちらへ賣るぞえ。早う金を持つてごんせ。
　ト云ひ〳〵起請を振り廻し、喜び
大方今に挾み箱を持つて來て明ける。金がない。盜人め動くな。この場より直ぐに勘當。ハヽヽヽ。跡式は番頭、井筒屋忠七さま。よう仕込んだ。ちよん〳〵幕。こいつは飛んだ面白くなつて來たわえ。
　トこなしある所へ傳兵衛、挾み箱をソツと抱へて來て
傳兵　忠七、いま金を渡すぞや。
　ト忠七、挾み箱を見て、わざと悔りして
忠七　ヤア、お前はその挾み箱を。
傳兵　サア、最前受合うた百兩。マア、何がなしに急に間に合はさうと思うて。
忠七　成る程、側へ知れてもお前の事、構ふ事はござりませぬ。
傳兵　そんならこの金を。
　ト挾み箱を下に置き、明けようとする所へ、治藏、ツカ〳〵と出て來て、挾み箱をちやつと押へ
治藏　傳兵衛さん、この挾み箱は、滅多に明けさする事はなりませぬ。

傳兵　治藏、われが知つた事ぢやない。其處退け。
治藏　イヽエ、それでもこの中の。
傳兵　サア、金を出して忠七に、渡さにやアならぬ。
治藏　サア、その金は。
傳兵　金がどうした。
治藏　もう無い。
傳兵　ナニ、金が無いとは、ドレ。
　ト治藏を引き退け、挾み箱を打返し見て
ほんに、この中には短刀の箱ばかりで、最前入れ置いた百兩の金が。
忠七　無いとは誰れぞ盜んだのか。ても、早い事をしをつたなア。
　トこなしあり。此うち左五平、出掛け居る。治藏もこなしあつて
治藏　おりや何も知らぬぞえ。
　ト傳兵衛、治藏を引据ゑ
傳兵　コリヤ治藏、われから知らぬと云うては濟まぬ。いま挾み箱を明けやうとした時に、金が無いとは留めたが、合點が行かぬ。どう云ふ事で、無い事を知つて居やう。サア〳〵、それを云へ〳〵。

治藏　サア、そりや最前。
　ト懷中より錢を出して見て
これはマア、情ない事ではあるぞ。
　ト錢を恨めしさうに眺める。左五平ソッと挾み箱より出た忠七の煙管を見て、また中へ入れて置く。忠七こなしあつて
忠七　若旦那、金がなけりや、この起請は變替へか。もう叶はぬからは、奧へ引摺つて、親旦那樣の前で。
　ト傳兵衛を引きつける。治藏、それはと留めるを蹴倒し、首筋を取つて
うぬは百兩の盜人。二人ともに、おれが仕樣がある。
　ト兩人を引立てる所へ左五平出て、忠七を突き廻し、傳兵衛を圍ひ、治藏を引き廻し
左五　待つた番頭どの、この挨拶は、左五平が致さう。
傳兵　ヤア、こなさまは。
左五　ヤア、默つてござれ。
忠七　ムウ。正木甚三郎さまの家來折助どの、イヤ、左五平どの。何にも樣子を知らずに、こなさん方の出る幕ぢやない。すッ込んで、ズッと片寄つてござれ。
左五　イヤ、起請の賣買、百兩の無い事まで、殘らず聞い

たるゆゑ、及ばずながら御挨拶に。
傳兵　その御挨拶より差當る、盜人の詮議をどうぞ。
忠七　その盜人は、この治藏め。
ト治藏を引きつける。
おのれ、若旦那か、挾み箱を明けぬ先に、金が無いと云
つたが慥かな證據。
治藏　イヤ、コレ〳〵、そりや最前お前
忠七　イヤ、何を吐かす。こりや、なんぢや〳〵。
ト百の錢を持ち添へ突きつける。
治藏　サア、これで矢張り、おれが盜人かいなア。
忠七　かいなアとは猛々しい。うぬを。
トきつとなるを、左五平また立廻りにて忠七を留め
左五　先づ待つた。あの者より外に、盜人の同類がある。
忠七　ヤア、同類とは。
左五　コレ、この煙管サ。
忠七　ヤア、それは。
ト寄るを、ちやつと持ち替へ
左五　三つかすみの紋散らし、この煙管は見知りある、ア
ア、誰れやらが煙管ぢやなア。
傳兵　そりや慥かに忠七が煙管。

忠七　そのおれが煙管が、どうして挾み箱に。
ト空恍ける。
治藏　ハ、ア、ソレ、最前錠前のカチ〳〵。
忠七　イ、ヤ、金はうぬが盜んだのぢや。
傳兵　金が無ければ起請は買はれず。
左五　イヤ、その金の行き場、盜人を、この下郎が、キッ
と詮議仕るぢや。
トこなしあつてキッと身拵らへする。忠七も身拵らへ
あつて
忠七　その煙管買ひませう。
左五　ヤ。
忠七　ハテ、落ちたか失うたか知らねども、おれが定紋の
煙管が、挾み箱にあつたが不肖。ぢやに依つて、買ひま
せう。
左五　面白い、賣りませう。ちつと値段が高いが、望みと
あれば賣りませう。
忠七　して、その値段け。
左五　たつた百兩。
忠七　ヤア、百兩。
左五　サア、望みがなければ、盜人の詮議をせうか。

ト又キッとなる。

忠七　イヤ、百兩で買ひませう、その百兩は。

左五　大方爰に。

ト懐中へ手を突ッ込む。忠七振り切り、少々立廻りにて、トヾ左五平、最前の金取出し

煙管の代金。ソレ、傳兵衞どの。

ト拋つてやる。傳兵衞、取上げる

忠七　イヤ、それは。

左五　約束の百兩。

忠七　でも。

左五　ハテ、よく思ひ切つて買はしやりました。

忠七　なんの事だ。

傳兵　忝ない。百兩の金、取返したれば

忠七　約束の起請賣りませう。

ト傳兵衞にかゝるを、左五平また立廻りにて起請を引ッたくり傳兵衞に渡す。傳兵衞受取り喜ぶ。

又それを。

左五　ハテ、傳兵衞さまが買はつしやる。

忠七　そんなら百兩のあの金。

左五　イヤ。

ト突き廻し、治藏が持つて居る百の錢を取つて

ソレ、起請の代。

ト拋つてやる。忠七取上げ

忠七　ヤア、こりやたつた百。

左五　ハテ、百兩の物を、錢百に値切るは、商ひの習ひではないか。

忠七　こりや又あんまり。

左五　賣買濟んだ。ヨイ〳〵。

ト手を叩き笑ふ。

忠七　ムウ。

トこなしあつて

ハテ、無駄骨を折つたなア。

トがつくり思ひ入れある所へ、奥より主計、傳右衞門、出て來て

主計　傳右衞門、奥にても申す通り、甚三郎どのにもお待ち兼ねなれば、早く短刀を。

傳右　成る程差上げまする。ソレ悴。

傳兵　幸ひ、これにござりますれば。

ト箱の内より短刀の箱を出し

イザ、お改め下されませう。

ト右の箱を主計が前へ置く。

主計　如何にも安國は、世に千代鶴と呼ぶ名作なれば、とくと檢め見て、

ト云ひ〳〵蓋を明け、短刀を出し改める。此うち忠七思ひ入れあり。主計、恟りして

傳右衛門、傳兵衛。こりや、似ても似つかぬ眞赤な僞物。

ト抛り出す。傳右衛門取上げ

傳兵　ナニ、これが似せ物とは。

ト取上げ見て恟り

ほんにこりや、炭かき同然の似せ物。

ト呆れる。傳兵衛、立寄り見て

傳兵　誠にこりや、安國ではござりませぬ。眞赤な似せ物。

兩人　こりやどうぢや。

ト兩人こなし。忠七、せゝら笑ひ

忠七　へ、、、、得て斯う云ふ場所で、差上げうと云ふ刀や短刀に、誠の物はないものよ。紛失するか似せ物か、こりやモウ、黴の生えた知れた筋道。内の息子が色狂ひ、藝者狂ひで盜み出し、賣り拂ふか質に置いたか。コレ申し、傳兵衛さま、如何に主計さまや親旦那の前ぢやとて、わざと恟り、當惑の狂言する事はござりませぬ。

傳兵　ヤア〳〵、忠七、何と云ふ。そんならこの短刀を

忠七　盜人を拵へて見れば我旦那。この仲町へ嵌り込んだからには、この短刀の外し所を、キリ〳〵と仰しやりましな。

左五　コレ〳〵忠七どの、すりや、大切な短刀は、傳兵衛さまが。

忠七　コレ折介、イヤ、左五平どの、今の賣買とは違ふ。こりやお國へもお家にもかゝつた大事の吟味。井筒屋の家の立つか潰れるかの、この場の仕儀。猪口才な、差出まいぞ。

左五　ぢやと云うても。

忠七　コレ、この忠七は、慮外ながら番頭ぢやわいの〳〵。この番頭が短刀の吟味して見せる。サア若旦那、傳兵衛さま、あの短刀はお前樣が、摺替へて盜ましやりましたに違ひござりますまいがの。

ト傳兵衛こなしあつて

傳兵　身に取つて微塵程も覺えのないこの傳兵衛。それに短刀を盜んだの、摺替へたのと云ふは。

忠七　慥かな證據を見せませう。その證據は。
ト一間の内よりお俊を引出し來て
この賣女。
ト前へ突き出す。お俊、傳兵衞、顔見合せ、ハツとこなしあつて俯向く。
主傳　すりや、この女は。
忠七　仲町の藝者、名はお俊、傳兵衞さまの二世かけて云ひ交した、内の金を吸ひ取る磁石女にてござりまする。
傳右　そんなら、その女ゆゑ、悴めが放埓。
主計　短刀の行き場も
治藏　覺えがあるかえ。コレ、傳兵衞さま。
傳兵　イヤ、覺えがなけれど、お俊が身の上。
お俊　その云ひ譯に、わたしが。
ト左五平が脇差へ手をかける。
左五　コリヤ待つた。まだ誰れが業とも知れぬ短刀の行くへ。吟味も分ぬうちに、云ひ譯に死ぬとは、なんぼ里に住んでも女子ぢやなア。
トよろしく留める。忠七、お俊傳兵衞を左右へ引立て
忠七　サア、短刀を盗んで、この女郎に打込んだは知れてある事。詮議はせぬ。短刀の行くへを有やうに云うた。云はにやア主ぢやと云うて遠慮はない。この薪雜把で
ト縫ひぐるみにて二人を打ち、治藏、留めるを蹴飛ばす。
左五　コレ、如何に番頭ぢやと云うて、餘り手強い吟味の仕樣。例へ傳兵衞どのが盗ましつても、なぜ和らかに問ひ落さぬ。
忠七　さう手間取る暇がない。手短かに云はさにやならぬ。
左五　イヤ、今日はさせぬ。
忠七　邪魔する貴樣も同類か。
左五　何をたわけた。
忠七　そんなら退いた〱。
ト突ツかゝつてやり込め
サア、短刀の在所を。
ト薪雜棒を振り上げるを、左五平、留めて出る。奥より
甚三　安國の短刀は、先に甚三郎が受取り置いたぞ。
ト云ひながら出る。
主計　ムウ、甚三郎どのには、短刀をお受取りなされしとは。

甚三　その役目ばかりに參つた身共。手ぬかりあつて、よいものか。
忠七　イヤ、これも凄まじい。受取りもせぬ短刀を、受取つたと、息子の難儀を救うてやる、立役仕組みの甚三郎さま。田舍では食へるのか知らぬが、マア、この番頭は食べませぬぞ。
甚三　すりや、其方は、身共が受取つたと申すを、僞はりと思ふか。
忠七　あなたのお國へかゝつた、井筒屋の家の生死。例へ旦那であらうが、息子であらうが、蛇の目を灰汁で洗うたやうに、吟味しぬかにや、この番頭が濟みませぬ。
甚三　ソレ、難儀を大切に思ふ、其方は番頭。
忠七　忠義に凝つたこの忠七、井筒屋の家の白鼠でござりまする。
甚三　コレサ、白鼠どの。
忠七　エヽ。
甚三　身共が先日受取つたと云ふ、安國の短刀、お目にかけうか。
忠七　こりや面白い。念の爲ちよつと檢めませうか。
　ト　せゝら笑うて云ふ。

甚三　若い者、あの一間を開けい。
治藏　アイ〳〵。
　ト　つか〳〵と行き、障子屋體を明ける。萬八、縄にかゝり出る。忠七見て
忠七　ヤア、わりやア道具屋の萬八。
萬八　忠七さま、お前に事を頼まれた短刀、二百兩の賣り口はあのお侍ひ。最前渡して二百兩の品が、此やうに縄にかゝりました。
忠七　ヤア。
　ト　呆れる。
皆々　そんなら短刀は忠七が。
甚三　先達て狩場へ、賣り物に出でしを、折よく身共が泉岳寺にて出會ひ、求めると契約して、取上げ置いたる誠の短刀。
　ト　出して見せ
大方斯うと同類めは、あの如く縛しめ置いたわやい。
左五　アヽ、流石はお旦那、又お智慧は格別。
忠七　こりや、モウ堪えられぬ。
　ト　逃げようとするな、左五平引き戻し
左五　不屆き至極のこの忠七めは。

甚三　他領の町人、此方の支配は無用。ナウ主計どの。
主計　左樣でござる。親方の心任せ。
傳右　忠七めはほひまくる。勝手にうせう。
治藏　しくじり番頭、好い氣味の。
忠七　何をおのれが。
　ト立ち上がるを
左五　コリヤ、じたばたひろぐと、死出の山へ突きのぼすぞ。
忠七　色男の道とは雖も、身のなる果は……呆れが禮に來るわえ。
　トこなしあつて、片脇へ悄げる。傳兵衞もこなしあつて
傳兵　甚三郎さまのお庇にて、思はぬ私しが難儀も遁がれ、有り難う存じまする。
甚三　なんの〳〵、曇りなき身はいつでも晴れる。併し、この上ともに、萬事に心を付けて。
　トお俊を見て。
　ムウ、あれがお俊と云ふ、其方が
傳兵　面目次第もござりませぬ。
甚三　ハテ、美しい女ぢやなア。
　ト思ひ入れある。
傳右　悴が身持ち、この場の申し譯に。
主計　傳右衞門、傳兵衞を勘當には及ふまい。繁華の町人、藝者なぞには馴染みも有うち。短刀さへ受取れば、甚三郎どのも身共も、役目は相立つ。ナ、左樣ではござらぬか。
　ト甚三郎、お俊に見惚れて居る。
　コレサ、甚三郎どの。
　トこれにて心付き
甚三　なか〳〵、左樣でござる。
傳兩　段々のお志し。
お俊　わたしが身の上は。
左五　藝者なれば座敷へ來て、お取持ちを申さつしやい。
お俊　エヽ、有り難うござりまする。
主計　我れ〳〵は最早お暇。
傳右　お名殘のお杯を、ちよつと。
主計　然らば甚三郎どの……コレサ。
甚三　エヽ、成る程〳〵。
傳右　サア、悴。
傳兵　イザ、御兩所樣。

傳兩　先づ／＼、お入り下されませう。

ト唄になり、皆々奥へ入る。忠七、萬八殘る。この唄を、めりやすの心にて、忠七、そろ／＼立ち上がり、奥を見い／＼こちらへ來て、萬八が繩を解き

忠七　萬八。

萬八　忠八どの。

忠七　まんまとしくじつてしまつた。

萬八　さて、詰まらぬものになりました。

忠七　ハテ大事ない。息子めは、百兩の金を持つて居るし、甚三郎めは短刀を持つて居る。歸りは大方、暮れ方であらう。その道筋は、コリヤ。

ト囁く。

萬八　すりや、待伏せして。

忠七　何もかも、おれがしてやる。萬八、わりや後に殘つて、合點か。

萬八　心得た。

忠七　必らずぬかるな。

ト唄になり、忠七、頰かむりして向うへ入る。萬八、奥へ忍び込む。始終合ひ方。奥よりお俊、剃刀を持つて死なうとする。傳兵衞、留めながら出て

お俊　イエ／＼、どうあつても死ぬる／＼。

傳兵　これは短氣な。マア／＼、爰を放しや／＼。

お俊　イエ／＼、どう思ひ廻してもお前の身の上。お八重さまとやらと、御縁談があつて、夫婦にならしやんす。すりや、所詮わたしは添はれぬと、諦らめて死にますわいなア。

傳兵　さりとは、危ない／＼。

お俊　殺して下さんせいなア。

傳兵　マア、コレ、待ちやいの。

トいろ／＼揉み合ふ。此うち奥より甚三郎、出て、留めうとしては後へ寄り、さま／＼と心遣ひの思ひ入れあり

傳兵　コレ、例へ親仁樣が何と仰しやらうが、お國をしくじらうが、お八重を女房には呼び迎へぬ。其方と夫婦になると云ふ、慥かな證據は、ソレ、約束した、今こそ渡すこの起請。

ト最前の起請を出して渡す。お俊、取つて戴き

お俊　嬉しうござんす。その心底を聞いて、わたしも例へどうなつても、死なば一緒。未來までも添ひ遂げると云ふ、證據に書いたこの起請。

ト守り袋を出して傳兵衞に渡す。甚三郎、後に始終思ひ入れあつて、二重舞臺より下りて、床几に腰を掛けて、二人の樣子を見て居る。始終合ひ方。

申し傳兵衞さん、互ひに起請を取交した上は

傳兵　ハテ、其方は女房。

お俊　お前は夫。

傳兵　嬉しいか。

トちつと引寄せ、抱きつく。

お俊　知れた事いなア。

ト凭れる。

傳兵　可愛いか。

お俊　可愛い。

ト引寄せ、ちよつと口を吸ふ。甚三郎、取亂したることなし。床几の上に他愛なく見て居る。

傳兵　サア／＼、氣が味になつて來た。幸ひの好い首尾。

ト云ひ／＼お俊が帶を解く。

お俊　ア、、コレイナア。人が見たら恥かしいわいなア。

傳兵　なんの恥かしい事があるものか。

トこなし。

お俊　コレ、こそばいわいなア。

傳兵　サア、こそばうないやうに、思ひ切つて斯う。

ト無理にしなだれる。此うち甚三郎、さま／＼思ひ入れありて、床几の端へ出る。この時床几刎ねて、ドンと尻餅を突く。兩人恟りして

兩人　ヤア、あなたは。

ト甚三郎、眞面目になつて居る。兩人、いろ／＼あつて

お俊　申し、これおぢやに依つて、よしになされと云うたのに。

傳兵　なんの、おれは否ぢやと云ふに、自體甚三郎さまは、お國氣質で女子はお嫌ひ。その側で、うろ／＼するは第一不躾。お俊、奥へおぢや。

お俊　アイ／＼。

ト兩人、行かうとする。甚三郎、ツカ／＼と躙り寄つて、お俊が帶の端を取り、ヂッと顏を見て

甚三　人の心を溶かす傾城傾國の粧ひ。ハテ、お身は優しい女子ぢやなア。

お俊　何を仰しやるやら。爰をお放しなされませいなア。

甚三　イ、ヤ放さぬ、身共が女房。

お俊　エ、。

ト甚三郎、お俊を引き廻すを、傳兵衛、引分け
傳兵　エヽ、甚三郎さま、そりや何を御意なされまする。
　ト傳兵衛には構はず
甚三　お俊、定めて氣には染むまいが、國氣質の身共なれば武骨者、理不盡な者と思はうが、心の外とはこの事。如何なる貴僧高僧も、色の道には迷ふが慣ひ。まして身共は太俗凡夫。今まで女を嫌うた蟲も、忽ち變る妹脊の道。正木甚三郎も同じ人間。コリヤ、木竹ではないわいやい。
お俊　それはさうでもござんしよけれど、これは又、ひよんな事になつたわいなア。
　ト甚三郎に傳兵衛詰めかけ
傳兵　甚三郎さま、そりやお侍ひに似合はぬ、道も法も辨まへのない。現在わたしを側に置きながら。
　ト甚三郎これに構はず、ズッと立上がり、脇差を拔き、傳兵衛に突きつける。
甚三　傳兵衛、其方が取持つて、お俊を身共に靡かすればその通り。否と云やたつた一討ち。お俊、得心して抱かれて寢るか。
お俊　サア、それは。
甚三　打ち殺さうか。
兩人　サア。
三人　サア〳〵〳〵。
甚三　ト傳兵衛にキッと云つて氣を變へ
お俊、どうぢやいの。
　ト和らかに云ふ。兩人、うろ〳〵こなしの所へ、左五平、ツカ〳〵と出て、甚三郎を引分け
左五　コレ、下に居さつしやれ。エヽ、コレ、下に居さつしやれいの。
　ト無理に下に座らせ、その身もどつかりと下に居る。
傳兵　オヽ、好い處へ左五平どの。
お俊　最前からわたしを捕へて。
左五　サア、よし〳〵……こなた樣はマア、氣が狂ひはせぬか。イヤ、御本性でござるか。コレ申し、この左五平こそ卑しい下郎なれ、こなた樣を養育した乳母が悴なれば、乳兄弟も同然と、お果てなされた親旦那さまが、有り難い御遺言。家來と思ふな、左五平が申す事を、よく聞き分けいと仰しやつたゆゑ、こなた樣にもこれまでに、ついに左五平が申した事を、もどかしやつた事はござら

ぬぞや……が、また無理も申さない。一昨年の秋、上州に於ての御大病。人參代の才覺に、手閊へた金の工面を、あの傳兵衞どのが用立て下された禮こそあれ、危ない命を取りとめた命の親。恩のあるあの傳兵衞どのに、云ひ交したお俊どの、心の外などと、武士町人の隔てはあつても、淫ら千萬。コレ、義理を辨まへ知らねば、コリヤ、人間ではない、犬畜生だと、サア、法外な口をきくもこな様が大事さ。無禮慮外がお心に障つたなら、この下郎めを打つなりと、刻むなりとなされて、この事ばかりは思ひ切つて下され。一生のお願ひだ。お旦那様、甚三郎さま、日頃に似合はぬお心入れと、人が笑ふが口惜しうござるわいの。

ト泣いつ口說いつ云ふ。此うち甚三郎、合點の行たこなし。傳兵衞、お俊は氣の毒さうにして居る。甚三郎チッと顏を上げ、左五平に拔身を寄越せと仕方する。左五平、合點が行たさうなと云ふこなしにて、拔身を取つて渡しながら、甚三郎が顏を見詰めてゐる。甚三郎、拔身を鞘に納め、ズッと立ち、向うへ行かうとする。左五平、留めて

すりや、下郎めが只今の意見を。

甚三　承知なりやこそ、屋敷へ歸るわサ。

傳俊　そんなら、一旦の戀の絆も。

甚三　切つて捨つれば心は潔白。其方は何か取片付け、後より歸れ。

ト云ひ捨て行くを又留めて

左五　申し、イヤ、必らずともに。

甚三　正木甚三郎は、武士ぢやわやい。

ト唄になり、甚三郎こなしあつて向うへ入る。左五平あと見送り、二人もこなしあり、この前より後へ萬八、窺うて居る。この時

萬八　傳兵衞、われを。

トかゝるを、左五平、立廻りにて

左五　ヤア、うぬは最前の道具屋。

傳兵　そんなら忠七と。

左五　相摺りなれば。

萬八　百兩の金を。

ト振り切りかゝるを、左五平よろしく立廻り、萬八を押へる。

傳俊　それは。

左五　爰構はずと、二人は先へ。

傳兵　そんならお俊。

ト手を取る。

萬八　イヤ、彼奴を。

ト起き上がるを、よろしく留めて

左五　早うございませ。

ト暮れ六ツの鐘にて、傳兵衞、お俊、向うへ入る。左五平、萬八を押へる。この見得にて道具廻る。

黒幕藪畳、八幡裏手の模様。合ひ方、雨車にて道具とまる。

ト向うより忠七、尻からげにて、傘をかむり走り出て

忠七　幸ひ、日は暮れる、雨は降る。このあたりに待ち合せて。是非歸つて來をらねばならぬ。エヽ、早うせ居ればよいが。

トこなしあり、矢張り雨車にて、向うより傳兵衞お俊、番傘を合ひ傘にて出て來る。

傳兵　お俊、もちつとおや。早う歩みやいの。

お俊　心は急くけれど、雨は降るし暗くはあり、道の黒白が分らぬわいなア。

傳兵　ハテ、どう迷うても、深川の内ぢやわいの。

ト云ひ〳〵兩人、本舞臺へ來る。忠七、傘を引ツたくり、二人が首筋を捕へる。

傳兵　ヤア、これは。

忠七　これはとは、傳兵衞お俊。うぬらを待つて居たわやい。

傳兵　さう云ふは慥かに忠七。

お俊　そんなら最前の。

忠七　オヽ、短刀の意趣から戀の意趣、百兩の金も此方へ。

トお俊を付け廻し、傳兵衞が懐中の金を引出す。

傳兵　ヤア、それは。

ト三人よろしく立廻りにて、この金を奪ひ合ひ、取落せ　を知らずに、せり合ひ〳〵奥へ入る。また雨車にて、靜かなる合ひ方になり、向うより甚三郎、傘下駄にて出る。但し、時の鐘にて本舞臺へ來り、下駄の歯に百兩の金、引ツかゝる心にて、不思議さうに取上げ見て、金ぢやさうなと云ふ思ひ入れ。所へ中間一人、箱提灯を持つて、臆病口より出て行き合ひ

中間　これは甚三郎さま、只今お迎ひに參りましてござりまする

甚三　當所のお屋敷よりのお心付け。御苦勞々々々。ちよっと灯をこれへ。

中間　ハツ。

ト家來、提灯を差出す。甚三郎、件の金を見る。此うち忠七、臆病口より出かけ窺ひ居る。

甚三　こりやコレ、一兩々々に里の字の極印。

忠七　それを。

ト取りにかゝる。立廻りにて傘の先にて當てる。忠七たぢろぐ

中間　これは。

甚三　提灯やれ。

トよろしく　　幕

二 幕 目　深川春田屋の場

役名　井筒屋傳兵衞。同番頭、忠七。家來、喜藤太。春田屋お角。同娘分、おたみ。仲居、おきよ。同、おきみ。同、おたつ。たいこ持、萬作。船頭、長吉。塚口數右衞門。若黨、左五平。瀧口主計。藝子、お俊。正木甚三郎。

本舞臺、正面、中足の屋體。向う塗り骨障子。この後ろ植込み、中庭の體。屋體の前、濡れ緣、誂らへの上がり段。上の方、障子を立てたる二階。下の方、引戸の門口。これに春田屋と書いたる鳴子綱の印。この綱、屋體の後へ廻り、爰に鳴子の鈴付いて居る。爰に甚三郎、着付け流しの形にて、おたつ、前垂れ、仲居の形。この膝に凭れ、酒を吞んで居る。おきよ、同じ仲居にて酌をして居る。長吉、船頭の形。おたみ、前垂れ娘分の形にて、長吉と拳を打つて居る。萬作、たいこ持にて立ちかゝり、唄にて幕明く

長民　どうしい。さんな。すむやう。

ト捨ぜりふにて拳を打つ

たみ　オツと、モシ、拂つたぞえ。

トまた打つ。

モシ／＼、サア、否應なるまい。すむやうで、吞ましやんせ／＼。

きよ　ほんに、中の字をきめなさんす長吉さんでも、拳では此方のお民さんには。

きみ　負けなんして、ほんに好い氣味な。
長吉　エ、業腹な。なんでも醉はせてやらうと思ひの外、どうで町と深川の女にやア、拳ぢやアいつでもしめられる。
萬作　その代りにお前が又、締める事があるからよいぢやねえか。
甚三　コレ／＼待ちやれ。あの船頭の長吉に、締められる者とは、誰れぢや。
萬作　ハテ、この里の子供衆や、羽織藝者はみんな。
長吉　コレサ、人聞きのいゝ。江戸船の船頭は、深川へ來りやア、矢鱈に色でもするやうに、名立てがましく云はねえもんだ。
甚三　イヤ／＼、さうでない。力づくにも行かぬものは、この道。長吉、身共は、その色とやらに肖かりたい。
長吉　ほんに、色と云へば、どう云ふ事で、あなた樣はマア、お俊さんに血道を上げて、毎晩々々、どうも合點が行かない。
たみ　なんの合點が行かぬ事がござんせう。惚れてお出でなさんすのぢやわいなア。
長吉　サア、あなたが惚れて居るのは知れ切つて居るが、あのお俊さんが、どうも。
たみ　コレ、モシ、なんの床の中の事が、外へ知れるもので……それはさうと、お俊さんを、呼びに行たかいなア。
甚三　イヤ／＼、お俊を呼びにやつたと云うても、身共を嫌うて、一向浮き／＼せぬ。モウ／＼、呼ばずと止しにしやれ／＼。
きよ　と仰しやるは、きつい嘘の
きみ　それ／＼、その嘘から出た誠は、矢張り逢ひたいのでござんせうな。
萬作　時にお俊さんはあるかの。慥か菊よしへ入つて居ると云つたが。
たみ　それでは明いても又留めて、此方へ寄越しはせまい。長吉さん、お前、どうなと好いやうに云うて、明いたら直ぐに來なさんすやうに、お俊さんに云うて下さんすまいか。
長吉　そりやハヤ、旦那に附いて來るわたしが事、行つて來やせう。こんな事が船頭の役サ。
萬作　船衆。
長吉　エ。

萬作　萬歳、萬々歳。
　ト淨瑠璃を語りながら踊る。
長吉　おきやアがれ。ドレ。
　ト行かうとする
甚三　コリヤ〳〵長吉、大方お客はどなたと尋ねるであらう。甚三郎ぢやと云うては惡いぞ。尋ねるならカウと、權兵衞となりと八兵衞となりと、出次第に云つて置きやれ。呑み込んだか。
長吉　ハイ、八兵衞とは、いゝ名でござりまする。左樣ならば八さま、ちよつと行つて參りませう。
甚三　そんなら大儀ながら。
長吉　ドリヤ、行つて參りませうか。
　ト長吉、奧へ入る。萬作、矢張り口三味線を彈いて居る。
きみ　なんぢやぞいな。サア〳〵、八さん、一緒に上がらんかいなア。
甚三　コレ〳〵、もうおれを八兵衞にするか。ハ、、、ハ。
萬作　イヤモウ、旦那の名弘め、ざつと一騷ぎ騷がうか。
甚三　こりや好からう。ソレ祝儀。

萬作　ト金を紙へ捻つてやる。
　ヤア、思ひがけない祝儀とは、有り難山や吉野山。
　ト山盡しになり、萬作、をかし味の振りにて踊つて居る。この鳴り物にて花道より、瀧口主計、羽織袴、大小にて、中間を連れ、後より左五平、序幕の形にて付いて出て、花道にて
主計　コリヤ左五平、彼の春田屋とやら申すは、甚三郎どのゝ遊び茶屋ぢやな。
左五　左樣でござりまする。表町から參りましては目立ちまするゆゑ、これは川岸から通路の裏口、下郎めが案内仕りませう。
　ト先に立ち、門口へ來てちと賴まうぞ〳〵。
　ト鳴子を引く
萬作　出たのがない。通らつせい〳〵。
きみ　コレイナア、お客さんぢやゝら、誰れぢや知れもせぬに。ハイ〳〵只今。
　ト立つて引戸を明ける。
左五　コレ女中、この家に手前の旦那が
　ト甚三郎を見て

オヽ、あれにござる。嬉しや／＼。
ト主計に向ひ
イザ、旦那様に、お逢ひ下されませう。
主計　これは甚三郎どの。
甚三　ヤ、主計どの、サ、ヽ、これへ／＼。
主計　御免下されい。
ト甚三郎が側へ通り、片々、白けたるこなし。甚三郎も不承々々に割り膝になつて
甚三　これは主計どのには、なんと思し召しての御入來。ハヽア、貴殿にも勤番の鬱散を晴らさう爲か。
主計　イヤ、左樣ではござらぬ。拙者參つたは、貴殿御身分の儀。
甚三　ヤ。
主計　この度、お國元の御用に就いて出府召され、先月を限り、歸國なうては叶はぬところを、今日まで延引。お國元の首尾如何と、朋輩どもも共に評議まち／＼。まつたお國の御家老、泉非角之丞どのも、お心付けの書面差越さるゝに依つて、貴殿の思し召しを承はらうと存じて、推して推參いたしたのでござる。
甚三　これは／＼、お心入りの段、先づは祝着。この間より歸國と聞き居つたなれど、御存じの通り、先月中旬の大風より、打續きて日並惡しきゆゑ、思はざる歸國延引。併し、明朝は是非々々出立。陸を參れば日數もかゝり、舟に致さば木更津までは暫時。心積りも致して居れば、申さば當地を名殘りの遊興。お出會ひ申すも又稀れな儀。サ、ヽ、一盞は苦しうもござるまい。
主計　左樣承はつて拙者も安堵。イヤ、次手ながら申さうは、先頃鶴ケ岡に於て、百兩の金子の盜賊、番頭忠七と申す事ゆゑ、早速召捕り連れ歸つてござるが、右の金子は落しましたか隱しましたか、拷問に掛けてござれば、苦みの餘り相果てました。さすれば同類の盜賊が無ければ叶はぬ。萬一、胡亂な者がござらば、お知らせ下されい。
ト甚三郎、思ひ入れあつて
甚三　遊所は人の入込んでござれば、拙者も心掛けて居りまするて。
ト此うち皆々、主計を歸したいと云ふこなし。おきよ、籌を取つて來て、逆さまに立てようとする。
左五　ヤイ／＼／＼、そりや、なんの眞似ぢや。
きよ　サア、これはな。

左五　何をひろぐのだよ。
きよ　サアこれは。座敷を掃かうと存じまして。
左五　何を馬鹿を盡すのだ。旦體旦那が便々と、江戸にうろついてござるも、わいらが寄つてかゝつて娯てるから起つた事だ。エヽ、何奴も此奴も、びた〳〵と忌々しい、しやツ面だわえ。
ト睨め廻して云ふ。皆々眞面目になる。
主計　ハヽヽ、當所へ入込む客を執成すは遊所の慣ひ。お身のやうに云うて、色里が立つものか。イヤ、甚三どの、拙者、もうお暇申さう。
甚三　イヤ〳〵、折角のお出で、其まゝ歸ると云ふ事があるものでござるか。コレ〳〵、仲居ども、座敷を替へてこのお方に。
主計　すりや、どうでも一綮食べいとかな。
甚三　拙者は後から。マア〳〵あれへ。
たみ　サア、お出でなされませ。
ト合ひ方になり、おたみ、主計を連れて奥へ入る。
萬作　先づ邪魔になる毛蟲は拂つた。とてもの事に、拂ひ次手に。
ト左五平を拋り出す眞似をする、左五平これを見て

左五　何を樣々の馬鹿を盡す。
ト頭を撲る。
イヤ申し、お旦那樣、こな樣には。
トあたりを見て、人目あるゆゑとの思ひ入れ。
オヤ、お身達は、暫らく座を除けてくりやれ。
きよ　アイ〳〵、御用があるなら、わたしらは彼方へ。サア、皆さんもお出で。
きみ　アイ〳〵、甚さん、待つて居りますぞえ。
ト皆々行かうとする。萬作立ちとまり
萬作　申し、初心の突出しがござりますが、どうでござりまする。
ト左五平が袖を引く。
左五　何を馬鹿めが。
きよ　じやら〳〵せずと、サアお出で。
ト合ひ方になり、三人奥へ入る。甚三郎、矢張り以前の處に煙草のんで居る。左五平、甚三郎が側へ來て
左五　お旦那樣、明日御出立ござらば、お國元への着、暫らく延引いたしたは、お斷わりでも濟みませうが、持參いたさにやならぬ安國の短刀、御所持でござるか。
甚三　ヤ。

左五　イヤサ、持つてござるかと云ふ事。
甚三　如何にも所持して居る。
左五　所持して居るものが、こりや、なんでござる。
　ト質の書付けを出して見せる。甚三郎ぎつくりする
元金百兩、安國の短刀一振り、先月鶴ケ岡に於て受取り、それより歸國を勸めても、なんのかのと云はしやつて、一日々々と延引。その後歸國を勸めたは、何度と云ふ數はござらぬぞや。身共らが申す事は一向に取上げなく、遊所ばかりに入つてござつて、揚句はコレ、こんな事ぢや。大切な刀まで質に入れ、遊所狂ひがしたいとは、なんたる天魔が魅入つた事だ。サア、その金百兩はどうさつしやれた。明日出立に相違なくば、その金をこれへと出さつしやれ。質屋へ參つて、請け戻して參る。サア、出さつしやれ。返事をさつしやい。サア、どうでござるどうでござる。
　ト手繰りかけて云ふ。甚三郎、思ひ入れあつて、懷中より胴卷を抛り出す。左五平、胴卷を見て
この金は。
甚三　それに四十兩、百兩のうち六十兩は、入用あつて遣ひ果した。今宵のうちに調達して、短刀は請け戻すに相違ない證據だ。
左五　イヤ、未だ、懷中に金がござらうがの。
甚三　イヽヤ、家來の其方に何僞はり。
左五　すりや、今宵中に六十兩を、夜明けまでに。
　トこなし。
然らば屋敷へ歸り、兎も角も才覺いたさう程に、サア、お立ちなされませ〳〵。
甚三　イヤ〳〵、身共はこれに居つて、金子の心當てもあれば、其方は邸へ歸り、出立の用意を整へ、明朝迎ひに……早く行け〳〵。
左五　ムウ。すりや、この所にござつて、金子の心當てがあると仰しやるのか。
　ト思ひ入れあつて
どうも呑み込めぬ。
　トこの時、長吉出て來て
長吉　旦那、まだ爰にお出でなされますか。彼のを。
　ト云はうとする。甚三郎云ふなと顏で敎へる。
エ、成る程、お差合ひは承知の介。彼の事は今夜折の惡いのを、やう〳〵つうくつ致しましたが、どうで遲うござりませう。

甚三　ムウ。すりや、遲いと云ふか。
　ト思ひ入れあつて刀を取り、門口の方へ行かうとする
左五　旦那、どこへござる。
甚三　屋敷へ歸る。
左五　たつた今まで、行かぬと仰しやつたこな樣。
甚三　急に歸りたくなつた。
左五　そんならお供いたさう。
甚三　イヤ、それでは。
左五　それではとは、身共がお邪魔かな。
甚三　イヤ、もう歸るまい。
左五　然らば拙者も歸るまい。
甚三　ハテ、どう云へば斯う云ふ。
左五　何と致した。
甚三　勝手にしをらう。
　ト唄になり、甚三郎、ツイと奥へ入る。左五平うろた
へ、後を追うて奥へ入る。長吉、思ひ入れあつて
長吉　なんの事だ。遊び場所へ迎ひに來る奴に、野暮でな
い奴は一人もない。あの奴のやうな親を持つたら、片時
も居られめえ。
　ト騷ぎになり、長吉、奥へ入る。向うよりお角、茶屋の
女房の形、前垂れにて提灯をともし出て來る。後より
數右衛門、羽織袴、侍ひの形にて、供を連れ出て來て、
花道にて
數右　コレ／＼、內儀、其方の宅は何處ぢや。
かく　アイ、もうあれでござりまする。お忍びのお客は、
皆こちらからお入れ申しますわいな。
　ト門口を明け
サア、あれへお出でなされませい。
數右　そんなら許しやれ。
　ト內へ入る。
かく　コレ、誰れぞ來いよ。お客さんがあるぞ。これはし
たり、誰れも居らぬか。何奴も此奴も居をらぬか。
　ト喧ましく喚く。
數右　イヤ／＼、構やるな／＼。先程二軒茶屋にて申した
通り、彼の安國の短刀、當所に於て、甚三郎が手より質
に差入れたを、俄かに請け出し、此方主人里見家へ差上
ぐれば、身共が一廉の出世。さるに依つて、何かに物馴
れた其方を頼み、いよ／＼彼の質請け、安國の短刀、身が
手に入らうか。
かく　そりや、お氣遣ひなされまするな。こみづにかけて

は、まんざらな事はせぬこのお角。その質屋、伊勢屋の太郎兵衛と云ふは、隨分心安う致しますれば、わたしが申したら、例へ置き主が金を持つて行ても、此方へ引上げて見せませう。その代り手柄賃は、お約束の通り。して、その質請けの金はえ。

數右　卽ち百兩、利息も持參いたし居る。ソレ。

　ト出す。

かく　慥かに受取りました。首尾よう行たら。

數右　オヽ、サ、褒美はずつしり。殊に依つたら知行にならうも知れぬ。

かく　お知行貰うて茶屋をしたら、面白い事でござりませう。

數右　甚三郎が放埒を殿へ申し上げ、身が手より短刀を差上げれば、その功に彼れが知行を、殘らず身共へ。

かく　前祝ひに、お一つお上がりなされませ。シタガ、祝ひぢやとて、わたしが振舞ふのぢやござんせんぞえ。

數右　ハテ、茶屋の酒を、なんの只吞まう。

かく　それさへ御承知ならお客さん。サア、お出でなされませ。

　ト騷ぎになりお角、數右衛門、奥へ入る。騷ぎのうち、向うより傳兵衛、一本差し、羽織にて、頰かむりにて出て來て、花道にて

德兵　エヽ、春田屋の內で面白う騷ぎ居るな。後の月まではは、おれとお俊と二人、あのやうに贅をやつたが、二軒茶屋で百兩のいきさつから、番頭の忠七めが惡企み、親仁樣の御立腹、勘當同然で內を出て居ると思へば、今まで目をかけてやつた者まで、顏を橫にして、現金なは茶屋の者ども、金遣ふうちはちやほや云うて、斯うなるとそウお俊にも逢はさず、內儀のお角を始め、どれも〳〵不承知な顏。その中に殊勝らしいは、娘分のあのおたみ。お俊めは今宵も來て居るか。ちよつと樣子を聞きたいものぢや。

　ト門口へ來て鳴子を引き、また花道へ來て窺つて居る。奥よりおたみ、手燭を持つて出て來り

たみ　どなたでござんす〳〵。

　ト門口より外を覗く。傳兵衛透し見て、側へツカ〳〵と來て

傳兵　おたみか。おれぢや〳〵。

たみ　ヤア、傳兵衛さんか。

傳兵　コレ、アノ意地惡の、レコは居はせぬか。

ト小指を出して見せる。

たみ　イエ〳〵、今知らぬお方と部屋で話して、爰へ來る事ではござんせん。マア〳〵、入らしやんせいなア。

ト傳兵衛、内へ入り

傳兵　早速ながら、あのお俊は來て居るかいなう。

たみ　アイ、屋敷衆で今

傳兵　屋敷者とは、また甚三郎か。

トむつと思ひ入れ

たみ　なんの甚さんの事を、やかましく云はしやんす事はない。あれ程嫌がつて居やんすもの。

傳兵　イヤ〳〵、三日見ぬ間に櫻かな。女郎に油斷がなるものか。

たみ　なんの、起請まで取交して居やんす事は、よう知つて居るぞえ。

傳兵　オツと誤まつた。時に、ちよつと逢はれまいか。

たみ　逢はせは逢はさうが、好い間を見合せねばならぬわいな。

傳兵　そんならお前今ちよつと逢うて、この間文にも云うて遣つた通り、百兩の金がどうでも、おれが越度になつて内を出て居る。どうぞ百兩の金の都合、その相談もある程に、ちよつと逢ふやうに。

たみ　アイ、好いやうに内證云うて、置かうわいなア。

ト奥にて

かく　おたみや〳〵、おたみは何處へ行きやつたぞ。

傳兵　ありや、意地惡の。

たみ　お内儀さんの聲。

ト傳兵衛、門口の外へ出る。

モシ、間を見て逢はす程に、何處へも行かずに待つて居さんせ。

ト傳兵衛、門口の外に忍んで居る。合ひ方になり、奥よりお角出で來り

かく　オ、おたみ、そこに何して居やるぞいなう。

たみ　アイ、あの八疊のお客に、あんまり酒を強ひられて、切ないに依つて、爰へ來たればな、月夜烏が啼くに依つて、つい見て居ましたわいなア。

ト此うちお角、ちよつと傳兵衛が顏を見付け、素知らぬ顏にて

かく　なんの、平常酒も呑みもせぬ癖に、醉醒ましとは、こりやをかしい。そして、月夜烏が啼くとか。

たみ　アイナア。

かく　オ、、啼く筈〳〵。ありや宿無し烏ぢや。ならず烏の癖として、毎晩々々飛び歩き、人の大事の奉公人を、そゝのかしくさる。茲な泥坊烏め。

ト傳兵衞が方を見て思ひ入れ。傳兵衞、ムツと思ひ入れ。

たみ　ア、コレ。

ト腹立つと悪いと云ふこなし。お角、思ひ入れあつて

かく　なんぢやの。盗人烏がひこ〳〵と、羽搏きをし居ると、はごを取つて締め殺すぞ。

ト門口へ出ようとする。おたみ留めて

たみ　ア、モウ、烏が飛んだわいな。

かく　ヤ。

たみ　サア、烏めは表の方へ、ナ、アノソレ、表の方へ飛んで行たわいなア。

ト傳兵衞を抑へこなしあり、傳兵衞、呑込み、下の方へ小隠れする。おたみ落ちつく思ひ入れ。お角も思ひ入れ。

かく　エ、殘り多い。烏めと踏み殺してくれうと思うたに、命冥加な烏めぢやなア……ほんに、あのやうな、阿房烏めがうろつくに油斷がならぬ。今宵お俊が客は誰れぢや。

たみ　アイ、甚さんでござんすわいな。

かく　あのお侍ひの……これもモウ、使ひ果して、ならずのやうに。どうなと云うて、早う歸したがよいぞや。

たみ　そんなら、あの甚さんも。

かく　ハテ、あんまり掛けの出來ぬうちに、其處がめかりの所ぢやわな。

たみ　ぢやと云うて。

かく　エ、、氣が弱うて、茶屋商賣がなるものか。早く行きや。

たみ　アイ、行くわいな。

ト合ひ方になり、おたみ、ツン〳〵して奥へ入る。

かく　最前聞けば、大切な短刀とやらを、質にまで入れ、モウ餘程金も散らばつて居れば、懐中は知れてある。薄い客は、パツ〳〵と捌かにや後の爲。あのおたみでは、よう歸すまい。ドレ、わしが行て。

ト奥へ行かうとする。奥より甚三郎、煙草盆を提げ、お俊が手を引いて出て來る。

かく　ヤア、お前は甚さん。

甚三　ソレ。

ト紙へ包んだ金を投げてやる。お角取つて

かく　このお金は。

甚三　今宵の祝儀。

　ト　お角、思ひ入れあつて

かく　ホヽヽ、ほんにマア此やうに、せつ／＼御祝儀を下されませぬと申して、なんの御如才に存じましよ。有り難う存じます。内中の者が、ようお氣の付くお客さんぢやと、あなたを褒めぬ者はござんせん。ホヽヽ、爲になるお客。お俊、隨分大事にしなさんせよ。

お俊　アイ。

　ト　氣の濟まぬ思ひ入れ。

甚三　なんぼ大事にせいと云やつても、お俊が心は花曇り。憎や嵐が邪魔入つて外へ散らす。サ、客に知られぬ雪ならで、今宵も矢ッ張り振られて居る。

　ト　お俊、思ひ入れ。

かく　そりやモウ、嵐ばかりぢやござんせぬ。親の懷を追ひ出され、阿房烏の傳兵衞……サア、でんどへ出られぬ烏めが飛び歩けど、そこはこの春田屋のお角と云ふ熊鷹が、張り番して、滅多に寄せつける事ぢやござんせん。役に立たずに義理立てせずと、おのが身構へするが當世ぢやぞえ。お俊さん。

お俊　サア、それはどうでござんすか。

かく　イヤ、まだ斯う云うて居るうちに、聞かねば茶屋の威光、抱への親方へ行くと、雌鳥めに憂き目を見せ、雄鳥は猶の事、うろ／＼尋ね歩くを引ッ捕へ、カア／＼云はせて見せうわいの。

　ト　立たうとする。

お俊　ア、申し。

　ト　甚三郎が袖を引いて思ひ入れ。

甚三　ムウ、そんなら何もかも。

　ト　思ひ入れあつて

合點が行たさうな。お角、もう捨てゝ置きやいの。

かく　イヤモウ、合點さへ行きや、云ひたい事もござんせん。そんなら甚さん、ようござんすかえ。

甚三　好いやら惡いやら、もう一夜さ釣られて見よう。

かく　イヤ又、そこが女郎子供とやら、張りも強けりや折れるも易い。好いお客には滅多無性に折れてもらはにやア、こちらが商賣は立たぬ。わたしは奥へ行く程に、お俊さん、今の世の中は、名を取れぢやぞえ。ホヽヽホ。

ト唄になり、お角、思ひ入れあつて、其處にある衝立を舞臺に立て、奥へ入る。お俊、こなしあつて

お俊　甚三郎さん、今までの事は、あやまりました程に、堪忍して下さりませいな。

甚三　堪忍せいとは、どのやうに通ひ詰めても、身が心には從はず、云ひ交したる傳兵衞と何處までも。

お俊　イエ〳〵、退く心になつたわいなア。

甚三　ヤ。

ト思ひ入れ。

お俊　サ、不束なわたしに、眞實通うて下さんす、お前のお心、二つにはお角さんの今の意見、よう得心してさつぱりと、退く心になつては居れど、たつた一つ、差支へた事が。

甚三　ムウ。傳兵衞とさへ切れてくれゝば、例へどのやうな事でも、聞いてやる心ぢやが、その差支へたと云ふ事は、身に云うても叶ふ事か。

お俊　サア、隨分ぢやけれど、どうもさもしい。

甚三　ムウ。さもしいと云ふからは、金づくか。

お俊　アイ。

ト恥かしさうに思ひ入れ。

甚三　そりや、色と別るゝには、遣はすと聞いた、傳兵衞への手切れか。

お俊　イヽエ。

甚三　して、入用の筋は。

お俊　サア、わたしが母樣は、淺草猿屋町と云ふ所に貧しい暮らし。殊に去年よりお目は惡し、朝夕の煙も恥かしい事でござんすが、皆傳兵衞さんからの貢ぎ。その傳兵衞さんに別れては、悲しい母さんのお身の上が。

ト此うち門口へ、傳兵衞出て聞いて居る。

甚三　それをなんの氣遣ふ事。傳兵衞を退いて、身が合ひ方になれば、取りも直さず姑も同然。入用次第に貢いでやる。

お俊　それならアノ眞實に。

甚三　マア、有り合す百兩。これを取つて置きや。

ト投げてやる。お俊取上げ、恟りして

お俊　エヽ、このマアたんとの金を、アノほんに。

甚三　傳兵衞と切れると云ふに、僞はりがなければ、身も僞はりなしに。

お俊　エヽ、嬉しうござんす。これさへあれば、傳兵衞さんの難儀……サア、傳兵衞さんが何と云はしやんせうが、

退いてしまひます。水臭い者ぢやと思はしやんすも恥かしけれど、苦界は誰れしも親の爲。どのお客にも好いた顏するが勤めの慣ひ。それを誠と傳兵衛さんが、夜も晝も身を打つて通うて下さんすゆゑ、退きしほもなく暮らすうち、主は親御の勘當受け、親方は迫く、逢ふ瀬は絕え、この末便々と退かずに居ると、詰まらぬ思案より外出やしませぬわいなア。

ト門口に傳兵衛、これを聞いて惆り。口惜しき思ひ入れ。

甚三　それ／＼、さう氣が付いたのが、神佛に受けられたと云ふもの。互ひに詰まらぬ身の上になつて、果は心中。こりやコレ、いくらも世間にある事。

お俊　ほんに昨日までも、あの義理この義理、いつそ死んでくれうか。ア、後で母さん兄さんのお歎き、どうか斯うかと胸が苦しく、とつおいつ思案ばつかりして居やんしたが、お前さんにこれを貰うて、傳兵衛さんを退くと、心を極めてしまうたら、胸のもや／＼もさつぱりと、ほんに夜の明けたやうになつたわいなア。

甚三　すりや、眞實身共と。

お俊　今宵から打解けて

甚三　久しい思ひで新枕。

お俊　サア、行て寐やんせう。

ト甚三郎が手を取つて立ち上がる。最前より傳兵衛、口惜しき思ひ入れ、いろ／＼氣を揉み、この時カツと急き込み、内へ飛び込み、衝立を蹴退け

傳兵　お俊、われには用があるぞ。

ト袖を扣へて引留め、立廻りあつて、一腰を拔いて切つてかゝる。甚三郎、その一腰を叩き落し、お俊を圍ふ。傳兵衛、急き込んで

もう、斯うなるからは、お出入りのお屋敷の、甚三郎さまでも怖うない。其處退いた／＼。

甚三　イヽヤ退かぬ。今まで其方があるゆゑに、つれなう云はれて通ふたび、その口惜しさ悔しさは、丁度今の其方がやうであつたが、今日と云ふ今日心が解けて、お俊が客、突き出されたも勘當受けた身状の惡さ。コリヤヤイ、里の女に戀なし、寶を以て戀とすと、心の付かぬは、たわけ／＼。

傳兵　イヽヤ、そりや一通りの客の事。この傳兵衛は、おのれゆゑにかゝる身の上。決して退くまい見捨てまいと、神々を掛けた起請の天罰。

甚三　コリヤヤイ、起請の罰より親の罰が、早う報つてその姿。まだ〳〵報ふ女房の罰。
傳兵　エ。
甚三　聞けば其方は云ひ號けの妻あれど、それを嫌うて里通ひ。可愛や先のその女子は、それを氣病みに今をも知れぬ風前の燈火。側で見る親心、それに繋がる人の苦勞は、どのやうにあらうと思ふ。今お俊が退いたこそ幸ひに、云ひ號けの女子と祝言して、その身を立てるが親への孝行、世間の義理。
傳兵　ムウ。さう云はるゝは、どうやらこの傳兵衞を思ふやうなれど。
甚三　サア、君を思ふも身を思ふ、お俊を退かせて相方にしたいばかり。なんと今ので、ナ、否應は云はれまいがな。
ト お俊が手を取る。お俊思ひ入れ。
お俊　アイ、傳兵衞さん、あちこちの義理を思へば、お前の女房になると云ふ、山の見えた事でもなし。それぢやに依つて。
傳兵　イヽヤ、女房にする。なんぼ云ひ號けぢやと云うて、好かぬ女房が持たるゝものか。

お俊　それ程までに思うて下さんしても、わたしがどうもらしくもない。未練を云はずと、切れてしまやれ。
甚三　アレ、お俊が心は、あの通り水臭いを知りつゝ、男すりや、どうあつても、おれを見替へて乘替へるな。
傳兵　すりや、どうあつても、おれを見替へて乘替へるな。
お俊　勘當のお前に繋がつて居ては、末が詰まらぬわいな。
傳兵　エヽ、うぬはなア。
ト 思ひ入れ。
よいワ。七人の子は生すとも、女に肌を許すなと、世の譬へに違ひなう、おのれにかゝつて、さま〴〵の憂き苦勞。犬め猫め、四つ足め、さつぱりと切れてやる。畜生め、畜生相應に、牛蒡程の尾を振つて、どの客めへなと勝手に出おれ。
ト 脇差取つて鞘に納め、行かうとする。
甚三　傳兵衞待て。切れたら切れたやうに、取交した起請、さつぱり爰で返して行け。
傳兵　なんの穢らはしい彼奴が起請、置けと云つても置きはせぬ。サア、狐め、おのれが方のも、此方へ寄越せ。
ト 守り袋より出して打ちつける。甚三郎取つて、思ひ

入れにて懐中する。
お俊　アイ、何の役にも立たぬ空誓文、斯うして見れば反古同然。お前にしつかり返すぞえ。
　トこのせりふを云ひながら、掛けて居る守り袋を取り、この中へ以前の金を押込め、傳兵衛が前へ置く。
傳兵　エヽ、おのれ、この起請まで返された義理かえ。腹立つまいと思ふ程、どうも堪忍が。
　トお俊を踏みにかゝる。甚三郎傳兵衛を突き退け
甚三　アヽ、大事の身が思惑、指もさすまい。サア、お俊。
お俊　甚三郎さん。
　ト奥にて唄。
〽例へ別れて程經るとても。
お俊　申し、あの唄は。
　ト寄らうとするを、甚三郎隔てゝ
甚三　コレ、縁と時節ぢや。思ひ切りやれ。
　ト唄になり、お俊の手を引いて、甚三郎、奥へ入る、傳兵衛、いろ〳〵思ひ入れあつて
傳兵　彼奴に限つて、あゝ云ふ心は、よもや〳〵と騙された古狐め。それに知らずにうか〳〵と、一家一門親々まで、見限られたこの傳兵衛が、越度となつた百兩も、彼奴がその座に居たばつかり。ほんに見るも腹の立つこの起請。引破つて。
　ト側にある守り袋を取上げる、拍子に、中より起請と金落ちる。
合點の行かぬ。この金は、ムウ、こりや何でも深い思案……忍んで様子を、ムウ、さうぢや。
　ト合ひ方になり、傳兵衛、ツイと奥へ入る。下座より主計、數右衛門出て來て
主計　數右衛門どの、甚三郎の仕業と申すには、なんぞ慥かな證據ばしござるかな。
數右　證據と申すは、たいこ持、太十参れ。
　ト奥より太十、出て來る
コレサ、最前の金子これへ。
太十　ハツ、これが即ち、爰の内儀や私しが貰ひました、金子でござります。
　ト主計、取つて見て悄り。
主計　すりや、いよ〳〵甚三郎めは囚人。
　ト下げ緒を早繩にして扱き、奥へ行かうとする。奥より左五平出て、この體を見て

左五　アイヤ〱、主計さま。

ト留める。立廻りちよつとあつて

主計　左五平、仔細存じて留めるか。

左五　主人甚三郎、お咎めを受ける覺えはござりませぬ。

數右　ないとは云はさぬ。先月鶴ケ岡にて、御用金百兩紛失、何者の仕業とも知れざるところ、甚三郎當所に於て過分の遊興、合點行かずと詮議なせば、コレこの金子。

主計　遊所の者が貰ひし金子に、まッこの如く、里見家の刻印。疑ひかゝる越度の一つ。

ト左五平、有り合ふ金を見て

左五　すりや、百兩も御主人の虚妄か。ホイ。

數右　まだその上に安國の短刀、お國へ持參延引の越度。

主計　目付け役の某が功に。

左五　主人に繩打ち、お引きなさるゝ御所存かな。

ト きつとなる。

主計　アイヤ、その儀は一旦役目の表、申し譯さへ立てば、贔屓のよしみを捨てる主計ではないわい。

數右　イヽヤ、貴殿が知らぬ顏召されても、この數右衛門が。

ト行かうとするを留めて

主計　これはしたり、貴公はお目付け役ではござるまいか。

數右　サアそれは。

主計　穩便にせうと申し立てうと、目付け役の拙者が胸に。

左五　お慈悲にどうぞ。

主計　善惡二つは其方が計らひ。ソレ。

ト金包みを投げてやる。

左五　この金子は。

主計　短刀の質請け。

左五　四十兩はこれにあれど。

主計　不足いたした六十兩。

左五　エヽ、有り難い。

主計　金の虚妄は某が、知行に替へても、ナ、心措きなり早うお國へ。

數右　それでは。

ト寄らうとするを隔てゝ

主計　かゝる遊所に長居は恐れ。サヽ、ござりませう。

ト合ひ方になり、主計、數右衛門、向うへ入る。左五平、後見送り伏し拜み

左五　エヽ、有り難い主計さまのお情。この樣子を御主人に申して、お禮申さうか。イヤ〳〵、それよりは先づ短刀の質請け。ドレ、一走り行て來うか。

ト合ひ方になり、左五平、いそ〳〵と向うへ入る。此うち向うより、喜藤太、序幕の形にて、左五平と擦れ違ひ出て來り、直ぐに舞臺へ來り、内へ入り

喜藤　コレ〳〵、ちと頼まう〳〵、爰の内に、正木甚三郎さまと云ふお方が來てござらう。ちよつと逢ひたい〳〵。

ト奥より、甚三郎、刀を提げて出て來り

甚三　身共に用とは、誰れぢや〳〵。

ト喜藤太を見て

オヽ、そちや喜藤太。また參つたか。

喜藤　相も變らぬ旦那のお頼み。彼の病人も今日か明日か、取りとめる藥代りの御返事。どうぞ早うと、委細の事はこの書狀。

ト狀を出す。甚三郎、取つて

甚三　その事は油斷なく、ナ、十が九つ此方は上首尾。おしつけ吉左右お知らせ申すと、云うてくりやれ。

喜藤　左樣なら、もう落ちつかせましても、よろしうございますかな。

甚三　よいとも〳〵。親より重き師匠のお頼み。首尾せずに置かうか。

喜藤　ヤレ〳〵嬉しや、左樣なら直ぐにお暇申しませう。

甚三　大儀々々。

ト獨吟になり、喜藤太、急ぎ向うへ入る。甚三郎、今の狀を讀んで居る。唄一くさり切れる。上の二階に於て

お俊　傳兵衞さん、堪忍して下さんせいなア。

トこれにて甚三郎、思ひ入れあつて衝立の蔭へ入り、聞いて居る。二階の障子を明け、お俊、傳兵衞に縋つて居ながら

先刻のやうに愛想盡しを云うたのは、お前の難儀になつた百兩の金、甚三郎さんから借りやうばつかり。どうぞその金を、親御さんに上げて、内方にも歸つた上、云ひ號けの娘御さんと、仲よう添ひ遂げて下さんせ。わたしや尼になとどうなと、覺悟極めてゐるわいなア。

トこれを甚三郎聞き、思ひ入れ。

傳兵　イヤ〳〵、其方のさう云ふ實な心を聞いて、どう外の女房が持たれう。この金さへあれば、内へ歸つてどうなと、彼方を變替へして、其方を女房に持つわいの。

お俊　それぢやと云うて
傳兵　退くに退かれぬ、其方も。
お俊　お前も。
兩人　因果ぢやわいなう。
　トまた獨吟になり、手を取り交し泣く。甚三郎これを
　聞き、いろ〳〵こなし。唄切れる
お俊　これにつけても、ほんまに退くと思はしやんして、
大枚な金まで下さんした甚三郎さん、空恐ろしい。嘘は
勤めの慣ひぢやと、堪忍して下さんせいなア。
　ト手を合す。この時ちよつと甚三郎と顔見合せ、悄り
　して障子をさす。甚三郎こなしあつて、一通を懷中へ
　入れ、奥へ行かうとする。奥よりお角、長吉、出て來
　り
お角　オヽ、甚三郎さん、もうお歸りのお支度かいなア。
甚三　アイヤ、もそつと居ても大事ない。
かく　イエ〳〵、もう彼れこれ八ツ。先刻ちらと聞けば、
お邸の首尾も餘りようないげな。早うお歸りなさるゝが、
お前のお爲ぢやわいな。
甚三　さう云うてくれる志しは忝ないが、そんならちよつ
と、お俊に逢うて。
　ト奥へ行かうとするを留めて
かく　ア、申し、お俊さんは明けて歸してしまひましたわ
いな。
　ト甚三郎、思ひ入れ。
長吉　ア、コレ、お角さん嘘ばつかり、たつた今まで二階
に。
かく　なんの、歸してしまうた。また居るにしてからが、
金はお客の物、子供は此方の子。貰らうが貰るまいが、
わしが好き。
　ト長吉ムツとして
長吉　コレ、あんまりおかしな事を云ふめえよ。この長吉
が旦那を送つて、爰の内の爲にもなつたとせう。
甚三　ハテ、歸つたら歸つたにして、身共も歸らう。シタ
ガ、長吉、酒を呑んで行きたいな。
かく　もう料理番が寐て、何もござんせんわいなア。
長吉　肴が無くては、酒ばかりでもいゝ。
かく　イヽエ、子供を出しもせず、酒呑まして合ふものか
いな。
長吉　云ふまいと思ふが、そりやアあんまり物を知らね
え。

かく　物を知つて、金が貯められるものかいなア。風なみの悪いお客に付き添うて居る暇がない。サア〳〵、船頭さん、連れて歸つて下さんせ。

長吉　もうこりやア、團十郎を出さにやアならぬわい。

ト肌を脱いで立廻る。甚三郎留めて

甚三　ハテ、遊興は皆あゝした慣ひ。シタガ、さら身共を悪しざまにするは、最前の金で內の首尾も直る、傳兵衞も又、お後が客にしやうでの。

かく　客にしやうがせまいが要らぬ世話。一昨日ござんせ。

ト甚三郎も長吉も門口へ突き出す。

長吉　こりや、どうでも蟲か。

ト又かゝるをこちらへ引き廻し、キツとなつて

甚三　コリヤ、義理も法も知らぬ、辨まへのない、ありや人ではないわい。

ト二階へこなし。

長吉　でも。

トまた立ちかゝるを

甚三　ハテ、理非は、分らぬ儘にしやいの。

ト唄になり、甚三郎こなしあつて、ツイと向うへ入る。

長吉、捨ぜりふ、惡態を云ひながら同じく付いて入る。お角、後を見送り

かく　よい時分に客を掃くのも、ア、骨が折れたものぢや。

トこなし。佃になり、向うより質屋太郎兵衞、短刀を持ち、左五平、太郎兵衞の胸倉を取つて引摺つて出て來て、花道にて

太郎　そんなにさつしやるな。咽喉が締まるわな〳〵。

左五　イヤサ、締めはしないが、此方が心が急く。早く行きやれ〳〵。

太郎　サア、行きますと云ふに。

ト兩人本舞臺へ來て、始終佃。

左五　是でも非でも百兩渡すからは、短刀を渡してもらはにやアならぬ。氣が急く。サア〳〵、早く頼む〳〵。

太郎　申し〳〵、お前の云ふ事ばかり云つて、わしが云ふ事も、ちつとは聞いて下さりませ。尤も現金は百兩なれど、質には利と云ふものがかゝりますわな。

左五　すりや、百兩では足らぬか。

太郎　お前も素人らしい。利を取らないで質屋が、何をして食ひませう。頭からの相對で、一日に一兩宛の利子に、

今日で丁度十三日、耳を揃へて十三兩でなけりやア、この質は渡されませぬ。

左五　ハテ、それは難儀千萬、とあつて今早急に……なんと斯うしてくれまいか。只今これにて百兩渡す。利金の所は、一先づ國元へ歸つて間違ひなく。

太郎　ア、コレ／＼、江戸の内でさへ手放すと戻らぬ利金。そりやなりませぬ／＼。

ト行かうとするを引き戻し

左五　出來やうが出來まいが、此方も一生懸命。達て否だと云やア、われを打ち殺して。

太郎　エ、。

ト驚ろく。左五平、氣を替へ

左五　サア、さう云ふも短刀欲しさ。損得は格別、人間一人助けると思うて、コレ、百兩渡す程に、どうぞその短刀を。

ト無理に百兩を太郎兵衞の懐中へ押込み、短刀を取らうとする。

太郎　エ、、モウ／＼、そりやお前、御無體でござりまする。

左五　オ、、道理ぢや／＼。其處をどうぞ。

太郎　ハテ、しつこい。

ト短刀をいろ／＼揉み合ふ。お角、眞中より短刀を引ツたくる。兩人恟り。お角、金財布を抛り出す。

かく　百兩の外利金十三兩、改めて見さつしやい。

ト云ふうち太郎兵衞、金を改め、

太郎　ほんにこりや、元利丁度。

かく　短刀は受取つたよ。

ト行かうとするを留めて、

左五　待て。短刀を渡す事はならぬぞ。

かく　ホ、、、、百十三兩、耳を揃へて請け出したこの質ぢや。

太郎　それ／＼、元利揃へて受取りやア、此方に云ひ分はない。わしやモウ歸ります。お前の百兩戻しますぞえ。

ト左五平が前へ金を投げ出す。太郎兵衞、向うへ走り入る。

左五　待つた。女の身で大枚の金を出して、身にも應ぜぬ短刀を欲しがるは、こりや胸に一物があるな。

かく　知れた事ぢや。さるお侍ひさんに頼まれて、これさへ渡せば金儲け、こなた主從に自滅さすのぢや。似合うたやうに首でも縊つて死んだがましサ。

左五　それ聞いたら容赦はならぬ。尋常にこの百兩で、その短刀渡せばよし、否だと云やァ所存があるぞ。
かく　所存と云うて、どうする。
左五　斯うしてその短刀を。
　ト立廻りにお角の持つて居る短刀を引ッたくろ、
ソレ、受取れ
　ト百兩を投げつけ、左五平、一散に向うへ走り入る。
お角　コレ、それでは利が足らぬ。こりや斯うしては居られぬ。
　ト百兩を持ち、お角、男端折りに尻を紮げ、後を追うて入る。此うち始終合ひ方。奥より傳兵衛、お俊、おたみ、行燈を持つて出て
傳兵　お俊、わしはもう歸るぞよ。
たみ　夜も更けたさかい、今宵は泊りなんせいなア。
お俊　おやと云うて甚三さんが、まだ居なさんすぢやないかいなア。
たみ　イエ／＼、慥か歸つた樣子。その上、お角さんも、傳兵衛さんも知らずぢやわいなア。
傳兵　でも見られたら、また意地悪が起るであらう。
たみ　そんなら斯うしなさんせ。いつもわたしが寐るはあの二階、お前の床はこの見通し。お前とわたしが着物を着替へ、互ひに入れ替つて寐たら、如何なお角さんも、氣が付きやせまいぞえ。
お俊　ほんに、さうして下さんすりや、傳兵衛さんを泊めても、知つた者はお前ばかり。
たみ　そんならちやつと、人の見ぬ間に。
お俊　何にも云はぬ、これでござんす。
　ト拜む。
たみ　申し、わたしや、まだ佛さんにはならぬぞえ。
お俊　ほんに氣にかゝる事を。堪忍してえ。
　ト此やうなる事を云ひながら、お俊、おたみ、互ひに上着を着替へ、帶を取替へて締める。傳兵衛見て
傳兵　首を入れ替へたら、お主は正のおたみさんだ。今夜は娘分と色事。こりや又、氣が變つてよからう。
たみ　何をわたしらがやうな者を、そんな無駄を云はずと早うお出で。
　ト此うちそこにある床を敷き、屏風を立てる
傳兵　此やうな通り者を、一人寐かすとは、ア、、惜しいものぢやなア。
たみ　なんの、そんな事云はずと、早うおしげりえ。

ト唄になり、おたみが背中を叩き、こなしあつて、お俊が手を引き奥へ入る。おたみは帶を屏風へ掛け、引き廻して寢ると、方々にて八ツの拍子木、時の鐘鳴る。舞臺ひつそと夜の更けし體。向うより甚三郎、以前の形にて走つて出で來り、ズツと内へ入らうとして、屏風を見て、それよりぬき足にて内へ入り、行燈を持つて來て、屏風に掛けたる帶を見てキツとなり、踏み込まうとして、チツと氣を變へ、また表へ出て刀を拔き、草履にて寢刃を合せ、竊かに行燈を提げて來り、用水桶の水を拔身へかけ、刃のほめきを冷す心にて洗ひ、また行燈を提げて、寢勝手をとつくりと見て、行燈へ側にある油單を掛け、よく狙ひを付け、お俊と思ひ、おたみが首を一刀に切る。首、上の方へ飛んだる心にて本舞臺出る。此うちバタ／＼にて、向うよりお角出で來り、内へ入つて恟りし

かく　ヤア、泥坊。

ト云ひながらうろたへ、逃げようとするを、後より一太刀浴せる。これより聲を立てようとしても立たぬ思ひ入れ。よろめくうち行燈消えて闇の思ひ入れ。この物音に二階の障子を明けて、お俊傳兵衞、ブル／＼慄へて居る。お角、あつちこつちへ逃げるを追ひかける。お角、屏風を楯にして逃げ廻る。甚三郎、追ひながら横なぐりに切る。お角、屏風の蔭へ倒れる。腰より半分、胴切りになつて、吹替への胴、向うへ飛ぶ。甚三郎ホツと云ふ思ひ入れ、血刀を又用水桶にて洗ひ、鞘に納め、着物の塵を拂ひ、行かうとして思案して立戻り、懷中々探して紙なきゆゑ、以前の狀と紙入れの懷中硯を出す。キツカケに月出る。この月の光りにて何か認め、内へ投げ込み、花道の中程まで來る。ゴンと時の鐘鳴る。甚三郎、こなしあつて立ちとまり

甚三　ありや八幡の、諸行無常。

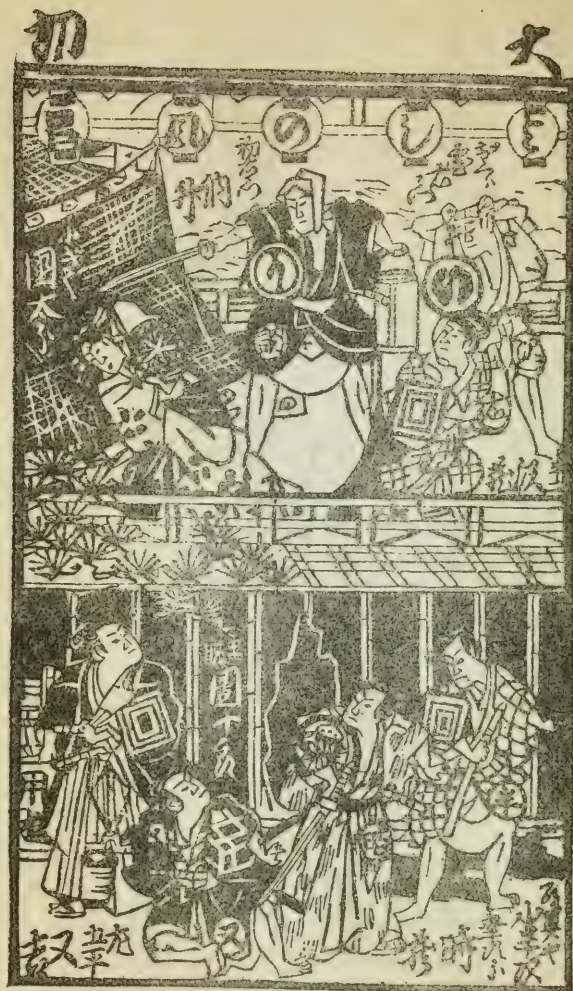
ト舞臺へ向ひ、口の内にて念佛を唱へ、ホロリとして思ひ入れあつて、悠々と向うへ入る。途端、バタ／＼にて向うより、左五平、留守居提灯を持ち、短刀を差して走り出で來り、直ぐに舞臺へ來て

左五　お旦那／＼。

ト内へ入ると、血にて辷り、恟りしてそこらを見て

ヤア／＼、一人ならず二人まで。こりや盜賊か、意趣切りか。お旦那／＼。

ト方々を見て

この狂言第三回目上演「袖浦戀紀行」番附

合點の行かぬこの一通。

ト提灯に透かし見て

ナニ〳〵、武士の意氣地、やむ事を得ず兩人の女、手に掛け立退くものなり……すりや、お旦那が〳〵。オ、、オ、、この左五平が付き添ひ居たら、この不所存はさせまいものを。ハア、。

トいろ〳〵こなしあつて一通を見て

まだ何やら裏に……先達てより段々頼み置き候ふ。娘八重に云ひ號けの傳兵衛事、お俊とやら申す藝子に馴れ染め、娘を嫌ひ婚禮延引、それを氣病みに娘事、九死一生、何卒武術師弟のよしみ、傳兵衛とお俊が縁を切り、娘と婚禮調ふやう、御工風頼み入り候ふ、正木甚三郎どの。近藤平次兵衛。

ト此うち二階に傳兵衛、お俊聞いて居て、悔りして

傳兵　すりや、わしに祝言さそう爲。

お俊　この身に惚れたと云はしやんしたか。

左五　さう云ふ聲はお俊。して、この死骸は。

傳兵　人違ひ。

ト後へたいこ持萬作出て

萬作　人殺しの證據。

ト取りにかゝる。

左五　早まつた事を、さつしやつたなア。

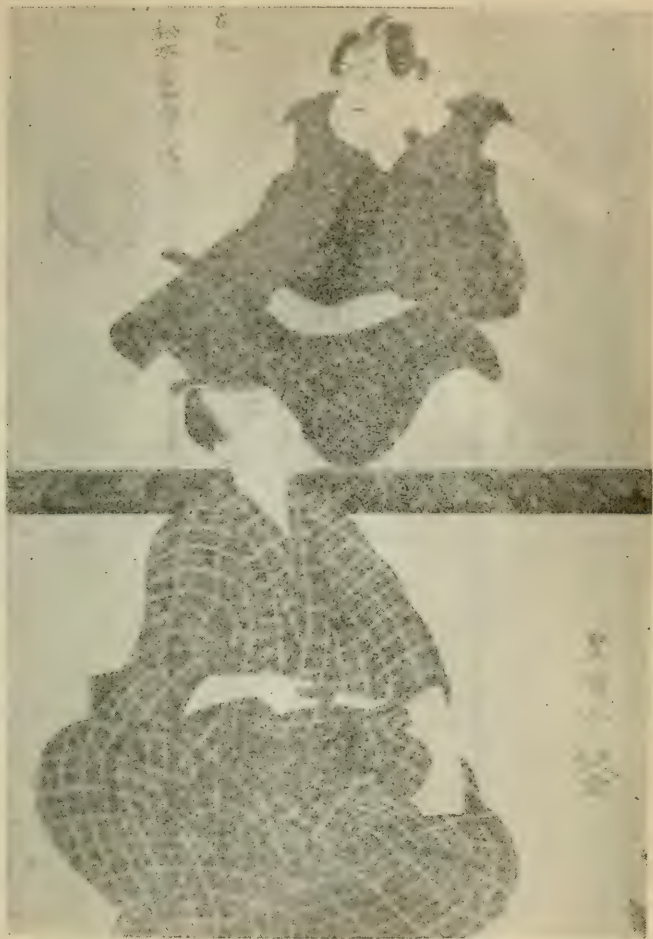
ト萬作を見事に投げ退け、キッと見得よろしく　ひやうし幕

江戸八景戀譯里（終り）

吉原俄番附

よしはらにはかのばんづけ

この狂言で活躍する俳優五世松本幸四郎の素顔(下)

上は父の四世松本幸四郎

吉原俄番附

序幕

兩國橋の場
天王橋の場

役名――濱名屋半七。娘、お花。唐犬のお吉。大黒屋才兵衞。西野屋九兵衞。醫者、出杉高慢。船頭、次郎吉。道具屋、太助。蟒の金兵衞。男藝者、折井蘭市。

本舞臺。三間の間、上の方に髮結ひ床、丸にいの字の障子一枚立て、下の方に揚弓場、路曉と書きたる障子を立て、眞中に葭簀張りの茶屋、床几二三脚直してあり、すべてこの所誂らへの兩國の道具立てよろしく、上の髮結ひ床に濱名屋半七、髮結ひの形にて若い衆の髮を結うて居る。下の方揚弓場にお花、娘の形にて横向きに座り、若い衆二人程、後向きに揚弓を射て居る。これに茶店の男一人、釜の下を焚いて居る。この見得、何れもよろしく、輕業の鳴り物にて幕明く。

ト直ぐに右の鳴り物にて、下座と花道より、仕出し大勢行違うて分れて入ると、向うより西野屋九兵衞、着流し羽織一本差し、半通の拵らへにて、黑文字の楊枝を啣へ出て來る。後より出杉高慢、洒落たる醫者の拵らへにて、着流し羽織の形にて出る。その後より次郎吉、船頭の形にて、火繩箱を提げて出る。道具屋太助、風呂敷包みを脊負ひ、ぱつち、尻を端折り出る。この後より大のしの男、廣蓋へ酒肴を入れて、これを持ち出て來り、皆々花道にて

太助　モシ／＼西九さん、どつちへお出でなされます。

九兵　オヽ、こりやア道具屋の太す公か。おらア今まで和尙と二人、大のしに呑んで居た。

高慢　昨夜は旦那を送つての、辰巳と洒落やしたが、兎角彼方は夏の事だ。ソウ初茸の聲がしちやア北國の事サ。

次郎　今日は七ツ下がりから、俄と云ふ事でござりやす。併し、旦那は吉原ぢやア、もう上がる處がない程、食ひ散らしたと、堀の兄イが云ひました。

九兵　それでもどつこいと、四つに組む女郎がないから、

そこで引けかつちりに小見世へ上がると、揚溜へ鶴と云ふものだから、氣が張らないで奇妙サ。

高慢　それさね。マア、あの茶屋へ行つて、一服のみながら、晩まで遊ぶとしやせうか。

九兵　オヽ、それがよい。太す公も一緒に歩ばッし。又、いい出物があるまいものでもない。

太助　左樣サ。出物腫物、所嫌はず。何處までも參るの面へ水はどうだ。

高慢　藤太は曾我の御家來なり。

九兵　なりや按摩でやう／＼と。

高慢　古い／＼。

ト矢張り右の鳴り物にて、皆々本舞臺へ來り、床几に腰をかけると、茶屋の男、茶を酌んで出す。

コレ、大のしの若い衆。その酒と肴は、船へ遣つてもらひの閻魔だ。

若者　ハイ／＼。

ト行かうとするを、太助留めて

太助　モシ、旨い物を船へ遣るは、あんまり酷い。ちよつと立ちながら、やらかしてくんなさいな。

九平　ほんに太すが、酒の氣のない面ぢやア面白くない。爰で通りを見ながら、呑むも洒落だらうぜ。

高慢　併し、斯う呑んだ上は、なんぞ肴が變らないぢやア。

次郎　モシ、その肴は、私しが使ひ慣ひの、聲色をやらかしやせう。

九兵　これはよからう。おれが贔屓の國五郎にしやれ。

ト次郎吉、高慢が扇を取つて、額に當てると、唄になり

半七　モシ／＼傳さん、お前マア何處で剃りなすつたか。左が大分薄くなつたゆゑ、この額を拔く時、三本通り拔き上げて置きやすに依つて、こちらがあんまり擦ぎ過ぎたやうだ。ソレ、見なさい。

ト鏡を出す。若い衆、見て思ひ入れ。

皆々　紀の國屋ア。

ト褒める。此うち皆々酒を呑む。

次郎　路之助でござい。

皆々　よからう／＼。

トまた唄になり

はな　萬里さん、久しうお出でなされぬうちに、きつうお上手におなりなされましたなア。

皆々　濱村屋ア。

九平　サア／＼、差詰め高麗屋が、聞きたい／＼。

次郎　次に出まするが、幸四郎でござります。

　トまた扇を額へ當てる。唄になり

彌市　モシ／＼、大黒屋の旦那、お待ちなさいまし。御一緒に參りませう。

　トまた輕業の鳴り物になり、向うより大黒屋才兵衛、羽織やつし茶屋の亭主。折井彌市、幇間の餘所行きの形にて出で來り、直ぐに本舞臺へ來る。

高慢　こりやア彌市先生、どつちへ御來臨だ。

彌市　これは高慢さま、西野屋の旦那。私しも今日は、妙見へ參詣いたして、歸りにお藏前の旦那方へ、廻らうと存じまして。

九兵　神弄りの刷毛次手に、勤めて歩くとは、ほんに五分も透かない男だぞ。

彌市　また惡口を仰しやる。

高慢　時に、あのお方は。

彌市　ありやア大黒屋の才兵衛さんサ。

　ト才兵衛に向ひ

　モシ、あなた方は、濱名屋と巴屋へお出でなさる、西九さま、高慢さまサ。

才兵　これは好い折柄にお目にかゝりました。ちとお出での節は私し方へも。

九兵　コレサ／＼、その堅身を取措いて、わしらがやうな野暮にも、これからちつと付合つてくんなさい。時に、お前も妙見かえ。

才兵　イエ／＼、私しは、この兩國に萬句がござりまするゆゑ。

彌市　イヤモウ、主も世話好きゆゑ、角力か花會、顏見世の積み物まで、內方へ持ち込むにやアお困りなさるのサ。

次郎　その世話好きゆゑ彌市さんは、才兵衛さんを勤めるのかえ。

彌市　そりやアなぜ。

次郎　ハテ、藝者のおたかさんの事を賴まうと思つて。

九兵　ほんに彌市と、おたかとの仲は、パッとした色事だの。

彌市　ナニ、飛んだ事を仰しやる。

九兵　イヤ／＼、隱しやるな。座敷の歸りに內へ引摺り込んだり、朝參りと號して中田で出合ふ事も、みんな知つ

て居るよ。
彌市　こりやモウ、爰には居られない。才兵衛さん、もうお出でなされませぬか。
九兵　コレサ、もうちつと聞かしやれな。
彌市　ア、モウ、これでござります。
ト拜む。
高慢　エヽ、忌々しい奴だわえ。時に、彌市も行くなら、此方も船に乘り出しませうか。
九兵　船へ行きは行かうか、あの蟒の金兵衛に、ちつと話したい事があるから……イヤ、それも船へ行つて待ち合さう。
彌市　左樣なら西九さま、高慢さま。
才兵　また此まゝお先へ。
太助　ドレ、おいらも洒落行きとしよう。
皆々　これはお世話。
ト また輕業の鳴り物にて、皆々下座へ入ろ。この時、髮結ひ床と揚弓場の仕出しも一緒に、下座へ入ろ。向うより蟒の金兵衛、道樂者の拵らへにて出で來り、本舞臺へ來て、髮結ひ床と揚弓場を覗き見て
金兵　ホウ、半七坊もお花も、來て居るな。
ト これにて半七もお花も門口へ出ろ。
半七　こりや金兵衛さんでござりますか。
ト 兩人、金兵衛が側へ、床几に腰をかける。
金兵　時に二人とも、精出して、よい事だ〳〵。
半七　イヤモウ、精出しましたところが、まだ碌々仕馴れぬ商賣、とんとモウ、馴染みが付きませぬ。
はな　お前のお世話で半七さんと、一つ所の揚弓場に居るのは嬉しいけれど、來るお客が手を握つたり、嫌らしい事するには困るわいな。
半七　して、金兵衛さま、お花や私しに用があると仰しやるは。
金兵　そりやア何よ。今改めて云ふぢやアないが、半七どの、こなたも元は大きな刀屋の息子だげな。このお花坊を連れて國を駈落ち。アヽ、いつだつけ。オヽ、それそれ、慥か六月の月始め、涼み時分で、押分けられぬこの廣小路を、二人連れでウロ〳〵歩くから、こいつはてつきり駈落ちだと、茶店へ呼び込んで、ぐん〳〵聞いたところが、右の體裁。江戸の內に知るべもあれど、名ばかり知つて處も知らぬ。今夜は何處に寐たものやらと、途方に暮れて居るが氣の毒さに、おれが世話してやらうと、

直ぐに内へ連れて歸り、湯へも遣つたり、ソレ、夕河岸の鯵で夜食を食はせたが縁になり、世話にして置く、こなた衆二人だによ。

半七　左樣でござりまするとも。若氣の至りとは云ひながら、云ひ號けのあるこのお花を連れて立退き、江戸に由緣と云ふは、内方に使ひました彌平次と申す者の子に、彌市と申す者を、心當りに參りましたれども、小さい時に逢うたまゝで、何處に居るやら處も知れず、どうしたものと、途方に暮れて居りましたところが、誠に世に人鬼はないとやら。お前のお世話で先喰ひ通ひの髮結ひの弟子。これも全く、お前のお世話ゆゑ。お花とてもその通り。

はな　さうでござんすとも。あんまり内にばつかり居ては、氣が詰まらうと、この揚弓場。半七さんにも毎日逢はれて、此やうな嬉しいお世話さまは、ござんせぬわいなア。

金兵　そんなら二人ながら、この金兵衞が世話したのを、恩に着て下さるか。

半七　そりやさうなうて、どう致しませう。

金兵　サア、その恩を着せて云ふぢやアないが、おれだとて、有り餘つた身上ではなし、六月から二人と云ふ厄介を引請けた上に、後月のまんの惡さ。その上に、今度この見世を出すにも、妹のお吉が處からちつと借り。また外で首の落ちる程な借錢。モウどうも立ち切れないが、なんと金を二十兩ばかり。

半七　エ。

ト思ひ入れ。

金兵　サア、なんと工面して、貸しちやアくれまいか。

半七　斯うお世話になつたからは、モウ、どのやうな事でも致して上げたうござりますれども、國を出まする時も、怖い／＼が一杯で、用意も致さず、と申して、お前の難儀なさるゝも、二人がお世話になつたお物入り。エヽ、お花、こりやどうしたらよからうぞ。

はな　どうと云うて女子のわたし、仕樣仕方も。

ト思ひ入れあつて

オヽ、ござんすわいなア／＼。コレ／＼、この硯は、内を立退く折に持つて來た、こりやモウわたしが内に、久しう所持してござんす、大事の物ぢやげな。人に願うても、隨分たんと金も貸すものぢやと、常々父さんの話しであつたわいなア。

ト懷より袱紗に包みし硯を出す。

金兵　成る程、とんと肌身を離さぬから、おれも、なんぞ好い物であらうと思つたが、そんなら、それを借してくれるか。

はな　お世話になつたお禮。寶は身の差合せとやら。どうぞこれなと、好いやうにして、遣うて下さんせいなア。

金兵　オヽ、さうしてくれりやア幸ひな事がある。あの船に、道具屋の太助どんが乘つて居るから、あの人に目利きをしてもらつて、金を借りるは、西野屋の九兵衞さま。ちよつと、おれが話して來よう。

ト行かうとする。半七、袖を控へ

半七　モシ、ちつと待つて下さりませ……コレお花、その譯は知らねど、大事のその硯。人手へ渡しても大事ないかや。

金兵　ハテ、それも、ちつとのうちだ。おれが方の間さへ合せれば、直ぐに請けて返さアな。

半七　エヽ、さう云ふ事ならば。

金兵　マア〳〵、なんでも出してくれるか。ハヽヽ、ハテ、人に慈悲すりや、惡くは報はぬわな。ドレ、船へ行つて來ようか。

ト合ひ方になり、金兵衞、下座へ入る。

半七　便りのない其方とわたしを、見ず知らずのあの金兵衞どの、身に引請けて世話してくれるは、江戸の慣ひとは云ひながら、あの硯は其方の云ひ號けの、櫻井新十郎どのへ聟引出に遣る、約束の物ぢやないかいの。

はな　サア、わたしも父さんは、百姓ながらも帶刀する鄉士、どう云ふ譯やら所持しやんす、松蔭とやら云ふあの硯があるゆゑに、世間廣く、お前と添ふ事もならぬゆゑ、立退く折柄持つて出たも、云ひ號けを變替へしやうばつかり。此やうな心遣ひも、みんなお前ゆゑぢやわいな。

半七　そりやモウ、わしも同じ事。シタガ、その心遣ひも氣兼ねも、この頃はとんと忘れ果て、お樂しみが出來たゆゑ、それで少しも早う爰へ來るであらうがの。

はな　エヽ、何がいなう。

半七　揚弓場を素見に來る勇みの侍ひ衆と、この間も怪しい目付き。エヽ、怪しいわいの。

はな　なんの、人の事ばつかり、めん〳〵もアノ茶見世のお光さんの襟を剃つてやつたり、手を握つたり、ほんに樂しみでござんすなア。

半七　イヤ、其方が面白い事のあるのに、此方が物を云ひ

立てたら、さぞ煩さからう。これからとんとモウ、無言ぢや。

はな　此方も無言ぢやわいなア。

半七　もう默りや。

はな　これからとんと默まりぢや。

トびんしやん拗ねて後を向き、床几へ腰をかけると、また輕業の鳴り物になり、下座より道具屋太助、出て來て

太助　コレ〱、お娘〱。髮結ひの半七とは、何處の床だ……イヤ、コレお娘。

トお花、默つて居るゆゑ、太助呆れて

顏は美しいが聾ださうだ。

ト半七が側へ來て

コレ〱、髮結ひの半七と云ふ者を知らないか。

ト半七も默つて居るゆゑ

こりやアどうだ。此奴も聾か……こりやアもう一遍、あの金兵衞に逢つて。

ト行かうとする。これにて

半七　モシ、左様ならお前は、アノ金兵衞どのゝ指圖で。

太助　さうサ。いま船へ見えて話した硯の理窟。その人は貴様か。

半七　ハイ、左様でござりまする。

太助　それに又、なぜ默つて居るのだ。

半七　サアそれは、あの女が、惡うござりまする。

はな　イエ〱、お前が惡いからぢやわいなア。

太助　コレサ〱、そんな事を云ふ手間で、その氣なら、おれが見た上で、西野屋の旦那と云ふが、得手物は貸さつしやる約束。マア代物を、ちよつと見せさつしやい。

半七　ハイ〱、イヤモウ、どうでお頼み申さにやならぬ品。お花、ソレ、出してお目にかけたがよい。

はな　アイ〱。

トお花、以前の硯を出して太助に渡す。

太助　ムウ、ドレ〱。

ト取つて、ひねくり廻して見て居る。九兵衞、下座より出て來り

九兵　太す公どうだ。踏める代物か。

太助　イカサマ、唐石でもござりやせう。石目と云ひ、海の掘り方、これが正眞の彼のなりやア、餘程が物でござります。

九兵　いま金兵衞の話しで聞きやア、出所が面白いから、

偽物でもあるまい。して、いくら程借りたいと云はつしやるのだ。
半七　その金も、私しどもが要るのではござりませぬ。世話になつた金兵衞どのゝ急の手詰めゆゑ、御無心申しましたが、先づ二十兩あれば、間に合ふと申されました。
九兵　二十兩とは、あんまり少ない。もうちつと借りて置かつしやらぬか。
半七　イヽエ〱、折角お借り申しても、何も遣ひまする事が。
太助　ハテ、ない事があるものかな。何時まで袷でも居られまいわサ。ソレ、上田の小袖に、下が八丈、博多の帶などは洒落。金五十兩借りて置かつしやいな。
九兵　それサ、五十兩でも詰まつた金なら貸してやらうが、二十兩位の端下金を貸しちやア、マア、外聞が惡いから、端下なら止しにせうよ。
半七　端下にならぬと仰しやれば、見す〱無駄な事ながら。
九兵　五十兩の質に置く氣なら、ちよつとマア證文を書いてもらひてえ。
半七　エヽ、證文とわえ。
太助　ハテ、こなさんはまだ知るまいが、總じて道具質と云ふものは、日限り證文を書くから、その證文の事よ。
半七　左樣なら、その日限り證文を、書くのでござりますかえ。
九兵　さうサ。なんの、むづかしい事はないわな。
太助　ソレ、爰に紙も矢立もあるワ。
ト懷中より紙と、腰より矢立を出して半七に渡す。
半七　ハイ〱。
ト筆を取る。
九兵　入れ置き申す一札の事、一つ、我れら所持の硯ところなき入用につき、金五十兩の質物に入れ申し候ふ實正なり、右の硯、三十日限りに、元利相濟み申さず候はゞ、外々へ賣り拂はれ候ふとも、我れら一言の申し分御座無く候ふ間、仍つて件の如し。年號月日、九兵衞どのへ…
…ムウソレ、判を捺してくれ。
半七　モシ〱、此やうな證文を入れましても、金兵衞どのゝ方で、ひよつと金がたんそく致しませぬ時には。
太助　コレサ、それに氣遣ひはないワ。こりやモウ、ほんのお仕着だ。その上、金兵衞だとて、三十日のうちに、工面の出來ない男でもないワ。

半七　左樣仰しやる事なら、と申したところが、私しが判が。
九兵　成る程、掛り人の身ぢや、あるまい。ハテ、三文判でもよいわな。こなたの手が何よりの證據だ。
半七　左樣なら、拾つた判が爰にござりました。これでも私しが判と、申し上げたら間違ひはござりませぬ。
　ト簟笥の抽出しより、判を出して證文へ捺して
ハイ、御覽じませ。これでよろしうござりますかな。
　ト九兵衞、取つて見て
九兵　オヽ、よいとも〳〵。なか〳〵よく書くわえ。
半七　ハヽヽヽ……この上は、お約束の金子を。
九兵　オヽ、今進ぜませう〳〵。
　ト懷中をモヂ〳〵して居ると、奧にて
仕出　喧嘩々々。
同　ヤレ、待つた〳〵。
皆々　逃げろ〳〵。
　ト辻打ちになり、若い衆、殘らず、仕出しにて駈けて出る。あちこちを駈け廻る。この中へ次郞吉、以前の形にて生醉ひのこなしで、出て來り、この騷ぎに九兵衞、證文と硯を持つて、太助も付いてあつちこつちと逃げ歩き、トヾ下座へ逃げ込み、半七はお花に怪我をさせまいと、手を引いて逃げ歩き、トヾ、あはてゝ仕出しに交り、逃げて向うへ入る。此うち始終辻打ちにて、次郞吉ろおかし味あるべし。次郞吉は矢張り暴れ歩きて
次郞　嫌だ〳〵。腦天を切ツ外さにやア、癪が納まらない。嫌だ〳〵。
仕出　どうしたものだ。マア、待つしやい〳〵。
　ト取押へる。奧より九兵衞、助太、ソツと出で來り
九兵　コレサ〳〵、もうい〳〵。
次郞　イヽヤ、嫌だ〳〵。
九兵　コレサ、おれだよ〳〵。
太助　コレ〳〵、九兵衞さんだよ〳〵。
九兵　もう、いゝと云ふに。
　ト次郞吉、九兵衞を見て
次郞　オヽ、九兵衞さんかえ。そんならこの喧嘩はモウ、こすりにしてもいゝかえ。
九兵　いゝとも〳〵。御苦勞々々々。
次郞　さうして得手物はえ。
九兵　上首尾々々々。祝ひに今の骨折り賃。

ト次郎吉と仕出しにも金を遣る。
皆々　こりやア有り難い。
九兵　遊びに行きやれ。
皆々　こりやア、もう斯うして居られぬわい。
太助　次手に底を入れさせうか。
次郎　てつちり物で行きたいな。
九兵　オツと、皆まで云はずに、あの梅川へ。
皆々　サア、參りませう。
トまた辻打ちになり、九兵衛先に皆々、下座へ入る。
矢張り辻打ちにて、向うより唐犬のお吉、綺麗な女形、やつし横帶、駒下駄にて、肩へ手拭を掛け、町人の腕を引ッ張つて出て來る。これを若い者、詫びをしいしい出て來る。花道にてとまり
町人　コレサ、姐さん、料簡しなさい〳〵。
きち　イエ〳〵、こんな奴は癖になりやす。サア、抱いて寐るから歩びやアがれ
町人　アレサ、今のは間違ひだと云ふのに。
きち　エヽ、間違ひも行違ひも要らないわえ。ほんに可愛い男だぞ。
ト舞臺へ引摺ふて來ると、下座より金兵衛、出て來て
金兵　なんだ〳〵。
トお吉を見て
ホウ、こりやア妹のお吉。こりやアマア、どうしたと云ふ譯だ。
きち　アイ、聞いて下さい。わたしが、あの筆吉が淨瑠璃を聽いて居たら、この野郎が側に居て、尻を抓つたり股へ手を入れたり、惡くふざけるからの事サ。
金兵　そりやア大方お主を又、唐犬のお吉と知らないからの事だらう。
町人　エヽ、そんならアノ噂のある、唐犬のお吉さんとはお前の事かえ。わしやア又、何處のお女中だと、つい冗談を致しました。眞平御免下さりまし。
きち　イヤ〳〵、このお吉が抱いて寐にやア、料簡はしない。サア、爰へ來て抱きつきやアがれ。
ト引寄せて無理に抱きつく。町人、怖がるうちに、お吉、ちやつと紙入れを抜く。
金兵　コレサ〳〵お吉、腹も立たうが、料簡してやりやれな。
トこちらへ引分ける。
きち　打ッちやつて置きなさい。飛んだべら坊ぢやアない

か。それ程女を抱いて寐たかア、河岸へ行つて夜鷹でも
買やアがれ。
金兵　サア〳〵、いゝサ〳〵。こんたも早く、行かつしや
い〳〵。
町人　これは有り難うござります。
若衆　ほんに、好い所へ兄御がござつて、貴樣　仕合せ
だ。連れのおいらも膽が潰れた。
町人　これはお世話でござりました。
ト矢張り辻打ちにて、捨ぜりふ云ひながら、兩人下座
へ逃げて入る。
きち　ハヽヽ、江戸は廣い。たわけの癖に、太い野郎もあ
るものだわえ。
金兵　お吉、今の野郎よりやア、お主の方が太からうぞ
よ。
きち　エヽ。
ト思ひ入れ。
金兵　なれども、ちつと符牒を寄越せ。
きち　符牒とはえ。
金兵　いま物云ひに託つけて、こづき廻す拍子に、われが
右の袂へ入れた紙入れを。

きち　ムウ。そんならお前、今のを見たか。
金兵　オヽ、サ見た。わりやア妙な働らきをするな。
ト　お吉、思ひ入れあつて
きち　七段目ぢやないが、身の大事とはなりにけり……慥
かに金があると見たから、おれが方からじやらついて、
歸りくじに物云ひつけ、捲き上げたこの紙入れ。
ト懐中より以前の紙入れを出して、中の金を十兩程出
して見て、につこりとして
見られたか。仕方がない。ソレ酒手。
ト金兵衛に遣る。
金兵　こりやアたつた一兩か。
きち　それで不足なら、よしねえな。おれもちつと金の要
り道があれど、この頃は受けつこ刎ねつこにやア歩かれ
ず、仕方なしの細仕事。いくら取つても足りないわな。
金兵　ムウ。お主が金の要り道と云ふのは、あの吉原の藝
者彌市に惚れて居て、やぶ酒手に遣ふ金か。
きち　エ。
ト思ひ入れ。
金兵　鬼のやうなお主でも、色と云ふやつは飛んだもの
だ。その盗人の上前を、あの野郎に取られるかと思へば

その金も。

ト紙入れを引ッたくり

おれが貰つた。お吉。さう思つて居や。

きち　ムウ。味な所へ節を附けて、ハ、ア、こりやアどうでもその金を。

金兵　知れた事だ。なんぼわれが悪黨でも、そこは女だ。おれと云ふ兄貴がなくつちやア、立行きが出來ない程に、マア、なんでも兄様の、云ひなりになつて居やれサ。

きち　そんならどうでも。

金兵　エヽ、くどいわえ。

ト お吉こなしあつて

きち　おきやアがれ、この野郎め。兄貴々々も凄まじいわえ。おれが細工が悪くつて、深川稼ぎに出る時に、親判をつかせたのを付け込んで、兄貴にして置けば、何處で人參を呑んで、そんな氣の強い事を云やアがる。コレ、兄ならば兄妹の緣を切る。早くその金を寄越しやアがれ。

金兵　イヤ、この女め。さう向う見ずを吐かすと、これまでの悪事を訴人して、暗い所へ叩き込むぞよ。

きち　なにを。

ト きつと思ひ入れ。

金兵　お代官の飯が食ひたいか。

きち　へヽ、そんな白痴威しで行くのぢやアない。なんでも金を寄越しやアがれ。

ト 金兵衛にむしりつく。此うち下座より九兵衛、次郎吉、出て來て

九兵　コレサ〳〵、何か知らないが、マア、靜かに譯を付けるがいゝわな。

次郎　こりやアマア、どう云ふ理窟だ。

きち　エヽ、どうも斯うも、外の者の知つた事ぢやアないわえ。

金兵　うぬ、さう吐かしやア、叩き挫くぞよ。

きち　オヽ、ぶて〳〵。釣り鐘ぢやないが、音が出るワ。

九兵　コレサ〳〵、爰は大道だ。マア〳〵、料簡するがいいわな。

次郎　それ〳〵、お前も爰に居ちやア悪い〳〵。

ト お吉が下駄を持ち、慰めながら、向うへ連て行く。

きち　コレエヽ、凄味で行く女ならナ、唐犬のお吉と仇名を持つて人に持て餘されやアしないわえ。うぬ、野郎

め、どうするか見やアがれ。

次郎　コレサ〱、マア〱、歩びなさい〱。

トまた辻打ちになり、次郎吉、捨ぜりふにて、喚くお吉を無理に連れて向うへ入る。

九兵　金公、ありやアどうした譯だの。

金兵　なにサ、れこさから起つた事サ、イヤモウ、酢でも酒鹽でも行ける女ぢやアござりましない。時に、先刻の理窟はえ。

九兵　そりやアモウ、氣遣ひの、きの字もないやうに、狂言を立てゝ置いた。マア、何にしろ、貴様の内へ行つて談じよう。

金兵　そんなら九兵衞さん。

九兵　サア、歩つばし。

トまた辻打ちになり、九兵衞、金兵衞、花道へ行かうとする。此うち向うより半七、お花の手を引いて出て來り、花道にて行き合ひ

半七　これは九兵衞さまでござりますか。さて最前は危ない事でござりました。お怪我でもなされは致しませぬか。

九兵　イ、ヤ、何にも怪我をするやうな事もなかつた。

半七　私しは又、食べつけませぬ事ゆゑ、大きにあはてまして、どこからどう逃げたか、今まで泡雲の見世へ入つて居りました。

はな　それ〱、怖うてなりませなんだわいなア。

半七　時に、最前の騒ぎに、肝心のお約束の物を受取らずに、逃げてしまふとは、マア粗相な事。どうぞお渡しなされて下さりませ。

九兵　渡せとは、そりや何を。

半七　ハテ、硯を質物に入れました、その金を。

九兵　ハテ、おかしな事を云ふ男だ。マア、狐にでも化かされて來やアしないかよ。

半七　モシ〱、何かそれは解らぬ御挨拶。マア〱、あれへお出でなされて下さりませ。

トこれにて皆々本舞臺へ來る。

九兵　コレサ半七、何か解らぬ挨拶と云うて、おれを爰へ連れて來たが、解らぬと云ふはお主が事だよ。先刻の質の金が、マア、どうしたと云ふのだ。

半七　サア、最前硯をお渡し申しまして、金を受取りませうと存じましたところが、喧嘩々々、イヤ、切つたのはつたのと、大勢の騒ぎゆゑ、それで金子を受取らずに、お

別れ申したではござりませぬか。
九兵　イヤ、そんな覺えはないワ。
半七　でも、受取りませぬ金を、受取つたと申されうか、
九兵　コレ、半七、お主も元は歴とした刀屋の息子さうなが、おちぶれては盜人根性になつて、この九兵衞に云ひかけをするのか。
半七　エヽ。
　ト思ひ入れ。
九兵　コレ見ろ、われが手で證文まで書いて、金を受取らずに、硯をどうマア、おれに渡しさうなものだ。
金兵　それ〳〵、そんな理窟の惡い九兵衞さんぢやアねえワ。ハヽア、聞えたわえ。こりやア、その金をお前の方から借りて、この金兵衞に渡さぬ工面で、それでそんな云ひ掛けをするのか。
半七　イヤ、忝く以て受取つた金を、お世話になつた其許樣に。
金兵　吐かしやアがるな。三月四月世話になつてうしやアがつて、まだ盜人根性を提げやアがるか。この野郎めが。
　ト半七をくらはせる。お花、慌てゝ留めて
はな　マア〳〵、待つて下さんせ。最前の譯は、わたしがよう知つて居やんす。夢いさゝか半七さんが、受取らしやんした覺えはござんせぬ。九兵衞さん、そりやアお前、あんまりでござんすぞえ。
九兵　あんまりとは、うぬらが事だワ。五十兩の金の云ひ掛けをする、この大泥坊めが。
　ト突きのめす。半七ムツとして
半七　イヤ、大泥坊とはこなたの事よ。よくマア硯を騙つたな。
九兵　ナニ騙つた。この正直な九兵衞さまを、泥坊とは、この大騙りめが。
次郎　はん藏が横に寢るワ。こんな野郎は、いつそ斯うして。
　トくらはせる。
九兵　オヽ、斯うして〳〵。
　ト九兵衞、金兵衞兩人して、半七を散々に打擲する。最前より後に折非彌市、出かゝり居て、この時ズツと出て、金兵衞を見事に投げ出し、九兵衞を突き退け、半七を圍ふ。
半七　ヤア、其方は彌市ではないか。

彌市　半七さま、久し振りでお目にかゝりました。何は兎もあれ、さうした形でお出でなさるは、御樣子がござりませうな。
半七　サア、爰に居るは、わしが國の與惣兵衞どのゝ娘、この半七と云ひ交して國を駈落ち。其方を便りに來たれども、所知れねば其處此處と、さまよふうち、あの金兵衞、賴もしづくの世話と思ひの外
はな　三月四月の飯代に、大切な硯を質に入れて、金才覺と思ひの外、金は取らずに硯を渡し、剩さへ盜人騷りと今の打擲。
半七　これも二人が親々へ、苦勞をかけた
半花　罰かいなア。
　ト兩人、ほろりと思ひ入れ。
彌市　ようござります〳〵。委細は後で、あらまし聞いて居りました。改めて申すには及びませねど、私しが親は彌平次と申して、あなたの內の奉公人。お目を掛けられ世帶を持ち、私しまで足手を延しましたれども、仕合せ惡く今の商賣。幇間こそ致せ、刀屋の御恩は忘れませぬ。これからお二人樣のお身の上は、私しがお世話いたしまする程に、横合ひから要らざる世話は賴みませぬぞ。
九兵　そんなら半七と云ふ奴は、彌市が主筋で、世話をすると云ふか。今まで吉原へ行く度に、呼ばない事はないが、おれが惚れて居るおたかめと、色と云ふ事を先刻聞いてから、今まで遣つた祝儀が惜しくなつたわい。シタガ、世話をすると云つても、この九兵衞が取つた質の理窟ばかりは、口出しは出來まい〳〵。
彌市　そりやア私しが知らぬ先の事。どんな品玉を遣はつしやりましたかと、蔑すんで居るばかりサ。
金兵　飛んだ處に足があつて、あの二人を引取ると云ふからは、おれが方の飯代を、方を付けて、連れて行きやれサ。
彌市　そりやアハヤ、此方も覺悟の前サ。見ず知らずの金兵衞どのが世話をしたからは、その位の事は持つて來さうなもの。して、その飯代の額はな。
金兵　食ひ扶持小遣ひ引ッ括めて、二十兩に負けて置かうワ。
彌市　御時節柄にやア高いものだが、汚なびれて値切られもしまい。ようごんす。シタガ、わしも道樂商賣、遊び金と云つちやアないから、遣りは遣りますが。

金兵　待つてくれろと云ふ事か。
彌市　四五日のうちに、拵らへて遣りませうわサ。
金兵　否だ。ならない。盗人の晝寐も、當がなくちやアしないとやら。折角金にしせうと思つた、あのお花を引ツ離される事だもの、一時でも待たれない。いま寄越しやれ。
彌市　サア、今と云つちやア。
ト當惑する。
金兵　金はないのか。金を突かにやア渡さないぞ。
彌市　サア、それは。
金彌　サア〱〱〱。
金兵　どうだ〱。
ト下座より大黒屋才兵衛、出て來り
才兵　彌市さん、その金、わしが貸しませう。
彌市　エヽ、こりや才兵衛さま。そんならお前が、その二十兩を。
才兵　サア、差詰まつて、男の立ち憎い場と見て、日頃懇親のこなさん、聞捨てにもならない。貸しは貸さうが、知つての通り、わしも喧ましい親の有る身の上。僅か二十兩の金なれど、こりや斯うしてもらひたい。あのお花どのとやらを、マア當分、藝者に抱へた分で、金を借りてこなさんの顔を立てた上、ハテ、金さへ出來たら元金で、いつでも證文は遣りませうわサ。
彌市　それはマア、有り難うござります。お花さん、今お聞きの通りのこの體裁。ちつとのうち得心して、この場の顔を立てちやア下さりますまいか。
はな　そんならわたしは、主の處へ、藝者奉公に行くのかいなう。
才兵　ハテ、なんの譯道のつかぬうちに、商賣に使ふものでごんすか。よしんば、金が長びいて出したところが、吉原の藝者は客に嫌味はごんせぬ。當り前の座敷へ勤めてくれたなら、ハテ、色があるなら約束して、揚屋町の裏茶屋か、新道の茶屋にでもしたがよい。見て見ぬ顔で商賣づく。藝者を抱へる親方なんざア、世間ぢやア閻魔のやうにも思つて居るが、そりやモウ千差萬別、中にや地藏親方もございすわな。
はな　成る程、人の目顔を忍んでなりと、主にさへ逢はれる事なら、あなたの内へ遣つて、顔を立てゝ下さんせいなア。
彌市　それもこちらの才覺次第。ちつとのうち、辛抱して

下さりますか。

はな　アイ。

ト思ひ入れ。

才兵　オヽ、得心ならば、ソレ二十兩、早く方を付けさつしやい。

ト金を出して渡す。

彌市　左樣ならば、お借り申すでござりませう。

ト受取つて檢め

サア、金兵衞どの、お二人の飯代、望みの通り二十兩、改めて受取らつしやい。

金兵　受取らないでどうするものか。

ト取つて算へて見て

オヽ、慥かに受取つた。

ト懷中する。

彌市　金を取つたからは、もう二人に云ひ分はあるまいがな。

金兵　云ひ分ない……ドリヤ、そんなら行くべいか。

ト行きにかゝるを彌市、留めて

彌市　金兵衞、待ちやれ。江戸不案内の、このお二人を引摺り込んで、賴もしづくの惡い計らひ。その上、半七さんを人中でぶつたぞよ。その云ひ分はどうするのだ。

金兵　ヤ。

ト愕り思ひ入れ。

半七　オヽ、彌市、好い所へ氣が附いた。わしやモウ、腹が立つて／＼ならぬわいなう。

彌市　サア、ようござります／＼。私しも人樣の機嫌を取る商賣、大概な事は堪へもしませうが、これぱつかりは。

金兵　どうする。

彌市　斯うするわえ。

ト煙草盆にて金兵衞の眉間をくらはせる。金兵衞、アツと額を押へて倒れる。彌市、金兵衞を引きつけ

ソレ、半七さん。

ト半七に打てと云ふ思ひ入れ。半七、怖々くらはす。

金兵　うぬ、野郎め、ぶたしやアがつたな。それぢやア濟まないぞ。

彌市　濟まないと云つて、どうする。

トまた立ちかゝる。この時、彌市、慄へつくゆゑ、皆皆これを見て思ひ入れ。

半七　コレ彌市、どうぞしやつたか。

彌市　なぜか無性に寒氣が致して、一向身内に覺えがない程でござりまする。

はな　あのマア、慄へさんす事わいなア。

才兵　ほんに、大分顏の色に顯し。アヽ、大方こりやア瘧かも知れぬわえ。

金兵　野郎め、濟まないぞ〳〵。

ト立ちかゝる。

才兵　濟まぬと云うて、病人を提へて。

金兵　病人でも唐人でも、頓着はないわえ。

トまた立ちかゝるを、才兵衞引き廻して

才兵　待たつしやい。病人を相手に、兎や斯う云ふは、こなさんでもごんすまい。それでも云ひ分が云ひたくば、この大黒屋才兵衞が聞きませうか。

金兵　サア、そりやア。

九兵　コレサ〳〵金公、何を云ふも病人だ。この出入りは才兵衞どのへ預けて、マア、歸つたがよい〳〵。

才兵　これぢやア所詮歩いちやア。

ト奥へ向ひ

オイ〳〵、駕籠の衆や〳〵

駕屋　ハイ〳〵。

ト駕籠を舁き出て來る。

才兵　おれが直歸らうと思うて借りて置いたが、このお人を乘せて下さい。

駕屋　畏まりました。飛んだ熱だ。

ト彌市を介抱し、駕籠に乘せて垂れを下ろす。

九兵　おれも馬道まで用がある。金兵衞、何も云はつしやるな。

才兵　オイ、その駕籠の衆、その駕籠は、藏前まで遣つて下さい。此方は柳橋から船で行く。

駕屋　畏まりました。

才兵　そんなら半七さんとやら、この娘は、わしが連れて行きます。彌市どのから、人を寄越して引取るまで、ちつとのうちは別れてございやし。

半七　ハイ〳〵、お頼み申します。

トお花、思ひ入れ。

才兵　なにサ、氣遣ひしなさんすな。風も引かせる事ぢやない。

はな　そんなら半七さん。

半七　お花。

ト思ひ入れ、才兵衞、中に入り

才兵　サア、行きませう。

ト辻打ちになり、駕籠を先へ立てゝ才兵衛、お花、九兵衛、向うへ入る。金兵衛、最前より倒れて居て、この時、起き上がり、思ひ入れあつて

金兵　あの駕籠は藏前通り。ソレ。

ト行かうとするを、半七、留めて

半七　待つた、金兵衛、今の樣子、心元ない、やる事はならぬ。

金兵　エヽ面倒な。放しやアがれ。

ト立廻りのうち、奥より太助出て

太助　委細は聞いた。行きやれ。

金兵　合點だ。

ト金兵衛、逸散に向うへ入る。舞臺は半七、太助、立廻りよろしくあつてとまる。時の鐘にて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、上の方、橋の袂を半分見せ、後ろお藏の矢來、徒藪、下の方に番小屋、この飾りつけよろしく、時の鐘にて道具とまる。

ト雨車の音、時の鐘になり、向うより、唐犬のお吉、矢張り以前の形にて出て來り

きち　親判をつかせてから、兄貴と立てゝ置くあの金兵衛、甘口とは見られないが、口惜しいのは女だけ今日の體裁、あの町人の手前から、引ッ奪つた金を捲き上げると云ひ、その上おれが舊惡、三島明神の造營金、盗んだ事を訴人もしさうな面構へ。彼奴を生けて置いちやア、枕を高く寐られぬわえ。慥かにこの道へ來るは必定。何處ぞへ隱れて。

トあたりを見廻し

オヽ、幸ひ、あの番小屋。それ〳〵。

ト本舞臺へ來り、番屋を叩き

モシ、ちつと頼みやんす。

ト戸を明けて見て

ハア、時廻りにでもうしやアがつたと見えた、ちつとのうち、ソレ。

ト番小屋の内へ入る。直ぐにてんつゝになり、時の鐘にて、向うより、以前の駕籠、提灯をつけて擔いで出て來る。引下がつて金兵衛、走り出て來て

金兵　オヽイ〳〵、その駕籠待たう〳〵。

ト舞臺にて追ひつき

中に居るなア彌市だな。

駕屋　左樣サ。才兵衞さまのお頼みゆゑ、急いで行きます。

トまた舁き上げようとする。

金兵　待ちやアがれ。うぬら、行かうと云やア叩ツ挫くぞ。

ト息杖を引ツ奪り、振り廻す。これにて駕籠舁き、逃げて下座へ入る。金兵衞、直ぐに駕籠の垂れを上げて彌市を引き出す。

彌市　誰れだ〳〵。

ト苦しき思ひ入れ。

金兵　オヽ、おれだ。金兵衞だ。

彌市　その金兵衞が、病人の彌市をこづき廻して、どうするのだ。

金兵　知れた事だ。先刻の仕返し、覺悟して、うしやアがれ。

彌市　すりや、どうでも存分に。

金兵　くどいわえ。

彌市　手出しのならぬ病と知つて、後を追ひ駈け、仕返ししようとは、卑怯な奴な。

金兵　折角金にせうと思つた、お花を捲き上げられた腹癒せ。

ト引寄せる。

彌市　イヤ、半七さまの行くへを見ぬ上は、滅多に死なぬ。例へ病に苦しむとも。

ト立たうとして、がつくり倒れる。

金兵　うぬ、足腰も立たぬ態をして、手出しをすりやア、斯うして。

ト息杖にて打つてかゝるを、彌市、苦しみながら支へる。三味線入りの合ひ方になり、時の鐘に立廻り、いろ〳〵あるうち、彌市苦しむ。金兵衞は彌市を存分に息杖にてくらはせる。彌市、氣を失なふ。この立廻りのうち、提灯の灯消える。

脆い奴だわい。いつその事に。

トまた息杖を振り上げる。お吉、この時、番小屋より出てこれを留める。

うなア誰れだ。

きち　一味のお吉サ。

ト金兵衞、恟りする。

コレ兄貴、先刻から待つて居たよ。

金兵　ムウ、おれを待つて居たと云ふは。
きち　先刻の金、こなさんに捲き上げられちやア、あんまりおれが薄ツぺらだ。サア、返しておくれ。
ト金兵衞、思ひ入れあつて
金兵　いゝワ。われがそれ程欲しがる金。ソレ。
ト金を投げる。お吉、取上げ
きち　お忝け。
ト金を算へる。
金兵　ドレ、代官所へ行くべいか。
きち　代官所へ何しに。
金兵　知れた事よ。これまでのわれが舊惡、三島明神へ忍び込んで、造營金を盜んだ奴は、唐犬のお吉でござると訴人して、褒美の金を貰つてこの損を埋めにやアならない。
トこの臺詞のうち、お吉、足にて探り、落ちてある脇差を探り、取り上げ
きち　コレサ、兄貴、なんの事だ。その三島の造營金も、おれ一人の仕事ぢやアない。こなたも同類、そんなら何も其やうに云ふ事はない。これから、兄弟仲よくして。
ト思ひがけなく金兵衞を突き殺す。金兵衞アッと苦しむ。誂らへの鳴り物になり、お吉、存分に抉り殺してしつかりと止めを刺し、懐中より紙に包んだ金を引き出して
ムウ、二十兩、面白い。飛んだまんが直つて來たわえ。併し、困るのは造營金、一兩々々刻印があるゆゑ遣ひ憎い。どうぞ面白く遣ひやうがありさうなものだが……オオ、それはさうと、惚れて居る彌市さん、斯うしては置かれぬ。
ト川の水を含み、彌市に呑ませて呼び生ける。彌市、心付き
彌市　お吉さんか。
きち　彌市さん、氣が付いたかえ。
ト立廻りよろしく、　しやぎり。　ひやうし幕

大切

吉原仲之町の場
揚屋町彌市内の場
吉原土手仕返しの場

浄瑠璃「全盛操花車」富本連中

役名――櫻井新左衞門。奴、角助。男藝者、折井

多之助。同、都羽六。同、折井京十郎。同、富士治德。同、じやこ吉平。若い者、伊八。西野屋九兵衞。醫者、出杉高慢。道具屋、太助。大黑屋才兵衞。仲居、おちよ。藝者、おたか。同、お花。同お千賀。同、お小夜。同、お照。濱名屋半七。唐犬のお吉。男藝者、折井彌市。

本舞臺、三間の間、軒暖簾に青簾を巻き上げ、下の柱に懸け行燈、上の見切り、紺の長暖簾、何れも濱名屋と書いてある。正面障子、神棚立派に取りつけ眞鍮のなまり燈籠、よく彩色、張り壁、上緣に毛氈敷き、雪洞付きの燭臺三丁、煙草盆、見付け柱より下の方に丸太のませを結ひ、全盛遊びと書きし高張り提灯、揚げ幕の際へ屋根付きの門を取りつけ、淸搔渡り拍子にて幕明く。

ト舞臺にお千代、赤前垂れの仲居にて緣に腰掛け、若い者一人立ちかゝり、侍ひ町人の俄見物の仕出し、大勢出て來る。この中へ櫻井新左衞門、田舍侍ひの形、角助草履取りにて付き添ひ舞臺へ來る。此うち花道より半七、料理人の拵らへにて提げ籠、打鍵を持つて出て來る。新左衞門に突き當り、仕出し別れて入る。

半七　御免なされまし／＼。

ト行きにかゝるを角助留め

角助　武士に突き當つて御免で濟むかえ。目玉は看板に付けて置くのか。

半七　ヘイ／＼、餘りに混み合ひまするゆゑ、思はぬ粗相、眞平御免下さりませ。

角助　イヽヤ、濟まない／＼。

新左　ヤイ／＼角助、群集の中、免してやりやれサ。

半七　これは／＼、お武家方のやうにもない、御料簡、有り難う存じまする。

新左　オヽサ、早う行け／＼。

半七　ヘイ／＼、有り難うございまする。

ト行かうとする。

新左　コリヤ／＼、若い者／＼。

半七　御用でございまするかな。

ト立ちとまる。

新左　其方は茶屋の者か。

半七　ヘイ、卽ち爰の濱名屋の、料理番でございます。

新左　それは幸ひ。身共は當所不案內。茶屋もなければ、

あそこ爰に立つて俄を見物しても、混み合うてどうも見られぬ。其方が內へ行ても大事あるまいか。
半七　大事ないどころではござりませぬ。お出で下さりますれば、勿怪の重寶、有り難う存じまする。
新左　オヽ、それは幸ひ。
半七　サア、お出でなさりまし。
ト舞臺へ來る。
若者　コレ、半七どの、玉屋と扇屋へ送り物が遲いと云うて、お勘もお辰も迎へに行つたわな。
半七　サア、なんであらうと思つて急いだけれど、俄の最中で、通りは押し切られず、やう〳〵と來る道で、お侍ひ樣に突當つて。
千代　叱られさんしたかえ。
半七　叱られやうと思つたところが、われが內へ行つて、俄が見たいと仰しやつて、お連れ申して來たわな。
若者　サア〳〵、お上がり遊ばしませ。もそつと早うお出で遊ばしまするとようござりました。もう、餘ツぽど通りましてござりまする。
新左　オヽ、この頃に又、暮れ前から見物に參らう。今日は少し遠慮勝ち。忍んで見る所があらう。

半七　あの中の間へお連れ申すがよい。
新左　コリヤ〳〵角助、其方は傾城町を見物して來るがよい。
角助　ヘイ〳〵。
ト向うへ入る。
新左　これは思ひがけない遊山。許しやれ。
若者　サア〳〵、あれへお通りなされませ。
ト暫く右の鳴り物にて、若い者は新左衞門を連れて奧へ入る。
半七　落ちつきのお吸ひ物が出るであらう。ドレ〳〵、一滴酢でも結びかけようか。
ト祇園囃子になり、新七、奧へ入る。花道より九兵衞、羽織衣裳の形。若い衆、船頭の提灯を提げ、高慢序幕の形にて、風呂敷を抱へ出て
九兵　今夜も賑やかだの。
高慢　なか〳〵左樣でござい酢の干物。
太助　和尙はもう、洒落かけるの。
九兵　熊吉が居合ひは出來やした。
ト舞臺へ來て
高慢　何にしろ、一杯呑みの壽司樂としやせう。

ト皆々舞臺へ上がり、これより酒宴、誂らへの鳴り物になり男藝者折井多之助、藝者お小夜、吉原雀の形にて出て來り、所作一くさりありて下座へ入ると、直ぐに囃子事になり、向うより男藝者折井京十郎、立烏帽子、素袍小さ刀、男藝者ぢやこ吉平、狂言袴、法被、石の帶、大名と太郞冠者の拵らへにて出て來り

京十　罷り越したる者は、三ケの庄の大名でおりやる。日頃歩みを運びし大磯の虎御前を請け出いて、宿の妻に致さうと存ずる。ヤイ〳〵、太郞冠者、居るかやい。

吉平　ハア、御前に候ふ。

京十　汝を呼び出しよる事、外の事でもおりない。大磯の虎を身請けせうと思ふが、なんとであらうぞ。

吉平　一段とよろしうござりませう。

京十　然らば汝は、今より大磯へ參つて、請け出いて參れ。

吉平　畏ましてござる。

京十　早う行け。

吉平　ハア、。

ト立退き

いま仰せ出さるゝや否や、身請けせいとは餘り性急なる殿でおぢやる程に。併し、頼うだ人の御用なれば、今より大磯へ行かずばなるまい。ドリヤ、參らう。エイ〳〵エイ。

ト思ひ入れ

ア、、どうぞ、行かいで濟む事がありさうなもの……オ、、あるぞ〳〵。

ト立ち振り。

太郞冠者、罷り歸つてござる。

京十　念なう早かつた。虎御前を請け出いて參つたか。

吉平　仰せの通り、召連れてござりまする。

ト懷中より蠟燭を出す。

京十　その蠟燭が、なんで虎御前ぢや。

吉平　ハテ、わしも流れの身ぢやわいなア。

京十　これは如何な事。

吉平　サア、お通しなされい。

京十　これは如何な事。

ト兩人、下座へ入ると、誂らへの唄になり、花道より男藝者都羽六、同じく富士治德、辨天大黑の拵らへにて頰冠り、治德は一本差しの拵らへに、槌と樒の枝を差し、珠數を持ち、合ひ傘の道行にて出て來り、花道

にて、いろ〳〵振りあつて、兩人舞臺へ來り

羽六　戀と云ふ字に引かされて、浮かれ寄る身の旅ならて、お前と一緒に死ぬ覺悟。モウ、此やうな嬉しい事はないわいなア。

治徳　その志しの不便さゆゑ、爰までは來たけれど、思ひ廻せば大黑は、黑豆飯や神酒供へ、どうぞ千萬兩の富限にしてと願掛けられ、その才覺が出來ぬゆゑ、七福仲間の顏汚しと、斷念もせうが、其方は後を守つてたも。辨天さらばぢや。

ト行かうとするを羽六、引留め

羽六　そりや聞えませぬ大黑さん。お前ばかりが福神で、この辨天は惡神か。たつた一文三文で、八百萬の願掛けられ、拜まれしは同じ事。參詣は人目の關、鈴振る巫女や神主の、目顏を忍び、戀と情の二股の、わたしや大根を絕つたぞえ。お前に似たやうな、背丈はずんぐり色黑で、こぼん娘の嬰兒生んで、抱いて子待がわしや願ひ。それに一人歸れとは、そりやあんまりぢやわいなア。コレ申し。

トまた唄になり、ちよつと振りあつて、唄の切れに羽六、治徳に取りつきて泣く。治徳、羽六の脊中を撫でて思ひ入れ。

治徳　あやまつた〳〵。男の甲子と云ふものは、むごいものぢやと思やらうが、どうぞ其方の己待をば、助けて置きたいばつかりぢや。コレ、堪忍しや〳〵。

羽六　そんなら一緒に、死んで下さんすか。

治徳　オイナウ。

羽六　嬉しうござんす。大黑さん。

治徳　辨天、おぢや。

ト行かうとする。

イヤ、どうもおりや、死なれぬわいの。

羽六　そりや、何ゆゑでござんすえ。

治徳　どうもおれは、疵とがめをする性ぢや。

羽六　そんなら川へ身を投げて。

治徳　水心を知らぬわいなう。

羽六　さうして、どうせうぞいなア。

治徳　堂を出たこそ幸ひ、これから江戸の尾張町へ行て、商賣をせうわいの。

羽六　成る程、蛭子屋ぢやの、布袋屋ぢやのと、一人でさへあの繁昌。お前とわたしを、一緒に暖簾へ染めたなら猶々繁昌するであらうわいな。

治德　いつそもつと慾張つて、家名は七福屋とせうわいの。

羽六　モシ、待たしやんせ。お前は大黑、わしや辨天。たつた二福でござんすぞえ。

治德　ハテ、商賣が呉服店だ。

羽六　ちつとも早く大黑さん。

治德　辨天、おおや。

ト渡り拍子になり、治德、羽六が手を引いて下座へ入ると、これより俄二つ三つあつて、渡り拍子になり、花道より大黑屋才兵衛、袴、茶屋行事にて、拍子木を持ちて出る。後より淨瑠璃太夫、袴にて淨瑠璃本を持ち出る。この後より藝者おたか、同じくお千賀、同じくお花、廣袖、着流しの上へ半纏、片肌脱ぎかけ、晒しの手拭を鉢巻きし、ふか養、男髷、黑骨の扇子白地に俄と云ふ字を朱にて書き、結構なる花車に赤白綱交ぜの太綱を付けて引いて出る。此うち三味線兩人、舞臺の下の床儿に住うて、才兵衛、拍子木を入れる。

淨瑠璃〽さても見事なえ、秋の錦の振手姿、今を盛りの花ぐるま、引けや先綱、よい中の綱、色にや手頃のきほひ肌、十七八や十六の、獅子の木遣りに引かへて〽ヤア〆めろやれ、よいやさよいこれはのさ、よいさこれはのさよいやさ〽よい〳〵、ヤレわつさりと〆めかけやれ、これこれはな、こいへをしよ、と云うちやアなんぐりかけ、なんでも此方の方々、やんれ打て〳〵、打つたるものには、なに〳〵〽鼓ヤレ太鼓に鞨鼓に手拍子が、碁双六がお百姓、うしろぼたでんぼたな、與三郎がおこめがちきねなきぬたかるたには、なんれうりんがこつくいか、鐵の三味線、舍人のぶちがな鹿の角、しよこ〳〵打つのがけんびき、まだも打つのが、かおやが。

たか　ヤレ、てつこの業。

〽コレ、ちん〳〵かららり、がつちの音、打つたる狸の腹鼓、正月が節分の、豆とてな、ぶり〳〵蔭撒きだま七種。

千賀　ヤレ、なじよ〳〵。

〽押し寄せ撥き寄せ、ほつとり〳〵叩いた、なく〳〵ちやうさせぬ、いとしけりやこそ、ちつくりおいとを叩いた、どつこい、やれこれ、手が外れたか、堪るがもんではないによ、よい〳〵よいやな〽よい〳〵よいやな、さうよが〆めかけ中綱〽えんやアえんや、これはあれはさのえ〽え丶やるよ〽初牆の連れて來つれて染めて濃き、

千種の野邊の花道を、浮きに浮かれて勇み來る。

ト舞臺へ來る。

〽手活けの花を床の山、梅に鶯またせて置いて、酒に一夜の仇心、松に小藤もうら紫の、誰れにひぞりしかほよ鳥〽いつか紅葉のもみうつろひて、はかなき戀は朝顏の、その日暮らしの女夫仲、すいな水仙、室に寐て、椿と交す手枕は、可愛らしいぢやないかいな。

ト此うち下座より、半七、文を持ち走り出て來り

半七　モシ、おたかさんえ。揚屋のおきよさんが、きつとお前にこの文を、上げてくれと仰しやりました。

トおたかに渡す。

たか　なんでござんす。アノおきよさんが、急に屆けてくれとは、なんぞ氣遣ひな事ぢやないか知らん。

トおたか、文を見て恟りする。お花は半七に思ひ入れする。これにて太助立ちかゝり

太助　エ、〳〵、西九さんの御上覽の所へ、なぜ俄を留めたのだ。こりやア一番、聞かにやアならねえわえ。

皆々　それ〳〵、どうだ。どう云ふ理窟だ。

才兵　モシ、どう致したものでござります。何を措いても西九さまの、お目にかけないでなりませうか。サア〳〵、皆やらないか。

トおたか心付き、文を懷中して

たか　ほんに、お見外れ申しまして、まだ御挨拶も致しません。西九さん。

女皆　ようお出でなされました。

ト口々に云ふ。

九兵　オヽ、いつも〳〵、打揃うて奇麗な事だぞ。

千賀　その文は、なんの用でござんすえ。

たか　彌市さんの瘧が大分惡いに依つて、早うしまうて來いとの文。わたしや、ちやつと行かずばなるまいわいなア。

千賀　そりやア尤もぢやけれど、いま行かしやんしては惡いから、わたしが呑み込んで居る程に、爰をしまうて、合點かえ。

たか　アイ。

ト此うちお花、半七が側へ寄り

はな　お前、内が忙がしさうなに、何處へ行て居やしやんしたえ。

半七　内に居たがあの文を、おたかさんに屆けてくれろと賴まれたから、裏から廻つて爰へ來たのサ。

はな　エヽ、三丁目へ廻つて來たと云はしやんせ。
半七　久しいものだ。
　ト この臺詞を拍子木にて消しながら
才兵　それ。
千賀　それ〳〵〳〵。
皆々　よいやさ。
〽四季の眺めとなる花にさへ、じつと浮氣な八重一重、戀の所謂もさま〴〵に、あるが中にも仲の町、廓の櫻根曳きして、戀の逢瀬も我れながら、めぐりくる〳〵くるくると、殊に嬉しき廓の花、眺めに飽かぬ風情なり。
　ト この文句の切れぬうち、また下座より若い衆一人出て來て、おたかに囁く。おたか、呑み込み、お千賀に、もう行くと云ふ思ひ入れ。お千賀、引き取つて、早く行けと云ふこなし。好い程におたか、ツィと下座へ入る。淨瑠璃切れると、才兵衛、拍子木を打つ。渡り拍子にて才兵衛先に女形太夫、皆々下座へ入る。皆々、淨瑠璃の切れに、いろ〳〵褒める事よろしくあつて
皆々　成る程、きついものだぞ。
九兵　あの勇み姿を見ちやア、もうどうも堪らない。ちよつと呼んで來てくりやれ。

太助　もう、俄はしまひであらう。外から口のかゝらぬうち、ちつとも早いがいゝぜ。
半七　畏まりました。
　ト 半七、急ぎ下座へ入る。
高慢　なんでも俄の內では、狂言と花車、双六と治德が辨天と大黑の道行が、三幅對でございます。
九兵　治德を呼んで、新らしい話しでもさせようか。
太助　イヤ、話しと云へば、彼の硯を持つて來ましたぞえ。
　ト 懷中より硯を出す。
九兵　成る程、此方へ寄越してお來やれ。
　ト 取る。
若者　モシ、そりやア何でござりますえ。
九兵　イヤ、こりやア鶴屋の彼のが所へ、約束して持つて來た、高島の硯サ。
若者　口舌の種とは。
ちよ　これにも困るよ。
　ト 流行り唄になり、下座よりお花、以前の形にて、半七、三味線箱を提げ、口舌をしながら出て來り
はな　今晩は。ようお出でなされました。

半七　永樂屋と巴屋から、口のかゝりましたを、無理に貰つて、箱まで持つて參りました。なんとマア、きついものでござりませうか。
九兵　きつい筈サ。お主と譯のあるお花だものを、ナニ、外から呼びに來て行くものか。
半七　又お嬲りなされますか。いつぞや兩國で、あれ程仰しやつたら、モウよささうなもの。云ひづくにすりや、云ひ分はたんとあれど、成り下がつたこの身の上。何にも申しませぬ。
はな　所詮、あの彌市さんの居やしやんせぬうちは、お前の云ひ條は立たぬ程に、もう、何にも云はぬがよいわいなア。
九兵　又しても半七が贔屓か。それがおれが氣に食はねえ。
高慢　もう、切れてしまつたなら、大概に匙を投げるがよい。素寒貧の配劑で、癒る病氣とは見えぬわい。
太助　それ〳〵、元は九兵衛さまと、肩を並べた身上でも今は勘當、三文の工面も出來まいが。
半七　オヽ、その出來ぬやうには誰れがした。あの松蔭の硯を、二人寄つてかゝつたゆゑ。

九兵　又そんな事を云ひ出したか。この西九は腹ッぷくれ、五十兩や三十兩の端下金は、つい煙草盆の抽出しにもある。そんな怖い事をしやう筈がないワ。主が金に困つて、ヒイ〳〵云ふのを聞いて、涙脆いがおれが常、貸してやりたくつても、緣のない者に、只貸すのもおかしなものと思ふ折節、この太助が居合せて、硯を此方へ取るがよいと、云つたをしほに五十兩、松蔭とやら松川とやら、なんだか知れもしない硯と金を引替へに、お主が手に五十兩慥かに受取つた、月が切れたら流してもよいと云ふ證文を、おれが見る前で書いて渡したぢやアないか。もう月が切れたから流れるワ。
半七　エヽ、もう流れますか。
九兵　月を越せば流す約束を、わりやもう忘れたか。
半七　それぢやと云うて、先月二十八日の事。今日でやうやう十二三日にしかならぬものを、月が切れるとは、あんまり。こりやどうでも彌市どのに。
九兵　逢ふならおれも一緒に行かう。
若者　旦那がお出でなら、提灯を持つて參りませう。
ト若い衆、奧へ入る。
九兵　揚屋町まで、ナニ提灯が要るものだ。半七、サア、

履物を直せ。
半七　ムウ。
　ト思ひ入れ。
九兵　なぜ默つて居るのだ……ア、、ムツとしたな。コリヤヤイ、以前は以前、今は雇ひの料理人、一分宛でも祝儀をくれる、この九兵衞さまはお客様だワ。履物を直せと云つたのが、癪に障るのか。
　ト半七、無念のこなし。お花、見兼ねて直し
はな　お前さんのお草履は、これでござりますかえ。
　ト出す。その手を取つて
九兵　エ、、お主が知つた事ぢやアない。なんぞと云ふと贔屓をするが、蟲に障る。打ッちやつて置きやれ〳〵。
　ト引ッたくる拍子に、この裏付け、後の障子の内へ入る。これに心付かず九兵衞、半七を引きつけて
ヤイ、野郎め。なぜ九兵衞さまの御機嫌を取らないで、なんで盗みをひろぐのだ。
半七　九兵衞さま、云ひたい儘にこの半七。
はな　何を盗みを、しましたぞいなア。
九兵　知れた事だ。おれがお金でお呼び遊ばしたあのお花を、わりやアなんで迎ひに行つたのだ。道々であだつきながら、道行とうしやアがつたぢやないか。
高慢　左様サ。手を出して盗むばかりが泥坊ではござりませぬ。人の揚げて置く藝者を、金をも出さずに弄むと云ひ
太助　見す〳〵渡した五十兩、受取らぬと云ふ大泥坊。彌市が内へ引摺つて行つて、白い黒いを付けるのだ。
はな　マア〳〵、靜かにしなさんせいなア。
　ト取りつく。
太助　エ、、邪魔になる。退きやアがれ。
　ト引き退ける。
九兵　サア半七、キリ〳〵うせう。
　ト引き立てにかゝる。この時、障子の内にて
新左　九兵衞待つた。待ち召されい。
九兵　なんだと。
　ト振向く。
新左　お知り人になりませう。
　ト合ひ方になり、新左衞門、杯に以前の裏付けを載せて持つて來る。
ちよ　こりやお侍ひ樣。
九兵　近付きにならうとは、なんぞ用でもござりますか

な。
新左　如何にも。
九兵　して、その御用は。
新左　これでござる。
　ト草履を見せる。九兵衛皆々、見て
皆々　ヤア、。
　ト悧りする。
新左　奥で楽しむ一人酒、相手欲しやと存ずる折柄、お肴のこの草履。イヤ、忝なうござる。
九兵　ア、、モシ〳〵、こりやア九兵衛が一生の粗相。
高慢　誠に珍事ちうやう、言語道断。心火が昂ぶつて、逆上いたしましたと見えまする。
太助　左様々々。どうした表裏の粗相やら、側に居りました私しども〻存じませぬが、根を訊して見れば皆酒の業。
九兵　それ〳〵、あの者が申す通り、草履が酒に酔ひまして、夢中になつてお座敷へ、参りましたと見えまする。もうこれからは、キツと禁酒いたさせませう程に、どうぞ御免。
新左　草履が酒に酔うたなど〻は、人をきよくるたわけ者めが。例へ餘人の越度でも、上客はてまへでないか。斯やうな事が嫌さに間を隔て〻、獨樂の杯中へ、むさい穢ない泥草履を、打ち込んだる西野屋九兵衛。許し置かれぬ。眞ツ二つ。
　ト九兵衛、思ひ入れ。
と申すは刀の手前。こりやどうも表向き、場所が悪い、水に致す。
九兵　そんならアノ、御料簡を。
新左　ハテ、夢と思へば事は濟む。その代りにおてまへに、ちと承はりたい儀がござる。
九兵　ヘイ〳〵、そりやモウ何なりと。
新左　最前あれにて聞けば、この若者が何やら質物に遣はし、その金子借り受けたの、イヤ受けぬのとの爭ひ。そりやハヤ、受取らぬにもせよ、肝心の證文があつては、致し方はないと申すもの。
九兵　左様サ。金子を受取りましたればこそ、證文を寄越しました。モウ〳〵、あ〻見えても、大抵太い奴ぢやござりませぬ。
新左　ムウ。太いとお云やるのは、おてまへ方の事か。
九兵　イエ〳〵、あの者が。

新左　默らう。盜人猛々しいとやら。盜みひろいで世を渡る玆な人でなしめが。
太助　こりや聞き所。なんでおいらが
三人　盜んだな。
新左　取り置いた質物を、なぜ流さうと申した。
九兵　一月が切れたから流すのだ。
新左　サア、それが強請り騙りではあるまいか。總じて質物は八ヶ月、どう／＼ならば六ヶ月と、こりやモウ何處の浦も同じ事。その質物は先月二十八日の事なれば、未だ半月、一月は經たぬ品。なぜ流れるとは申したぞ。
三人　サア、そりやア。
新左　他人の要らざる事ながら、聞き棄てられぬ無理非道。盜人騙りと申したが誤まりか。
三人　イヤ、御尤もでござります。
新左　尤もと思ふなら、あの若者に、手を下げて詫びを致せ。
三人　エヽ。
ト思ひ入れ。
新左　最前申した事は間違ひ、六ヶ月過ぎませぬうちは、流しますまいと詫び言いたせ。
九兵　流しさへせねば、あやまるまでには。
新左　嫌と申さば草履の返報。三人ともに、座は立たせぬぞ。
ト刀を取り上げる
九兵　アヽ、コレ申し、忙しない。誰れもあやまるまいと云ひもせぬものを。
ト三人、下へ下がり、九兵衞、思ひ入れして
コレ、半七……さん、先刻一ヶ月で、流れると云つたはみんな嘘。誠は六ヶ月、まだ百五十日程間があるから、隨分氣を付けて、丈夫に金を工面するがよい。
高慢　流すまいと云ふは、この高慢が證人。
三人　段々あやまり入りました。
ト半七に辭儀して、新左衞門に向ひ
九兵　お侍ひ様、これでよろしうござりますかな。
新左　オヽ、それ聞く上はモウ用はない。
太助　アヽ、有り難い。折角面白く醉つた酒を、手もなく醒ましたわえ。
高慢　コレサ、そんな野暮を云ひつこなしサ。何にも云はずに、奧座敷へ行きの山形としやせう。美しい髱を三組も呼びすぐつて、二番煎じを吞み直しサ。

太助　醫者さま。
九兵　左樣は古し〳〵。
太助　いゝや〳〵お先へ
高慢　おきやアがれ。
九兵　お侍ひ樣、これに緩りと。
　ト合ひ方になり、九兵衞、太助、高慢、おちよ付いて
　奥へ入る。半七、思ひ入れあつて
半七　最前ちよつとお近付きになりましたお侍ひ樣、お馴
染もござりませぬ私しを、斯やうにお世話なされて下さ
りまするは、有り難いとも忝ないとも、お禮の申しやう
がござりませぬ。
はな　ソレイナア、あの中ゆゑ御挨拶も致しませぬが、御
深切なお心。ほんにモウ、あの九兵衞づらの憎さ〳〵、
あなたの御挨拶で、あやまつた時のその嬉しさ。いま降
る雨が晴れかゝり、俄の太鼓が參つたやう、嬉しうござ
んしたわいなア。
新左　お身達が、餘り心善しぢやに依つて、あの通りの無
法。なんのお禮に及ぶ事。
半七　イエ〳〵、キツとお禮を申す爲、あなたのお名を。
新左　イヤ〳〵、仔細あつて名は名乘らぬ。元を訊せば、
まんざら他人向きにもないお身達二人。彌市にも逢つて、
禮を云はねばならぬ者ぢや。
半七　ムウ。まんざら他人向きにもないと仰しやるから
は。
はな　慥かにわたしが云ひ號けの。
新左　新十郎が兄ならば、お身達二人を安穩では置かれぬ
……ぢやに依つて。
半七　お心あり氣な
はな　そのお詞。
新左　それと明かさずこの場で逢ふも。
半七　好い幸ひ。
新左　折井彌市が宅に、直さま參らう。
半七　御案內いたしませう。
はな　サア、お出でなされませ。
　ト唄になり、この道具ぶん廻す
　本舞臺。三間の間、上の方、障子屋體。向う暖簾口、
下の方、中銅壺の釜と、水瓶の蓋の上に手桶を載せ、
上流し、荒神棚に七五三、鷄の繪馬、燈明皿、正面
細戶、下に米櫃、棚に摺鉢、飯櫃、いろ〳〵懸けて

あり、下座の口へ路地の木戸を取りつけ、門口据ゑ物。爰に折井彌市、中月代、病人の拵らへにて、絹やつし褞袍、木綿蒲團綃の搔卷にて、大夜着に凭れて居る。二枚屏風を立てあり、藝者おたか、以前の儀の儘の形にて、鉢卷も矢張り其まゝ、片肌脱ぎかけ、七輪に藥罐を掛け、反古團扇にて煽ぎ立て居る。丸盆に茶碗、藥袋紙など取散らし、至極綺麗なる裏家の體。この飾りつけよろしく、トテチリにて道具とまる。

たか　彌市さん、今に藥が出來るぞえ。

彌市　イヤ、遅うても大事ない。今日は晝から京町が賑やかだの。

たか　あれは若松屋の二階でござんす。病人のあるのに心ないあの騒ぎ。ちつとマア、靜かにしたがよいわいな。

彌市　コレおたか、お主もマア、無理な事を云つたものだ。あれが矢ッ張り、お主やおいらが商賣ではないか。

たか　ちやと云うて、お前、一倍頭痛がしやせぬかえ。

彌市　イヤ、結句紛れていゝよ。

ト此うちおたか、藥を量りて茶碗へ移し、持つて參り

たか　サア、藥が上がつたわいなア。服みなさんせ。

彌市　皆のお庇で、今日は少しばかり影がさした。

たか　モウ、それでは落ちるでござんせう。最前俄の最中に、呼びに寄越しなさんしたゆゑ、飛び立つやうに思うたけれど、皆さんに氣兼ねして居たところを、あのお千賀さんが、後は好いやうにする程に、早う行けと、粹を通して下さんしたわいなア。

彌市　先刻髮結ひのお吉さんが、見舞ひに來た折が慄ふ最中。それで呼びにやつたのであらう。ナニ、今日は餘ッぽど氣樂が好いから、もうこの分ぢやア立つであらう。

たか　さうとは知らいで、わたしやモウ、大抵案じた事ぢやないわいなア。あの半七さんも今日は忙がしうて、一度も見舞はぬから、よう云うてくれと云はしやんしたにえ。

彌市　さればサ、おれが斯うして居ても、只案じられるは主の事サ。元はと云へばお主筋、どのやうにしても置き申したいが、折惡いこの體。あのお花さんにまで、苦勞を掛けると思やア、モウ、自烈たい程あせれども、譬への通り主と病。ア、何時癒る事だか知らぬ。

たか　お前、其やうにじれるのが惡いわいな。落ちさへすれば癒るもの。ちつとマア、足でも擦つて上げうかいな

ア。
彌市　イヤ〳〵、それより、ちつと爰を掃いてもらはう。
たか　ほんにモウ、日頃の奇麗好きも、煩らうては一向なものぢやわいなア。
彌市　それでもお主が、不自由な身で居ながら、毎日通つて、何もかもしてくれるので、何にも困る事はないが、座敷の片手間にこの看病は、さぞ大儀であらうと思つて、どうもそれが氣の毒だ。
たか　エヽ、お前もマア他人がましい。末は夫婦になる身ぢやもの。此方の體よりはお前の方が、大切ぢやわいなア。
ト蒲團を敷いて
サア、ちつと寐やしやんせ。
彌市　イヤ〳〵、今日は大きに力付いた。
たか　さう聞けば、看病の張合ひがあるわいなア。シタガ、肥立ち際が大事。ちつと擦つて上げうわいな。
ト彌市に寄り添ひ、足を擦り
病みつかしやんしてから、十二三日にしかならぬに、マアきつい瘠せやう。こりやお前、氣を付けさんせ。女子の思ひぢやぞえ。
彌市　ムウ。女の思ひとは、そんならアノ、てまへが呪ふのか。
たか　エヽ、お前もマア勿體ない。金杉の毘沙門さまへ朝參りするのも、なんの願ぢやと思はしやんす。どうぞ首尾よう年の明くまで、お前の心も變らずに、女夫になされて下さりませ、外の者と違うて、ちつと仇つき者でござんす程に、ようお前をお頼み申しますと、話しするやうに願ふのも、何時か世間晴れて手鍋提げても、朝寢もしやう宵まどひ、常の口舌も、夫婦喧嘩と云はれたいわいなア。
彌市　ムウ。お主がさう云ふ心なら、御贔屓の旦那衆へ願つても、年季通りの給金さへ付きやア、頼もしい親方の事なれば、どうでもならうわサ。それさへ片付けば内へ呼んで、水入らずの夫婦稼ぎ。一つ拍子が好けりやア、辻番も置き炬燵、炭團も切り炭、損料止めて流れを買やア、三つ蒲團に錦の夜着で、晝時分まで、朝寢がなると云ふものだ。
たか　首尾よう女夫になると、わたしや廓には居ぬぞえ。
彌市　なぜ〳〵。
たか　この女子ばかりの中へ、どうお前が置かれるものか

いなア。
彌市　エ、、馬鹿を云へ。女護の島に居やうとも、てまへを捨てゝ、ナニ外の女子に構ふものか。おれが堅いと云ふ事は、何處の二階でも、噂を聞いて居やうが。
たか　イエ〳〵、その堅い者ほど、油斷のならぬものぢやわいなア。
彌市　おらア又、てまへに油斷がならねえワ。
たか　アノ、わたしに油斷がならぬとはえ。
彌市　おらアこの頃病氣で、會所へも行かないけれど、仲間の者が見舞ひに來ても、てまへの噂。今日も濱名屋、昨夜が濱名屋、客は誰れだ、西野屋の九兵衞。おぬしやア西九に、請け出される筈ぢやアねえか。
たか　エ、、其やうな事云うて下さんすな。見るから好かぬ九兵衞づら。モウ〳〵、聞いてもゾッとするわいなア。
彌市　それでも金の威光で、引き込ましたらどうする。
たか　好かぬ者に添はうより、自害して死んでしまふわいなア。
彌市　死ぬ〳〵と云つた者に、死んだ例しはない者よ。命までは掛けまいが。
たか　イエ〳〵、掛けて居るぞえ。お前、これを忘れさんしたかえ。
ト腕捲りする。彌市見て
彌市　なんだ、彌市命……ア、、てまへも大分、野暮になつたなア。
たか　サア、これでも死ぬかいなア。
彌市　お主が死ぬ代りに、おれも殺されて居るワ。
ト引寄せる。
たが　コレイナア、瘧には、きつい毒ぢやわいなア。
彌市　毒だから、只斯うして居るのサ。
ト抱きつく。
たか　お前、その元氣では、もう氣遣ひはないわいなア。
彌市　今日は瘧日なれど、もう心持ちは常の通り。シタガ、病みついた日に、あの唐犬のお吉が介抱。それで一倍惡くなつたわい。
たか　ほんに、あのお吉さんは、お前に惚れてぢやと聞いたぞえ。
彌市　へ、、あやまるの。
たか　お前、心は恐ろしいけれど、好い器量ぢやぞえ。
彌市　なんぼ器量が好いと云つて、あの口に逢つちやア、

誰れでも愛想づかしだ。
たか　また滅多な事云うて毒づかれさんすな。わたしやアノ、何時ぞや揚屋町で逢うて、大抵困つた事ぢやないわいなア。
彌市　それだから、おれも大概合せ鏡で居るのよ。惡く當ると人中で恥を搔くわな。
たか　冷してお上がりなされませ。
彌市　なんぼ物食ひがよいと云つて、どうしてあれが食はれるものか。
たか　食はれぬと云へば、今日はまだ飯を食べさんせぬぢやないかえ。
彌市　いんにや、まだ食はないが、大分心持ちが好いから、ちつとやつて見ようか。
たか　エヽ、ちつとゝ云はないで、たんと食べさんすがよいわいなア。こりやちやつと、炊ずばなるまいわいなア。
彌市　慥かアノ喜六が、仕掛けて置いた筈だが。
　トおたか釜の蓋を取つて見て
たか　イヽエ、仕掛けてはないぞえ。
彌市　藥を取りに行つたからは、今に歸るだらう。

たか　わたしが仕掛けて見ようわいなア。
彌市　どうして、お主が手際に炊かれるものか。打ッちやつて置きやれな。
たか　ハテ、今にもわたしが世帶になれば、飯の炊きやうも覺えて居ねばならぬわいなア。こんな時稽古して見ようわいなア。ドリヤ、米を出して來ませうか。
　ト誂らへの唄になり、おたか米櫃の蓋を開けて、米を升にて出す。この唄を借り、向うより、藝者お花、同じくお千賀、以前の形にて出て來り、直ぐに本舞臺に來りて門口を覗き
はな　彌市さん。
千賀　今日はどうぢやぞいなア。
彌市　毎日〳〵、忝ない。今日は大きにようござる。お前方は、なぜ其處に立つて居るな。此方へお入りなさいお入りなさい。
はな　誰れも居ぬ處へ行ては惡いわいなア。お前も、その分なら、もうようござんす。また、後にえ。
千賀　それ〳〵、おたかさんでも居さんすればよけれど、又お前の所へ來たと云ふ事を聞いてぢやと、角が生へるわいなア。

はな　そりやアその筈の事いなア。姉妹のやうにするわたしにさへ
たか　姉妹やきのおたかは、爰に居るわいなア。
　ト米を計り持つて出る。両人、悔りして
花千　オヽ、どうせう。
はな　米を出してぢやに依つて、お前ぢやないと
両人　思うたわいなア。
たか　人事云はゞ日代置けと、名代どころぢやないわいなア。
千賀　ほんにマア、悪う云はいで仕合せ。お前はマア、
両人　何をさんすぞいなア。
彌市　ナニサ、打ッちやつて置けと云ふのに、こせついて、米の仕掛けすると云ふわな。
千賀　そりやモウ、今に受取らんす世帯ぢやもの。その筈ぢやが。
はな　飯の炊きやう、知つて居さんすかえ。
たか　どうして炊くのぢややら、今日は初會ぢやわいなア。
はな　わたしや、両國の茶見世や揚弓場に居て、茶を焚く事は知つて居れと、ついに飯を炊いた事はないわいなア。初めちよろ／＼とやら、云ふ事があるぢやないかえ。
彌市　それ／＼、初めちよろ／＼中くわつ／＼、じは／＼と火を引いて、赤子が泣くとも蓋取るな、と云ふのが、飯の炊きやうの傳授サ。
たか　そりや、むづかしいものぢやな。
彌市　俄の踊の振り程、むづかしくはあるまいわい。
千賀　ほんにアノ振りには、山口さんも困らんしたわいなア。
彌市　併し、此方の組が、いつち評判が好いと、あの受持ちが、いつそ喜んで居た。折悪いこの瘧で、俄のこの替りを見ないが殘念。その代りには、三人の勇み出合ひが寄つて、一升の米を餅に搗くのを見物せうか。
たか　どうやら斯うやら、炊けさうなものぢやわいなア。
千賀　三人がゝりで、炊けさうなものぢやあるまいかえ。
はな　それがよいわいなア。
　トちり／＼になり、たわしを持つて來り、升米を磨ぎにかゝる。
彌市　米を磨ぐのぢやないかえ。
千賀　これで磨ぐのぢやわいなア。

ト桶を出す。

たか　ほんにさうでござんした。

　トまた升より計り、桶へ入れて掻き廻す。

はな　水を入れて磨ぐのぢやわいなア。お前よりわたしの方が功者であらう。

　ト取つて手桶の水を入れ、流して水を零し、舞臺先へ持つて來て磨ぐ思ひ入れ。

　エ、モウ、草臥れたわいなア。

　ト思ひ入れ。

千賀　そんなら、ちつとわたしが代らうかいなア。

　トまた磨ぐ。これも草臥れし思ひ入れ。おたか摺鉢と摺粉木とを持つて來り

たか　わたしが智慧があるわいなア。

はな　お汁でも立てさんすのかいなア。

たか　イ、エナア、その米を、爰へ明けて下さんせ。

はな　アイ〳〵。

　ト桶の米を摺鉢へ明ける。

　どうして磨ぐのぢやえ。

たか　斯うして、この連木で磨ぐぢやわいなア。

千賀　こりや智慧でござんす。

たか　いま直に磨げる程に、お前は釜の下を、焚きつけて下さんせ。

千賀　ドレ、わたしが焚きませうわいなア。

彌市　サア、火は爰にあるぜ。

　ト彌市、火入れを渡す。お千賀、付木へ移し焚いて、火吹竹にて無性に吹いて居る。

　こりやアひどい事をする。狸責めだ〳〵。ソレ、其處に付木があるわな。

千賀　アイ〳〵。

　ト無性に付木を燻べて吹いて居る。おたかはお花を相手にして、摺粉木にて米を磨ぐおかし味、いろ〳〵あつて、好い程に釜焚き割れてトンと音する。これに驚ろきおたか、摺鉢を突き割り、お花は押へて居た摺鉢割れしゆゑ、横に倒れるこの途端に

高千　オヽ、怖。

　ト兩人、一度に摺粉木と火吹き竹を持つたる儘、我れ知らず向ひ合ひ、お花は眞中に轉け込む。彌市、笑ひながら

彌市　三人がその形は、マアなんだ。

　トおたか、お千賀、斜に構へし火吹き竹と摺粉木とを

見て
高千　オヽ、おかし。
ト兩人、一度に投げ出す。
はな　惘りしたわいなア。
千賀　付木があるから、燻べいと云はんしたゆゑ。
彌市　十把の付木を皆燻べたか。
千賀　アイ。
彌市　たうたう釜を叩き割つたわえ。
ト下座の木戸口より半七、肴籠に鱚のやうな物を入れて、これを提げて出で來り
半七　彌市さん、どうでござります。大分好い樣子でござりますな。コレ、取つて置いた肴を持つて參りました。
彌市　イヤ、今日は大きにようござります。オヽ、これは何よりの物。
半七　流し元は、いから取散らした樣子。こりやマア、何事でござります。
彌市　イヤモウ、何事どころか、三人寄つて、しつけもしない釜元の働らき。釜を叩き割るやら、擂鉢を割るやら亂騷ぎ。
半七　エヽ、お前方はマア、其やうな病氣見舞ひがあるものか。其處らを片付けずばなるまい。悉皆夫婦喧嘩の體人に來たやうだ。
ト其處らを片付ける。
千賀　エヽモウ、ひよんな事を致しました。
彌市　ナニサ、この位は常の事サ。
半七　ほんにお千賀さん、根本屋からお前とおたかさんを、呼びに來たぞえ。
千賀　そんなら行かざなるまい。おたかさん、お前は、
たか　わたしやちつと用があるから、用事をつけて置いて下さんせ。
千賀　彌市さん、隨分お大事に。そんならわたしや行くぞえ。
彌市　この騷動を見捨てゝ行くか。
千賀　明日詫び事に來やんせう。
ト此の臺詞を云ひながら、草履を穿き、下座へ入る。
半七　あんなよく出來た妓もないものサ。
はな　お千賀さんは、お前のお氣に入りでござんすな。
半七　又そんな事を云ふか。彌市さんやおたかさんが聞いてござるわな。
はな　主達は隨分承知の事。なんの隱す事があるものかい

なア。
彌市　さう〳〵。隨分遠慮なく乳繰るがよい。
たか　此方も話さうかいなア。
彌市　互ひに差合ひのない仲だ。心措きなく引ッつけ〳〵。
高千　斯うかいなア。
ト互ひに凭れ寄る。
彌市　おきやアがれ、飛んだ割り床だ。
はな　シタガ、半七さんは、この頃氣が味いになつて、人の云ふ事も、ろく〳〵聞かんせぬわいなア。
彌市　オヽ、そりや只事ではあるまい。
たか　ほんに片時も、男に油斷するものぢやないぞえ。
はな　兩國では一緒に居たゆゑ、ちつとも油斷はしやせんせぬが、この吉原へ來てからは、ちつとの間も側に居るは、お前の内ばかり。ぢやに依つて、大抵氣が揉める事ぢやござんせぬわいなア。
半七　其方よりこの半七が、氣の揉める事は、生優しい事ぢやないわいなう。
はな　なんで又、其やうに。
半七　彌市どのには、まだ知らつしやるまいが、兩國に居るうち世話になつた、金兵衞は殺されました。
彌市　ホウ。それは又怪しからぬ。所は何處で。
半七　淺草の天王橋で、先月二十八日の夜。
彌市　そんなら、お前方を引取つた日の事。その時わしが癪の最中、夢中に駕籠で歸る折柄、天王橋の橋詰めに待伏せして、この彌市を仕返しの打擲。それから先は他愛なし、其まゝ上がらぬ病の床。そんならその夜の事。お前方も此方へござつた後の事でお仕合せ。どうであの金兵衞めは、碌な死やうはせまいと思ひました。して、松蔭の硯の事は、どうなりました。
半七　それにつけても種々の話し。最前も約束の通りなれば、流してしまふと九兵衞めが無理我まゝ。憎さも憎しと思うたれど、日限りの書付け取られた上は、所詮云うても無駄事と、諦らめたその座敷へ、宵に見えた侍ひが、思ひがけなう肩持つて、九兵衞めを云ひ捲り、六ケ月まで留めるつもりにしたわいの。
彌市　それは誠に天の助け。その侍ひはお近付き、お前は御存じござりませぬか。
半七　こちらはとんと覺えねど、二人が身元を知つた口振り。
はな　お名を聞いても仰しやらず、慥かわたしが云ひ號け

新十郎さんの兄さんとは思へども、それとも云はずに身に引受け、お世話なされて下さんしたは、どうも合點が行かぬわいなア。

半七　新十郎どのゝ兄なれば、現在弟の云ひ號けの、お花を連れて駈落ちしたこの半七を、親身に世話はしさうもないもの。今宵こなさんに逢ひに來る筈。

彌市　成る程、それには何ぞ深い譯がござりませう。私しが逢ひさへしたならば、事は解るでござりませう。硯の事も日限が延びたれど、迂濶に人手に渡しては置かれますまい。

半七　何かにつけて苦勞をかける彌市どの。こんな氣の毒な事はないわいの。

たか　半七さんのなんのマア、其やうに氣の毒がらしやんす事はござんせぬわいなア。彌市さんの父さんが、お前の家に勤めて居やしやんしたからは、矢ッ張りお主も同然。世話になりうち世話にしうち。また松蔭の硯は月も多い事なれば、マア、お花さんを身儘にしたいものぢやなア。

半七　國を駈落ちしてより、世に便りない二人が身の上。

はな　頼むはお前方ばつかりでござんすぞえ。

彌市　又そんな野暮な事仰しやるか。今日は影のさしたばかりだから、もう瘧は落ちるに間もござりますまい。病氣さへ本腹すれば、松蔭の硯も取戻し、又お花さんをも請け出して、新十郎さまの方から去狀取つて、安樂に暮らさせます。お案じなされぬがよい。併し、その侍ひが今にも來まいものでもない。お前が逢つちやア面倒だらうから、お花さんを親方へ送つて行きなさい。

たか　そんならわたしも一緒に行て、内の首尾して、今宵は泊りに來ようわいなア。

彌市　オヽ、それがいゝ。直ぐに俄の形で、爰に居ちやア惡いから、ちよつと歸つて來るがよい。

はな　話しの侍ひが見えたなら、とつくりと譯を聞いて見さんすがよい。

彌市　お前は構はずに置きなさい。如才はない。

たか　彌市さん、ちつと好いと思うて、必らず輕はづみな事しなさんすなえ。

彌市　オイ／＼。

はな　アイ、左樣ならば。

たか　行て來るぞえ。

彌市　待つて居るぞよ。

半七　サア、行きませう。

ト謠らへの唄になり、お花先におたか、半七付いて下座の路地口へ入ると、後に彌市、侍ひは合點が行かぬと云ふ思ひ入れにて、又ゾッとして搔卷を引ッかけ、煙草のんで見てものめぬ思ひ入れ。唄になり、向うより櫻井新左衛門、矢張り以前の侍ひにて角助付いて出て來り、新左衛門、角助に先へと云ふ思ひ入れすると、角助、門口へ來り

角助　ちと物が承はりたうござりまする。折井彌市さまのお宿は、爰でござりまするかな。

彌市　アイ、こちらでござる。何處から來さつしやつた。

新左　イヤ／＼、お近付きになりに參つた者でござる。

彌市　ヘイ／＼、こちらへお通りなされまし。

ト搔卷を脱いで立ちかゝる。

新左　コリヤ／＼、其方は最前の茶屋へ行て、待つて居れ。

角助　ヘイ／＼。

ト草履を持ち、向うへ入る。

新左　許し召されい。

ト上へ通り

瘧病さうな。

彌市　左樣でござりまする。それゆゑ斯く取亂してありまする。御免下さりませ。

新左　コレ／＼、平に何ぞ掛けてござるがよい。瘧と云ふものは、一向疲れるものぢや。併し、おてまへのは輕いと見えて、大分健やかぢや。

彌市　ヘイ、五ッ慄ひ程でござりますが、今日あたりはモウ、影ばかりでござります。時に早速承はりませうは、何御用ござりまして、私しをお尋ねなされますかな。

新左　イヤ、斯やうに押しかけて參つたゆゑ、なんぞ氣遣ひな事とも思やらうが、全く左樣な事ではない。其許には厚う禮を申さねばならぬ儀があつて、わざ／＼參つた。

彌市　ハテ、何事でござりますか。人樣に何も、お禮を受けまする覺えは。

新左　イヤ、ないとは云はれぬ。豆州より參つた半七お花、金兵衛とやら申す惡者の手にかゝり、いかう難儀の處を、おてまへが引取つて、萬事世話いたさるゝ由。奇特な事、禮の申しやうもござらぬ。忝なうござる。

彌市　これは又、何事かと存じましたところに、半七さま

の事でござりまするか。私しが引取つて世話いたすと申すのでもござりませねど、私しが親どもが、半七さまのお家に勤めて居りました、彌平次と申す者。さすれば私しが爲には主人同然。フト國を立退かれ、きつう困窮の様子を承はり、もだし難く此方へ引取りましてはござりますれども、御覧じつけられまする通りの裏家住居、心に任せぬ事だらけ。もう何にもお世話いたすと申すまでは參りませぬ。

新左　元が主筋と申しても、人の落目は見ぬ振りするのが今の世の中。遊里には似合はぬ其許の實氣。いよ／＼主筋で世話いたさるゝならば、半七お花の兩人は、しかと預け申したぞ。

トきつと云ふ。彌市、合點の行かぬ思ひ入れ。

彌市　して、あなた樣には。

新左　豆州三島の家中、櫻井新左衞門でござる。

彌市　すりや、アノ、あなた樣が。ムウ。

ト愕り。

新左　先年三島明神の御造營、金十貫目拙者預かりしところ、盗賊に奪はれ、浪人して蟄居。弟新十郎諸とも、武術の師範いたし居るうち、門弟の勸めに、同所佐五兵衞と申すが娘お花と、弟新十郎を娶合す約束。花が持參には松蔭の硯を讓らんとの事。その硯は世に稀れなる菅家の御自作。お家の重寳ともなるべき一品、これ幸ひ、歸參の時節到來と、その趣きを家老職まで願ひしところ、お聞濟みあつて、先地を其まゝに歸參の喜び。然るにそのお花は、半七と密通なし、硯を持つて逐電。すりや、弟新十郎が爲には、半七は女敵。見當り次第、二人が首打ち放すワ。

彌市　エヽ。

ト思ひ入れ。

新左　返す刀に我れ／＼兄弟、切腹なして殿への申し譯。コリヤ彌市、爰の所を、よう聞き分けい。四人が命を救ふは、その硯一つぢや。硯さへ手渡しせば、波風なう花が去り状は、弟に替つて身が遣はす。最前も承はれば、硯を質物に入れしとの事。詮議なすは易けれども、もしその硯でない時は恥の恥と、只餘所事に取りなして、六ケ月までは留め置いた。今宵のうちに聞き出し、有無の返事を致してよからう。

トきつと云ふ。

彌市　成る程御尤も。初めて樣子承はり、驚ろき入りまし

た。紛失の品と申すではなし、九兵衛方で質物の品、改めまして、いよ〳〵正眞の松蔭の硯なら、この彌市が身に替へましても、お手渡し致しませう。表立ちましては結句妨げ。それとはなしに九兵衛めに、

新左　便つて硯を見た上で

彌市　嘘か誠か

新左　返事を松蔭。

彌市　逢ふ瀬は深い硯の海。

新左　如何なる苦勞磨る墨でも

彌市　書きあらはせば三下り事。

新左　筆の命毛。

彌市　切れるか。

新左　切れぬか。

彌市　暫しこれにて。

新左　思案のしやれ。

　ト唄になり、新左衞門、思ひ入れあつて奥へ入る。彌市、後を見送り

彌市　エヽ、あの半七さんも、さほど大切な硯とも知らず、金兵衛が飯代に詰まつて、質物に遣つても金は受取らず、剩さへ金受取りの證文まで取られさつしやると云ふは、あんまりとは云ふものゝ、互ひに惚れた浮氣の空。噂ばかりの思案なし。殊にあつて過ぎた事。もうこれからは、金一段より、外の思案はないが、その金も思案も、斯う病み呆けちやア一向なものだ。

　ト行燈を掻き立てゝ

エヽ、ない段になると、油までないワ。ドレ、油差しを取つて來ようか。

　ト彌市、奥へ入る。この唄を借りて、男藝者羽六、絹やつし、羽織の形にて、ぶら提灯を提げ出で來る。後より西野屋九兵衛、矢張り以前の形にて出で來り

九兵　コレ〳〵、そこへ行くのは羽六ぢやないか

羽六　アイどなた……ホウ、西九さんかえ。お前、なぜお一人でござりますかえ。

九兵　イヤ、一人出かけるも、ちつと譯ありサ。

羽六　エヽ、お前、あやしゝの吸ひ物だね。

九兵　鐵砲を素見に行くやうだの。さうしてまへは又、何處へ行く。

羽六　いま文字屋へ、客を送り込んで、内へ歸つたところが、今日は勘定日だから、それで世話燒きの所へ、俄の集め金を取りに行くのでござります。

九兵　オヽ、道理で、ぶらで出かけるとは思つた。その世話焼きとは彌市が處か。
羽六　あいサ。左樣サ。
九兵　丁度おれも彼處へ行くのだ。そんなら一緒に行かう。
羽六　ニヽ、お前は何の事でござりますえ。
九兵　イヤ、ちつとむづかしい用サ……時に羽六や、辨天は賑だぜ〳〵。
羽六　へヽ、ナニサお前。
　ト云ひながら鉾臺へ來て、門口を覗き
九兵　なんだ、誰れも居ないか。眞暗だア。
羽六　こりやマア、不用心な事だぞ。
　ト云ふうち彌市、奥より油差しを持つて出で來り、兩人を見て
彌市　オヽ、羽六、よくござつたの……ヤ、旦那ぢやアござりませぬか。ヤレ〳〵、よくお出でなさりました。
九兵　コレ、暗闇にして置いて物騷だぞよ。
彌市　いま油差しを取りに行き、内が暗くなつたのサ。
羽六　丁度よい處へ、おれが提灯を持つて來たのは、きつからう。

　ト行燈へ移す。
彌市　それサ〳〵。
　ト油を注ぐ。
サア、此方へお出でなされませ。
九兵　其處へゆきの白鷺としやせうか……時に、どうでごぜえす。鹽梅はよしの木かの。
彌市　ハイ、今日は大きにようござります。
九兵　オヽ、そりやお嬉しいの。
彌市　今晩は何處でござりますね。鶴屋でござりませう。
九兵　イヽヤ、此方へ來たのサ。
彈市　へイ、なんぞ御用でも。
九兵　マア、此方は後でもいゝから、一服たべやせう。羽六の方の用からしまひなさい。
　ト煙草をのんで居る。
彌市　羽六、お主の用は。
羽六　イヤ、外でもないが、今日は勘定日だから、方々から俄の出錢を取りに來やした。皆お前の方へ寄せて居るさうだ。お前が煩らつて居るから、有象無象が皆わしが内へ持ち込んで、なんだのかだのと、座敷も碌にならないで、今日はこれでこの旦那の座敷へも行かずにしまひ

やした。モウ〳〵、こんな世話は、人に振り向けて置きたい。イヤモ、骨が折れてなりませぬわい。
彌市　時に今のは、明日でもよからうぜい。
羽六　呉服屋、道具方、囃子方も、今夜皆片付けないでは口がきけませぬ。
彌市　マア〳〵、一服のみやれサ。
羽六　イヽヤ、煙草はたべやすまい。
九兵　羽六、なんぞ面白い話しが出たかの。
羽六　イヤモウ、この頃はあなたのお出でと、福助の話しより外にやア一向なものサ。
九兵　イヤ、話しと云へば彌市、おれが來たのは外の事でもない。先月、半七が手から、五十兩の質に取つた硯を、どうぞ請けちやアくれまいか。
彌市　あの硯は、どんな事をしても、請けにやアなりません。半七どのゝ事は、わたしが引請けて居るから、主に構はずとも、この彌市が出しまする……が、どんな硯だか、ついぞ見た事がない。ちよつと見せておくんなさりませぬか。
九兵　いんにや、爰にやアない。重つたらしにナニ持つて歩かうものか。それに、おれが質ぢやない。道具屋の太助が質よ。先刻六ヶ月までは流さぬ約束したが、太助の身の立行きの出來ない事が出來たから、義理を缺いてもあの硯を、金にしたいと云はれて、おれも默つては居られない。モウ、請けられざア、約束を變替へだ。
彌市　イヤ、只今も申す通り、その硯はちつとも外へ遣る事は、どうもならない代物。どうぞ、もう四五日待つて下さりませ。
羽六　其方は四五日とは好いわけだが、此方はモウ明日の朝までも待たれないよ。マア、此方の方を付けてもらはうわい。
彌市　お主もマア、常の氣前にも似合はない。今聞く通りの譯だ。此方も五十兩とは大金だ。其方は僅か五兩か六兩、内を賣つても遣るから、どうぞ後まで待つて下さい。
羽六　待つてくれろと云ふからは、そんなら預かつたものを遣ひ込んだのだな。コレ、お身様はそんな者ぢやアないと思つたが、何時の間にマア、そんな根性になつたのだな。外の金とは違ふよ。仲間の出錢だわな。こなさんも明日が日病氣が癒りやア、出ざアなるまい。その時こなたはマア、どの顏を合せるのだい。事はちつと違ふよ。

細見にも乘つて居るではないか。僅か五兩か六兩の金で、世間を暗くするとは、エヽ、イケ業曝しの人だ。

彌市　オヽ、なんとでも云やれサ。なんと云はれても、モウ一言もない。恥を云はねば理が知れぬとやら。九兵衞さまもござる所で、こんな事を云ふのは、モウ〳〵、身を切られる程術ないが、ちつと內證に物入りな事があつて、預かつた金は推量の通り、遣ひ込んだ。それも當のない事はしない。江戸の旦那衆からキッと來る金があるが、折惡いこの雨。出る事がならぬゆゑ、主にもそんなに云はれるは殘念だ。もうこの分では明日あたりは、先樣へ行つて受取るから、それまでの所は、どうぞお主、好いやうに云つて置いてくりやれ。仲間づくの事だ。そんなに怖い顏をして居やる事はないわな。

ト羽六、默つて居る。また九兵衞に向ひ

イヤ、九兵衞さま。今お聞きなさる通りの譯合ひ。是ッ非金子を工面して、その硯は請け戻します程に、お前樣も、どうぞ御料簡なされて。

ト九兵衞、無性に灰吹を叩き立て、知らぬ顏して居るゆゑ、また羽六に向ひ

コレサ羽六、お主でもない。なぜ人にばかり口をきせて默つて居るのだ。本當ならとも〳〵に、口を添へて九兵衞さまをも、宥めてくれさうなものだ。コレサ、これ程云つても默つて居るのは、付入りはないか。ムウ。

トむつとはすれど、理に伏して手を組んで思ひ入れ。流行り唄になり、向うより唐犬のお吉、浴衣を抱へ、垢摺りつきの手拭に糠袋を持ち、湯上がりの形にて出て來り、門口を窺ひ、內の樣子を聞いて居る。九兵衞、羽六顏見合せ、兩人、一度に立ち上がる。彌市、兩方をしつかりと留めて

九兵衞さま、待たつしやりませ。羽六も待ちやれ。物を云はずに、こりや何處へ行くのだ。

九兵　何處へ行くものか。待つた〳〵して居ちやア、太助が身の立行きが出來ない。所詮五兩の金さへ出來ぬものを、輪をかけた五十兩、十日や二十日にやア出來まい。モウ斷わりさへすりやアいヽ。望み手があるから、あの硯は、元金で賣つてしまふワ。

羽六　わしもその通りだ。今夜中に掛持ちの方へ、遣らにやアならない金だから、この通りを吉原中へ觸れるのサ。仲間の出錢を、彌市が遣ひ込みやしたと、云つてしまやア、おれも身抜けだ。キリ〳〵其處を放さつしやいな。

彌市　それを云ふ位なら、初手からこんなに手を下げて、云ふにやア及ばない。と云ふものゝ、そりやア又あんまり聞分けがないと云ふものだ。預かつた金も硯の金も、いま遣るから、マア〳〵、下に居やれ。

九兵　オヽ、金さへ渡しやア、ナア羽六、半時や一時の見境はない。もう一服のみやれ。

ト兩人、下に居る。この時お吉、門口を細目に明けて、羽六を招く、羽六、頷いて行きにかゝる

彌市　また行くのか。

ト思ひ入れ。

羽六　金受取らぬうちは、どつこへも行く事ぢやない。コレ、提げ煙草入れ、これを置いて行くワ。きりを切つたやうだ。

ト云ひながら門口へ出て

ホウ、お吉さんか。

ト云ひさうにする。

きち　コレ。

ト押へて花道へ連れて行く。

今宵なければならぬ金と云ふのは、いくらぢや。

羽六　アイ、五兩でござりやす。

きち　いゝ、待ちなんせ。

ト懐中にて金を算へ

サア、五兩。

ト出して遣る。羽六、受取り

羽六　お前、この金を拂ひなさるのかえ。

きち　コリヤ。

ト囁く。羽六、呑み込んで内へ入り

羽六　モシ、頭え。彌市さんへ。へヽヽヽ、只今はモウ、ほんの一杯機嫌で、憎まれ口を申しました。お前も知つて居さつしやります通り、心に何にもなくつても、口の悪いはわつちの癖でござりやす。寄り金の五兩は、慥かに受取りました。これぢやアわつちも、大きに苦抜けを致しました。

彌市　コレ羽六、おぬしやア、おれをきよくるのか。

羽六　ナニ、お前をきよくるものでござりませう。コレ見なせい。

ト金を出して見せて

受取つたに相違ござりませぬ。

ト彌市、九兵衞、これを見て悄りする。

彌市　さうして、その金の出處は。

きち　トお吉、門口を明けて
彌市さん、わつちに預けて置きなさつたぢやアない
かえ。
ト彌市、見て
彌市　エヽ、こりやお吉なん、お前に金を。
きち　エヽ、コレサく\、お前は瘧で夢中になつて居なさ
つたから、知らんすまいが、内は一人で寄合ひを預かつ
て居ても不用心だから、どうぞ預かつてくれろと云ひな
すつたぢやアないか。ほんに好い時に湯に來合はせ、間
に合ひやんした。わつちもこれで落ちついたわいなア。
ト彌市、合點の行かぬ思ひ入れ。
九兵　成る程、病氣と云ふものは怖いものだ。人に預けた
金を忘れるとは、飛んだものだ。
彌市　イヤお吉さん、志しは忝ないけれど。
きう　エヽ、お前はマア、何を云ひなさる。預かつた物を
返すに、志しも物さしも要るものかな。まだそんなに久
しい病氣でもないが、どうしたものだ。
ト九兵衞が側へ行き
九兵衞さん、いま聞きなる通りの代物でござりやすから、
松蔭とやらの硯の事は、明日まで待つておくんなんし。
金の心當りも、わつちが知つて居やすが、あの通り病後
で、取逆上せて居なさるから、解りやせんわな。
九兵　成る程、外の者ぢやアなし、男勝りの唐犬のお吉が
云ふ事を、反古にもなるまい。そんなら明日まで待つて
やらうわサ。
きち　さうしておくんなんせば、わつちが顏も立つてお嬉
しい。そんならどうぞ。
九兵　そんなら羽六、其處まで一緒に行かうか。
彌市　九兵衞さま、此方から返事をするまでは、どうぞ硯
は動かせて下さりますな。
九兵　イヽヤ、お主にやア構はない。お吉が返事を待つか、
但しは又、二つに一つの返事をしやれ。待つて居るぞ
よ。
羽六　彌市さん、そんなら明日お目にかゝりませう。
ト唄になり、羽六、ぶらを提げて、九兵衞、後に引き
添ひ、花道へ入ると、あと合ひ方になり彌市、濟まぬ
顏して居る。
きち　彌市さん、なぜお主はそんなに、濟まぬ顏して居な
さるえ。
彌市　思ひがけない日寄り金の五兩、こなさんに立替へさ

せちやア、どうも氣の毒。なんで又あんな事をして下さつた。

きち　エヽ、なぜお前、そんなに野暮堅いな。日頃からまんざらでないと云ふ事は、知つて居なさるぢやアないかえ。その思ふ人の立ち難ない金、わつちが借りたらば、お前の恥でもあらうが、預かつたと云うたれば、モウ男は立つて居るぢやアないかえ。こんな事を口走り、嫌味な奴と思ひなさらうが、惚れた冥加にやア、モシ、命も惜しみはしないよ。仲間の寄り金を遣ひ込んだ事を、吉原中へ觸れて見なさい。恥どころか、この土地にやア居憎からうがや。

彌市　そりやアモウ、居憎いどころか、今夜のうちにも何處ぞへ行かにやアならない仕儀でござりました。こればつかりは忘れませぬ。忝なうござる。

きち　まだ〳〵、これぱかりぢやアないよ。お前の心次第で、その松蔭の硯も、今でも取返す金があるけれど、どうもお前の心が定まらぬゆゑ、持つては居たれど遠慮して云はぬ。これを見な。

ト懷中より、金財布を出して見せる。この時、下座の木戸口よりおたか出て、後にこの樣子を見て居る。

彌市　エヽ、そりやア、アノ金かえ。

きち　サア、わたしが云ふ事を、聞いてさへくんなさりやア、どうでもなるけれど。

彌市　お前の云ふ事は、マア〳〵なんだえ。

きち　エヽ、なんの事とは白々しい。これまで度々逢つた文、それに今まで返事もせぬのは、情知らずが猶可愛いとやら。潮來に唄ふ通り。

彌市　サア、その文も。

きち　封も切らずに捨てさんしたかえ。

彌市　そりや、こなさんも知つての通り。

きち　おたかさんと云ふ色のあるのも、承知で云ふのは、よく〳〵の事。魚心ありや水心とやら。金が欲しくば、切れて下さんせ。

彌市　エ。

ト思ひ入れ。

きち　切れずば硯が、手に入るまいぞえ。

彌市　是非請け戻さねばならぬ松蔭の硯。

きち　金があるかえ。

彌市　サア、そりやア。

トお吉、財布をぶらつかせ

きち　アヽ、此やうに要らぬ金があるけれど、モウ、氣はないのかえ。
彌市　と云つて、人も知つたあれが事。
きち　切れられずばせう事もなし。そんなら爰に居るも無駄。邪魔になるこの金を遣つて、氣の利いた二才でも抱いて寐ようかえ。
　トまた懐中へ入れる。おたか後にて金が欲しいといふ思ひ入れ。彌市、思ひ入れあつて
彌市　お吉さん、その金、わしが借りませう。
きち　そんならアノ、承知かえ。
彌市　サア、承知は承知なれど、まだ落ち切らぬ瘧病み。
きち　イヤモウ、承知さへしてくんなされば、今日には限らぬ。一度でも逢ひさへすればよいわいなア。
彌市　ほんに、お前も懇ろすりやア、牛に馬を乘り替へると云ふもの。
　トわざと嫌らしくお吉を引寄せる。おたか承知で居ても、腹の立つ思ひ入れ。
きち　そりやお前、ほんの事かえ。
彌市　男の口から云ひ出して、後へ引くものだ。
きち　眞實だと云ふ、證據を見せて下さんせ。

彌市　その證據は、指でも髪でも望み次第。
きち　このお吉が見る處で、おたかさんと切れなんしたらば、後とも云はず、耳も磨れぬ五十兩。
彌市　オヽ、切れて見せう。
きち　嘘であらう。
彌市　商賣冥利。
きち　違ひはないかえ。その詞を忘れまいよ。
彌市　なんの忘れう。
　ト手を持つて引寄せる。
きち　オヽ、嬉し。
　ト抱きつく。この時おたか、ツカ／＼と出て、お吉を引き退け
たか　エヽ、アタとんだ、アタしつこい、アタ嫌らしい。お前方は、こりやマア、なんと云ふ事でござんすぞいなア。
彌市　男と女の二人居るのが、わりやなんで、そんなに腹が立つ。
たか　これがマア、腹が立たいで居られうかいなア。あんまりぢやわいなア／＼。
彌市　お吉どのが、病氣見舞ひにござつたのが、どうし

た。
たか　アノ、病氣見舞ひにござんした者が、なぜ抱きついて居やしやんした。
彌市　イヤ、ありやアなにサ……オヽ、それ〳〵、熱が冷めたか、見てやらうと云はれて。
きち　エヽ、措かしやんせ。それよりは手短かに、色ぢやと云うて、落ちつかせるがよいわいなア。
たか　お吉さん、そりやなんと云はしやんすえ。
きち　何にも小むづかしい事はないわいな。彌市さんに眞實親身から惚れ込んで、今夜夫婦の杯するのぢやわいなア。今までの懲ろだけに、おたかさん、酌してもらひませうぞ。
　トおたか、ムツとして、彌市を引き寄せ
たか　モシ、ありやマア、ほんの事かいなア。
彌市　ほんの事と云つて、こんな事に何、嘘が吐かれるものかえ。
たか　お前、それぢやア立つまいぞえ。
彌市　立たうが立つまいが、あれ程思つて居らるゝお吉どのゝ眞實、今まで袖にしたさへ恥かしい。モウ〳〵お主にやア、疾から飽きて居るのを知りもせず、朝夕の看病は、煩さくつて〳〵、猶々病氣が重うなつたわえ。
たか　エヽ、お前はなア。男の心と秋の空、變り易いを知つては居れど、お前に限つて、さう水臭い心と知らず、これまでの心盡し。辛い悲しいと憂きが中の樂みに、人の誹りも意見も聞かず、今となつて突き出され、わたしが女子は何處で立つ。人に顏が逢はされうか。コレ申し、お前の病氣が案じられ、鹽絶ちやら願掛けやら、煩はしやんすお前より、わたしが痔が見えぬかえ。ナア、これまでのよしみにどうぞ、思ひ直して下さんせ。エヽ、モシ、千萬無量の恨みさへ、心にあつて口へは出ず、涙ぱつかり此やうに、エヽ、胴慾な心にならしやんしたなア。
　ト此うちお吉あたりを見廻し、出刃庖丁を取つて來り、七輪へ燻べて煽いで居る。
彌市　今さら未練なその恨み、聞く耳持たぬ。今日から外で逢つても顏見るな。これまでの緣だと思やア、何が悲しいものだ。サア〳〵モウ、片時も置く事はならない。エヽ、内へ歸りやアがれ。
　ト思ひ入れ。
たか　これ程に云うても歸入れなければ、此方も意地づく。思ひ切つた、切れましたぞ。

きち　おたかさん、お前又さう云うても、未練が殘つて居やうがの。
たか　エヽ、ナンノイナウ。愛想の盡きた男傾城。なんの未練が殘らうぞいなア。
きち　イヽヤ、未練の殘つて居る證據は。
　ト　おたかが手を取つて引寄せ、袖を捲り
　彌市命
　ト　彌市、七輪の出刃庖丁取りて、入れ墨を消す。おたかウンと倒れる
彌市　これで疑ひ晴れましたか。
きち　ソレ、お望みの五十兩。
　ト　投げ出す。彌市、取つて押戴き
彌市　手切れ金、慥かに請取つた。
きち　今日からお前の女房ぢやぞえ。
彌市　變らぬしるしのさゝめ言。
きち　ドレ、杯を取つて來ようか。
　ト　唄になり、お吉、思ひ入れして奧へ入る。彌市、おたかを抱き起し、おたか腕の痛むこなしにて
たか　彌市さん、これでは硯が手に入りませうか。
彌市　そんなら兼ねて切れるのを。

たか　疾から後で、聞いて居ましたわいなア。
彌市　出かした。矢ッ張り心は。
たか　必らず變つて下さんすなえ。
　ト　抱きつく。この時奧より新左衛門、出で來り
新左　彌市、金子はたんぞく致したか。
彌市　質請けの五十兩。
新左　その硯さへ手に入れば、半七お花は天下晴れての夫婦に致す。ちつとも早う。
彌市　埒明けて來やれ。
　ト　財布を渡す。
たか　合點でござんす。
　ト　財布を持つて行かうとする。この時、奧よりお吉、走り出で、おたかを留め
きち　どつこい、やる事はならぬ。斯うあらうと思うたゆゑ、障子の蔭で立聞きして見て置いた。
彌市　ヤア。
　ト　彌市、ソロ〳〵懐へ出す。
きち　可愛さ餘つて憎さが百倍。その金渡して存分になり居れ。
たか　毒喰はゞ皿。この金借りました。

ト振り切つて行かうとする。この行合ひに財布の紐解けて、中より包み金落ちる。新左衛門取つて見て

新左　ヤア、この金は三の字の刻印。こりや某の盗まれし金子。すりや、盗賊は、其方であつたか。

きち　それ知られたら。

ト出刃庖丁にて切つてかゝるを、新左衛門、留めて

新左　今となつては金子よりは、硯が大切。先づその金で手に入れい。

トおたかに渡すを、お吉、新左衛門を振り切つて、この金を取らうとする。立廻りありて下の方の手桶の中へ打ち込む。

きち　ヤア、大切の金を手桶の中へ。

ト行かうとするを、新左衛門捉へる。おたか桶へ行きにかゝるをお吉、留める。この立廻りのうち、バタバタになり、花道よりお花走り出て來て

はな　モシ、彌市さん、いま土手で半七さんを、あの九兵衛が、大勢して手籠めにして居るわいなア。

たか　そんなら土手で。

彌市　半七さまを。

ト慄へながら立たうとして

エ、、折惡い今日の瘧日。エ、、。

トじれる。

はな　惡者が寄つて居れば、硯の事も心元ない。どうせうぞいな〳〵。

新左　イカサマ、硯が大切。こりや斯うしては居られぬわい。

ト新左衛門、勢ひ込んで花道へ入る。

きち　サア、邪魔は拂つた、あの金を。

たか　渡す事はならぬ〳〵。

きち　エ、、退きやアがれ。

ト振り切つて、手桶を引提げにかゝるを、おたか引ツたくる。お吉また寄るを、お花支へる。彌市も躄りながら支へる。トゞ立廻りにて、おたか手桶の水を彌市こざつぷりと浴せると、金は彌市の前へ落ちる。彌市、金を取上げ、お吉、それをとかゝるを、見事に投げ退け、すつくと立つ。おたか、お花恟りして

たか　ヤア、お前の瘧は

はな　落ちたかえ。

彌市　お主が水を怪我の功名。もう、鬼と組んでも氣遣ひない。

たか　硯の事も

はな　半七さんも。

彌市　この彌市が呑み込んだ。

ト彌市、一腰を差して行かうとする。

きち　うぬをやつちやア。

ト行き留めるを、おたか支へるうち、彌市、花道まで行きかける。お吉、振り切つて門口へ出る。お高も續いて門口へ出て、お吉をしつかりと留める。彌市、振り返り

彌市　ヤア、それは。

たか　早うござんせ。

彌市　合點だ。

ト彌市、尻を搦げる。おたかはお吉を内へ突き込む。お吉また出ようとするを、おたか外より門口を閉める。お吉、門の戸に首を挾まれて、留めながら尻餅を突く。何れもこの途端、拍子幕。幕の外、時の鐘にて、彌市、逸散に花道へ走り入る。時の鐘、ツナギにて直ぐに引返す

本舞臺、三間の間、向う飾りつけ、土手の模樣よろしく、爰に九兵衛、治徳、尻搦げ、頬かむりの形にて、半七を引きつけて居る。禪のツトメ、時の鐘にて幕明く。

半七　二人ともに、この半七を、どうするのだ。

九治　イヤ、どうもしないが、我れ〳〵が後を追つて來て、小むづかしく云ふぢやないか。

半七　エヽ、云はいではの。金も渡さず取つた硯、急にも要らぬと思うたゆゑ、彌市が病氣のようなつた上、筋道を立てゝもらはうと思うて居たれど、樣子を聞けば、今日逢うたお侍ひは、ありやお花が云ひ號けの、新十郎どの、兄だ。あの硯を渡せば云ひ號けも反古にする。また渡さぬ時は、お花もわしも、どのやうな難儀に逢はうやら知れぬとの事。切端詰まつたあの硯、元が只取つた物、譯を云うて返してもらはうと、それで後を追つて來ましたわいなう。

治德　エヽ、まだそんな熱を吹くか。この治德も五十兩の抵當に取つたと聞いて居るあの硯、そんな惡さを云ふと、お主も今ぢやア吉原に居る料理番。御免場所の疵になる。無駄を云はずと、早く歸れ〳〵。

九兵　オヽ、それ〳〵、所詮この九兵衛さまの手に入つた

物。例へ筋道が惡からうが、わいらがやうな飯食はうに、巧々と返さうか。そんな無駄口を聞かずと、早く往生しろ。

半七　ムウ、すりや、どのやうに頼んでも。

九兵　エヽ、まだ云ふか。知れた事だワ。

ト半七、思案して

半七　さう云へば絶對絶命、あの硯がなければ、どうで命は捨てたもの。この半七が死物狂ひぢや。合點か。

治德　ハヽヽ……もう一つ返して、ハヽヽヽ。こいつは大笑ひだわえ。死物狂ひか、小袖物狂ひか、氣狂ひのやうになつても、ナニ、西九さんに齒が立つものか。馬鹿な野郎だ。

半七　ムウ。

ト九兵德をキッと見て、無念のこなし。

九兵　わりや、そんなにおれを睨みつけて、マア、どうしようと思ふのだ。

半七　イヤ、斯うするわい。

トうつかりしてゐる九兵衞が脇差を拔いて切りかける。九兵衞、留めて

九兵　イヤ、この野郎め、飛んだ事をしやアがる。ソレ治德、叩きのめせ。

治德　合點でごんす。この野郎めが〳〵。

ト治德、薪雑把にて半七を散々に叩き伏せる。九兵衞も踏みのめす。この時半七、髪も亂れ、散々に叩かれ、ウムと氣を失ふ。兩人、恟りして

九兵　オヤ〳〵、この野郎めは、もうごねたさうだ。

治德　おいらぢやアないよ。おいらア知らねえよ。

ト氣味惡がる。九兵衞、あたりを見廻し

九兵　コレサ、何にも怖い事はない。誰れも知る人はなし。それよりお主はこの硯を。

ト懷中より出して、治德に渡す

治德　そんならこれを、あの唐犬お吉へ。

九兵　オヽサ、侍ひめが尋ねて居ると聞いちやア、おれが持つて居ては氣遣ひだ。

治德　して、この野郎めは。

九兵　氣が附いて口を叩きやア面倒だ。お吉に頼んで此奴が止めを。おらア斯う見えても、血を見るのはきつい嫌ひだ。

治德　わたしもサ。そんなら何もかも。

九兵　お吉に逢うて。

治德　合點でごんす。

ト治德、花道へ走り入る。九兵衞、落ちてある脇差を鞘へ納めて、下座へ入る。鉦の念佛になり、バタ〳〵にて彌市、花道より走り出て來り、半七に爪づき、月明りに見て

彌市　ヤア、こりやア半七さま。オヽヽヽ、すりや惡者どもが。モシ〳〵、お氣を付けなされまし、半七さま半七さま。

ト引き起して呼び生け介抱する。これにて半七、心付き思ひ入れ。

半七さま、お心が附きましたか。

半七　オヽ、彌市どのか。エヽ、無念な〳〵。

彌市　サア、硯の事もいよ〳〵。すりや、九兵衞めが。

半七　サア、硯もこなたの病氣ゆゑ。

ト心付き

ムウ、して、其方の瘧は。

彌市　イヤ、ついした事で瘧りました。もう氣遣ひはござりませぬ。して、九兵衞めは、硯をド、どう致しましたな。

半七　サア、それを取返さうと思うて、九兵衞とあの治德めに、此やうに打擲されたわいなう。

彌市　して、九兵衞めと坊主めは。

半七　慥か堀の方へ。

彌市　何にしろ、硯を。

ト行かうとする。

半七　彌市どの、待つた。後を追うて行くにも及ばぬ。氣を失なうた振りをして聞いて居れば、硯もあのお吉へ渡し、この半七が止めも、あのお吉に刺さすと云うたわいなう。

彌市　ニヽ、いよ〳〵その分にしては置かれぬ。あのお吉めが硯を持つて、爰へ來ると云ふ事なら、どうぞ仕樣はありさうなものだが。

ト思案して、

モシ、半七さんえ。お前、身内も痛からうが、そろ〳〵とお一人で、私しが内まで行かつしやりまし。幸ひの朧月、わしやお前になつて、打ちのめされ氣を失なうたやうにして居りませう。なんでも硯さへ取返せば、お前のお身は立ちますわい。

半七　そんなら、どうぞ。シタガ、病上がりで氣遣ひな。

彌市　なにサ、結句お前が疵が痛からう。ちつとも早く、

お出でなされませ。
半七　ア、どうぞお花が、こなたの内に居てくれゝばよいが。
ト半七、體の痛む思ひ入れにて、足を引摺り〳〵、東の花道へ入る。彌市は髪を散らし、半七の通りに倒れて居る。此うち花道よりお吉、男端折りに尻を端折り、下駄を手に持ち出て來り、この後より羽六、治德、付き出で來り
きち　コレ、德坊、今ちつと先、あの彌市めが、喧嘩の場へ行からかの。
治德　イエ〳〵、そんな者は見えましない。
羽六　あの彌市めは、癲で居ながら駈け出したが。
きち　イヤ、あのおたかめが水をぶッかけたので、癲が落ちたばつかりに、おれもひどい目に遭つた。先づこの硯はよし。
ト懐中へ入れ、
さうして、あの半七めは、何處に倒れて居るぞえ。
治德　強力稻荷の脇でごんす。
羽六　九兵衞さんの言傳の通りに。
きち　そりや合點ぢや。人を打つて氣を失なつたのに、止めを刺さぬと云ふやうな、油斷な事があるものかいの。ひよつと息を吹き返せば、後が面倒だ。サア、その倒れて居る處を教へたがよい。
治德　アイ〳〵。
ト皆々舞臺へ來り
慥か爰らでごんした。
ト彌市を見て
コレ〳〵、爰にのめつて居ります。
きち　ドレ〳〵、ほんにこんな憎い奴はない。わしが一思ひに。
ト脇差を取つて拔き放し
可哀やお花もやもめ鳥。九兵衞どのゝ妾になるのを、あの世から見て居ろ。半七、追ッつけ彌市も後からやる。マア、うぬから先へ往生しろ。
ト咽喉へ突き込まうとする。彌市、直ぐに起き上がつて、お吉を突きのけるゆゑ、皆々恟りし
皆々　ヤア、うぬア彌市であつたか。
彌市　うぬが來るのを待つて居たのだ。
きち　オヤ〳〵、半七ではなかつたか。コレ彌市、よう酷い目に遭はせたの。

ト身拵らへする。

彌市　マア、硯から受取らうかえ。

きち　サア、日頃から可愛いと思ふ其方の事。硯を渡す。
ソレ受取りや。

ト後から切りつける。彌市、留めて

彌市　三島造營金を盜み取つた科の上、兄金兵衞を殺した惡黨。又その上にこの彌市をも。

きち　戀路の意趣、生けては置かぬ、覺悟しや。

彌市　硯を寄越せ。

きち　皆の者、ソリヤ。

皆々　合點だ。

ト皆々かゝる。立廻りあつて

どつこい。

トとめる。これより誂らへの鳴り物になり、彌市、皆皆を相手に大タテよろしくあつて、ト〻皆々を殺し、お吉が腹へ突ツ込み抉り、懐中より硯を引き出して居る。この時、後へ新左衞門、走り出て來り

新左　彌市、硯は。

彌市　手に入りました。

新左　オヽ、出來た〳〵。

彌市　先づ、今日はこれぎり。

トめでたく打出し。　ひやらし幕

吉原俄番附　（終り）

春姿詠千金

（はなの はる ひとめ せん きん）

初演の番附

春姿詠千金

序幕

千葉家金藏の場
向島土手の場
武藏屋座敷の場
日本堤殺しの場

役名——千葉當太郎。深見十右衛門。大野甚右衛門。蒲原文平。柳田武太夫。戸川彦九郎。若黨、春島次作。三田屋源次郎。同丁稚、音吉。山崎屋手代彌八。番頭、與兵衞。駿河屋の娘、お菊。武藏屋娘分、お辰。新造、今川。同、磯川。松葉屋喜瀬川。木津勘助。

本舞臺、三間の間、誂らへの金藏。東西高塀、すべて千葉家金藏の體。幕の内より木津勘助、深見十右衛門、繼上下、家老の拵らへにて、双方へ別れ、挾み箱にかゝり居る。蒲原文平、親仁の拵らへ、大野甚右衛門、中年の拵らへ、柳田武太夫、戸川彦九郎、各々用人、物頭にて、野袴、ぶッ裂き羽織にて、並よく挾み箱にかゝり居る。春島次作、袴羽織、股立ち、若黨にて、木津勘助が後に扣へ居る。外に若黨一人、深見十右衛門が後に扣へ居る。皆々並みよく明け六ツの太鼓にて幕明く。

甚右　今日は主人千葉家、軍用金勤番の事替り、斯く申す大野甚右衛門は、先格の通り横目の役。
文平　差添へとして蒲原文平。
武太　柳田武太夫。
彦九　戸川彦九郎。
四人　罷り出でましてござりまする。
十右　イカサマ、甚右衛門どの始め、各々今日のお役目、御苦勞千萬。只今大野氏の仰せの如く、殿より預かり奉る御金藏、さる正月より、斯く申す深見十右衛門が預かり今日より同役木津勘助どのお預かりとござる。何れもお立合ひの上、御金藏お改め下されい。
勘助　大切なる御軍用のお手當金、甚右衛門どのはお家柄と申し、殊に檢分の役目。その外差添への各々、御苦勞ながらお立合ひ下されい。

四人　心得てござる。

ト各々立ち上がる。十右衞門、こなしあつて、懐中より袋入りの鍵を取出し

十右　然らば封印を切り、御金藏開くでござらう。

ト戸前を開く。甚右衞門各々へ目禮あつて中を改めるこなしあつて

甚右　お金一箱を持つて一萬兩と定め、箱數都合百箱を籠め置かれ、百萬兩の御用金、只今改めましたるところ、箱數都合九十七箱。差當つての不足と相見えまする。蒲原氏、今一應お改め下されい。

文平　心得ましてござる。

ト立ち寄り、改める事あつて

甚右衞門どの仰せの通り、三箱の不足と相見えまする。柳田氏、彦九郎どの、お立合ひ下されい。

武彦　心得ましてござる。

ト兩人立ち寄り、いろ／＼改め見て

武太　御兩人の仰せの通り、箱數都合九十七箱。

彦九　三箱の不足に

武彦　相違ござらぬ。

甚右　イザ、この上は勘助どの、貴殿、今日よりお預かりの御當人でござれば、お改め下されい。

勘助　各々お改めの上でござれば、相違はござるまい。併しながら、疎かならぬ御用金の不足、念の爲め、改めませう。

ト立寄り改め見て

分金一箱を以て一萬兩と定められ、三箱を以て三萬兩の不足に相違ござらぬ。

ト此うち十右衞門思ひ入れあり、甚右衞門、十右衞門が側へ立ち寄り、

甚右　十右衞門どの、さる正月、この人數立合ひの上、其許へ引渡し申せし御用金、即ち封印は貴殿の御印形。四面の壁に仔細もなく、何ゆゑにお金は不足いたしてござるな。

十右　ハッ／＼。

ト當惑のこなし。

甚右　イヤサ、この金子は武將のお帳面にもとまり、殿の御用金とは申しながら、武將よりお預かりも同然。例へ一兩紛失いたしても、捨て置き難き一大事。仔細殘らず承はりませう。

ト急いて云ふ。十右衞門、思ひ入れあつて

十右　斯く露顯に及ぶ上は、是非に及ばぬ、申し譯の一通り、速かに申しませう。各々、御家來中を、お遠ざけ下されい。
勘助　如何にもこの儀、仔細あるべき筈、何れも、仔細を遠ざけられい。
甚右　甚右衞門が家來、暫く扣へい。
文平　文平が家來。
武太　武太夫が家來。
彦九　彦九郎が家來。
四人　一同に相扣へい。
家來　ハツ。
十右　十右衞門が家來ども、殘らず扣へい。
若黨　ハツ。
勘助　次作、其方も暫時扣へい。
次作　畏まつてござりまする……イザ、お草履も某と一緒に。
中間　ハツ。
　ト次作その外家來殘らず、下座へ入る。各々並よく向うへ出る。十右衞門、眞中へ直る。各々こなしあつて
甚右　十右衞門どの、して、申し開きの

四人　その仔細はな。
十右　例へこの儀は、一命にかけましても、口外いたすまじと存じ居つたるなれども、差當つてこの十右衞門が、私慾虛妄に相成りましても、家の恥辱、武士の廢る儀でござれば、餘儀なく申し上げう。何れも、御他言は御無用でござる。
甚右　何かは存せねども、他言は致さぬ。
四人　して、その仔細は、如何でござるな。
十右　サ、その申し開きと申すは、これでござる。
　ト懷中より書付け大分出し
各々お改め下されい。
　ト渡す。甚右衞門、改め見て
甚右　こりやコレ、五十兩三十兩より、三萬兩に至るまで諸方の受取り、一札と相見えまする。
　ト次へ渡す。文平受取り、段々と改め見て
文武　ナニサマ、夥しい金子の受取り。
十右　即ちそれが、三萬兩の金の行き場。
甚右　一番の宛名は、十右衞門どのとござれば、この金子の遣ひ手は。
武彦　若殿、當太郎さまでござるかな。

ト云ふを押へて

十右　ヤレ、大切なる儀、密かに〳〵。

トこなし。此うち勘助、思ひ入れ。甚右衛門も思ひ入れあつて、

甚右　元來若殿當太郎さまは、御幼稚の砌りはこれなる勘助どのを以て御師範となし、專ら軍學に心を委ねさせ給ひ、篤實第一の若殿。放埓惰弱に斯く大金を費やされしなどとは、何ともハヤ。

十右　その御不審は尤も至極。勘助どのには山別の御領分、御支配として近年他國の御住宅。また甚右衛門どのには本家にござれば、若殿のお身持ち御存じなきは御尤も。去春より御鬱症の御病氣既に發し、御保養の爲とあつて、一兩度の吉原通ひ。毛を吹いて疵を求むると、それより募り、日夜を分たずして、廓の居續け。大酒を好み給ひ、剩さへ幇間藝者のお手討に及び、金の數も限らず廓の總揚げ、その日の衣裳、その日の費へは、如何ばかりとあつて、諸方の後拂ひ萬端、打捨て置かばお家の汚名と、某が一存にて思案極め、預かり奉る御金藏の封を切り、三萬兩遣ひなくせし申し譯は、この十右衛門が腹一つと、覺悟極めし今日の仕合せ。忠義に捨つるこの命、さら〳〵惜しいとは存じ申さぬ。勘助どの、甚右衛門どの、各々よろしう御披露頼み存ずる。

甚右　思ひ依らざる若殿のお身持ち。例へ貴殿が身に引請け、一命終られても、天知る地知る、若殿のお誤まりは遁がれまい。

文平　さすれば十右衛門どのには、腹の切り損。

武太　盗人を捕へて見れば、我れ〳〵が御主人。

甚右　こりや座を占めて、評議いたさずば

四人　なりますまい。

十右　兎角よろしう頼み存じまする。

甚右　イヤ、ナニ、勘助どの、差當つて某始め、何れも甚だ當惑。若殿の御名を出さず、事穩便に取計らふ御分別はござるまいかな。

ト此うち勘助、思ひ入れあつて

勘助　お役柄といひ、御老體の貴殿。聊か存じ寄りもござれど、わざと差扣へ居りましてござるが、然らば拙者料簡の通り、取計らひ仕りませうか。

四人　何分よろしう

十右　頼み存じまする。

勘助　左樣ござらば何れも　御金藏の戸前をお打ち下さ

れい。
彥九　心得ました。
ト戸前を立て、鍵下ろし
元の如く、戸前を致してござる。
ト勘助、紙にて錠前に封を付け、懷中より印形を出し
封に捺し
勘助　左中百箱の金子、木津勘助慥かに預かり、滯りなく
封切仕つてござる。
十右　すりや、三萬兩の不足御承知あつて。
勘助　預かりの某、斯く封印の仕れば、明年役儀相替るまでに、不足の金子調達あつて、償はるゝは、忠義の一つかと存ずる。
十右　段々の御深切。其許の御料簡を以て、拙者が忠義も相立つ道理。勘助どの、十右衛門め、キツと御恩に着ますでござる。
勘助　某が斯く計らふも、全く主人を存ずるから。お禮には及ばぬ儀でござる。
甚右　天晴れ勘助どのゝ御計らひ、感心仕つてござりまする。
勘助　この上、十右衛門どのゝ忠義には、お金のたんぞく。
十右　來春までに納める工風。
甚右　若殿の御放埒も
文平　無難に納まる
武太　この場の落着。
十右　他言を憚る
五人　一大事。
勘助　密かに／＼。
ト押へる。チョン／＼に道具納ろ。
本舞臺、三間の間、見附け淺黄幕。草土手に誂らへの玉垣、よき所に日覆ひの石の手水鉢、納め手拭大分かゝりあり、上の方へ寄せて青石の碑の銘、これに其角の發句を記し、この後に接木に造りし梅の立ち木、その外松梅の立ち木、所々にあしらひ、よき程に、花道の兩側、一面に誂らへの小松を突き上げる。この時向う揚げ幕へ石の鳥居を飾りつける。向島三圍稻荷の境內の模樣よろしく、騷ぎ唄にて道具とまる。
ト矢張り騷ぎの唄にて、向うより松葉屋喜瀨川、傾城

余所行きの拵らへにて、今川、新造の拵らへ、裸人形に、笹龍膽の紋を縫はせし衣裳を着せ、抱へて出る。磯川、振り袖。新造の拵らへ、禿二人。後よりお菊、仲の町茶屋の娘にて、若い者に隅田川の樽を持たせ、各々屋根船より上がりし心にて出て來る。花道よき所にて

今川 申し花魁、斯う見晴らした隅田川の春景色、なんと好いぢやアござんせんかいなア。

ト云ひながら、船に少し醉うたるこなし。

きく どう云うても、今川さんや磯川さんは、外珍らしいに依つて、堀から土手まで、船に醉はしやんすのぢやわいなア。

禿一 わたしらはいつまでも、船に乘つて居たいわいなア。

禿二 わたしや、水の中の鳥が、寒からうと案じらるゝわい。

喜瀬 ほんに、女波の云やる通り、あの水鳥の憂き寐の中にも、雄鳥に口說かれて居る雌鳥もあらう。なんぼう人に面白う見えても、さぞ獨り寐の、寒い事であらうわいの。

磯川 ソレナア、丁度花魁が、若殿さんに口說かれて、揚詰めのその中にも、たつたお一人憂き寐の鳥。

きく 身につまされて、今の仰しやりやう、御尤もでござんすわいなア。ほんに、こんな事云うて居ずと、早う向うへ、行かうぢやないかいなア。

ト矢張り騷ぎにて、皆々本舞臺へ來ると、下座よりお辰、武藏屋の娘の拵らへ、やつし前垂れにて

たつ これは喜瀬川さま、駿河屋のお菊さん、ようお出でなさんしたなア。

きく お辰さん、この間は遠々しうござんすなア。今日は千葉の若殿樣、お前の處へお出でなされたゆゑ、花魁をお連れ申して、いま船から上がつたのぢやわいなア。

たつ サイナア、花魁のお出でが遲いと云うて、大抵お側の衆が、叱られてござる事ぢやないわいなア。

きく ほんに、日頃お氣の短かい殿樣、さうでござんせう。そんなら花魁、直ぐに武藏屋へお出でなさらんかいなア。

喜瀬 お菊さんとした事が、ちつとの間も殿樣の側を離れて居たい事は、よう知つて居ながら、不粹なお方ではあるわいなア。

きく　イヽエイナア、そりや合點ぢやけれど、もし、御機嫌を損ねると、側に居る者が、堪る事ぢやアござんせぬわいなア。
たつ　お菊さん、其やうな事なら、わたしも、いつそ怖うござんす。早う花魁をお連れ申して下さんせいなア。
喜瀨　ほんに〳〵、なんぼう殿さんが腹立てしやんしたとて、怖い事があらうぞいなア。主一人遊ばして置いたがよいわいなア。女波、煙草盆持つておぢや。
女波　アイ〳〵。
ト喜瀨川、床几に腰を掛ける。女波、煙草盆を持つて行く、今川、吸ひつけて喜瀨川に渡す。此うち禿の二が抱いて居る人形を見て
きく　申し、その人形は、花魁のでござんすかえ。
禿二　アイ、これは花魁の、大事の〳〵坊でござんすわいなア。
きく　ほんに、今日は未だ抱かぬに依つて、ちつと貸して下さんせ。
ト人形を取る。
たつ　お菊さん、わたしにもちつと貸して下さんせ。
きく　お辰さん、マア、わたしが先ぢやに依つて、後で貸して上げうわいなア。
たつ　マア、わたしに抱かして下さんせいなア。
きく　イヽエ、わたしぢやわいなア。
ト兩人せり合ふ。
喜瀨　これはしたり、お前方も其やうに、せり合うて、大事の坊を泣かして下さんすなえ。
ト人形を取り
オヽ、可哀さうに〳〵。ねん〳〵ころんや〳〵。
ト人形を搖ると、また騷ぎ唄になり、向うより源次郎、兩替屋の息子の拵らへ、音吉木綿やつし丁稚の拵らへ甲斐絹の風呂敷包みを持ち附き添ひ出て、花道よき所にて
音吉　モシ若旦那、お前、足が早いに依つて、大抵供がしにくい事ぢやない。まそつと靜かに歩きなさい。主足よければ下司足惡しとは、よう云うた事ぢや。
源次　何を云ひ居るやら。それぢやに依つて兩國から、猪牙にしようと云うたれば、船は嫌ひぢやと云うたぢやないか。
音吉　そりやア知れた事。歩いてさへ腹が減るもの、猪牙船で搖られたら、疾に夕飯を食はねばならぬわいな。イ

ヤ又、あの猪牙と云ふ奴が、地震の大家樣を見たやうで、心持ちの態い奴ぢやて。

源次　ハヽア、野暮な奴ではある。それでは一生、女郎買ひはならぬぞや。

音吉　彼の食はれぬ程にはないて。

源次　ハテ、意地の汚ない奴ぢや。それはさうと、若殿樣が、武藏屋へお出でなされてならよいが。

音吉　どうぞ早う膽を出し居ればよいが。

ト源次郎の通りに云うて、兩人、舞臺へ來る。

たつ　オヽ、源次郎さま、ようお出で遊ばしたなア。

源次　お辰さん、まだ御年始でござりましたなア。早速ながら今日はお前へ、千葉の若殿樣が、お出でなされたと聞いたが、もうお出でなされてかの。

たつ　アイ、疾からお見えなされてゞござんす。その若殿より外に疾から來て、お前を待つて居るお方が、ついそこらにござんすぞえ。

きく　コレ、お辰さん、滅多な事云はしやんすなえ。

トお菊、氣兼ねのこなし。喜瀨川思ひ入れ。

喜瀨　エ、聞えた。そんならあなたが、三田屋の源次郎さんと云ふのかえ。

たつ　アイ、さうでござんす。

喜瀨　道理でお菊さんが、味な樣子ぢやと思うたわいな。お菊さんがいつの間にやら、派手な事ぢやなア。

きく　花魁、何云ひなさるやら。わたしや何にも知りませんもの。

喜瀨　イエ〳〵、いざ言問はねど、慥かにそれと都鳥でござんすわいな。

たつ　お菊さん、花魁は好う知つておやぞえ。

きく　さうかいなア、こちや嫌いなア。

喜瀨　申し、まだお前さんにはお近付きにはなりませぬが、わたしや松葉屋の喜瀨川でござんす、あのお菊さんは分けてわたしとは心安うござんす、この後とも外で惡性さしやんせずと、可愛がつて上げて下さんせい。

ト此うち源次郎、床几へ腰を掛け、煙草をのんで居て

源次　アハ、私しも物が云ひたいけれど、ちつと差合ひがあるに依つて、挨拶もならぬ仕儀でござりまする。

ト嘘事のやうに云ふ。

喜瀨　エ、聞えたわいなア。そんならアノ。

ト音吉へ心措きあつて

ソレ、差合ひでござんすな。

源次　差合ひ〳〵。大抵差合ひぢやないて。
音吉　申し、若旦那、差合ひ〳〵、大抵差合ひではないとは、なんの事ぢやえ。
源次　サア、その差合ひと云うたはな。
音吉　その差合ひとは。
源次　オヽ、それ〳〵、先づ河豚と間男、鰻に山の芋、鯉に麥飯、滅多に武藏坊で、物は食はれぬと云ふ事よ。
音吉　エヽ、聞えた。鯰に瓢簞と食ひ合せぢやわい。
喜瀬　これは氣の毒な差合ひで、お菊さんに話しさせさす事もならぬなア。
きく　誰れぞ氣を利かせて、その差合ひをちつとの間、どうぞ仕樣はないかいなア。
　ト源次郎、呑み込み
源次　コリヤ音吉、わが身は橋へ行て、番頭の與兵衛が來るか見て來てたも。ちつと隙が入つても大事ない。
音吉　アイ、ツイ行て參ります。
　ト行かうとして
イヤ〳〵、滅多に行かれぬわいな。
源次　そりや、なぜに。
音吉　なぜとはお前は、わしを使ひに遣つて置いて、ちやつと先へ飯を食つてしまはうでな。イヤ〳〵、滅多に行かれぬ〳〵。
源次　ハテ、氣の惡い奴ぢや。わが身が戻つて來るまで、飯食ふ事ぢやないわい。
音吉　それに違ひはないかえ。
源次　ハテ、くどい奴ぢや。
音吉　若旦那。
源次　なんぢや。
音吉　しかと詞を番うたぞ。
　ト仔細らしく云ふ。
源次　何を云ひ居るやら。
音吉　ドリヤ、一走り行て來うか。
　ト向うへ走り入る。
喜瀬　ほんに、氣の術ないお供でござんすなア。
源次　左樣でござりまする。彼奴は內の目明しでござりますゆゑ、何も聞かされる事ぢやござりませぬ。マア、何は格別、お辰さん、お前は大儀ながら、若殿樣へ源次郎がお見舞に上がりましたと、申し上げて下されませい。
たつ　アイ〳〵、畏まりましてござんす。
　トお辰下座へ入る。

喜瀬　サア、今の差合ひの戻つて來ぬうち、お菊さん、源次郎さんと、ちやつと話さしやんせいなア。
きく　ぢやと云うて。
トうぢ〳〵する。
喜瀬　お前もマア初心らしい。嗜なましやんせ。わたしらはこちらに居るに依つて、恥かしい事はない、ちやつとぢやわいな。
トお菊を突きやる。
源次　オッと、滅多に側へ寄るまいぞ。
喜瀬　そりや、なぜにえ。
源次　ハテ知れた事、いま番頭の與兵衛が爰へ來る。さうしてあの晋吉に見付けられると、大抵の事ぢやないわいの。
喜瀬　さう云ふ事なら、源次郎さんもお菊さんも、彼方と此方と、別れて居て話さんせいなア。
源次　それ〳〵、おれはズッと此方に居るに依つて、其方は其方へ、寄つて居や〳〵。
喜瀬　お菊さん、そんならお前は、ズッと彼方へ行て居やしやんせ。
ト喜瀬川、お菊を西の端へやる。源次郎、東の方へ寄り
源次　云ふ事があつたら、其方から云うたり。
きく　サア、そんなら云ふぞえ。
喜瀬　サア、どつちからなと、始めさんせいなア。
きく　あのな。
ト大きな聲にて云ふ。
喜瀬　お菊さん、あんまり聲が大きいわいなア。それでは肝心の話しの所が、人に聞えるわいなア。
きく　それでも、小さい聲では屆かぬわいなア。
瀬喜　ぢやと云うて、ちつと加減をして云はしやんせいなア。
きく　そんなら、あのな。
ト小さい聲にて云ふ。
喜瀬　そりや又、あんまり遠慮過ぎるわいなア。今の調子を、少し上げて云はしやんせいなア。
きく　ねつから程合ひの知れぬ事ぢやござんせぬ。そんなら、あのな。
ト中位な聲にて云ふ。
喜瀬　それ〳〵、その調子〳〵。
源次　どうやら斯うやら、調子が合うたさうな。

きく　深川の藝者さんの噂を聞いたぞえ。
源次　なんぢや、鮫津の川崎屋で穴子を食うた。
きく　オヽ辛氣、さうぢやないわいなア。
喜瀬　サア〳〵、手繰りかけて、云はしやんせ〳〵。
きく　サア、その藝者さんの譯を云はしやんせいなア。
　ト思はず、此方へ來ようとする。
源次　オッと、此方へ寄るまい〳〵。
きく　これは又、辛氣な事ぢやなア。
源次　なんぼ辛氣でも、不自由して、云うたり〳〵。
きく　サア、有やうにその事を云はしやんせんと、側へ寄つて話しをするぞえ。
源次　それぢやと云うて、ねつから此方に覺えのない事ぢや。
喜瀬　申し、源次郎さん、違て隱さしやんすと、お菊さんを側へやるぞえ。
源次　滅相な。側へ寄つて堪るものか。
きく　そんなら、有やうに云はしやんすか。
源次　サア、それはな。
喜瀬　側へやらうかえ。
源次　サア、それは。

兩人　サア。
源次　サア。
兩人　サア〳〵〳〵。
　ト源次郎が側へ來て
きく　どうでござんすぞいな。
源次　これは困つた事ぢや。
　トこの時、音吉走り出て、花道より、この體を見付け
音吉　サア、見付けたぞ〳〵。
　ト云ひ〳〵舞臺へ來る。源次郎、悄りして、ちやつと側へ寄り
源次　ソリヤこそな。
音吉　なんでも内のお孃さんに、好い土產を見付けたぞ。
源次　コリヤ〳〵、滅多な事を云ふな。おりや、あの衆とは、近付きでもなんでもないぞ。
音吉　その何ともない者か、なんで一つ所へ寄つて居やしやんした。
源次　何を云ふやら、近付きでもないあの衆と、どうして一緒に寄つて居るものぢやいの。
音吉　それでも、いま向うの土手から見付けて置いたのぢ

や。
喜瀬　こりや、なんぢやわいなア、音吉さんとやら、お前は夜目遠目と云ふ事を知らしやんせぬな。
音吉　そりや、なんの事ぢやえ。
喜瀬　サア、その夜目と云ふはな、なんぼう離れて居る人でも、ズッと遠い處から見ると、一つ處へ寄つて居るやうに見えるものぢやわいなア。
音吉　ハヽア、それで今向うから見た時、一つ所へ寄つて居るやうに見えたものぢやな。ハテ、ようしたものなア。
喜瀬　なんと不思議なものであらうがな。
ト音吉、思案して
音吉　イヤ、待たんせや。不思議なは不思議だけれど、今ツイそこへ來るまで、矢張り一つ所へ寄つて居るやうに見えたぞえ。
喜瀬　ハテ、疑ひ深いお方ではある。それが嘘なら、ま一度、向うから見やしやんせいなア。
音吉　オツとよし〳〵。嘘であつたら內へ去んで云ふぞえ。
きく　嘘かほんまか、ちやつと向うから見たがよいわいなア。源次郎さん。
源次　それ〳〵、ちやつと向うへ行て見たがよいわい。
音吉　合點ぢや〳〵。
ト花道よき所まで行きて、喜瀬川、源次郎に話しせいと仕方する。源次郎、お菊の側へ來て
源次　コレ見や。あの通りぢやに依つて、別れて居たのぢやわいの。
きく　そして又此やうに、側へ寄つて大事ないかえ。
トこの臺詞のうち、音吉、花道よき所にて舞臺を見る。三人一つ處に寄つて居る。不思議なるこなしにて、逆樣になり、股倉より舞臺を見たり、片手を當てゝ見たり、いろ〳〵よろしくあつて
音吉　ほんに若旦那、とんと一緒に寄つて居るやうに見える。
ト段々舞臺へ寄つて來る。喜瀬川、兩人に別れて居れと仕方する。源次郎、お菊、兩方へ別れる。音吉、程なく本舞臺へ戻る。
喜瀬　なんと別れて居やしやんせうがの。
音吉　ほんに、こりやア、妙なものぢやなア。
源次　なんと、どんなものぢや〳〵。

音吉　モシ〳〵、今度はおれが爰に居るに依つて、お前、向うへ行て見やんせ。
源次　合點ぢや〳〵。
ト源次郎、向うへ行く。喜瀨川おかしきこなし。源次郎、舞臺へ戻つて來て
爰へ來ると、ほんに別れて居るなア。
音吉　なんぼ主と家來でも、目と云ふものは同じ物ぢやなア。
源次　でも、おれはお前のやうに、饅頭を見ると食ひたがりやアせぬて。
音吉　ほんに、そこもあるなア。
喜瀨　ほんに、うまいお人ではあるわいなア。
トこの時、下座よりお辰出て
たつ　申し〳〵、今川さん、若殿樣が大癇癪でござります。どうぞ早う花魁を、お連れ申して來て下さんせいなア。
きく　申し花魁、皆さんが迷惑でもござんせう程に、武藏屋へお出でなさんせいなア。
ト下座より、無法、お手醫者の拵らへ、坊主にて、衣裳羽織、大小を差し、後より近習の侍ひ、大勢付き添ひ出る。
無法　喜瀨川どの、そこにござるか。先刻より御前には、其許が遲いと云うて例の癇癪。流石の愚老も閉口いたし兼ねる。何とぞ、只今お越し下されい。
近習　我れ〳〵までも一同に、お賴み申す〳〵。
たつ　申し、あの通りでござりますわいなア。
喜瀨　なんぼ殿樣が癇癪でも、わたしが行きたい時分でなければ行かねども、皆さんの難儀さしやんす事なら、行て上げうわいの。
無法　これは〳〵、忝ない仕合せに。
近習　存じ奉るでござりまする。
喜瀨　サア、そんなら、源次郎さんも、ござんせぬかいな。
源次　イヤ〳〵、わしは與兵衞を待ち合せ、後から參りませう。
皆々　然らば喜瀨川どの。
喜瀨　お菊さんも、ござんせいな。
ト騷ぎになり、お菊、源次郎にこなしあつて、この一件殘らず下座へ入る。源次郎、音吉殘り
源次　イカサマ、同じ吉原の傾城にも、イヤ又、あの位全

盛な女郎もないものぢやわい。
晋吉　イヤ又、この位遲い膳の出しやうもないものぢやわい。
　ト源次郎のやうに云ふ。
源次　ハ、、、ハテ、待ち兼ねる奴ではある。イヤ、ほんに待ち兼ねると云へば、この與兵衞は遲い事ぢやなう。
　ト晋吉、向うを見て
晋吉　番頭が船から、上がつて來をるワ〳〵。
ト騷ぎになり、向うより三田屋手代與兵衞、着附け羽織、兩替屋の番頭の拵らへにて出て來る。
番頭さん、遲い足ぢや。もつと早う歩かんせいなア。
與兵　これは〳〵若旦那、お早うござりましたなア。
　ト云ひ〳〵舞臺へ來る。
源次　待つて居た事ぢやわいの。早速ながら昨日は、段々の世話、忝ない〳〵。
與兵　これは若旦那様、人をしやつからすやうな事を仰しやりまする。誰れあらう三田屋と云うたら、江戸中で知つたる兩替店の番頭が、質屋の使ひ致して上げるも主人へ奉公。ほんに忠義を云ふ事は、寐た間も忘れた事のない、與兵衞めでござりまする。イヤ又、申すではござりませぬが、一から十まで、何御談合なされましても拔け目のない。そして調へて上げました二百兩は、何になされましてござりまする。
源次　さればいの、あの守り刀は、兄勘助どのより、研いでくれよと預かつたる、大切の品なれども、千葉家の若殿様が、吉原の藝者、幇間への揃ひを、越後屋へお誂らへなされ、その代金を、深見十右衞門さまへ取りに行たところが、此方へ屆けもなく商ひ致したゆゑ、お金は出ぬとの御無體。それで越後屋が代官所へ、お願ひ申すとの噂を聞いたゆゑ、お出入り申す千葉家のお名の出る事と思ひ、その金はわたしが拂つて遣はさうと、請合ひは請合うたれど、養父仁右衞門さまお果てなされ、直ぐに家督讓りもある筈で、讓りの一札も持つては居れど、町のお年寄りは他行の留守中ゆゑ、表向きの披露目もならずそれゆゑにお金はありながら、自由にならず。と云うて必要な金の才覺。それゆゑ大切の守り刀と思へども、其方を頼み、質物に入れ、二百兩調へてもらうた。譯と云へば、この通りぢやわい。
與兵　イカサマ、流石にお侍ひのお胤ほどあつて、古主な

りお出入りの若殿様の、御名を雪ぐ御料簡。ア、惜しいお方を町人にして置く事ぢやな。イヤ、ほんに、とんと忘れて居りました。こりやコレ、守り刀を質物に取つたとある質屋の書付け。モシ、内で人に見付けられてはと存じまして、上封をして置きました。これを大切に持つてござりませい。

ト懐中より封じたる一札を出して渡す。

源次　段々の世話忝なうござる。併し、誰れにも沙汰なしに頼むぞや。

與兵　ハテ、番頭でござりますわいの。私しも今日は用事もあり、また若殿様へお目見得遊ばされまし。

源次　さうしませうわいの。

ト此うち音吉、手を組み、思案して居て

音吉　若旦那、こりや、ひよんな事が出來て來たわいの。

源與　ひよんな事とは。

ト音吉、聲を潜めて

音吉　腹が減つた。

與兵　何を吐かすやら。

音吉　でも辛抱のならぬ、ひよんな事ぢやの。

源次　ドレ、そんなら武藏屋へ行かうか。

音吉　ア、嬉しや、どうやら知行にありつきさうな。

源次　そんなら與兵衞。

與兵　サア、お出でなされませ。

ト騒ぎになり、源次郎、與兵衞、音吉を連れて下座へ入る。この騒ぎのうち向うより、深見十右衞門、大小袴羽織。蒲原文平、柳田武太夫、戸川彦九郎、同じ拵らへにて出て來り、花道にとまる。

十右　なんと各々、市中を離れ、斯う見渡したる隅田川の景色は、當所第一の美景てはござらぬか。

文平　イカサマ、別な風景でござる。

武太　若殿當太郎さまには、松葉屋の喜瀬川を召連れられ疾より武藏屋へお入りと承はつてござる。

彦九　イザ、御機嫌を伺はうではござらぬか。

十右　左様いたさう。

文平　兼ねて十右衞門どのゝ御内意に依つて、勘助より三田屋源次郎へ預け置きたる三光の守り刀、工風を以て奪ひ取り、勘助が越度を拵らへる密使、即ち三田屋の番頭與兵衞に、とくと申し聞かせ置きましてござる。

武太　即ち番頭與兵衞も、今日これへ參り居る筈でござる。

文平　この儀首尾よう參りなば、十右衞門どのゝ兼ねての望み。
彦九　我れ〳〵も立身。
十右　ヤレ、何れも、大切なる儀でござる。萬事は武藏屋にて申し談じませう。暫らくが間、あれなる床几に。
三人　然らば十右衞門どの。
十右　何れも、お越しなされい。
　ト矢張り騷ぎにて、本舞臺へ來ると、奥より與兵衞出て、皆々を見て
與兵　これは〳〵何れも樣、ようこそお越し遊ばされましてござります。
十右　三田屋の番頭與兵衞、その後は逢ひ申さぬ。堅固の體、重疊々々。
與兵　これは〳〵結構なお詞に、あづかりましてござりまする。毎度お屋敷へは上がりますれど、掛り違ひでお目にもかゝりませぬ。何かの儀は武太夫さま、文平さまより承はりましてござります。即ちお頼みの守り刀の儀は。
　ト云はうとする。十右衞門押へて
十右　コリヤ、他聞を憚る密事。大よそは何れもより承知。
與兵　イカサマ、入込み雜い場所なれば。
文平　萬事密かに、合點か。
武太　何れも、土手へ船が着いたと見え、勘助、甚右衞門同道にてあれへ參るワ。
　ト各々向うを見て
十右　如何にも勘助、甚右衞門。
武太　何事も、秘すべし〳〵。
　ト騷ぎになり、向うより勘助、袴羽織。甚右衞門、同樣の形にて出る。
勘助　甚右衞門どの、何れもには、早參られたと見えまする。
甚右　ナニサマ、油斷仕つた。
勘助　イザ、甚右衞門どの。
甚右　先づ〳〵お先へ。
勘助　然らば御免下されい。
　ト勘助先に、舞臺へ來る。
文武　御兩所、只今お越しでござるかな。
勘助　何れも儀には、お早いお越しでござるな。
十右　御兩所には、定めてお船でござらう。

甚右　老體の拙者、御推察の通りでござる。

勘助　して、各々には、最早若殿へお目見得なされたかな。

武太　イヤ、我れ〳〵もやう〳〵只今。まだお目見得仕りませぬ。

文平　定めて、御酒宴最中でござらうと存じて。

彦九　暫時これに扣へ居りまする。

十右　御前へは御一緒に、罷り出ようと存じて。

勘助　これは〳〵、御心配忝なう存じます。

文平　イザ、何れも、これへお越しなされ。

甚右　然らば御免下されい。

ト上の床几には勘助、甚右衛門、腰をかける、下の床几へ十右衛門、文平、武太夫、彦九郎、各々並よく並ぶ。與兵衛、煙草を勘助が前へ持つて行き

與兵　勘助さま、甚右衛門さま、御機嫌ようお渡りなされますな。

勘助　三田屋の番頭與兵衛、堅固であつたな。

甚右　先刻よりこれに居めされたか。

與兵　左様でござりまする。即ち今日は、手前主人源次郎、若殿様へお目見得に上がりましたにつきまして、參りましてござりまする。

勘助　ムウ。すりや弟源次郎は、疾より參り居るか。

與兵　左様でござりまする。

勘助　幸ひ、源次郎には用事もあり、これへ呼んでくりやれ。

與兵　畏まりましてござりまするな。

ト下座の方へ行かうとする。奥より源次郎、吾吉を連れて出る。

ホウ、若旦那、只今迎ひに參る處でござりました。

源次　これは〳〵、十右衛門さま、甚右衛門さま、何れも様、兄者人にも、御機嫌ようお渡りなされまするかな。

十右　源次郎、先づは堅固でめでたうござる。

勘助　イヤナニ源次郎、先達て某、上より預かり奉るところの三光のお守り刀、研ぎ致せよと申しつけ置いたが、事成就に及んだが。

ト源次郎、思ひ入れあつて

源次　成る程、大切なる御用、近く成就いたしまするでござりませう。

文平　イヤ〳〵源次郎、おてまへは若年だに依つて、辨まへはござるまいが、よく聞かつしやい。この度武將家よ

り御系圖檢めの上意下り、即ち主人千葉家より御覽に入れる三光の守り刀、御系圖の爲には折紙同然の一品。勘助どのは代々お家柄の事ゆゑ、殿より預け置るゝは、勘助どのゝ面目と申すもの。必らず粗相のないやうに、早早研ぎ上げ、差上げたがよい。

源次　委細畏まりましてござりまする。

　ト　この時、與兵衞、思ひ入れあつて

與兵　モシ〳〵若旦那、ちよつとお出でなされませ。

　ト袖を引く、源次郎、下の方へ來る。

源次　與兵衞、何の用ぢやぞいの。

與兵　何の用どころぢやござりませぬ。昨日私しにお渡しなされたあの守り刀は。

　ト云はうとする。

源次　コレ〳〵、その事を爰で云うて堪るものかいの。

　ト小聲で云ふ。

與兵　イヤ、云はにやなりませぬ。

　ト大きな聲で云ふ。

源次　これはしたり、意地の惡い、大きな聲をしやんないの。

與兵　でもお前、こればかりは云はにやなりませぬ。なぜと云ひなされえ。いま文平さまのお話しを聞きましたか、もし最前の守り刀が、三光とやらなら、お前樣のお身の大事。現在私しが爲には、お主樣の御難儀になる事を、なんと見て居られませうと思はつしやりまするぞ。ついわしが飯炊きの與兵衞なら、構ひも致しませねど、大旦那の仁右衞門さまより、御恩を蒙むりました私し。只今三田屋の番頭を勤める與兵衞。見す〳〵お前の御難儀を見捨てゝは、世間の口の端が恥かしうござりまする。ぢやに依つてこればかりは、申し上げまするが、忠義の第一でござりまする。

武太　與兵衞、そちや最前から何を申して居るのぢや。

與兵　イエ〳〵、ちつと內證事でござりまする……若旦那いよ〳〵三光とやらでござりまするか、どうでござりまする。其やうに押默つてござつては、事が濟みませぬ。ちつとは又、番頭の私しが心にもなつて見て下さりませいなア。

　ト此うち源次郎、俯向いて居る。與兵衞つく〴〵見て

其やうに物も云はず、當惑してござるのは、矢張り三光とやらでござりますかえ。これは又情ない。ちと物を仰

しやりませいなア。とても埒が明かぬ。
トこちらへ來て
モシ、文平さま、只今あなたがお話しなされました、三光の守り刀とやら、鶴菱の錦の袋に入つたのではござりませぬか。
武太　如何にも、鶴菱の袋入れだ。
與兵　そりやこそな／＼。こりや大切の事ぢやな。若旦那、こりやお前は、どうしようと思うてぢや。私しは途方に暮れて居ります。
武太　コリヤ／＼與兵衞、三光のお守り刀が何と致した。
與兵　イヤサ、三光の守り刀は。
彥九　苦しうない、早く云やれ。
與兵　サア、云へばお主の難儀、云はねば忠義の道立たず、こりやマア何としたらよからうぞいの。
トいろ／＼當惑のこなし。十右衞門、構はず煙草のんで居る。勘助、甚右衞門、思ひ入れ。
文平　最前より與兵衞の當惑、何とも心得ぬ。何事に依らず、身がよろしく計らひくれう程に、有やうに申せ。どうだ／＼。
與兵　お情深い文平さまのお詞。左樣ならば據ろなう申し上げまする。勘助さまよりお預かり申されました、お守り刀は、若旦那の手にはござりませぬ。
彥九　すりや、お守り刀は。
ト彥九郎、武太夫、顏を見合せ
彥九　ハテナア。
トこなし。甚右衞門、ツカ／＼と源次郎が側へ來て
甚右　源次郎、どう云ふ仔細で、大切なるお守り刀が、其方の手にはない。仔細はどうぢや／＼。
ト急いて云ふ。源次郎、こなしあつて
源次　成る程、斯うなりまする上からは、包みませうやうは、ござりませぬ。成る程、そのお守り刀は。
甚右　如何いたした。
源次　質物に差入れましてござりまする。
甚右　ヤ、、、なんと。
源次　據ろない儀がござりましたゆゑ、二百兩の質物に入れましてござります。
甚右　ヤア、うつけ者めが。そちや何と心得居る。この守り刀に凶事あれば、其方が爲には義理ある勘助どの丶、お身の難儀になると云ふ所へ、心の付かぬうろたへ者めが。各々の手前、面目なき事ながら、もと其方はな、某

が實子、手廻りの女に懷胎させ、面目なう思ふゆゑナ、これなる勘助どのに密々に、御談合申せしところ、弟となして十五歳まで養育下され、即ち殿へお出入りの町人、三田屋仁右衛門へ養子に遣はされ、町人ながら武士づき合ひ。今日を安樂に暮らすは、誰が施ぢやと思ふ。これ皆勘助どのゝ大恩ぢやぞよ。その恩義を忘れ、勘助さまへ難儀をかける道知らず。云ひ譯あらば早く致せ。どうぢや〳〵。

十右　イヤ〳〵、甚右衛門どの、さう性急に仰せられては若年の源次郎、申す事も後や先。

甚右　おやと申して、餘りなる言語道斷。

十右　サ、、、ようござる〳〵。例へ質物に入れたと申してからが、請け戻せば濟む事。御老體のお氣を揉まれずと、先づ〳〵。

トよろしく宥める。

與兵　イヤ〳〵、十右衛門さま、お詞の中でござりますれど、例へ二百兩が一千兩の金を積みましても、その刀は再び戻りは仕りませぬ。

十右　心得ぬ與兵衛が詞。質物に差入れたるお守り刀、金子を以て請け戻すに、なぜ戻らぬ。

與兵　さればでござりまする。質物に入れた刀は、若旦那の一寸遁がれ口上、有やうは賣り拂つてしまはれましたのでござりまする。

ト勘助、甚右衛門、源次郎も驚ろくこなし。十右衛門、思ひ入れあつて

十右　ナニ、質物に差入れしとは僞り。お守り刀は賣り拂つたとな。南無三方、お家の大事。ハテ、何ともハヤ。

ト當惑のこなし。この時源次郎、ツカ〳〵と與兵衛が傍へ來て

源次　コレ與兵衛、其方はマア、とつけもない事を云やるなう。現在、其方を走み、差入れた質物。賣り拂つたとは、どう云ふ譯ぢやぞいの。

與兵　若旦那、お前もマア物覺えの惡い。あれ程賣つてくれいと云ひなさつたぢやないかいなア……でもお前の云ひなさつたに違ひもせぬもの。

源次　よい〳〵、さう片意地に云やれば、此方には質物に入れたと云ふ慥かな證據があるぞや。

與兵　慥かた證據とはえ。

源次　サア、その證據と云ふは、最前わが身が渡した質物の書付け。

ト最前の一札を出し
これが質物に入れたと云ふ、證據でございまする。
十右　イカサマ、證據の一札出る上は、質物に差入れたるに相違はあるまい。與兵衞とやら、其方が詞、轉倒いたすぞよ。
ト一札を取り、披き見て
一つ金二百兩、守り刀一腰、右は質物にて御座なく候ふ、お頼みにつき賣り拂ひ申し候ふところ實正なり、正月十日、番頭與兵衞、三田屋源次郎さまへ。こりやコレ、源次郎願ひに付き、依つて賣り拂うたに相違なき一札。
與兵　なんと、十右衞門さま、僞はりではございますまいかな。
十右　如何にも。退引きならぬこの一札。ハテナア。
ト こなし。源次郎、一札を取つて見て
源次　こりやコレ、賣り拂つたと云ふ文言。すりや、その時改めなんだゆゑ、今この仕儀。ホイ。
ト當惑のこなし。
與兵　なんと、わたしが云ふ通り、違ひはございますまいがな。如何にお前の難儀になつて來たと云うて、これ程慥かな證據のあるのに、爭ひなさるは、あんまり押しが強いと云ふものぢやわいな。そりやハヤ、一旦質に入れてくれと云ひなさつたに違ひない。ところでわしも、骨折りをやりかけて見たところが、代物が代物ぢやに依つてどこでも否ぢやと云ふワ。そこでお前に談合したれば、何分無ければならぬ金ぢやに依つて、どうしてなり働らいてくれと云ひなさつた。わしも、又そんな事にならうとは夢にも知らず、賣る相談に極めたワ。ところでこの一札の文言ぢや。コレ、質物には御座無く候ふ。なんとよしかえ。ようございますか。ハイ、どなたもこの通りでございます。質物にては御座なく候ふ。
ト一札を皆々へ見せる。
モシ若旦那、必らず私しをお怨みなされますな。この文言に、お頼みに依つてとございまするなりや。コレ、お前が頼みなさつたに依つて、賣つて上げたは主思ひ、お前の難儀になる事と知つたら、胸に手を置き心を碎き、膝と膝とを突き合せ、また談合もあらうもの。生中お前がその時に、隱しなさつたが聞えぬ。そりや若旦那、胴慾ぢやわいな〳〵。
ト泣いて云ふ。

十右　源次郎に限り、斯程の大事にかゝるべき事を、無下に賣り拂ふ筈はござらぬ。勿論、若氣の料簡にて、僅かの金子に差詰まり、斯樣の事は間々ある事とは云ひながら、大切なる守り刀、上覽に入れぬ時は、千葉家の大事。勘助どのゝ誤まり。ハテ、氣の毒千萬。

トよろしくこなし。甚右衛門、最前より思ひ入れあつて、刀押取り立ち寄る。勘助、最前より思ひ入れあつて、この時、甚右衛門を留めて

勘助　甚右衛門どの、こりや何召さる。

甚右　義理ある貴殿へ難儀をかけ、うつけ者の、その科の申し譯に。

勘助　イヤ、お手討ちになりますまい。

甚右　とは又、なぜに。

勘助　其許の御實子とは申しながら、一旦某が申し請けたれば勘助が弟、彼れに誤まりござれば、拙者が手にかけ餘人の刀は穢しませぬ。

甚右　ぢやと申して。

勘助　御老人の御性急、甚右衛門どの、お年の加減か、鋼が裏へ廻りました。

甚右　段々のお志し。イヤ、段々の不調法。

トよろしく納める。勘助こなしあつて、源次郎が側へ來て

勘助　源次郎、五ヶ年以前其方を、三田屋仁右衛門方へ養子に遣はす砌り、養ひ親の家名を大切に仕り、金銀を主人の如く敬ふが町人の魂ひと、申し聞かせ置いたる事よも忘れは致すまいな。

源次　兄者人の御教訓、寐た間も忘れは致しませぬ。

勘助　さうあらう／＼。その魂ひの其方なれば、大枚の二百兩と云ふ金子。その身の遊興に遣ひ失くしは致すまい。こりや定めて餘儀ない事に遣つたと云ふやうな事であらう。サア、有やうに云やれ／＼。

ト源次郎、思ひ入れあつて羽織を脱ぎ、勘助が前へズツと出て

源次　兄者人、お手討ちになされて下さりませ。

勘助　ヤ、なんと。

源次　あなた樣のお詞に、背きましたる源次郎。お手にかけられて下さりませう。

勘助　すりや、二百兩はその身の放埒に。

源次　遣ひ捨てましたは私しの科。大切なる守り刀の申し譯。覺悟は極めて居りまする。

ト思ひ定めて首差延べる時、音吉、ツカ〳〵と出て源次郎を圍ひ

音吉　若旦那、待つた〳〵。滅多にお前を殺す事はなりませぬ。この音吉が一番留めた。

ト力み返つて云ふ。與兵衞、睨みつけて

與兵　コリヤ〳〵、音吉々々。成る程われが子供心に、さう思ふのは尤もぢやがな。とても若旦那の云ひ譯がない。子供の知つた事ぢやない。此方へ來い〳〵。

トいろ〳〵たらして云ふ。

音吉　イヽヤ、例へ何奴がどう吐かしても、おれが首切られる事ぢやないぞ。

與兵　此奴が〳〵、子供の形をして、大人の云ふ事を聞かぬか。

音吉　オヽ、聞かぬのぢや。この金を若旦那が遣はんせぬ事は、おれが證據ぢやぞ。

與兵　又々此奴が、ごくにも立たぬ事を吐かすな〳〵。

音吉　オヽ、吐かすのぢや。おれが吐かさぬと、若旦那が切られさんすに依つて、何もかも吐かすのぢや。

與兵　コリヤ〳〵、われが何も知つた事ぢやない。默つて居やうぞ。

音吉　ぢやと云うてお前、若殿樣の爲に、越後屋へ拂はんした金ぢやないかいの。それにお前が遣うたとは、そりやア、嘘ぢや〳〵。

トこの臺詞のうち、源次郎チッと俯向く。與兵衞、堪え兼ね

與兵　役にも立たぬ口を、叩きやアがるな。

ト音吉を引き退けようとする。

勘助　與兵衞、待ちやれ。若年ながら彼れめは主人を思ふゆゑ、心一杯の云ひ譯。叱るに及ばぬ。抑へて居やれ。

與兵　へイ〳〵〳〵

ト口の内にてぼやきながら抑へる。勘助、思ひ入れよろしく

勘助　ナニ、音吉とやら。ハテ、其方は愛い者ぢやなア。よく云つた。出かした〳〵。いま其方が申すを聞けば、越後屋へ拂うたとあるが、して、その樣子は、どうぢやどうぢや。

音吉　ハイ、その樣子は。

ト與兵衞が顏を見る。與兵衞、顏にて吐かすなと留める。抓る思ひ入れ。音吉、身を縮める。この途端に勘助と顏を合す。與兵衞、ちやつと手を隱す。

勘助　苦しうない。身に話して聞かせい。
　ト音吉、尻目に與兵衞を見て怖がる。與兵衞も思ひ入れ。
ハテ、怖い事はない。早く云へ〳〵。
音吉　若殿樣が、吉原へ遊びとやらを、たんと拵らへてゞあつた金を、越後屋が取りに行たけれど、誰れも金を拂はんに依つて、殿樣へ願うて出ると云うたところを、此方の若旦那が聞いて、拂うて遣つた二百兩でござりまする。
勘助　オヽ、もうよい〳〵。それで樣子は、さらりと解つた。こりや、さうありさうなもの。其方が忠義に依つて源次郎は死ぬるに及ばぬ。なんと嬉しからうが。
音吉　そんなら若旦那は、もう、死ないでもようござりますか。ヱ。ヤレ〳〵、嬉しや〳〵。
勘助　源次郎、よく致した。いま刃の下までも、その身に引請け、放埒に遣ひ果てしとは、流石武門の冥程ある。イヤナニ大野氏、手前弟は、愛い奴ではござらぬか。イヤ、各々を始め、別して十右衞門どのには、お心遣ひ下されたるが、どうやら斯うやら、申し譯の筋が立ちましてござる。お喜び下されい。
十右　流石貴殿の御舍弟、拙者も喜びまする。
勘助　イヤナニ與兵衞、其方は分けて、源次郎が身の上を案じ居つたが、それなる音吉とやらが詞一つで、金子の云ひ譯、明白に相解つた。其方にもさぞ喜びであらう。
與兵　ヘイ〳〵。
勘助　忠義一圖の其方なれば、さぞ夜の明けた如くであらう。喜びやれ〳〵。
與兵　ヘイ〳〵〳〵、喜ばしう存じまする。
　ト苦笑ひする。
勘助　ハテ、嬉しさうな顏ではあるワ。
與兵　ヘ、、、、。
勘助　ハテ、命冥加な……弟めだなア。
　トこなし。
文平　イヤ〳〵勘助どの、金子の行き場は相解つたにも致せ、差當つて御系圖改めに用ゆる守り刀、當もなき人手に渡し、どうしやうと思はつしやる。
武太　事に依らばお家、お國に係はる一大事でござる。勘助どのゝ御料簡
三人　承はりたい。
勘助　イヤ、苦しうござらぬ。

三人　とは又、なぜに。

勘助　ハテ、今日只今、系圖改めが、ござると申すでもない。早うて當冬、殊に依らば來春にもなるべき儀。それは追つて詮議いたし、上覽に入れまする。

武太　すりや、何方を當度と、日當の知れぬ守り刀を。

文平　勘助どの、其許が詮議召さるゝおやまで。

勘助　如何にも。

與兵　イカサマ、守り刀の望み手はどれか、西國方のお武家樣とやら、昨日手渡してしまうたれば、雲を摑む詮議の手筋。

勘助　サ、そこを尋ね求むるが詮議。華陀は顏中を見て、五臟に含む病を知る。さあればこの守り刀の買ひ主も、よも遠方へは參るまい。

ト勘助、與兵衞へ心意氣あつて云ふ。甚右衞門も思ひ入れあつて

甚右　源次郎、いま勘助どのゝ仰せられし通り、この買ひ主遠きにあらねば、手を下ろされ御詮議あらば、目前に明白ならん。併し、それでは其方が功にならぬ。ぢやに依つて、この詮議は其方が致さねば、勘助どのへ義が立つまいぞよ。即ちその詮議の手がゝりと云ふは、人は盜人、火は燒亡。ナ、サ、この油斷さへ致さずば、其方が功も立ち、勘助どのへ申し譯の近道、必らず道に迷はぬやうに。合點が行たか。

ト與兵衞、十右衞門へ掛けて云ふ。源次郎よろしくあつて

源次　委細、畏まりましてござりまする。

ト思ひ入れ。入相の鐘鳴る。與兵衞、こなしあつて

與兵　ハ、、、、思ひがけない事が出來まして、どなた樣にも、さぞ御退屈。若殿樣にもお待ち兼ねでござりませう。これから直ぐに武藏屋へと、斯う云ふうち、もう入相。サア、若旦那、皆樣を御案內なされませ。

勘助　イヤ／＼、外に用事もない儀ならば、其方は、これより直ぐに歸宅いたすがよからう。守り刀の詮議、日限は凡そ三百日。必らず油斷なきやうに、心得たか。

源次　畏まりましてござりまする。

與兵　それ／＼、若旦那、早う去んで、おれが膝を貸さう程に、とつくりと談合したがよいわい。

十右　勘助どの、イザ御同道仕らう。

勘助　然らば何れも。

皆々　先づ／＼。

源次　兄者人、甚右衞門さま。
甚右　堅固で居やれ。
音吉　番頭さん、堅固で戻らんせ。
與兵　何吐かすぞ。
十右　イザ、參らう。

ト唄になり、源次郎、音吉を連れ、向うへ入る。十右衞門先に勘助、甚右衞門、文平、武太夫、彥九郎、與兵衞も後に付き添ひ、殘らず下座へ入ると、騷ぎになる。チョン〳〵にて道具廻る。

本舞臺、三間の間、上の方、一間の小座敷、大和葺き、廻り庇、本緣付き、正面襖、奧深き路地口より、西の方へ斜に取りたる竹垣、この後へ植込みのあしらひ。上の方、小座敷より下座の方へ寄せて勝手口の切り戶、この柱に武藏屋と書いたる掛け行燈。この前に丸の手水鉢、よき所に誂らへの長床几、毛氈を掛け、結構なる煙草盆を直し、すべて向島の料理茶屋の體よろしく、騷ぎ唄にて道具とまる。

トこの時、日覆より月を下ろす。合ひ方になり、奧より喜瀨川、返し前の人形を抱き、今川、お菊、禿二人付き添ひ出る。

今川　申し、花魁え。座敷の內は、どうやら氣が詰まつて、惡うござんすが、斯う見晴らした所は、好いぢやござんせぬかいなア。
きく　コレ、今川さん、大きな聲さしやんしたら、意地惡の殿さんが又、見やうぞえ。
今川　ナンノイナア。殿さんは今、すや〳〵と寐てゞあつたに依つて、氣遣ひはござんせぬわいなア。
喜瀨　それ〳〵、殿さんは今日で十日の居續けで、滅多にあの醉の醒める事ぢやないわいなア。
きく　ほんに花魁も、殿さんの無理酒の持ち込しで、持病の頭痛でもござんせう。
今川　幸ひお目の覺めぬうち、彼處へ行て、風に醉をお醒ましなさんせいなア。
喜瀨　さうしようわいなア。

ト誂らへの合ひ方になり、喜瀨川、皆々を連れて花道へ行きかける。この時、向うより中間、甚右衞門が箱提灯を持つて出て

若者　大野甚右衞門が家來、誰ぞお取次を頼みまする。

ト奧より勘助、甚右衞門、連れ立ち出で

初演の繪附番

勘助　甚右衛門どのには、最早御歸宅召さるゝか。
甚右　先刻悴源次郎に、申しつけたる守り刀の詮議、今一應とくと申し含めねば、何とも安心仕らぬ。
勘助　ハテ、ようござる。拙者の推察の通り、この文でも大概それと相解りござれば、いづれ刀は手に入りまする。御老體の御心配なさらぬがようござる。
甚右　段々の深切。其許へ對し、申し上ぐる詞もない仕合せ。猶この上にも源次郎が儀を。
勘助　氣遣ひ召さるな。何事も勘助が胸にござる。
甚右　然らば拙者は。
勘助　お靜かに。
甚右　お別れ申しまする。
　ト唄になり、双方、目禮して、甚右衛門、中間を連れ、向うへ入る。勘助こなしあつて
勘助　思ひ寄らざる守り刀の紛失と云ひ、お金の不足、若殿の御放埒。
　ト思案する。喜瀬川、この時、フト勘助を見て、嬉しきこなしにて、各々本舞臺へ戻り、今川、お菊囁き、茶臺に茶碗を載せて、上の方より勘助が前へ差出す。勘助、思案の邪魔になるこなしにて、ツイと立つて下の方へ來る。お菊、下の方より煙管を差出す。勘助、面倒なるこなしにて、餘儀なく煙管を取り、また上の方へ來る。この時、喜瀬川、上の方より煙草盆を差出すと、勘助、困りし思ひ入れにて、煙草をつけにかゝり、この途端に喜瀬川を見て
ヤア、其方は。
喜瀬　旦那樣。
勘助　三ヶ年以前、身が屋敷に居つた、腰元のみつではないか。
喜瀬　成る程、左樣でござりまする。お久し振りで、おまめなお顏を拜しまして、たんとお嬉しう存じますわいなア。
勘助　其方も無事の樣子。重疊々々。
　ト喜瀬川が姿を、つく〳〵と見て
ムウ、昔に變る其方が姿、付き〳〵の女と云ひ、さてはアノ吉原へ。
喜瀬　お恥かしい御對面を、致しますわいなア。
　トふなし。
勘助　ナニ恥かしい事はない。傾城くゞつの卑しい奉公いたすも、全くその身の淫らでもあるまい。たんぞ樣子の

あるべきぞ。して、只今の其方が名は。
今川　松葉屋の喜瀨川さんでござんすわいなア。
勘助　何と云ふ。松葉屋の喜瀨川と云ふは、其方であつたか。ハテナア。いつぞやより、若殿當太郎さま、御執心のところ、今に於てお心に從はぬと聞いたが、さては其方の事であつたなア。
喜瀨　いつぞやから、殿樣風を吹かしての揚詰め。嫌で嫌でならねども、あの殿樣づらの爲に居たなら、あなたに逢はるゝ事もあらうと、それを樂しみに、嫌な辛抱して居りましたわいなア。
今川　そんなら、常々に花魁の云はしやんした、勘助さんと云ふは。
きく　あなたでござんしたかいなア。日頃からの積る話し、こりや、粹を通さうではないかいなア。
今川　さうしやうわいなア。
ト誂らへの合ひ方になり、禿二人を連れ、兩人、奥へ入る。
勘助　幸ひ付き添ひの女どもが、奥へ參つたゆゑ申し聞かすが、若殿當太郎さまには、お部屋住みと申しながら、千葉家のお世繼ぎ。御執心とあるこそ幸ひ、お心に從へば、その身の立身、お請け申し上げるがよいぞや。
喜瀨　エヽ、アタ穢らはしい。そんな事云うて下さりまするな。
勘助　止まる所を知らざれば、鳥類に劣ると云ふ。とくと勘辨いたすがよいわサ。
喜瀨　イヽエ、例へ鳥に劣つても、外の男に枕交す心はござんせぬわいなア。
勘助　すりや、何か。勤めのうちに、間夫とやら色とやら、心の外の樂しみが出來たと云ふやうな事か。
喜瀨　アイ、さうでござんす。
勘助　薄情を專らとし、僞はりを商ふ遊女の常と聞き及びしが、ハテ、眞實を辨まへ居るよなア。さすれば、その間夫とやらへ義理が立たぬに依つて、若殿のお心に從はぬと云ふのか。さうであらう〳〵。併し、爰をよく合點いたせ。若殿へ從ふのは、その身一生の片付き、なりや、とくと勘辨いたして見るがよいかサ。
喜瀨　イヽエ、とても思案に及ばぬと云ふはな、わたしや嬰兒を儲けましたわいなア。
勘助　ナニ、忰を儲けしとな。すりや、その間夫と。
喜瀨　二人が仲に儲けし嬰兒……ソレ、ちやつとお目にか

かりやいなう。
　ト懐ろの人形を出す。
勘助　ハヽヽヽ、人形に衣裳を着せ、子を産みましたとは、ハテ、傾城の情を辨まへたよなア。
　ト人形の紋所を見て
こりやコレ、身が定紋。
喜瀬　サ、この定紋の、殿御へ立つるわたしが心中。
勘助　ヤ、なんと申す。
喜瀬　過ぎしお屋敷の月待ちの夜、たつた一度のお情も、わたしが心は二世三世、變るまいと心の誓ひは立てたれども、勘太郎さまと云ふ、お子まで出來た奥様あれば、とても願ひは叶ふまいと、心で心を取り直せど、思ひ切られぬ女子の因果。せめてお寐間の上げ下ろし、朝夕お顔を見て居るが樂しみと、思ふに任せぬ長のお暇。その時の悲しさ。どうせう斯うせうと、思案のうちに母さんの大病。心盡しのその中にも、母さんのお命も助けたう、幸ひこの身を苦界せば、あなたに廻り合はるゝ事もあらうものと、この里へ身を沈めましたは三年以前。突き出して抑々より、只の一夜も外の殿御に、枕交さぬ心の誓ひ。我が身で我が身を揚詰めに、辛い辛苦をして居りますも、どうぞま一度、あなたに廻り合ひたいわたしが願ひ。苦界こそして居りまするが、わたしや尼同然に暮らして居りますわいなア。朝夕祈りし神佛の御利生で、心の念が屆いたやら、無事にお目にかゝつたもの、よう辛抱して居た事、可愛い者と仰しやつて下されたとて、まんざら罰の當る事もござんすまい。如何にあなたが固くろしいお生れつきぢやと云うて、餘所々々しいお詞。それ程氣強いお心なら、なぜその時は、たつた一度ぢやぞよと……なぜ得心させて下さりませぬ。生中いまでは思ひの種。ほんに夜毎の寐覺めにも、忘れた事が無けばこそ、思ひ出さぬ日はござんせぬ。ひよんな事で戀しい顔を見せて下さんしたが、恨めしうござんすわいなア。
　ト縋り寄り泣く。この時勘助、思ひ入れあつて
勘助　ア、イカサマ、女心の一筋に、思ひ込みしは尤も。併し、その夜の戯れに、興に乘ぜし身が粋興、その一度の添伏しを、二世三世も變らぬ夫と思ひ込み、三年の年月を、我が身で我が身を揚詰めに致し、それほど片貞節を立てるとは、ハテ、偏屈な奴ではあるわい。左様な事を申さずとも、お受け申せ〳〵。
喜瀬　達て其やうに仰しやつて下さりまするど、折角今日

の今まで、盡した心も水の泡ぢや。

ト勘助が刀に手を掛けるを、よろしく留めて

勘助　コリヤ待て。すりや、如何やうに云うても

喜瀬　死んで貞女を立てますわいなア。

トまた死なうとするを、しつかりと留めて

武助　ハテ、由なき縁を、結んだよなア。

ト思ひ入れ。この前よき所より千葉當太郎、着付け袴、若殿の拵らへ、近習に刀を持せ、後へ出かゝりこの體を見て居る。文平、武太夫、彦九郎、當太郎に從ひ並ぶ。この外近習の侍ひ十人ばかりお菊、今川も奥より出る。文平、少し前へ出て

文平　勘助どと、若殿の

皆々　御前でござる。

トこれにて當太郎を見て

勘助　ハツ〳〵。

ト下座の方へ下がり、平伏する。

武太　勘助どの、若殿御執心に依つて、傾城喜瀬川を揚詰めになさるゝを、何用あつて密々に談じてござる。

文平　先刻よりお傾城が、お側にお伽申さぬゆゑ、御機嫌は以ての外。

彦九　勘助どの、申し譯あらば仰せ上げられい。

武太　イヤ、何として〳〵、申し譯はござるまい。日頃女嫌ひだの、廓の杯は手に持つた事はないのと、軍學師範の勘助どの、いつの昔の見習つて、廓の酒の醉ひ狂ひ、牡丹過ぎたる傾城嬲り。それでも貴殿の役柄か。それでも家中の政道がなりますか。

文平　若殿のお眼が屆かぬと云うて、餘りなる我まゝ。こりやなんでござるか。殿よりお若いと思つて、輕んじさつしやるのか。イヤサ、侮つての事か。

彦九　例へ殿はお若うても、一國のお世繼。

武太　家來に手活けの花を折らせては、御一分が立たぬ。サア、勘助どの、魂ひ据ゑて返答さつしやい。

文平　不義は武門の掟の第一と、サ、堅く云へばこの通り。廓で云へば間夫とやら、横とやら、下世話に云ふ間男同然。智慧自慢の勘助どの、こればかりは、云ひ譯あるまい。

彦九　云ひ譯なくば間男の大罪。

武太　武家の掟を糺さうか。

彦九　間男に相違ないか。

文平　云ひ譯あるか。

彦九　サア。
三人　サア〳〵〳〵。
文平　勘助どの、返答が。
三人　承はりたい。
ト各々勘助に詰めかける。此うち勘助、以前の儘平伏して居る。當太郎、構はず煙草のんで居る。この時喜瀬川、聞き兼ねしこなしにて
喜瀬　文平さん、間男とは、誰れが間男でござんすぞえ。
文平　ハテ知れた事、現在殿の相方と、定めたる其方を、横を切つたる本津勘助、間男であるまいか。
喜瀬　こりやおかしいわいなア。わたしが殿さんに從がうて居たならば、間男切つたとも云はれうが、わたしや殿さんに逢うては居ぬぞえ。
三人　ヤ。
喜瀬　例へ百日千日の、揚詰めになつて居やうが、帶紐解かぬ其うちは、座敷ばかりの附合ひ。間男ぢやの間夫ぢやのと、仰山さうに勘助さんを、罪に取つて落さうとは、ほんに頼もしい朋輩さん方。文平さんもお年にこそよれ、その意地の悪さでは、新造衆が云ひ合せて、振りつけるも尤もぢやわいな。

武太　其方が理窟、一通りは聞えるが、滅多に勘助を庇ふからは、こりや勘助どのと、色をして居るな。
文平　イカサマ、相違ござるまい。
彦九　譯のない者をあれ程に、庇ひ立ては仕るまい。
武太　なんと、色をして居るに違ひは
三人　あるまいがな。
喜瀬　アイ、違ひござんせぬ。
三人　ヤ、なんと。
喜瀬　今さらぢやござんせぬ。勘さんとわたしは、昔からの色でござんす。
三人　ヤア。
喜瀬　色も色、大抵や大方、深い仲ぢやござんせぬ。アタ好かぬ、アタ嫌らしい、アタ煩さい、あの殿さんの座敷ばかりを勤めて居るも、有やうは、いとしい可愛い勘助さんの、顔が見たいばつかりに、嫌な辛抱して、附合つて居たのでござんす。お前方が立合つて、いとしぼさうに勘助さんを、其やうに云はしやんすは、こりやてつきり、云ひつけ手のあるもでござんせう。ナ、どこぞ其處らの、意地の悪い奴の指圖でござんせう。さう思へば思ふ程、腹が立つて〳〵、憎うて〳〵なるこつちやないわ

いなア。
ト當太郎に當てつけて云ふ。この臺詞のうち當太郎、いろ〳〵腹の立つこなしよろしくあつて、向うより彌八、貸し物屋の拵らへにて、頭に簪を大分差し、萠黄の風呂敷を肩に掛け、つか〳〵出て喜瀬川を見付け、思ひ入れあつて
彌八　イヤ花魁。申し、喜瀬川さん、爰にお出でなされますか。どなたも御免なされまし。
ト喜瀬川の側へ行かうとする。
今川　コレ〳〵彌八さん、花魁に用があらなら、直に云はずと、川すみさんに行て云はしやんせいなサ。
彌八　サア、川すみさんの上手に乘せられて、今日までは釣られて居ましたが、モウさう〳〵は親方へも、云ひ譯がないに依つて、花魁に直に相對するのでござりまする。
今川　おやと云うてそんな事を、この中で云ふ事かいなア。
彌八　この中でも門中でも、筋道の解つた金の催促、せにやなりませぬ。
ト喜瀬川が側へ來て
申し花魁、どうして下さりまするのでござりまする。
喜瀬　彌八さん、委細の事は川すみさんに、とつくりと云うて置きましたに依つて、御苦勞ながら行て聞いて下さんせ。
彌八　イヤ、よう參りますまい。花魁、お前もあんまり蟲が好過ぎるぢやアあるまいか。全體この金を、斯うおもなかに、待たせなさる義理ぢやアござりますまいぞえ。花魁、お前、外聞と云ふ事を知つてござりますか。その外聞の廢らぬやうに、今日の今まで、全盛なつもりにさして置いたも、誰れが陰でござりまする。ちつと云ひ憎いが山崎の手代、この彌八さんが呑み込んで、三枚櫛から簪まで、大枚百八十兩と云ふ代物を、お前の頭へ載せさせて、存分全盛さしましたぞえ。まだそればかりぢやアない、これまでも三日にあげず簪を減らしては、ちよつと二本呑み込んでくれ、ちよつと〳〵に騙されて、簪ばかりぢやアない、禿衆の仕着せ、仕送り、ヤレ納め手拭百筋ぢやの、簞笥の鍵を失なうたの、硯の水替へ、机の突き出し、土瓶の新造、一から十までせつたら負はして、明日來いの明後日のと、揚句の果が、人をげじ〳〵か何ぞのやうに、一昨日來いとは、胴慾ではあるまいか。

斯う云ひ出すからは、もう一寸も待つ事ぢやアない。百八十兩の金が出來ずば、その頭を引ッ淺つて、お大名の駈落ちで、お道具なしにするのが腹癒せだ。サア、早く脫いでもらひませうわい。

ト此うち勘助思ひ入れ。喜瀬川、面目なきこなし。當太郎、思ひ入れあつて

當太　喜瀬川が價、誰ぞ計らうて遣はせ。

ト此うち奧より十右衞門、出かけ

十右　ハツ〳〵、その代金、深見十右衞門、よろしく仕るでござりませう。山崎屋の手代彌八とやら、喜瀬川が飾りの代金百八十兩、深見十右衞門承はり、金子相違なく拂ひ遣はす。

彌八　すりや、アノ、このお金をば。

十右　若殿樣より、お取替へ下さる。有り難う思へ。

彌八　へ、、、、これは〳〵、有り難い殿樣のお捌き。流石は又、お大名ぢやなア。大枚百八十兩と云ふお金を、お取替へ下されまするは、よく〳〵あの喜瀬川さんに、登り詰めたる二階の建物。イヤ又、云ふぢやないが、當時五町でたつた一人でござりまする。へ、、、、有り難うござりまする。

ト下の方へ好き所に扣へる。

十右　計らざるに興の至り。さぞ御前には、お氣嚮で居らせられませう。今一獻召上がられ、然るべう存じ奉りまする。

當太　さうせう〳〵。サア、喜瀬川、其方も來やれ。

ト喜瀬川、矢張り默つて居る。

十右　これサ喜瀬川、なぜ物を云はぬ。どうだ〳〵。これサ喜瀬川、若殿への返答、早う〳〵。

喜瀬　イヽエ、わたしは爰に用がござんす。

十右　ハテ、さう云うては惡いわサ。何事も身に任せて、サ、早う〳〵。

文平　達てお傾城が、これに居ようと云ふは、勘助どのが、これに居召さるゆゑであらう。

武太　イカサマ、さうでござらう。自體勘助どのと云ふ色事師があるから、喜瀬川が御前のお心に、從はぬと云ふものサ。

彦九　如何に全盛なお傾城だと云つて、餘りなる我まゝ。

文平　若殿の揚詰めと云ひ、殊さら今、髮の飾りの代を乞はれ、既にその表道具を引き拔かれ、恥面掻く所を、殿のお慈悲、お情を以て、人前作り、まッその如く、花を

飾り全盛顔いたし居る、その恩義をも辨まへず、お心に從はぬは犬猫同然。

武太　只今殿の思し召しがなくば、正眞の裸傾城。

文平　但し、傾城の義理と云ふものはないか。喜瀬川、返答が聞きたい〳〵。

當太　ハヽヽヽ、さほど其方達が云つて聞かせずとも、眼前に身が情。義理辨まへぬ喜瀬川、さうであらうか。さうか〳〵。その心なら、予と一緒に奥へ行かう。サア、來やれ。

ト手を取らうとする。喜瀬川、その手を振り切り、手早く簪を拔き取り

喜瀬　彌八さん、これ持つて行かしやんせ。

ト抛り出す。彌八、悄りして

彌八　エヽ、そんならこの櫛簪を。

喜瀬　戻しさへすりや、よいぢやござんせぬか。とつとゝ持つて去なしやんせいなア。

トきつと云ふ。彌八、もじ〳〵して

彌八　これは御尤ものやうな、迷惑なものでございまするなア。

ト櫛簪を奥へ持つて入る。喜瀬川、當太郎が側へ來て

喜瀬　申し、殿さん、松葉屋の喜瀬川は、卑しい苦界はして居りますれど、好かぬお客に全盛を立つてもらひは致しませぬぞえ。

ト當太郎の顔をキツと見る。當太郎、ぎつくりこなし。

金々と澤山さうに、お前も大名さんぢやないかいなア。その大名さんが、アノ拙ない恩に掛けて、金で帶紐解かさうとは、所譯を知らぬきつい野暮さんではあるわいなア。餘所の廓は知らねども、この吉原ばかりは、情は賣れど、誠は實と替へ〳〵に、その人の心に從ふ苦界の慈悲。このわたしの教訓を、よう合點して、外の女郎さん方を、口説かしやんすがようござんすわいなア。エヽ、アタ穢らはしい。

トついと立つて、人形を抱き上げ、ねんねこ云ひながら、勘助へこなしをつて奥へ入る。勘助も思ひ入れ。當太郎、心にて身悶えるこなしあつて、グッとせき上げ

當太　勘助、それへ出い。

ト急いて云ふ。

勘助　ハッ。
當太　ツヽづツと出い。
勘助　ハッ〳〵。
　ト少し向うへ躙り出る。
當太　勘助、面を上げい。
勘助　ハッ〳〵。
　ト少し顔を上げる。
當太　勘助、そちや忠義と云ふ事を知つて居るか。
勘助　忠孝全きこの御治世、勿論大祿に命を繋ぐ莫大の主恩、疎かに存じませうやうはござりませぬ。
當太　ムウ。すりや、忠の道は、よく辨まへ居るとな。
勘助　御意の通りでござりまする。
當太　よい。その詞に相違なくば、いま申し付くる事、何に依らず違背はあるまいな。
勘助　主命は磐石に等し。
當太　ムウ。よい。喜瀬川を口說き落し、予が閨の伽いたさせい。
勘助　すりや、その儀を拙者めに。
當太　申し付けたぞ。
　ト勘助、思ひ入れあつて
勘助　御前に申し上げたき儀もござれど、御病中でござれば、何事も申し上げませぬ。只御全快を願ひ奉りまする。
當太　女が儀は如何いたす。
勘助　不案内の拙者にござりますれど、御意にござりますれば、寄り〳〵に申し含め、お手に入れまするでござりまする。
當太　イヤ、便々と待つ事ならぬ。いま口說き落し、抱かせて寐させい。
勘助　これは餘りなる御性急。何卒暫しの御猶豫を。
當太　罷りならぬ。
勘助　すりや、只今喜瀬川を。
當太　口說き落しを見物しよう。
勘助　ちやと申して。
當太　ならぬか。
勘助　サア、その儀は。
當太　ならずば目通りで切腹いたせ。
勘助　イヤ、滅多に腹は、えゝ切りますまい。
當太　イヤ、なんと。
勘助　この勘助が一命は、お家と國にかゝる大事。切腹いたす時節がござらう。

當太　命が惜しいか。
勘助　勘助が命は一つ、後の掛替へがござりませぬ。
當太　ムウよい。さほど死に憎くば、身が手を下ろして。
　ト近習に持たせし刀を押取り、ツカ〳〵と勘助が側へ行かうとする。勘助、惡びれず、矢張り平伏して居る。
　この時十右衞門、當太郎を留めて
十右　マ、御前、暫らく〳〵。
當太　ヤア、十右衞門、留めるな〳〵。
十右　成る程、お怒りの段、重々御尤も至極と存じ奉れど、全く勘助に限り、御意を背きませうやうはござりませぬ。
當太　さほど身が詞を背かぬ者が、女を手に入れず、云ひ譯の切腹、なぜ辭退いたす。
十右　喜瀨川儀は格別、武士の切腹は、その罪その科の輕重に依つて法を分つ。殊さら御遊興のお供先、何事も後しての評議。それまでは十右衞門めに、お任せ下されませうならば、有り難う損じ奉りまする。
當太　忠義第一の十右衞門、其方に免じ、勘助が命、しかと預けたぞ。
十右　ハア。こは有り難き御意。委細畏まりましてござりまする。
當太　して、女が事は如何いたす。
十右　拙者暫らくこれに殘り、勘助と熟談の上、喜瀨川に申し含め、色よいお受け、申させまするでござりませう。御前には、これより直ぐに、仲の町へお入りあつて、萬事の返答、お待ち下されませう。
文平　すりや、我れ〳〵も御前のお供仕り。
十右　コリヤ、女どもは居らぬか。
　トお菊、出て
きく　ハイ〳〵、お召しなされましたかいなア。
十右　コリヤお菊、御前には其方へ入らせらるゝ程に、お供いたして先へ參り、何時もの如く松葉屋へ。
きく　そんなら、今川さんもわたしと一緒に。
今川　連れまして行かうわいなア……何時もの如く、唄うてお供。
十右　イザ御前には。
皆々　お立ちあられませう。
當太　オ、。
　トすつと立ち上がる。勘助、平伏する。十右衞門その外皆々平伏する。當太郎、むやくやしきこなしにて、

當太　勘助を睨めつけ
　勘助、予が今日の始末、定めて無法法外と思ふであらうな。
勘助　法外に法あり、何しに左樣存じませう。
當太　ハテ、どう云へば斯う云ふと、張合ひのないねつけ者めだなア。
　トすつと花道へかゝり、喜瀨川に心殘りしこなしにて、花道にて立ちとまり、振り返り、勘助を見て、ムッとせしこなし。
十右衞門、勘助が面を打て。
十右　ハッ。
　トこなし
當太　早くぶて。
十右　ハッ。
　ト猶豫のこなし。
當太　打たぬか。
　ト急いて云ふ。
十右　ハッ。
　ト勘助の襟髮を取つて引きつけ
　御前の御意だ。

　ト眉間を打つ。勘助が額へ糊紅付く。勘助よろしくある。當太郎、とつくりと見て、ニッコリ笑ひ
當太　面上げい。エヽ、命冥加な。
　ト思ひ入れ。
十右衞門、さらば。
　ト踊りの唄になり、當太郎、立派に向うへ入る。これに續いて文平、武太夫、彥九郎、その他近習大勢、お菊、今川、この人數殘らず向うへ入る。十右衞門、勘助殘る。あと合ひ方。
十右　勘助どの、お見やる通り若殿の御疳症、まして主命。行きて歸らぬ以前の御執心。打捨てにはなりますまい。貴殿よりとくと申し含め、お心に從ふやうに、取持ちさつしやるが、第一其許のお身の爲と申すもの。某が打つたる扇の疵、それそれ、その如く武士の眉間へ疵つけられ、無念になくて何とせう。口惜しう思はつしやらうが、主命でござる。御前の御手を借つての打擲。例へ無念口惜しうても、主と病、致し方はござるまい。その恥面を搔く元はと云へば、皆貴殿の心がらだ。なぜと云はつしやい。貴殿が喜瀨川と色をして居さつしやるから、若殿の御立腹、既にお手討ちに遭はつしやる處を、身が折よ

く在り合せたればこそ、貴殿の命に別條はないと云ふもの。これも偏へに朋友のよしみを存じての儀。これが所謂る仁の道とやら。殊に又守り刀の一件も、呑み込んで居さつしやる貴殿。もし喜瀬川をお手に入れぬ時は、申し譯の切腹など〻沙汰に及ば〻、守り刀は埋れ木。殿のお家に係はる大事・おやに依つて、喜瀬川事をさつぱりと思ひ切り、お伽させるがその身の爲。なんと合點が參つたか……勘助どの〳〵、なぜ返答さつしやれぬ。こりや、なんでござるか。十右衛門に面を打たれ、無念口惜しいゆゑでござるか。さうでござるか〳〵。こりや惡い料簡。身に遺恨を含まつしやれば、若殿へ手向ひも同然。なんと、そんなものぢやござらぬか。おやに依つて、とつくりと分別の上、某へ返答さつしやい。仲の町にて相待ち居る。勘助どの、しかと詞を、番ひましたぞ。

ト合ひ方になり、向うへ行かうとする。

勘助　十右衛門どの、待たつしやい。

十右　なんぞ用がござるか。

勘助　如何にも。

十右　勘助どの、何の用でござる。

勘助　云つてしまはつしやい。

十右　ヤ、なんと。

勘助　三萬兩の金子、虚妄の筋を。

十右　勘助どの、默らつしやい。云はして置けば、ずばらずばらと、出る儘の法外。三萬兩金子不足の儀は、若殿御遊興の後拂ひに致せしゆゑ、その受取りの札を、立合ひの席にて、渡したではござらぬか。それ程慥かな證據あるに、何ゆゑ身共を虚妄だと云はつしやる。

勘助　山近く晴る〻時は、必らず雨を含むの理。餘り立派に仰せらるる程、却つてその身に曇りがござる。外ならぬ貴殿と拙者、包まず虚妄の筋を仰せられなば、穩便に取計らひ、貴殿のお名は出し申さぬ。所謂るこれが仁の道とやら。十右衛門どの、早く云つておしまひなされ。どうでござる〳〵。

十右　イヤ知らぬ、覺えはない。

勘助　如何やうに申しても、覺えはござらぬか。

十右　如何にも知らぬ。覺えはないが、また達つて身共が虚妄と云はつしやるは、なんぞ慥かな證據がござるかな。

勘助　慥かにござる。

十右　サヽ、その證據を出さつしやい。

勘助　お目にかけう。
十右　して、その證據は。
勘助　これでござる。
ト懷中より、發端に十右衞門が渡したる受取の一札を出す。
十右　こりやコレ、身共が虛妄いたさぬ證據の受取。
勘助　サ、これが卽ち虛妄の證據。
十右　なんだ、どき〳〵と、こりや、どうあやなすのだ。
勘助　コレ、受取の員數が合はぬ。
十右　ヤ、なんと。
勘助　察するところ、若殿の癇症の病氣を幸ひ、放埓惰弱をお勸め申し、それを囮に三萬兩の軍用金を引込み、二十金三十金の處を、二百兩三百兩と書替へ、殘らず其方が筆先を持つて、書きあやなしたるこの受取、員數改め見るところ、金高都合二萬兩、一萬兩の員數相違してある。達て爭はゞ、拂ひ方先々を召し寄せ、一々に面晴れせうか。
十右　サ、それは。
勘助　有體に白狀するか。
十右　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。
勘助　主恩知らぬ、こな人外めが。もと其方は岩永家の浪人、尾羽打枯らせし浪々の、生活に迫りしを、不便に思ひ、某が推擧を以て、當家へ有りつきしところ、家中へ阿ねり、與向きへ諂ひ、佞辯を以て上を僞はり、日每の立身。いま我れ〳〵と肩を列べ、大祿を頂戴するは誰れが庇ぢやと思ふ。主人は勿論、某が仁情。その恩を打忘れ某を拒み、剩さへ殿を囮に、莫大の金子を掠め取る人畜生。この上にも返答あらば、片言半句打つて見よ。見下げ果てたる犬侍ひめが。
十右　勘助どの、段々の御意見、十右衞門め、身にひしひしと當り、過分に存じまする。如何にも御推察の通り、三萬兩の金子、凡そ二萬五千兩は、この十右衞門が虛妄いたした。私慾に相違ござらぬ。申し譯には切腹いたす。その代り、お金虛妄の同類は、若殿當太郎さまと、具さに披露の上、物の見事にこの十右衞門、腹切つて相果てる、なりや、若殿も盜賊の惡名。同罪の御沙汰に及ぶであらう。さある時は勘助、お身が口から主人の訴人、主を殺して武士が立つか。事に依つたら其方も、痛い腹を切らにやなるまいぞよ。一人ならず二人三人の、命にか

初演の繪番附

かはる身共が切腹。但し、若殿のお身の上、有體に披露し切腹せうか。主殺しになりたいか。返答しやれ。勘助、どうだ。
トきつと云ふ。此うち勘助、思ひ入れ。この時、日覆の月を霞にて隱す。勘助、空を見て。
勘助　今日は十一日、月の入りは九ツ六分。最早八ツに間もあるまい。
ト立ち上がる。
十右　勘助、返答もなく、どれへ參る。
勘助　畜生に詞はないワ。
ト唄になり、こなしあつて勘助、奥へ入る。十右衛門後を見送り、キツと思ひ入れ。この時、奥より與兵衛出て
與兵　十右衛門さま。
十右　番頭與兵衛、先刻よりの一部始終を。
與兵　殘らず承はりました。何は格別、お頼みの品、慥かにお渡し申しまする。
ト懷中より袋入りの短刀を出し、十右右門に渡す。
十右　天晴れ働き、大儀々々。
與兵　イヤモウ、一大事のお頼みと云ひ、殊さら勘助と云ふ強敵を引請けての狂言。甘い事では行くまいと、骨を折りましてござりまする。
十右　さうであらう〳〵。併し、當分身が所持して居つては事の破れ。落着するまで、この守り刀は、其方に預ける。
與兵　すりや、この守り刀を。
ト取つて、ちよつと思案して
よし〳〵。私しは又、こいつを玉に使つて、源次郎めが持つて居る讓り狀をしてやる狂言。こいつは枕を碎かにやならぬわえ。
十右　ハテ、何から何まで、拔け目のない男ではあるぞ。
與兵　左樣ならば十右衛門さま。
十右　必らずともに、覺られぬやうに。
與兵　モシ、番頭でござりますわい。
ト唄になり、守り刀を懷中して向うへ入る。十右衛門、後見送り、こなしあつて
十右　何かの手番ひ。よし〳〵。
トこの時東の花道より角兵衛、外一人、十右衛門の紋の付いたる箱提灯を持ちて出て來て

角兵　お旦那、お迎ひ。

十右　角兵衛、申しつけた儀は。

角兵　仲の町へ參りしところ、文平さまより火急の御狀。サア、御披見あられませう。

ト一通を渡す。十右衛門、披き

十右　灯。

角兵　ハッ。

ト提灯を差出す。十右衛門、一通を讀む。此うち、勘助、後の屋體より見て居る。十右衛門、これを知らず、一通を讀み終りて

十右　すりや、某が指圖の通り、今宵も殿には廓に居續け。

ト巧いと云ふこなしにて、一通を提灯の火で燒き捨てる。

角兵　お旦那樣には、直樣お中屋敷へ、お越しなされまするか。

十右　イヤ／＼、今一應文平に對面いたし、今宵は廓にて一宿。正七ツ時に迎ひの駕籠。

角兵　畏まりました。

十右　今宵中に喜瀨川を、殿の御手に、入れるが手段の第一。

トこの時、思はず勘助と顏見合せる。勘助、ぱつたりと障子を閉める。十右衛門、ぎつくりして、もうとても生けては置かれぬと云ふこなし。角兵衛等と顏見合せ氣を替へ

提灯やれ。

ト唄になり、兩人を連れ、向うへ入る。勘助、見送り

勘助　今の密書は、若殿へ腰押し、彼れらが密談。もう生けては置かれぬわえ。人知れずソレ。

トきつと思ひ入れ。八ツの鐘鳴る。

ありやもう八ツ。夜明けぬうちに。

ト身拵らへして行かうとする。この時、奥より喜瀨川、禿二人を連れて出る。お辰も後より出る。

喜瀨　申し、お待ちなされませ。

ト勘助、ぎつくりして

勘助　喜瀨川。

喜瀨　最前の樣子、何もかも聞きましてござんす。覺えもないあなたの御難儀も、皆わたしから起つた事。これからわたしが殿さんに逢うて、お前のお身の云ひ譯を致しますわいなア。

勘助　御癇症の若殿、もしお手討ちになつた時は。
喜瀬　あなたゆゑに捨てる命、わたしや覺悟して居ります
　わいなア。
　ト取りつき泣く。勘助、思ひ入れあつて
勘助　身請けせう。
喜瀬　エ。
勘助　ハテ、身請けして所を離れ、圍うて置けば、自然と
　殿の御執心も晴るゝ道理。
喜瀬　そんなら眞實。
勘助　侍ひ冥利、嘘は吐かぬわやい。
喜瀬　エヽ、嬉しうござんす。
　ト寄り添ふ。雨車鳴る。
　そんならどうでも、今宵は去なしやんすかえ。
たつ　ヤ、雨が降り出しましたぞえ。お提灯もお傘も上げ
　ませう。
　ト手早に傘と下駄を直し、武藏屋と書いたるぶら提灯
　を勘助に渡す。
　ほんに土手から、駕籠屋を呼びませうかえ。
勘助　ナニサ、それには及ばぬ。吾妻橋へ廻つて行かう。
たつ　吹降りで濡れませうぞえ。

勘助　なんの／＼、露をいとふは昨日まで。どうで濡れた
　袖ぢやもの、ナウ喜瀬川。
喜瀬　イヽエ、大事の主を、外で濡れさす事はならぬわい
　なア。
勘助　然らば君のお志し、かざして去なう。
　ト下駄を穿き、傘をかざして提灯を持つ。
喜瀬　そんなら必らず今の事を。
勘助　其うちゆるりと話すわいの。
喜瀬　勘さん、キツとおやぞえ。
勘助　承知々々。
　ト騷ぎになり、勘助、向うへかゝる。喜瀬川、見送る。
　この見得、チヨン／＼のキツカケ。道具靜かに廻る。
　此うちお辰、手を叩き見送る思ひ入れ。この道具、半
　まで廻る。雨車の聲、時の鐘、騷ぎの中へよろしく、
　勘助、花道のよき所まで行き、ちよつと見返り、提灯
　を吹き消す。これをキツカケに、本舞臺、黒幕にて一
　面に隱す。東西の窓暗くなる。勘助、下駄傘を捨て、
　尻をからげ、逸散に向うへ走り入る。騷ぎ唄止んで時
　の鐘、蛙の聲、雨車、よき所にてチヨン／＼のキツカ
　ケにて、舞臺一面にセリ上げる。この前草土手の書き

落し。一面に附いて上がる。留めの拍子木にて、正面の黒幕切つて落す。

本舞臺、三間の間、向う打拔き、吉原の屋根、遠見の飾りつけよろしく、上の方、柳の立ち木、この所に開帳の高札。すべて日本堤、深夜の景なり。よき程に雨車止んで本雨降り出す。蛙の聲。忍び三重にて道具とまる。

ト向うより、勘助本水にて衣裳をひつたり濡らし、バタ／＼にて走り出て、花道半にて向うを窺ふ。この時下座より女郎買ひの朝戻りの仕出し、茶屋の若い者、印の傘、提灯を付け、捨ぜりふにて段々花道へ來る。よき所にて勘助、客を提へ頭巾を引き取り、提灯の灯にて顏を改めるこなし。客、若い者、慄うて居る。勘助、突き放す。兩人うろたへ、向うへ走り入る。トまた下座より駕籠一挺、茶屋の提灯をつけ、出て來る。勘助、行き合ひに提灯を引取る。駕籠の内を改めると客、慄へながら額を隱す。勘助、心得ぬこなしにて、駕籠より客を引き出し、顏を改め、同じく突き放す。この三人うろたへ逃げて入る。本雨、頻りに降る。勘助、舞臺土手の上にかゝり居ると、下座より十右衞門、着流し、大小、駿河屋と書きたる傘をさし、角兵衞、箱提灯を持ち、先に立ち、後より中間、雨合羽、供笠にて付き添ひ出る。

角兵　これは怪しからぬ大雨になりましてござりまする。

中間　提灯の火を濕めさぬやうに、氣をつけたがいゝ。

十右　今宵廓に一宿と存じたるところ、仲の町まで參ると直ぐに七ツを打つ。直さま引返して歸らねばならぬと云ふは、主持ちの淺ましさ。誠に、せまじきものは宮仕へとは、ハテ、よく云つたものだなア。

中間　お旦那、土手のうちはお足駄が辷りますから、お靜かにお拾ひ遊ばしませ。

ト段々土手を來かゝる。勘助、窺ひ寄る。角兵衞が持つたる提灯を切り落す。各々愕りして

皆々　狼藉者、うぬ。

ト勘助に切つてかゝる。ちよつと立廻り、兩人を當てる。此うち十右衞門、窺ひ寄り。

十右　何者なれば不意の狼藉、名を名乘れ。

勘助　名乘るに及ばる深見十右衞門、木津勘助だ。覺えがあらう。覺悟いたせ。

ト切りつける。立廻りにてキッとなり。

十右　ハテ、逸まるな。何ゆゑにこの狼藉。仔細を云へ。

勘助　仔細は胸に覺えある筈。若殿の御病氣を幸ひ、放埒を勸め込み、それを囮に三萬兩の金子、私慾の段々。勘助が睨んだ眼、いつかな違はぬ。それのみならず三光の守り刀、番頭與兵衞に申しつけ、非道を以て失はせ、某を罪に落さん其方が企み。其方を生け置いてはお家の大事。日夜に募る若殿の御放埒。其方をぶち放し、殿の病氣の根を絶つ大功。サア尋常に覺悟いたせ。

十右　オヽ、流石の勘助よく云つた。某とても其方を生け置いては、若殿を馬鹿にする妨げ。まだそればかりではない。この十右衞門が胸の內は、富士を呑み込む大義がある。遲いか早いか生けて置かぬ。うぬから先に、覺悟ひろげ。

勘助　何を小癪な。守り刀を此方へ渡せ。

ト これより誂らへの鳴り物になり、兩人、立廻り、いろ／＼あつて、勘助、十右衞門を一刀浴せる。よき程に角兵衞等起き上がり、双方より切つてかゝる。始終暗がりの模樣にて、三人タテ、いろ／＼あつて、トゞ兩人を仕留める。これより勘助、十右衞門を方々探り廻り、尋ねるこなし。十右衞門、よろめきながら好き程に又双方打ち合ひ、勘助、十右衞門を切り倒し、止めを刺さんとしてゐる。この時、下座より堀の提灯をつけ、女郎買ひの仕出し出る。勘助、血刀を後へ隱し生醉ひのこなし。

されどもこの人、夜は近れとも月見えず。

ト 三輪の謠を唄ひながら、行き違ひ顏を外ける。仕出しの二人、あたりの死骸を見て、慄へながら勘助を見て行き違ふ。

或る夜の睦言に、御身如何なるゆゑに依り、月をば何と烏羽玉の。

ト 謠ひながら見送る。仕出しは足早に向うへ逃げて入る。勘助、十右衞門が懷中を探し、守り刀を尋ねるこなしあつて、

すりや、守り刀は與兵衞めに。ハテ殘念なア。

ト 十右衞門に止めを刺す。時の捨て鐘。また本雨頻りに降る。向うより若黨、紙合羽に供笠、勘助が紋付きの箱提灯を下げ、合羽に下の雨を凌ぐ心にて、足早に本舞臺に來り、この時、勘助、止めを刺ししまふと、若黨、何心なく勘助を見て

若黨　お旦那、お迎ひ。

ト提灯を差出す。バツタリ打ち落す。若黨、驚ろく。

勘助　粗相千萬。

トこれをキツカケに、よろしく

ひやうし幕

二幕目

龜井戸梅屋敷の場

役名――結城直姫。宗右衛門女房、小わた。同娘おくの。行司、志村次郎四郎。角力取り、小嵐。同、姿見。伴澤伴藏。仲間、居茶平。同、文助。船頭、玉江屋甚太。關取り、男女川浪五郎。

本舞臺、正面黒幕、舞臺一面に這うたる梅の大木、爛漫と花咲き今を盛りの體。これに竹の手摺り、臥龍梅と記したる立て札、誂らへの通り仕立て、上の柱、松の大木、下の方、葭簀張りの茶見世、床几を並べ、すべて龜井戸梅屋敷のかゝり。てんつゝにて幕明く。

ト下座と向うより合ひ方打ち交ぜ、いろ〳〵思ひ付きの仕出し、捨ぜりふにて出て來る。兩方へ入り亂れ、下座と花道へ別れ入ると、直ぐに神樂の鳴り物になり、向うより伴澤伴藏、中月代、長羽織大小、山の手風の拵らへにて出て來る。後より玉江屋甚太、下駄草履、布團を肩に掛け、火繩箱を提げ、船頭の拵らへ。居茶平、紺看板しみつたれなる折助の拵らへにて付き出る。花道よき所にて

甚太　モシ旦那、これから先は霜解けで、のたられる道ぢやアござりやせぬ。深味へ踏み込まねえやうに、氣を付けてお出でなされませ。

伴藏　承知々々。梅屋敷へ草履で來て、間誤つくも古いやつサ。

居茶　シタガ、思つたよりは片道つきました。この分なら傳はつて參れませう。

甚太　時に旦那、わつちと一緒に上がつた屋根船は、どれも美しいたぼぢやアござりませぬか。

伴衞　さればサ。あいつ等が今日中のたぼだ。どこへ出しても二十五點が物はある。

居茶　どうやら旦那の方を、味に見い〳〵、あの手合ひは巴屋へ入りました。

伴藏　おきやアがれ、男ひでりはしまいし。
甚太　イエ〱、それは知れません。左樣然らばの新五左衞門を見た目で、お前さんのやうな長羽織を見たら、どんな風の吹いて來やうも知れませぬぞえ。
居茶　いつそ梅屋敷を、早くザツと切り上げて、これから巴屋へお出でなされませぬか。
伴藏　サア、おれもさうは思ふが、今日は妙義で巴屋も、衣屋もごたついてあらう。幸ひ爰の裏門を出ると、こつそりとした好い酒屋があるから、そこで待ち合して無理に引摺り込んで、酒の相手にする料簡だ。どうだどうだ。
居茶　そりやア好い趣向でござりまする。
伴藏　そんなら、そのつもりで。
甚太　ちよん〱幕は、わしが切盛り。
伴藏　サア、來い〱。
ト三人、浮かれ舞臺へ來る。臆病口より幕明きの侍ひ坊主の仕出し兩人出て來る。雙方行き違ひに道を除けようとする。邪魔になるこなし。
居茶　待て〱。待ちやアがれ〱。
ト侍ひ立ちとまり
侍ひ　某が事か。

居茶　某も凄まじい、この二本棒め。なんでおれが足を踏んだ。コレ、挨拶もなく、默つてうしやアがるのだ。
ト張込まれ、坊主、ぶる〱懷へなから侍ひの袖を引く。
侍ひ　ハテ、ようござる〱。
坊主　モシ〱、いゝかな〱。
トおど〱する。
侍ひ　コレ、此方に左樣な粗相いたした覺えはないぞ。
居茶　コレ、此方に左樣な覺えはない。ないものか。この泥はなんだ。キリ〱爰へ出て拭きやアがれ。
ト侍ひを立ちに蹴する。侍ひ堪え兼ねて、ムツと反りと打つ。坊主、慌てゝ留める。甚太、この中へ入り
甚太　コレ、待たつしやいな。こなさんは扶持方棒をひねくり廻して、どうするつもりだ。
伴藏　びく〱するなら、爰へそびいて來い。
甚太　エ、、馬鹿な面ぢやないか。
ト突きのめす。
侍ひ　うぬ。
ト反りを打つ。
甚太　なにを。

ト睨みつける。

侍坊　べら坊やい。

ト惡態をつき、兩人ともに向うへ逃げて入る。

居茶　待ちやアがれ。

ト追ひ駈けて行かうとする。

伴藏　居茶平、もういゝ。打ッちやつて置け／＼。

居茶　エ、逃げ足の早い奴だ。

三人　ハヽヽヽ。

伴藏　これから裏門へしけ込んで、巴屋からなんぞ取寄せよう。

甚太　それがようござりませう。

伴藏　居茶平、今のたぼが來るか。氣を付けて來いよ。

居茶　畏まりました。

ト右の鳴り物にて皆々下座へ入る。直ぐに出の唄になり、向うより結城直姬、屋敷風の振り袖、宗右衞門娘おくの、同樣の拵らへにて出る。小わた、女房風。文助、年配の中間にて、風呂敷包み嫁菜の苞を下げ、供して花道中程にて

文助　モシ／＼御新造樣、いづれが梅屋敷でござります。

小わ　ほんに、いつぞや來た時は、きつう遠いやうに覺えたが、これでは龜井戸なら、間はないわいな。

くの　お姬樣、もう梅屋敷へ參りましたさうにござりまするわいなア。

直姬　常々小わたが云やつた臥龍梅とやらを、早う見たいものぢやわいなア。

小わ　これがモウ、梅屋敷でござりまする。早うお供しやいなう。

ト唄の切れにて皆々舞臺へ來る。

なんと姬君樣、御覽遊ばせ。兼ねてお話し申し上げました通り、珍らしい形の梅でござりませうがな。殊に今日は連合ひの宗右衞門どのゝ申し付けで、何がなお氣晴らしにもと、密かに娘くのと同じやうに出立たせ申し、皆の衆へも隱して、忍びのお遊び。お乘り物と違ひ、一しほお氣が晴れましてござりませうな。

直姬　サイナウ。珍らしい梅の形、今を盛りのこの景色、聞きしに勝る眺めぢやわいなア。

きく　申し、わたしやまだ、榮螺堂とやらを見ぬゆゑ、早う見たうござりますわいなア。

文助　ア、申し／＼、榮螺堂を見たいと仰しやりまするが、上へ上がりまするまでは、薄暗うて穴の中へ入るや

うで、大抵氣味の惡い所ぢやアござりませぬ。それよりは船を上手へ廻させて置きましたから、妙見から普賢へお廻りなさるゝが、ようござりまする。

小わ　それいの。まそつと早くば、三囲の方へお供して、土手通し摘草も、お氣晴らしにならうもの。もう、日足も餘程傾いたれば。

文助　マア、花守り方へお越しなされて、緩りとお支度なさるが、ようござりまする。

小わ　それ〳〵、さうしようわいの。サア、お姫樣。くのもおぢや。

きく　アイ〳〵。そんならお母さん。

小わ　文助、供しや。

ト唄になり、直姫先に、皆々下座へ入る。神樂になり向うより、次郎四郎、ぱつち一本差し、行司の拵らへにて出て來り、直ぐに舞臺へ來て、床几に腰を掛け

次郎　茶を一杯下さい。

亭主　ハイ〳〵。

ト茶屋の亭主出て、茶を酌み

今日は妙義へ、御參詣でござりますかな、

次郎　イヤ〳〵、ちと用があつて、この邊へ參りましたゆゑ、次手だから參詣いたしましたが、ハテ、夥しい人でござんすの。

亭主　左樣でござりまする。この間は怪しからぬ賑やかでござりまする。

次郎　時にこなさんは、知つて居るか知らぬが、あの男女川關取りが來た筈ぢやが、見かけはさつしやらぬか。

亭主　イヽエ、今日は關取り衆は、どなたもお見掛け申しませぬ。

次郎　ハテ、そんならまだ後であらう。併し、もう彼れこれ七ツ下がり。暮れるに間もあるまいが、但し、向島の方か知らん。何にせい、昨夜仙臺から戻つて、草臥れもせず、達者な手合ひではある。

ト云ひながら煙草をのんで居る。矢張り以前の鳴り物にて、向うより男女川浪五郎、衣裳羽織一本差し、角力取りの拵らへにて出て來る。後より姿見、小嵐、角力取りの拵らへにて付いて出る。花道にて

小嵐　親方々々、いま反橋の際で、物を云うた人は、どこの人でござんす。

男女　ありやアおれが旦那、三田屋へ出入りの五柳屋だ。

姿見　エヽ、何時もお前が話しなさる、五兩さんとやらか

え。
男女　五兩ぢやアない、五柳だよ。
小嵐　ハテ、おつな名だなア。
男女　ありやアあの男の表德よ。
妾見　へうとくとは、生れ在所の事かえ。
男女　馬鹿を云へ、へうとくとは、俳名と云ふものサ。
小嵐　ハテナア。江戸ぢやア生れついて戒名を付けやすかえ。
男女　ハヽヽヽ、ごぞくもの奴等ではあるわい。
兩人　それでも生れて居て、戒名が付くとは、おかしいぢやアねえか。
男女　べら坊め、無駄を云はずと、來い〳〵。
ト男女川、先に舞臺へ來る。次郎四郎見て
次郎　オヽ、男女川關取りぢやアごんせぬか。
男女　これは次郎四郎どの、見りやア一人で、妙義へござつたのか。
次郎　イヤ、わしは關取りの迎ひに、わざ〳〵爰へ訪ねて來ました。
男女　そりやア御苦勞でごんす。わしが爰へ來た事を。
次郎　兩國の親方が見て居られ、慥かに關取りは妙義へ行かれたから、間違はぬうちに、迎ひに行つてくれと頼まれたから、先刻にから爰に待つて居ましたが、こなさんも昨夜戻らしやつた旅。疲れもなく、達者な事でござんすの。
男女　サア、わしも何か差措き、三田屋は顏を出さにやアならぬ。今日は妙義へ參詣して、町から直ぐに兩替町へ行くつもりでござんしたが、好い所で逢ひました。
次郎　そんな事であらうと思つて、わしも急いで來ました。なんでもマア、相談の纏まるまでは、何所へも行かずに居てもらひたうごんす。
男女　イヤ、わしやアどうしても、三田屋へ顏を出さにやアならぬが、その相談と云ふのは、昨夜ちよつと聞いた、春角力の場所の事でごんすか。
次郎　サア、それもあり、今年は九州の方も顏が揃ふつもりぢやに依つて、番附の事も何もかも、こなさんに相談せねばならぬと云うて、親方衆がみんな兩國に待つてでごんす。マア、兩國まで來てもらひたうごんす。
男女　ほんに番附と云へば、ちよつと引合せて置きませう。爰に居るのは、わしが弟子どもでごんす。どうぞ世話して引廻してもらはにやアなりませぬ。コリヤ、この

お人は、次郎四郎どのと云うて、行司衆ぢや。よう頼んで置け〳〵。
兩人　アイ。
ト次郎四郎、兩人を見て
次郎　少し詰まつてはあれど、がつしりとしたものぢや。隨分精出したがようごんす。して、名乘りは何と云ひますな。
小嵐　アイ、わしや小嵐鹿右衞門と云ひます。
次郎　ムウ、小嵐……して、そちらのは。
姿見　わしや姿見と申しまする。
次郎　姿見とやら、愛らしい譯のありさうな名乘りぢやの。
男女　サア、見ての通り餓鬼道から、飛脚に來たと云はうか、芋殼に目鼻を付けたやうな態をして、角力取りになりたいも、凄まじいぢやごんせぬか。そこでわしがその態で、角力取りになられるものか。うぬが態を見ろと云ふ心で付けた、姿見でごんす。
次郎　ハ、、、こりや尤もな名乘りぢや。イヤ關取り、わしやアちよつと勇駒が所へ、行つて來たいものだが。
男女　そんならわしは、爰に待つて、こなさんと一緒に行きませうかえ。
次郎　どうぞ、ちつとのうち……併し、勇駒は、宿替へをしたと聞いたが。
男女　處はおいらが知つて居る。コリヤ、鹿右衞門、今朝連れて立寄つた勇駒が所を、次郎どんに敎へて進ぜろ。
小嵐　ア、イ。
男女　姿見、わりやア先へ行つて、船を拵らへさせて置け。
姿見　ア、イ。
男女　巴屋へ寄つて、酒を拵らへさせて置けよ。
姿見　ア、イ。
男女　そんなら御苦勞ながら。
次郎　關取り、直ぐに戾る程に、爰に待つて居て下んせよ。ドリヤ、一走り行て來うか。
ト誂らへの鳴り物にて、次郎四郎先に、姿見、小嵐、下座へ入る。男女川は煙草をのんで居る。下座より伴藏、惡態をつき〳〵出る。居茶平、甚太、これを留めながら、捨ぜりふにて酒屋の男、詫び言しながら付いて出る。
伴藏　ヤア、留めるな〳〵。太い奴だ。二つにせにや腹が

居甚　癒ぬ。放せ〳〵。
　マア〳〵、お待ちなされまし〳〵。
　ト兩人、いろ〳〵留める。
酒屋　イヤモウ、どか〳〵酒を零しましたは、此方の不調
法。幾重にもあなた方、お頼み申します〳〵。
甚太　ようごんす〳〵。旦那の方はわしがお詫び申すから
早く歸らつせい〳〵。
酒屋　ハイ〳〵、左樣なら、參りましても大事ござりませ
ぬか。
居茶　ハテ、こなたの顏が見えては、いつまでもお腹が立
つ。爰はおいらが呑み込んで居るよ。早く行かつし早く
行かつし。
酒屋　ハイ、よろしうお頼み申しまする。ヤレ〳〵、嬉し
や嬉しや。
　ト下座へ逃げて入る。
伴藏　ヤア、料簡ならぬ、待ちやアがれ〳〵。
兩人　ハテ、ようござりまする〳〵。
　ト兩人、宥める。伴藏こなしあつて
伴藏　なんと身共が計略で、存分呑み喰つた算用は、只の
藥師とはどうだ。巧く喰つたぢやアねえか。

甚太　喰つた段ではござりませぬ。手を摺つてあやまつて
歸りました。
居茶　卽ちお詫びの印として差上げまする。
　ト袂より銚子杯をソツと出す。
甚太　ハヽア、どさくさ紛れに、揚卷の助六だね。
伴藏　ても凄まじい奴だ。流石におれが家來程ある。末頼
もしい。天晴れ〳〵。
　ト扇で煽ぎ
ハヽヽ、これからこの威勢で、參詣の奴等を嚇つて遊ば
う。サア〳〵、來い〳〵。
　ト皆々生醉ひのこなしにて、そゝり唄を唄ひながら、
花道の方へ行かうとして、男女川を見付け顏を覗き、
嫌がらせるこなし。男女川これに構はず煙草のんで居
る。矢張り神樂にて下座より、直姬、おくの、小わた、
文助、付いて出る。
小わ　サア、お姬樣にはお疲れでござりませう。併し、日
も暮れかゝりました。娘、お手を取つて急ぎやいの。
くの　ハイ〳〵、憚りながら。
　ト直姬の手を取り、皆々花道の方へ行きかゝる。伴藏
皆々、この時花道の邪魔になる。小わだ、入れ替り、

先へ立ち、これを除け〳〵行かうとする。
居茶　女中さん、待ちなさい〳〵。
小わ　此方の事でござるか。
甚太　アイ、お前方の事サ。
小わ　つい近付きでもないお衆。なんぞ御用でもござるかな。
伴藏　コレサ、何も四角四面に云ふ事はないわな。高で主達に、相をしてもらひたいのサ。マア、爰へ來なさい來なさい。
小わ　イヤ、忝なうはござれど、私しどもは酒は不得手でござりまする。折角お見立てにあづかりましたれど、お氣の毒ながら、これに緩りとござりませ。……サア、お越しなされませ。
ト行かうとする。
伴藏　コレサ、女中さん。なんぼ下戸だと云つて、相を願ふと云ふのに、其まゝ振つても大事ないかえ。
小わ　サア、それはな。
伴藏　わつちだつて、かつたい坊ぢやアあるまいし。さう又、嫌がる事もないぢやアないか。但し、この杯はむさいか。汚ないのかえ。
兩人　女中さん、さうか。
トいろ〳〵嫌がらすこなし。小わた、思ひ入れあつて
小わ　イヤ、全く其やうな事ではござりませぬ。
伴藏　さうでなくば、マア、爰へ來なさいな。
ト小わたが手を取る。此うち直姫、おくの、怖がるを、小わた、大事ないと押へるこなし。
小わ　左樣なら、お相いたしませう。
ト合ひ方になる。こなしあつて伴藏が側へ行く。
伴藏　左樣いたさいでつまるものか。コレ、そちらの子や。爰へ來な〳〵。
ト無理に直姫の手を取る。小わた、これを支へる。姫はおくの方へ寄る
甚太　お前も此方へ來なさい
ト手を取る。
くの　こりや慮外な。何しやるぞいな。
ト振り切るを無理に伴藏が方へ突きやる。文助、寄らうとする。
居茶　コレ、てまへ達の出る幕ぢやアない。すツ込んで堅くなつて居や〳〵。
ト襟を摑んで後の方へ引寄せる。伴藏、姫を引寄せる。

小わた慌て

小わ　こりや、何となされまする。

作藏　何とするとは、主も野暮な者ぢやないか。男が女を捉へて、外に仕やうがあるものか。大概知れたものだ。顏に似合はぬ大きな野暮女中ぢやアねえか。

ト小わたを引き退け、姫を無理に引寄せる。甚太もおくのを引寄せる。兩人あせる。小わた、寄らうとするを居茶平しつかりと留め

居茶　コレサ、さう何も岡燒餅をやく事はないわな。お前の相手には、おれが居るわな。なんぼ折助でも、看板に僞はりのない、鼻筋は十人並よりしやんとした立派な男だ。どうだ、承知か〳〵。

ト小わたにしなだれかゝる。小わた、胸に据ゑ兼ね、いろ〳〵思ひ入れあつて、氣を替へ、堪えるこなし。

作藏　ハヽア、默つて居るは、其方ももう極めたな。梅屋敷の割り床も面白い。コレ姐えや。

ト姫を引きつける。嫌がるこなし。

この子はとんだお轉婆だ。コレ、惡い事ぢやない。よい事を敎へて遣るのだ。コレ、酒を助けてくれ〳〵。

ト一口呑んで姫に突きつける。

直姫　イヤ、自らは。

ト顏を外ける。小わた、これを見て

小わ　勿體ない。その酒を。

ト寄らうとする。居茶平支へる

作藏　呑みかけだから、呑ませる事はならないか。

居茶　何もむづかしい事はござりませぬ。この女は私しが押へて居りまするゆゑ、存分にお樂しみなされませ。

作藏　酒を助けたいか。どうだ〳〵。

ト無理に突きつける。

直姫　エヽ、嫌ぢやわいなう。

ト杯を打ち落す。

作藏　此奴は情の剛い女だ。いつそ船へそびいて行つて。

甚太　それ〳〵、むづかしい事はござりませぬ。惡くびくつくと、舟へそびいて沖へ乘り出しやア、煮て食はうと燒いて食はうと此方の好きだ。

居茶　それがいゝ〳〵。

ト引立てにかゝる。小わた、これを押へ

小わ　最前より醉狂と思ひ、料簡すれば餘りの法外。滅多に粗相せまいぞ。

作藏　そんなら心よく抱かれて寢るか。

小わ　サ、それは。
三人　但し、船へそびいて行かうか。
小わ　サ、それは。
伴藏　サア。
小わ　サア。
四人　サア〳〵〳〵。
文助　もう料簡がならぬわえ。
　ト打つてかゝる。小わた慌てゝ留めて
小わ　コリヤ文助、逸まるないぞ。
文助　イヤ〳〵、最前から堪えて居つたれど、餘りなる法外。誰れあらうあまた樣、
　ト云はうとする。小わた押へて
小わ　コリヤ、それは何を云ふのぢや。名乘つてよくば自らが詫びる。云はゞ忍びの御參詣、すべて御名の出る事、それゆゑにヂッと胸を押へて居るではないか。つか〳〵と物を云ふまいぞ。
　ト思ひ入れにて留める。文助、ハイと扣へる。
甚太　なんだ、この折助は、ぎく〳〵切刃廻すが、どうしようと思ふのだ。
居茶　見りやァ竹篦をひねつて、どうする。あかぎれをこそぐるのか。これをひねくつてどうするのだ。
　ト足にて蹴る。文助ムッとする。小わた、顏にて押へ、思ひ入れあつて伴藏が側へ寄り
小わ　最前より御酒宴の興を醒まさせましたは、わたしの不調法。幾重にもお詫びを申しまする。それにつきまして、分けてのお頼み、我れは〳〵今日は忍びの參詣ゆゑ、隙取りましてはこの身の上。何とぞ爰の所をお聞き屆けあつて、お歸し下されませうならば、忝なう存じまする。
伴藏　そりや出來ない。達て歸りたくば、その女を殘して、お主ばかりは歸してやらう。
小わ　サア、そこを折入つてのお頼みでござりまする。
伴藏　ハテ、ならねえと云ふに。
小わ　すりや、どうあつても。
伴藏　知れた事だ。
小わ　ヘイ。
　ト小わた、當惑のこなし。暮れ六ツの鐘鳴る。男女川、煙草をのみながら始終を見て居る。
男女　南無三、暮れ六ツだ。爰で待たうより、ぶら〳〵勇駒が處へ行かうかい。ドレ〳〵。

ト床几を立つ。小わたフト心付き

小わ　イヤ申し、ちよつとお待ちなされませ。

男女　わしが事でござりまするか。

小わ　ついぞお近付きではなけれども、お相撲と見掛けまして、お願ひ申したい儀がござりますが、なんと頼まれて下さるまいか。

男女　ムウ。お歴々のお女中樣のお頼み。仔細は最前から聞かぬでもござりませぬが。

小わ　思ひがけない不慮の難儀。我れ〳〵親子ばかりなりや、如何やう爰を立歸る品もござらうなれども、情なきはお供を申せしお方は、大切な

ト云はうとする

男女　もう、仰しやりますな。高が挨拶してくれいと仰しやるのでござりませう。世間へ面の賣れた私し、御大身のお名を聞いては、却つてこの挨拶も致し惡うござります。

小わ　すりや、御挨拶をなされて下さるお心かな。

男女　ハテ、男と見掛け頼むとあれば、引きもなりますまい。頼まれましてござりまする。

小わ　そんならよろしう。

男女　ようござりまする。

ト好みの合ひ方になり、伴藏が側へ來て

イヤ、お武家樣、最前からあれに見て居りましたが、何かあの女中に、御用の筋もあるさうにござりますが、あの女中衆も、急にお屋敷へ、歸らねばならぬ大事のお身さうにござりまする。お前の御用の筋は、何か存じませぬが、あれ程に申されまする事。なんと、歸しておやりなされませぬか。

居茶　ヤイ〳〵、此奴は、しこなした奴ぢやアないか。歸してよくば、旦那がお歸しなさるワ。

甚太　關取り、挨拶なら、措かつしやい〳〵。

男女　ハテ、さう木折りには云はぬもの。わしも挨拶をして進ぜませうと請合うたからは、聞入れてもらはにやア、立ち惡い、と云ふやうなものでござりまする。ハヽヽハ。何もむづかしい事ではござりませぬ。もう料簡しておやりなされませ。

伴藏　最前から辻談議を見るやうに、誰れも聞き手もないに、ぶつくさ〳〵と云つて居るは誰れだ。

男女　わしでごんす。

伴藏　わりやア誰れだ。

男女　男女川でごんす。
伴藏　男女川とは。
男女　男女川浪五郎と云ふ、ずんど小前な角力取りでごんす。
ト男女川を見て
伴藏　成る程、回向院でも藏前でも、折節見かけた男女川、よく見知つて居る。
男女　サア、その顏の知れた男女川が挨拶。なんと、わしが顏を立て、聞入れて下さりませぬか。お前樣をお武家樣と見掛け申して、折入つてのお賴み。爰は一番、男女川を立てゝ下さいまし。賴みましたぞえ。ようござりますか。聞入れて下さりましたな。
ト此うち伴藏始め、甚太、居茶平も素知らぬ顏をして居る。
ヤレ嬉しや。それではわしも顏が立つと云ふもの。その代りに、この男女川が、キッと恩に着まする。コレ、兩手を下げて禮を云ひまする……サア、申し、お女中樣、お斷わり申して置きました程に、早う連れましてお歸りなさたませ。
小わ　これはマア、段々とお世話でござりました。左樣ならもう、歸りましても、苦しうはござりませぬかな。
男女　隨分苦しうござりませぬ。
小わ　左樣ならば又重ねて、お禮申すでござりませう。サア。
伴藏　イヤ待て、武士が一旦云ひ掛つた、その女を抱いて寢にやア、歸す事はならないぞ。
男女　これはどうでござりまする。最前から詞を盡して、御挨拶を申したではござりませぬか。わしも面を賣る商賣、その面を捨てゝ兩手を下げて、お賴み申したぢやござりませぬか。
伴藏　その手を下げて賴んでくれろと、誰れが云つたえ。其方の好きで手を突く事を、誰れが知るものか。馬鹿な理窟を云ふ男だ。挨拶は聞かない、承知はしないぞ。
男女　サア、そこが料簡、男は當つて碎けろでござりますわいの。
伴藏　エ、面倒な。料簡も絲瓜も要らねえ。歸りたくばその女を置いて歸れサ。
男女　すりや、男女川がどのやうに申しても。
伴藏　男女川でも紐川でも、頓着はしない。はつち坊主が米を零したやうに愚圖々々と、一體われが關取り面で、

挨拶が氣に食はない。刀を怖がつて挨拶を聞けば町人根性。ぎやつと云ふから鎌倉どのゝ、お藏米で育つた侍ひ氣質。どこまでも武士の意地を、立て通さにやアならないぞ。

居茶　成る程、こりやアさうであらう。全體いゝ男だ。どこか男女藏に似たぢやないか。

甚太　イカサマ、居茶平が見立ての通り、よく似て居るわえ。粗々ッかしい奴は穿き違へさうな面だ。これを思へば南瓜と唐加子、間違はぬやうに、よく大小を附けたものぢやアないか。

二人　ハヽヽヽ。

ト笑ふ、此うち男女川、ムッとする事あつて、小わたに面目なきこなしにて、氣を替へて

男女　イヤモウ、何と云はれても仕掛けた挨拶、仕負ふせにやアならぬ。モシ、さら〳〵力商賣を功に着て挨拶するの、又あの女中に心があつてのと申すのはござりませぬ。ほんの行きがゝりの男づく。お前方の心一つで、明日から人中へ顏出しがなるかならぬか、殊に依つたら商賣にも、係はる事もござりまする。お武家樣、どうぞ爰の所をお聞入れ。

トこの臺詞のうち、三人空嘯いて居て、この時ズッと姫の方へ行かうとする。男女川、留めて

こりや、どこへござりますか。

伴藏　知れた事だ。あの女を連れて行つて、抱いて寢るのサ。

居茶　達て邪魔をすりやア、斯う

ト兩人、男女川を引立てようとする。その手を取る。

アタヽヽ、こりやア、どうする〳〵。

男女　イヤ、何ともせぬが、こなさん方も、とも〴〵執成し云うて下んせいなう。

ト突き放す。

伴藏　こりやア、兩人を手籠めにするな。

男女　徭體もない。なんの手籠めに致しませう。

伴藏　イヤ、今した〳〵。よい。われが力づくでさうすりやア。

ト目配せする。兩人、呑み込み

兩人　斯うするわえ。

ト甚太、薪持つて、居茶平、脇差を拔いて、切つてかゝるを、よろしく留めて

男女　こりやア何をするのだ。白刃を拔いて、危ない〳〵。

怪我があつちやア悪い。マア、爰を離さつしやりませ。
ト双方をもぎ取り、伴藏、後より切りかけるをキッと留める。小わた、兩人を閉うて心遣ひのこなし
ハテ大人氣ない。お前までが白刃三昧。仁體が損ねますぞえ。
ト白刃を押し曲げ突き放す。居茶平、茶屋の天秤棒を持つて打つてかゝる。甚太、落ちてある脇差にて切つてかゝる。双方よろしく立廻り。思はず知らず男女川、兩人を當てる。これにて兩人ウンと倒れる。
これはしたり、危ないと云ふのに。
ト兩人の死んだも心付かずに居る。伴藏、また切つてかゝる。立廻りにてちよつと當てる。ウンと倒れる。男女川これにて心付き、見れば皆々悶絶して居るゆゑ、こなしあつて
ハテ、この手合ひは、とんだ凡くらではある。ハテ、惡腰を摺ゑても、三文にもなるのぢやアない。相手を見て狂言をさんせいなう。
ト云ひながら、心ならぬこなしにて、甚太、居茶平を引立て見る。兩人ともに、ぐんにやりとなつて居るゆゑ恟りして

南無三、こりやア振つたさうな。
ト當惑する。合ひ方、小わた、男女川が側へ來て
小わた　どうぞさつしやりましたか。
男女　エヽ口惜しい。お女中、挨拶を仕損じました。
小わた　なんと。
男女　振りました。
小わた　すりや、兩人を。
男女　なんとせう、是非がない。併し、喧嘩を仕掛けて物にする、盜人同然な奴等、大事もあるまいが、もしどう云ふ事で掛り合ひになつては、お前方のお邸のお名の出る事。後はわしに任せて、サア、早う〳〵。
ト顏で歸れと云ふ。小わた思ひ入れ。
小わた　イヤ、歸られませぬ。
男女　とは、なぜにな。
小わた　首尾よく行けば兎も角も、相手死すれば表沙汰。此まゝで立歸つては、主人へ申し譯が立ちませぬ。殊に又、元は我れ〳〵なれば、例へ檢死を引受けるとも、其許の難儀には致さぬ……コレ娘、其方はお姫樣をお供して立歸り、この由を夫宗右衛門どのへ申し上げや。
くの　畏まりました。母樣お一人。

小わ　ハテ大事ない。姫君様のお身の上。文助、心を附けて、早う／＼。

文助　ハツ……イザ、お越しなされませ。

ト合ひ方にておくの、姫が手を取り、文助付いて向うへ入る。小わた、思ひ入れあつて

小わ　サア、男女川どの、こなたにもこの場を早う、検死はこれにて引請けませう。

ト立派に云ふ。男女川こなしあつて

男女　イヤ、お女中様、そりや御料簡が違ひまする。一旦挨拶を頼まれながら、仕損じまして殺しては、私しが誤まり。さすれば例へ表沙汰になりましても、下手人はこの男女川。あなたのお名は出しませぬ。

小わ　イヤ、それはこなさんの思ひ違ひ。喧嘩の挨拶頼みながら、相手の即死を知らぬ顔にて、立歸りしと人の噂。家中の人に笑ひ誹りを受けましては、夫の恥辱、殿の汚名。假初めならぬ縁を繫く自分として、なんと此まゝ歸られませうか。どこまでも喧嘩の相手、これにて御裁許受けまする。

男女　ムウ。達て左様仰しやるは、この男女川に恥辱を與へ、世間は勿論土俵までも、面出しするなと云はつしやりますのか。

小わ　イヤ、全く左様では。

男女　サア、さうでなければ、なぜ私しに任せて歸らつしやりませぬ。お名は聞かねど大切な、御主人のお名が出ますぞえ。私しは高の知れた角力取り、喧嘩したとて笑ふ者もござりますまい。ハテ、喧嘩は振りもの、挨拶頼まるゝからは、仕負ふせぬ時は男づく。相手は侍ひ、斯うなるは覺悟の前。ほんのこれが珍事ちうやう。今さら驚ろく男女川でもござりませぬが、それともに私しの顏を汚し、殿様の御名も世間の口の端に掛けたくば、如何やうとも。斯う又云ひ出すからは、どこまでも喧嘩の相手は男女川でござりますると、名乘るは合點。それにあなたが義理立てして、兎や角と仰しやれば、品に依つたら二人とも、命を捨てねばなりませぬ。サ、爰の處をとつくりと、御思案なされて何事も、私し任せになされて、早うお歸りなされませ。

ト利害を説く。小わた、思案するこなしあつて

小わ　すりや、如何やう申しても。

男女　喧嘩の相手はこの男女川、三人と一人の命、まんざら損でもござりますまい。

小わ　由ない挨拶頼みまして、大切なる命を捨てさせますは本意ならねども、否と云はゞ、却つて顏が廢るとあれば、是非に及ばぬ。この上はとも斯くも。とても事に、先途を見屆けた上、歸りませう。

ト此うち伴藏、起き上がつて

伴藏　男女川、われを。

ト切つてかゝるを留めて

男女　毒喰はゞ皿。

ト天秤棒にて打ち倒す。

小わ　とても事に、とくと止めを。

男女　合點だ。

ト捧にて胸倉をムウと突く。時の鐘、ゴンと撞き出す。小わた、空を見、こなしあつて

小わ　最早入相。

ト小わた、死骸へ立寄り檢め見ろ。

天晴れ、白刃を用ひず仕留められしは、流石は達者の手の內。驚ろき入りました。お禮は近々。

男女　イヤ、それには及ばぬ。御緣もあらば又重ねて。

小わ　然らば此まゝ。

ト双方よろしくこなし。伴藏ムウと呻き出す。男女川、つか〳〵と寄つて

男女　いつそ。

ト有り合せたる大石を、伴藏が胸板へどつさりと打ちつける。仕掛けにて伴藏が口より蘇枋紅を吹く。小わた、これを見て感心の體。こなしあつて膝を叩く。これをキツカケに

ひやうし幕

三幕目　三田屋の場

役名　三田屋源次郎。同女房、おいつ。同番頭、與兵衞。同手代、金七。同丁稚、音吉。別家、おらく。醫者、無法。宗右衞門の女房、小わた。同娘、おくの。關取り、男女川浪五郎。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、上の方、一間の押入れ、上下まいら戶、この前に手摺り、中に天秤を直し、脇に金箱積み重ね、眞中に暖簾。下の方、大津壁、これにいろ〳〵の帳面を掛け並べ、よき所に帳簞笥、後に明ける事あり、橋がゝり格子戶、この前

に用水桶、上に手桶を積み重れ、すべて爲替兩替店のかゝり。幕の内より手代、天秤にて銀を掛けて居る。金七、重手代の拵らへにて帳簿を扣へ、煙草をのんで居る。眞中に大盥紙を敷き、小判を打明け、手代大勢切れを改めて居る。下の方格子戸の前にて一文神樂、獅子を舞うて居る。同じく太鼓を打つて居る。これを音吉、丁稚の拵らへにて立つて見て居る。この見得、天秤の音、曲撥にて賑やかに幕明く。

金七　店先で喧ましい奴だ。しまへ〳〵。

音吉　一文だけ樂しまうと思うたに。ソレ。

ト錢を投げる。

獅子　御家内繁昌、御祈禱々々〳〵。

ト太鼓を打ちながら向うへ入る。引違へて向うより、相場方の手代大勢、各々算盤を持ち出で來り、門口より各々算盤にて、金相場の賣買を見せる。同じく金七算盤にて、これ程買ふとして見せる、手代呑み込み、また各々賣買の仕方しながら、騷々しく向うへ入る。引違へて手代一人出て

手代　白銀町の南部屋から參りました。堺筋の布治の爲替三貫五百匁、受取りに參りました。

ト財布より手形を出して渡す。金七改め、割判を引合せ

金七　音吉、南部屋渡し、三貫五百目、天秤方へ云うておぢや。

音吉　オツとよし。三貫五百目。

ト手代、算盤にて打つ、金七、捨ぜりふ云うて居るうち、向うより又手代一人出て來て

手代　京橋上州屋から參りました。大坂高麗橋羽生屋の爲替、四貫目受取りに參りました。お渡しなされて下さりませ。

ト同じく財布より、手形を出して渡す。金七、前の通りに引合せ

金七　上州屋渡し四貫目。

ト大きな聲にて云ふ。

天秤　エヽ、恟りするわえ。

音吉　おつとしよ。

トこちらへ來る。手代、銀を掛け出す。金七取つて各各へ渡す。兩人、捨ぜりふにて財布に入れる。

兩人　これはお世話でござりまする。

音吉　一昨日ございい。

ト通り神樂にて手代兩人、向うへ入る。引違へて向うより與兵衞、羽織袴の形、一本差しにて、丁稚一人付き添ひ出て來る。直ぐに内へ入る。音吉見て

ソリヤ、毛蟲どのゝお歸りだ。

與兵　何を吐かし居る。

ト睨みつける。

金七　オヽ、與兵衞どの、いま歸らしつたか。今日はきつう隙が入りました。

與兵　イヤモウ、どのお屋敷へ上がつても、芝居の話しでつい長うなるし、こちらでは角力の評判。イヤ、その角力で思ひ出した。一昨日とやら昨日とやら、梅屋敷で角力取りが、大きな喧嘩をして、三人とやら侍ひを殺したとの噂があるて。

金七　ハテナ、して、その角力取りの名は知れぬかの。

與兵　サア、まだ名は知れぬが、三人をぶち殺したとは、酷い事をしたぢやアないか。

金七　イヤ、あの手合ひが腹を立てたらば、さうであらうて。

音吉　おれも、その角力で思ひ出した。此方へ出入りの男女川さんは、久しく見えぬが、ひよつとその喧嘩の相手が、もし男女川さんぢやア、春相撲が始まつても、見せてくれる人がない。アヽ、案じられるわいの。

ト投げ首する。

金七　イカサマ、こりやア音吉の云ふ通り、元あの男女川は、若旦那の爲には家來筋の者。その緣でこの家への出入り。若旦那がお聞きなされたら、さぞお案じなさるゝ事であらうわい。

與兵　時に、このおいつさまは、まだお歸りなさらぬか。

音吉　どうしてお歸りなさるものか。まだ〳〵餘ツぽど間があるのサ。

與兵　何もさうお寺で、手間の取れる筈はないが。

金七　イヤ、あのお子も、久しいお中陰のうち、お宿にばかりござつたゆゑ、もし御病氣でも出やうかと、無理矢理にお勸め申して、物參り方々歩いて居るぢやに依つてお隙も入る筈ぢや。併し、もうお歸りに間もあるまいかいの。

與兵　人の心を知らず、早う戻らうとはせずに、どこを此やうに歩いてござるやら。どうぞ早う戻つて、顏を見ようく〳〵と、屋敷廻りもそこ〳〵に戻つて來るに、男心を

思ひやりのない。

ト金七と顔見合せ

若旦那のしやつくわいも久しいものなア。ドレ、袴も取らうか。

ト唄になり、與兵衛、袴を取る。向うよりおいつ、餘所行きのやうの拵らへ、後よりおとみ、針妙の形、留め袖衣裳。茂兵衛、羽織、手代の形。外一人、丁稚の形、風呂敷包みと水仙の花を提げて出で來り、皆々直ぐに舞臺へ來る。

音吉　オヽ、おいつさまのお歸りだ。

ト金七出迎へ

金七　ホウ、お歸りでございますか。さぞお草臥れなされたでございませう。茂兵衛、矢張りお駕籠を吊らせればよいものを。

茂兵　サア、わたしも左樣存じましたれど、結句氣詰まると仰しやりますゆゑ、止しに致しましてございまする。

ト此うち與兵衛、下へ下り、煙草盆を扣へ、煙草をのんで居る。奥より腰元走り出て

腰元　只今お歸りなされましたか。

いつ　いま戻つたわいの。源次郎さまは、奥にお出でなされるかいの。

腰元　ハイ、只今お居間に、御本をお讀み遊ばしてござりまする。

いつ　只今歸りましたと、申し上げてたも。

腰元　アイ／＼、畏まりました。

ト腰元、奥へ入る。

いつ　オヽ與兵衛、そこに居やつたかいなう。

與兵　ハイ／＼。

ト慇懃に云ふ。

いつ　あの人とした事が、どうぞしやつたかいなう。

與兵　ヘイ／＼。

金七　おいつさま、今日はお寺から、どつちへぞお廻りなされましたか。

とみ　サイナア。マア、ズツとお寺へお詣り遊ばして、それから上野へお供して、山王の茶屋で、ズツと見晴らしたところは、どうも云へぬ心持ちでござりましたわいなア。

音吉　彼處はとんだいゝ所よ。何時でも若旦那さんのお供で行くと、あの下の濱田屋で、大抵美味い物を食はせる事ぢやアない。

金七　ほんに若旦那樣で思ひ出した。今朝若旦那が、無法さまへ人を遣れと仰しやつたが、とんと忘れて居た。晉吉、大儀ながら五郎兵衞町までな。

晉吉　無法さんを呼んで來るのか。

金七　ハテ、耳の早い奴な。

晉吉　その代り足は遲いぞや。

金七　何を吐かす。早う戻つて來い。

晉吉　おつとしよ。

金七　申し、おいつさま、若旦那はこの頃、御在所からお歸りなされて、めつきりとおやつれが見えまする。何かひどう御苦勞の樣子。諸事お氣をお付けなされませ。

いつ　サイナウ、とんと酒も上がらず、お食も進まずに、ありやどうした事ぢやぞいの。父さんにお別れ申してより、便りに思ふは源次郎さま只お一人。それでわたしも、大抵苦勞になる事ぢやないわいの。

與兵　ハテ、御深切な。私しは又、お前樣が其やうに、心遣ひなさるのが、笑止で／＼氣の毒で、おいとしうござりますわいなう。

いつ　そりや、なぜにいなう。

與兵　その譯を申しませうかえ。必らず腹をお立てなさるなえ。自體源次郎さまが、親旦那に暇を貰うて、御在所へお出でなされたを、お前はほんの事ぢやと思うてござりますかな。ソレ、さう思うてござるのが、金持ちの懷ろ子、皆嘘でござりまする。在所へ行くと云うて、内を出てから、扇屋の居續け、禿の突き出し、新造の袖留めナ、女藝者の俄の衣裳、てんと面白くて、阿房のありたけ。それぢやに依つて、親旦那の事やお前の事を思ひ出すと胸が惡い。口直しにあの藝者の口を吸ひ、腹が立つと云うてはおッ轉ばし、脊が立つと云うては引摺り込み、夜なしの床の敷き詰め。その草臥れが一緒に出て、氣合ひが惡いの不快のと、皆吉原の奴めがさせる事で、かけ構はぬ男のわたしでさへ、腹が立つて／＼なる事ぢやござりませぬ。

　トいろ／＼焚きつける。おいつ、こなしあつて

いつ　イヽヤ、わしや腹は立たぬわいの。

與兵　エヽ。

いつ　サア、それ程に、傾城の事思うて居やしやんしても、我が内と思うてなりやこそ、金調へに歸りなされたではないかいの。手かけ妾は殿御の樂しみ。その傾城どのを請け出してさへ上げましたら、外を家にはなされま

いぞいの。
ト與兵衛、呆れるこなしにて
與兵 ハテ、結構な思し召しなア。
ト此うち、おらく、中年の婆アの拵らへにて、暖簾口より出かけ
らく イヤ、さうはなりますまい。
金七 別家のおらくさま。
いつ おらく、なぜにいなう。
らく なぜとは、よう思うて御覽じませ。聟樣の惡性狂ひは、このらくが、アイ、えゝ、させませぬ。自體あのやうなる人を跡目にしては、第一お屋敷方の受けが惡い。こりや御寮人も、思案なされたが好うござります。
與兵 そんな受けの惡い聟どのと祝言しやうより、どこぞ爰らに屋敷方の受けのよい、情深い、發明で、世辭のよい、その上に愛があつて、卑しうなく、キッとせず、樣子があつて、しやんとして、歌川も筆を捨てると云ふ男があるが、相談する氣はないかいなア。
らく サア、それが燈臺下暗し。あんまり近過ぎて、氣の付かぬもの。
ト此うち無法、撫付け、醫者の拵らへ、日傘をさし家來を連れ、音吉付き添ひ出て、直ぐに舞臺へ來り、内へ入る。
音吉 なんと、餘ッぽど遲からうがの。おれが所爲ぢやアないよ。無法さんの足は遲い足サ。
無法 老足ゆゑ遲參いたした。何れも、御免下されい。
ト好き所へ通る。
金七 これは無法さま、御苦勞にござります。
ト前へ煙草盆を出す。
無法 ア、構はつしやりますな。御寮人樣、今日はお見舞ひ申しませなんだ。して御病人は、どなたでござりますな。
いつ ハイ、源次郎さまでござりまする。コレ、とみや、其方は奥へ行て、呼びましておぢや。
とみ ハイ、畏まりました。
ト奥へ入る。
與兵 おいつさまも、思ひやりのない。源次郎さまは去年からの身持ちで、腰がふらついて歩き憎からうのに、呼び申さずと措きになされればようござります。
ト當てつけて云ふ。おいつ、こなし。合ひ方にて源次郎、おとみを連れて出る。

無法　これは若旦那、何となされました。
源次　イヤ、何とも致さねども、去年以來、一度もお出會ひ申さぬゆゑ、お暇もあらばと存じ、又少し時候に中つた氣味でござるゆゑ、診ておもらひ申さうと存じて。
無法　成る程、餘寒の強いで、皆中りまする。大方時候の入つたものでござりませう。
らく　時候の入るか物いりか、金のいるのでがなあらうわいの。おいつさま、サア、お前は奥へお出でなされて、召替へなされませいなア。
いつ　イヤ、わしは爰に。
らく　ハテ、お出でなされと云ふのに。サア、與兵衞どの。
與兵　ドレ、上せ金を云ひつけようか。
らく　與兵衞どの。
與兵　サア、行きませう。
ト唄になり、おらく、おいつを無理に連れ、一間の暖簾口へ入る。後に源次郎、無法、金七、音吉殘る。合ひ方。
無法　ドレ、お脈を伺ひませう。
ト源次郎の方へ躙り寄る。

源次　御苦勞ながら。
ト手を出す。無法、脈を取りながら
無法　イヤ、何もお氣遣ひな事はござりませぬ。時候中りでござりまする。
金七　イヤ若旦那、この間から申して遣はしました、京橋太刀賣りの刀屋から、守り刀を彼れこれ持つて參りましてござりまする。お目にかけませうか。
源次　太刀賣りから守り刀を持つて來た。ドレ〳〵、見よう。見せてたも。
金七　畏まりました。
ト戸棚の短刀を大分出して、源次郎が前へ置く。源次郎、いろ〳〵改め見て
源次　似ても似付かぬ無銘物。
トこなし。
無法　イヤ、腰の物と申すものは、心がけますと、フト心に入つた差し頃な物が出るものでござりまする。拙者も先頃、池の端の道具屋が見せに參つた短刀。拵らへから恰好、どうも云へぬ。物好きゆゑ求めようと存じましたれど、餘り價が高値にござつたゆゑ、マア、金子十兩差し金いたし、預かり置きましたが、手前近所の刀屋が見

附　番　繪　の　演　初

付けまして、なか〳〵當時手に入る道具ではないと申して居りまするて。
ト源次郎、これを開くと、思ひ入れあつて
源次　して、その短刀は、如何なされました。
無法　即ち、これに帶して居りまする。
源次　ドレ、拜見いたしたうござる。
無法　サア〳〵、御覽なされませ。
ト渡す。源次郎、改め見て
源次　ヤヽヽ、こりや正しく三光の。
ト云はうとして、こなし。
ハテ、天晴れなお道具と見えまする。
無法　堀出し物を致しました。
源次　時に無法老、近頃不躾ながら、なんとこの短刀を、お讓りなされては下さるまいか。
無法　アノ、これをな。
源次　如何にも。
無法　イヤモウ、お出入り申す拙者でござれば、如何やうとも仕りませうが、何を申すも、餘り金高でござるゆゑ、お讓り申すも如何に存じまする。
源次　イヤ〳〵、その儀なら苦しうござらぬ。例へ價は何程でも、求めたうござりまする。
無法　左樣ならば、お讓り申しませう。即ち價は二百兩でござりまする。
源次　成る程二百兩、承知いたしました。
無法　時に、申さぬ事は聞えませぬ。今日買ひ主が參る筈でござれば、金子遣はしたうござりまする。
源次　すりや、金子を只今。
ト當惑のこなし。金七、氣の毒なるこなし。
音吉　つい店先にさへ、金はいくらも積んでありながら、女郎屋の若い者同然、岡目で見たやうには、別家の婆アが自由にさせぬ。
ト無法、うち〳〵して
無法　それは近頃氣の毒千萬。定めてどれへなと有りついて、早う金にしたいと云ひ居るであらうわいの。
ト愚圖々々云ふ。源次郎、思ひ入れあつて
源次　イヤ、只今金子お渡し申しませう。
ト懷中より讓り狀を出して
こりやコレ、親仁どのゝ自筆の讓り狀。金子調達いたすまで、お預かり申されまいかな。
無法　イヤ、それには及びませぬ、と申したいが、先方へ

の申し譯でござりまする。成る程これをお預かり申しませうが、長うと申しましては。

源次　御尤も。今晩中に金子を調へ、明朝早々遣はしませう。

無法　然らば、短刀お渡し申しませう。

源次　讓り状、お預かり下されい。

ト双方取替へ

無法　然らば明朝。

ト立つて行かうとする。

源次　お腰が空いて。

ト無法、日傘を取り、腰に差して

無法　これでも濟みます。

ト唄にて、家來を連れ、向うへ入る。此うち晉吉、居眠つて居る。

金七　申し、若旦那、大切な讓り状を、お預けなされても苦しうござりませぬか。

源次　ナンノイナウ、明日までにさへ金を遣はせればよい。これでさつぱり心持ちがよい。今日は釜でも掛けよう。晉吉めは心よう居眠つて居るさうな。大儀ながら奥へ行て、女子どもに、爐の炭を起して置けと云ひ付けてたも。

金八　畏まりました。

ト金七、奥へ入る。合ひ方にて、こなしあつて

源次　義理ある兄勘助どのに請合ひし、三光のこの守り刀、日延べの日限近づきしゆゑ、心を痛めし今日の今。思ひがけない無法が手より、買ひ求めしこの短刀。何卒勘助どのゝ行くへを尋ね渡すれば、お身の申し譯も立ち、身の潔白。エヽ、忝ない。

ト押戴き。

とは云へ、らくが目にかゝらぬやうに。

ト方、見廻し、帳箪笥へ入れ、錠下ろす。暖簾口より與兵衞、窺ひ、巧いと云ふこなしにて入る。源次郎、これを知らず

この箪笥の錠は金七が所持。よし〳〵。イヤ、まだ落ちつかぬわいの。明日の朝までと無法に規定した二百兩……あのやうにいくらも積み重ねてはあれど、店を預かる手代どもの手前と云ひ、披露目も濟まぬ其うちは、遣ふ譯にもならず、と云うて明日までに、なければならぬ二百兩。ハテ、どうしたものであらうなア。

ト唄になり、思案しい〳〵奥へ入る。晉吉、矢張り居

眠つて居る。おいつ、立聞きせし心にて出て

いつ　源次郎さまの今のお詞を聞くにつけ、お氣の疲れの出るも無理ではござんせぬ。心にかゝるはあの讓り狀、人手にあつては披露目もならず、この上は金子整へ、讓り狀取戻すも、源次郎さまのお心休め。と云うてその金の心當もなし。

ト思案するこなし。いろ／＼思ひ入れあつて

さうぢや。例へらくや與兵衞が、何と云はうと叱らうが源次郎さまのお爲、あの店の金を。

トあたりを見てこなしあつて、そろ／＼金箱の側へ行かうとする。

音吉　ソレ、盜み居るわいの。

トおいつ、慄りして飛び退き慄うて居る。

エヽ、太い猫めだなア。

ト云ひ／＼鼾をかく。おいつ、音吉を見て

いつ　エヽ、誰れぢやと思うて、慄りしたわいなう。

ト少し落ち付きしこなしにて、また行かうとする。

音吉　ソレ、又ぢや／＼。

いつ　エヽ、音吉とした事が、意地の惡い、寢言云ふではあるわいなう。

ト怖々金箱の蓋を明けにかゝる。いろ／＼して

エヽ、辛氣な。錠が下ろしてあるわいな。誰れぞソッと明けてくれぬかいな。

トいろ／＼明けたきこなしあつて、音吉が側へ來て

音吉々々、起きてたも。起きてたもいなう。

ト搖り起す。音吉、矢張り寢て居る。おいつ、音吉の足を抓る。

音吉　アイタヽヽ、何奴ぢや／＼。

ト目を覺まし、おいつを見て

エヽ、おいつさん、惡い事をなされますな。

いつ　大きな聲をしやんないの。わが身に頼みたい事があるわいの。

音吉　なんだえ。大きな聲をするな。頼みたい事がある……ハア、承知々々、椎の實を買つて來てくれかえ。

いつ　そんな事ぢやないわいの。

音吉　そんな事でなうて、どんな事ぢやえ。

いつ　サア、その頼みと云ふはの。

音吉　云はんすは。

いつ　誰れにも云はずにの。

音吉　誰れにも云はずに。

いつ　あけてたもいの。
音吉　なんぢや、あけてくれい。
いつ　コレ、人が聞くわいの。大きな聲をせずと、サア、早うあけてたもいの。
音吉　サア、そりやアあけて上げまいものぢやアないが、お前もう、源次郎さまに、あけてもらはんしたであらうかな。
いつ　なんのマア、誰れにもあけてもらやせんわいの。
音吉　ハテモウ、お前もあく筈ぢやが。
いつ　それでも、ねつからあきもせんもの。
音吉　ハテ、あかない筈がないが、どのやうな鹽梅であきませぬえ。
いつ　錠が下ろしてあるわいなう。
音吉　なんだ錠が下ろしてあるえ。堀の内の繪馬ぢやアあるまいし、とんだ所へ錠を下ろしたものだ。
いつ　サア、早う欲しいわいの。
音吉　欲しいと云ふは、何ぞいなア。
いつ　金が欲しいに依つて、金箱の蓋を開けて見たれど、錠が下ろしてあるわいの。
音吉　エ、何かいな。お前があけて〳〵と、堀の前を見るやうに云ひなさつたは、金箱の事かいな。
いつ　さうぢやわいの。
音吉　おれは又、ひよんな事を頼まれたと思うて、大抵氣兼ねした事ぢやアない。よし〳〵。金箱の蓋なら、つい開けて上げう……イヤ〳〵、待たんせや。滅多に開けられぬわいの。なぜと云はんせ。あの金箱の蓋を開けたら、おりや盗人になつて、爰を追ひ出されるわいな。イヤイヤ、止しにせう〳〵。
いつ　それでもわしや、金が欲しいわいなア。
音吉　ハテ、さう欲しくつては困つたものだね。
ト考へ
よい〳〵。好い智慧がある。あの金を取らずに、金の出來る思案がある。
いつ　そりや、どうしていなう。
音吉　質を置きなせい。
いつ　質とはや。
音吉　エ、ほんに質を置く事を知らぬとは、御息災な。モシ、質と云ふは何なりと、お前の大事の物を預けて、金を借りるのぢやわいなア。
いつ　ムウ、大事の物さへ預けたら、金を貸してくれる人

があるかや。
晋吉　なんと好い思案でござりやせうかな。マア、何かとお前の大事の物を、出しなせえ〱。
いつ　合點ぢやわいなう。
ト手を叩く。奥よりアイ〱と云ひながら、おとみ出て來て
とみ　お呼びなされましたかえ。
いつ　わしが手文庫を取つておぢや。
とみ　畏まりました。
ト文庫を持つて出る。おいつ、袱紗やら楊枝差しなどいろ〱取出し
いつ　この楊枝差しは、お屋敷の奥様に拜領した大事の物。これを預けて、二百兩借りてたもいなう。
ト晋吉へ渡す。
晋吉　この楊枝差しで二百兩借るのかえ。ハヽヽヽヽ、お前もわしより餘ッぽど甘いお方ぢやわいの。此やうな物ぢやアゆかぬ。まだ〱大事な物〱。いつち大事の物を出しなさい。
トおいつ、思ひ入れあつて、文庫より袱紗包みの櫛を出し
いつ　この櫛は、死なしやんした母さんの形見。これがいつち大事の物ぢやわいの。
ト渡す。晋吉、取つて
晋吉　オッとあるぞ〱。お前の差して居なさるその簪や、櫛を一緒にして預けよう。
いつ　アノ、これも一緒に遣れば調ふかや。
晋吉　それで大方貸し居らうが、それではお前。
いつ　なんの大事ないわいな。
ト櫛簪を抜いて出し
ちつとも早う調へてたも。
晋吉　氣遣ひせずと、待つてござりませ。
いつ　そんなら誰れにも云やんなや。
晋吉　晋吉は男でごんす。
ト唄になり、向うへ逸散に走り入る。
いつ　これで心が落ちついたわいの。
トおとみ、合點の行かぬこなしにて
とみ　モシ、お前さんは、あのお頭の道具を、どこへ出されましたえ。
いつ　サア、あれは。
トつかへる。

とみ　最前から、どうも合點が參りませぬわいなア。
いつ　あれは何ぢやわいの。オヽ、それ〳〵、今日わしが差して居たのを、横町の大黒屋のお露さんが見やしやんして、恰好のよい櫛ぢや。あのやうに誂らへたい、手本にしたいとある事ゆゑ、貸して上げたのぢやわいの。
とみ　其やうな事なら、簪箱へ入れて遣はされればよいのに。
つい　ほんに、氣が付かなんだわいなう。
とみ　ア、粗々つかしい音吉どの、ひよつと道で……こりや私しが呼び戻して參りませう。
　ト行かうとするを、おいつ悧りして
いつ　ア、コレ、よいわいの。音吉ぢやとて、わしが秘藏の櫛ぢやもの、大事にせいでわいなう。
とみ　その氣の付く人ならよけれど、アヽ、心元ないものぢや。
　ト向うを見て居るゆゑ、おいつは心遣ひのこなしにて
いつ　なんの氣遣ひな事があらうぞいの。それ〳〵、音吉よりは、其方に大事の用があつたわいの。
　ト無理に外の事に散らす。
とみ　ハイ、私しへ御用とは、なんの御用でございますえ。
いつ　なんの用と云うて、昨夜の勝負を附けにやならぬわいの。
とみ　なんの御用かと思うたら、お前さんも、えらいお好きぢやわいなア。
いつ　其やうな事云はずと、早う盤を持つておぢやいなう。
　トおとみ、双六盤を持つて來り、これより兩人、双六を打つ。通り神樂になり、向うより男女川、角力取りの拵らへにて出て來る。本舞臺へ來て
男女　お許されませ。
　ト内へ入る。
とみ　どなたでござんすえ。
男女　イヤ、苦しうない者でござりまする。男女川でござりまする。
　トおいつ、双六を止め、男女川と顔見合せ
いつ　珍らしい。浪五郎ぢやないかいなア。
男女　これは〳〵おいつさま、お久しうござりまする。私しも江戸角力を仕舞ひまして、奥の方へ參り、やう〳〵この間歸りましたところが、直ぐに春角力の談合にかゝ

りまして、お宅へも大きに御無沙汰申し上げました。定めて若旦那は、お立腹でござりませう。お前さん、よろしうお詫びなされて下さりませ。

いつ　よう戻つておぢやつたの。源次郎さまには、大抵お案じなされた事ぢやわいの。

男女　左様でござりませう。私しも早速、參る事でござりましたが、いろ／＼の相談、やう／＼と片付いて、今日申し譯やらお見舞ひやらに、參りましてござりまする。して、若旦那はな。

いつ　いま奥にお休みなされてであらう。コレとみ、浪五郎が參りましたと、お知らせ申しておぢや。

とみ　畏まりました。

　ト行かうとする。

男女　イヤ／＼、お休みなされてなら、それには及ばぬ。覺めてからお目にかゝりませう。

　トこの時、音吉、走りて向うより歸る。

音吉　おいつさん、追ツつけ彼方から、金を持つて來る筈でござりまする。

いつ　それは大儀であつたなう。

　ト音吉、男女川を見て

音吉　オヽ、どこの人かと思うたら、男女川さんかいな。ようござらしやんしたの。

男女　音吉どの、ちつとの間逢はぬ間に、大きくならんしたなア。

音吉　おらァお前の戻らんすを、大抵待つた事ぢやない。また角力が始まつたら、見せて下さんせや。

男女　きつい角力好きではあるわい。時に、大旦那は、御機嫌ようござりますかな。

　トおいつ、しをりとなり

音吉　ほんに、まだ其方は知りやるまいかの、父さんはお過ぎなされて、やう／＼この間、中陰が明けたわいなう。

男女　なんと仰しやりまする。大旦那は御死去なされましたとな。南無妙法蓮華經々々々々々々。ハテ、思ひがけない、さぞお力落しでござりませう。一向に存じませいで、手紙も上せませぬ。左様なら若旦那と、御祝言も調ひ、お披露目も濟みましてござりまするか。

いつ　サイナウ、父さんの中陰明き次第、披露目する筈なれど、折惡しうお年寄様が御他行ゆゑ、お歸りなさるのを、待つて居るのぢやわいな。

音吉　男女川さん、お前、飯はまだであらう。コレ、誰れ

ぞ其處に居るかえ。男女川さんに飯を上げさんせと、臺所へ云ひつけてもらはう。

男女　イヤ／＼、支度をすると、直ぐに出掛けたゆゑ、まだ欲しうない。構はんすな／＼。

ト云ふうち、奥よりおらく、金七出る。向うより股引きの侍ひ一人、男女川が後をつけて來りし心にて、内を窺ひ、引返して入る。但し右臺詞のうちなり。

らく　なんぢや、朝鮮人でも來たやうに、何が珍らしいのぢや。

男女　これは御別家のおらくさま。ハテ、久しうござります。

らく　ホウ、ようござんしたの。

ト鼻であしらひ

ほんに、世界の事と云ふものは、ようしたものぢや。親旦那が死なしやつて、口が一つ減つたと思うたら、又一つ殖えて來る。いつでも一升入る袋は一升ぢやなア。

音吉　大きなお世話だ。

らく　よう差出居るわえ。

音吉　おつとしよ。

ト引込む。この時、捕り手頭、野袴、ぶツ裂き羽織の形にて、捕り手大勢引連れ來り

捕頭　この家に相違なくば、ソレ、踏ん込め。

捕手　ハツ。

トばら／＼と内へ入り、男女川を取卷く。

動くな。

トこれにて皆々驚ろく。男女川、合點の行かぬこなしにて

男女　こりや、何ゆゑに拙者めを。

捕頭　上意。

トずつと通る。

男女　上意とは。

捕頭　一昨日龜井戸梅屋敷に於て、人を害めし男女川浪五郎、召捕りに向うたり。尋常に覺悟いたせ。

男女　エヽ、聞えました。一昨日梅屋敷の喧嘩の儀でござりますか。

いつ　コレ、其方、覺えがあるかいなう。

男女　成る程、覺えがござりまする。

いつ　ヤヽヽヽ。

ト驚ろく。

捕頭　覺えあらば、尋常に繩かゝれ。なんと。

男女　此方より斯う名乘ります上からは、逃げも隱れも致すまい。また手向ひも仕りませぬが、云はゞ盜賊追ひ落し同然な奴等。ぶち殺しましても大事あるまいと存じましたは、此方の大膽。なんと致しませう、是非がござりませぬ。繩かけてお引きなされませ。

いつ　そんなら、人殺しの科人になつて、行きやるのかいなう。

男女　殺したに違ひなければ、助からう筈はござりませぬ。とは云へ若旦那に、ちよつとお暇乞ひが致したいものでござりまする。

捕頭　サア男女川、覺悟の上は、刃物を渡せ。

ト男女川、脇差を向うへ出し

男女　サア、お引きなされませ。

ト立派に直る。

捕頭　好い覺悟。家來ども、繩打て。

捕手　ハツ。

ト繩掛けんとする。この前より小わた、森の後にて、家來大勢出かけて居る。この時

小わ　イヤ待つたお役人、その者に繩はかけられますまい。

トずつと內へ入る。

捕頭　ヤ、なんと。

ト男女川、小わたを見て

男女　あなたは、梅屋敷に於て。

小わ　お世話になりました者でござりまする。

男女　して、この內へ何御用ござつて。

小わ　その仔細と云ふは。

捕頭　ヤア、便々と時が移る。男女川に繩打て。

捕手　腕廻せ。

ト十手を振り上げる。

小わ　イヤ待つた、何れも、粗忽召さるな。

捕頭　科人に繩ぶつが、なんで粗忽でござる。

小わ　イヤ、男女川は、人殺しではござらぬぞ。

捕頭　彼れが口から害めしと現在白狀。なんとそれでも、人殺しではござらぬか。

小わ　イヤ、人を害めしは男女川にもせよ、その頼み手は卽ち自ら。

捕頭　して、其許は。

小わ　結城の家中、荒尾宗右衞門が妻、小わたと申す者。男女川浪五郎へ殿樣よりの上意。

男女　ハツ。

ト白木の臺に衣服大小を載せ、男女川の前へ直す。男女川、合點の行かぬこなしあつて

これは。

小わ　男女川浪五郎、角力の高名と云ひ、殊さら直姫參籠の折柄、狼藉を鎭めし段、神妙に思し召され、召抱へよとの仰せの上意。殿樣の下し置かるゝ衣服大小、お請け下されい。

男女　すりや、私しを結城家へ。

小わ　抱へのお角力の男女川どの、お請けの返答、承はりたい。

男女　如何にも、私しの身に取りましては、仲間の外聞、この身の立身、有り難うござりますれど、差當つて人殺しの科のある男女川、この儀はよろしく仰せられ下さりませう。

小わ　イヤ、其許には人殺しの科はない。主人直姫、願望あつて、天滿神へ忍びの參詣。その道を遮ぎり、狼藉いたせし者どもゆゑ、姫のお手討ち。私しの喧嘩口論ではござらぬぞ。

捕頭　ムウ。すりや、人を殺めしは結城の姫君とな。

小わ　如何にも。狼藉者を切り捨てまするは武家の掟。達て下手人を捕らうと思し召さば、結城家へお屆けてあつて、姫をお貰ひなされませいなア。

捕頭　サア、それは。

男女　男女川に申し分はござりますまいがな。

捕頭　如何にも、狼藉者を切り捨ては武家の大法。結城家の姫君とある事なら、何と致さう、是非がござらぬ。この趣き、立歸つて披露仕らう。

ト下座へ來る。

小わ　お役目、御苦勞に存じまする。

捕頭　者ども、參れ。

ト家來引連れ、花道へ入る。音吉、後を見送り

音吉　ハアイ、むづかしい顏をして、女に負けて歸る奴さ。弱蟲やアい。

ト門口にて大きな聲して笑ふ。

金七　コレ〳〵音吉、滅多な事を云ふまいぞよ。

音吉　それでも、あんまり弱い奴だ。

ト金七、こなしあつて

金七　イヤモウ、どうなる事かと存じましたに、好い所へあなた樣がお出でなされまして、此方の掛り合ひにもな

りませず、有り難うござります。
いつ　サイナウ、浪五郎の身の上、大抵案じた事ぢやなかつたに、此やうな嬉しい事はないわいの。
男女　イヤモウ、思ひがけないと申しませうか。冥加に餘る殿様の御上意。今までの男女川とは違ひ、結城家のお抱へとなりますれば、年寄りどもの思惑も、違ひまするでござりませう。
いつ　其方はさぞかし嬉しうあらう。源次郎さまにも、お聞きなされたら、さぞお喜びであらう。あなたへもお禮がてら、酒でもお上げ申しやいなう。
男女　左樣いたしませう。マア、この事を若旦那にもお話し申したし、又お杯も戴きがてら、奥へお供申しても大事ござりますまいかな。
いつ　大事ないの段かいの。金七、其方は酒の用意、云ひ付けておぢやいなう。
金七　畏まりましてござりまする。
小わ　これは却つて、こなたのお世話になりますなう。
いつ　お心措きなう、奥へお越し遊ばしませ。
男女　おらくさま、どなたも御免なされて下さりませ。
ト　おらく、外の方を向く。

小わ　左樣ならば、何れも。
いつ　ソレ、御案内申しや。
とみ　斯うお出でなされませ。
ト唄になり、おいつ、小わた、金七、おとみ、男女川、音吉、奥へ入る。あと合ひ方。おらく殘り、こなしあつて
らく　なんの事ぢや。折角巧く科人になつたものを。何處からやら、とんだ奴が出しや張つて、イヤ、科人ではござらぬのなんのと、むづかしく捏ね廻し、たうとう云ひ伏せてしまひ居つた。男女川は仕合せな奴ぢや。併し、兼ねてこちらの相談、源次郎めをぼい捲るには、あの男女川は大きな邪魔。こりや、どうぞ好い思案が。
ト此うち與兵衛、出掛け居て
與兵　思案に及ばぬ。傍へ男女川が居つても、源次郎をぼい捲るは、この番頭が胸にあるて。
らく　ほんに、最前から折が悪うて渡しませなんだ。萬右衛門どのよりの大事の手紙。
ト出して渡す。與兵衛、取つて披き見て
與兵　こりやコレ、此方の手番ひよくば、約束の金を寄越せとの文體。これとてもお娘から口説き落さうと、認め

置いたこの文。どうぞ折を見合せて、渡したいものぢやが。

らく　コレ、大切なその狀、源次郎や男女川に見られぬやうに、合點かえ。

與兵　オヽ、そんな事に如才はない。此方は何もかも、巧くさせて置いたに依つて、この上は源次郎めを、首尾よくぼい捲る一段。

らく　サアそれも、短刀を越度にしてぼい捲るも、肝心の跡式、讓り狀の一札が、彼方の手にあつては、お前の儘にはなるまいぞえ。

與兵　サア、それもよいて。

らく　そんなら、首尾よく行たら、わしは御隱居。

與兵　男妾は一人でも、氣根次第。

らく　與兵衞と云ふ名も替へて、三田屋の旦那どの。

與兵　あのお娘のぽつとり者を、毎晩々々抱いて寢て、嬉しかつたりがられたり、ちつと瘦せて見たいわい。

ト唄になり、與兵衞、奧へ入る。おらく殘り

らく　アヽ、どうぞ早う隱居になつて、思惑の役者の衣裳をしたり、葭町を茶漬にして、搔ツ込んで見たいものぢやなア。

ト向うより若い衆、質屋の手代にて出て來る。

質屋　どなたぞお賴み申しませう。

らく　どつちからござつた。

質屋　イヤ、私しは裏町の伊勢屋でござりまする。先程の質物は、二百兩では少し不足でござりますが、お家柄ゆゑ餘程呑み込みまして、二百兩の都合に致しましてござりまする。金子をお受取り下さりませ。

ト書付けと二百兩渡す。おらく取つて

らく　元金二百兩、鼈甲簪二本、同じ櫛二枚。ムウ、こりや慥かにお娘の才覺。

ト思ひ入れあつて

慥かに受取りました。

質屋　左樣ならば、お暇申しまする。

らく　ようござりやした。

ト質屋は向うへ入る。

寢耳に水の二百兩、忝ない。併し、頭隱して尻隱さずと云ふ譬へもある。

ト方々見廻し

どうぞ忍ばし所が、ありさうなものぢやなア。

トいろ〳〵金を隱す事あつて

イヤ〳〵、どうしまうても危ないわいの。遠い一家より近い他人、矢張り肌身に付けて居らうわい。

ト内懐へしまひ

オヽ、重た。

ト此うち無法、出掛け、よき所にて

無法　婆楽々々、コレ婆楽。

ト大きな聲をする。おらく、恟りして

らく　オヽ、好かん。誰れだと思うたら無法さん、婆楽々々と、こちや嫌いな。

無法　イカサマ、髷を付けてけしきとつてござれば、こりや思惑があると見えるわえ。

らく　お前も不粹な。雀百まで踊り忘れずぢやわいな。

無法　コレ、奢るもの久しからず。やり過ぎると命に係はるワ。ハヽヽヽ。時に番頭に逢ひたいものだが。

らく　合點ぢやが、呼んで來るまで、誰れにも見付けられぬやうに。

無法　匙加減をするわいの。

らく　ドレ、呼んで來ようか。

ト唄になり、おらく、奥へ入る。無法、後へ殘り讓り狀を出し、讀んで居て、頷づき、懷中する。奥にて

與兵　若い衆〳〵、店に誰れも居らぬさうなぞや。

ト云ひ〳〵出て、無法と顔見合せ、額にて行けと云ふ。無法、呑み込み、下の方へ來る。與兵衞、こなしあつて

コレマア、店を明けて置くと云ふ事が、あるものかい。ハテ、憎い奴等ぢや。

ト灰吹を叩き、方々見廻し

コリヤ、誰れも居ぬか。煙草盆に火がないぞよ。子供は居ぬか〳〵。

トこなしあつて

吳服店とは殊さら替り、兩替見世は自墮落千萬。

ト合ひ方になり、そろ〳〵下の方へ來て

さて無法老、今日の配劑、驚ろき入りましてござる。

無法　さればサ、匙がこれ程廻ればようござるてな。

兩人　ハヽヽヽ。

與兵　して、お頼みの本尊は。

無法　卽ちこれに安置し奉るぢや。

ト最前の讓り狀を渡す。

與兵　忝ない。この讓り狀さへあれば大望成就。

無法　どんちやんのならぬうち。

與兵　ソレ、約束の十兩。
ト投げる。
無法　エヽ、忝ない。
與兵　段々御苦勞。
無法　アヽ〳〵。
ト仔細らしく向うへ入る。
與兵　最前ちよつと睨んで置いた、短刀は慥かに。
ト帳箱へ心意氣あつて、與を窺ふ。吹替への短刀を懐中より出し、これと取替へると云ふこなしあつて、箪笥にちよつと當る。開かぬと云ふ心にて、天秤の槌を持つて錠前を切る。與へ心遣ひのこなしあつて、天秤の前へ直り、槌にて錠口をチヤン〳〵と打つ。このとまりに錠をガツタリと置く。二三度あつて抽出しを明け、守り刀を取出し、似せ物と引換へ
與兵　正眞の三光の守り刀は首尾よく戻る。三田屋の跡式讓り狀、忝ない。併し、この守り刀が、おれが手にあつては。
ト方々見廻し、いろ〳〵隱す思ひ入れあるべし。よき所にて内より
音吉　番頭さん〳〵。

與兵　オイ〳〵。
ト慌て、いろ〳〵あつて、トヾ軒口の家の後へ隱す。
此うち忙しく呼ぶ事あつて
煤掃くまでには慥かに穴倉。
トよしと云ふこなし。唄になり、與兵衞、奥へ入る。
音吉出て
音吉　いま番頭の素振りと云ひ、合點の行かぬ。
ト與兵衞がしたやうにして
まだ燕の棚を吊るにやア早いが
ト云ひ〳〵祈禱の札の後より守り刀を引き出し
こりやアなんだ。妙な物があつたわえ。
ト合點の行かぬこなしあつて、抜いて見る。小わた出かゝり、これを見る。音吉、膽を潰したこなし。
小わ　心得ぬこの守り刀。其方はどうして。
音吉　サアそりや、いま番頭さんが、彼處へ入れさんしたのでござります。
小わ　こりや正しく。
トこなしあつて、香包みより一分出して音吉に遣り、囁く。音吉、嬉しきこなしにて戴く。
必らず沙汰はならぬぞ。

ト音吉、頷づく。小わた、行けと云ふ。音吉、喜んで一分を持つて入る。
こりやコレ、千葉家の重寶、三光の守り刀。すりや、番頭の與兵衛とやらが。
トちよつとあたりを見、こなしあつて道具廻る。
本舞臺、正面、二重、見附け世話襖、下の方、落間、植込み、飛石のあしらひ、この後ろ板塀、切り戸口出入りあり、好き所に仕掛けの石燈籠、但し灯を點しあり、すべて奥座敷の體。爰に源次郎、生け筒を直し、椨花を矯めて居る。おいつ、水仙に水を注して居る。この見得にて道具、靜かに納まる。
いつ　申し、この水仙は、人に例へて見ましたら、マア、誰れであらうと思し召すえ。
源次　さればなア。諸木の花は春を待つ。草は秋を待つて開けば、水仙は雪霜の寒氣を待つて花を開く。日蔭をいとふ裝ひは、マア、武家の奥方と云ふやうな事であらうかいの。
いつ　イヽエ、水仙は私しでござりまする。
源次　水仙を其方とは。
いつ　いつぞや御在所へお出でなされ、久しくしてお歸り遊ばしてより、只一夜さの根じめもなう、身は投げ入れの一つ花。水上げかねる物思ひも、もしや色に顯はれては、猶更うとましくも思し召さうかと、何にも見せませぬわいなア。
ト泣く。源次郎、こなしあつて、木鋏を取つて
源次　これはしたり、惡い氣の廻しやうではある。おれはそんな水臭い心ではないぞや。おれが心はコレこの木鋏。
ト見せる。おいつ、こなしあつて
いつ　わしが事は、思ひ切つたと仰しやるのかえ。
源次　さうではない。二つの物を一緒に合したこの木鋏。丁度、これが、女夫二人が仲も具合ひよう、古うなる程腐りついて、離れぬと云うた事ぢやわいの。
いつ　イヽエ、そりや僞はり。嘘を仰しやるのぢやわいなア。
源次　どうして嘘ぢやぞい。
いつ　嘘でないものが、なぜ長の夜をわたし一人。
トこなしあつて
イヽエ、嘘ぢや〳〵。

ト泣く。源次郎こなしあつて。

源次　成る程、後の月、在所から戻つて、昨夜まで一つ寐をせぬに依つて、もしや心變りでもあらうかと、思ひやるは尤もぢやが、これには段々譯のある事。その仔細と云ふは、町人なれど鎌倉の御用も承はり、人も知つた三田屋の家名、相續するは養父の御恩。殊に後の親を親とせよとの本文を守つて、せめては心ばかりの追福と思ひ、百日が間禁酒不淫に、この身を凝らすは、養父への報恩。その事を云はなんだは惡かつた。堪忍しや〳〵。コレ、よう思うても見たがよい。其方を嫌うて幸右衞門どのへ、なんと義理が立たうぞ。如何に年がゆかぬと云うて、やがて表向きの披露目も濟むと、お齒黑も付けて女房に、ならねばならぬぢやないの。

いつ　サア、さう思うて居りますけれど。

源次　サア、さう思うて居る事なら、疑ひ晴らし、機嫌を直したがよいわいの。

いつ　そんなら、ほんまでござんすかえ。

源次　命にかけて、嘘は云はぬわいの。

トこの時、奥より、音吉、走り出で

音吉　サア〳〵〳〵〳〵、とんだ事が出來た。大事だ大事。

ト兩人、驚ろき

いつ　大事とは、なんの事ぢやぞいの。

音吉　なんの事どころぢやアない。とんだ事だ〳〵。

源次　そりやマア、どのやうな事ぢやぞい。

音吉　サア、そのとんだ事と云ふはな、嫁入りぢや〳〵。

源次　エヽ、此方が何を云ひ居るやら、晝中に嫁入りが來るものかい。さらして嫁入りとは、何處へ來た嫁入りぢや。

音吉　ハテ知れた事、此方の内へ來た嫁入りぢや。何か大勢女を連れて、どうでも屋敷方から來たかして、侍ひの供の五六百騎、表へ殘して、その美しい嫁に女が付いて許さつしやれと横柄に、客路地から今爰へ來るぞえ。源次郎さま、お前も上下でも着なさい。もう今ぢや〳〵。

トうろ〳〵する。

いつ　申し、あなたはお覺えがござりますかえ。

源次　なんのおれが覺えがあらう。こりやてつきり、屋敷方の奥樣かお姫樣が、何處ぞへござつて、お寄りなされたものであらう。この形では居られぬ。袴、腰の物を取つてたも。

いつ　アイ〳〵。

トおいつ、取つて來る。音吉は木戸口を覗き、今ぢや〳〵と捨ぜりふ云うて居る。源次郎、おいつ手傳ひ、慌てゝ袴羽織着て居ると、木戸口よりおくの、白小袖、綿帽子。女形大勢、腰元の形にて付き添ひ出て來る。源次郎、慇懃に出迎へ、好き所にてフトおくのが姿を見て恟りする。おいつも驚ろくこなし。嫁入りの人數、靜々と二重の上へ通る。各々、座に附く。源次郎、合點の行かぬこなし。おいつ、こなしあつて

いつ　白小袖に綿帽子、こりや矢ッ張り嫁入りぢやさうな。

音吉　さうなどころか。交りなしの、嫁入り〳〵。

いつ　サア〳〵、大抵の事ぢやない。申し、あなたはなんであのやうな、嫁御さんをお呼びなされましたぞいなア。

源次　何を云やるやら、わしがどうして嫁を呼ぶものでいなう。

いつ　それに又、あの嫁御は、どうしてござりましたえ。

源次　サア、どうやら宮やら、ねッから合點が行かぬ。こりや何處ぞ、お屋敷の葬禮の戻りであらうわいの。

トおくのが前へ出て

申し、あなた樣は、どなた樣でござりますな。

くの　アイ〳〵、わたしや嫁入りでござりまする。

音吉　ヨウ〳〵。

ト恟りして、こちらへ來る。

おいつさま、こりやお前、默つては居られまい。お前の顏が、立たぬぞ〳〵。腹の立つ時は、なんぞぶッつけぬと、女夫喧嘩の張合ひない。

ト花生けを取つて打ちつけて見せる。おいつ呑み込み

いつ　腹が立ちますわいなア。

ト不器用に花生けを打ちつける。

源次　ほんに腹が立つと云うて、品の惡い、男に投げ打ちすると云ふ事があるものかいの。

トまた音吉、花盆を取つて來て。ソッとおいつが前へ置く。

いつ　品が惡いが、あなたが惡いか、誰れになりと聞いて御覽じませいなア。

トまた不器用に打ちつける。

源次　其方が投げ打ちしやると、おれも負けては居ぬ。

ト源次郎、投げ返す。

いつ　エヽ、あんまりでござります。

トまた音吉當てがい〳〵、碁笥を打ちつける。石バラバラと零れる。これより源次郎拾うて投げ合ふ。音吉これを邪魔になり〳〵拾うて廻る。女形皆々、おくの、素知らぬ顔にて直り居る。好き所へ男女川、大小改め出で、双方を止めて

男女　こりやお二人ともに、何事でござりまする。

源次　なんぢや知らぬが、嫁入りから起つた事ぢや。

男女　嫁入りから起つたとばかりでは、合點が參りませぬわえ。おいつさまえ、こりや、何から起つた事でござりまする。

いつ　サア、嫁入りが腹が立つわいの。

男女　何事か、とんと合點が參りませぬ。

音吉　なんでも嫁入りが番狂はせだ。

男女　若旦那、嫁入りが腹が立つ、おいつさまも嫁入りが腹が立つ。ムウ、讀めた〳〵。御別家のおらくさまが、常々からの氣質。てつきりおいつさまを外々へ嫁入りさせませうとあるゆゑ、若旦那はあなたも得心の上であらうと思し召してのお腹立ち。おいつさまは若旦那とおらくどのと請合ひの上であらうと思し召してのお腹立ち、てつきり、こりや間違ひでござりませう。例へ又おらくどのが、どのやうに云はれても、お家の娘御を方々へ嫁入りさせましては、第一若旦那が世間へ濟みませぬ。すりや、若旦那が談合に乘らつしやる筈がござりませぬ。又お前さんも、よう思うて見さつしやりませ。おいつさまが、あのやうに腹立つてござれば、嫁入りする氣はないのぢやござりませぬか。それを何ぢややら、兩方が腹立つて、如何に若いとて、嗜なんだがようござります。

音吉　さればサ。嫁入りが間違へば、腹の立つ事は尤もぢやアござりませぬか。

源次　サア、それが矢ツ張り間違ひであるわいの。

男女　どう嫁入りが間違うてござりまする。

いつ　わしが嫁入りするのぢやない。源次郎さまが、外に嫁を呼ばしやんすのぢやわいの。

男女　なんぢや、どさ〳〵と、譯の知れない嫁入りでござりまするなア。

源次　サア、その嫁入りの譯が知れぬゆゑの事ぢや。

男女　嫁入りと仰しやる、その嫁入りは、何處に居りまする。

いつ　ツイ其處に居くさるわいなう。
音吉　しかも美しいものよ。
　ト男女川、おくのを見て
男女　成る程、つき〴〵と云ひ、歷とした嫁御樣、一體あなたは、どこから何處へのお嫁入り。聟どのは誰れでござりまする。
くの　サア、その聟どのはな。
男女　サア、聟どのは。
くの　聟どのは。
男女　聟どのは。
くの　お前でござんす。
　ト恥かしきこなし。
皆々　ヤア。
　ト皆々驚ろく。
音吉　サア、そりやこそ嫁入りの落ちつき處が知れたぞ。
源い　そんなら、アノ、浪五郎。
音吉　イヨ〴〵、關取りのやつし〳〵。
男女　これは迷惑。私しはとんと覺えのない、迷惑でござりまする。
源次　名指しの出た聟と云ふは、わが身ぢやといなう。
男女　若旦那、惡洒落を仰しやりまするな。私しを戀聟とは、あんまり阿房らしうござります。
　ト恥かしきこなし。
源次　それ程覺えのないわが身を尋ねて、お出でなさるゝあなたさまは。
くの　アイ、私しは。
　ト奥にて
小わ　千秋萬歲の、千箱の玉を奉る。
　ト謠ひながら、白木の臺に袱紗包みの金を載せ出る。
　男女川こなしあつて
男女　ムウ。すりや、娘御と云ふは、あなた樣の御息女樣とな。
小わ　帽子に包む娘が顏、とつくりと見てやつて下されいの。
　ト帽子を取る。男女川見て
男女　誠に、梅屋敷でお目にかゝつた御息女樣、何ゆゑに私しと、緣組まうとは云はつしやりますな。
小わ　成る程、合點が行きますまい。梅屋敷にての難儀を救ひ下されし、男女川どのは深切なお人ぢやと、娘が思へば親心にも、男振りなり器量、例へ荒尾の跡目に立ち

たりとも、恥かしからぬ男女川どのと、見ぬ父御さへ焦れてござるもの、娘が慕ふは無理ではない。幸ひ殿の上意を請け、この事申し出さんと、遙々尋ねる聟どのゝ住宅。鎌倉御所の御用聞き、三田屋の出入りと人に知られた娘の戀聟。年端も行かぬ不束者、定めて心には叶ひますまいなれど、夫宗右衞門どのは多病ゆゑ、何卒荒尾の家が立つてもらひたいばつかり。この二包みは些少ながら、引出とやら名付けし支度金。取納め下されい。

ト右の金を男女川が前へ直す。男女川、思ひ入れ。源次郎、おいつ、こなしあつて

源次　どう云ふ譯と存じたら、御尤もなる段々の入り譯。跡目がないと仰しやれば、これとても餘儀ない儀。男女川、お請け申したがよいわいの。

いつ　さうでござんすとも。可愛いらしいお娘御さまの思し召し、お請け申しやいなう。

音吉　それともお前氣がなくば、わつちを代りに遣つてくんなさいな。

源次　音吉。そりやア何を申すのぢや。扣へぬか。

小わ　ムウ。返事のないは、娘が氣に入りませぬか。

源次　イヤ〳〵、左樣でもございますまい。常から商賣柄で女子嫌ひ。そこで、ちと恥かしい氣味もござりませう。あのやうに、默つて居りますは、定めて得心でござりませう。

小わ　イヤモウ、得心さへして下されば、娘は元より母までも、この上もない喜び。娘、さぞ嬉しうあらうなう。

トおくの恥かしきこなし。

オヽ、さうであろ〳〵。皆も喜んでたもいなう。

皆々　喜ぶ段ではござりませぬ、御寮人樣。

腰元　お嬉しうござりませう。

小わ　サア、めでたい〳〵。この上はちつとも早う開きませう。其方達は、早う供の用意申しつきや。

皆々　畏まりました。

小わ　早う〳〵。

ト女形皆々、向うへ入る。

サア聟どの、娘もおぢや。

トおくのが手を取り、立たうとする。

男女　イヤ、小わたどの、マア、お待ちなされて下さりませ。

小わ　善は急げと云へば、一刻も早う。

男女　この縁組みは男女川浪五郎、不得心でござります

る。

小わ　すりや、娘が不足なゆゑ。

男女　アイヤ、御息女には係はりませぬ。結城の御家中ではお家柄と申し、殊に御大身の荒尾宗右衛門さま、角力取り風情の我等とには釣合ひませぬ。また仲間の取沙汰にも、ヤレ、娘は氣に入らねど、跡式の取りたさ、又二百兩の金に目が暮れ、緣組みしたと云はれては、折角これまで立つて來た顔が廢ります。但し、引出物と名を付けて、大枚の金を送らつしやりまするは、慾に迷うで得心しさうな、男女川と思はつしやりまするか。そりやお歴歴に似合ひませぬ。爰がむさい。梅屋敷にての挨拶は、行がゝりの男づく。恩にも着せぬ、禮請ける心もない。角力取りこそすれ、そんな卑劣な男女川ぢやアござりませぬ。なまじい江戸や京大坂で、名の賣れた男女川、張合ひ角力に負けたより、名が惜しうござりまする。ぢやに依つて、この緣組みは、お斷わり申すのでござりまする。

晉吉　さうだ〳〵。三びん五厘引けを取る事はない。お前の骨が輕いなら、この晉吉が拾はア。もつと面を張りなさい〳〵。

ト氣勢のやうに云ふ。

源次　ヤイ〳〵、また差出るか。おのれが何を知つて。すッ込んで居らう。

晉吉　アイ、すッ込みやす。

ト悄げて後の方へ座る。

源次　イヤナニ男女川、お主の云やるのが尤もは尤もなれど、あなたも入り譯仰しやる事ぢや。マア、とつくりと思案して見やいの。

男女　若旦那、もう仰しやつて下さりますな。思案の何のと、面倒でござりまする。

源次　ハテ、如何に商賣柄ぢやと云うて、氣の短かい云ひやうではあるわいの。

ト此うち小わた、思ひ入れ。おくの始終泣いて居る。

くの　例へどのやうに思うても、不束なは私しが科、お嫌ひなさるは無理ではない。とは云へ今さら恥かしい、なんと此まゝ去なれませう。母樣、思案して下さんせいなア。

ト泣く。小わた、こなしあつて

小わ　さう思やるは道理なれど、男女川どのゝ今の詞、慾に目が暮れ緣組みしてと云はれては、今まで立つた顔が

廢ると理の當然。押しに押されぬこの母も、當惑して居ますわいの。
いつ　よく／＼に思し召せばこそ、尋ねてお出で遊ばした親御樣、姫御前は相互ひ、お心根が思ひやられて、おいとしい。どうぞ仕樣はない事かいなア。
音吉　また斯う云うたら叱られるか知らぬが、男女川さん、七十五日生き延びる事ぢや。初物の箸を取らぬと云ふ事があるものか。幸ひ源次郎さまとおいつさまと、祝言をなさる連れがある。お前も次手に祝言をしたがよいわいの。
源次　こりや音吉めが云ふ通り、祝言と伊勢參りは、なんぼうしえいと云うても連れがないとしにくいものぢや。幸ひおいつも恥かしがつて居れば、丁度好い連れぢや。思ひつて祝言しや。此方も祝言せう。ナヮおいつ。
ト與兵衞、出掛け居て
與兵　イヤ、おいつさまと、祝言はなりますまいぞ。
源次　與兵衞、祝言はならぬとは。
與兵　祝言整へば、表向きの披露目もせねばならぬが、お前、大旦那の讓り狀を、持つてござりまするか。
ト源次郎、ぎつくりして
源次　イヤ、その讓り狀は。
トこれにて小わた、合點の行かぬこなしにて扣へる。
與兵　どうぞさつしやりましたか。
源次　イヤ、どうもせねど。
ト愚圖々々云ふ。此うちおらく出掛け
らく　讓り狀がなければ、おいつさまと祝言は、マア、このらくがさせませぬ。それともに又、讓り狀さへある事なら、例へ誰れでも三田屋の跡取り。おいつさまと祝言させませう。
いつ　これぢやに依つて、最前わしが。
らく　おいつさん、最前どうなされましたえ。
いつ　イヽヤイナウ、最前遣つた
らく　遣つたとはえ。
トおいつ、いろ／＼こなしあつて
いつ　コレ、音吉、最前の物は、どうぢやぞいの／＼。
音吉　さればサ。もう來さうなものだが。
いつ　エヽ、辛氣な事ぢやわいの。
ト焦れる。おらく、懷中を押へ、舌を出して笑うて居る。
與兵　申し／＼、何もそんなに、辛氣がる事はござりませ

ぬ。そりやあなたも、もう時分の來た事ぢやに依つて、お心の急くは御尤も。そのお心を推量して、ア丶、どうぞ早う落ちつかして上げましたいと、心を碎いて居る忠義者が、爰らあたりに居まいものでもござりませぬぞえ。申し／＼。

ト おいつが袖を引く。おいつチリ／＼逃げる。

らく おいつさま、いま與兵衛どの丶云はる丶、忠義を思ふ者があるなら、例へ誰れにもせよ、祝言なされたがよいわいなア。

いつ そんな事は、嫌ぢや／＼／＼わいなう。

與兵 申し、なんぼう嫌ぢや／＼と云うても、嫌と云はれぬ手詰めが、あるまいものでもござりませぬぞえ。

ト おいつが側へ躙り寄る。おいつ、顏を背けて居る。

こりやモウ、理詰めで云はにやアならぬわい。

ト 讓り狀を出し

なんと、これでも祝言は嫌でござりますか。イヤサ、これがあれば三田屋の主、嫌應は云はれますまいが。

ト おいつ見て驚ろく。源次郎、悔りして

源次 そりや最前、無法に預けたる讓り狀。どうして其方の手に入れた。

與兵 預かりました。二百兩の金貸して預けたこの讓り狀、これがおれが手にある間は、三田屋の主と云ふは、この與兵衛さまぢや。それとも二百兩と云ふ金さへあれば、讓り狀は元へ戻す。コレ、金がなければ嫌ともに、三田屋の仁右衛門、つらいものなア。

ト 讓り狀を見せびらかす。源次郎、思ひ入れあつて

源次 與兵衛、こりや、なんぢやの。無法と云ひ合して、その讓り狀を手に入れる企みぢやなア。

與兵 コレ、源次郎々々々、與兵衛とは何云ふのぢや。三田屋の旦那樣を澤山さうに。今までの與兵衛ぢやないぞ。この讓り狀がおれの手にあるうちは、おぬし達が口から、呼捨てに云ふ與兵衛ぢやないぞ。

ト 源次郎、おいつ、口惜しきこなし。猶々讓り狀を見せちらかし、音吉もこなし。

音吉 エ丶コレ、云ふまいと思うたが、云はにやアならない。コレ、番頭どの、餘人は格別、コレ、音吉ばかりは與兵衛々々々と呼捨てにしても大事ないぞよ。

與兵 そりや、なんで。

音吉 なんでとは、番頭に似合はぬ。こなたも文盲な人だ。與兵衛の與の字は、なんだと思はつしやる。ありや夜

鷹のよの字だよ。又コレ音吉のおの字は、忝くも花魁のおの字だ。夜鷹と花魁だに依つて、おればかりは與兵衛與兵衛と呼捨てにしても、大事ないと云ふ事よ。

與兵　おきやアがれ。

ト突きのめす。

らく　エヽ、この丁稚めは、よく何にもかにも差出る奴ぢや。これから與兵衛どのに口答へひろぐと、仕着せ物を踏んばいて、裸にして叩き出すぞ。

音吉　南無三、また凹んだ。

ト下へ座る。

與兵　それ〳〵、これからおれが云ふ事を嫌と云ふ者は、一人もあるまい〳〵。

トおいつへ少しこなしあつて

旦那と云ふものは、よくしたものなア。

源次　エヽ、コレ、まざ〳〵無法めと、云ひ合せと云ふ事は。

ト云はうとする。

與兵　コレ〳〵源次郎、お身は變つた事を云ふ。おぬしが無法に讓り狀を預けた事やら預けぬやら、それをおれが知らうかえ。無法がどうぞ金二百兩貸してくれろと云うたに依つて、大切なこの一札、人手に渡さうよりはと、金を貸して預かつた。すりや、天より我れに納めよと、下しある賜物と云ふもの。なんと源次郎、さうではないか。

ト源次郎、じり〳〵口惜しきこなし。

ヤヽ、なんぢやいの。目角を突ッ立つて、この面わえこの面わえ。

ト讓り狀にて源次郎の顏を突く。

源次　もう、料簡が。

ト脇差へ手をかける。おいつ、慌て留める。

いつ　コレ源次郎さん、短氣な事して下さんすな。

源次　邪魔せずと、そこ退け。

ト與兵衛へかゝる。おいつ、音吉、いろ〳〵留めるを、振り切つて行く。男女川、始終思ひ入れあつて、この時、源次郎を留めて

男女　待つた若旦那。こりや、何をさつしやりますのだ。

源次　もう、どうも堪忍がならぬ。

男女　ムウ。それで與兵衛どのを、手にかけさつしやりますか。

源次　侍ひの魂ひを見せるのぢやわい。

ト振り切り行かうとする。男女川、立廻りにて留める。

いつ　源次郎さま、今お前が短氣な事なされますと、わたしも生きては居りませぬぞえ。

源次　イヤ〳〵、例へどうあつても、與兵衛めを生けては置かぬ。そこ退け〳〵。

ト振り切るを男女川、しつかと留め

いつ　さうぢや。

ト男女川が刀にて死なうとする。

音吉　コリヤおいつさま、逸まるまいぞ。

ト しつかり留める。

源次　放せ〳〵。

男女　イヽヤ、滅多に放さぬ。若旦那、急かずとも、いま私しが申す事を、よう聞かつしやりませ。五ケ年以前相果てました私しが親、柳川多七は、あなたの御實父、半右衛門さまに召使はれました御家來、この男女川は幼少より力業を好みまして、奥へ下り、どうや斯うやら、角力取りになりましたれど、親多七が受けました御恩を思ひ、お家へお出入り。あなた樣にはこの三田屋へ御養子。その緣で私しも出入り。お身の爲にならぬ事は、そりや惡うござりまする、止しになされませと、及ばずながら御意見申すも、我が親のお主樣と存じましての事。去年當所の角力をしまひまして、奥へ下り江戸表へ歸りましたは、やう〳〵一昨々日。只今承はりすれば、御養父仁右衛門さまは御死去なされしとの事。未だ跡目のお披露目もないうちに、あなたがお短氣な事なされては、どう絡れて三田屋のお店へ、疵の付くやうな事が、出來まいものでもござりませぬ。その時は義理ある仁左衛門さまへ、なんと仰せ分けられをなされますぞ。

源次　サア、それは。

男女　ハテ、讓り狀を取返すは、高で金づく、どうなりとなりさうなもの。例へ千金萬金でも、買はれぬものは人の命。ナ、若旦那、とつくりと御思案をなされませう。

音吉　あれお聞きなされましたか。男女川が、あゝ呑み込んでは、もう氣遣ひはござりませぬ。全體マアお前が、死なうと云ふのが大きな不覺、なぜと云ひなさい。四月八日ぢやアねえが、天にも地にも、三田屋の血筋と云ふはお前お一人。そのお一人のお前が、今のやうに番狂はせをしては、開いた口へ牡丹餅と、どこへどう。

ト與兵衛が方を見て

お膳が廻らうも知れませぬ。さうすると、わつちやア直ぐにお拂ひ箱を負はせようとも脊負せまいとも、お前のお心一つ。とつくりと御思案なされませ。

ト男女川が云ふ通り鹿爪らしく云ふ。

らく　イヤモウ、年が行かいでも油斷のならぬ。最前聞けば大それた金の工面。これも云ひつけてさせる奴があるに依つてぢや。その工面の種と云ふは、マア外聞の惡い。これぢや。最前奥にて拾うて置いたこの書付け。

ト出して

覺え、元金二百兩、鼈甲簪二本、同じく櫛二枚。なんときつい心底なア。この廣い江戸で、一二を爭ふ三田屋のお内儀さんが、如何に男思ひぢやと云うて、頭の道具を質に置くと云ふやうな事があるものかいなア。三田仁のお娘御が、質を置いてゞござりまする。

ト大きな聲して云ふ。おいつこなし、源次郎、おいつの髮の上を見て

源次　櫛と云ひ簪まで、すりや、質物に差入れて。

いつ　讓り狀が取返したいばつかりに。

トこなしあつて泣く。

源次　何にも云はぬ、忝ない。して、その金は。

らく　誰れぞ好い事をして居る奴があらうぞい。

源次　すりや、その金の行き場も。ホイ。

トこなし。與兵衞こなしあつて

與兵　男女川、今われが云ふ事を聞けば、何事も私しが胸にござりまする、高が金づく、どうなりとなりますと、滅多無性に安呑み込みで居るが、この讓り狀は、小判で二百兩ぢや。われが江戸の角力を五年六年只働らいたとて、二百兩と云ふ金の工面は出來ぬぞよ。なんと此やうに云うたら腹が立つか。ムツとするか。なんぼムツとしても、腹が立つても、三田屋の仁右衞門さまの仰しやる事だ。どうも仕樣はあるまいがな　そりやお主が腹を立つて、摑みつきにおぢやつたら、お主は力があるワ。その上に藝人、上手商賣ぢやに依つて、人を投げる筈がないワ。おれは又此やうに丈夫さうに見えても、堅い物と云うたら箸と筆より外に、手に觸れた事がない大名の落し子同然。羽二重摺れぢやわいの。なか〳〵ちよつと觸つて見や。松の木と錦ほど違うてあるわいの。力づくでは何として〳〵、楯突く事はならぬが、強い奴は……これぢやわえ。これを持つて居るゆゑ、三田屋の仁右衞門さま、お主が爲には出入りの旦那。びくついたら出入りを

留められ、鼻の下が干上がるぞよ。五十貫目六十貫目の力持ちはするであらうが、金と云つたら六十匁も持つた事はあるまい。胸にある〳〵も凄まじいわえ。

ト男女川、思ひ入れあつて、ツカ〳〵と小わたが側へ行て。

男女　御息女様を女房に、申し請けたうござりまする。

小わ　なんと云はつしやる。最前は人の誹りを思ひ、達つて辭退された縁組み。

男女　改めて私しの方から、折入つてのお願ひ。どうぞ女房に下さりませ。

小わ　如何にも、こなたさへ得心なら、此方から願ふ縁組み。すりや、いよ〳〵女房に。

男女　イヤモウ、急に夫婦になりたうござりまする。

小わ　それは重疊。サア〳〵娘、男女川どのが女房に持つてやらうと云はつしやる。さぞ嬉しからうなう。

くの　どうなる事と案じて居りましたが、思ひがけない今のお詞、聞けばどうやら。

ト恥かしきこなし

小わ　この子とした事が、なんの恥かしい事があらうぞいの。男女川どの、必らず縁を結びましたぞ。

男女　なんの僞はり申しませう。斯う縁を結ぶからは、引出の金子、申し受けませう。

ト金子に手をかける。

奥兵　男女川待て。最前聞けば、慾に目がくれて、縁組んでは顔が立たぬと云うたでないか。それに今手詰めになり、金が欲しさに縁組んでは、わりや男が立つまいぞよ。

ト男女川、ぎつくりする。小わた、思ひ入れあつて

小わ　娘、勘當ぢや。

くの　エ。

ト驚ろく。

小わ　その金は娘に遣つた勘當の印。引出物に贈りはせぬ。女房の金を遣ふのに、誰れが點の打ち手はあるまい。

男女　すりや、この金を。

小わ　お抱への男女川どの、殿の御名に係はる達引、心指かずと、勝手にさつしやれ。

男女　小わたさまのお志し、忝ない。サア番頭様、金子二百兩、改めて受取らつしやい。

ト奥兵衛、金を改め、不承々々に懐中する。

サア、讓り狀を受取りませうか。
與兵　イヤ、えゝ、渡すまい。
男女　なんと。
與兵　さればサ。この讓り狀は、無法の手より預かつた、
なりや、一旦無法へ、おれが手から戻さうわい。
男女　それに又二百兩は、なぜおれが手から受取つた。
與兵　ヤ。
男女　さう得手勝手はなるまい。愚圖々々せずと、その讓
り狀を。
ト手を突ッ込まうとする
與兵　サ、、エ、。ハイ／＼、誰れも渡すまいと云うたで
はなし。
ト不承々々に渡す。
男女　慥かに受取つた。若旦那、お大切になされませ。
源次　人の誹り無念を堪え、調へくれた二百兩。
いつ　なんと禮を云はうやら。
源い　嬉しうござるぞや。
男女　なんのお禮に及びませう。讓り狀さへお手に入りま
すれば、御祝言も首尾よう調ふと申すもの。第一呑み込
まぬは、買はしやりました守り刀、今一應改めて御覽じ
ませ。
源次　音吉、店の帳簞笥に入れ置いた。取つておぢや。
音吉　おつとしよ。
ト走り入る。
らく　モシ／＼、源次郎さま、お前、その守り刀とやら、
正眞か似せ物か、改めもせずに買はつしやりました
か。
源次　ハテ、三光の守り刀に、相違ないゆゑ買つたのサ。
らく　サア、それ程改めて買うて置きながら、今さら呑み
込まぬとは、きつい先くゞりなア。
ト此うち音吉、刀を持つて出て
音吉　サア、取つて來やした。
ト渡す。源次郎、改め見て
源次　ヤア、こりやア眞赤な似せ物。
いつ　エ、。
ト驚ろく。源次郎、當惑する。
男女　こりやア、斯うありさうなものぢやて。
源次　すりや、この盗人は。
男女　外でもない、この家の内になけりやアならぬ。
與兵　お閑取りのお詞の中ぢやが、貴公は源次郎さまに談

もあれば、云はゞ内證、殊に又、結城のお抱へになつた御身分なりや、畢竟頭巾越しに頭を隱せると云ふもの。要らざる心遣ひせぬがよいぞや。

男女　でも、現在若旦那の、お身にかゝる短刀の詮議なれば。

與兵　ハテ、詮議してよいなら、番頭の、わしがします。

男女　すりや、この詮議を。

與兵　ハテ、わしがするわいの。

男女　ドレ、見物しようか。

與兵　大切のお身の上に係る短刀の詮議。餘人は頼まぬ、關取りさん、要らざる世話ぢや、默つてござれ。

ト男女川、これで控へる。此うち與兵衞、一通を落す事あり。小わたソツと拾ふ。

らく　與兵衞どの、この盜人はマア、誰れであらうと思はしやんす。

與兵　さればなア。大切なる千葉家の重寶、三光の守り刀、これに目を付けると云ふは、並々の者ではない。こりや大それた叛逆人がなけりやならぬ。ムウそれよ。この守り刀の盜賊を、二葉のうちに切らずんば、斧を用ゆる憂ひあり。さうぢや。

トこなしあつて、ツカ／＼と、向うへ行かうとする。

らく　待つた、與兵衞どの、血相變へて、何處へござんす。

與兵　ハテ知れた事、無法を引ッ捉へて盜賊の詮議。

らく　イヤ、そりやァ惡うござんす。

與兵　詮議すると、惡からうとは。

らく　サレバイナア。これ程の事に一味するあの醫者、こなさんが詮議に來うかと云うて、病家廻りもせずに内に居やうか。

與兵　ヤ、なんと。

らく　急く所ではござんすまい。マア／＼、思案をさしやんせい。

與兵　すりや、差當つて詮議もならず、この與兵衞が忠義を見せる時節到來。やみ／＼と手を空しくすると云ふは、日頃念じ奉る淺草樣、堀の内のお祖師樣、西河岸の地藏、目黑の不動、龜井戸の天神さま、梅を絶つたる利生もないか。チエ、口惜しいなア。

トこなしあつて、小わた思ひ入れあつて

小わ　天晴れ流石、大家のお番頭、武士も及ばぬ忠義の心底。町家には惜しいもの。最前から、これにて見聞、驚ろき入りましてござる。その志しに愛で、こなたの忠義立てさせませう。
與兵　ナニ、私しに忠義を立てさせるとは。
小わ　その立てさせやうと云ふは、この一通。
與兵　すりや、その一通が。
小わ　卽ち短刀詮議の手がゝり。
　ト披き
わざ〳〵飛札を以て申し入れ候ふ、先達て源次郎頼みの守り刀、質物の日限切れ流れ候ふと傳はり、其許所持なさるゝ上は、源次郎を罪に落し、三田屋の跡式、其方心任せと存じ候ふ、然る上は先達て契約の通り、金子早々送り罷り越さるべく候ふ。
　ト此うち、與兵衞、いろ〳〵術なきこなしあつて
與兵　その一通
　ト取りにかゝる。男女川、引き廻して
男女　サア、これでサラリと解つた。誠の短刀、キリ〳〵出せ。
與兵　イヤ知らぬ、覺えはない。但し、その一通に、與兵衞と云ふ名宛があるか。
男女　ヤ、なんと。
與兵　宛名のないその一通、證據にはなるまい。
小わ　イヽヤ、假令へ宛名がないにもせよ、その一通の出所は其方の懷中。
與兵　ヤ。
男女　サア、有やうに云つてしまへ。
與兵　サア、それは。
小わ　覺えがあらうが。
男女　云うてしまへ。
與兵　サア。
小わ　サア。
三人　サア〳〵〳〵。
　ト與兵衞、駈け出す。男女川、立廻りにて、支へる。
小わ　今一人の同類は慥かに。
　トおらくへ掛けて云ふ。
らく　こりやモウ、斯うしては。
　ト逃げようとする。小わた、立廻りのうち、おらく、最前の二百兩を落す。小わた、手早く取つて

小わ　ソレ、質物の代金。
　ト男女川へ渡す。
男女　イヤ、勘當の印。今こそ返濟。
　ト小わたへ渡す。
小わ　慥かに落手。改めて聟引出。
　ト最前の短刀を投げる。男女川受取つて
男女　そんなら、これが。
　ト抜いて源次郎に見せる。
源次　これこそ誠の三光の守り刀。
與兵　その刀を。
　ト取りにかゝる。兩人、立廻り。おらくもソツとかゝるを香吉、どつこいと引き伏せ、馬乗りに乗る。源次郎、おいつ、手を合せ、小わたを拜む。
小わ　御縁もあらば。
源い　お二人様。
與兵　あの女を。
　ト起きようとする。男女川、ウムと踏みつけ、小わた、おくのを引立て
小わ　聟どの、おさらば。
　トよろしくあつて、

ひやうし幕

大詰

洛東双林寺前勘助邸の場
先斗町妾宅の場
祇園社鳥居先の場

役名――三田屋源次郎。大野甚右衛門。母、お幸。勘助女房、おりつ。一子、勘太郎。蒲原文平。柳田武太夫。若黨、春島次作。中間、權内。女中、おりん。妾、お梅 前名喜瀬川。木津勘助。

役觸れの口上濟んで知らせの拍子木入ると、宮神樂になり、幕の内と向うより、掛取りの若い者、弓張り提灯にて行き違ふ、この中へ厄拂ひの仕出し打交り、すべて大晦日夜の景色よろしくあるべし。各々捨ぜりふ、しかじかあつて兩方へ入る。

本舞臺、三間の間、舞臺見附け中時代屋舗、襖、上の方、一間半、折り廻しの障子屋體、本緣付き、眞中に塗り緣、爐には釜を掛け、よき所に床、これに

大黒の畫像を掛け、この外、茶道具いろ〳〵飾りつけ、二重舞臺好き所に歳神の棚數多、燈明ともし、注連を引く。いつもの所に門口、お飾り立派にあり、その外、所々に輪飾りを掛け、すべて洛東双林寺門前、木津勘助閑居の體。幕の內より春島次作、木綿やつし、小倉袴、革柄の脇差。支拂ひをして居る。掛取り、銘々弓張り提灯に錢財布を持ち、並みよく上がり口に並び、大晦日夜の景色、賑やかに幕明く。

次作　肴屋どの、錢は殘らず濟錢ぢやが、もし不足があらば、何時なりとも取りにござい。

掛一　へイ〳〵、有り難うござりまする。いつも十貫二十貫の錢に、一文も不足のないお家柄。結句錢を讀みましたら、返し錢を持つて來ずばなりますまい。

掛二　成る程、市嘉さんの仰しやる通り、遂に內方の錢に、不足のあつた例しなし。例へいくら賣り込んでも、ついに錢百足らぬと云ふ事がござりませぬ。

掛三　イヤ又、どこの御家中樣かは存じませぬが、此やうに榮耀をなされては、お金の高が知れますまい。

掛一　ほんに、爰の旦那は、非筒と扇九で年が年中、夜を明かしてござるな。

掛二　イヤ又、そればかりぢやない。先斗町には、去年江戸から連れてお出でなされた妾樣、吉原の花魁とやらであつたげなが、イヤ又、その美しい事が、祇園町のこの連中が、この歲暮にも、みんな干鱈を持つて行たといの。

掛二　殊に奧樣は御器量よしで、氣立てが善いと云ふ噂ぢやわいの。

掛一　又そして藝者衆、仲居、幇間などに、定紋付きの揃ひの衣裳。爰の旦那程、派手な金をお使ひなさるゝお客はないと、この邊での取沙汰でござりまする。

掛二　イヤ又、金と云ふ奴が、無い所には無い奴ぢやが、有る所には澤山あると見えるわいの。

掛一　全體、錢金と云ふ物は、脊中の紙と紙入れで、片荷するやつぢやて。

掛二　ハテサ、一體依怙贔屓な奴ぢやぞえ。

三人　ハ、、、、。

次作　これはお身達は、誰れが問ひもせぬ長話しをせらるゝか。殊さら手前の旦那の店卸ろし、聞きたくない。

掛二　イカサマ、これはうか〳〵と、無遠慮な話しを致し

ましてござりまする。
掛一　イヤサ、一體これが内方の旦那を誹る事なら、致しませねど、第一遊びがよいか、茶屋の受けがよいか、何一つ惡い事がないに依つて、そこで褒めたと云ふやつサ。
ト少し管を捲くやうに云ふ。
次作　コレサ〳〵、この男は、しち諄い旦那の噂。阿母樣は御病中、旦那も御在宿と云ふ、今宵を何日と心得て居る。馬鹿々々しい男ではある。
掛一　サア、お前樣は其やうに仰しやりますけれども、一體愛の旦那樣は、氣立てと金遣ひが大層なに依つて、滅多に褒めると云ふやつサ。
掛二　コレサ市嘉さん、もう何にも云ひたさんな。お内方には御病人もあるといなァ。
掛一　サア、たんぼ御病人があつても、褒める事は褒めにやアならぬと云ふやつサ。
掛三　これは又情ない。もうやがて七ッであらう。これから祇園へ參つて歸りませう。サア、ござりませ。
掛一　ハテ、もそつと褒めさせてくれたがいゝ。
掛二　コレナ〳〵、段々の長話し。眞平御免下さりませ。

次作　コレ、間違ひなう帳面を消しやれ。
三人　畏まりました。
掛一　春は又、早々お頼み申しまする。
次作　この後とも旦那の噂、云はぬやうにお頼み申す。
三人　畏まりました……左樣なら御機嫌よう、お年をお取りなされませ。
次作　ようござつた。
掛二　サア市嘉さん、去にませう。
ト向う揚げ幕の内にて、太鼓、鉦、金盥を叩き立てる。次作、捨ぜりふにて、帳面硯箱を片付ける。右三人、向うへ行きかけると、藝者三人、八百藏が紋付きの揃ひの衣裳にて、三味線を彈き、仲居一人、揃ひの衣裳、摺り鉦。幇間二人、同樣の揃ひ衣裳、太鼓、金盥を叩き出る。若い者、同樣揃ひの衣裳にて、ちやんきりにて囃し出る
皆々　うころ餅は内にか。海鼠どののお見舞ひぢや。
トこの臺詞にて、三味線に金盥、太鼓を打ち合せ、賑やかに出て來る。掛取りの三人は花道にて行き違ひ、向うへ入る。この人數、わや〳〵と云ひながら舞臺へ來て

旦那は内にか、藝子末社のお迎ひぢや。
　トこれを幾度も繰返し〳〵、内へ入る。次作、悄りして
次作　コリヤ〳〵、わいらは何事だ〳〵。
皆々　旦那様はお内にか。藝子末社のお迎ひぢや。
　トロ々に喧ましう囃し立てる。
次作　コリヤ、待て〳〵。察するところに、わいらは物貰ひと見える。まだ夜も明けぬうちから、三味線太鼓を叩き立て、ザワ〳〵と騒がしい。物貰ひならば明日参れ。早く歸れ〳〵。
皆々　旦那様はお内にか。藝子末社の、お迎ひぢや〳〵。
　ト構はず皆々浮かれる。次作は膽を潰したるこなしにて
次作　コリヤ、聞分けの悪い物貰ひめら。あんまり呆れて物が云はれぬ。
　トこれに構はず、右の臺詞を云ひながら、無性に踊る。
次作　よい〳〵。うぬら、達て聞分けずば、打ちのめしてくれるぞ。
　ト箒を振り上げる。これにて皆々、表へ逃げて出る。

　次作、表の戸をピッシヤリと閉めて、内より戸口を押へて居る。皆々、門口にて右の臺詞を繰り返し〳〵、喧ましう囃して居る。通り神樂になり、向うより勘助妻おりつ、粋なる屋敷風の拵らへ、抱へ帯、袖頭巾にて、子役の大小を差し、火縄を振り祇園参りの下向のてい、後より勘助倅勘太郎、衣裳羽織にて、破魔弓を持たせ、權内に負はれ、各々本舞臺へ来る。この人数、おりつを見て
幇一　アノ、あなたは奥様でござりませぬか。
女皆　ほんに、おりつさまぢやわいな。
りつ　これは皆揃つて、節分の祝儀でござんすか。
藝一　サア、その御祝儀と、旦那のお迎ひを兼ねまして
女皆　参じましたわいなア
りつ　それは忝なうござんす。マア皆、内へ入らんせ。コレ、爰明けてたも。
次作　ナニ、明けてたも。明けてたもゝ凄まじい。ハイ、爰を明けたら又、内へ鳴り込まうと思つて。さうはならぬわい。
りつ　次作、そりや何を云やるのぢや。明けてたもいなう。

次作　さう仰しやるは、奥様でござりますか。

幇二　只今お詣りの御下向でござる。早くお明けなされお明けなされ。

次作　これはしたり、大きに料簡違ひを仕りました。

　ト戸を開け

貢平御免下さりませ。

　トこれにておりつ、内へ入る。次作、皆々を見て

うぬら、まだ其處にうせ居るか。

りつ　次作、何事ぢやぞいの。

次作　何事ぢやござりませぬ。奥様、お開きなさいませ。まだ夜も明け切らぬうちから、あの物々しい三味線太鼓を叩き立て、内中を騒ぎ廻りますゆゑ、抛り出しましたのでござりまする。

りつ　これはしたり、わつけもない。あの衆は物貰ひぢやないわいの。

次作　それに又、三味線太鼓を叩き立て、なんでござりまする。

りつ　成る程、其方は江戸の人ぢやに依つて、譯を知らぬは尤も。總體この京大阪の遊所では、節分の夜、うくろ餅のまじなひと云うて、太鼓三味線で囃すが、祝儀ぢやわいの。

次作　すりや、何と仰しやりまする。京大阪の遊所では節分の夜、あの如く申して參るのが、祝儀でござりまするか。

りつ　さうぢやわいの。

次作　さうとは存ぜず、私しは又、物貰ひかと存じまして、大きに無禮いたしました。

　ト表へ出て小腰を屈め

これは〳〵、各々今晩の御祝儀、千萬忝なう存じまする。イザ、これへお通りなされい。

　ト皆々氣味惡きこなし。

イザ、御遠慮なう、これへ〳〵。

　ト無理に皆々を内へ入れる。

藝一　なんと皆さん、粹な勘さんに似合はぬ、堅苦しい御家來さんぢやないかいな。

藝二　ほんに唄三味線で、淨瑠璃を語るやうなものぢやわいな。

仲居　イカサマ、藝子さん方には、尤もな譬へぢやわいの。

藝三　ほんに、そんなものぢやわいの。

りつ　サア皆さん、旦那どのも内にござれば、マア、上がらんせいなア。
幇一　イエ〱、皆打揃うて參りましたけ、一度に揃ひを下さりましたお禮やら、
幇二　有やうは旦那のお迎ひに參りました。と云ふやうなものぢやけれど。
幇一　なんぼ粹な奧樣でも、まんざら旦那のお供してとも、云ひ憎いものぢやてなア。
りつ　なんの、その遠慮なら大事ござらぬ。お連れ申して去なしやれいの。
幇二　イエ〱、それはあんまり私しどもが、氣無しと云ふものサ。
幇一　旦那をお迎ひに參つた私しどもを、何とも云はずに
藝一　連れまして去なしやれとは、勘さんの奧樣程あつて、なんと粹な御挨拶ぢやないかいなア。
幇二　それ〱、何の事はない、九段目のお石が、早足で逃げるであらう。
幇一　結句心が措かれるやうで、氣の毒なものぢや。
幇二　サア、皆去なうではあるまいか。

仲居　奧樣、憚りながら勘さんに好いやうに。
りつ　ほんに、何のお愛想もない事でござつたなう。そんなら皆、春長にござれや。
幇一　憚りながら旦那へ、よろしくお願ひ申し上げまする。
りつ　ようござつた。
　ト通り神樂になり、捨ぜりふしか〱あつて、この人數、向うへ入る。次作、皆々を見送り
次作　ハテサテ、幇間の藝者のと云ふ者は、騷々しく口をきく奴等ではあるわい。ハヽヽヽ。イヤ權内、大きに大儀であつた。勝手へ參つて、休みやれ〱。
權内　然らば左樣いたしませう。奧樣、その火繩は、お臺所へ持つて參りませうかな。
りつ　ほんに、これは大切な火ぢや程に、粗末に致さぬやうに。この火でお雜煮を焚きつけやと、きよに云うてたも。
權内　ネイ〱、畏まりました。
　ト火繩を持ち、奧へ入る。
りつ　イヤ、ほんにわたしが留守のうち、母樣のきつうお惡い事はなかつたかや。

次作　ハア。イヤ〳〵、随分御機嫌よう、只今お休みなさ
れてゞござりまする。
りつ　それは〳〵嬉しうござる。さうして旦那は、どれに
ござるや。
次作　只今、お圍ひにお出でなされまする。
りつ　勘太郎、お父様に、只今歸りましたと云うておぢ
や。
勘太　畏まりました。
ト勘太郎、障子屋體の前に手を突き
お父様、只今歸りましてござりまする。
ト障子の内にて
勘助　オヽ、悴、只今下向いたしたとな。ドレ〳〵、土産を
强請らずばなるまい。
トこの時、折り返りの障子を明け、勘助、着流しにて
獨服の體。よき所に灯をともし、爐に本釜を掛け、本
湯立てゝ居る。
りつ　ソレ、お父様へ、ちやつとお土産をお目にかけやい
の。
勘助　さらばお土産を見ようか。
ト勘太郎、破魔弓を、勘助が側へ出して

勘太　アノ、お母様に、これを買うて貰ひました。
ト勘助、破魔弓を取つて見て
勘助　なんぢや、こりや破魔弓ではないか。
りつ　左様でござります。外の物には目を付けず、この弓
を買うておこせは、流石にあなたのお胤、なんと好いお
土産でござりませうな。
次作　誠にこれが勸學院の雀、栴檀の双葉とやら。
りつ　これでは天晴れ、お父様の名跡を。
勘助　イヤ、心元ない。
りつ　とは又、なぜに。
勘助　なぜとは奥、其方も野暮なぞや〳〵。侍ひの子が弓
矢を好むは、丁度彼の女郎屋の悴が、女郎買ひを自慢す
るやうなもので、天晴れ器量者とは褒められうか。侍ひ
の子が武具を好むは、勿論の沙汰と云ふもの。俳諧で云
はうなら、侍ひに武具とは下手な付けと云うて、點にな
らぬ。ところで我れ〳〵變化して、親代々の武士道を忘
れ、専ら粹の修行するは、なんときつい俳諧であらうが
な。その悴として不粹な例へ。とてもお山人形をなぜ買
うて貰はぬ。イカサマ、さう云ふ性根では、この勘助が
悴とは云はれませぬぞい。以後キッと心得よ。

ト叱りつける。勘太郎、もぢ〳〵して居る。

りつ　モシ〳〵、そりやアマア、あなた、何を仰しやりまする、侍ひの子が弓矢を好むは、どうでもその家に生れ、その志しがあるに依つての事でござりまする。それになんぢや、ら、褒めてやらうとはなされず、滅多無性に叱り付けて、可哀さうに、坊、大事ないぞや。なんぼうお父様は、あのやうな事仰しやつても、祖母様は大抵お褒めなさる事ぢやない。お目が覺めたら、ちやつとお目にかけや。

ト勘助、爐の炭をしながら

勘助　如何に我が生み落した悴なればとて、野暮に仕上げた、我が誤まりを隱さん爲、ハテ、さま〳〵と云ひなすなア。イヤ、讀めた事があるわい。昔氣質な母の野暮を合せて、野暮三人。ハテ、息災なものぢやなア。ハ、、ハ、。

りつ　ハイ、わたしや野暮でござりまする。あなたこそお知りなされねど、出入りの者や世間の人、派手な遊びをさせるの、あれでは末が詰まるまいのと、笑ひ誹りを聞きまして、嬉しからうと思し召しますかいなア。

勘助　コレ〳〵奥、それをおれに云ふ事かいの。

りつ　それぢやと申しまして、私しが耳へ入りましたに依つて。

勘助　ハテ、まだいの。母や次作は格別、お身が云やると、悋氣に當るわいの。

トおりつ、思ひ入れあつて

りつ　私しがちつと何ぞと申すと、只悋氣ぢや〳〵とばかり思し召すお心ゆゑ、わたしが意見は空吹く風。嫁入りして參りましたは十二年以前、御先祖からのお家柄と申し、殊には日頃の眞實、物堅い御氣質ゆゑ、お上の首尾、家中の用ひ、疎かならねば自ら、連れ添ふ私しどもまで只一人、粗略の挨拶する者もござりませぬは、これ皆あなたの光りあるゆゑ。そのあなたが、去年の春から、どう云ふ事やら俄かにお身持ち惰弱になり、十月二十日と廓の居續け。御家中でもひそ〳〵と好からぬ噂。母様のお耳に入り、なぜ悋氣をしやらぬぞと、度々の云ひつけなれど、私しが心にも、これまで長の年月を、如何な事にも遊所通ひをなされた事のないあなたなれば、これ程の事は有うちと、母様の手前を繕ろひ、いろ〳〵と申し宥める其うちに、お傾城を請け出し遊ばし、殿様へは病氣と云ひ立て、この京都に閑居なされ、日蔭者同然に淺

ましいこの暮らしも、皆あなたのお心一つから起る事。可哀さうに、この子ぢやと申して、國元に居るならば、組下の子供を集め、我まゝ氣儘に遊びませうが、今では誰れあつて遊ばしてやる友もなう、やう〳〵次作と中間一人。水仕のさよが飯炊き片手に、人形廻しの間にかゝぬ相手。母さまの御看病も、腰元どもが立ち替り、お藥のお菓子のと、大切にせんものを、あなたのお身持ち一つにて、何事も啄の嘴。この上もしや本國から、御不審の上意下らば、御病氣の上と云ひ、苦に病んで、もしもの事があつたならなんとせんと、あれやこれやを思ひやつて、私しが御意見。眞實夫を大切と思へばこそ、勘太郎と云ふ子まで生し、家の大事の今となり、面白さうに悋氣どころでござりませうか。如何にあなたのお心が面白いとて、人の誹りを聞き流し、母樣の御介抱、我が子の養育、本國の首尾、案じて居る私しが苦勞も、女房の役ぢやと思へばこそ、ちつとは心を思ひやり、長の馴染みの女房の、心も推量してくれたとて、お身の仇にもなりますまい。エヽ、胴慾なお心でござりまするなア。

ト大泣き。勘助、構はず茶を立つて居る。此うち次作、思ひ入れあつて、ズッと立ち、平舞臺へ來り

次作　お殿樣、今日の床飾りは、御秘藏の大黑天の畫像。元この大黑天と申すは、武家に於ては武運の守り。町家に於ては福壽圓滿の守護神。左に智慧の袋を携へ、右に小槌の子孫を守りて、寄り給はる米の俵にヂッと座を占め、頭巾は上見ぬ心のいさめ。人間もまッその如く、守つてさへ居れば、災ひの來る筈はなけれど、奢る者久しからずと、譬へに違はぬ人の身の上。非道の金で榮耀をせば、是非に一度は報はにやならぬ。天然自然天道樣が、明らかにござるわいなう。とサア、出過ぎた意見は釋迦に經文、口不調の私しなれど、お家譜代の家來の身で、御主人のお身の上、案じいで何と致しませうぞいの。

ト ほろりと泣き

七旬に餘る母御樣もあり、殊には長の御病氣。奧樣と云ひ、若旦那は御幼少。もし本國よりのお咎め、一つには、十右衞門を殺したる疑ひ。

ト 勘助、ぎつくり。次作、思ひ入れあつて

サ、あなたに覺えはなけれども、災難と雷は、どこへ落ちやうも知れませぬぞや。これ程の事に辨まへのない、あなた樣でもなけれども、心の外と云ふ、たつた一字が讀めませぬか。エヽ、情ない、御所存でござりますな

初演の給番附

う。
ト泣いて云ふ。勘助、構はず茶を呑みしまひ、硯を取
寄せ、一通を認める事あつて
勘助　奥と云ひ次作と云ひ、某を思へばこそ、神妙に意見、
過分なぞよ。
次作　すりや、拙者めが御意見を。
りつ　お聞入れ遊ばして。
次作　御放埒をお止めなされて
兩人　下さりまするな。
勘助　イヤ、止められぬ。
兩人　エヽ。
勘助　ずんと止められぬ。色と酒とに侍ひの魂ひは、祇園
町へ宿替へ致してしまうたぢや。なんと、さう云ふ水臭
い男を持てば、末が詰まるまい。其方にはこれを遣はさ
う。
ト右の一通を投げ出す。おりつ取つて見て
りつ　エヽ、こりやコレ去り狀。
ト驚ろく。
勘助　男の子は男に付くが大法なれど、餘り古風なに依つ
て、新らしう男の子を、女に付けて忰も勘當。

りつ　そりやマア、何を仰しやりますぞいなア。何の仕落
ちか、誤まりの覺えもなし。去らるゝ事は否でござりま
すわいなア。
勘助　ハテサ、否でも應でも離緣するのサ。
りつ　それぢやと申しまして、あんまりな。
勘助　幾度云うても返らぬ事。
トきつと云ふ。次作、急き込み
次作　イヤ、御主人樣、旦那樣。なんたる天魔が入り替つ
て、無理非道の事を云はつしやりますぞいの。
勘助　ナニサマ、主人へ諫言いたすは、天晴れの忠義者。
身が家來には釣合はぬ。暇をくれた。勝手に出て行け。
次作　お手討ちになりませう。
勘助　なんと。
次作　お暇は、えゝ貰ひますまい。御主人に見離され、の
め〱と、生きて居るやうな次作ではござらぬ。この場
に於て、御主人のお手にかゝり、死にまする。サア、す
つぱりとおやりなされませ。
ト尋常に首さしつける。勘助、困つたることなし。
りつ　オヽ、次作、出かしやつた〱。さうぢや〱。私し
もお手にかけられて下さりませ。私しが死ねば、この坊

も、跡に殘しては置きませぬ。コレ勘太郎、其方も母さんと一緒に、お手討ちに遭やるであらうの〳〵。さうかさうか。

勘太　アイ、わたしも母さんと一緒に、切られて欲しいわいの。

りつ　オヽ、出かしやつた。さうぢや〳〵。

ト勘太郎を勘助が前に直し、その身も共に體を突きつけ

サア、旦那どの、手にかけて下さりませ。

次作　サア、旦那樣、お手討ちになされませ。

りつ　サア、私しから先へ。

次作　イヽヤ、下郎めから。

りつ　イヤ、私しから。

次作　サア。

りつ　サア。

兩人　サア〳〵、手にかけて下さりませ。

ト双方、體を突きつける。勘助、大きに困りしこなしにて

勘助　こりや、わいらは、身共を困らすのぢやな。

りつ　サア、さう思し召すお心なら、なぜ御本心におなりなされて下さりませぬぞいなア。

次作　サア、お手討ちになさらぬか。

りつ　御本心におなりなさるゝか。

次作　サア、お手討ちか。

りつ　御本心か。

兩人　サア〳〵〳〵。

ト双方より詰め寄る。勘助、當惑のこなし。この時、向うより候八、走り出て

候八　御注進〳〵〳〵。

ト仰山に云ふ。

勘助　候八、注進とは、何事ぢや〳〵。

候八　申し、彼の君樣が、あなたが遲いと云うて、大癪でござりまする。

勘助　オツと皆まで云ふな。諸事は道々。

ト羽織を引ツかけ、大小を差し、出ようとする。おりつ、しつかりと留め、勘太郎を勘助が前へ詰め寄せ

りつ　申し、どうぞ。

ト勘太郎もろとも、しつかり取りつくを、勘助、兩人の顔をキツと見、思ひ入れあつて

勘助　勝手にせい。

ト両人を突き退け、騒ぎ唄になり候八付き添ひ、逸散に向うへ走り入る。次作、呆れしこなしにて、後を見送つて居る。おりつ、去り状を持ち、ウロ〳〵して

りつ　次作、こりやアマア、なんとせうぞいなう。

次作　何と申して、拙者めも餘りの事で、鰻に中てられた心持ちでござりまする、

りつ　どうぞ仕樣はない事かいの。

次作　奥樣。

りつ　次作。

次作　主も

りつ　家來も

両人　夢なら覺めて、くれぬ事かいやい。

ト両人、泣き落す。このキツカケで鷄、方々にて鳴く。次作、氣を取り直し

次作　奥樣、最早夜が明けまする。とても泣いてござつては、この思案が出ませぬ。母御樣へ御相談申すが、近道でござります。

りつ　そんなら、其方も一緒に。

次作　お越しなされませ。

ト唄になり、おりつ、勘太郎を連れ、次作付き添うて、奥へツイと入る。通り神樂になり、向うより、蒲原文平、柳田武太夫、序幕の役、着付け、麻上下の上へ羽織を着、中間二八、挾み箱持ち、付き添ひ出で、各々花道にて

武太　勘助が住宅、双林寺門前と承はつてござる。

文平　イカサマ、尋ねさせまするでござらう。家來、この家にて尋ねい。

中間　ハツ。

ト戸口へ來て

卒爾ながら、ちと物がお尋ね申したい。

ト内より權内出る。

卒爾ながら、木津勘助さまのお宅は、これでござらぬか。

權内　如何にも、勘助宅は手前でござる。して、あなた樣方は。

武太　イヤ、某は、江戸表より罷り上つた者でござる。勘助どの御在宿ならば、案内しやれ。

ト両人、羽織を取る。

權内　イヤ、勘助は他行仕つてござりまする。

武太　お聞きなされ、勘助他行いたしたとござる。

文平　ナニサ、他行いたしても苦しうない。歸宅まで相待ち居る。案内しやれ。
權内　でも、他行いたし、居りませねば、何とやら。
ト頭を搔き、うぢ／＼云ふ。
文平　ヤア、うぢ／＼と、案内いたせと云ふに。
トきつと云ふ。
權内　ヘイ、畏まりました。
トうろたへて奥へ入る。
武太　家來、其方は、暫らく二軒茶屋に扣へて居れ。
家來　畏まりましてござりまする。
ト皆々引返し、向うへ入る。
武太　イザ、文平どの。
文平　先づ／＼お先へ。
武太　然らば。
ト兩人ズツと内へ通り、兩人、上の方へ通ると、奥より次作出で、下の方へ直り
次作　これは／＼御兩所樣には、遙々の御上京、御苦勞に存じまする。
武太　文平どのと云ひ、この武太夫、勘助どのへ殿よりの御内意のお使ひ。役目なれば、苦勞にござらぬ。
文平　勘助どのは他行とござる。いよ／＼左樣かな。
次作　成る程、折惡しく主人勘助、他行いたしましてござりまする。
兩人　して、歸宅は何時でござらうな。
次作　されば、その儀でござりまする。主人の他行は遠方でござりますれば、とても近日中に歸宅は心元なうござります。明日明後日、御用の筋もござらうならば、何卒私しへ仰せ聞けられて下さりませう。
ト云ふを打ち消し
文平　ヤア、默れ下郎め。大切なる殿の上意、陪臣に仰せ聞けやうか。勘助歸宅までは、幾日も相待ち居る。
武太　但し勘助を、この所へ出さつしやるか。
次作　サア、その儀は。
兩人　どうでござる。
ト奥にて
りつ　木津勘助、それへ參つて、御對面いたしませう。
ト合ひ方になり、おりつ、勘太郎に上下大小差させ出で來り、下の方へ座り、その身も次へ直る。兩人、おりつを見て
武太　勘助どの〻御内實、今日兩人參つたは、假初めなら

ぬ大殿の上意でござる。
文平　それになんぞや、小兒を以て勘助と名乘らせるは、見事返答が出來まするかや。
りつ　男子十歳にして家を治む。幼少にはござりますれども、勘助が忰でござりまする。
武太　然らば、一通り申し聞かせませう。大殿が勘助どのへ御不審の箇條。若殿當太郎さま、江戸表に於て御身放埒、さる正月お藏元にて、御用金改めの折から、立合ひしところ、在り金のうち三萬兩不足。無き金を、有る趣きにして藏の戸前、勘助どのが封印。惡事千里と本國のお聞きに達し、これ全く勘助、所存あつての儀と、これ御不審の第一。サア、返答承はりたい。
りつ　御用金三萬兩の不足存じながら、御金藏の封印いたせし夫勘助、程と時節が思案の切端。その節御返答申し上げるでござります。
文平　イヤ、そればかりではござらぬ。承はれば江戸表に於て、吉原の傾城を請け出し、お國元へ病氣と稱し當國へ立越え、祇園町での放埒惰弱。藝子を集めて、さまざまの全盛。殘らず殿の上聞に達してござる。
りつ　元より夫勘助、當所に於て放埒とは、跡方もなき世間の風説。現在女房の私しが、側に付き添ひ居りますれば、左樣の事、あらうやうはござりませぬ。
次作　そこが彼の、日頃勘助どのが、羽振りのよいにつけて、高木風に折らるゝとやら、お頭を嫉やから、尾に鰭つけての取沙汰。主人の身に科は毛頭、覺えのない儀でござりまする。
武太　然らば又、御領分の村より、納米として差上ぐる米穀、一郡の支配たる勘助どの、お米切手の僞印を拵らへ、自分の勝手に賣り拂はれしとある。この云ひ譯はどうでござる。
りつ　納米を自由にせしは、お上へ對し、忠義の一つでござりまする。
兩人　ナニ、忠義とは。
りつ　當國の御領分、久世郡三ヶ年の飢渴。これを救はん爲、お米二萬石を以て、金子千貫目に引替へしは、これ全く下を憐れみ、お上の御利分を存じ、勘助が一つの忠義と致しまする。
文平　成る程、一通りは聞えたが、何ゆゑお國元へ一應のお尋ねもなく、私しに計らひ召された。
次作　イヤ、憚りながら、早い譬へを申しませうならば、

大病人がござりまして、醫者が集まり藥を盛る時、この病人はちと見所があり、必らず外へ見せなと云うて歸つた後で、俄に容態改まり、氣を失ふ程の段になり、こりや先刻の醫者衆が、必らず外へ見せなと云はれたゆゑ、外の醫者には見せられぬと云うて、服藥を用ひぬうち、病人がコロリと往生。サア、丁度其やうな、百里に餘る本國へ、お伺ひ申す其うちに、飢に疲れてコロ／＼と、死んでしまつた跡で、お救ひ米が出來ましたとて、なんの詮なき後の祭。そこを察して主人が計らひ。法を破つて仁に基づく、政道の一つと、憚りながら存じまする。

武太　田畑不明の百姓へ、金子に替へてお米を拂へば、土民は喜ぶ。お上は御利分。天晴れの御工風。して、殿へ差上げらるゝ、千貫目の金子はどれにござる。

ト　これにておりつ、次作ギックリ。

文平　イヤ、滅多にこの金子はござるまい。そればかりでない。殿の御用地の御山林、木石を濫りに伐り出し、大金に賣り拂ひ、町家へは諸式の運上、村方へは課役を云ひ付け、方途もない私慾の段々。遊所の諸拂ひ萬端は、御判を似せし銀札を以て取扱ひしと、遊所よりの段々の訴へ。

武太　榮耀遣ひは銀札を計らひながら、取込んだる大金は、如何いたされた。過分の金子貯へあるは、仔細あつてか。

文平　いつぞや日本堤に於て、深見十右衛門を闇討ちに致したは、正しく勘助であらうがや。

ト　おりつ、合點の行かぬこなし。次作、ギックリして

次作　何遺恨あつて勘助、十右衛門を闇討ちに仕らうぞ。

武太　當時お上へ對し、忠義一圖の十右衛門、諸事遊びの妨げと、人知れず討つて捨てたるに違ひはない。

文平　返答に依つて、繩打つて國元へ引く。御內證

武太　下郎め、返答は

兩人　どうだ。

ト　おりつ、次作、當惑のこなし。此うち勘太郎、眠氣のこなし

勘太　申し、お母樣、眠たいわいなう。

りつ　これはしたり、行儀の惡い。お客のあるのに、どうしたものぢやぞいなう。

勘太　アイ、そんなら眠たうない。なんぞ下されいなう。

りつ　又やんちやんを云やるの。ソレ、べいが又叱らうぞ。

次作　イヤ〳〵奥樣、こりや坊樣に、なんぞ上げましたらようござります。ナ、サ、どうやらなんぞ欲しさうな顔つきでござりますぞえ。

ト文平、武太夫の方を、顔にて教へる。

りつ　成る程、次作の出やる通り、なんぞ遣らねばなるまいの。

　トこの時、奥にて

お幸　待つた。病中ながら勘助が母、それへ參つて、御返答申し上げませう。

ト合ひ方になり、勘助母お幸、扇箱二つ、臺へ載せ、持つて出る。

りつ　申し、御病中と申し、お危なうござりますわいなア。

お幸　イヤ〳〵、例へ病中なればとて、悴勘助がこの場の御返答、申し上げねば、御上使へ對して無禮至極。

次作　すりや、先刻よりの

りつ　樣子を。

お幸　殘らず聞きました。おやに依つてこの二箱。

文武　そんなら、その

お幸　箱に籠めたる悴が返答、

ト三人、顔を見合せ、よろしくこなしあつて、文平の前へ扇箱を直し

ホヽウ、これは〳〵先程より御退屈でござりませう。委細はあれにて承はりましてござりまする。悴勘助、この場の返答、御兩所樣、密かに御覽下さりませう。

文平　ナニ、この扇箱が、勘助どのゝ返答とな。

お幸　左樣でござりまする。

文平　面白い。早速の返答。少しも疑はしいと、勘助どのは大罪人。容赦なく國元へ引きますぞ。ドレ。

ト何心なく扇箱を取上げる。しつかりと重いと云ふこなし。

すりや、この扇子を。

お幸　偏へにお執成しの程を。

ト文平、笑壺のこなしにて

文平　ハヽヽヽ、イヤナニ、武太夫どの。なんと、我れ我れの役目の表でござれば、只今の如く申せば申すものの、日頃實體なる勘助どの、私慾虚妄のあらう筈がござらぬ。こりや全く、世間の風説と申すもの。爰が彼の朋友の料簡を持ちまして、大殿の御前體、よろしく繕ろひ致すがよからうと存じまする、

武太　コレ〳〵、文平どの、貴殿、何を云はつしやる。勘助の云ひ譯の筋に依つて、罷り越したではござらぬか。それに何ぞや、云ひ譯の筋も立たぬうち、私しの料簡を以て、殿の御前體を執成せなどとは、馬鹿々々しい詮索でござりまする。

文平　サア、そこを執成し遣はすが、武門の情かと存じまする。

武太　ヤ、なんと。

文平　但し、武士には、情と云ふものは、ないものでござるかな。

武太　イヤサ、情は情、政道は政道。云ひ譯なくば、是非勘助に繩打つて引立て申す。

文平　イ、ヤ、さうは致すまい。

武太　何がどうした。

文平　罪の疑はしきは、輕く計らへと古人の金言。私慾虚妄の惡名も、人殺しの取沙汰も、これぞと云ふべき證據もなければ、勘助どのゝ誤まりとも、よも明白には申されまい。

武太　然らば、私しの料簡を以て、宥免の仕り、後日殿より御咎めあらば。

文平　その時は蒲原文平、腹仕る分の事。

武太　すりや、御自分が。

文平　ハテ、貴殿の腹は借り申さぬ。如何にお若いとて、餘りなる一徹。コレサ武太夫どの、情も武士の道具ぢやわいの。

ト武太夫が脊中を叩く。武太夫ムツとして

武太　文平どの、貴殿、左樣な心底とは、うろたへた釋迦も知るまい。餘りの事に膽が潰れる。よい〳〵。貴殿は兎もあれ、この武太夫は、左樣な馬鹿々々しい計らひはえゝ致さぬ。この趣き、國元へ通達いたす。さう思はつしやい。

ト行かうとするを、文平ちよつと留めて

文平　ハテ、一徹な武太夫どの。さう仰せられずとも、一應も再應も、御料簡をお付けなされい。

武太　嫌でござる。

ト袖を振り切る。

お幸　この上ながら國元の首尾。

次作　萬事よろしう。

文平　氣遣ひ召さるな。各々のお心配りは慥かにこの。サア、明けて云はれぬ祕密の扇。二箱ながら慥かに落手。

ト二つの扇箱を二つに持つ。

お幸　左様ならば文平どの。

文平　縁あらば、重ねて逢はう。

ト唄になり、武太夫、ムッとしながら向うへ入る。文平、二つの箱を両手に持ち、仔細らしく静々と入る。各々後を見送り居る。お幸落ちつきしこなしにて、がつくりして苦しきこなし。おりつ、次作、いろ〳〵介抱する事あつて、三人一時に顔見合せ

りつ　まんまと首尾よう。

お幸　當座の難は遁がれても、重ねての返答が、勘助が身の生死の境。

次作　何を申すも、御主人の御本心を見ぬ上は

お幸　安堵ならざる木津の家名。

りつ　心がゝりは人殺しのお疑ひ。

お幸　もし悴に極まらば、重なるお咎め。

次作　いつぞや、旦那のお迎ひの時。

兩人　ヤ、何と云やる。

次作　慥かにその夜十右衛門を。

りつ　アノ、旦那どのが。

お幸　仕留めたか。

次作　正しく。

りつ　エ、。

ト驚ろく。

次作　申し。

ト抑へる。おりつ、ピッシャリ門口を閉める。お幸、キツと思ひ入れ。この引張りよろしく、　ひやうし幕

引返し。三間の間、高足の二重舞臺、正面の襖、隈地の墨繪、梅の模様。上の方に隅違ひの袋戸棚、蒔繪の鏡臺仕込み、火鉢に湊焼の土瓶を掛け、風雅の行燈をともしあり、東より正面へ竹の廻り縁、唐銅の龍の口を据ゑ、手拭を掛け、下座は舞臺先まで、斜に取つて半蔀、忍び返し。白梅の立ち木、見事に咲きあり、この外大名竹のあしらひ、いつもの所に白竹の枝折り門、所々に輪飾り掛けてあり、二重舞臺正面に、六枚屏風を引き廻して、勘助、喜瀬川の帶二筋掛けあり、この外よき所に蓬莱の三方、組重好みの銚子、杯臺に小杯取添へ、刀掛けに大小、風呂敷包み、この脇にあり、すべて京先斗町貸座敷の

體。この道具、好みあつて、胡弓入りの誂らへの獨
吟にて、幕明く。

めりやす〽うきとうき、わたり比べて川竹の、仇し枕に夜
毎の夢を、結ぶとすれど、ついしやら解けの、心もつる
る戀の癖。

ト右の文句一くさりあつて、よき所にて屏風の内より、
女の帶を引いて取ると、喜瀨川、寢卷の形、直ぐにそ
の帶を前に結び、屏風の内より出で、苞の下へ櫛を入
れ、紙にて手をちよつと拭き、龍の口へかゝる。水は
ないと云ふこなしにて、土瓶の蔓を袖にて持ち添へ、
金盥へ湯を注ぎ、手を洗ひ、屏風の内より一閑張の煙
草盆を出し、煙草を一服のみ、また煙草をついで屏風
を明けると、内に勘助、炬燵に結構なる蒲團を掛け、
絹布團を敷き、下着の儘にて寢て居る。側に喜瀨川の
枕を直しあり、此うち始終合ひ方。

喜瀨　申し旦那、先刻日が暮れましたぞえ。申し旦那。

ト寄り添ひながら、煙管を差出す。

勘助　オ、〳〵。

ト云ひながら目を覺まし、寢ながら煙草一服のみ

ついトロ〳〵とした間に、もう日が暮れたか。

ト云ひながら起き上がる。

喜瀨　なんの、トロ〳〵どころか、大抵よう御寢なつた事
ぢやござんせぬわいなア。

勘助　サア、それも、お主の業ぢやて。

喜瀨　オ、おかし。お前の寢なさるのが、どうしてわたし
が業でござんすえ。

勘助　ハテ知れた事。滅多に屠蘇酒を呑まして置いて、又
その後でソレ、お進めなされたではないか。

喜瀨　オ、阿房らしい。

トちよつと顏を隱す。

勘助　それ〳〵、お強ひなされた覺えがあればこそ、なん
と、どうぢや〳〵。

ト立つて屏風の帶を取りにかゝる。喜瀨川ちつやと勘
助が帶を引き取り

喜瀨　こちや、そんな事云ひなさると、この帶を上げやせ
ぬぞえ。

勘助　オッと誤まり。次手に、上着を着せてたも。

喜瀨　醉醒めで、お寒うござりませう。

勘助　江戸と違うてこの京と云ふ所は、寒さは強いてな
ア。

トこの臺詞のうち、喜瀬川、勘助が上着を取つて後より着せる。勘助、帶を締め、煙草盆を提げ、よき所に座る。

喜瀬　お羽織を上げませうかえ。

勘助　イヤ〳〵マア、これでよい。

　ト喜瀬川、火鉢を勘助が前へ直し

喜瀬　申し旦那、熱うして、一つお上がりなさんせんかえ。

勘助　イヤ〳〵、さう馳走になつては、また草臥れて寐ねばならぬ。

喜瀬　オヽ憎。その事ぢやないわいなア。酒を上がらんかと云ふ事いなア。

勘助　ムウ。酒なら一つ食べてもよからう。

喜瀬　そんなら、つい熱うして上げませう。

　ト火鉢の火を見て

あのマア、りんとした事が、火鉢の火は消えかゝつてあるわいの。道理で最前から寒いと思うたわいなア。ほんに、その寒いで思ひ出した。ほんに一人、床に忘れて置いたわいの。

　ト云ひながら、立つて蒲團の中より、口幕の裸人形を取出し

可哀さうに、淋しかつたであらう。お父さんの側に居やつた。

　ト勘助が側へ人形を座らせ、炭箱を持ち出で

モシ、御慮外ながら、お前、炭をついで下さんせ。

勘助　合點ぢや〳〵。見ればわが身も薄着ぢやなう。ちやつと何なと着やいなう。

喜瀬　サイナア、寒いけれどな、まだマア顏も拭かねばならず、大抵忙しい事ぢやに依つて。

勘助　ハテ、不精な人ではある。風邪を引くわいの。

喜瀬　アイ〳〵。

　ト獨吟の唄になり、勘助が羽織を取つて着せる。勘助、炭を火鉢へつぎ、羽箒にて火を煽ぎながら云うて居る。喜瀬川、鏡臺の向うへ蠟燭を立て、手拭にて顏を拭き、髪の形を直しながら

りんや〳〵。どこに居やるぞいの。

　ト呼ぶ。奥よりおりん、木綿やつし前垂れ、下女のこなしにて出る。

りん　ハイ〳〵、お呼びなされましたかえ。

喜瀬　お呼びなされたどころかいの。龍の口に水もなし、

火鉢の火も消えてあるわいの。
りん　ほんに、そんな事でござりましたかえ。わたしや又、隣り座敷へ法師が來て、新唄を唄うて居たを、うつかりと聽いて居りましたわいなア。ドレ、お寐間を上げませう。
トおりん、立つて、屛風を片付け寄せ、床を上げる。此うち勘助、硯箱を引寄せ、一通を認め、ソツと人形の懷中へ入れる。喜瀨川、火鉢の上へ銚子を掛け、羽箒にて煽いで居る。
勘助　りんめが來をつた時は、大人しさうな女ぢやと思うて居たが、なか〳〵油斷がならぬぞや。隣り座敷の唄を聞いて居たと云ふも、合點が行かぬわいの。
りん　アレ、また旦那さんが、嬲てゞぢやわいなア。
勘助　ナニ、おれが噓を云はうぞ。きつい事を見付けて置いた。おれがいつも權内めを供に連れて來ると、何か勝手の隅で片寄つて居らうが。
りん　イヽエ、こちやそんな事は存じませぬわいなア。
勘助　昨夜おけら參りの下向に寄つたれば、權内めを捉へて、何か怪しの物をせがんで居たな。
喜瀨　何をせがんで居りましたえ。

勘助　されば、聞きやれ。りんが云ふには、今夜は節分だから、一人は寢ぬものぢやげな。それぢやに依つて、今宵はひぼぢやぞえ。ひぼぢや〳〵と、滅多にひぼをせがんで居つた。
りん　旦那さん、何時の間にお聞きなされた。こちや嫌え。
喜瀨　モシ旦那どの、ひぼとは、何の事でござりますえ。
勘助　ハテ、わが身も野暮な事を云ふ人ではある。まだ松葉の二階の氣が離れぬ。喜瀨川の君ではあるわいの。
喜瀨　ア、申し、その名は云ひなさんないなア。
勘助　これは不調法。喜瀨川の君ではない、お梅の方さま。去年の夏、憂き川竹の世界を遁がれ、遠い都の宿入り、精出された甲斐あつて、御產もなされた、この御子息。
喜瀨　御内室には、勘太郎さまと云ふ、お子があるに依つて、わたしも奧樣に肖かつて、ほんまの嬰兒を儲けるやうに、緣起を祝うてこの人形。
勘助　折る事も高根の花や見たばかりと、東山の句の通り、兎角人は、人形で居たいものぢやてなう。
りん　イヽエ、人形のやうにして居るは、何にも知らぬ小

町娘、悋氣も少しは愛想ぢやと、云うてはあれど怪我な事、悋氣なされぬは此方のお家さん。

喜瀬　つい一通りの奥様なりや、わたしやよう諦らめて居まするけれど、御本家のおりつさまは、長のお馴染み。いとしぼがりなさるればこそ、勘太郎さまと云ふお子まで、お拵らへなされたではないかいなア。

ト勘助を振りつけ抓る。

勘助　アイタヽヽ。

喜瀬　そりや、誰れに逢ひたいえ。

勘助　此奴に逢ひたい。

トおりんが尻を叩く。

りん　オヽ、何ぢやいなア。旦那様、酔ひなさるゝと、どうもなる事ぢやない。

勘助　ハヽヽヽ、其やうに何時まで酔うて居るもので。疾に醒めてしまうてあるわいやい。

ト喜瀬川、銚子の蓋を明けて見て

喜瀬　オヽ、モシ、燗が通り過ぎました。お上がりなされぬかえ。

勘助　ドレ、一つ呑まうか。

ト杯を取る。喜瀬川注ぐ。勘助、呑まうとして

こりや屠蘇ぢやさうな。

喜瀬　ほんに、屠蘇ぢやさうなわいなア。鈍な事で。燗を。

勘助　イヤモウ、屠蘇は呑めぬ。

りん　常のを燗をして、參じませうかいなア。

勘助　劍菱はきついに依つて、矢張り鴨川の方をつけておぢや。

りん　アイ〳〵。合點でござんす。ドレ、燗を付けて來ようか。

ト銚子を持ち、奥へ入る。此うち矢張り獨吟の合ひ方。

勘助　兎角彼奴は、ひぼの事を云ふと、嫌がり居る。ハヽハヽヽ。

喜瀬　モシ、もう人の嫌がる事は、云ひなされなすないなア。

勘助　イヤ又、彼奴を弄つて遊ぶも、氣が變つて面白いて。イヤ、變つたで思ひ出した。去年の今日は江戸の屋敷で、上下をいためつけ、お杯頂戴など、鹿爪らしくやつて居たが、去年に變る今年は、其許のお願ひで、所も名に負ふ先斗町、東山を見晴らして、炬燵の上の小杯。

どうも云へたものではないな。
喜瀬　ほんに、さうでござんすなア。縁と云ふものは變つたもので、日頃物堅いあなたなれど、ついした事の意氣張りから、我が身は身請け。サア、母御様は憎い奴と思し召さう。奥様は取分けお恨みなされてござらうと、泊めたい夜半も泊め申さず、苦はいろ替ゆる松風とは、よう云うた譬へぢやわいなア。
勘助　ハテ、野暮な事を云ふものぢや。其やうな事さつぱり忘れてしまうて、兎角安氣に暮したがよい。梅、どうおやぞいやい〳〵。
ト喜瀬川が袖から、懐へ手を入れ、引き寄せる。
喜瀬　オヽ、冷た。なぜ此やうに冷たうござんすぞいの。
勘助　サア、この手の冷たいも、矢張りそもじの業ぢやて……コリヤ、大分乳が大きうなつたぞや。
喜瀬　ア、申し、こそばうござりますわいなア。
ト喜瀬川こなし。
勘助　ア、これなれば、其方も産みさうなものぢや。なぜ産まぬ〳〵。
喜瀬　サア、なんぼ其やうに存じましても、とつとモウ、意地の悪いものでござんすわいなア。

勘助　サア、そこを思へば、矢ッ張り其方の御馳走振りの悪いと見えるわいの。全體この先斗町の白梅亭へ借り座敷して、其方の名を梅と付けたも、早う子を産め、青梅を好めとは、なんと粹であらうが。梅、どうぢやい〳〵。
ト段々に手を下の方へ入れる。喜瀬川よろしくこなし
喜瀬　ア、申し、悪うござりますわいなア。
勘助　コレ、大きな聲をしやんな。りんめが味な氣になると悪い。默つて居や〳〵。
喜瀬　それでも、こんな所では、悪うござりますわいなア。
勘助　大事ない〳〵。
ト兩人よろしくある。
喜瀬　りんがツイ來ませうぞえ。
勘助　まだマア滅多に來る事ぢやない。大事ない〳〵。
ト兩人少し横になり、喜瀬川、蒲團の端を引き寄せる。この途端におりん、銚子を持ち出て
りん　ハイ、お銚子持つて參じましたぞえ。
ト大きな聲で云ふ。兩人、恟りして起き上がり、勘助、息を呑んで

勘助　ハテ、野暮な所へ持つて來をつた。
りん　遲かつた〳〵。
勘助　イヤ、早過ぎた。
りん　サア、一つお上りなされませ。
勘助　ドレ〳〵。
ト猪口を持たうとする。
喜瀨　ア、申し。
ト勘助、ちやつと手を引く。
勘助　イカサマ、これは尤も。
喜瀨　お手水持つておぢや。
りん　ハイ〳〵。
ト金盥を勘助が前へ直し、湯盥の湯を突き出す。喜瀨川手拭を取つて渡す。勘助、拭きしまうて
勘助　さらば、酒に致さうか。
ト猪口を持ち、りん、酌をする。これより杯事よろしく、勘助は暇乞ひのこなし。
喜瀨　ほんに、忘れて居たわいの。大事の年始のお杯、坊にもさいて下さんせいなア。
勘助　イカサマ、大事の御子息、餘り大人しく物も云はずに居るゆゑ、ハタと失念いたした。眞平々々。イザ、お取次〳〵。
ト喜瀨川が前へ猪口を出す。喜瀨川、人形を抱きながら猪口を取上げ
喜瀨　坊え。お父樣のお杯ぢやわいの。ドレ、母さんが呑ましてやりませう。
ト猪口を出す。おりん注ぐ。
オツと、これは強いお酌ぢや。こりやほんに好きませう。母さんが助けてやりませう。
ト一口呑んで、サア呑ましてやらうと、この時、人形の懷にある一通に心付き、思ひ入れあつて
モシ旦那、坊があなたへ上げましたいなア。
ト猪口を勘助が前へ直し
勘助　ナニ、悴が。杯が一つ、押よう。其方、合して遣りやれ。
りん　ほんに、何時もはならずとも、めでたい正月、お一つお上がりなされませ。
喜瀨　何を云やるやら。エヽ、呑みもせぬものを。
ト喜瀨川、猪口を取上げる。
勘助　一つ注げ〳〵。
りん　ハイ〳〵。

トちよつと注ぐ。喜瀬川、零るゝこなしにて
喜瀬　りん、嗜なみや。此やうに呑んで堪るものかいの。
さうしてマア、この羽織にちよつとでも、酒を掛けたら
奥様が、大抵の事ぢやない。りん、これを助けてたも。
りん　何時でも、あなたの御名代はわたしぢやなア。
ト猪口を取る。喜瀬川、羽織を脱いで疊み、りん、酒
を呑む。
勘助　こいつは餘ッぽどなる口ぢやワ。イザ、肴せう〳〵。
ト紙入れより一分出して、紙に捻り
ソレ、肴。
ト遣る。おりん、取つて見て
りん　こりや申し、一分ぢやなア。
勘助　なんと、好い肴であらうが。
りん　こちや、此やうな肴なら、幾つでも食べるわいな
ア。
トりん、手酌にて酒を呑むうち、喜瀬川、ソッと人形
の懐の一通を取つて讀み、大きに驚ろき、キッと思ひ
入れあつて、勘助が顔を見て、思はずハラリと涙を零
すこなし。勘助キッと見て
勘助　梅、何を泣きやる。
喜瀬　エ。
トぎつくり。
勘助　何が悲しい。
ト喜瀬川、氣を替へ
喜瀬　誰れがいなア。
勘助　其方が。
喜瀬　どこにわたしが泣きましたぞいなア。
ト涙を隱す、こなしあつて、氣を取り直し
りん、一つ注いでたも。
ト猪口を取つて差出す。
勘助　こりや、いつにない疳積ぢやな。
喜瀬　正月早々から、泣くのなんのと、緣起の惡い事を
云はしやんすに依つて、祝うて一つ、呑むのぢやわいな
ア。
トぐつと呑む。
勘助　ハテナア。
トこなしあつて
イヤ、大事の君に疳積を起させてはならぬ。斯うせう斯
うせう。明日はあつさりと芝居行きにせう。御機嫌直し
の相伴は、どうぢや〳〵。

りん　こりや、ようござりませうわいなア。わたしや八百藏と菊之丞の、濡れの段が見たうござりますわいな。

勘助　イヤ〳〵、われに濡れの段を見せたら、又ひぼが欲しうならうぞや。

喜瀨　旦那樣、まだ仰しやるかいなア。

勘助　明日はなんでも夜の内からぢや。其方も今の内、支度して置け〳〵。

喜瀨　ほんの今の内に、鐵漿も付けたり、髮を結うて置かうわいなう。

勘助　オヽ、それ〳〵、手廻しが肝心。早うせい〳〵。

りん　こりやいつそ、忙がしうなつたわいなア。

　ト合ひ方にて、いそ〳〵と奥へ入る。喜瀨川キツと思ひ入れ。

勘助　梅、其方も身仕舞ひして置きや。大分身共も心忙がしいわえ。

　ト自身に羽織を立つて着て、刀掛けの大小を差し

梅、明日逢はうぞや。

　トずつと切り戸の方へ行く。

喜瀨　旦那、お待ちなされませ。

勘助　ハテ、明日來やうわサ。

　ト枝折り戸の方へ出ようとする。

喜瀨　イヽエ、今宵別れて、明日は逢はれぬ。あなたの身の上。

　トこれにて勘助ギツクリ、切り戸をしめ

勘助　ヤ、なんと云やる。

　ト常の合ひ方。

喜瀨　この頃から彼處や爰の取沙汰。出入りの衆の話しを聞けば、お國の首尾は以ての外、その元の起りと云ふは皆わたしから起つた事。さう云ふ事なら、なぜ斯う〳〵と打明けて、問ひ談合もして下さりませぬぞいなア。罪も咎めもあなた一人の身に引請け、繫がるわたしに難儀を掛けぬこの去り狀、お情が餘つて、恨めしうござりますわいなア。

　ト取りついて大泣き。勘助こなしあつて

勘助　その深切は忘れは措かぬ、忝ないが、何を隱さう、身は今宵中に、この京地を立退かねばならぬわいなう。

　ト喜瀨川、勘助が顏を見て咳き入る。

知りやる通りのおれが身持ち。祇園町での潜上は、京江戸の浮名に立てられ、知行の餘慶も有り金も、費ひ果して飽き足らず、町家を痛め、百姓を惱まし、米切手の似

せ判まで、積り〳〵て私慾の報ひ。病氣と僞はり披露して、江戸表を立退き、現在の弟にも、包み隱せし京地の隱れ家。上聞に達し、捕り手は今をも知れず。それゆゑ其方に去り狀を遣つたは、せめてもの身の寸志ぞ。別れて又逢ふ事も不定の世の中。これ今生の別れであらう。

ト ほろりと泣き

堅固で居やれ。

ト 愁ひを隱す。喜瀨川、こなしあつて

喜瀨　現在御流浪の手詰めとなつて、身に難儀がかゝらぬゆゑ、去り狀取つて遁がれさうな、わたしぢやと思うて下さりまするかいのなア。死後は諸とも、一緒に連れて逃げて下さりませいなア。

ト 泣き、去り狀を勘助が前へ戻す。

勘助　何を馬鹿な。身が志しを無にするのか。

喜瀨　イヽエ、これぱつかりは、お免されて下さりませいなア。

勘助　ハテサテ、惡い料簡。死別れと云ふではない。緣さへあれば、また廻り逢ふ月日もあるわヮ。

ト 側にある人形を取つて

最前も云ふ如く、その身も共に、この人形のやうに何事も、少し默つて辛抱が肝心。また逢ふまでは、其方が體も去り狀も、この人形にしかと預けた。

喜瀨　ぢやと申しまして。

勘助　形見の人形、大事におしやれ。

ト 喜瀨川、去り狀と人形を見て

喜瀨　ハア、ヽヽヽ。

ト 泣き落すと誂らへの鳴り物になり、向うより仲居一人、箱提灯を持ち、藝子、幇間等各々口幕の揃ひの形にて出て

幇間　勘助さまのお迎ひに。

皆々　參じましたわいなア。

ト これにて勘助、氣を替へ

勘助　ヤア、これはお歷々のお揃ひぢやなア。

幇一　申し旦那、あんまりな引締めやう。待つて居られず云ひ合して

幇二　お迎ひに鳴り込まうと

幇三　酒呑みの大將、我れ一人とは、どうでござります。

藝一　何の事やら、とんと譯の知れぬ地口ぢやわいなア。

幇三　ハ、ヽヽ、これが知れて堪るものか。その知れぬところを、一寸先は闇の夜と、お出でなされませぬかいな

ア。
詰二　旦那、返答は。
詰三　どうだエ、。
　ト睨む。
勘助　南無三、引かれぬ義理となつたわやい。
喜二　勘さん、一力で醉はされた意趣返し。
男皆　今夜はキッと尋常に
女皆　仇討ちをせにやならぬわいなア。
勘助　面白い／＼。例へ助太刀が幾人あつても、何奴も此奴も返り討ちぢや。先へ行つて待つて居い。
詰一　ヤア、先へ行けとは卑怯々々。
詰二　尋常にお供するのぢや。
勘助　イ、ヤ、卑怯でない。爰に一つの趣向がある。
詰三　ムウ、その趣向と云ふは。
皆々　どうぢやな／＼。
勘助　サア、その趣向と云ふは、皆井筒へ先へ行け。
皆々　參りますワ。
勘助　ところで勘さまは、今宵は扇九で大立ておやと云ふワ。
皆々　申しまするワ。

勘助　次郎三もお初も、疳積を起す所へ、おれが後から行つて、不意を打つと云ふ趣向。
女皆　こりや、よからうわいな。
勘助　梅を連れて、先へ行け／＼。
皆々　合點でござりまする。サア、お梅さま。
喜瀬　わたしや、そんな機嫌ぢやないわいたア。
詰一　でも、判官の下知なれば。
詰二　辨慶、舟子に力を合せ、
　ト謡にて云ふ
勘助　皆、急げ／＼。
　ト摺り鉦入りの鳴り物になり、嫌がる喜瀬川を無理に拍子に乘せかけ、喧しく云うて、この人數皆々、向うへ入る。勘助、見送り、こなしあると、引違へて向うより、權内、口幕の中間にて、走り出て
權内　お旦那、これにお出でなされまするか。まだ後室樣へ年始の御祝儀なされぬとあつて、怪しからぬお腹立ち、只今お供して歸れとの仰せ。イザ、御歸宅遊ばされませう。
勘助　さうであらう／＼。權内、あれなる上下を持て。
權内　ハツ。

ト風呂敷包みの上下を取つて來て、後から肩衣を掛ける。勘助、手早く上下を着て

勘助　あれなる梅ヶ枝を、手折つて參れ。

權内　ハツ。

ト振りよき梅か枝を折つて、花活けにさす。

勘助　其方は、この梅が枝を持ち歸り、只今と申し上げい。

權内　畏まりました。

勘助　早く行け。

權内　ハツ。

ト權内、花活けを持ち向うへ逸散に入る。勘助、思ひ入れあつて、懷中より袱紗包みの金を出し、手早く上包みを認める事ありて、喜瀬川が鏡臺の抽出しに入れ是非には及ばぬと、ちよつと愁ひのこなしあつて、しやんと氣を替へる。このキツカケに唄になり、ツイと向うへ入ると、ちよん／＼にて道具廻る。

本舞臺、三間の間、二重舞臺。上の方、一間の障子屋體、この内に摩利支天の大宮を飾り、神酒を供へ三方に鏡餅を具へあり、見附け貼交ぜの襖、上の方手水鉢、植込みのあしらひ、下座に板塀の見切り。この後、隣り座敷の二階、片蓋屋根、綟子張りの障子に、枝折り門セリ上がる。すべて口幕の表座敷の體。二重舞臺よき所に遠州行燈をともしあり、勘助の母お幸、眞中に刀引提げ立つて居る。おりつよろしく留めて居る。この見得、靜かなる手毬唄の合ひ方にて道具とまる。

りつ　御病中と云ひ、お氣を揉ませられませずと、マア、お鎭まり下されませいなア。

お幸　イヽヤ、留めやんな。大事の／＼、木津の家名を汚す悴、未來の夫に成り替り、手にかけて先祖へ云ひ譯。家來を呼びにやつたれば、是非に戻るは必定。その座を立たせず母が成敗。其方も、未練をかけまいぞ。

りつ　サア、其やうにお腹立ちは、御尤もでございますれど、私しが身にもおなりなされて御覽じませ。あなたのお手討ちに遊ばすを、女房の身で、なんと見捨てゝ居られませうぞいなア。

お幸　あれ見や。あの如く悴が居間には、摩利支天を勸請なし、武運を祈り、信心怠らぬ悴勘助。この母が幼少より、手塩にかけて育てたる、天晴れの侍ひと思うたは、

親が慾目か。殿を僞はり、町人百姓を苦しめ、大枚の金銀を掠め取つたる人でなしが、天命遁がれず本國のお聞きに達し、役人中を差越したれば、今さら遁がるゝ云ひ譯なく、繩目の恥を見ぬうちに、手にかけるが親の情。なぜ戻らぬ。次作は居ぬか。嫁女、早う呼びにやりやいなう。

りつ　サア、お心の急くは、御尤もなれど、其やうにお氣をお揉み遊ばして、もし病が重りましたら、なんと致しませうぞいなア。

お幸　なんの、死ぬる事ぢやないぞ。

　トこなし。この時、上の二階にて

大勢　サア〳〵、彈初めに、何なりと聞きたい〳〵。一の谷の二段目に致しませう。

同　こりやよからう。サア〳〵、所望ぢや〳〵。

　ト喧ましく云ふ。お幸これを聞いて

お幸　アレ、嫁女、あれを聞きやつたか。隣り座敷のあの騒ぎ。悴勘助もあのやうに、藝子法師を相手として、夜晝なしの放埓惰弱、モウ〳〵、其方も、人でなしに未練をかきやんな。

りつ　サア、なんぼ其やうに仰しやつても。

お幸　アレ、又かいの。其方までが氣後れして、母に不覺を取らしやるか。

りつ　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

お幸　未練な事を。

　トお幸、苦痛を隱しキッとなる。おりつ、當惑のこなしにてヂッと俯向いて居る。向うより權內、返し前の梅の筒を持ち、走り出で

權內　ハッ、御母公樣へ御見舞申し上げん爲、お旦那には只今御歸宅。この梅ケ枝の一本は、年玉の印として、差上げよとの儀でござりまする。

　ト生け筒をお幸が前へ出し

ハッ、拙者めは、直さま御主人を、迎うて參りませう。

　ト引返し、向うへ走り入る。おりつ、合點の行かぬこなし。お幸、梅ケ枝を見てキッと思ひ入れあつて

お幸　悴が母へ年玉の梅ケ枝。すりや、悴は。

　ト膝を叩き、こなし。チヤンと唄になり、梅ケ枝を持ち、ツカ〳〵と奥へ入る。おりつ、見送り、こなしあつて

りつ　お心あり氣な母さんの今の樣子。ハテ、どうであら

うなア。

トこの時、隣り座敷の二階にて

〽世の憂きにいさゝめならぬ身の願ひ、忍びて人に黄楊櫛の、薩摩守忠度は、俊成卿の館より、須磨の陣所へ歸らんと急ぎの道も行きくれて、宿にもがなと爰彼處荒れし軒端もまばらなる、伏屋の軒に立寄り給ひ。

トこの文句のうち、勘助、返し前の上下姿にて、權内付いて提灯をともし、先に立ち出る。勘助、酒に醉うたるこなしにて、花道よき所にて

權内　お旦那、お足が危なうございまする。

勘助　氣遣ひない〱。身に構はずと、早く行け〱。

權内　でも、石高でございまする。お靜かにおひろひなされませ。

トこの臺詞にて、段々舞臺へ來て右の文句のうち

勘助　ヤア、身が隱居屋敷で、騷ぐワ〱。

權内　イヤ〱、あの騷ぎは、御隱居所ではございませぬ。双林寺の門阿彌でございまする。

勘助　門陀彌でも門よみでも、こりやア、面白い〱。

ト云ひながら、よろ〱して枝折り門へ入る。おりつ、勘助を見て

りつ　ヤアモシ、母樣が最前からお腹立ち。例へお逢ひなされても、只何事も仰しやらず、母樣のお氣の鎭まるやうに、御合點でございますかえ。

勘助　イヤ、ねつから合點の行かぬ。正月早々から母人が、腹を立てござるとは、エヽ、聞えた〱。こりや何か母人は、今年明けて年強の七十。年が寄つたと云うて、腹立てゝござつたか。

りつ　何をマア、わつけもない。そんな事ぢやござりませぬわいなア、

勘助　それでなくば、何も外に御立腹なさる筈はない。何か用事があるさうに、慌しく呼びに參つた權内め。うぬ憎くい奴ぢやぞよ。

權内　でも、後室樣の御意でござりまするゆゑ。

勘助　又々此奴、主に詞を返す不屆き者。今日只今暇を遣はす。即ちその印として、これをくれる。夜の明けぬうち、とつとゝ出て行かうぞ。

ト懷中より金を出して遣る。權内、取つて

權内　すりや、このお金を。

勘助　愚圖々々せずと、出て行き居らう。

權内　これは又、迷惑な儀でござりまする。

ト云ひ〳〵金を持ち、下座へ入る。此うち始終鳥追ひの合ひ方。

勘助　面白う酔うた酒を、醒まし居つた櫟内め。先づ彼奴は片付けた。なんでもこれから呑み直して、酔はねばならぬ。さらば出掛けようか。

ト行かうとするを、おりつ留めて

りつ　申し、そのあなたのお身持ちゆゑ、母御様のお腹立ち。女房の心にもなつて見て、下さりませいなア。

勘助　コリヤ、女房とは誰れが事。

りつ　エヽ。

勘助　勘助が去り状、反古でないぞよ。

りつ　そんなら、どうでも。

勘助　見ず知らずの女中、母人へ取次ぎ、頼み存じまする。

ト鹿爪らしく巻き舌で云ふ。この時、奥にて

お幸　忰勘助、それへ行て逢ひませう。

ト以前の梅の生け筒を持つて出る。この時、向うより喜瀬川、走り出で、下の方の枝折り戸に立ち聞く。此うち矢張り鳥追ひの合ひ方、かすめてあり、勘助行儀正しく

勘助　これは母人、先づ以て元旦の御祝儀。

お幸　オヽ、めでたい〳〵。嫁女、何をうつかり、忰勘助に年始の杯。銚子、早う〳〵。

りつ　ハイ。

トうぢ〳〵する。

お幸　サヽ、早う〳〵。

りつ　ハイ〳〵。

ト銚子杯を持つて、両人が眞中へ直す。

お幸　勘助、今日と云ふ今日、其方の心底見抜きました。それでこそ木津勘太夫どのゝ胤ほどある。

りつ　エヽ、そんなら、あなたの御機嫌は、直りましてござりますかえ。

お幸　オヽ、直つたとも〳〵。一旦は色にも酒にも耽らいで何とせう。不相應の金を遣ふも、其方の器量。オヽ、手柄ぢや〳〵。例へ人が笑はうが誹らうが、堪え忍ぶ度量は、天晴れの侍ひの魂ひ。頼もしい〳〵。

トほた〳〵喜ぶ。勘助、フラ〳〵眠つて居る。

りつ　ほんに、案じるより産むが易いと、打つて變つた母さんの御機嫌。此やうな嬉しい事はござりませぬぞいなア。

お幸　心を籠めしこの梅ケ枝、勘助、いよ〳〵所存は極めやつたの。

ト勘助、眠つて居るゆゑ、おりつ、袖を引く。

りつ　申し〳〵。

トこれにて心付き

勘助　如何にも

りつ　すりや、梅ケ枝のお心を、御推量遊はして

お幸　惣じて梅は寒氣に閉ぢられ、雪に埋もれ、一旦は落めども、一陽の春を待ち、芳ばしき色香を現はす。例へその身は朽ち、名は埋れ、笑ひ誹りを受くるとも、時節を待つて忠義を現はす悴が心底。

りつ　成る程、御尤もなる思し召し。私しが存じまするは、浮氣の花も一盛り。散りては元の根に返らず、梶原が二度の駈けとやら、天晴れの手柄を見せうとある、花の謎かと存じまする。

お幸　これも尤も。いづれ一つは其方の本心。サア、聞きたい聞きたい。

勘助　これは〳〵、母人のお尋ね、迷惑至極。勘助がその心は、人は何とも白梅と思ひの外、遊所通ひを知つたる親梅。ところで小梅は紫蘇がないと云ふ奴ぢや。なんと面白からうが。どんなものぢや〳〵。

ト少し巻き舌にて云ふ。お幸キツとなり、おりつ、お幸の顔色を見て、手に汗を握るこなし。

りつ　申しいな。また母様の御機嫌が、損ねますわいなア。

トいろ〳〵あせる。勘助、お幸をちよつと見て慇懃に両手を突き、お幸、思ひ入れあつて

お幸　勘助、年始の杯しませう。

勘助　ハツ。

ト杯を取り、お幸の前へ直す。

お幸　イヤ、杯は外にある。

ト常の合ひ方になり、お幸、立つて手水鉢の水を柄杓に汲み、元の所に來て、一度に飲み、柄杓を差出し勘助、杯さゝう。

勘助　頂戴。

ト取つて飲まうとする。おりつ、ちよつと留める。心意氣あり。勘助、おりつを睨みつける。これにて是非なく抑へる。勘助こなしあつて、グッと飲み干す。

お幸　悴勘助、勘當ぢや。

りつ　エ、申し。

ト云ふを押へて

勘助　御勘當、承知仕つてござりまする。

りつ　ヤ、そりや何を仰しやりまするぞいなア。例へ母さんが何と仰しやらうとも、幾重にもお詫びなされて御孝行。それにマア、其やうな事仰しやつて、濟むものでござりますかいなア。

勘助　ハテ、例へ濟まうが濟むまいか、離縁いたした夫の事。其方が構ふ事はないぞ。

りつ　イヽエ、なんぼでも、去らるゝ事は嫌でござりますわいなア。

勘助　此奴、返らぬ事をくど／＼と、扣へて居らぬか。

りつ　ぢやと申しまして。

勘助　ヤア、扣へて居らうと申すに。

ト きつと極めつける。

母人、いよ／＼御勘當、請けましてござるぞや。

お幸　念に及ばぬ盡未來、親でない子でない。ナアりつ、最前も云ふ通り、腰拔け武士に未練をかける事はない。赤の他人になる上は、この後どのやうな恥面掻かうとも、此方に構ひない。サヽ、奥へおぢや。

りつ　そのお腹立ちは、御尤もでござりまする。母さんの御一徹も、勘助さまの御不孝。その中に立つ身のわたしが切なさ。どうぞお心を取り直し、お詫びなされて下さりませいなア。

ト泣きつくを振り切り

勘助　離縁の女に詞はない。放埒惰弱も身共が一存。勘助が一本立ち。

トこの時、お幸はよろめきながら、勘助を引きつけ、キッとなつて

お幸　主恩を忘れ剩つさへ、先祖への不孝。其方が信じ奉る摩利支天へ、面目ないと思ひ居らぬか。不孝の天の責め。現在その身に、カウ／＼／＼。

ト梅ケ枝にて打ち据ゑ

まッこのやうに落花微塵。盛りが散れば老木の、枝も散り／＼となる木津の家名。此まゝに朽ち去るとは、思へはなんぼう口惜しいと思ひ居るぞいやい。不孝不忠の天の責め、なんと骨身にこたへたか。

〽口にはいさめ心には、これ今生の別れかと、思ひ廻せばいぢらしく、さしもの武勇に張り詰めし、弓弦の切れし心にて。

ト此うち勘助、お幸、思ひ入れ。おりつこなしあつて、

文句のとまいに勘助に心意氣あつて寄らうとする。お幸、おりを引き分けて
お幸　未練な。おゝや。
ト引き立てる。
〽いらへも涙なかく＼に。
りつ　あんまり氣强い。
ト勘助に心意氣あるを、お幸、引き廻して
お幸　未練な事を。
〽離れ難なき風情なり。
トおりつ、心を殘す。お幸、無理に引き立て、思ひ入れあつて入る。後また鳥追ひの合ひ方。勘助殘り、こなしあつて
勘助　ア、、人の心も知らず、騷ぐなく＼。一陽來復、爰に至るおやなア。イヤく＼、勘當の母の內に長居もなるまい。さらば出て行かうか。
ト立ち上がる。この時、左右の枝折り門より喜瀨川、次作ズツと入る。
次作　御主人樣。
喜瀨　旦那。
次作　母御樣には御勘當。
喜瀨　おりつさまには、御離緣。
次作　さぞ御本望で
兩人　ござりませうなア。
ト勘助、思ひ入れあつて
勘助　兩人、灯をしめして近う。
トまた常の合ひ方になり、喜瀨川、次作、左右の枝折り戶を閉め、平舞臺の眞中へ座る。兩人、探りながらギツとなる。勘助こなしあつて
去る正月、江戶表に於て、隔年の順番にて、御金藏の員數改め、同役衆中立合ひの上にて、改め見れば三萬兩の不足。南無三一大事と思ひしゆゑ、當日までのお藏預かり、深見十右衞門に尋ぬれば、若殿當太郎さま、御放埒に依つて遣ひなくせしと、佞辯を以て云ひ廻す。彼れが五音に心得ずと思へども、差當つて若殿のお誤まり。同役ども評定の上、我れ一存を以て御金藏に封印なし、穩便に計らひしが、よくく＼思へば、若殿の御病氣を幸ひ、御放埒を勸め込み、三萬兩の金子は、十右衞門が私慾虛妄。引ツ捕へて詮議すれば、若殿にも盜賊の同類。さりとて、この金償はずんば、末代まで若殿の汚名。さは云へ不足の金子三萬兩、たんそくの手段もなく、例へ非道

の名を請くるとも、いさゝかいとはぬ、若殿の御爲と、我れ一存に思案を極め、百姓に課役を云ひつけ、町家へは諸式の運上、領地の竹木御用と切り出して他國へ拂ひ、その莫大な金銀を、我が私慾と云ひ觸らせん爲、其方を請け出し、遊所通ひの放埒惰弱。後日の貯めは我が腹一つ、寄ると見せて遣ふは僅か。集める金は三萬兩。

ト障子屋臺を開け、摩利支天の厨子の扉を開ける。内に小判の包み數多入れあり。喜瀬川、次作見て

両人　これは。

勘助　斯くの如く三萬兩の員數合せし上からは、若殿のお名も出ず、一ケ年のその間、望み達する心盡し、幾何の苦しみと、推量してくれいやい。

ト次作、右の金を探り見て

次作　こりやコレ、日頃大切になさるゝ、摩利支天の宮居と、思ひの外なる御辛勞にて、調達なりし三萬兩とな。

ト思ひ入れ。喜瀬川、泣いて

喜瀬　思へば殿御のお心は深いもの。その御本心は露知らず、口舌を云うたりひぞつたり、面白おかしう云ふうちも、さぞ御辛勞でござんしたであらうなア。

次作　その御辛勞の元と云へば、皆深見十右衞門が爲す業。すりや彼れめを討つて捨てられしは、お旦那、あなたでござりませうな。

勘助　如何にも推量の通り、十右衞門を生け置いては、いよいよ募る若殿の御放埒。主人の病の根を絶たん爲、十右衞門は、身が手にかけたわやい。

喜瀬　エヽ。

ト大きに驚ろく。

次作　さてこそ奧樣を御離縁、母御樣への愛想盡かしは、私慾虚妄を身に引請け、人殺しと名乘つて出て、刑罪に遭ふ御所存でござりませうがな。

勘助　イヤ、三光の守り刀手に入るまでは、滅多に死なぬ勘助が一命。病氣と云ひ立て、當所へ身退く事。弟始め存ぜぬゆゑ、書面を通達したれば、源次郎より守り刀の、有無を待つて居るわやい。

次作　併し、御主人の京宅、本國へ相聞え、武太夫文平罷り立越し、私慾虚妄の云ひ譯立たずば、召捕り歸ると兩人が手配り。

喜瀬　殊にあなたが人殺しに極まらば、大抵の事ではござんすまい。どうか好い思案はないかいなア。

勘助　おやに依つて、其方始め、悴を付けて奧も離縁。首

尾よく母の勘當請けしも、密かにこの家を立退き、源次郎が便りを待ち、守り刀を殿へ差上げ、腹切つて相果つる所存おやはやい。

兩人　すりや、どうあつても。

勘助　いづれ遁がれぬ身共が命。コリヤ次作、この金子を以て、御金藏の員數を合せて、某が忠義を立て、御病中と云ひ、老傾むく母一人。幼少なる倅。其方達兩人、與諸ともに、我が亡き後を頼んだぞよ。

ト愁ひのこなし。喜瀬川、次作、息を吞んで

兩人　ハア、。

ト泣き落す。

〽のちの哀れと知られたる、思ひの種や涙の種、仁義の種の六彌太が。

ト勘助、こなしあつて

勘助　東雲に間もあるまい。夜の明けぬうち。

ト身拵らへして立ち上がる。喜瀬川、留めて

喜瀬　まだ七ツにもなりますまい。ナア、達てお出で遊ばすなら、わたしもどうぞ。

ト取り縋り。勘助こなし

〽云はぬは云ふにいや勝る、暇乞ひさへ泣き顔に。

ト勘助よろしくあつて、喜瀬川を振り切り行かうとする。次作、向うに立ち塞がり、勘助ズツと行き過ぐる。次作、入れ替つて勘助の袖に縋る。喜瀬川、取りつき、この模様暗がりの心にてよろしく

次作　申し、せめての事に母御様、おりつさま。若旦那へもたつた一目

兩人　申し、どうぞ。

お幸　孫がこの世の暇乞ひ。

トお幸、勘太郎を連れて出る

りつ　顔見せてやつて下さんせいなア。

トおりつ、袖に覆ひし手燭を差出す。勘助、こなしあつて

勘助　すりや、先刻よりの一部始終。

お幸　殘らず聞いて母が安堵。

りつ　わたしが悲しさ。

次作　今さら返らぬ御主人の

喜瀬　死出の旅路と知りながら

お幸　祝うて立たす、この蓬萊。

ト食つみの三方を前へ直し

木の實は一旦その木を落ちて、食つみの世に上げらるゝ。

初演の繪番附

勘助　まツこの如く勘助も、死してその名を殘してくれやい。
母人のお志し、有り難う頂戴仕つてござります
る。

ト三方を戴く。

お幸　時刻移らぬ其うちに。
勘助　母人、おさらば。

ト勘助、立ち上がる。喜瀬川、次作、兩方より寄りつ
く。おりつ、勘太郎を勘助に縋きつけ

皆々　申し。

ト皆々とめるこなし。勘助、勘太郎をキツと見る

〽歎きの種の離れ際、諫めの種と隔たれど、果し涙の悲
しみを、共になづみて耳を垂れ。

トこの文句にて勘助、勘太郎に名殘りのこなし。よき
所にてお幸、おりつを上へ引き廻し、取りつく喜瀬川
を無理に手を持ち、引き立てる。この途端にお幸、勘
助と顔を見合せ、立派に氣を替へ、行かうとする。次
作、留めたき心にて向うへ立つ。勘助キツと睨む。次
作、是非なくヂツと扣へる。勘助、花道よき所へ行く。

お幸　勘助、待ちや。
勘助　ハツ。

トつか〳〵と戻る。

お幸　門出の餞別。

ト懐劍を咽喉へ突ツ込む。皆々驚ろく。

勘助　ヤア、母様。
皆々　これは。

ト各々取りつく。勘助、お幸を見上げ

勘助　王凌が母に等しき御生害。
お幸　女ながらも、十右衞門をしとめし云ひ譯。
次作　すりや、御主人の
喜り　お身替りに。
勘助　等閑ならぬ私慾の云ひ譯。
お幸　立つか。
りつ　立たぬか。
次作　善惡邪正。
勘助　生死二つは
喜り　必らず吉左右。
お幸　忰。
勘助　おさらば。

〽引別れ行く曉の、空も名殘や。

トこのキツカケに、明け六ツの鐘ゴンと撞く。勘助キ

ツとなつて、立ち上がろ。お幸、がつくりと落入る。

三人　ハア、、。

ト泣き落す。勘助ギツクリ兩手を合せ、この途端よろしく　　　　幕

本舞臺、一面の淺黄幕、石の玉垣、すべて祇園鳥居先の體。幕の内より勘助、凛々しき形にて、刀を持ち立つて居ろ。これを文平、武太夫、兩人、捕り手の侍ひにて詰めかけて居る。組子大勢、取卷いて居る。この見得、大太鼓、どん／＼にて幕明く。

武太　お金虛妄の大罪人。

文平　深見十右衛門を討つたる木津勘助、尋常に

大勢　腕廻せ。

勘助　ヤア、事々しき盜人呼ばり。軍用金を掠め取り、十右衛門を討つて捨てたは、如何にもこの勘助だ。

武文　さてこそな。

勘助　三光の守り刀、我が手に入らぬ其うちは、うぬら寄つたら撫切りだぞ。

兩人　者ども、ソリヤ。

皆々　やらぬワ。

トどん／＼にて、大勢を切り捲る。文平、武太夫、勘助に切つてかゝる。立廻り、いろ／＼あつてキツと見得。この時、次作、奥よりツカ／＼と出て眞中に入る。

次作　待つた。武太夫さま、文平さま、主人勘助は、人殺しではござりませぬぞ。

文平　なんと。

次作　十右衛門を手にかけし相手は、即ち勘助が母。自害なしたる上からは、事相濟みたる人殺しの落着。

文平　すりや、勘助が母の云ひ譯にて。

武太　それは格別。お金の私慾、守り刀の紛失は。

トこの時源次郎、袋入りの守り刀を持ち、走り出で

源次　兄者人。

勘助　源次郎か。

源次　守り刀は手に入りました。

勘助　エ、、忝ない。

武文　それを。

トかゝるを兩人ともにちよつと當てろ。この時、奥より喜瀨川、おりつ、勘太郎を連れて出ろ。

喜瀨　旦那樣、御無事でござりましたか。

勘助　兩人喜べ。守り刀は源次郎が働らきにて
りつ　首尾よく、お手に入りましたか。
勘助　守り刀の出る上は、私慾の汚名はこの勘助。
ト死なうとする。源次郎、留める。この時向うより甚右衛門、野袴にて立て文を竹に挾み、走り出で
甚右　待つた〳〵。逸まるまいぞ。お國元の御奉書。
喜り　ヤア、甚右衛門さま。
甚右　紛失したる守り刀、再び手に入る上からは、惡事に一味の文平。武太夫。勘助が身の上別條なき、お上よりの御書。
勘助　エヽ、有り難い。
次作　すりや、お旦那様には。
甚右　お國へ歸參、喜べ〳〵。
武文　勘助、うぬ
ト切つてかゝる。次作、源次郎留める。
勘助　惡事の元は彼奴等兩人。
甚右　十右衛門が荷擔人。
武文　うぬから先へ。
ト切りつける。次作、武太夫、文平を押へ
次作　兩人、捕つた。

皆々　天晴れ手柄。
勘助　先づ今日はこれぎり。
打出し

ひやうし幕

春姿詠千金（終り）

解說

渥美清太郎

江戸で世話狂言が完成されたのは、寛政からと云つてよからう。壕越菜陽、金井三笑時代から、寫實劇は段々に發達して來た。初代櫻田治助になると急に進歩した。彼れは江戸の世話狂言には非常な功勞者である。そこへ大坂から初代並木五瓶が下つて來た。大坂では五瓶は時代物を得意にしてゐたが、江戸には絶對に向かぬ事、世話物に開拓の餘地が充分ある事を早くも洞察して、二番目物に專心筆をふりむけた。例の「五大力」を手始めに、幾多の名作を發表して、看衆の喝采を買つた。彼れの世話物が受けたのは、從來の江戸狂言が餘りに感情的で、複雜で、時代がゝつてゐるのを知つて、大坂狂言の理智的氣分を取入れ、筋を簡易にし、純寫實に近づき、俳優の技術を發揮させる餘地を充分作つてやつたからであつた。彼れの世話狂言は五瓶物の名で大歡迎を受けた。彼れは世話狂言で一躍大家になつたのだ。驚いたのは治助である、瀬川如皐である。五瓶の成功を見て、これではならぬと大いに筆硯を新にし、時に世話狂言に向つて力を注いだ。その爲、寛政度は世話物が急に光つたのだ。この時代の世話物で今も演じられるものも澤山ある。その後を大南北が受けて眞に完成の域へ達せしめたのだが、南北も末になると一種の臭味もあり、爛熟過ぎて腐れ蜜柑の味になつて來てゐる。寛政時代はまだ純粹だ。少しも嫌味がない。その中から代表的な六篇を取つて收錄したものが本卷である。今まで活字になつたものは一つもない。

貢曾我富士着綿（みつぎそがふじのきせわた）

寛政五年市村座の春狂言である。一番目は勿論吉例の曾我狂言、門之助が祐成と祐經、時宗の彦三郎、半五郎の鬼王新左衞門といふ役割で大當りを取つた、その二番目のお菊幸助である。作者は初世瀬川如皐。

如皐としては傑作であらう。寧ろ呆氣ないほど筋は單純で、主としてお菊を描かうとしたものだ。このお菊は當時の新しい女だ。淨瑠璃の文句を御覽なさい。寛政時代の娘とは思へないではないか。おまけに馬にまで乘らうといふのだ。ハッキリしたものだ。却つて幸助の方が女性的になつてゐる。

富本の淨瑠璃「名酒盛色の中酌」は非常に行はれたもので、名曲と云つて過言でない。今日にも殘つてゐる。淸元にも移調されて「小猿七之助」の狂言に、餘所事淨瑠璃として使はれた事があつた。

會話の中に、盛んに地震の事が出てくるのは、この年の正月、關東一帶に大地震があつた爲である。千葉村の稻荷といふのも何か當時の當込みらしい。

役割は左の通り。

菊酒屋の手代幸助、同兄馬士の鞭藏（二世市川門之助）菊酒屋番頭八郎兵衞（嵐龍藏）浪人賢藏 實ハ大野城右衞門（中島勘左衞門）佐藤定七（市川伊達藏）菊酒屋伴左衞門（山科四郎十郎）菊酒屋下女おさく（中山富三郎）役僧春月坊（六世市川團十郎）山師太兵衞（松本虎藏）丁稚勘吉（大谷德次）娘お米（松本米三郎）千葉村の稻荷婆ア（坂田半五郎）菊酒屋娘お菊（三世瀨川菊之丞）研屋傳三（市川高麗藏）

心中嫁菜露（しんぢうよめなのつゆ）

世話狂言が發達流行するにつれて、操りからも大分世話物を借りて來て上演する事も度々行はれた。この時代、どういふ形式で義太夫の世話物を演じたかといふ事は、これを見れば解る。即ち、義太夫は全部拔いてしまふ。普通の芝居にして置いて、最後に大抵道行を豐後淨瑠璃で附けるのである。梅川忠兵衞でも、小春治兵衞でも、お初德兵衞でも、大抵この方法で行はれてゐる。この原本は無論近松門左衞門の「心中宵庚申」をアレンヂしたのである。享和三年二月の中村座に上演されたもの。補作者は初世櫻田治助である。江戸でも天明頃から、義太夫は流行したものだが、芝居では兎角嫌つて、折角近松物を持つて來ても、世話物だと斯ういふ形式にしてしまふ。それは、義太夫を借りなくつても藝は出來るといふ俳優の見識と、江戸の看衆に向くやう改作をせねば納まらぬ作者の良心とから來てゐるのである。默阿彌のやうに、無闇と義太夫を使ふやうな事は決してしなかつた。

三津五郎の八百屋半兵衞は柄に嵌つて非常な好評で、その後も度々演じた。口繪に入れたのは文化十年所演の折の錦繪である。また扉裏につけたのは、翌文化元年に「卯花戀中垣」といふ題で市村座で上演した、その時の番附である。

八百屋半兵衞（三世坂東三津五郎）お千代姉おかよ（瀨川路三郎）山脇十藏（坂東八十助）家主太郎兵衞（荻野伊三郎）八百屋仁右衞門（尾上雷助）八百屋下女お竹（中山常次郎）島田半左衞門、仁右衞門女房お

つや（嵐三八）半兵衛女房お千代（中山富三郎）八百屋嘉十郎（五世松本幸四郎）

關取菖蒲絲（せきとりしょうぶかたびら）

寛政九年五月、木挽町の河原崎座でやつた夏狂言、夏場所の相撲を當込んで土俵の様を見せたのも面白く、大切に鯉つかみが附いてゐるのも、夏狂言の吉例ではあるが、女が、摑むだけに變つてゐる。江戸の双蝶々の書替へとしては割に早い方である。濡髮の小靜といふお轉婆娘は、義太夫の「容競出入湊」奴の小萬から思ひついたものであらうが、中で一番面白い役である。長五郎を敵役にしたのも變つてゐる。作者は初世櫻田治助。

關取り濡髮長五郎、橋本治郎左衛門（初世尾上松助）千葉奥方香取御前、仲居おりき（佐野川市松）關取り幻竹右衛門、三原傳藏（中島和田右衛門）三原有右衛門（松本小次郎）番頭權九郎（大和山友右衛門）藝者吾妻（山下民之助）平岡多左衛門（澤村淀五郎）山崎與五郎（坂東簑助）丸屋長吉（市川高麗藏）女達濡髮の小靜、甚兵衛女房お袖（中山富三郎）關取り放駒四郎兵衛、駕籠屋甚兵衛（四世松本幸四郎）

江戸八景戀譯里（えどはっけいこひのわけさと）

享和二年三月市村座の初演、五大力系統の狂言の一つである。作者は初世並木五瓶であるが、實は大坂狂言の「置土産今織上布」勝間源五兵衛を江戸の世界に移したもので、お俊傳兵衛を點出したのは、この次へ「近頃河原の達引」堀川の段を附けるが爲なのだ。脚本は完結してゐないやうに見えるが、次が普通の堀川になるので出來なかつたものと見える。無論堀川も江戸の世界に直したものであらう。

この狂言は、安政元年三月河原崎座で、默阿彌が添削し「初霞女猿廻」として再演した。與次郎を女でゆく女猿廻しの前幕として、春日屋の場一幕に縮め、正木甚三郎を遠山甚三郎、瀧口主計を米津主水等に直し、一番目の「都鳥廓白浪」と連絡させて葛飾十右衛門も點出したものであつた。明治七年七月、河原崎座開場式の時、默阿彌がもう一度書き直し、甚三郎を船田初右衛門、お俊を小富、傳兵衛を新田屋幸次郎、場所を芝浦の吉野風呂と改め、名題も「袖浦戀紀行」として出した。これを又今の六代目菊五郎が「菊模様好紅葉」として上演した事もある。この時なぞは上方系統の匂ひも殆どなくなつてゐたが、筋を尋ねると

右の通り矢張り、五大力から發した狂言なのである。

初演の役割は左の通り。

井筒屋番頭忠七（嵐三八）塚口數右衛門（市の川豐藏）井筒屋傳右衛門（尾上雷助）春田屋女房お角（藤川武左衛門）春田屋娘分おたみ（瀬川雄次郎）丁稚治藏（嵐新平）家來左五平（荻野伊三郎）井筒屋傳兵衛（澤村源之助）瀧口主計（市山七藏）船頭長吉（尾上紋三郎）藝者お俊（瀬川路三郎）正木甚三郎（五世松本幸四郎）

吉原俄番附（よしはらにはかのはんづけ）

文化元年九月市村座上演、作者は初世並木五瓶である。吉原の俄を當込み、舞臺でその風俗を寫したのが大いに看客の氣に入つたらしい、大當りの狂言であつた。幇間が主人公なのも變つてゐるし　唐犬のお吉なぞといふ女も珍らしい役である。淨瑠璃に使つた富本の「傘盛操花車」は今日にも殘つてゐる。大南北はこの狂言の後半を借りて、小さん金五郎に書き直し、明治まで殘つて九代目團十郎も演じたが今は傳はつてゐない。

濱名屋半七（澤村源之助）道具屋太助（松本小次郎）蟒の金兵衛（富士川國藏）大黒屋才兵衛（市山七藏）男藝者都羽六（嵐新平）藪醫若出杉高慢（松本辰藏）船頭次郎吉（澤村次之助）西野屋九兵衛（松本國五郎）男藝者富士治德（市川萬藏）男藝者じやこ吉平（桐島儀右衛門）藝者お千賀（瀬川雄次郎）櫻井新左衛門（市川門三郎）唐犬のお吉（澤村藤藏）藝者お花（瀬川路之助）藝者おたか（松本よね三）男藝者折非彌市（五世松本幸四郎）

春姿詠千金（はなのはるひとめせんきん）

寛政十一年正月市村座「大紋日曲輪曾我」二番目に出したもので、作者は三笑の子の金井由輔である。本津勘助といふのは大坂狂言にある世界だが、これは役名だけを借りたもので内容は純創作である。木津勘助の件と、男女川浪五郎の件と、全然分れてゐるのは物足りないが、勘助の方はよく書けてゐる。喜瀬川といふ花魁もハツキりと性格が出てゐる。餘程歡迎されたと見えて、文化二年にも又八百藏が勤めてゐる程である。

千葉當太郎、三田屋番頭與兵衛（嵐三八）大野甚右衛門（尾上雷助）蒲原文平（松本國五郎）柳田武太夫（松本小次郎）若薫角兵衛（大谷候兵衛）戸川彥九郎（坂田時藏）武藤屋娘分お辰（瀬川雄次郎）新造今川（中川富次）駿河屋娘お菊、宗右衛門娘おくの（瀬川

菊三郎）結城直輝（小佐川七藏）伊澤伴藏（市川門藏）中間文助（市川八助）船頭玉江屋甚太（中村角右衞門）三中間居茶平（嵐璺藏）三田屋源次郎（中村傳九郎）三田屋丁稚音吉、若黨春島次作（三世坂東三津郎）女中おりん（市川濱藏）勘助女房おりつ（小佐川常世）深見十右衞門、勘助母お幸（初世尾上松助）關取り男女川浪五郎（初世市川男女藏）松葉屋喜瀬川、宗右衞門女房小わた（三世瀨川菊之丞）木津勘助（三世市川八百藏）

責任校訂

渥美清太郎

日本戯曲全集・第十七卷
寛政期江戸世話狂言・第廿六回配本

編纂者檢印

昭和六年三月十七日印刷
昭和六年三月二十日發行
（非賣品）

編纂者　渥美清太郎
發行者　和田利彦
印刷者　木呂子斗鬼次
製本者　高崎幸三郎

東京市日本橋區通三丁目八番地
發行所　春陽堂
電話日本橋五一・六四一　三七・八八一
振替東京一六一七八

整版所　新倉東文堂

神田區松下町七番地（明治印刷株式會社印刷）